農作物病害虫等防除指針

（令和７年）

愛　媛　県

利用上の注意事項

○　本指針に掲載した農薬は、原則として令和６年 12 月 11 日現在で登録のある農薬を総括的にまとめたものであるが、農薬は登録内容の変更や、同じ成分であっても銘柄（製造メーカー）により登録内容が異なる場合等があるため、**農薬の使用にあたっては、農薬ラベルの表示事項（使用方法、注意事項等）を必ず確認し、使用すること。**（下記ＨＰ等を参照し、常に最新の情報を確認するとともに、変更があった場合は、必ず当該農薬のラベルを貼り替えてから、ラベルどおりに散布するよう指導すること。）

○　農薬の使用回数は、種子や苗における使用も回数にカウントされる(果樹等の永年性作物を除く)ため、種子や苗の購入元に農薬の使用履歴を確認すること。

○　本指針に記載してある農薬の使用回数は当該製剤で使用できる回数であるため、各成分の総使用回数が使用基準を超えないよう農薬ラベルでよく確認すること。

○　農薬取締法では、適用作物についてグループ化や分離登録等がされているため、「農薬登録における適用作物名について」(P.16)を必ず確認すること。

○　薬剤防除法の欄に記載した時期は、あくまで目安として示したものであり、農薬ラベルに記載されている使用時期（収穫前日数等）を必ず遵守すること。

○　合成ピレスロイド剤、ＢＴ剤、ＩＧＲ剤、その他水産動植物に影響を及ぼす農薬等を使用する場合、蚕や水産動植物への影響を考慮し、安全使用に努めること。

○農林水産省のホームページ「農薬登録情報提供システム」
最新の農薬登録情報（ｱﾄﾞﾚｽ　https://pesticide.maff.go.jp/）
○農林水産省ホームページ「農薬コーナー」
農薬行政に関する最新情報
（ｱﾄﾞﾚｽ　https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html）
○愛媛県農産園芸課ホームページ「愛媛県農業技術情報サービス」
「農薬の適正使用について」県内における農薬の適正使用への取り組み等
（ｱﾄﾞﾚｽ　https://www.pref.ehime.jp/page/11438.html）
○病害虫防除所ホームページ
病害虫発生予察情報等
（ｱﾄﾞﾚｽ　https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojo/）

目　次

Ⅰ　農作物病害虫等防除基本方針・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
　　薬剤系統略号一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

Ⅱ　農薬適正使用・危害防止対策
　1　農薬取締法の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　2　農薬残留に関する農薬使用基準・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
　3　農薬毒性の分類基準・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
　4　農薬事故防止対策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
　5　農薬の飛散防止対策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11
　6　農薬による水産動植物・家畜・ミツバチの被害防止対策・・・・・・・・・・・・・・　12
　7　パラコート剤の安全使用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14
　8　合成ピレスロイド剤、ＢＴ剤及びＩＧＲ剤使用上の注意事項・・・・・・・・・・・・　15
　9　農薬登録における適用作物名について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16
　10　薬剤の注意事項一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　26

Ⅲ　作物別病害虫防除指針
　1　水　稲
　（1）早期水稲における主要病害虫の発生消長と防除体系・・・・・・・・・・・・・・・　29
　（2）普通期水稲における主要病害虫の発生消長と防除体系・・・・・・・・・・・・・・　31
　（3）水稲主要病害虫の発生程度と被害の関係および防除の目安・・・・・・・・・・・・　33
　（4）水稲病害虫防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　34
　（5）水稲種子消毒法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　45
　（6）育苗箱における薬剤施用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　46
　（7）苗立枯病の防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　50
　（8）「ストロビルリン系殺菌剤（ＱｏＩ剤）耐性いもち病菌」の発生と防除対策・・・　52
　（9）「シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤耐性いもち病菌」の発生と防除対策　52
　(10) イネばか苗病の防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　52
　(11) イネもみ枯細菌病の防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　54
　(12) スクミリンゴガイの防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　54
　(13) 斑点米カメムシ類に対する殺虫剤の効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　57
　(14) ミナミアオカメムシの防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　57
　(15) イネカメムシの防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　58
　(16) 育苗時の生理障害・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　59
　(17) 水田雑草防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　60
　　1）水田雑草防除の留意点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　60
　　2）稚苗機械移植栽培雑草防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　62
　　3）ウキクサ・アオミドロの防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　72
　　4）直播栽培の雑草防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　72
　　5）水田除草剤のローテーション使用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　73
　　6）スルホニルウレア系除草剤抵抗性雑草に対する防除法・・・・・・・・・・・・・　74
　　7）水田難防除多年生雑草の防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　74
　　8）飼料用稲に対する注意事項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　78
　　9）雑草抑草剤利用による水田畦畔の管理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　79
　(18) 植物成長調整剤の使用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　80
　2　麦　類（大麦・小麦）
　（1）麦（裸麦）の主要病害虫発生消長と防除体系・・・・・・・・・・・・・・・・・・　81
　（2）大麦病害虫防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　82
　（3）小麦病害虫防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　83
　（4）麦類種子消毒法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　84
　（5）麦類雑草防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　84
　　1）麦作雑草防除の留意点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　84
　　2）除草剤成分と適用草種・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　84
　　3）除草体系・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　85
　　4）除草剤使用方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　85
　　5）カラスノエンドウ対策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　88
　　6）カズノコグサ対策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　88

7）スズメノテッポウ対策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８８
3　大　豆
（1）莢の成育と病害虫発生時期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８９
（2）大豆病害虫防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９０
（3）大豆雑草防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９５
1）大豆雑草防除上の留意点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９５
2）除草剤と適用草種・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９５
3）除草剤使用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９５
4）大豆バサグラン液剤について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９７
5）アタックショット乳剤について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９７
4　果　樹
（1）果樹病害虫防除時期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１００
（2）果樹病害虫防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０５
[1] かんきつ類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０５
[2] かき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２１
[3] ぶどう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２７
[4] もも・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３４
[5] くり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４０
[6] なし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４１
[7] うめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４７
[8] キウイフルーツ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５０
[9] びわ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５３
（3）ミカンハダニ防除の要点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５５
（4）マシン油乳剤の夏期散布とその注意事項・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５６
（5）果樹カメムシ類の発生生態と防除対策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５６
（6）かんきつ病害虫のスプリンクラー防除上の留意点・・・・・・・・・・・・・・１５７
（7）かんきつウイルス・ウイロイド病の防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・１５８
（8）カンキツ黒点病の防除上の留意点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５８
（9）ミカンバエの防除上の留意点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５９
(10) キウイフルーツかいよう病の防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６２
(11) 果樹園除草剤等使用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６４
1）かんきつ類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６４
2）落葉果樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６５
(12) 植物成長調整剤使用基準・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６６
5　野　菜
（1）野菜の病害虫防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７０
[1] きゅうり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７０
[2] かぼちゃ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８０
[3] すいか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８３
[4] トマト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８７
[5] なす・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９９
[6] ピーマン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０７
[7] いちご・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１３
[8] だいこん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１９
[9] キャベツ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２４
[10]ブロッコリー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３５
[11]はくさい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４１
[12]ほうれんそう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４９
[13]レタス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５２
[14]たまねぎ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６０
[15]ねぎ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６６
[16]にんじん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７５
[17]さといも・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７７
[18]ばれいしょ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７９
[19]かんしょ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８２
[20]えだまめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８５
[21]未成熟そらまめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８９
[22]さやえんどう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９１

[23]さやいんげん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２９５
[24]アスパラガス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２９７
[25]未成熟とうもろこし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３００
（２）いも類の種子消毒法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３０２
（３）野菜の土壌病害虫防除・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３０２
①土壌消毒剤による病害虫防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３０６
②対抗植物利用による線虫防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３０６
③土壌消毒剤による一年生雑草防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３０６
④太陽熱利用による土壌消毒法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３０６
⑤有機物利用による土壌還元消毒法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３０７
⑥熱水利用による土壌消毒法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３０７
⑦苗立枯病などの薬剤潅注等防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３０８
（４）ミナミキイロアザミウマの防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３０９
（５）トマト黄化葉巻病防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３１２
（６）防虫ネットによる害虫の防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３１４
（７）いちご炭疽病の防除法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３１４
（８）いちご萎黄病の防除方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３１６
（９）くん煙剤の使用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３１７
(10) 野菜用銅剤及び混合剤の使用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３１８
(11) 野菜ウイルス病の主な病原ウイルスとその性質・・・・・・・・・・・・・・・ ３２３
(12) 野菜類除草剤等使用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３２５
１）野菜除草剤使用上の注意・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３２５
２）非選択性茎葉処理型を除く除草剤について・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３２５
３）非選択性茎葉処理型除草剤による畦間処理について・・・・・・・・・・・・・ ３３６
(13) 植物成長調整剤使用基準・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３４０

Ⅳ　参考資料
１　主要薬剤の系統別特性（殺虫・殺ダニ・殺菌剤）・・・・・・・・・・・・・・・ ３４２
２　性フェロモン剤の使用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３５１
３　天敵昆虫製剤・微生物天敵製剤（害虫防除用）の使用法・・・・・・・・・・・・ ３５２
４　主要天敵類への薬剤影響表一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３５６
５　マルハナバチへの農薬の影響一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３５８
６　ミツバチへの農薬の影響一覧表（いちご、なす、メロン）・・・・・・・・・・・ ３５９
７　ＢＴ剤の登録薬剤一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３６０
８　微生物農薬（殺菌剤）の使用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３６２
９　ラノーテープの使用方法（注意事項）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３７０
10　メタアルデヒド剤の使用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３７１
11　気門閉鎖型薬剤の使用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３７２
12　いちごナミハダニ防除薬剤の効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３７５
13　タバココナジラミ防除薬剤の効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３７６
14　展着剤の使用法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３７７
15　愛媛県特別栽培農産物等認証制度においてカウントされない農薬一覧・・・・・・・ ３８０
16　ＩＰＭ実践指標の活用について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３８５

Ⅴ　令和７年主要改訂部分・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ **３９７**

Ⅰ　農作物病害虫等防除基本方針

病害虫等の防除にあたっては、関係機関、団体及び地域の防除組織等の緊密な連携のもとに、下記事項に留意し、地域に適合した効率的な防除を推進する。

記

1　農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定する。

2　農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守する。

3　病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬の使用推進を図る。

4　農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除の推進を図る。

5　同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬の輪用に努める。

6　農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底する。

7　農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守する。また、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着する。

8　農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図る。

作用機作による分類コードおよび薬剤系統一覧表（令和6年12月版）

	IRACコード※	系統名あるいは代表的有効成分名
殺虫剤 殺ダニ剤	1A	カーバメート系
	1B	有機リン系
	2B	フェニルピラゾール系
	3A	合成ピレスロイド系
	4A	ネオニコチノイド系
	4C	スルホキシイミン系
	4E	メソイオン系
	4F	ピリジリデン系
	5	スピノシン系
	6	マクロライド系
	7C	ＩＧＲ系（幼若ホルモン類似剤）
	8B	非特異的阻害剤
	8F	
	9B	ピリジンアゾメチン誘導体
	9D	ピロペン系
	10A	ヘキシチアゾクス
	10B	ジフェニルオキサゾリン系
	11A	*Bacillus thuringiensis*
	12A	チオウレア系
	12C	亜硫酸エステル系
	13	ピロール系
	14	ネライストキシン系
	15	ＩＧＲ系（キチン生合成阻害剤、タイプ０）
	16	ＩＧＲ系（キチン生合成阻害剤、タイプ１）
	17	ＩＧＲ系（脱皮阻害剤　ハエ目昆虫）
	18	ＩＧＲ系（脱皮ホルモン受容体アゴニスト）
	19	アミトラズ
	20B	アセキノシル
	20D	ビフェナゼート
	21A	ＭＥＴＩ剤
	22A	オキサダイアジン
	22B	セミカルバゾン
	23	環状ケトエノール系
	25A	β－ケトニトリル誘導体
	25B	カルボキサニリド系
	28	ジアミド系
	29	フロニカミド
	30	メタジアミド系、イソオキサゾリン系
	33	アシノナピル
	34	フロメトキン
	UN	作用機構が不明あるいは不明確な剤
	（物理）	気門閉塞系
	（交信）	交信かく乱剤
	（他）	その他

※世界農薬工業連盟(現Crop Life International)の傘下の、ＩＲＡＣ(殺虫剤抵抗性管理委員会)により作成された殺虫剤の作用機構ごとの分類コード（2024年1月版）。
体系防除・ローテーション散布の際、コードが異なる薬剤を組み合わせて使用すれば、同一作用機構を持つ剤の連続使用を避けることができ、交差抵抗性のリスクが低減できるとＩＲＡＣは提唱している。

詳細については、農薬工業会のホームページを参照下さい。
https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html

	FRACコード※	FRAC分類表のｸﾞﾙｰﾌﾟ名	備考
殺菌剤	1	ＭＢＣ殺菌剤（メチルベンゾイミダゾールカーバメート）	ベンゾイミダゾール系
	2	ジカルボキシイミド	ジカルボキシイミド系
	3	ＤＭＩ殺菌剤（脱メチル化阻害剤）（ＳＢＩ：クラスⅠ）	ＥＢＩ系
	4	ＰＡ殺菌剤（フェニルアミド）	
	6	ホスホロチオレート	
		ジチオラン	
	7	ＳＤＨＩ殺菌剤（コハク酸脱水素酵素阻害剤）	
	9	ＡＰ殺菌剤（アニリノピリミジン）	
	10	Ｎ－フェニルカーバメート	
	11	ＱｏＩ殺菌剤（Ｑｏ阻害剤）	ストロビルリン系
	11A		
	12	ＰＰ殺菌剤（フェニルピロール）	
	14	ＡＨ殺菌剤（芳香族炭化水素）	
	16.1	ＭＢＩ－Ｒ	
	16.3	ＭＢＩ－Ｐ	
	17	ＫＲＩ殺菌剤（ケト還元阻害剤）（ＳＢＩ：クラスⅢ）	
	18	（ＳＢＩ：クラスⅣ）	
	19	ポリオキシン	
	20	フェニルウレア	
	21	ＱｉＩ殺菌剤（Ｑｉ阻害剤）	
	22	チアゾールカルボキサミド	
	24	ヘキソピラノシル抗生物質	
	25	グルコピラノシル抗生物質	
	27	シアノアセトアミド=オキシム	
	28	カーバメート	
	29		
	31	カルボン酸	
	32	芳香族ヘテロ環	
	36	ベンゼンスルホン酸	
	39	ピリミジンアミン	
		ピラゾールカルボキサミド	
	40	ＣＡＡ殺菌剤（カルボン酸アミド）	
	41	テトラサイクリン抗生物質	
	43	ベンズアミド	
	45	ＱｏＳＩ殺菌剤（ＱｏＳ阻害剤）	
	49	OSBPI（オキシステロール結合タンパク質阻害）	
	50	アリルフェニルケトン	
	52	ＤＨＯＤＨＩ殺菌剤	
	P1	ベンゾチアジアゾール（BTH）	抵抗性誘導
	P2	ベンゾイソチアゾール	抵抗性誘導
	P3	チアジアゾールカルボキサミド	抵抗性誘導
		イソチアゾールカルボキサミド	抵抗性誘導
	P7	ホスホナート	抵抗性誘導
	P8	イソチアゾール	抵抗性誘導
	U6	フェニルアセトアミド	
	U13	チアゾリジン	
	U14	ピリミジノンヒドラゾン	
	U16	４－キノリル酢酸	
	U17	テトラゾリルオキシム	
	U18	グルコピラノシル抗生物質	
	NC	種々	物理的阻害
	M1	無機化合物（求電子剤）	有機銅、無機銅
	M2	無機化合物（求電子剤）	無機硫黄
	M3	ジチオカーバメート（求電子剤）	ジチオカーバメート系
	M4	フタルイミド（求電子剤）	有機塩素系（キャプタン）
	M5	クロロニトリル（フタロニトリル）（作用点不明）	有機塩素（ＴＰＮ）
	M7	ビスグアニジン（細胞膜撹乱剤、界面活性剤）	グアニジン系
	M9	キノン（アントラキノン）（求電子剤）	有機硫黄
	M10	キノキサリン（求電子剤）	キノキサリン系
	M11	マレイミド（求電子剤）	その他の合成殺菌剤・天然物由来の殺菌剤
	BM2	微生物（生菌または抽出物、代謝産物）	

※世界農薬工業連盟(現Crop Life International)の傘下の、ＦＲＡＣ(殺菌剤耐性菌対策委員会)により作成された殺菌剤の作用機構ごとの分類コード（2024年4月版）。
体系防除・ローテーション散布の際、コードが異なる薬剤を組み合わせて使用すれば、同一作用機構を持つ剤の連続使用が避けられ、病原菌の感受性低下・耐性リスクが低減でき、殺菌剤の防除効果を安定化することができる。
詳細については、農薬工業会のホームページを参照下さい。 https://www.jcpa.or.jp/labo/mechanism.html

Ⅱ　農薬適正使用・危害防止対策

1　農薬取締法の概要

2　農薬残留に関する農薬使用基準

3　農薬毒性の分類基準

4　農薬事故防止対策

5　農薬の飛散防止対策

6　農薬による水産動植物・家畜・ミツバチに対する被害防止対策

7　パラコート剤の安全使用

8　合成ピレスロイド剤、ＢＴ剤及びＩＧＲ剤使用上の注意事項

9　農薬登録における適用作物名について

10　薬剤の注意事項一覧

1　農薬取締法の概要

【目的・定義】（第１条～第２条）

この法律は、農薬について登録の制度を設け、販売及び使用の規制等を行うことにより、農薬の安全性その他の品質及びその安全かつ適正な使用の確保を図り、もって農業生産の安定と国民の健康の保護に資するとともに、国民の生活環境の保全に寄与することを目的とする。

この法律において「農薬」とは、農作物を害する菌、線虫、だに、昆虫、ねずみ、草その他の動植物又はウイルスの防除に用いられる殺菌剤、殺虫剤、除草剤その他の薬剤及び農作物等の生理機能の増進又は抑制に用いられる成長促進剤、発芽抑制剤その他の薬剤をいう。

【農薬の登録（製造者、輸入者に対する規制）】（第３～16条及び21条）

製造者又は輸入者は、農薬について、農林水産大臣の登録を受けなければ、これを製造し若しくは加工し、又は輸入してはならない。ただし、特定農薬はこの限りでない。

以下、製造者及び輸入者の農薬の表示（第16条）、虚偽の宣伝等の禁止（第21条）　等

【農薬の販売（販売者）に対する規制】（第17～23条）

１　届出の義務：販売所のある都道府県に届出（第17条）

「販売者は、その販売所ごとに、①氏名及び住所、②当該販売所を、販売所の所在地を所轄する都道府県知事に届け出なければならない。」

２　販売の規制等

①販売者についての農薬の販売の制限又は禁止等（第18条）

「販売者は、容器又は包装に第16条の規定による表示のある農薬及び特定農薬以外の農薬を販売してはならない。」

②回収命令等（第19条）

「農林水産大臣は、人畜・生活環境動植物等に被害が発生することを防止するため、販売農薬の回収及び必要な措置を命ずることができる。」

③帳簿の記載（第20条）、帳簿の保存（施行規則第16条の２）

「販売者は帳簿を備え付け、農薬の種類別に、譲受数量及び譲渡数量（水質汚濁性農薬は譲渡先別数量）を記載し、最終の記載の日から３年間保存しなければならない。」

④虚偽宣伝等の禁止（第21条）

「販売者は、販売する農薬の有効成分の含有濃度若しくはその効果に関する虚偽の宣伝、登録を受けていない農薬について登録を受けていると誤認させるような宣伝をしてはならない。」

⑤農薬に該当しない除草剤を農薬として使用できない旨の表示（第22条）

「販売者は、販売所ごとに、公衆の見やすい場所に、除草剤を農薬として使用することができない旨の表示をしなければならない。」

【農薬の使用に関する規制（農薬使用者に対する規制）】（第24条～28条）

１　使用の禁止（無登録農薬、販売禁止農薬）（第24条）

「何人も、登録表示のある農薬（販売禁止農薬を除く）、特定農薬以外の農薬を使用してはならない。ただし、試験研究の目的で使用する場合は除く。」

２　農薬の使用の規制（第25条）

「農薬使用者は、農林水産大臣及び環境大臣が定めた、農薬を使用する者が遵守すべき基準に違反して、農薬を使用してはならない。」

３　水質汚濁性農薬（ｼﾏｼﾞﾝ）の使用の規制（第26条、施行令第２条）

「都道府県知事は当該農薬の使用区域において、公共用水域の汚濁に伴う生活環境動植物の被害や人畜被害を生ずる恐れのあるときは、規則で地域を限定の上、使用の許可制を導入できる。」

４　農薬の使用に関する理解等（第27条）

「農薬使用者は、農薬の使用に当たっては、農薬の安全かつ適正な使用に関する知識と理解を深めるよう努めるとともに、普及指導員、病害虫防除員、都道府県知事が指定する者（農薬管理指導士）の指導を受けるように努めるものとする。」

【特定農薬】（第３条第１項）

特定農薬は、その原材料に照らし農作物等、人畜及び生活環境動植物に害を及ぼすおそれがないことが明らかなものとして農林水産大臣及び環境大臣が指定する農薬。

現在「重曹」、「食酢」、「次亜塩素酸水（塩酸又は塩化カリウム水溶液を電気分解して得られるものに限る。）」、「エチレン」、「天敵（使用場所と同一の都道府県内で採取されたもの）」が指定されている。

【販売使用禁止農薬】（第18条）

リンデン、ＤＤＴ、エンドリン、ディルドリン、アルドリン、クロルデン、ヘプタクロル、ヘキサクロロベンゼン、マイレックス、トキサフェン、ＴＥＰＰ、メチルパラチオン、パラチオン、水銀剤、２，４，５－Ｔ、砒酸鉛、水酸化トリシクロヘキシルスズ（プリクトラン）、ダイホルタン、ＰＣＰ、ＣＮＰ、ＰＣＮＢ、ケルセン、ペンタクロロベンゼン、アルファーヘキサクロロシクロヘキサン、ベーターヘキサクロロシクロヘキサン、クロルデコン、ベンゾエピン（エンドスルファン）の計27農薬。

【農薬を使用する者が遵守すべき基準】（農林水産省・環境省令第５号）

○罰則を科す基準

（１）食用作物及び飼料作物に農薬を使用しようとする場合

農薬登録時に定められた

①適用作物

②単位面積当たりの使用量の最高限度又は希釈倍数の最低限度

③使用時期

④総使用回数

について遵守を義務とする。

（２）食用作物への適用がない農薬を食用作物に使用してはならないこととする。

（３）倉庫、コンテナ、船倉、天幕その他密閉された施設において農薬をくん蒸に使用する者（自ら栽培する農作物等に農薬を使用する者を除く）、航空機を利用して農薬を使用する者、ゴルフ場において農薬を使用する者は、当該年度における農薬の使用計画を、毎年度使用する最初の日までに農林水産大臣及び環境大臣（ゴルフ場において農薬を使用するもの限定）に提出する（変更の場合も同様）ことについて遵守を義務とする。

○遵守の努力を要請する基準

（１）容器に表示された最終有効年月を超えて農薬を使用しないよう努める。

（２）航空機（有人）を利用して農薬を使用する者は、対象区域において風速及び風向を観測し、対象区域外への農薬の飛散を防止するための必要な措置を講じるように努める。

（３）ゴルフ場の外に農薬が流出することを防止するために必要な措置を講じるよう努める

（４）住宅、学校、保育所、病院、公園その他の人が居住し、滞在し、又は頻繁に訪れる施設の敷地及びこれらに近接する土地において農薬を使用するときは、農薬が飛散することを防止するための必要な措置を講じるよう努める。

（５）農薬の使用者は以下の事項を帳簿に記載することに努める。

ア　使用した年月日

イ　使用した場所

ウ　使用した農作物名

エ　使用した農薬の種類又は名称

オ　使用した農薬の単位面積当たりの使用量又は希釈倍数

（６）止水を要する農薬を水田で使用する者は、当該農薬の流出を防止するための必要な止水措置を講じるよう努める。

（７）被覆を要する農薬を使用する者は、農薬を使用した土壌から当該農薬が揮散することを防止するための必要な措置を講じるよう努める。

2　農薬残留に関する農薬使用基準

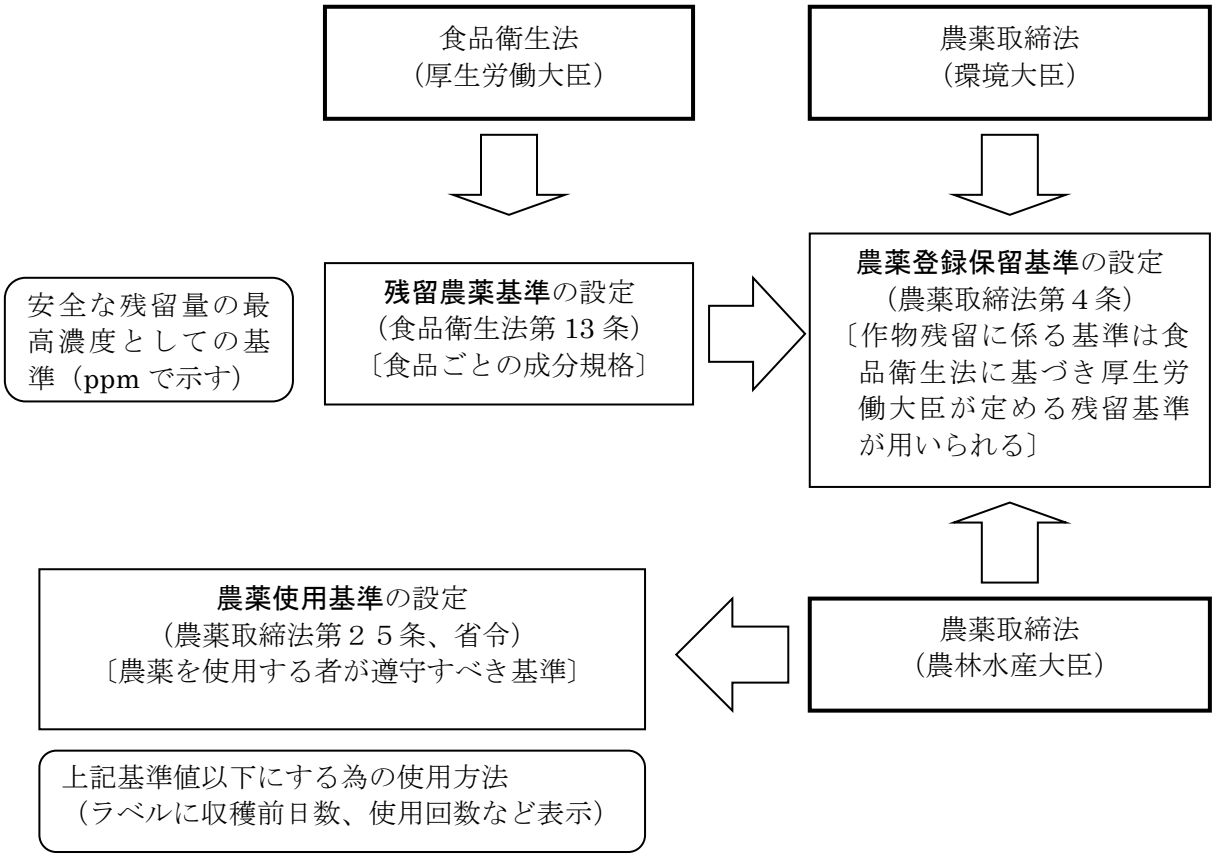
農薬取締法では、農薬の作物残留、土壌残留、水質汚濁による人畜への被害や生活環境動植物への被害を防止する観点から国が基準を定めることとされており、申請された農薬ごとにこれらの基準を超えないことを確認して登録することとされている。

これら基準は、審査の結果、基準を超えると判断された場合には登録が保留されることから「登録保留基準」と呼ばれ、環境大臣が定めて告示することとなっている。このうち、作物残留に係る基準については、食品衛生法に基づく食品規格（「残留農薬基準」）が定められている場合、その基準が登録保留基準となる。

これらのことを担保するため、農薬取締法に基づき「農薬使用基準」が制定されている。法律上農薬使用者には、使用方法（適用作物、使用時期、使用濃度、使用回数）等についてこの基準の遵守が義務付けられており、その使用方法は農薬のラベルに記載されている。

なお、ポジティブリスト制度では、国内の農産物と同様輸入農産物についても食品衛生法で定められた基準を超過して農薬が検出された場合には、当該農産物の流通が規制されることとなっている。

残留農薬基準、農薬登録保留基準、農薬使用基準の関係



3　農薬毒性の分類基準

1　人畜毒性　（平成２９年２月改正の毒物劇物部会判定基準）

動物における知見として表の急性毒性試験、皮膚に対する腐食性試験、眼等の粘膜に対する重篤な損傷試験、農薬の物性または使用法からみた危害の発生状況などにより、原則として次のように分類されている。

分　類	経口毒性 (LD_{50})	経皮毒性 (LD_{50})	吸入毒性 (LC_{50})			表示方法
			ガス	蒸気	ダスト ミスト	
毒　物	50mg/kg以下	200mg/kg以下	500ppm (4時間)以下	2.0mg/ℓ (4時間)以下	0.5mg/ℓ (4時間)以下	「医薬用外」の文字及び赤地に白色で「毒物」と表示
劇　物	50mg/kgを越え、300mg/kg以下	200mg/kgを越え、1,000mg/kg以下	500ppm (4時間)を越え2,500ppm (4時間)以下	2.0mg/ℓ (4時間)を超え10mg/ℓ (4時間)以下	0.5mg/ℓ (4時間)を超え1.0mg/ℓ (4時間)以下	「医薬用外」の文字及び白地に赤色で「劇物」と表示
普通物	「毒物及び劇物取締法」によって規定された特定毒物、毒物、劇物以外のもの。					

注１）LD_{50}……動物の50%を死亡させる薬物量で体重１kgあたりの薬物量（mg）で示す。
注２）LC_{50}……動物の50%を死亡させる薬物濃度で、蒸気、ダスト、ミストの場合はmg/ℓ で示す。
注３）毒物のうち、毒性が極めて強く、危害発生の恐れが著しいものは「特定毒物」に指定される。

2　水域の生活環境動植物（水産動植物）への影響

農林水産省は、平成17年に新たに製剤の毒性試験結果及び当該製剤の使用方法に基づいた、より実態に近い評価法(以下、「新評価法」という。)を導入し、平成23年度よりその運用を開始、令和２年にも対象動植物を拡大し評価の充実を図っている。本県は漁業生産額が全国３位(令和４年農林水産統計)の水産県であることから、水産動植物への影響を勘案し、農薬成分原体の評価である旧魚毒性分類を加味することとし、県農作物病害虫等防除指針への掲載農薬において、次のような表記を行う。但し、いずれの薬剤も水産動植物への影響を考慮し、注意して使用する。

本文表記	新評価法に基づく注意事項の表現（例）
×	・養殖池周辺での使用は避けること。 ・河川、湖沼、海域及び養殖池に本剤が飛散、流入する恐れのある場所では使用しないこと。
△	・河川、養殖池等に飛散、流入しないよう注意して使用すること。 ・散布後は水管理に注意すること。 ・養魚田では使用しないこと。 ・散布器具及び容器の洗浄水は、河川等に流さないこと。 ・空容器、空袋等は水産動植物に影響を与えないよう適切に処理すること。
○	・この登録に係る使用方法では該当がない。

上記の表に加え、平成27年以前の県農作物病害虫等防除指針掲載農薬のうち、魚毒性分類「Ｃ類」に該当していた農薬に「※」を付す。
水産動植物：魚類（ドジョウ、ボラ、マス、冷水魚）、甲殻類、藻類等
農薬取締法第26条の第1項に係る水質汚濁性農薬は、県農作物病害虫等防除指針への掲載はない。
本文中の該当欄は「水産（注）」と表記。

〈参考サイト〉
独立行政法人農林水産消費安全技術センター（ＦＡＭＩＣ）
登録農薬有効成分の毒性・水域の生活環境動植物に対する影響等
http://www.acis.famic.go.jp/toroku/dokuseieikyou12.pdf
水産動植物への影響に係る使用上の注意事項（製剤別一覧）
http://www.acis.famic.go.jp/toroku/suisaneikyou12.pdf
※上記参考サイトアドレスの数字部分(12)については閲覧する月の数字を入力。

4　農薬事故防止対策

農薬による事故は、農薬を散布する基本的条件を無視したり、ちょっとした不注意が事故の原因となる場合が多い。万一、事故が起きれば人命にかかわり、また、自然環境に大きな被害を与えることとなるので、農薬使用者は、以下の農薬使用及び取扱いの基本的事項に十分留意し、事故の未然防止に努めるとともに、普及指導員、農薬管理指導士及び関係者は事故防止の指導を徹底する。

1　薬剤散布前の注意

（1）散布された農薬の飛散により、水源地、河川、池沼、海域等が汚染されることのないよう地区の実状を十分考慮した散布計画を立てる。
（2）畜舎、採草地、養魚場等の近くで薬剤散布するときは、家畜や魚介類等に影響が及ばないような対策を講じる。
（3）桑園が近くにあるときは、薬剤選定も注意する。
（4）農薬の購入にあたっては、使用に必要な量だけ購入する。
（5）薬剤を取り扱う前に容器に記載されている注意事項を必ず読み厳守する。
（6）散布機器、作業衣類の点検を十分に行う。
（7）散布作業の前日は栄養や睡眠を十分取るなどして体調を整え、睡眠不足、病後、妊娠、皮膚病等がある場合は散布作業を行わない。
（8）万一、中毒等の事故が起きたときのことを考え、応急処置の方法等を調べておく。
（9）薬剤散布直後のほ場へ立入らなくてすむように除草、施肥等の管理作業はあらかじめ終えておく。特に温室、ハウス等の施設内防除では注意する。
(10) 畦畔等の雑草は刈り取っておき、薬剤散布後のものを家畜に与えない。
(11) 子供や作業に関係ない者が現場に近寄らないような処置を講じておく。

2　薬剤運搬時の注意

（1）薬剤を運搬するときは、厳重に包装して運ぶこと。運搬中に破損して薬剤が身体に触れると危険であるから特に注意する。
（2）薬剤を運ぶときは、弁当など飲食物と一緒に包んだり、ポケットに入れたりしない。

3　散布液調整時の注意

（1）散布液の調整は、慣れている人が行う。(特に石灰硫黄合剤とリン酸第一石灰等、リン酸を含む資材を混合すると硫化水素が発生するので混用しない。)
（2）必ずゴム手袋、メガネ、マスクを着用し、皮膚の露出部分をできるだけ少なくして行う。
（3）薬液をはかるときは瓶の周囲に薬液がつかないように注意し、はかり終わったら1回ごとに必ず栓をしておく。
（4）薬液を水に混入するときは、水滴がはねかえらないように水面近くから静かに入れる。
（5）薬剤を入れた水は棒で攪拌し、手では攪拌しない。

4　薬剤散布の時の注意

（1）散布作業に慣れてくると、取り扱いが粗雑になったり、油断からの不注意による事故が起こり易いので注意する。
（2）完全な服装で作業に当たり、薬剤による影響を少なくする。
（帽子、メガネ、マスク、ゴム手袋、長袖の上衣、長ズボン、ゴム長を着用する。なお、上衣、長ズボンは防水したものを用いるのがよい。）
（3）散布に当たっては、風向きを考え、常に身体を風上に置くように作業をし、散布薬剤を直接浴びないように注意する。
（4）作業は日中の暑い時を避けて、朝夕の比較的涼しい時間を選んで行い、同一人の長時間連続散布は行わない。
（5）作業中はタバコを吸わない。
（6）休憩の時や作業後にタバコを吸ったり、食事をとったりするときには必ず手や顔を石けんでよく洗い、うがいをする。
（7）作業中に、頭痛、めまい、吐き気等、身体の変調を感じたときは直ちに作業をやめる。
（8）万一、中毒等の症状があるときは、医師の診断を受けること。なお、その際は薬剤名を必ず告げる。
（9）温室、ハウス等の施設内に散布する場合には、特に作業服を厳重にし、マスクを着用する。
(10) 温室、ハウス等の施設でクロルピクリン等のくん蒸剤を使用する場合は、隔離式有機ガス用防毒マスクを着用して作業するとともにガス漏れに注意し、付近住民等に危害が起こらないように注意する。

５　薬剤散布後の注意

（１）作業が終わったら使用した容器や器具をよく洗うこと。ただし、洗浄の水が河川等に流入しないようにする。
（２）空容器、空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等により適切に行うこと。
（３）作業終了後は手足はもとより全身を石けんでよく洗い、衣服は下着まで全部着替え、作業に使った衣類は他の洗濯物と区別し石けんでよく洗う。
（４）作業後の飲酒は慎む。
（５）夜更かしや、過激な労働はしない。
（６）気分が悪くなったり、身体の変調を感じたりしたら、早めに医師の診断を受ける。なお、その際は薬剤名や作業の状況を告げる。

６　薬剤の保管管理

（１）薬剤は密閉して保管場所にしまうこと。できれば保管庫を設ける。
（２）保管場所には必ず鍵をかけ、盗難や紛失を防止し、誤用のないようにする。
（３）保管場所はもしも薬剤が飛散したときでも、地下にしみ込んだり、流れ出るおそれのなく、直射日光が当たったり、湿度や温度が高くならない場所に設ける。
（４）毒物及び劇物農薬の保管場所には、その旨表示する。
（５）薬剤を飲食物の容器や、他の容器に入れたり、移し替えたりしない。
（６）塩素酸ソーダ等の発火のおそれのある薬剤の保管及び取扱いには特に注意する。
（７）万一、盗難又は紛失等が発生した場合は、事故の未然防止のため速やかに近くの警察署に届ける。

７　住宅地等における農薬使用

(25消安第175号 平成25年4月26日「住宅地等における農薬使用について」通知 抜粋)

（１）病害虫に強い作物や品種の栽培、病害虫の発生しにくい適切な土づくりや施肥の実施、人手による害虫の捕殺、防虫網の設置、機械除草等の物理的防除の活用等により、農薬使用の回数及び量を削減すること。
（２）農薬を使用する場合には、農薬取締法に基づいて登録された、当該防除対象の農作物等に適用のある農薬を、ラベルに記載されている使用方法（使用回数、使用量、使用濃度等）及び使用上の注意事項を守って使用すること。
（３）粒剤、微粒剤等の飛散が少ない形状の農薬を使用するか、液体の形状で散布する農薬にあっては、飛散低減ノズルの使用に努めること。
（４）農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意して行うこと。
（５）農薬の散布に当たっては、事前に周辺住民に対して農薬使用の目的、散布日時、使用農薬の種類及び農薬使用者等の連絡先を十分な時間的余裕をもって幅広く周知すること。その際、過去の相談等により、近辺に化学物質に敏感な人が居住していることを把握している場合には、十分配慮すること。また、農薬散布区域の近隣に学校、通学路等がある場合には、万が一にも子どもが農薬を浴びることのないよう散布の時間帯に最大限配慮するとともに、当該学校や子どもの保護者等への周知を図ること。
（６）農薬を使用した年月日、場所及び対象農作物、使用した農薬の種類又は名称並びに使用した農薬の単位面積当たりの使用量又は希釈倍数を記録し、一定期間保管すること。
（７）農薬の散布後に、周辺住民等から体調不良等の相談があった場合には、農薬中毒の症状に詳しい病院又は公益財団法人日本中毒情報センターの相談窓口等を紹介すること。
（８）以上の事項の実施に当たっては、都道府県等の防除関係者や農業者向けの「総合的病害虫・雑草管理（IPM）実践指針」（平成17年9月30日農林水産省消費・安全局植物防疫課）や、農薬の飛散が生じるメカニズムやその低減に有効な技術をとりまとめた「農薬飛散対策技術マニュアル」（平成22年3月農林水産省消費・安全局植物防疫課）も参考とすること。

※（農薬事故相談）

公益財団法人　日本中毒情報センター

(一般市民専用電話　情報提供料：無料)

「つくば 中毒１１０番」　電話　029（852）9999【365日　9時～21時対応】

「大　阪 中毒１１０番」　電話　072（727）2499【365日　24時間対応】

(参考)えひめ医療情報ネット　http://www.qq.pref.ehime.jp/qqscripts/qq/qq38.asp

５　農薬の飛散防止対策

平成１８年に導入されたポジティブリスト制度では、食品衛生法に基づく残留基準値が設定されていない農薬等が一定量以上含まれる食品の販売等を原則禁止しています。また、ここでいう一定量とは、「食品衛生法第１１条第３項の規定により人の健康を損なうおそれのない量として厚生労働大臣が定める量を定める件」（平成17年11月29日厚生労働省告示第497号）により0.01ppmとなっている。

そのため、農薬散布を行う場合には、当該農薬が散布される圃場のみならず、その周辺で栽培されている食用農作物の収穫物についても、食品衛生法の基準を超えた農薬が残留することがないよう、関係機関が連携し、以下の農薬飛散防止対策の指導の徹底を図ることとする。

【農薬飛散影響防止対策等】（17消安第8282号 平成17年12月20日「農薬の飛散による周辺作物への影響防止対策について」通知 別紙2 2.個々の農業者が行う農薬の飛散影響防止対策等抜粋）

（１）病害虫防除については、病害虫の発生や被害の有無にかかわらず定期的に農薬を散布することを見直し、以下の３点の取組からなる総合的病害虫・雑草管理（IPM）に努める。

① 輸作、抵抗性品種の導入や土着天敵等の生態系が有する機能を可能な限り活用すること等により、病害虫・雑草の発生しにくい環境を整える。

② 病害虫発生予察情報の積極的な活用等による病害虫・雑草の発生状況の把握を通じて、防除の要否及び防除適期を適切に判断する。

③ 防除が必要と判断された場合には、病害虫・雑草の発生を経済的な被害が生じるレベル以下に抑制するために、多様な防除手段の中から適切な手段を選択し、病害虫・雑草管理に努める。

（２）病害虫の発生状況を踏まえ、農薬使用を行う場合には、次の事項の励行に努め、農薬の飛散により周辺農作物に被害を及ぼすことがないように配慮する。

① 周辺農作物の栽培者に対して、事前に、農薬使用の目的、散布日時、使用農薬の種類等について、連絡する。

② 当該病害虫の発生状況を踏まえ、最小限の区域における農薬散布に留める。

③ 農薬散布は無風又は風が弱い時に行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選ぶとともに、風向き、散布器具のノズルの向き等に注意する。

④ 特に周辺農作物の収穫時期が近いため農薬の飛散による影響が予想される場合には、状況に応じて使用農薬の種類を変更し、飛散が少ない形状の農薬を選択し、又は農薬の散布方法や散布に用いる散布器具を飛散の少ないものに変更する。

⑤ 上記の②から④の対策をとっても飛散が避けられないような場合にあっては、農薬使用者は散布日の変更等の検討を行い、その上でやむを得ないと判断される場合には、周辺農作物の栽培者に対して収穫日の変更、圃場の被覆等による飛散防止対策を実施する。

⑥ 以下の項目について記録し、一定期間保管する。

ア．農薬を使用した年月日、場所、対象農作物、気象条件（風の強さ）等

イ．使用した農薬の種類又は名称及び単位面積当たりの使用量又は希釈倍数

⑦ 農薬の飛散が生じた場合には、周辺農作物の栽培者に対して速やかに連絡するとともに、地域で対策を協議する。

【無人航空機による農薬散布に当たっての留意事項の遵守の徹底】

無人航空機を用いて農薬を散布する場合は、関係法令を遵守するとともに、以下の通知を参照し、安全かつ適正な農薬散布を徹底すること。

「無人ヘリコプターによる農薬の空中散布に係る安全ガイドライン」

「無人マルチローターによる農薬の空中散布に係る安全ガイドライン」

（令和元年７月30日付け元消安第1388号農林水産省消費・安全局長通知）

6　農薬による生活環境動植物・家畜・ミツバチの被害防止対策

1　水域の生活環境動植物（水産動植物）に対する被害防止

農薬を使用する場合にあっては、使用上の注意事項を守るとともに、次の事項に十分注意して水産動植物の被害の未然防止に努める。

（1）　散布に使用する機具等が作業中に故障あるいは破損しないよう、作業前に防除機具、ホース及びそれらの接続部分を十分整備点検すること。
（2）　河川、湖沼及び海域の周辺において使用する場合には、水域に直接流入しないよう十分配慮すること。また、天気予報に注意し、散布後に降雨が予想されるときには散布作業を控えるほか、散布中であっても、降雨、強風などで農薬散布に不適切な状況が生じた場合には直ちに散布を中止すること。
（3）　水田において使用した農薬が流出しないよう止水に関する注意事項を遵守し、止水期間中の農薬の流出を防止するために水管理や畦畔整備等の必要な措置を講じること（止水期間は１週間程度とする）。
（4）　散布後に使用した機具及び容器を洗浄した水、使用残りの薬液は河川などに流入しないよう注意するとともに、空きびんなどの容器類は安全に処理すること。

特に水質汚濁性農薬はできるだけ使用しないように努めるとともに、本文表記「×」（P.8参照）及び平成27年県農作物病害虫等防除指針の掲載農薬の内、魚毒性分類「C類」に該当していた農薬を使用する場合は次の事項に十分留意して、水産動植物の被害の未然防止に努める。

（1）　散布された薬剤が、河川、湖沼、海域及び養殖池に飛散又は流入する恐れのある場合では、使用しないこと。
（2）　使用残りの薬液が生じないように調製を行うとともに、散布に使用した機具及び容器を洗浄した水は河川等に流さず、散布むらの調整等に使用し、また、空容器、空袋等は廃棄物処理業者への委託等により、水産動植物に影響を与えないよう安全に処理すること。

なお、水質汚濁性農薬をやむを得ず使用する場合は、農薬使用基準を遵守するとともに、人畜や水産動植物に被害を生ずる恐れがある地域（河川、池、養殖場の岸から200m以内の地域、水源地周辺から200m以内の地域）では使用しないこと。

○　水質汚濁性農薬（シマジン剤）については、なるべく代替剤を使用する。
○　特殊肥料の椿油かす（茶の実かす他、サポニンを含有する資材も含む）は魚毒性が非常に強いと言われているため、水田では使用しない。

2　家畜に対する被害防止

従来の事故発生状況の全国的な傾向をみると、大中家畜は薬剤の散布地域およびその付近の畦草や野菜などの散布直後の給餌や、飲水による経口中毒によるものが多い。
また、鶏の場合は薬剤飛散による吸入中毒、給餌器、飲水の汚染が主な原因となっているので、つぎの諸点に注意する。

（1）散布前および散布時の注意事項
①　特定物質の場合は公示されるが、その他の毒性の強い農薬を使う場合にも、散布前に散布地域、使用薬剤、家畜に対する注意事項を地域内家畜飼養者に徹底することが望ましい。
②　散布に当たって豚舎、牛舎、鶏舎、牧草などのある場合は風向きを考えて、薬剤がかからないよう注意する。
③　広域な集団防除を実施する場合は、薬剤の飛散地域が広範になり、また気化ガス体の影響も考えられるので、当該地域の家畜飼養者に対し安全が確認されるまで戸外でのけい留、放飼をしないように要請する。

（２）散布後の注意

① 散布後、付近の餌となる草、牧草の刈取りは、薬剤の種類によって長短あるが、概ね２週間程度経過するまで行わない。従って、餌となる草、牧草は散布前に刈取っておく。

② 家畜が散布地域に入らないよう細心の注意をする。

③ 飲水は野外の天然水をさけ、水道、井戸水を給与する。

④ 万一、事故が発生した場合は、速やかに獣医師もしくは家畜保健衛生所に連絡し、手当を受ける。

３ ミツバチに対する被害防止

昨今、問題視されているミツバチの減少は、水稲の斑点米カメムシ類の防除で散布される殺虫剤をミツバチが浴びることが原因の一つと考えられている。加えて、水稲以外の作物においても、開花期に使用される農薬についてはミツバチに影響を及ぼすおそれがあるため、次の点に留意し、被害防止に努める。

（１）ミツバチに影響のある農薬の使用については特に注意する。また、農薬散布によりミツバチ群に被害を及ぼすおそれのあるときは、養蜂組合各支部に使用農薬名、使用時期、使用方法など少なくとも散布２週間前に通報し巣箱退避の協力を得る。

（２）ミツバチ群の飼育が明らかな場合には、事前に養蜂家への連絡を行う。また、ミツバチの活動が盛んな時間帯（8 ～ 12 時）の農薬散布を避け、できるだけ早朝、または夕刻に散布する。

（３）イチゴの奇形果防止やメロン、アブラナ科野菜の受粉などに利用されるミツバチは農薬に対してきわめて敏感であるため、管理に十分の注意が必要である。薬剤散布する場合は巣箱を外に出しておき、影響がなくなってからハウス内に入れる。

愛媛県内養蜂関係団体連絡先一覧

愛媛県養蜂協同組合連合会
住　所：伊予市大平甲７３９－７　　連絡先：０８９－９８９－０２２５

東予養蜂協同組合
住　所：西条市丹原町来見１－４１　　連絡先：０８９８－７５－３８４８

中予養蜂協同組合
住　所：松山市太山寺町１８７４　　連絡先：０８９－９７８－３４５５

八西養蜂組合
住　所：八幡浜市古町２－２－２０　　連絡先：０８９４－２４－３６１９

南予養蜂組合
住　所：宇和島市鶴島町６－２１　　連絡先：０８９５－２４－５１１２

〈参考サイト〉
農林水産省
農薬による蜜蜂の危害を防止するための我が国の取組
http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_mitubati

7　パラコート剤の安全使用

1　使用上の注意事項

（1）散布液調製の際は､原液が皮膚に接触したり､目に飛沫が入ったりしないように十分注意する。
（2）散布時は噴霧をあびたり吸い込んだりしないよう注意し、必ずマスクを着用する。
（3）散布作業はなるべく朝夕の涼しい時間を選び、２～３時間で交代するなどして作業が長時間にならないようにする。
（4）過労時や病後などで健康がすぐれない時には、散布作業を行わない。
（5）散布はなるべく低圧で行い、周囲の作物や居住者・通行人などに被害を及ぼさないよう風向きなどにも注意する。またミスト機の使用は避ける。
（6）散布中にめまいや頭痛など、気分が悪くなった時は、直ちに散布作業をやめて病院で手当を受ける。
（7）散布後は、顔・手など皮膚の露出部を石けんでよく洗い、うがいをする。
※　作業衣も洗濯したものと取替える。
（8）散布液を作った容器および散布機具は使用後石けん水で十分洗う。
（9）散布後は少なくとも、その当日は散布区域に立入らないよう配慮する。

2　保管管理上の注意事項

（1）保管の際は、密栓して、必ず鍵のかかる所に厳重に保管する。
（2）誤飲の危険を避けるため保管の際は、他の容器に絶対に移しかえない。
（3）危険防止のため原液を分割して、他人に譲渡しない。
（4）使用後の空びんは、ほ場などに放置せず適切に処置する。
（5）飲食物、食器類と区別する。
（6）子供の手の届かない所に保管する。
（7）万一、盗難又は紛失事故が発生した場合は、事故の未然防止のため速やかに所轄の警察署に届ける。

3　毒劇物販売上の注意事項

（1）販売数量、年月日、譲受人の氏名・職業・住所の記録、当該毒物の性状及び取扱いに関する情報の提供などが必要である。
（2）18歳未満の者、心身の障害により毒物又は劇物による保健衛生上の危害の防止の措置を適正に行うことができない者として厚生労働省令で定める者、麻薬・大麻・あへん又は覚せい剤の中毒者には販売が禁止されている。
（3）販売等譲渡にあたっては、農業本来の用途以外に使用されることのないよう十分注意する。

4　誤って飲んだ場合の処置

（1）誤飲の際は、直ちに濃い温食塩水などをくり返し飲み、指をのどに入れるなどして胃の中のものを吐き出した後、至急病院で手当を受ける。
※　たとえ飲んだ量が少なく、症状が軽くても必ず処置を受けること。

5　誤って眼に入った場合の処置

（1）誤って原液や飛沫が眼に入った場合はそのまま放置すると炎症をおこすので、必ず直ちに清水で十分洗眼した後、至急病院で手当を受ける。

※パラコート剤を含む主な薬剤とその主な使用方法

薬剤名	登録作物	適用 雑草名	使用時期 【使用方法】	使用量 (mL/10a)	使用水量 (L/10a)	使用 回数
プリグロックスＬ	かんきつ	一年生雑草	雑草生育期 但し､収穫前日まで	800～1,000	100～150	5回以内
	麦類		は種前又はは種後出芽前	600～1,000		4回以内
	野菜類		は種前又は植付前			3回以内

※野菜類(品目ごとに使用条件が違うので確認すること)

8　合成ピレスロイド剤、ＢＴ剤及びＩＧＲ剤使用上の注意事項

これらの剤は、その成分の作用特性からみて、特に蚕や水産動植物に対する危被害防止に努める必要があるので、本来の特性を十分熟知した上で次のような点に注意し、安全な使用・危害防止について周知徹底を図る。

（１）合成ピレスロイド剤

①　蚕　毒

蚕に対して長時間強い毒性があるので、薬液の飛散により桑の茎葉を汚染することのないように桑園のある地帯では使用しない。

②　水産動植物への影響

ごく低濃度でも水産動物に強い影響を及ぼすので、河川、湖沼、海域及び養殖池に薬液が飛散・流入する恐れのある場所では使用しない。また、一時に広範囲には使用しない。

③　その他の留意点

ア　水稲用合成ピレスロイド剤（トレボン剤等）で一時に広範囲に使用する場合には、地域の指導方針に従いかつ使用基準を遵守する。

イ　薬剤抵抗性の発達を回避するため、年１回の使用とすることが望ましい。

ウ　散布に使用した機具及び容器を洗浄した水は、河川等に流さず、散布むらの調整等に使用し、また、空容器、空袋等は廃棄物処理業者への処理の委託等により水産動物に影響を与えないよう安全に処理する。

（２）ＢＴ剤（*Bacillus thuringiensis*　菌結晶毒素および生芽胞等を含む）

蚕　毒

養蚕地帯及び養蚕農家、共同飼育場などの周辺では使用しない。又、これら以外の場所でも付近に桑園がある場合、飛散してかからないように、風向きなどに十分注意して散布する。やむをえず使用する場合は、事前に関係機関・団体及び生産者組織と安全対策について十分協議し、万全を期すこと。

〈ＢＴ剤の分類〉

生・死菌の別	亜　種　名	薬　剤　名(主なもの)	特　　徴
死　菌１）	*kurstaki*	トアロー水和剤ＣＴ	・いずれもチョウ目害虫の幼虫のみに効果がある。 ・生芽胞は結晶毒素と混合することにより、効果が増強し速効性が高まる。 ・*kurstaki* 系統はコナガやアオムシに有効。 ・*aizawai* 系統はヨトウムシ類に有効。
生　菌２）	*kurstaki*	チューリサイド水和剤 デルフィン顆粒水和剤 エスマルクＤＦ チューンアップ顆粒水和剤 ファイブスター顆粒水和剤 バイオマックスＤＦ	
	aizawai	ゼンターリ顆粒水和剤 サブリナフロアブル クオークフロアブル ジャックポット顆粒水和剤 フローバックＤＦ エコマスターＢＴ チューレックス顆粒水和剤	
	kurstaki+*aizawai*	バシレックス水和剤	

１）生芽胞を殺滅処理した結晶毒素のみのもの

２）生芽胞と結晶毒素の両者を含むもの

３）ＢＴ剤の登録薬剤一覧(参考資料Ｐ.18)参照。

（３）ＩＧＲ剤（昆虫成長制御剤）

①　蚕毒

蚕に対して長時間毒性があるので、薬液の飛散により桑の茎葉を汚染することのないように桑園のある地帯では使用しない。

②　水産動植物への影響

水産動物、特に甲殻類に悪影響を及ぼすので、養魚池等周辺での使用には十分注意する。

（ただし、アプロード剤はカメムシ目害虫に、トリガードはハエ目害虫に作用するので、他のＩＧＲ剤に比べ蚕毒、水産動植物(特に甲殻類)に対する影響は少ない。）

薬剤名	アプロード	トリガード	アタブロン	カスケード	マ ッ チ	レターデン	ノーモルト	ファルコン	マトリック	ロムダン
蚕　毒	低 (7日)	低 (20日)	高 (90日)	高 (50日)	高 (60日)	高 (80日)	高 (90日)	高 (60日)	高 (90日)	高 (80日)
特　徴	カメムシ目害虫（ｳﾝｶ、ﾖｺﾊﾞｲ、ｺﾅｼﾞﾗﾐ、ｶｲｶﾞﾗﾑｼ類）に対する効果が高い。ｷﾁﾝ合成阻害剤	ハエ目害虫(ﾊｴの仲間、ﾊﾓｸﾞﾘﾊﾞｴ類)に対する効果が高い。ｸﾁｸﾗ硬化剤	主にチョウ目害虫に対する効果が高い。							チョウ目害虫専用のホルモン様活性剤
			キチン合成阻害剤					脱皮促進		

注：（　　）は蚕に薬害のなくなる最低経過日数を一応の目安として記載したが、その日を越えても悪影響を及ぼす場合があるので注意する。

9　農薬登録における適用作物名について

（令和6年4月1日 最終改正 ）

農薬取締法第3条第2項第3号（同法第34条において準用する場合を含む。）に規定する適用病害虫の範囲及び使用方法に関する適用農作物等の名称は、「農薬の適用病害虫の範囲及び使用方法に係る適用農作物等の名称について」（平成31年3月29日付け30消安第6281号農林水産省消費・安全局農産安全管理課長通知）に定められている。

表の使用に際しては以下の事項に留意してください。

1　掲載されている作物名の中には、現在、農薬の適用作物には含まれてない作物を含む。なお、適用作物に含まれていない作物については、農薬登録時にその名称が変更される場合がある。

2　品種名及び栽培条件（施設栽培等）等については省略している場合があるが、農薬登録時に品種名又は栽培条件等の指定がある場合は、当該品種又は栽培条件等にのみ使用できるものである。

表１　適用農作物のうち食用又は飼料用に利用される農作物

※食用及び家畜飼料の両方に利用される農作物

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備　考（収穫部位等）
果樹類	かんきつ	－	天草		果実を収穫するもの
			アンコール		
			伊予柑		
			愛媛果試第28号	紅まどんな	
			大紅みかん		
			オレンジ	スイートオレンジ、バレンシアオレンジ	
			カーブチー		
			かぼす		
			カラ	カラマンダリン、南津海	
			河内晩柑		
			清見		
			きんかん	ニンポウキンカン、マルキンカン	
			グレープフルーツ		
			サガマンダリン		
			サマーフレッシュ		
			シークヮーサー		
			じゃばら		
			不知火	デコポン	
			すだち		
			せとか		
			セミノール		
			タロガヨ		
			たんかん		
			長門ユズキチ		
			なつみかん	甘夏、なつだいだい	
			ネーブル	ワシントンネーブル	
			はっさく		
			はるか		
			はるみ		
			はれひめ		
			日向夏		
			フィンガーライム	キャビアライム、レモンキャビア	
			ぶんたん	ざぼん、ぼんたん、晩白柚、うちむらさき	
			平兵衛酢		
			ぽんかん		
			マーコット		
			みかん	温州みかん、紀州みかん	
			ゆず		
			ライム		
			レモン		
			ミカン（*Citrus*）属、キンカン（*Fortunella*）属、カラタチ（*Poncirus*）属又はこれらの交配種で、概ね偏球形、球形又は卵形の果実を収穫するものは、これらの作物群に含まれる。		
	仁果類	－	かりん		果実を収穫するもの
			なし	日本なし、西洋なし、中国なし	
			びわ		
			マルメロ		
			りんご		
	核果類	もも類	もも		果実を収穫するもの
			ネクタリン		
		小粒核果類	あんず	アプリコット	
			うめ		
			すもも	プラム、プルーン	
			作物群内の作物間での交配種は、これらの作物群に含まれる。		
		－	おうとう	さくらんぼ	果実を収穫するもの
	ベリー類等の小粒果実類	－	ぶどう	小粒種ぶどう（デラウェア、シラガブドウ、やまぶどう）、大粒種ぶどう（巨峰系４倍体品種、２倍体米国系品種、２倍体欧州系品種、３倍体品種他）　注１）	果実を収穫するもの
		ベリー類	アロニア	チョコベリー	果実を収穫するもの

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備　考（収穫部位等）
果樹類	ベリー類等	ベリー類	がまずみ	ジョミ	果実を収穫するもの
			ぐみ	アキグミ、ダイオウグミ、トウグミ、ナツグミ	
			シーベリー	サジー、サージ、スナヂグミ	
			食用桑（果実）	カラグワ、ヤマグワ	
			すぐり	グースベリー	
			ハスカップ	クロミノウグイスカグラ	
			ふさすぐり	カーランツ、カラント、カランツ、アカフサスグリ、クロフサスグリ、カシス	
			ブラックベリー		
			ブルーベリー		
			ボイセンベリー		
			やまもも		
			ラズベリー		
	－	－	アーモンド		仁を収穫するもの
	－	－	あけび（果実）		果実を収穫するもの
	－	－	アセロラ		
	－	－	アテモヤ		
	－	－	アボカド		
	－	－	いちじく		
	－	－	いちょう（種子）	ギンナン	種子を収穫するもの
	－	－	インドナツメ	イヌナツメ	果実を収穫するもの
	－	－	オリーブ		
	－	－	カカオ		種子を収穫するもの
	－	－	かき		果実を収穫するもの
	－	－	カニステル	エッグフルーツ、クダモノタマゴ	
	－	－	キウイフルーツ		
	－	－	グアバ（果実）	バンジロウ、バンザクロ	
	－	－	くり		種子を収穫するもの
	－	－	くるみ		
	－	－	コーヒーノキ		
	－	－	ゴレンシ	スターフルーツ	果実を収穫するもの
	－	－	ざくろ		
	－	－	サポジラ		
	－	－	さるなし	こくわ、香粋	
	－	－	さんしょう（果実）		
	－	－	ジャボチカバ		
	－	－	食用つばき（種子）		種子を収穫するもの
	－	－	ストロベリーグアバ		果実を収穫するもの
	－	－	チェリモヤ		
	－	－	なつめ		
	－	－	パイナップル		
	－	－	パッションフルーツ	くだものとけいそう	
	－	－	バナナ		
	－	－	パパイヤ	青パパイヤ	果実を収穫するもの。完熟していないものを含む。
	－	－	はまなす（果実）		果実を収穫するもの
	－	－	バンレイシ	シャカトウ、アテス、シュガーアップル	
	－	－	ピタヤ	ホワイトピタヤ、レッドピタヤ、ゴールデンピタヤ、ドラゴンフルーツ	
	－	－	ピタンガ	タチバナアデク、スリナムチェリー、ブラジルチェリー	
	－	－	フェイジョア	パイナップルグアバ	
	－	－	ペカン		種子を収穫するもの
	－	－	ペピーノ		果実を収穫するもの
	－	－	ポポー	アケビガキ	
	－	－	ホワイトサポテ		
	－	－	マンゴー		
	－	－	ミラクルフルーツ		
	－	－	むべ		
	－	－	やえやまあおき	ノニ	
	－	－	リュウガン	ロンガン、竜眼	
	－	－	レイシ	ライチ	
	－	－	レンブ	ジャワフトモモ	
野菜類	いも類	－	アメリカホドイモ	アピオス	塊根を収穫するもの
			かんしょ	さつまいも、シモンいも	
			きくいも	ブタイモ	塊茎を収穫するもの
			キャッサバ		塊根を収穫するもの
			こんにゃく		塊茎を収穫するもの
			さといも	えびいも、たけのこいも、やつがしら、セレベス	
			ちょろぎ		
			はすいも（塊茎）		
			ばれいしょ	じゃがいも	

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備　考（収穫部位等）
野菜類	いも類		みずいも	田いも	塊茎を収穫するもの
			ヤーコン		塊根を収穫するもの
			やまのいも	やまといも、自然薯、丸いも、ながいも、とっくりいも、いせいも、いちょういも、つくねいも、だいじょ	塊茎を収穫するもの
野菜類	根菜類	－	うこん	秋ウコン、キョウオウ、春ウコン	根茎を収穫するもの
			かえんさい	デトロイトダークレッド、レッドビート、ガーデンビート	根を収穫するもの
	根菜類	－	かのこそう	ハルオミナエシ	根茎及び根を収穫するもの
			かぶ	赤かぶ、赤菜、温海かぶ、稲核菜、大かぶ、鬼首菜、源助カブナ、こかぶ、小牛田菜、聖護院かぶ、清内路あかね、酢茎菜（すぐきな）、長禅寺菜、津田かぶ、天王寺かぶ、鳴沢菜、羽広菜、ひのなかぶ（日野菜）、福島菜、紅かぶ、ゆるぎかぶ（万木かぶ）	茎葉及び根を収穫するもの
			甘草	ウラルカンゾウ、スペインカンゾウ	根及びストロンを収穫するもの
			ごぼう		根を収穫するもの
			しょうが	根しょうが	根茎を収穫するもの
			葉しょうが	やなかしょうが、はじかみしょうが 、筆ショウガ	生葉のついたままの若い根茎を収穫するもの
			食用あまどころ		根茎を収穫するもの
			食用ききょう（根）		根を収穫するもの
			西洋ごぼう	サルシファイ、バラモンジン、サルシフィー	
			セルリアック	根セロリ、根セルリ	
			だいこん	葉だいこん、だいこんな	茎葉及び根を収穫するもの
			チコリ（根株）	キクニガナ	根を収穫するもの
			てんさい※	サトウダイコン	根を採糖目的に収穫するもの
			にんじん	金時にんじん、西洋にんじん、島にんじん	根を収穫するもの
			にんじん（葉）	葉にんじん	比較的若い葉を根とともに収穫するもの
			パースニップ		根を収穫するもの
			はつかだいこん	廿日大根、ラディッシュ、二十日大根	茎葉及び根を収穫するもの
			紫うこん	ガジュツ	根茎を収穫するもの
			もりあざみ	やまごぼう、ごぼうあざみ	根を収穫するもの
			薬用にんじん	おたねにんじん、チョウセンニンジン、コウライニンジン	
			わさびだいこん	ホースラディッシュ 、西洋わさび	
	鱗茎類	鱗茎類（根物）	たまねぎ		鱗茎を収穫するもの
			葉たまねぎ	葉玉葱	たまねぎの比較的若い段階（鱗茎が太り始める頃）の葉及び鱗茎を収穫するもの
			食用ゆり	ゆりね	鱗茎を収穫するもの
			にんにく	ジャンボニンニク、エレファントガーリック、グレートヘッドガーリック	
			葉にんにく		にんにくの比較的若い段階の葉及び鱗茎を収穫するもの
			のびる		葉及び鱗茎を収穫するもの
			ベルギーエシャロット	シャロット	鱗茎を収穫するもの
			らっきょう	らっきょう（エシャレット栽培）、らっきょう（エシャロット栽培）	
		鱗茎類（葉物）	あさつき	イトネギ、センボンワケギ	葉及び鱗茎を収穫するもの
			ぎょうじゃにんにく		
			チャイブ	エゾネギ、セイヨウアサツキ、シブレット	葉を収穫するもの
			にら	黄にら	
			にら（花茎）	花にら	花蕾及び花茎を収穫するもの
			にんにく（花茎）		花茎を収穫するもの
			ねぎ	九条ねぎ、加賀太ねぎ、千住ねぎ、やぐらねぎ、下仁田ねぎ、リーキ、わけねぎ	茎葉を収穫するもの
			わけぎ		葉及び鱗茎を収穫するもの
			作物群内の作物間での交配種は、これらの作物群に含まれる。		葉及び鱗茎を収穫するもの
	豆類（種実）	－	あずき	大納言	成熟した種子を収穫するもの
			いんげんまめ	いんげん、きんときまめ、とらまめ、うずらまめ	
			えんどうまめ		
			ささげ		
			そらまめ		
			だいず※		
			なたまめ		
			ふじまめ	千石豆、カガツルマメ、ツルマメ	
			べにばないんげん	はなまめ	
			らっかせい	なんきんまめ、ピーナッツ	
	豆類（未成熟）	－	えだまめ		未成熟なさや付き豆を収穫するもの
			さやいんげん	ヒラザヤインゲン、モロッコインゲン	
			さやえんどう	きぬさやえんどう、スナックえんどう、砂糖えんどう、スナップエンドウ	

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備　考（収穫部位等）
野菜類	豆類（未成熟）		実えんどう	うすいえんどう、グリーンピース	未成熟な種子（さや付で収穫されるものを含む）を収穫するもの
			未成熟ささげ	十六ささげ、あきしまささげ	未成熟なさや付き豆を収穫するもの
			未成熟しかくまめ	ウリズン、トウサイ	
			未成熟そらまめ		未成熟な種子（さや付で収穫されるものを含む）を収穫するもの
		―	未成熟なたまめ		未成熟なさや付き豆を収穫するもの
			未成熟ふじまめ	未成熟千石豆、未成熟カガツルマメ、未成熟ツルマメ	
	うり類	うり類（未成熟）	赤毛ウリ	モーウィ	果実を収穫するもの
			エホバク	韓国カボチャ	
			きゅうり	乙事赤うり	
			きゅうり（花）	花丸きゅうり	きゅうりの雌花を収穫するもの
			食用ひょうたん		果実を収穫するもの
			食用へちま		
			しろうり	あおうり、カリモリ、はぐらうり、青しまうり、くろうり、桂うり	
			ズッキーニ		
			ズッキーニ（花）	花ズッキーニ	花を収穫するもの
			とうがん	かもうり、冬瓜	果実を収穫するもの
			にがうり	つるれいし	
			はやとうり		
			ゆうがお	かんぴょう	
		うり類（成熟）	かぼちゃ	日本かぼちゃ、西洋かぼちゃ、ぺぽかぼちゃ（ズッキーニを除く）	
			すいか		成熟した果実を収穫するもの
			漬物用すいか	源吾兵衛西瓜	未成熟な果実を収穫するもの
			ツノニガウリ	キワノ	成熟した果実を収穫するもの
			まくわうり	菊メロン、銀泉、金太郎、金俵、タイガーメロン、ニューメロン、悠紀メロン	成熟した果実を収穫するもの
			漬物用まくわうり	ぺっちんうり	未成熟な果実を収穫するもの
			メロン	アールスメロン、アムスメロン、アンデスメロン、エリザベスメロン、キンショウメロン、キンショーメロン、クインシーメロン、タカミメロン、ハニーデューメロン、パパイヤメロン、プリンスメロン、ハミウリ	成熟した果実を収穫するもの
			漬物用メロン		未成熟な果実を収穫するもの
	なす科果菜類	―	しょくようほおずき	ゴールデンベリー、トマティロ、グランドチェリー	果実を収穫するもの
		―	トマト		果実を収穫するもの。 直径３cm以下のものは含まない。
		―	ミニトマト		果実を収穫するもの。 直径３cm以下のもの。
		―	なす		果実を収穫するもの
		ピーマン及びとうがらし類	甘長とうがらし	伏見とうがらし、万願寺とうがらし、三宝とうがらし、ひもとうがらし	果実を収穫するもの。未成熟の状態で利用する甘味種。
			かぐらなんばん		果実を収穫するもの
			きだちとうがらし		
			ししとう	ししとうがらし、獅子唐、葵ししとう	
			とうがらし	鷹の爪、八房、日光とうがらし、札幌大長とうがらし	果実を収穫するもの。未成熟の状態で、あるいは完熟させて利用する辛味種。
			ハバネロ		果実を収穫するもの
			ピーマン	大獅子、カリフォルニアワンダー、カラーピーマン、オランダパプリカ	
			ピカンテ		
	あぶらな科野菜（花蕾及び茎）	はなやさい類	カリフラワー	はなやさい、さんごしょう、ロマネスコ、カリフローレ	花蕾及び花茎を収穫するもの
			茎ブロッコリー	スティックセニョール	
			ブロッコリー		
			作物群内の作物間での交配種は、これらの作物群に含まれる。		
		あぶらな科茎野菜	コールラビ	球茎カンラン、蕪キャベツ	肥大した茎を収穫するもの
			ザーサイ	茎タカナ、海野（肥大茎）、四川搾菜（肥大茎）	
	葉菜類	非結球あぶらな科葉菜類	あざみな	チリメンカラシ、ハゴロモカラシナ	茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの
			あじみな	味美菜	
			あぶらな	仙台芭蕉菜、はたけな（畑菜）、姫路若菜、やまとまな（大和真菜）	
			飯田冬菜		
			潮江菜		

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備　考（収穫部位等）
野菜類	葉菜類	非結球あぶらな科葉菜類	海野（茎葉）		茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの
			大高菜		
			大山そだち		
			カーボロネロ	黒キャベツ	
			かぶな	木曽菜、なかじまな（中島菜）	
			かほくな	河北菜	
			からしな	黄からしな、葉からしな、やましおな、レッドアジアンマスタード、グリーンマスタード、セリフォン	
			ケール	ハゴロモカンラン、リョクヨウカンラン	
			ケールッコラ		
			こまつな	小松菜	
			さがみグリーン		
			さぬきな		
			四川搾菜（茎葉）	たけのこたかな	
			千宝菜	千宝菜１号（せんぽうさい１号）、千宝菜２号（せんぽうさい２号）	
			タアサイ	仙台雪菜、タアサイ（ターサイ、ターツァイ、如月菜、きさらぎな、瓢菜、ひさごな、縮み菜、ちぢみな）	
			体中菜	ハオチィ菜	
			たかな	高菜、かつおな、せいさい、山形青菜、三池たかな	
			食べて菜		
			チンゲンサイ	青梗菜	
			チンゲンルッコラ		
			てごろ菜		
			なずな		茎葉を収穫するもの。春の七草の一種。
			なばな類	あさまこな（朝熊小菜）、あすっこ、アレッタ、おおさきな （大崎菜、芹田菜）、太田かぶ（やる菜）、オータムポエム（アスパラ菜、愛味菜）、大月菜、大野菜、かいらん、かきな（かき菜、宮内菜、宮崎菜、ＣＯ菜、川流れ菜、五月菜、芯切菜）、勝山水菜（平泉寺水菜、郡水菜、さんまい水菜、北市水菜）、くきたちな（会津茎立菜、カブレ菜、縮緬茎立）、ケールッコラ（なばな的栽培）、こうさいたい（紅菜苔）、こまつな（なばな的栽培）、さいしん（菜芯、油菜芯）、三景雪菜、四川児菜（子持たか な、祝蕾）、たべたい菜、チーマデラーパ、チンゲンサイ（なばな的栽培）、チンゲンルッコラ（なばな的栽培）、摘菜花、つぼみな（つぼみ菜、三陸つぼみ菜、あでやかつぼみ菜）、なばな（なのはな、はなな）、のらぼうな（のらぼう菜）、博多蕾菜、はくさい（なばな的栽培）（ふくたち）、はたけな（畑菜）（なばな的栽培）、はなっこりー、みずかけな（水掛菜）、めいけな（女池菜、新潟なばな、角田冬菜、新潟小松菜）	茎葉及び花蕾を収穫するもの
			のざわな	野沢菜	茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの
			パクチョイ		
			畑わさび	おかわさび	葉、花茎、根茎及び根を収穫するもの。畑地で栽培されるもの。
			畑わさび（根茎）	おかわさび	根茎を収穫するもの。畑地で栽培されるもの。
			畑わさび（葉）	葉わさび	葉を収穫するもの。畑地で栽培されるもの。
			非結球はくさい	小倉はくさい菜、さんとうさい（山東菜、べかな、非結球はくさい、半結球はくさい、いがむらさき）、しろな（大阪しろな、なにわ菜、京の里しろな、いなみ菜）、たいさい（体菜、たいな、雪白体菜、二貫目体菜、しゃくし菜、長岡菜、下北春まな）、長崎はくさい（長崎白菜、唐人菜、唐菜）、博多白菜、ひこしまはるな（彦島春菜）、ビタミン菜、ひろしまな（広島菜）、優愛菜	茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの
			非結球メキャベツ	プチヴェール、ミニベール	茎葉及び脇芽を収穫するもの
			べんり菜		茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの
			みずな	みずな（京菜、水菜、京水菜）、みぶな（壬生菜）	
			餅菜	正月菜	

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備　考（収穫部位等）
野菜類	葉菜類	非結球あぶらな科葉菜類	山形みどりな		茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの
			ラファノブラシカ		茎葉及び花蕾を収穫するもの
			ルッコラ	ロケット、セルバチコ、ガルギール、エルーカ	茎葉（花茎がのびだす前のもの）を収穫するもの
			わさびな		
			作物群内の作物間での交配種は、これらの作物群に含まれる。		茎葉（花茎がのびだす前のもの）又は茎葉及び花茎を収穫するもの
			Brassica rapa、*B. oleracea*、*B. juncea* 又はこれらの交配種で、非結球の茎葉又は茎葉及び花蕾を収穫するものも含まれる（根菜類、結球あぶらな科葉菜類、はなやさい類及びあぶらな科茎野菜に含まれる作物は除く。）。		
		結球あぶらな科葉菜類	キャベツ	チリメンキャベツ、サボイキャベツ	結球した茎葉を収穫するもの
			はくさい		
			メキャベツ	芽キャベツ、こもちかんらん	結球した腋芽（脇芽）を収穫するもの
			作物群内の作物間での交配種は、これらの作物群に含まれる。		結球した茎葉を収穫するもの
		せり科葉菜類	あしたば		茎葉を収穫するもの
			キャラウエイ（葉）	ヒメウイキョウ	
			きんさい	スープセルリー、シャンサイ、中国ゼリ、キンツァイ、ミニホワイト	
			コリアンダー（葉）	香菜、シャンツァイ、パクチー、コエンドロ	
			せり		
			セルリー		
			チャービル	ウイキョウゼリ、セルフィーユ	
			ディル（葉）	イノンド、時蘿	
			とうき（葉）		
			パセリ	モスカールドパセリ、イタリアンパセリ	
			はまぼうふう（葉）		葉を収穫するもの
			フェンネル（葉）	ういきょう、スティッキオ	茎葉を収穫するもの
			ぼたんぼうふう	長命草、サクナ、チョーミーグサ	
			みつば	青みつば、切りみつば、根みつば	
		レタス類	エンダイブ	ニガヂシャ、キクヂシャ	茎葉を収穫するもの
			トレビス	トレビツ	結球した茎葉を収穫するもの
			非結球レタス	かきちしゃ（サンチュ、チマサンチュ）	葉を収穫するもの
				サラダ菜（バターヘッド型レタス、バターヘッド型たまぢしゃ）、立ちちしゃ（ロメインレタス、コスレタス）、美味タス（ビミタス）、リーフレタス（葉ちしゃ、チリメンチシャ、サニーレタス、シルクレタス、フリルレタス、オークリーフレタス、バタビアレタス、ロロロッサ）	茎葉を収穫するもの
			プンタレッラ		花茎及び葉を収穫するもの
			レタス	クリスプヘッド型たまちしゃ	結球した茎葉を収穫するもの
		レタス類以外のきく科葉菜類	カレープラント		茎葉を収穫するもの
			きく（葉）	きく葉	葉を収穫するもの
			こおにたびらこ		茎葉を収穫するもの。 春の七草では、ほとけのざといわれているもの。
			ごまな		茎葉を収穫するもの
			さわあざみ	まあざみ	葉を収穫するもの
			しゅんぎく	菊菜、スティックシュンギク	茎葉を収穫するもの
			食用西洋たんぽぽ	食用タンポポ、ダンデライオン	葉を収穫するもの
			すいぜんじな	金時草、ハンダマ	茎葉を収穫するもの
			タラゴン	エストラゴン、フレンチタラゴン、ロシアンタラゴン	
			葉ごぼう		比較的若い葉を根とともに収穫するもの
			はははこぐさ	ごぎょう、おぎょう	茎葉を収穫するもの。 春の七草の一種。
			ほそばわだん	にがな、ンジャナ	茎葉を収穫するもの
			もみじがさ	しどけ、モミジクサ、タイコウナ、トウキチナ	
			ヤーコン（茎葉）		
			よぶすまそう	ぼんな、ホンナ	
			よめな	はぎな	
			よもぎ		
		しそ科葉菜類	えごま（葉）		
			オレガノ	ハナハッカ、ワイルドマジョラム	
			しそ	おおば	
			セージ	コモンセージ、パイナップルセージ、チェリーセージ、レッドセージ	

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備　考（収穫部位等）
野菜類	葉菜類	しそ科葉菜類	タイム	コモンタイム、クリーピングタイム、レモンタイム、カピタートゥス（ペルシアン・ヒソップ）、オレンジタイム、ジギス（ソースタイム）	茎葉を収穫するもの
			バジル	スイートバジル、ダークオパールバジル、メボウキ、ホーリーバジル、レモンバジル	
			はっか	ミント、スペアミント、ペパーミント、アップルミント	
			マジョラム	スイートマージョラム、 ポットマジョラム、ゴールデンマジョラム、マヨラナ	
			レモンバーム	セイヨウヤマハッカ	
			ローズマリー	マンネンロウ	
		ヒユ科葉菜類	アマランサス（茎葉）	ハゲイトウ、アオビユ、ホナガイヌビユ、ひゆな	
			おかひじき	クサヒジキ、オカミル、ミルナ	
			ふだんそう	ベトラーブ、あかふだんそう、スイスチャード、デトロイト	葉を収穫するもの
			ほうれんそう		茎葉を収穫するもの
		－	アイスプラント		
		－	あかざかずら	オカワカメ、琉球百薬、雲南百薬	葉を収穫するもの
		－	うこぎ	ウコギ（ヤマウコギ）、ヒメウコギ	茎葉を収穫するもの
		－	えびすぐさ（茎葉）	ロッカクソウ	地上部の全草を収穫するもの
		－	エルバステラ		地上部全草を収穫するもの
		－	エンサイ	エンツァイ、あさがおな、空心菜、通菜、ヨウサイ	茎葉を収穫するもの
		－	おかのり		
		－	おらんだわれもこう	サラダバーネット	葉を収穫するもの
		－	かわらけつめい		地上部全草（茎葉及び豆果）を収穫するもの
		－	かんしょ（茎葉）		茎葉を収穫するもの
		－	きゅうり（葉）		きゅうりの葉を収穫するもの
		－	食用すいば	ソレル、オゼイユ	葉を収穫するもの
		－	食用すべりひゆ		茎葉を収穫するもの
		－	ストリドーロ	シラタマソウ	地上部全草を収穫するもの
		－	つるな	はまな、はまぢしゃ	茎葉を収穫するもの
		－	つるむらさき	シンツルムラサキ	
		－	とうがらし（葉）		葉を収穫するもの
		－	どくだみ		地上部全草を収穫するもの
		－	はこべ	こはこべ、みどりはこべ	茎葉を収穫するもの
		－	はぶそう（茎葉）		地上部全草を収穫するもの
		－	ボリジ	ルリジサ	茎葉及び花を収穫するもの
		－	マーシュ	コーンサラダ、マーシュレタス	茎葉を収穫するもの
		－	モロヘイヤ	タイワンツナソ、シマツナソ	
		－	やなぎたで	アユタデ、ほんたで、マタデ	
		－	ゆきのした		葉を収穫するもの
		－	レモングラス	メリッサグラス、レモンガヤ、レモンソウ、フィーバーグラス	茎葉を収穫するもの
		－	レモンバーベナ	コウスイボク	
	茎野菜類	ずいき類	さといも(葉柄)	ずいき、だついも	葉柄を収穫するもの
			はすいも（葉柄）		
			みずいも（葉柄）	タイモ	
		ふき類	つわぶき		
			ふき		
		－	アスパラガス		新芽を収穫するもの
		－	いたどり（芽）		芽を収穫するもの
		－	うど		若い茎葉部を収穫するもの
		－	くきちしゃ	やまくらげ、トムシャ、ステムレタス	茎及び上部の若い葉を併せて収穫するもの
		－	くさそてつ	こごみ、ガンソク、コゴメ、クグミ、ニワゾテツ	葉を収穫するもの
		－	ぜんまい		
		－	フローレンスフェンネル		葉柄の基部の肥大した部分を収穫するもの
		－	ルバーブ	ショクヨウダイオウ	葉柄を収穫するもの
		－	わらび		葉を収穫するもの
	食用花	－	かんぞう（花）	シナカンゾウ、ノカンゾウ、ヤブカンゾウ、黄花菜、金針菜	蕾を収穫するもの
		－	しそ（花穂）		花穂を収穫するもの
		－	じゅんぎく（花）		花を収穫するもの
		－	食用あさがお		花又は蕾を収穫するもの
		－	食用アスター	えぞぎく	花を収穫するもの
		－	食用アリッサム		
		－	食用インパチェンス	アフリカホウセンカ、ニューギニア・インパチェンス	

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備　考（収穫部位等）
野菜類	食用花	－	食用エキザカム		花を収穫するもの
		－	食用カーネーション		
		－	食用ぎく		
		－	食用金魚草	スナップドラゴン	
		－	食用きんせんか	カレンジュラ	
		－	食用コスモス		
		－	食用シネラリア	フウキギク、サイネリア	
		－	食用ジャメスプリテニア		
		－	食用ストック		
		－	食用せんにちこう	千日紅	
		－	食用トルコギキョウ		
		－	食用トレニア		
		－	食用ナスタチウム	ノウゼンハレン、キンレンカ	
		－	食用なでしこ		
		－	食用パンジー		
		－	食用ヒメヒマワリ		
		－	食用プリムラ	食用さくらそう	
		－	食用フロックス		
		－	食用ベゴニア		
		－	食用ペチュニア		
		－	食用べにばな（花）		
		－	食用ペンタス		
		－	食用マーガレット		
		－	食用マリーゴールド		
		－	食用ミニバラ	食用バラ	
		－	食用モモイロタンポポ	クレビス	
		－	食用やぐるまぎく		花を収穫するもの（山野草のやぐるまそうとは別種）
		－	食用ラベンダー	イングリッシュ・ラベンダー	茎葉及び花を収穫するもの
		－	食用リナリア		花を収穫するもの
		－	食用ルドベキア	オオハンゴンソウ	
		－	花オクラ		
	－	－	アーティチョーク	ちょうせんあざみ	花蕾を収穫するもの
	－	－	あけび（茎葉）	キノメ	茎葉（若芽）を収穫するもの
	－	－	あまちゃ		茎葉を収穫するもの
	－	－	いちご	オランダイチゴ	果実を収穫するもの
	－	－	いちょう(葉)		葉を収穫するもの
	－	－	うめ（花）		花を収穫するもの（枝付きを含む）
	－	－	オクラ		果実を収穫するもの
	－	－	オリーブ（葉）		葉を収穫するもの
	－	－	ガーデンハックルベリー		果実を収穫するもの
	－	－	かき（葉）		葉を収穫するもの
	－	－	カモミール	カモマイル、カミツレ、ジャーマンカモミール、ローマンカモミール	花を収穫するもの
	－	－	ぎぼうし	うるい	茎葉を収穫するもの
	－	－	グアバ（葉）		葉を収穫するもの
	－	－	くこ（果実）	枸杞子（クコシ）	果実を収穫するもの
	－	－	くこ（葉）	枸杞葉（クコヨウ）	葉を収穫するもの
	－	－	くり（葉）		葉を収穫するもの
	－	－	クレソン	ウォータークレス	茎葉を収穫するもの
	－	－	くわい		塊茎を収穫するもの
	－	－	サフラン		めしべを収穫するもの
	－	－	さんしょう（葉）	木の芽	葉を収穫するもの
	－	－	じゅんさい		茎葉を収穫するもの
	－	－	食用アジアンタム		葉を収穫するもの
	－	－	食用アロエ	キュラソーアロエ、ケープアロエ	
	－	－	食用おやまぼくち		茎葉を収穫するもの
	－	－	食用かえで（葉）		葉を収穫するもの
	－	－	食用桑（葉）		
	－	－	食用月桂樹	ローリエ	
	－	－	食用さくら（葉）	さくら葉	
	－	－	食用さくら（花）		花を収穫するもの（枝付きを含む）
	－	－	食用サボテン	ウチワサボテン、ノパール	茎節を収穫するもの
	－	－	食用べにばな（茎葉）		茎葉を収穫するもの
	－	－	食用ほおのき（葉）		葉を収穫するもの
	－	－	たけのこ	マダケ、モウソウチク、ハチク、ねまがりだけ	若い稈を収穫するもの
	－	－	たらのき	たらのめ	新芽を収穫するもの
	－	－	チコリ	キクニガナ	茎葉（軟化させた 芽）を収穫するもの
	－	－	とちゅう（葉）		葉を収穫するもの

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備　考（収穫部位等）
野菜類	－	－	なんてん（葉）		葉を収穫するもの
	－	－	バニラ		果実を収穫するもの
	－	－	ひきおこし	えんめいそう	地上部全草を収穫するもの
	－	－	ひし		種子を収穫するもの
	－	－	びわ(葉)		葉を収穫するもの
	－	－	ふき（ふきのとう）	ふきのとう	ふきのとうを収穫するもの
	－	－	ほうきぎ	とんぶり、ほうきぐさ	胞果を収穫するもの
	－	－	まこもたけ	まこも	マコモクロホ菌の寄生により肥大したまこもの茎を収穫するもの
	－	－	みょうが（茎葉）	みょうがたけ	軟化させた茎葉を収穫するもの
	－	－	みょうが（花穂）	はなみょうが	花穂を収穫するもの
	－	－	もも（花）		花を収穫するもの（枝付きを含む）
	－	－	やぶかんぞう（茎葉）		茎葉を収穫するもの
	－	－	やまのいも（むかご）	ナガイモのむかご、ヤマノイモ（ジネンジョ）のむかご	むかご（肉芽）を収穫するもの
	－	－	ヤングコーン	ベビーコーン	とうもろこしの幼果（雌穂）を収穫するもの
	－	－	れんこん	はす	根茎を収穫するもの水系で栽培されるもの
	－	－	ローゼル		肥大した萼及び苞を収穫するもの
	－	－	わさび	みずわさび	葉、花茎、根茎及び根を収穫するもの。水系で栽培されるもの。
	－	－	わさび（根茎）	みずわさび	根茎を収穫するもの。水系で栽培されるもの。
きのこ類	－	－	えのきたけ		子実体（きのこ）を収穫するもの
			エリンギ	カオリヒラタケ	
			しいたけ		
			なめこ		
			ひらたけ		
			ぶなしめじ		
			まいたけ		
			マッシュルーム	ツクリタケ	
穀類	－	－	稲※	水稲（移植、直播）、陸稲	種子又は稲わらを収穫するもの
	麦類	－	えんばく※	オートムギ、エン麦、カラスムギ	種子を収穫するもの
			大麦※	二条種、六条種、はだか麦	
			小麦※		
			ライ麦※		
	ヒユ科雑穀類	－	アマランサス（種子）	ヒモゲイトウ、センニンコク、スギモリケイトウ、フジゲイトウ、繁穂ヒユ、種粒ヒユ	種子を収穫するもの
			キノア		
	イネ科雑穀類	－	あわ		
			きび		
			食用ソルガム※	もろこし、たかきび、こうりゃん	
			はとむぎ		
			ひえ		
	とうもろこし	－	とうもろこし（子実）		
			未成熟とうもろこし	スィートコーン	種子（ある程度成熟した雌穂）を収穫するもの
	－	－	そば	だったんそば	種子を収穫するもの
－	－	－	えごま（種子）		
－	－	－	えびすぐさ（種子）	ロッカクソウ	
－	－	－	キャラウエイ（果実）	ヒメウイキョウ	果実を収穫するもの
－	－	－	からしな(種子)		種子を収穫するもの
－	－	－	こしょう		果実を収穫するもの
－	－	－	ごま※		種子を収穫するもの
－	－	－	コリアンダー（果実）	コエンドロ	果実を収穫するもの
－	－	－	さとうきび		茎を採糖目的に収穫するもの
－	－	－	しそ（種子）		種子を収穫するもの
－	－	－	食用亜麻		
－	－	－	食用おおばこ（種子）	シャゼンシ	
－	－	－	食用べにばな（種子）		
－	－	－	食用綿実		
－	－	－	茶		新芽を収穫するもの
－	－	－	ディル（種子）		種子を収穫するもの
－	－	－	なたね※		
－	－	－	はぶそう（種子）		
－	－	－	ひまわり（種子）		
－	－	－	フェンネル（種子）	ういきょう（種子）	
－	－	－	ぺぽかぼちゃ（種子）		

大作物群	中作物群	小作物群	作物名	作物名に含まれる別名、地方名、品種名等の例	備　考（収穫部位等）
－	－	－	ホップ	セイヨウカラハナソウ	雌花穂を収穫するもの
飼料作物	牧草	－	いね科牧草	オーチャードグラス、チモシー、イタリアンライグラス、トールフェスク、ペレニアルライグラス、バヒアグラス	家畜飼料用に茎葉を収穫するもの
		－	まめ科牧草	赤クローバー、白クローバー、アルファルファ	
	－	－	飼料用えんばく		
	－	－	飼料用さとうきび		
	飼料用とうもろこし	－	飼料用とうもろこし（青刈り）		家畜飼料用に茎葉を収穫するもの
		－	飼料用とうもろこし（子実）		家畜飼料用に種子を収穫するもの
	－	－	ソルガム	スーダングラス	家畜飼料用に茎葉を収穫するもの

注１）
「小粒種ぶどう」は1 粒重量が1.5g 程度のぶどうをいい、「大粒種ぶどう」はこれより重いぶどうをいう。

巨峰系４倍体品種ぶどう
巨峰、ピオーネ、安芸クイーン、藤稔、サニールージュ、翠峰、黒王、ゴルビー、紫玉、シナノスマイル、高妻、多摩ゆたか、白峰、紅義、伊豆錦、出雲クイーン、イチキマール、ウエハラ５４０号、オーロラブラック、オリンピア、さがみ、ジャスミン、ダークリッジ、高墨、ハイベリー、ハニーブラック、ハニービーナス、ブラックオーパス、ブラックオリンピア、紅伊豆、紅瑞宝、紅富士、紅やまびこ、竜宝、レッドクイーン、ロードベリー、黄玉、天秀等

２倍体米国系品種ぶどう
アジロンダック、マスカットベリーA、バッファロー（アーリースチューベン）、ナイヤガラマラベルファ、ウルバナ、キャンベル、キャンベルアーリー、スチューベン、セイベル９１１０、セネカ、大玉露、タノレッド、旅路、ナイアガラ、紅金沢、紅塩谷、紅南陽、ポートランド、レッドポート、ピアレス、ニューヨークマスカット、ノースブラック、ノースレッド、バイオレットウエハラ、フレドニア、ヒムロッドシードレス等

２倍体欧州系品種ぶどう
瀬戸ジャイアンツ、ロザキ、マリオ、ロザリオビアンコ、ルビーオクヤマ、マスカットオブアレキサンドリア、シャインマスカット、ＣＧ８８４３５、アルフォンスラバレー、イタリア、甲斐乙女、甲斐路、カッタクルガン、カベルネソービニオン、グリーンサマー、クルガンローズ、ケニギンデルワインガルデン、甲州、甲州三尺、ゴールド、ゴールドフィンガー、ザバルカンスキー、シトロンネル、シャルドネ、赤嶺、セシリア、乍那、チェリー、京早晶、ニューナイ、ネオマート、ネオマスカット、ネヘレスコール、バラディ、ビーナス、ピッテロビアンコ、ブラックスワン、ブラック三尺、フレームトーケー、貝甲干、紅アレキ、紅三尺、紅環、ベニピッテロ、馬乃子、マスカット甲府、マスカットデュークアモーレ、マスカットハンブルグ、マスカットビオレ、マニキュア フィンガー、モルゲンシェーン、ヤトミローザ、ユニコーン、リザマート、リッシバーバ、竜眼、涼玉、ルーベルマスカット、ルビー大久保、レッドグローブ、レッドネヘレスコール、ローヤル、ロザリオロッソ、アリサ、黄華、紫苑、ヒロハンブルグ等

３倍体品種ぶどう
キングデラ、サマーブラック、甲斐美嶺、ナガノパープル、安芸シードレス、美嶺等

注２）
大作物群及び中作物群の豆類（種実）、豆類（未成熟）及びピーマン及びとうがらし類については、これら作物群に含まれるものとして作物名欄に標記されている作物以外のもので、これらの作物群に含まれる作物も含まれる。

10　薬剤の注意事項一覧

①薬害等の注意事項

アミスター20フロアブル	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤及び液肥は加用しない。
アミスターオプティフロアブル	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤は加用しない。薬害防止のため高温多湿時の散布、散布後高温が予想される場合は使用しない。連用は避ける。
オンリーワンフロアブル	はくさい、だいこんに対して薬害を生じる恐れがあるので、付近にある場合はかからないよう注意する。
ガードナーフロアブル	キャベツ、はくさい及びブロッコリーに使用する場合、葉に黄色斑点、葉緑の褐変等の薬害が生じる場合があるが、その後の生育に対する影響は認められない。
カスケード乳剤(なす)	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤は加用しない。品種「千両2号」、「みず茄子」には果実に薬害を生じるので使用しない。
カンタスドライフロアブル	高温条件や散布後急激に乾燥すると、葉焼けや日焼け果の発生を助長する恐れがあるので注意する。ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤及び液肥は加用しない。
コテツフロアブル(ほうれんそう)	葉に白化などの薬害を生じるおそれがあるので、必ず使用時期を守る。
シグナムWDG(なす)	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤及び液肥は加用しない。
ストロビーフロアブル	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤は加用しない。薬害防止のため高温多湿時の散布、散布後高温が予想される場合は使用しない。連用は避ける。
スミチオン乳剤	莢に薬害が出ることがあるので、着莢期までの使用が望ましい。また、殺菌剤との混用は薬害を助長するので避ける。
ダイアジノン乳剤40	莢に薬害が出ることがあるので、着莢期までの使用が望ましい。また、殺菌剤との混用は薬害を助長するので避ける。
ダイアジノン粒剤3	ウリ類幼苗期に薬害を生じることがあるので、施用量を厳守するなど十分注意する。
ダブルシューターSE	キャプタン水和剤およびストロビルリン系薬剤との同時施用及び近接散布は薬害が生じる恐れがあるので避ける。
ナティーボフロアブル	はくさい、だいこん、いちご、なしに対して薬害を生じるおそれがあるので、かからないよう注意して使用する。
ベネビアOD	ストロビルリン系の薬剤を含む農薬および銅剤との混用は、薬害を生じるおそれがあるため行わない。展着剤は薬害を生じる恐れがあるため加用しない。アルカリ性の農薬や肥料との混用は避ける。
ベルクート水和剤(メロン)	幼果期のメロンに対して薬害を生じる恐れがあるため、かからないよう注意して使用する。
ホライズンドライフロアブル(はくさい)	黄芯系などの葉肉の柔らかい品種には薬害を生じる場合があるので注意する。特に大福系品種には薬害を生じるので使用しない。
メジャーフロアブル	機能性展着剤を加用すると薬害を生じる恐れがあるので注意する。 キャベツ、はくさい、レタス、非結球レタス、ねぎに散布する場合、幼苗期は薬害のおそれがあるので使用を避ける。 たまねぎに使用する場合、幼苗期に散布すると薬害を生じるおそれがあり、生育初期に散布すると株の開帳や葉身部のわん曲の薬害を生じるおそれがあるので使用を避ける。高温条件下で葉先の退緑を生じるおそれがあるので使用を避ける。
モベントフロアブル	水稲にかかると不稔などの薬害を生じる場合があるので注意する。
モレスタン水和剤	ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤は加用しない。高温多湿時には薬害が出やすい。
フェスティバルC水和剤	きゅうり、はくさい、メロン、キャベツレタスに対して薬害を生じる恐れがあるため、中期以降の散布とし、高温期の散布は症状が激しくなることがあるので避ける。はくさいに使用する場合は、結球期以降の散布は薬害が生じる場合があるので使用を避ける。

②使用方法の注意事項

アクタラ顆粒水溶剤	セル成型育苗トレイ1箱(30×60cm・使用土壌約3～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
アドマイヤーフロアブル	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当たり0.5ℓ潅注
アベイル粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り40g
ｱﾙﾊﾞﾘﾝ/ｽﾀｰｸﾙ顆粒水溶剤(キャベツ)	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約3ℓ)当り0.5ℓ灌注
ｱﾙﾊﾞﾘﾝ/ｽﾀｰｸﾙ顆粒水溶剤(ﾌﾞﾛｯｺﾘｰ、ﾄﾏﾄ、ﾐﾆﾄﾏﾄ、ﾚﾀｽ、非結球ﾚﾀｽ、ﾈｷﾞ)	セル成型育苗トレイ1箱又は、ペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
オラクル顆粒水和剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約3～4ℓ)当たり0.5ℓ灌注
オリゼメート顆粒水和剤	セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊(約30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)あたり0.5ℓ灌注
ガードナーフロアブル	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
ガードホープ液剤	1㎡ 当り2ℓをじょうろなどを用いて均一に土壌灌注し、処理後は根系への薬剤の移動を促すため、早い時期に5～20ℓ/㎡灌水する。過剰量灌注により薬害を生じるので、施用量を厳守する。
キックオフ顆粒水和剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
ジュリボフロアブル	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当たり0.5ℓ灌注
スピノエース顆粒水和剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約3ℓ)当り0.5ℓ灌注。
ダントツ粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り50g
トリフミン水和剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm、使用土壌約5L)あたり0.5L
ディアナSC	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm・使用土壌約3～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
パレード20フロアブル(ｷｬﾍﾞﾂ、はくさい、ﾚﾀｽ、ねぎ、非結球ﾚﾀｽ)	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ潅注
プリロッソ粒剤オメガ	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り50g
プリンス粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約3～4ℓ)当り20～30g
プレバソンフロアブル5	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm、使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
プレバソン粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り50g
ベストガード粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り50g
ベリマークSC	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(約30×60cm、使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ灌注
ミネクトデュオ粒剤	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り40g
ヨーバルフロアブル(ｷｬﾍﾞﾂ、ﾌﾞﾛｯｺﾘｰ、はくさい、非結球ﾚﾀｽ)	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5～4ℓ)当り0.5ℓ潅注
ランマンフロアブル	セル成型育苗トレイ1箱又はペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約2.5～7ℓ)当り2ℓ潅注

③混用等注意事項

ダニオーテフロアブル	銅剤との混用は避ける。本剤散布後に銅剤を使用する場合は10日以上間隔を空ける。銅剤散布後は使用を避ける。
リーフガード顆粒水和剤	石灰硫黄合剤、ボルドー液とは混用しない。
ベリマークSC	アルカリ性の農薬や肥料との混用は避ける。

④同時施用注意事項

プリロッソ粒剤オメガ	石灰などのアルカリ性肥料との同時施用は避ける。

⑤薬剤選択の注意事項

パダンSG水溶剤・リーフガード顆粒水和剤	ネライストキシン(共通代謝物)を生成するため薬剤の選択に注意する。
トップジンM水和剤・ベンレート水和剤	カルベンダジム(共通代謝物)を生成するため薬剤の選択に注意する。

Ⅲ　作物別病害虫防除指針

（普通作）

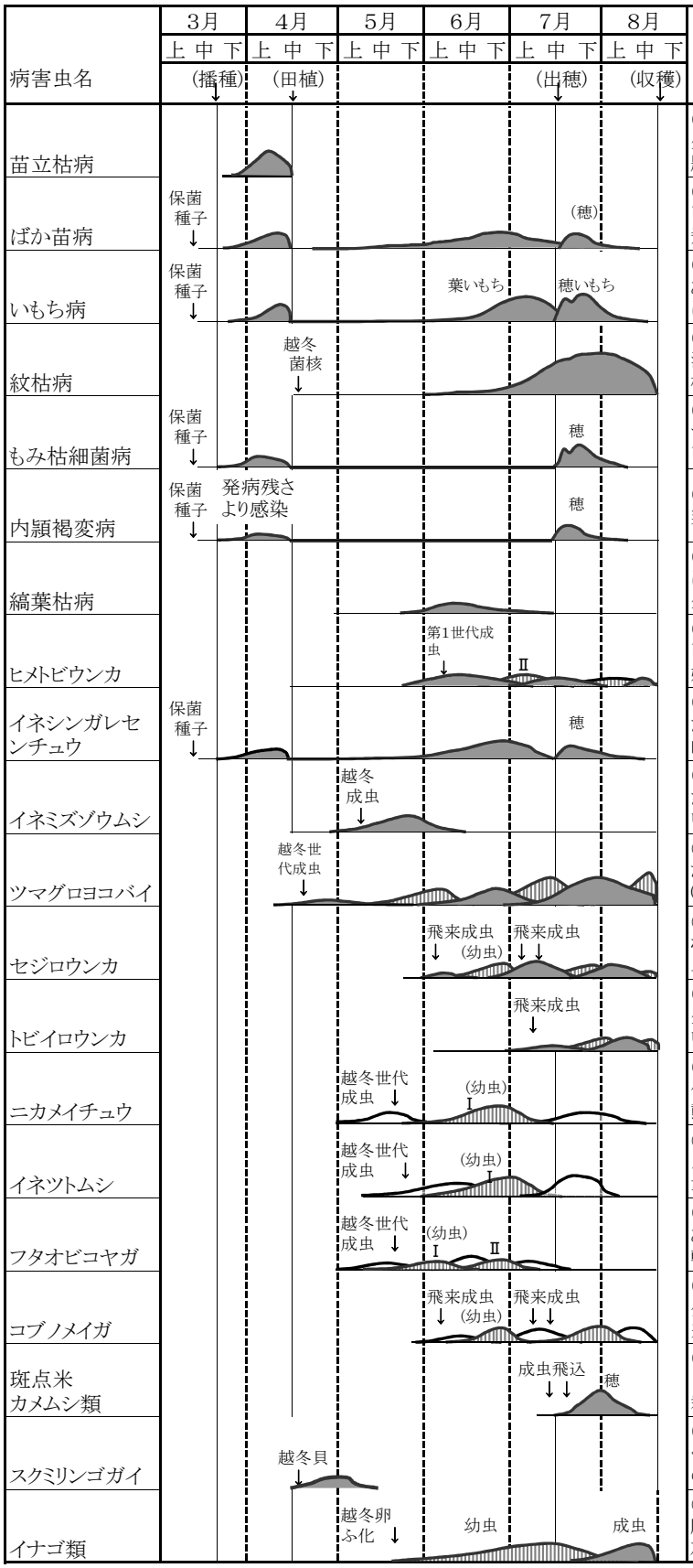
１　水　　稲

２　麦　　類

３　大　　豆

1　水稲病害虫防除指針

(1)　早期水稲における主要病害虫の発生消長と防除体系



病害虫名	発生(発病)の経過等
苗立枯病	○病原菌は数種類あるが、いずれも通常の土壌中等に広く生息している。育苗中の特別な条件下で発生し、田植後は問題にならない。
ばか苗病	○発生源の主体は保菌種子である。感染株は育苗中に徒長し、田植後は生育とともに順次枯死する。出穂後、枯死株から飛散した胞子が籾に感染する。
いもち病	○発生源は保菌種子、前年の発病イネ藁、隣接発病圃場である。苗での発病は葉いもちに、葉いもちは穂いもちの多少に影響を及ぼすので注意する。
紋枯病	○発生源は、前年の発病株にできた菌核である。田植後水に浮いた菌核が茎に付着し発病し、その後菌糸が伸び、隣接株、株上部へ発病が順次拡大する。
もみ枯細菌病	○発生源は保菌種子が主体である。育苗中に苗腐敗が発生する場合もある。田植後、無病徴だが菌はイネ体上で増殖し、出穂後の籾に感染し発病する。
内頴褐変病	○本田では枯死葉身上などで増殖を続け、出穂期に籾に感染し発病する。育苗中は無病徴である。
縞葉枯病	○ヒメトビウンカの第1世代成虫と第2世代幼虫(～7月下旬)による媒介が中心となる。早期栽培に比べ、早植え栽培は発生が多い。
ヒメトビウンカ	○発生源は、畦畔や休閑田等で幼虫越冬し、麦畑等で増殖した後の第1世代成虫が水稲に寄生する。なお、縞葉枯病の媒介以外では、直接吸汁害は問題にならない。
イネシンガレセンチュウ	○発生源の主体は保菌(虫)種子である。浸種後籾から泳ぎだし発芽後の芽に移動する。以降生長点で増殖し続け、最終的に籾に移動する。育苗中は無病徴である。
イネミズゾウムシ	○発生源は、周辺の畦畔、林地等の枯草や落葉下で越冬した成虫である。早期栽培に比べ早植栽培の方が被害は大きい。
ツマグロヨコバイ	○発生源は周辺の休閑田、畦畔雑草等で幼虫越冬し、発生した越冬世代成虫である。高密度になると吸汁被害が発生する(県内では本虫媒介の萎縮病は近年発生していない)。
セジロウンカ	○発生源は海外からの飛来虫である。早期栽培では発生は少ないが、早植栽培では通常(7月上旬)より早い時期の飛来(6月上旬頃)の影響も受けやや多発する場合がある。
トビイロウンカ	○発生源は海外からの飛来虫である。早期栽培で被害が発生することはまれで、早植栽培でも被害が発生することは少ない。
ニカメイチュウ	○発生源は、イネ株やイネ藁で幼虫越冬し、発生した越冬世代成虫である。早期、早植栽培地帯での発生時期はかなり変動している。
イネツトムシ	○発生源は、イネ科雑草等で幼虫越冬し発生した越冬世代成虫である。第1世代幼虫はだらだら発生する場合がある。発生量は通常は少ないが、圃場により多い場合もある。
フタオビコヤガ	○発生源は、イネ藁などで蛹越冬し発生した越冬世代成虫である。多発した平成15～17年は、早期、早植栽培での被害は軽微であった。
コブノメイガ	○発生源は海外からの飛来虫である。早期栽培では発生は少ないが、早植栽培では、通常(7月上旬)より早い時期の飛来の影響も受けやや多発する場合もある。
斑点米カメムシ類	○発生源は、圃場周辺の畦畔雑草、休耕田からの飛び込み(出穂前後より)による。籾が吸汁加害される。早期栽培、早植栽培での被害が多い。
スクミリンゴガイ	○発生源は、圃場で越冬した貝と水路等から新たに侵入してくる貝である。貝は落水期まで活動するが、イネが加害されるのは通常田植2～3週間後までである。
イナゴ類	○発生源は、畦畔等の土中に産まれた越冬卵。畦畔雑草から順次水田に侵入する。発生圃場は限られるが、最近発生が増加傾向にある。

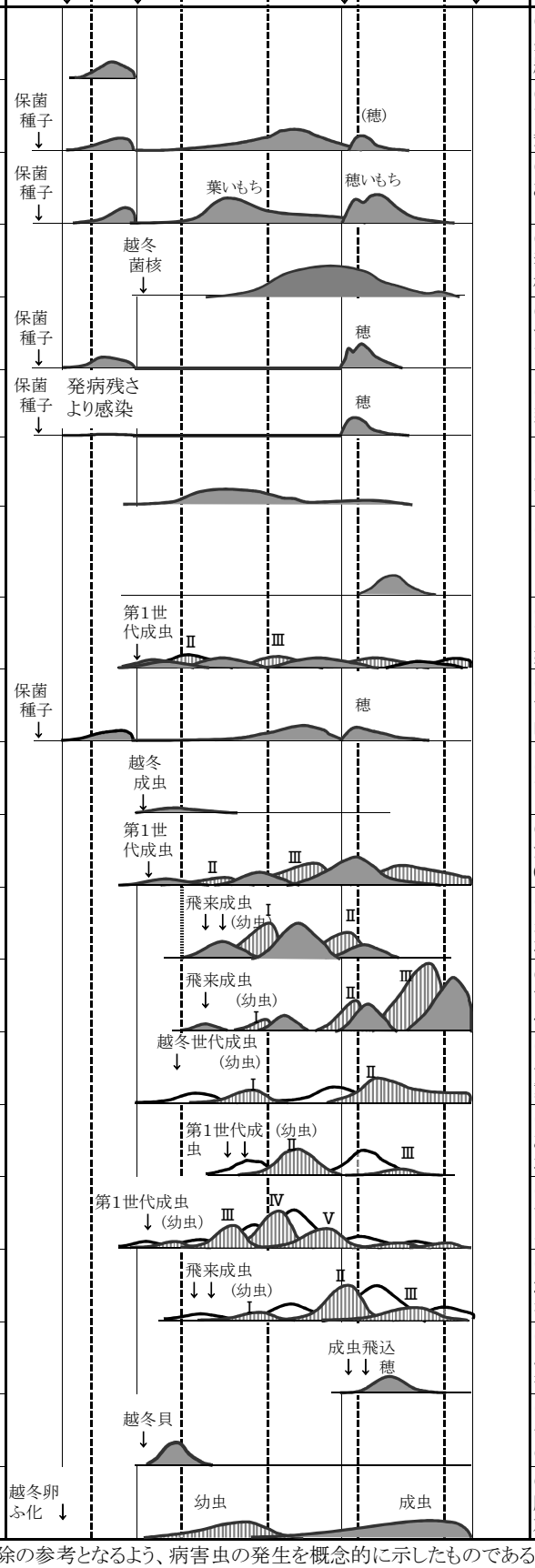
注:この図は、防除の参考となるよう、病害虫の発生を概念的に示したものである。実際の発生は、圃場観察を行い把握する。
各病害虫が発生する条件で、かつ防除対策未実施の場合を示しており、防除等で以降の発生は変化することにも留意する。
病害: ◢◣ 病勢進展時期。　害虫: ◢◣ 加害時期 (◢◣ は加害幼虫 世代、 ◠ は加害しない成虫世代)。
害虫欄の数字(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、･･･)は、それぞれ世代(第1世代、第2世代、第3世代、･･･)を示す。

（防除体系：早期栽培）

病害虫名	3月 上 中 下	4月 上 中 下	5月 上 中 下	6月 上 中 下	7月 上 中 下	8月 上 中 下	備　　考
	(播種)↓	(田植)↓			(出穂)↓	(収穫)↓	
苗立枯病							育苗箱に対する薬剤処理(苗立枯病の防除法P50参照)。
ばか苗病	□						□種子消毒の効果は高い(イネばか苗病の防除法P52参照)。 発病後の防除法はない。
いもち病	□	■		((◎-)) ◎-* ((-○ -)) -○* -			■箱施用剤の効果は高く、いもち病常発地域では重要である。 (((◎)))は発病前～発病初め。(((○)))は発病初期。 ◎*は幼穂形成期～穂ばらみ期。○*は穂ばらみ期～傾穂期。
紋枯病		(■)		(-◎)	○- -)		これまでの発生状況から、「箱施用」、「箱施用+本田防除」、「本田防除」を選択する。 ◎は出穂30～20日前。○は最高分げつ期～穂揃期。
もみ枯細菌病	(□)			(-◎-)	(-○--)		防除が困難な細菌性病害であり、総合的な防除対策が必要である(イネもみ枯細菌病の防除法P54参照)。
内頴褐変病					(-○--)		○は穂ばらみ期～乳熟期散布。ただし、防除の困難な細菌性病害であるため、安定的な防除効果は得られにくい。
縞葉枯病							媒介虫であるヒメトビウンカの防除。
ヒメトビウンカ		■					■箱施用剤の効果はかなり高い(剤により効果差あり)。
イネシンガレセンチュウ	□						□種子消毒の効果は極めて高い。 (本圃では、効果の安定した防除法はない。)
イネミズゾウムシ		(■)	((-◎--))				発生は、基本的には前年までの発生地域。 ■箱施用剤の効果は高い。 ◎は成虫の発生時。
ツマグロヨコバイ		■		((○- - -))			■箱施用剤の効果は高い(剤により効果差あり)。 ○は成虫、幼虫発生時。
セジロウンカ		(■)		((○- - -))			■早期栽培では必要な年は少ないが、早植栽培では有効な年が多い(剤により効果差はある)。 ○は成虫、幼虫発生時。
トビイロウンカ						(○)*	早期栽培では通常は防除不要。 早植栽培でも、防除の必要な年は少ない。 ○*は早植栽培で、坪枯れ発生の恐れがある時。
ニカメイチュウ		(■)					■箱施用剤の効果は高い。
イネツトムシ		(■)		((○-))			■箱施用剤の効果は高い。早期、早植栽培では、被害は少ない場合が多いが、発生地では有効。 ○は幼虫発生初期。
フタオビコヤガ		(■)	((○---))				■箱施用剤の効果は高い。早期、早植栽培では、通常発生は少ないが、発生が多い場合には有効。 ○は幼虫が増加しはじめた時。
コブノメイガ		(■)			(- ○)		■早植栽培で、早い時期に飛来がある年は有効。 ○は成虫発生ピークの7～10日後。
斑点米カメムシ類					(-◎) (--○- -)		箱施用剤の効果は不十分であるため、本田防除で対応する。 ◎は出穂7日後頃。 ○は出穂10～14日後。イネカメムシによる不稔を防ぐには出穂期に行う(粒剤ではその5日前)。
スクミリンゴガイ		(◎)					発生は前年発生地域およびその関係水系域。 ◎本田防除は、一定の効果を示す(スクミリンゴガイの防除法の項P54参照)。
イナゴ類		(■)		((○- - -))			■箱施用剤の効果は高い。早期、早植栽培では、被害は少ない場合が多いが、発生地では有効。 ○は幼虫発生増加期。

注:□は種子消毒、■は育苗箱施用。本田防除剤は、◎-は粒剤、○-は粉剤(又は液剤)で、その都度どちらかを選定する。
なお、各剤とも該当病害虫に登録のある薬剤が前提となる。
( )、(( ))は前年まで及び本年の発生状況により判断するが、 (( ))は該当の箱施用を行っていれば不要となる場合が多い。
本体系は基本的な発生状況を想定して組立てたものであり、実際の体系は、各地の実情を反映させたものとする。
薬剤の飛散にも配慮し、箱施用を中心に組立てたが、箱施用剤は剤により効果の持続期間等が異なる点にも留意する。

(2)　普通期水稲における主要病害虫の発生消長と防除体系



病害虫名	発生(発病)の経過等
苗立枯病	○病原菌は数種類あるが、いずれも通常の土壌中等に広く生息している。育苗中の特別な条件下で発生し、田植後は問題にならない。
ばか苗病	○発生源の主体は保菌種子である。感染株は育苗中に徒長し、田植後は生育とともに順次枯死する。出穂後、枯死株から飛散した胞子が籾に感染する。
いもち病	○発生源は保菌種子、前年の発病イネ藁、隣接発病圃場である。苗での発病は葉いもちに、葉いもちは穂いもちの多少に影響を及ぼすので注意する。
紋枯病	○発生源は、前年の発病株にできた菌核である。田植後水に浮いた菌核が茎に付着し発病し、その後菌糸が伸び、隣接株、株上部へ発病が順次拡大する。
もみ枯細菌病	○発生源は保菌種子が主体である。育苗中に苗腐敗が発生する場合もある。田植後、無病徴だが菌はイネ体上で増殖し、出穂後の籾に感染し発病する。
内頴褐変病	○本田では枯死葉身上などで増殖を続け、出穂期に籾に感染し発病する。育苗中は無病徴である。
縞葉枯病	○ヒメトビウンカの第2世代幼虫(6月下旬～)と第2世代成虫・第3世代幼虫(～8月中旬)による媒介が中心となる。
稲こうじ病	○発生源の主体は土壌中に残存し、前年の発病穂の病粒上に形成された菌核及び厚壁胞子である。幼穂形成期の頴内に菌糸が侵入・感染し出穂後に発病する。
ヒメトビウンカ	○発生源は、畦畔や休閑田等で幼虫越冬し、麦畑等で増殖した後の第1世代成虫が水稲に寄生する。なお、縞葉枯病の媒介以外では、直接吸汁害は問題にならない。
イネシンガレセンチュウ	○発生源の主体は保菌(虫)種子である。浸種後籾から泳ぎだし発芽後の芽に移動する。以降生長点で増殖し続け、最終的に籾に移動する。育苗中は無病徴である。
イネミズゾウムシ	○発生源は、周辺の畦畔、林地等の枯草や落葉の下で越冬した成虫である。通常は普通期栽培での被害は小さい。
ツマグロヨコバイ	○発生源は周辺の休閑田、畦畔雑草等で幼虫越冬し、発生した越冬世代成虫である。高密度になると吸汁被害が発生する(県内では本虫媒介の萎縮病は近年発生していない)。
セジロウンカ	○発生源は海外からの飛来虫である。発生の時期、量は飛来状況に左右される。被害は、飛来成虫と次世代(第1世代)幼・成虫によるものが中心となる。
トビイロウンカ	○発生源は海外からの飛来虫である。飛来量は少ないが、秋まで増殖を繰り返し(3世代)、8月下旬以降に坪枯れ被害を生じる。発生は飛来量、飛来後の天候に左右される。
ニカメイチュウ	○発生源は、イネ株やイネ藁で幼虫越冬し、発生した越冬世代成虫である。早期、早植栽培地帯での発生時期はかなり変動している。
イネツトムシ	○発生源は、近隣の早期栽培等で発生した第1世代成虫である。被害は第2世代幼虫(8月上・中旬)が中心で、第3世代幼虫の被害は少ない。
フタオビコヤガ	○発生源は早期栽培等で1世代経過した後の第1世代成虫である。平成15～17年東予中心に、7月下旬～8月中旬(第3、4世代幼虫)多発した。
コブノメイガ	○発生源は海外からの飛来虫である。周辺の早期栽培田等からの再飛来も重要な発生源となる。発生時期・量は飛来状況に左右される。
斑点米カメムシ類	○発生源は圃場周辺の畦畔雑草、休耕田からの飛び込みによる。早期栽培等からの再飛来も重要な発生源となる。出穂後より籾を吸汁加害する。
スクミリンゴガイ	○発生源は、圃場で越冬した貝と水路等から新たに侵入してくる貝である。貝は落水期まで活動するが、イネが加害されるのは通常田植2～3週間後までである。
イナゴ類	○発生源は、畦畔等の土中に産まれた越冬卵。畦畔雑草から順次水田に侵入する。発生圃場は限られるが、最近発生が増加傾向にある。

注:この図は、防除の参考となるよう、病害虫の発生を概念的に示したものである。実際の発生は、圃場観察を行い把握する。
各病害虫が発生する条件で、かつ防除対策未実施の場合を示しており、防除等で以降の発生は変化することにも留意する。
病害: 病勢進展時期。　害虫: 加害時期 (は加害幼虫世代、 は加害しない成虫世代)。
害虫欄の数字(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、…)は、それぞれ世代(第1世代、第2世代、第3世代、…)を示す。

（防除体系：普通期栽培）

病害虫名	5月 上 中 下	6月 上 中 下	7月 上 中 下	8月 上 中 下	9月 上 中 下	10月 上 中 下	備　　考
	（播種）↓	（田植）↓		（出穂）↓		（収穫）↓	
苗立枯病							育苗箱に対する薬剤処理（苗立枯病の防除法P50参照）。
ばか苗病	□						□種子消毒の効果は高い（イネばか苗病の防除法P52参照）。 発病後の防除法はない。
いもち病	□	■	((◎))(◎–)* ((○ ---)) (○–)*				■箱施用剤の効果は高く、いもち病常発地域では重要である。 (((◎)))は発病前～発病初め。((○))は発病初期。 (◎)*は幼穂形成期～穂ばらみ期。(○)*穂ばらみ期～傾穂
紋枯病		(■)		(◎) (---○)			過去および本年の発生状況から、「箱施用」、「箱施用+本田防除」、「本田防除」を選択する。 ◎は出穂30～20日前。○は最高分げつ期～穂揃期。
もみ枯細菌病	(□)			(– ◎–) (○)			防除が困難な細菌性病害であり、総合的な防除対策が必要である(イネもみ枯細菌病の防除法P54参照)。
内頴褐変病				(○)			○は穂ばらみ期～乳熟期散布。ただし、防除の困難な細菌性病害であるため、安定的な防除効果は得られにくい。
縞葉枯病							県下での発生は、やや目立つ地域が増えている。 媒介虫であるヒメトビウンカの防除（～8月中旬）。
稲こうじ病		■		(○) (◎)			近年、県下での発生は増加している。 8月の天候不順により感染が増加するので出穂20日～10日前に防除する。粒剤はやや早めの散布が効果的
ヒメトビウンカ		■					■箱施用剤の効果はかなり高い（剤により効果差あり）。
イネシンガレセンチュウ	□						□種子消毒の効果は極めて高い。 →本圃では、効果の安定した防除法はない。
イネミズゾウムシ		(■)					普通期栽培では、発生は少なくほとんど問題とならない。
ツマグロヨコバイ		■		((--○--- –))			■箱施用剤の効果は高い（剤により効果差あり）。 ○は成虫、幼虫発生時。
セジロウンカ		■	(((◎--)) ((–○-- – –))				■箱施用剤の効果は高い（剤により効果差あり）。 ◎、○は成虫・幼虫多発生時。
トビイロウンカ		■		◎---◎ –○–	(○--)*		箱施用の効果は高い（剤により効果差あり）。 ◎、○は飛来量が多く、かつ飛来時期が早い場合に実施。 (○)*は、坪枯れの発生が予想される場合。
ニカメイチュウ		(■)					■箱施用剤の効果は高い。発生地帯では有効。
イネツトムシ		■	((◎)) ((○–))				■箱施用剤の効果は高い。 ◎は成虫飛来ピーク～孵化幼虫出現初め。 ○は幼虫発生初期。
フタオビコヤガ		(■)	((○ -----))				■箱施用剤の効果は高い（剤により効果差あり）。 ○は幼虫が増加しはじめた時。
コブノメイガ		■	((○))	(◎–) (–○–)	○ *		■箱施用剤は有効だが、8月の防除も必要な場合が多い ◎は成虫発生ピーク時。○は成虫発生ピークの7～10日後。 ○*は止葉～第2葉の被害が多いと予想される場合
斑点米カメムシ類				(–◎–) (–○--)			箱施用剤の効果は高くないため、本田防除が重要。 ◎は出穂7日後頃。○は出穂10～14日後（多発時はさらに7～10日後に防除）。イネカメムシによる不稔を防ぐには出穂期に行う（粒剤ではその5日前）。
スクミリンゴガイ		(◎)					発生は前年発生地域とその周辺。 ◎本田防除は、一定の効果を示す（スクミリンゴガイの防除法の項P54参照）。
イナゴ類		(■)	((○ -----))				■箱施用剤の効果は高い。 ○は成虫発生初期。

注：□は種子消毒、■は育苗箱施用。本田防除剤は、◎–は粒剤、○–は粉剤(又は液剤)で、その都度どちらかを選定する。
なお、各剤とも該当病害虫に登録のある薬剤が前提となる。
( )、(( ))は前年まで及び本年の発生状況により判断するが、 (( ))は該当の箱施用を行っていれば不要となる場合が多い。
本体系は基本的な発生状況を想定して組立てたものであり、実際の体系は、各地の実情を反映させたものとする。
薬剤の飛散にも配慮し、箱施用を中心に組立てたが、箱施用剤は剤により効果の持続期間等が異なる点にも留意する。

（３）水稲主要病害虫の発生程度と被害の関係及び防除の目安

病害虫	要 防 除 密 度 等	発 生 程 度 と 被 害
いもち病	【葉いもち】条件により病勢が急速に進展するため、要防除密度は明らかでない。初発の早晩、病斑が急性型か慢性型か、気象動向（長雨等）などに注意し病勢の進展が予想される場合には防除が必要となる。 【穂いもち】発病すると、直接減収に結びつくため手遅れになるので予防的に防除を行う。出穂25～35日前以降に形成された葉いもち病斑が伝染源になるが、発病は、気象要因、病原菌の動向、イネの体質、品質などが複合的に関与するため、はっきりした要防除密度は設定されていない。	**◎収量** 【葉いもち】12葉齢期（最高分げつ期）の罹病葉率が10%を越すと収量に対する影響（減収）が大きくなる。 【穂いもち】穂ぞろい後30日目の穂いもち(穂首いもち＋枝梗いもち)の罹病率(罹病穂率を罹病程度別に集計)で、10%を越すと収量に対する影響がはっきりしてくる。 **◎品質** 【葉いもち】発病葉率と青米の発生とは関係は無い。茶米、奇形米の発生とは高い相関がある。 【穂いもち】穂首いもち罹病率10%増加で上米率３%減少。茶米、奇形米の発生とは有意な相関はない。
紋 枯 病	普通期栽培で、穂ばらみ期の発病株率15～20%（早期栽培等ではこれより低い）。 ただし、登熟後期の病勢の進展が予想される場合には追加防除が必要となる。	止葉から下位の３葉の葉鞘に病斑があらわれる場合、収量に影響する（普通期栽培で止葉に病斑を生じると18.3%、次葉では12.0%、第３葉では8.9%の減収率となる）。 減収量（kg）＝ $(41.31\times\text{病斑高率}-826.2)\times\dfrac{\text{発病株率}}{1000}$ 注：$\text{病斑高率}=\dfrac{\text{最上位病斑高}}{\text{草丈}}\times 100$
も み 枯細 菌 病	実用的なものはまだ確立されていない。	稔実歩合、登熟歩合が低下。出穂25日後の病穂率、病籾率と減収率の関係は 減収率（%）＝0．567×病穂率－1．459　または 減収率（%）＝0．732×病籾率－0．221 （本回帰式で５%減収を求めると病穂率で約11%、病籾率で約7%となる。） ただし、本病によって起きる品質低下（変色米の発生）の割合と、発病程度の解析はされていない。
縞葉枯病	媒介虫であるヒメトビウンカの発生量と保毒虫率に加えてイネの生育ステージ等も関係する。 ・第１世代成虫（５月下旬～６月下旬） ：保毒虫率２%で、0.25頭/株 ：保毒虫率20%で、0.01～0.02頭/株 ・第２世代成虫（７月上旬～下旬） ：保毒虫率20%で、株当たり３頭程度	
イネミズゾウムシ		越冬成虫の密度が、0.25頭／株で収量に対する被害が出始め、0.5頭／株で５%の減収（育苗箱処理をしない場合）。
ツマグロヨコバイ	出穂期の成虫密度で30頭／株。	本虫は吸汁による直接害のほか、萎縮病を媒介するが、この点の本田での要防除密度はまだ明らかにされていない。なお、萎縮病の発病株率と減収の関係は次のとおり。 発病株率（%）　減収率（%） 10　1.7 20　4.3 30　7.7 40　12.0
セジロウンカ	普通期栽培の場合、７月上旬の飛来成虫の密度は、10頭/株。	
トビイロウンカ	普通期栽培では、1圃場当たり10株払落し調査を2か所実施する。 7月下旬から8月上旬にかけて、成幼虫数が0.1頭/株 8月中旬から8月下旬にかけて、成幼虫数が3～5頭/株	いずれも、要防除密度に達した圃場では即時防除する。
イネツトムシ （イチモンジセセリ）	第２世代の１齢幼虫が３頭/株。 （普通期栽培では、７月下旬～８月初めの時期の、葉先１cm程度を切ってできる小さいツト数で３個。） 防除時期は、若齢幼虫期（薬剤の効果）。	幼穂形成期～穂ばらみ期のツト数（蛹に成長したもの）が0.85～2.1個/株の場合に５%の減収。
コブノメイガ	飛来次世代の幼虫による被害の発生程度（飛来２週間後頃：一般に７月中・下旬～８月上旬頃）および成虫の発生状況（飛来１ヶ月：８月上～中旬）により、その次の世代の幼虫の発生の時期、おおよその発生量を予想する。はっきりした要防除密度は明らかになっていない。 防除時期は若令幼虫期（薬剤の効果）	出穂期における被害葉率と減収率の関係は次のとおり。 被害葉率（%）　減収率（%） 70　15 50　10 30　5 10　2
斑点米カメムシ類	穂揃期～乳熟期の捕虫網による20回すくい取り個体数で 大型種で１頭、小型種で３頭。	斑点米形成能力は、カメムシの種類、性別や発育ステージ、イネ品種、加害される時期等によって異なる。 ○斑点米カメムシ１日1頭当たりの斑点米形成数 乳熟期　糊熟期　黄熟期 大型種（ホソハリカメムシ）　0.50～0.82粒　0.94粒　0.6～1.3粒 大型種（クモヘリカメムシ）　0.58～0.71粒　0.97粒　0.13～0.7粒 小型種（アカスジカスミカメ）　0.56粒　2～2.5粒　－
スクミリンゴガイ	殻高25㎜のスクミリンゴガイ　1.5個/㎡ （出典：農研機構九州沖縄農業研究センター）	田植直後の密度（殻高25㎜の貝）　2頭／㎡で14%減収 2.5頭／㎡で34%減収 3頭／㎡で60%減収
イナゴ類	穂ばらみ期～出穂期の捕虫網による20回すくい取りで100頭以上。	出穂期～成熟期の放飼試験において、株当たり0.8 匹の放飼で約５%の減収。

（4）水稲病害虫防除法

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
いもち病	（防除上のポイント） ○育苗時には播種したもみを露出させないように覆土量を確保する。 ○育苗時には多湿条件とならないように管理する。 ○苗いもちと葉いもちに対しては早期防除を励行する。 ○中間山地等のいもち病常発地では本病に適用のある箱処理剤を必ず施用する。 ○抵抗性誘導剤（一般名：プロベナゾール、イソチアニル、チアジニル）は効果発現までに一定の期間を要し、発病後の施用では十分な防除効果が望めない。 ○葉いもち発病後は、ブラシン、ノンブラス剤の効果が大きい。 ○「MBI－D剤耐性いもち病菌」の発生と防除対策の項参照。 ○「QoI剤耐性いもち病菌」の発生と防除対策の項参照。	○窒素質肥料の過用を避ける。 ○育苗時の厚播き、遅播き、本田の密植、深植え、晩植えを避ける。 ○抵抗性品種の利用。 ○冷水灌漑、深水、乾燥を避け、落水を早めないようにする。 ○置き苗が放置されると葉いもちの伝染源となるので補植作業の終了後は、速やかに適正処分する。 ○ケイ酸質資材施用。被害わら、被害もみ殻を処分する。	は種前			種子消毒法の項参照						
			田植前			箱施用（育苗箱）における薬剤施用法の項参照						
			苗いもち		24	カスミン液剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	4～8倍/500ml/箱	覆土前	1回	普	○	
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	500～1,000倍	は種時～は種14日後まで	2回以内	普	△	○ 使用方法(注)
			葉いもち（分げつ期～幼穂形成期）			**○菌糸侵入阻止(感染防止)効果主体の薬剤**							
						【粉剤】							
					16.1	ビーム粉剤DL	1:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					16.1	ラブサイド粉剤DL	1:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
						【液剤】							
					16.1	ビームゾル	1:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	○	
					16.1	ラブサイドフロアブル	1:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
			穂いもち 粒剤（幼穂形成期～穂ばらみ期）		6	フジワン乳剤	1:ｲｿﾌﾟﾛﾁｵﾗﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	○ 治療効果有※1
						【粒剤】							
					6	フジワン粒剤	1:ｲｿﾌﾟﾛﾁｵﾗﾝ	3～5kg/10a	葉いもちに対しては初発7～10日前 穂いもちに対しては出穂10～30日前 但し、収穫30日前まで	2回以内	普	△	○ 治療効果有※1
					6	フジワン1キロ粒剤	1:ｲｿﾌﾟﾛﾁｵﾗﾝ	1～1.5kg/10a	葉いもちに対しては初発7～10日前 穂いもちに対しては出穂10～30日前 但し、収穫30日前まで	2回以内	普	△	○ 治療効果有※1
			粉剤・液剤（穂ばらみ期～出穂10～15日後）		6	フジワンパック	1:ｲｿﾌﾟﾛﾁｵﾗﾝ	小包装(ﾊﾟｯｸ)10～15個(750～1125g)/10a	葉いもちに対しては初発7～10日前 穂いもちに対しては出穂10～30日前 但し、収穫14日前まで	2回以内	普	△	○ 治療効果有※1
					16.1	コラトップ粒剤5	1:ﾋﾟﾛｷﾛﾝ	3～4kg/10a	葉いもちに対しては初発10日前～初発時、穂いもちに対しては出穂30日前～5日前まで	2回以内	普	△	
					16.1	コラトップ1キロ粒剤12	1:ﾋﾟﾛｷﾛﾝ	1～1.5kg/10a	葉いもちに対しては初発10日前～初発時、穂いもちに対しては出穂30日前～5日前まで	2回以内	普	△	
					16.1	コラトップジャンボP	1:ﾋﾟﾛｷﾛﾝ	小包装(ﾊﾟｯｸ)10～13個(500～650g)/10a	葉いもちに対しては初発20日前～初発時、穂いもちに対しては出穂30日前～5日前まで	2回以内	普	△	
					16.1	コラトップ豆つぶ	1:ﾋﾟﾛｷﾛﾝ	250～375g/10a	葉いもちに対しては初発10日前～初発時、穂いもちに対しては出穂30日前～5日前まで	2回以内	普	○	
					16.3	ゴウケツ粒剤	1:ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ	3～4kg/10a	出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで)	1回	普	○	
					16.3	ゴウケツパック	1:ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ	小包装(ﾊﾟｯｸ)10個(450g)/10a	出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで)	1回	普	○	
					16.3	サンブラス粒剤	1:ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ	3～4kg/10a	出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで)	1回	普	○	
					16.3	サンブラスパック	1:ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ	小包装(ﾊﾟｯｸ)10個(450g)/10a	出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで)	1回	普	○	

(注):ベンレート水和剤の使用方法：育苗箱（30×60×3cm，使用土壌約5ℓ）1箱当り500ml。

※1：フジワンは菌糸侵入阻止（感染防止）効果が主体であるが、菌糸生育阻止（治療）効果も有する。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
いもち病			〔抵抗性誘導剤〕										
			葉いもち （分げつ期～幼穂形成期		P2	オリゼメート粒剤	1:ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ	3～4kg/10a	葉いもちには初発の10日前～初発時　穂いもちには出穂3～4週間前(但し収穫14日前まで)	2回以内	普	△	
					P3	ルーチン粒剤	1:ｲｿﾁｱﾆﾙ	1kg/10a	収穫30日前まで	2回以内	普	○	
			穂いもち粒剤 （幼穂形成期～穂ばらみ期		P3	ブイゲット粒剤	1:ﾁｱｼﾞﾆﾙ	3kg/10a	葉いもちの初発20～7日前（但し、収穫45日前まで）	2回以内	普	△	
						○菌糸生育阻止（治療）効果主体の薬剤							
						【液剤】							
					24	カスミン液剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	穂揃期まで	2回以内	普	○	
						○菌糸侵入阻止（感染防止）と菌糸生育阻止（治療）効果を有する薬剤							
						【粉剤】							
			粉剤・液剤 （穂ばらみ期～出穂10～15日後		U14+16.1	ブラシン粉剤DL	1:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ2:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					16.1+U14	ノンブラス粉剤DL	1:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ2:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					U16	トライ粉剤DL	1:ﾃﾌﾟﾌﾛｷﾝ	3～4kg/10a	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
						【液剤】							
					U14+16.1	ブラシンフロアブル	1:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ2:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					16.1+U14	ノンブラスフロアブル	1:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ2:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					24+16.1	ダブルカットフロアブル	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ	1,000倍	穂揃期まで	2回以内	普	○	
					U16	トライフロアブル	1:ﾃﾌﾟﾌﾛｷﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
						上記薬剤及びその混合剤（登録に留意）							
紋枯病	（発生の特徴） ○菌核で越冬し翌年の伝染源となる。 ○菌核は水面に浮上したあと風などで移動するため圃場周縁部の発生が多くなる。 ○高温または多湿で発病が助長される。 （防除上のポイント） ○薬剤が発病部位の株元にかかるように散布する。 ○強風が吹く地帯では、倒伏防止のために防除を徹底する。	○窒素質肥料の過用を避ける。 ○一株植付本数を多くしない。 ○過剰分げつを避ける。	田植前			箱施用（育苗箱）における薬剤施用法の項参照							
			最高分げつ期～穂揃期			**○菌糸侵入阻止(感染防止)効果主体の薬剤**							
						【粉剤】							
					20	モンセレン粉剤DL	1:ﾍﾟﾝｼｸﾛﾝ	3～4kg/10a	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 使用方法(注)
						○病徴進展阻止(治療)効果主体の薬剤							
						【粉剤】							
					U18	バリダシン粉剤DL	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	3～4kg/10a	収穫14日前まで	5回以内	普	○	
						【液剤】							
					U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	
						○菌糸侵入阻止（感染防止）と病徴進展阻止（治療）効果を有する薬剤							
						【粉剤】							
					7	モンカットファイン粉剤20DL	1:ﾌﾙﾄﾗﾆﾙ	3～4kg/10a	収穫14日前まで	4回以内	普	△	
						【液剤】							
					7	モンカット水和剤	1:ﾌﾙﾄﾗﾆﾙ	1,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△	
					7	モンカットフロアブル40	1:ﾌﾙﾄﾗﾆﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△	
					7	バシタック水和剤75	1:ﾒﾌﾟﾛﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					20	モンセレンフロアブル	1:ﾍﾟﾝｼｸﾛﾝ	1,500倍	収穫21日前まで	4回以内	普	○	○ 使用方法(注)
						【粒剤】							
					7	リンバー粒剤	1:ﾌﾗﾒﾄﾋﾟﾙ	3～4kg/10a	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					7	リンバー1キロ粒剤	1:ﾌﾗﾒﾄﾋﾟﾙ	1kg/10a	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					7	モンカット粒剤	1:ﾌﾙﾄﾗﾆﾙ	3～4kg/10a	出穂30～10日前 但し、収穫14日前まで	4回以内	普	△	
					3	モンガリット粒剤	1:ｼﾒｺﾅｿﾞｰﾙ	3～4kg/10a	収穫30日前まで	2回以内	普	○	
						上記薬剤及びその混合剤（登録に留意）							

(注):モンセレンは、菌糸進入阻止（感染防止）効果主体であるが、病徴進展阻止（治療）効果も有する。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
白葉枯病	(防除上のポイント) ○薬剤防除だけでは、限界があるので、耕種的防除を励行する。 ○止葉の抽出期までの防除効果が高い。	○抵抗性品種の利用。 ○浸冠水防止する。 ○窒素質肥料の過用を避ける。 ○病原菌の越冬場所となるサヤヌカグサを除草する。	出穂3～4週間前		P2	【粒剤】 オリゼメート粒剤	1:ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ	3～4kg/10a	移植活着後及び出穂3～4週間前但し、収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					P3	ブイゲット粒剤	1:ﾁｱｼﾞﾆﾙ	3kg/10a	葉いもちの初発20～7日前(但し、収穫45日前まで)	2回以内	普	△	
					P3	ルーチン粒剤	1:ｲｿﾁｱﾆﾙ	1kg/10a	収穫30日前まで	2回以内	普	○	
						上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)							
もみ枯細菌病	(発生の特徴) ○穂ばらみ期～乳熟期の高温で発病が助長される。 (防除上のポイント) ○もみ枯細菌病防除法の項参照。	○発生圃場から採種しない。 ○塩水選を行う。 ○出芽時の温度を30℃以下に保つ。 ○被害わらやもみ殻は堆肥化するか年内に腐熟させる。	は種前			種子消毒法の項参照 本田施用剤は激発時には効果が劣ることがある。							
			出穂3～4週間前		P2	【粒剤】 オリゼメート粒剤	1:ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ	3～4kg/10a	移植活着後及び出穂3～4週間前但し、収穫14日前まで	2回以内	普	△	
			出穂30～5日前		16.1	【粒剤】 コラトップ豆つぶ	1:ﾋﾟﾛｷﾛﾝ	375g/10a	出穂30～5日前まで	2回以内	普	○	
					16.1	コラトップ粒剤5	1:ﾋﾟﾛｷﾛﾝ	4kg/10a	出穂30～5日前まで	2回以内	普	△	
			出穂5日前まで		16.3	ゴウケツ粒剤	1:ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ	3～4kg/10a	出穂5日前まで(但し収穫30日前まで)	1回	普	○	
					16.3	ゴウケツパック	1:ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ	小包装(ﾊﾟｯｸ)10個(450g)/10a	出穂5日前まで(但し収穫30日前まで)	1回	普	○	
			穂ばらみ期～乳熟期		24+16.1	【粉剤】 ダブルカット粉剤3DL	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ	3～4kg/10a	穂揃期まで	2回以内	普	○	
					U14+16.1	ブラシン粉剤DL	1:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ2:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					U14+16.1	【液剤】 ブラシンフロアブル	1:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ2:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
						上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)							
内穎褐変病	(発生の特徴) ○イネの刈り株、稲わら上の病原細菌が主たる伝染源となる。 ○穂ばらみ期～乳熟期の高温で発病が助長される。 ○出穂期に高温と降雨に遭遇しやすい品種では発生が多くなる。	○窒素質肥料の過用を避ける。	出穂5日前まで		16.3	【粒剤】 ゴウケツ粒剤	1:ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ	3～4kg/10a	出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで)	1回	普	○	
					16.3	ゴウケツ1ｷﾛ粒剤	1:ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ	1kg/10a	出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで)	1回	普	○	
					16.3	ゴウケツパック	1:ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ	小包装(ﾊﾟｯｸ)10個(450g)/10a	出穂5日前まで(但し、収穫30日前まで)	1回	普	○	
			穂ばらみ期～乳熟期		24+16.1	【粉剤】 ダブルカット粉剤3DL	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ	3～4kg/10a	穂揃期まで	2回以内	普	○	
					U14+16.1	ブラシン粉剤DL	1:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ2:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					U14+16.1	【液剤】 ブラシンフロアブル	1:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ2:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
						上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
稲こうじ病	（発生の特徴） ○幼穂形成期～穂ばらみ期に降雨が多く気温が低い場合に発生が多くなる。 （防除上のポイント） ○（粒剤）出穂18日前の散布が効果的である。（粉剤・液剤）出穂15日前の散布が効果的である。 ○出穂後の散布は防除効果が期待できない。	○発病穂は早めに取り除く。 ○窒素質肥料の過用を避ける。特に肥料が遅効きしないようにする。 ○転炉スラグ（300kg/10a）を2月～代かき前までに処理する。	穂ばらみ期		M1	【粉剤】 撒粉ボルドー粉剤DL	1:塩基性硫酸銅	3～4kg/10a	出穂10日前まで	-	普	△	
					M1	Zボルドー粉剤DL	1:塩基性硫酸銅	3～4kg/10a	出穂10日前まで	-	普	○	
					U14+16.1	ブラシン粉剤DL	1:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ2:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					16.1+U14	ノンブラス粉剤DL	1:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ2:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ	4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
						【液剤】							
					M1	ドイツボルドーA	1:塩基性塩化銅	2,000倍	出穂10日前まで	-	普	△	
					U14+16.1	ブラシンフロアブル	1:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ2:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					16.1+U14	ノンブラスフロアブル	1:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ2:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					6	フジワン乳剤	1:ｲｿﾌﾟﾛﾁｵﾗﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					U16	トライフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌﾛｷﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
						【粒剤】							
					3	モンガリット粒剤	1:ｼﾒｺﾅｿﾞｰﾙ	3～4kg/10a	収穫30日前まで	2回以内	普	○	
					6	フジワン粒剤	1:ｲｿﾌﾟﾛﾁｵﾗﾝ	3～4kg/10a	出穂10～30日前但し、収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					6	フジワン1キロ粒剤	1:ｲｿﾌﾟﾛﾁｵﾗﾝ	1kg/10a	出穂10～30日前但し、収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					6	フジワンパック	1:ｲｿﾌﾟﾛﾁｵﾗﾝ	小包装(ﾊﾟｯｸ)15個(1125g)/10a	出穂10～30日前但し、収穫14日前まで	2回以内	普	△	
						上記薬剤及びその混合剤（登録に留意）							
穂枯れ（ごま葉枯病）	（発生の特徴） ○漏水の激しい秋落ち田での発生が多い。 （防除上のポイント） ○薬剤防除は、乳熟期と糊熟期の2回散布が有効となる。	○ケイ酸質資材を施用する。 ○堆きゅう肥などの有機物の施用に努め、過度の窒素欠乏を避ける。	は種前			種子消毒法の項参照							
			出穂3～4週間前		P2	【粒剤】 オリゼメート粒剤	1:ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ	3～4kg/10a	出穂3～4週間前 但し、収穫14日前まで	2回以内	普	△	
			穂ばらみ期～糊熟期			【粉剤】							
					U14+16.1	ブラシン粉剤DL	1:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ2:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					16.1	ビーム粉剤DL	1:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ	4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					16.1+U14	ノンブラス粉剤DL	1:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ2:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
						【液剤】							
					U14+16.1	ブラシンフロアブル	1:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ2:ﾌｻﾗｲﾄﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					16.1+U14	ノンブラスフロアブル	1:ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ2:ﾌｪﾘﾑｿﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
						上記薬剤及びその混合剤（登録に留意）							
ばか苗病	（防除上のポイント） ○種子消毒の徹底。 ○発病株の抜き取りを徹底。	○無病種子を使用。 ○塩水選を必ず行う。	は種前			種子消毒の項、ばか苗病防除法の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一 般 名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
イネシンガレセンチュウ	(防除上のポイント) ○種子消毒の徹底。 ○種子更新を行う。	○無病種子を使用。 ○苗代の被覆に生もみ殻を使用しない。	は種前			種子消毒法の項参照							
ツマグロヨコバイ（萎縮病、黄萎病） ヒメトビウンカ（縞葉枯病、黒すじ萎縮病）	(防除上のポイント) ○薬剤抵抗性を現状以上に高めないため稲作期間中同一系統の薬剤の連続使用を避けるほか、防除回数は最小限にとどめる。 ○縞葉枯病、萎縮病の発生地は6月上旬の発生に注意する。縞葉枯病はヒメトビウンカの9月上旬の発生に注意する。 ○黄萎病の発生地は7月上～中旬に防除する。	○萎縮病、縞葉枯病の多発地では、早植えを避ける。 ○休閑田は早めに耕起、除草する。 ○畦畔、休耕田などでは、6月上旬までに雑草を刈取り、すき込み等により処分する。	田植前			箱施用(育苗箱)における薬剤施用法の項参照							
			生育期			【粉剤】							
				16		アプロード粉剤DL	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	4回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				3A		トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				4A		アルバリン粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4A		スタークル粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4A		ダントツ粉剤DL	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4C		エクシード粉剤DL	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				UN		オーケストラ粉剤DL	1:ﾍﾞﾝｽﾞﾋﾟﾘﾓｷｻﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 登録は幼虫。
						【液剤】							
				16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークルメイト液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツフロアブル	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4C		エクシードフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4F		エミリアフロアブル	1:ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				UN		オーケストラフロアブル	1:ﾍﾞﾝｽﾞﾋﾟﾘﾓｷｻﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 登録は幼虫。
				9B		プロセーバーフロアブル	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
						【粒剤】							
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル豆つぶ	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	250～500g/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
						上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
セジロウンカ	(発生の特徴) ○海外から飛来してくる害虫。飛来後1～2回世代を繰り返した後は圃場から飛び去ってしまう。極めて多量に飛来する年には、飛来成虫自体、および飛来次世代(第1世代)幼虫の加害が大きくなる。第2世代幼虫の加害もあるが、第3世代は問題にならない。 (防除上のポイント) ○水稲は生育初期に加害を受けるとダメージが大きいため、田植え直後～生育初期の多量飛来に十分注意を払い、発生状況に合わせて飛来成虫または第1世代幼虫を対象とした防除を行う。 ○本田散布剤の効果は高いが、飛来は断続的に数波続くことがある点に留意して防除する。 ○箱施用剤は、剤により効果・持続期間に差があるが、ネオニコチノイド系殺虫剤を含有する薬剤は高い効果を示し、繰り返し飛来が続く場合にも有効である。	田植前			箱施用(育苗箱)における薬剤施用法の項参照							
		成虫飛来後から飛来次世代(第1世代)幼虫期(田植え後水稲生育初～中期)			【粉剤】							
			3A		トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
			4A		アルバリン粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
			4A		スタークル粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
			4A		ダントツ粉剤DL	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
			4C		エクシード粉剤DL	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
			UN		オーケストラ粉剤DL	1:ﾍﾟﾝｽﾞﾋﾟﾘﾓｷｻﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 登録は幼虫。
					【液剤】							
			3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
			3A		トレボンEW	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
			4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
			4A		スタークル液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
			4A		スタークルメイト液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
			4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
			4A		ダントツフロアブル	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
			4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
			4C		エクシードフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
			4F		エミリアフロアブル	1:ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
			9B		プロセーバーフロアブル	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
			UN		オーケストラフロアブル	1:ﾍﾟﾝｽﾞﾋﾟﾘﾓｷｻﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	登録は幼虫。
					【粒剤】							
			3A		トレボン粒剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	2～3kg/10a	収穫21日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
			16		アプロード粒剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15) 登録は幼虫。
			4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
			4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
			4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
			4A		スタークル豆つぶ	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	250～500g/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等		防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
トビイロウンカ	(発生の特徴) ○飛来源のベトナム北部(紅河デルタ)、中国南部(華南)での多発を受け、本虫の飛来により坪枯れ被害の多い年がある。また、高い防除効果を示していたイミダクロプリドの箱施用剤の効果が著しく低下していることから、普通期栽培の最重要害虫となっている。 ○飛来量はセジロウンカに比べ一般にかなり少ないが、飛来後3回世代(第1～3世代)を重ね、その間増殖を繰り返し、坪枯れ被害を発生させる。坪枯れに結びつくのは通常第3世代の加害であるが、発生が特に多い年には第2世代の加害から坪枯れが発生することもある。 ○寄生密度が高い場合には、坪枯れ発生後5～7日以内に急激に枯死株が増加し被害面積が拡大することがある。 (防除上のポイント) ○窒素過多で葉色の濃いイネに集中飛来することはないが、栄養条件の良いイネでの産卵数や増殖率が高まるので適正な肥培管理に留意する。 ○長期残効性の箱施用についても、多発時には本田防除が必要となる場合がある。 ○本田散布剤は卵に対する効果が期待できないので、卵期間を避けた時期に使用する。また、アプロード剤は成虫に効果が無いので、成虫には、他剤との混用で使用する。 ○トビイロウンカの発生状況は、圃場外からでは坪枯れが発生するまで把握できない。偏った株の株元に生息し増殖を続けているので、9月中旬以降、圃場で多くの株元を観察し、発生状況を把握する。 ○(粉剤・液剤)株元に十分かかるように散布。 (粒剤)湛水状態(水深3～5cm)で田面に均一散布し、散布後4～5日は水を流さず止水する。		田植前			箱施用(育苗箱)における薬剤施用法の項参照							
			第2世代幼虫発生期(8月下旬頃。ただし、年により飛来時期が異なるため、時期は一定ではない)。 その後も発生が多い場合は、第2世代成虫期(産卵開始前)までに、もしくは第3世代幼虫発生期。			【粉剤】							
				3A		トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				16		アプロード粉剤DL	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	4回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15) 登録は幼虫。
				4A		アルバリン粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4A		スタークル粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4C		エクシード粉剤DL	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				UN		オーケストラ粉剤DL	1:ﾍﾞﾝｽﾞﾋﾟﾘﾓｷｻﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 登録は幼虫。
						【液剤】							
				3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		トレボンEW	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15) 登録は幼虫。
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークルメイト液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4C		エクシードフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4F		エミリアフロアブル	1:ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				9B		プロセーバーフロアブル	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
				UN		オーケストラフロアブル	1:ﾍﾞﾝｽﾞﾋﾟﾘﾓｷｻﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 登録は幼虫。
						【粒剤】							
				16		アプロード粒剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15) 登録は幼虫。
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル豆つぶ	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	250～500g/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
						上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)							
イネゾウムシ	(発生の特徴) ○早期栽培で被害が多い。 ○被害葉がちぎれ、流れ葉となる。	(耕種的防除法) ○中苗または成苗移植を行う。	6月上旬～7月中旬			【粒剤】							
				3A		トレボン粒剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	2～3kg/10a	収穫21日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
イネミズゾウムシ	(防除上のポイント) ○常発地では、箱施用が有効な防除法となる。箱施用を行った場合は本田防除は通常は不要となる。	○田植え後は深水を避け、根の健全化に努める。 ○5月中旬までに田植えした場合に、特に成虫飛来が多いので、田植え時期をできるだけ遅らせ、地域ごとの一斉田植えが望ましい。	田植前			箱施用(育苗箱)における薬剤施用法の項参照							
						本田での薬剤施用後は3日程度は落水やかけ流しをしない。							
			田植後～生育前期	3A		【粒剤】 トレボン粒剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	2～3kg/10a	収穫21日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
ニカメイチュウ	(発生の特徴) ○年2回発生する。 ○孵化した幼虫が茎下部から茎内に食入して内部を食害し、芯枯れとなる。 (防除上のポイント) ○第1世代の幼虫を重点に防除する。 ○粒剤は粉剤より3～5日早く湛水状態で使用し、使用後3～4日の水の移動は避ける。	○早期に耕運し、刈り株で越冬する幼虫の死滅を図る。特に厳寒期の耕運は密度抑制に効果的である。	田植前			箱施用(育苗箱)における薬剤施用法の項参照							
			越冬世代成虫発生最盛期7～10日後	14		【粉剤】 パダン粉剤DL	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	3～4kg/10a	収穫21日前まで	6回以内	普	×	
				3A		トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
			第1世代成虫発生最盛期3～5日後			【液剤】							
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫21日前まで	6回以内	劇	×	
				18		ロムダンゾル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	4,000～6,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
						BT剤　参考資料(P.15)参照							
						【粒剤】							
				14		パダン粒剤4	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	3～4kg/10a	収穫30日前まで	6回以内	劇	×	
						上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)							
イネツトムシ(イチモンジセセリ)	(発生の特徴) ○窒素過多で葉色の濃い稲や普通期栽培で移植の遅い稲に被害が多い。 (防除上のポイント) ○高温により発生が早まるので、成虫の本田飛来に注意する。 ○幼虫発生初期に防除する。 ○粒剤は粉剤より3～5日早く湛水状態で使用し、使用後3～4日の水の移動は避ける。	○窒素質肥料の過用を避ける。	田植前			箱施用(育苗箱)における薬剤施用法の項参照							
			(第1世代)6月上旬～下旬	14		【粉剤】 パダン粉剤DL	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	3～4kg/10a	収穫21日前まで	6回以内	普	×	
				3A		トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
						【液剤】							
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫21日前まで	6回以内	劇	×	
				18		ロムダンゾル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	4,000～6,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
						BT剤　参考資料(P.15)参照							
						【粒剤】							
				14		パダン粒剤4	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	3～4kg/10a	収穫30日前まで	6回以内	劇	×	
						上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一 般 名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
コブノメイガ	(発生の特徴) ○海外飛来性害虫であるため、飛来時期・飛来量は年によって異なる。 ○窒素過多で葉色の濃い稲や普通期栽培で移植の遅い稲に被害が多くなる。 (防除上のポイント) ○老齢幼虫には防除効果が劣る。このため、防除適期の目安は粒剤では成虫発生最盛期、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後となる。	○窒素質肥料の過用を避ける。	田植前			箱施用(育苗箱)における薬剤施用法の項参照							
			7月中旬～8月上旬			【粉剤】							
				14		パダン粉剤DL	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	3～4kg/10a	収穫21日前まで	6回以内	普	×	
			8月中旬～9月上旬			【液剤】							
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫21日前まで	6回以内	劇	×	
				18		ロムダンゾル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	4,000～6,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
						【粒剤】							
				14		パダン粒剤4	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	3～4kg/10a	収穫30日前まで	6回以内	劇	×	
						上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)							
フタオビコヤガ(イネアオムシ)	(発生の特徴) ○普通期栽培では7月下旬～8月上旬に寄生密度が急増する場合があるので注意する。	○稲わらに付着した蛹で越冬するため早期耕運により稲わらを早目に埋設する。	田植前			箱施用(育苗箱)における薬剤施用法の項参照							
			6月上旬～8月			【粉剤】							
				14		パダン粉剤DL	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	3～4kg/10a	収穫21日前まで	6回以内	普	×	
				3A		トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
						【液剤】							
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	4,000～6,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
						BT剤 (P.15)							
						【粒剤】							
				14		パダン粒剤4	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	3～4kg/10a	収穫30日前まで	6回以内	劇	×	
						上記薬剤及びその混合剤(登録に留意)							
イネカラバエ(イネキモグリバエ)	(発生の特徴) ○中山間地帯で発生が多い。	○コシヒカリ等の耐虫性を示す品種を選択する。	(第1世代) 5月中旬～6月上旬										
			(第2世代) 7月中旬～8月上旬										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
イネクロカメムシ	（発生の特徴） ○水稲の作型により、発生時期は大きく異なる（早期栽培では、6月上～中旬から成虫の侵入がみられる。）ので、各作型で虫の発生に合わせ防除時期を決定する。 （防除上のポイント） ○穂ばらみ期から出穂期にかけて密度が高いと、芯枯茎、白穂茎が発生するので、それまでに密度を低下させておく。	○多発生地域では、移植期までに圃場周辺の畦畔を除草する。	越冬成虫加害期（普通期：6月上～中旬）	3A		【粉剤】 トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				4A		アルバリン粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4A		スタークル粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
			若・中齢幼虫期（普通期：7月上旬）	4A		ダントツ粉剤DL	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				2B		キラップ粉剤DL	1:ｴﾁﾌﾟﾛｰﾙ	3～4kg/10a	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
						【液剤】							
				3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		なげこみトレボン	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	水溶性容器6～10個(300～500mℓ)/10a	5葉期以降（但し、収穫21日前まで）	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
カメムシ類（斑点米）	（発生の特徴） ○畦畔での発生密度が高いので注意する。 ○イネ科雑草地、雑木林、雑草の優先した休耕田のある地域及び早期栽培では発生が多いので注意する。 （防除上のポイント） ○出穂時に定期防除で密度を下げておく。 ○(粉・液剤) 多発生時には、1回目散布7～10日後に2回目を散布する。 (粒剤) 出穂7日後頃に散布する。 ○除草が不可能な休耕田でカメムシ類の発生が見られる場合は、休耕田雑草に適用のある薬剤で防除する。	○圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。 ○出穂20日前と出穂時期に2回除草すると防除効果が高くなる。	乳熟期～糊熟期			**（本田散布剤）**							
						【液剤】							
				4A		スタークル液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークルメイト液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツフロアブル	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				2B		キラップフロアブル	1:ｴﾁﾌﾟﾛｰﾙ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
				4C		エクシードフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
						【粒剤】							
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル豆つぶ	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	250g/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				2B		キラップ粒剤	1:ｴﾁﾌﾟﾛｰﾙ	3kg/10a	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
						【粉剤】							
				3A		トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				4A		アルバリン粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4A		スタークル粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4A		ダントツ粉剤DL	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				2B		キラップ粉剤DL	1:ｴﾁﾌﾟﾛｰﾙ	3～4kg/10a	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
				4C		エクシード粉剤DL	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
						上記薬剤及びその混合剤（登録に留意）							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
カメムシ類（斑点米）	（防除上のポイント） ○斑点米カメムシ類に対する殺虫剤の効果、ミナミアオカメムシ・イネカメムシの防除法の項参照。					**（休耕田（雑草優占圃場））** 【粉剤】							
				3A		トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				4A		ダントツ粉剤DL	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
						【液剤】							
				4C		エクシードフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
イナゴ類	（発生の特徴） ○卵で越冬する。5月中旬頃からふ化してくる(期間は1か月以上と長い)。 ○ふ化後、1か月くらいは水田内にはほとんど侵入せず、畦畔とその周辺にとどまる。 （防除上のポイント） ○ふ化時期から出穂期までであれば、防除はいつでもよい。	○越冬卵は春期の代掻き時には水面に浮き、畦畔に吹き寄せられるのでゴミとともに処分する。周辺に放置するとふ化するので注意する。	6月～出穂期			【粉剤】							
				4A		アルバリン粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4A		スタークル粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4A		ダントツ粉剤DL	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4A		ダントツH粉剤DL	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				3A		トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	3～4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				2B		キラップ粉剤DL	1:ｴﾁﾌﾟﾛｰﾙ	3～4kg/10a	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
				4C		エクシードフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
						【液剤】							
				3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				4A		ダントツフロアブル	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				2B		キラップフロアブル	1:ｴﾁﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
スクミリンゴガイ			スクミリンゴガイの防除法の項参照										

（５）水稲種子消毒法

１）薬剤消毒

①浸種処理の場合、容量比（種もみ：薬剤）が常に１：１以上とする。
②消毒用の袋は、粗めなサラン網等を使用。種子量は袋容量の50%程度とし、処理時にはよくゆすり袋内の空気を追い出す。
③薬液の温度は、極端な低温を避ける。特に、10℃以下の液温では効果が劣る。
④乳剤以外の長時間浸漬では、処理中１～２回攪拌する。処理後は風乾し薬剤を十分付着させる。
⑤浸種後２～３日間は水換えしない。水換え時や浸種時の上下移動は静かに行う。
⑥消毒の作業手順は(P.53)を参照。
⑦残液は、魚介類などに影響のないよう適切に処理する。

農薬名	一般名	使用時期／使用回数	使用方法	対象病害虫						人毒	水産（注）	実施上の注意事項
				シンガレセンチュウ	ばか苗病	いもち病	ごま葉枯病	もみ枯細菌病	苗立枯細菌病			
スミチオン乳剤	ＭＥＰ	播種前／１回	1,000倍　6～72時間浸漬	○						普	△	催芽状態の種籾には薬害が出る。
パダンＳＧ水溶剤	カルタップ	浸種前／１回	1,500～3,000倍　24時間浸漬	○						劇	×	
ベンレートＴ水和剤20	チウラム・ベノミル	浸種前／１回	乾燥種籾重量の0.5～1%湿粉衣	○	○	○	○			普	×	
			乾燥種籾重量の　１％　湿粉衣					○				
			20倍　10分間浸漬	○	○	○	○					
			200倍　24～48時間浸漬	○	○	○	○					
			200倍　6～24時間浸漬		○	○						
			400倍　24～48時間浸漬		○	○						
スポルタック乳剤	プロクロラズ	浸種前／１回	100倍　10分間浸漬		○	○	○			普	○	
			1,000倍　24時間浸漬		○	○	○					
ヘルシードＴフロアブル	チウラム・ペフラゾエート	浸種前／１回	20倍　10分間浸漬		○	○	○	○		普	△	
			200倍　24時間浸漬		○	○	○	○				
スポルタックスターナＳＥ	オキソリニック酸・プロクロラズ	浸種前／１回	20倍　10分間浸漬		○	○	○	○	○	普	○	
			200倍　24時間浸漬		○	○	○	○	○			
			7.5倍　吹付処理又は塗抹処理		○	○	○	○	○	普	△	吹付処理は種子消毒機使用。使用量は乾燥種籾1kg当たり希釈液30ｍｌ
テクリードＣフロアブル	イプコナゾール・銅	浸種前／１回	20倍　10分間浸漬		○	○	○	○	○	普	△	パダンＳＧ水溶剤との混用を避ける（物理性）。播種機の腐食に注意する。
			200倍　24時間浸漬		○	○	○	○	○			
モミガードC・DF	塩基性塩化銅フルジオキソニルベフラゾエート	浸種前／１回	200倍　24時間浸漬		○	○	○	○	○	普	△	吹付処理は種子消毒機使用。使用量は乾燥種籾1kg当たり希釈液30ｍｌ
			7.5倍　吹付処理又は塗抹処理		○	○	○	○	○	普	△	
スターナ水和剤	オキソリニック酸	浸種前／１回	乾燥種子重量の0.5%　湿粉衣					○	○	普	○	
			20倍　10分間浸漬					○	○			
			200倍　24時間浸漬					○	○			
			400～800倍　48～72時間浸漬					○				
エコフィット	酢酸	催芽時／1回	100倍　24時間浸漬					○	○	普	○	軽度の初期生育遅延を生じることがあるが、その後回復するので通常の管理を維持すること。
エコホープ	トリコデルマ・アトロビリデ	微生物農薬（殺菌剤）の使用法の項参照								普	○	
エコホープＤＪ	トリコデルマ・アトロビリデ	微生物農薬（殺菌剤）の使用法の項参照								普	○	
タフブロック	タラロマイセスフラバス	微生物農薬（殺菌剤）の使用法の項参照								普	○	
タフエイド	タラロマイセスフラバス	微生物農薬（殺菌剤）の使用法の項参照								普	○	

２）温湯消毒

病害虫名	手順	実施上の注意事項
いもち病 もみ枯細菌病 褐条病 苗立枯細菌病 ｲﾈｼﾝｶﾞﾚｾﾝﾁｭｳ	1　塩水選：比重1.13以上で行う。 2　水洗い：塩分を抜くため水洗は入念に行う。 3　風乾：種籾を水分15%以下に乾燥させる。 4　袋詰め：アミ袋に半分を目安に入れる。 5　温湯処理：60℃、10分間で処理する。 6　冷却：温湯処理後直ちに水道水で冷却する。 7　浸種：浸種、催芽、出芽は慣行どおり行う。	(1)病害に高濃度に汚染されている場合は防除効果が劣るので、採種圃産など病害の発生していない圃場の種子を用いる。 (2)温度管理が悪いと効果や発芽に問題を生じるため、専用の温湯消毒装置を用いる。 (3)機器に応じた種子処理量を遵守する。 (4)処理時間10分以上では出芽率の低下が大きくなる。 (5)温湯処理は乾燥籾で行わないと出芽率が大幅に低下するため、塩水選後は十分に乾燥させてから処理する。 (6)使用前に機器が正常に稼動するのかを確かめるなど機器のメンテナンスを行う。

(6)　育苗箱における薬剤施用法

①育苗箱施用剤は、水稲生育初～中期に発生する病害虫を効果的に防除でき、周辺作物への薬剤の飛散がほとんどない防除技術である。
②育苗箱施用剤には、殺虫剤、殺菌剤、それらの混合剤が各種あり、対象とする病害虫の種類や効果の程度も異なるので、それぞれの地域の実情にあわせた薬剤を選定する。
③軟弱徒長苗では薬害がでやすいので、施用を避ける。
④安定的な効果を得るためには、決められた施用量を、ムラのないよう箱全体に均一に散布することが重要である。
⑤粒剤の施用は、苗の露を落としてから行い、施用後は葉に付着した薬剤を払い落とし、軽く散水して、薬剤を床土に付着させる。
⑥薬剤施用後、乾燥させると薬害がでやすいので、苗管理には注意する。
⑦施用時の除草粒剤の誤用に注意する。

【育苗箱施用剤一覧表について】（R3～）
1.殺虫成分のイミダクロプリド、クロチアニジン、チアメトキサムはトビイロウンカに対し感受性が低下しているため、これらを含む剤は記載していない。
2.ウンカ類（トビイロウンカ）に対して適用のない薬剤は記載していない。また、使用時期によってトビイロウンカに適用のない場合は記載していない。
3.殺菌剤のみの薬剤は県内での使用場面が少ないことから記載していない。

使用薬剤名		一般名		使用時期	1箱当たり施用量（※10a当たり）（▲乾燥種もみ当たり）	いもち病	紋枯病	稲こうじ病	もみ枯細菌病	内穎褐変病	ツマグロヨコバイ	ウンカ類	イネミズゾウムシ	コブノメイガ	ニカメイチュウ	イネツトムシ	フタオビコヤガ	カメムシ類	イネクロカメムシ	イナゴ類	備考
		殺虫成分	殺菌成分（成分量）																		
殺虫剤	アレス箱粒剤	ｵｷｻｿﾞｽﾙﾌｨﾙ	－	は種前	50g						○	○	○	○	○	○	○			○	★
				は種時（覆土前）～移植当日	50g						○	○	○	○	○	○	○			○	★
				移植時（側条施用）	1kg※								○		○		○				
				移植当日	50g													○			★　斑点米ｶﾒﾑｼ類には効果低い
	フェルテラゼクサロン箱粒剤	ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ・ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	－	は種時（覆土前）～移植当日	50g						○	○		○		○	○				★
				移植時（側条施用）	1kg※						○	○	○	○							
	フェルテラチェス箱粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	－	は種時（覆土前）～移植当日	50g						○	○	○	○	○		○				
				移植3日前～移植当日	50～100g						○	○	○	○	○	○	○				★
	プリンス粒剤	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	－	は種前（床土混和）	50g							○	○	○	○					○	★
				は種時（覆土前）～移植当日	50g							○	○	○	○	○	○		○	○	★
	プリンススピノ粒剤６	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ・ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	－	は種時（覆土前）～移植当日	50g							○	○		○	○	○			○	★
	ペキサロンフロアブル	ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ	－	は種時（覆土前）～移植当日	0.5ℓ 140倍						○	○									★
	リディア箱粒剤	ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	－	移植3日前～移植当日	50g						○	○	○		○	○	○			○	★
				移植時（側条施用）	1kg※						○	○	○		○						
	リディアNT箱粒剤	ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	－	は種前　（床土混和）	50g						○	○	○								
				は種時（覆土前）～移植当日	50g						○	○	○		○					○	
				移植3日前～移植当日	50～100g						○	○	○		○	○	○			○	★　50gはﾌﾀｵﾋﾞ、ｲﾈﾂﾄの登録
				移植時（側条施用）	1kg※								○		○						
	ルミスパンスFS	ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ	－	は種前（浸種前）	7～9ml/kg▲						○	○									
殺虫殺菌剤	アプライプリンス粒剤10	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	ﾁｱﾆｼﾞﾙ（12.0）	は種時覆土前～緑化始期	50g	○						○	○	○	○	○				○	★
				は種前（床土又は覆土混和）	50g	○							○		○						★
				は種覆土前	50g				○	○											★

使用薬剤名		一　般　名		使用時期	1箱当たり施用量（※10a当たり）（▲乾燥種もみ当たり）	いもち病	紋枯病	稲こうじ病	もみ枯細菌病	内穎褐変病	ツマグロヨコバイ	ウンカ類	イネミズゾウムシ	コブノメイガ	ニカメイチュウ	イネツトムシ	フタオビコヤガ	カメムシ類	イネクロカメムシ	イナゴ類	備考
		殺虫成分	殺菌成分（成分量）																		
殺虫殺菌剤	アレスモンガレス箱粒剤	ｵｷｻｿﾞｽﾙﾌｨﾙ	ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	移植時（側条施用）	1kg※		○						○		○		○				
				は種前（床土又は覆土混和）	50g		○				○	○	○	○	○	○	○			○	★
				は種時（覆土前）～移植当日	50g		○				○	○	○	○	○	○	○			○	★
	稲名人箱粒剤	ｵｷｻｿﾞｽﾙﾌｨﾙ	ｲｿﾁｱﾆﾙ	は種前（床土又は覆土混和）	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	★
				は種時（覆土前）～移植当日	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	★
				移植時（側条施用）	1kg※	○							○		○						
	ゴウケツバスター箱粒剤	ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ（12.0）	ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ（9.0）	移植3日前～移植当日	50g	○			○	○	○	○	○		○		○			○	★
				移植時（側条施用）	1kg※	○							○								
	防人箱粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ	ｲｿﾁｱﾆﾙ	は種時（覆土前）～移植当日	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○				★
				移植時（側条施用）	1kg※	○						○		○							
	サントリプル箱粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ（6.0）	ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ（4.0）	移植3日前～移植当日	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	★
				移植時（側条施用）	1kg※	○							○								
	サンエース箱粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ	ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ（4.0）・ｼﾒｺﾅｿﾞｰﾙ	移植3日前～移植当日	50g	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				★
				移植時（側条施用）	1kg※	○						○	○								
	サンスパイク箱粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ	ﾄﾙﾌﾟﾛｶﾙﾌﾞ（4.0）	移植3日前～移植当日	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○				★
				移植時（側条施用）	1kg※	○						○	○								
	スクラム箱粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ	ｲｿﾁｱﾆﾙ・ﾍﾟﾝﾌﾙﾌｪﾝ	は種時覆土前～移植当日	50g	○	○				○	○		○				○				
				移植3日前～移植当日	50g				○	○			○		○	○					
				移植3日前～移植当日	50～100g	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○				★
	スタウトアレス箱粒剤	ｵｷｻｿﾞｽﾙﾌｨﾙ	ｲｿﾁｱﾆﾙ	は種前（床土又は覆土混和）	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	★
				は種時（覆土前）～移植当日	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	★
				移植時（側条施用）	1kg※	○							○		○						
	スタウトアレスモンガレス箱粒剤	ｵｷｻｿﾞｽﾙﾌｨﾙ	ｲｿﾁｱﾆﾙ・ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	は種時（覆土前）～移植当日	50g	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	★
				移植時（側条施用）	1kg※	○	○														
	Cs.オリゼリディア箱粒剤	ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ（16.0）	移植3日前～移植当日	50g	○					○	○	○		○	○				○	★
				移植時（側条施用）	1kg※	○							○		○						
	Cs.オリゼリディアEV箱粒剤	ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ（16.0）・ﾍﾟﾝﾌﾙﾌｪﾝ	移植7日前～移植当日	50g	○	○				○	○	○								
				移植3日前～移植当日	50～100g	○	○		○		○	○	○		○	○	○			○	★
				移植3日前～移植当日	50g				○						○	○	○			○	
				移植時（側条施用）	1kg※	○	○				○	○	○								
	Dr.オリゼスタークル箱粒剤	ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ（2.0）	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(25.0)	緑化期～移植当日	50g	○			○		○	○	○		○				○		
				移植3日前～移植当日	50g												○				
	Dr.オリゼプリンス粒剤10	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(24.0)	緑化期～移植当日	50g	○			○			○	○	○	○	○				○	
	Dr.オリゼリディア箱粒剤	ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(24.0)	移植7日前～移植当日	50g	○					○	○	○								
				移植3日前～移植当日	50g				○	○					○	○	○			○	
				移植3日前～移植当日	50～100g	○			○	○	○	○	○		○	○	○			○	★
				移植時（側条施用）	1kg※	○					○	○	○								
	箱維新粒剤	ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ・ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	ｲｿﾁｱﾆﾙ・ﾌﾗﾒﾄﾋﾟﾙ	移植7日前～移植当日	50g	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○				★

使用薬剤名		一　般　名		使用時期	1箱当たり施用量（※10a当たり）（▲乾燥種もみ当たり）	いもち病	紋枯病	稲こうじ病	もみ枯細菌病	内穎褐変病	ツマグロヨコバイ	ウンカ類	イネミズゾウムシ	コブノメイガ	ニカメイチュウ	イネツトムシ	フタオビコヤガ	カメムシ類	イネクロカメムシ	イナゴ類	備考
		殺虫成分	殺菌成分（成分量）																		
殺虫殺菌剤	稲大将箱粒剤	ｵｷｻｼﾞｽﾙﾌｨﾙ	ｲｿﾁｱﾆﾙ・ｲﾝﾋﾞﾙﾌﾙｷｻﾑ	は種時（覆土前）～移植当日	50g	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	★
				移植時（側条施用）	1kg※	○	○														
	ハコガード粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ	ﾁｱｼﾞﾆﾙ（6.0）・ﾁﾌﾙｻﾞﾐﾄﾞ	緑化期～移植当日	50g	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○				★
				移植時（側条施用）	1kg※							○		○							
	ハコナイト粒剤	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ・ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	ｲｿﾁｱﾆﾙ	は種前	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	★
				は種時（覆土前）～移植当日	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	★
	ビームパラタス箱粒剤	ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ（0.75）・ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ	ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ	移植3日前～移植当日	50g	○					○	○		○	○	○					★
				移植当日	50g												○				★
	ビームプリンスグレータム箱粒剤	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	ﾄﾘｼｸﾗｿﾞｰﾙ・ﾁﾌﾙｻﾞﾐﾄﾞ	移植3日前～移植当日	50g	○	○					○	○	○	○						★
	ビルダーフェルテラスタークル箱粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ（2.0）	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(10.0)	緑化期～移植当日	50g	○					○	○		○							
				移植3日前～移植当日	50g				○				○		○	○	○				
	ビルダーフェルテラゼクサロン粒剤	ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ・ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ（10.0）	緑化期～移植当日	50g	○					○	○		○			○				
				移植3日前～移植当日	50g				○	○			○		○	○					
				移植3日前～移植当日	50～100g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○				★
				移植時（側条施用）	1kg※	○					○	○		○							
	ビルダーフェルテラチェス粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(10.0)	緑化期～移植当日	50g	○					○	○		○							
				移植3日前～移植当日	50g				○	○			○		○	○	○				
				移植3日前～移植当日	50～100g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○				★
				移植時（側条施用）	1kg※	○					○	○	○	○							
	ビルダーフェルテラチェスＧＴ粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(10.0)・ﾁﾌﾙｻﾞﾐﾄﾞ	緑化期～移植当日	50g	○	○				○	○		○							
				移植3日前～移植当日	50g								○								
				移植3日前～移植当日	50～100g	○	○				○	○	○	○							★
	ビルダープリンス粒剤	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(10.0)	緑化期～移植当日	50g	○						○		○							
				移植3日前～移植当日	50g				○				○		○	○			○		
	ビルダープリンスグレータム粒剤	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(10.0)・ﾁﾌﾙｻﾞﾐﾄﾞ	緑化期～移植当日	50g	○	○					○		○	○	○					
				移植3日前～移植当日	50g				○	○			○						○		
				移植3日前～移植当日	50～100g	○	○		○	○		○	○	○	○	○			○		★
	ビルダーリディア箱粒剤	ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ（10.0）	移植7日前～移植当日	50g	○					○	○	○								
				移植3日前～移植当日	50g				○	○						○				○	
				移植3日前～移植当日	50～100g	○			○	○	○	○	○			○				○	★
				移植時（側条施用）	1kg※	○					○	○	○		○						
	ビルダーリディアＥＶ箱粒剤	ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(10.0)・ﾍﾟﾝﾌﾙﾌｪﾝ	移植時（側条施用）	1kg※	○	○				○	○									
				移植3日前～移植当日	50g				○	○					○	○	○			○	
				移植7日前～移植当日	50g	○	○				○	○	○								
	ブーンアレス箱粒剤	ｵｷｻｼﾞｽﾙﾌｨﾙ	ｼﾞｸﾛﾍﾞﾝﾁｱｿﾞｸｽ	は種前（床土又は覆土混和）	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	
				は種時（覆土前）～移植当日	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	★
				移植時（側条施用）	1kg※	○						○	○	○							

使用薬剤名		一　般　名		使用時期	1箱当たり施用量（※10a当たり）（▲乾燥種もみ当たり）	いもち病	紋枯病	稲こうじ病	もみ枯細菌病	内穎褐変病	ツマグロヨコバイ	ウンカ類	イネミズゾウムシ	コブノメイガ	ニカメイチュウ	イネツトムシ	フタオビコヤガ	カメムシ類	イネクロカメムシ	イナゴ類	備考
		殺虫成分	殺菌成分（成分量）																		
殺虫殺菌剤	ブーンゼクテラ箱粒剤	ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ・ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	ｼﾞｸﾛﾍﾞﾝﾁｱｿﾞｸｽ	は種時（覆土前）～移植当日	50g	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○				★
				は種前（床土又は覆土混和）	50g	○						○									
				移植時（側条施用）	1kg※	○						○		○							
	ブーンハーデス箱粒剤	ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ（1.0）・ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ	ｼﾞｸﾛﾍﾞﾝﾁｱｿﾞｸｽ・ﾍﾟﾝﾌﾙﾌｪﾝ	は種時（覆土前）～移植当日	50g	○	○				○	○	○	○							★ ｲﾈﾐｽﾞｿﾞｳﾑｼは幼虫
	ファーストオリゼプリンス粒剤10	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(20.0)	は種時（覆土前）	50g	○			○	○		○	○	○	○	○			○		
	ファーストオリゼリディア箱粒剤	ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(20.0)	は種前（床土混和）	50g	○			○		○	○	○		○	○	○			○	
				は種時（覆土前）	50g	○			○		○	○	○		○	○	○			○	★
	ブイゲットハコレンジャーL粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ	ﾁｱｼﾞﾆﾙ(6.0)・ﾁﾌﾙｻﾞﾐﾄﾞ	緑化期～移植当日	50g	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○				★
				移植3日前～移植当日	50g					○											★
				移植時（側条施用）	1kg※							○		○							
	ブイゲットフェルテラゼクサロンL粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾄﾘﾌﾙﾒｿﾞﾋﾟﾘﾑ	ﾁｱｼﾞﾆﾙ（6.0）	緑化期～移植当日	50g	○			○		○	○	○	○	○	○	○				★
				移植3日前～移植当日	50g					○											★
				移植時（側条施用）	1kg※	○						○		○							
	ブイゲットフェルテラチェスL粒剤	ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	ﾁｱｼﾞﾆﾙ（6.0）	緑化期～移植当日	50g	○			○		○	○	○	○	○		○				
				移植3日前～移植当日	50g											○					
				移植当日	50g					○											
	ブイゲットプリンス粒剤10	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	ﾁｱｼﾞﾆﾙ（12.0）	緑化期～移植当日	50g	○						○	○	○	○	○				○	
				緑化期	50～100g	○						○	○	○	○	○				○	★
				移植当日	50g				○	○											
	ブイゲットプリンスリンバーL粒剤	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	ﾁｱｼﾞﾆﾙ（6.0）・ﾌﾗﾒﾄﾋﾟﾙ	緑化期～移植当日	50g	○	○					○	○	○	○	○					★
				移植3日前～移植当日	50g				○												★
				移植当日	50g					○											★
	プリンスリンバー箱粒剤	ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	ﾌﾗﾒﾄﾋﾟﾙ	移植3日前～移植当日	50g		○					○	○	○	○						★
	ヨーバルパワーEV箱粒剤	ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	ｲｿﾁｱﾆﾙ・ﾍﾟﾝﾌﾙﾌｪﾝ	は種時（覆土前）～移植当日	50g	○	○				○	○	○	○	○	○	○				★
				移植3日前～移植当日	50～100g				○	○											★
	ヨーバルUG箱粒剤	ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ・ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	ｲｿﾁｱﾆﾙ	移植3日前～移植当日	50g				○	○											★
				は種時(覆土前)～移植当日	50g	○					○	○	○	○	○	○	○			○	★
	リディアEV箱粒剤	ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ	ﾍﾟﾝﾌﾙﾌｪﾝ	は種時（覆土前）～移植当日	50g		○						○		○						
				移植3日前～移植当日	50g						○	○								○	
				移植時（側条施用）	1kg※		○						○								
	ロングリーチ箱粒剤	ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ（12.0）	ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ(24.0)	移植3日前～移植当日	50g	○					○	○	○				○			○	
				移植当日	50g													○			

注意事項：（1）本表は薬剤ごとに登録適用対象病害虫（○印）を記載したものであるが、愛媛県で発生（問題）がない病害虫は除外した。
なお、薬剤によっては施用量により対象病害虫が異なることがあるので注意する。
（2）殺菌成分のトリシクラゾールは、いもち病常発地での使用を避ける。
（3）薬剤により成分の異なるものには成分量を記載。
（4）記載されている農薬は、すべて人畜：普通物、水産動植物への注意（表記△）が必要である。
（5）★高密度には種する場合には、1kg/10a（育苗箱30×60×3cm、使用土壌約5L）1箱当たり50～100g

（7）苗立枯病の防除法

薬　剤　名	一　般　名	本剤の使用回数	毒　性	
			人畜	水産（注）
カスミン粒剤	カスガマイシン	1回	普	○
カスミン液剤	カスガマイシン	1回	普	△
ダコニール1000	ＴＰＮ	2回以内	普	△
ダコレート水和剤	ベノミル・ＴＰＮ	2回以内	普	△
タチガレン液剤	ヒドロキシイソキサゾール	2回以内	普	○
タチガレン粉剤	ヒドロキシイソキサゾール	1回	普	○
タチガレエースM液剤	ヒドロキシイソキサゾール・メタラキシル	1回	普	○
タチガレエースM粉剤	ヒドロキシイソキサゾール・メタラキシル	1回	普	○
タチガレファイト液剤	ヒドロキシイソキサゾール	2回以内	普	○
ナエファイン粉剤	ピカルブトラゾクス	1回	普	○
ナエファインフロアブル	ピカルブトラゾクス	2回以内	普	○
バリダシン液剤５	バリダマイシン	1回	普	○
ベンレート水和剤	ベノミル	2回以内	普	△
エコフィット	醸造酢酸液	1回	普	○

① 発病前（は種前、は種時、は種後覆土前）の薬剤処理

対象病害又は障害名	薬剤防除法			注意事項
	時期	使用薬剤と濃度	使用量	
苗立枯病（ピシウム菌）（フザリウム菌）	は種前	タチガレン粉剤 タチガレエースM粉剤	3～6g／箱 6～8g／箱	(1)粉剤はは種前に育苗箱土壌に均一に混和する。
苗立枯病（ピシウム菌）（フザリウム菌）（リゾープス菌）ムレ苗防止		ナエファイン粉剤	6～8g／箱	
ムレ苗防止		タチガレン粉剤 タチガレエースM粉剤	4～8g／箱 6～8g／箱	
苗立枯病（ピシウム菌）（フザリウム菌） ムレ苗防止	は種時	タチガレエースM液剤　1,000倍	1ℓ灌注／箱	(2)タチガレファイトは複合肥料を配合した農薬である(水溶性りん酸18.0%、水溶性加里20.0%)。使用量が多すぎた時、場合によっては初期生育が一時抑制されることがあるので、濃度や使用量を誤らないように注意する。
	は種時又は発芽後	タチガレエースM液剤　500～1,000倍	500mℓ灌注／箱	
	は種時及び発芽後	タチガレン液剤　500～1,000倍 〃　1,000倍	500mℓ灌注／箱 1ℓ灌注／箱	
		タチガレファイト液剤　250倍～300倍 〃　500倍～600倍	500mℓ灌注／箱 500mℓ～1ℓ灌注／箱	
苗立枯病（ピシウム菌）ムレ苗防止	は種時～緑化期	ナエファインフロアブル　1,000～2,000倍	(1,000～2,000倍) 500mℓ灌注／箱	
	は種時	ナエファインフロアブル　2,000倍	(2,000倍) 500mℓ～1ℓ灌注／箱	
苗立枯病（フザリウム菌）（リゾープス菌）	は種時	ナエファインフロアブル　1,000倍、2,000倍	(1,000倍) 500mℓ灌注／箱 (2,000倍) 500～1000mℓ灌注／箱	
ムレ苗防止		ナエファインフロアブル　2,000倍		
苗立枯病（リゾープス菌）	は種時から緑化期(但しは種14日後まで)	ダコニール1000　500～1,000倍	500mℓ灌注／箱	(1) 緑化期に使用する場合、発病後の処理では効果が劣ることがあるので注意する。
		〃　1,000～2,000倍	1ℓ灌注／箱	

対象病害又は障害名	薬剤防除法			注意事項
	時期	使用薬剤と濃度	使用量	
苗立枯病 （リゾープス菌） （フザリウム菌） （トリコデルマ菌）	は種時から緑化期 （但しは種14日後まで）	ダコレート水和剤 400～600倍 〃 800～1200倍	500mℓ灌注／箱 １ℓ灌注／箱	(1) 緑化期に使用する場合、発病後の処理では効果が劣ることがあるので注意する。
苗立枯病 （フザリウム菌）	は種時	ベンレート水和剤 500～1000倍	500mℓ灌注／箱	
苗立枯病 （トリコデルマ菌）	は種時1回又はは種時とは種7日頃の2回	ベンレート水和剤500～1000倍 〃 1000倍	500mℓ灌注／箱 １ℓ灌注／箱	
苗立枯病 （リゾクトニア菌） （白絹病菌）	は種時～発病初期	バリダシン液剤５ 1000倍	500mℓ灌注／箱	
幼苗腐敗症 （もみ枯細菌病菌） 苗立枯細菌病	は種前	カスミン粒剤	30ｇ／箱	育苗培土に均一に混和する。
	覆土前		15～20ｇ／箱	育苗箱には種した種もみの上から均一に散布する。
	覆土前		15～20ｇ／覆土１ℓ	覆土に均一に混和する。
	覆土前	カスミン液剤 4～8倍	50mℓ／箱	は種した種もみの上から均一に散布する。
もみ枯細菌病	は種時（灌注）	エコフィット 100倍	500mℓ灌注／箱	軽度の初期生育遅延を生じることがあるが、その後回復するので通常の管理を維持する。銅・真鍮に腐食性あり。
	は種時（散布）	エコフィット 10倍	50mℓ灌注／箱	
いもち病	は種時～は種14日後頃	ベンレート水和剤500～1000倍	500mℓ灌注／箱	
	覆土前	カスミン液剤4～8倍	50mℓ／箱	は種した種もみの上から均一に散布する。

②耕種的防除法等

対象病害	耕種的防除法	注意事項・症状
フザリウム菌による苗立枯病	(1)床土は無病土を使用する。 (2)床土のpHは4.5～5.0とする。 (3)灌水に注意し、乾燥・過湿を繰り返さない。 (4)温度管理に注意し30℃以上や10℃以下にしない。	(1)苗の地際部に白いカビがみられ、籾を中心に白～淡紅色のカビが蔓延する。苗は生育不良で萎凋し、やがて枯死する。
ピシウム菌による苗立枯病	(1)床土は無病土を使用する。 (2)生育中低温にしない。 (3)標準は種量を守り厚播きにしない。	(1)苗の地際部の褐変はやや淡く水浸状となり、急激に萎凋・枯死する。地際部にカビは見られない。
ムコール菌による苗立枯病	(1)床土は無病土を使用する。 (2)温度管理、灌水を適正にして高温多湿にしない。 (3)標準は種量を守り厚播きにしない。	(1)籾のは種層に白色の綿毛状のカビが蔓延する。根の伸長は悪く色は褐変し、後に枯死する。
リゾープス菌による苗立枯病	(1)出芽時30℃以上の高温にならないように 管理する。 (2)床土の過湿を避ける。	(1)籾のまわりに、白色のカビが生え、菌叢中に針頭大の黒点（胞子）が多数混じる。冠根の先端が異常肥大する。苗の生育は悪く、黄緑色に退色する。
苗立枯病 （リゾクトニア菌） （白絹病菌）	(1)床土は無病土を使用する。 (2)通風をよくし、高温・多湿にしない。 (3)極端な厚播きや多肥栽培をしない。	(1)リゾクトニア属菌：移植前に急に発生する。下葉や葉鞘が灰緑色の葉腐れ症状となる。くもの巣状の菌糸がみられる。 (2)白絹病菌：苗の地際部や根に白色の絹糸状の菌糸がからみあい、のちに褐色球形の菌核ができる。苗は生育が悪く黄褐色となって萎凋し、枯死する。

（８）「ストロビルリン系殺菌剤（QoI剤）耐性いもち病菌」の発生と防除対策

水稲いもち病防除薬剤のうち、ＱｏＩ剤（ストロビルリン系殺菌剤：嵐、アミスター、オリブライト、イモチエースを総括した表現）耐性菌が平成２４年に全県的な発生として確認されている。

耐性菌の発生地域では、水稲移植時にこれらの箱施用剤を施用すると、防除効果が得られず激しく発生する可能性がある。防除対策、効果低下後の対応は「シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤耐性いもち病菌」の発生と防除対策を参照。

（９）「シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤耐性いもち病菌」の発生と防除対策

水稲いもち病防除薬剤のうち、ＭＢＩ－Ｄ剤（シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤：ウイン、デラウス、アチーブ剤を総括した表現）耐性菌が、平成１４年から県下で初確認され、現在では、東予を除いた広範囲で確認されている。発生は西日本に限定されていたが、その後、順次発生地域は北上し、平成１８年には東北地方にまで拡散している。

耐性菌の発生地域では、水稲移植時にこれらの箱施用剤を施用しても、気象条件などによって発生の激しい場合には、発病抑制期間の著しい短縮や、効果の低下などが認められる。

＜防除対策＞

１　種子対策

(1) 種子伝染を防ぐため、発生地域では「種子更新」を行う。

(2) 種子消毒は、種子消毒剤の使用方法（濃度・時間）を遵守して、必ず実施する。

２　箱施用剤対策

(1) 箱施用剤は、これらの薬剤と作用機作の異なる薬剤を選択する。

(2) 薬剤は規定の施用量を均一に散布し、効果が低下しないようにする。

(3) 育苗箱で、苗いもちの発生が確認された場合には、本田への移植を行なわないで廃棄等の適正な処分を行う。

３　本田防除対策

(1) 葉いもちの発生が確認されたら、本田防除を早急に実施する。

(2) 発生が著しい場合にはブラシン剤等を散布して、蔓延防止対策を早急に実施する。

(3) 箱施用だけを実施して本田防除を省略すると、耐性菌発生が助長されるので、必ず本田防除と組合わせた「体系防除」を実施する。

＜効果低下後の対応＞

箱施用剤の効果低下が疑われる場合には、関係機関に連絡して「感受性検定」を依頼し、検定の結果、耐性菌であると判定された場合には、防除指針改訂など総合的な防除対策を早急に講じる。

(10) イネばか苗病の防除法

イネばか苗病は、病原菌から産出するジベレリンの作用により徒長する。徒長苗を本田に移植すると、一部の株は部分的に枯死する。発病イネは、分げつ数は少なく、徒長して上位節より不定根を生じ、生育に従って順次枯死する。

発病枯死茎には白い粉状物（分生子塊）を生じ、風雨によって飛散する。開花中の気温が高い（30℃以上）ほど感染率は高く、また、降雨によって助長され、病原菌は胚など深部まで侵入して、保菌程度の高い種もみとなる。しかし９月以降、気温が低くなるにつれて感染率は低下する。

１　種子対策

〔無病種子の確保〕

種子は発病（保菌）していないほ場からとる。

〔塩　　水　　選〕

罹病もみは健全なもみに比べて軽いため、塩水選を行う。塩水選の比重は、うるち（脱芒処理をした後）：1.15～1.18、もち：1.05～1.10で実施する。なお比重が高いほど発病もみは少なくなる。

〔種子消毒及びその後の浸種実施上の注意事項〕

（湿粉衣法）

(1) 少量の場合は小型ミキサーやビニール袋を利用する。ビニール袋では薬剤がよく付着するようによくゆすって混ぜ合わせる。大量の場合はポットミキサーを利用する。

(2) 薬剤が均一に付着するよう、種子を少量ずつ粉衣し、また、粉衣時間を長くすると、均一性が高まる。

(3) 種子を僅かに湿らせ（塩水選後水洗いし水切り後ムシロ等にひろげて、水滴を含ませない程度に乾か

す）湿粉衣とする。

(4) 種もみに薬剤をよく固着させるため、粉衣後は１～２日間陰干する。

（低濃度・高濃度浸漬法）

(1) 水和剤は、薬剤に少量の水を入れてよくねり「のり状」にしてから、所定量の水を加えて調整する。

(2) 消毒用の種子入袋はサラン網袋など目のあらい薬液がよく通るものを使用し、薬剤がもみによく付着するように努める。また種子量は袋容量の50%程度にとどめる。

(3) 薬液量は種子が浸る程度（種子1kgに対し、薬液2ℓ程度）とする。

(4) 薬液の温度が低い(10℃以下）と、防除効果が劣ることが多いので15～25℃で処理する。

(5) 水和剤は薬剤処理中に時々かきまぜ、浸漬後は種もみを十分に陰干しして、薬剤を固着させる。

(6) 薬剤の使用回数は、低濃度薬液長時間浸漬は１回、高濃度薬液短時間浸漬は８～10回までとし、反復使用する場合は、薬液量は種子が浸る程度（種子1kgに対し、薬液2ℓ程度）となるよう、新しい薬液を補充する。

（浸種）

(1) 浸種水温10～15℃で効果が高いので、水温10℃を確保できる3月上旬頃を目安に浸種を開始する。

(2) 薬剤処理後の浸種は、種もみ容量の２倍程度とし（種子1kgに対し、水約3.5ℓ）、水温は10～15℃になるように努める。浸種は水道水、井戸水で水槽を用いて行い、河川、湖沼の水は使用しない。

(3) 浸種期間は浸種水温10℃で6～8日、14℃では6日程度とし、安定した薬効を確保するために、水交換は2～3回とする。

(4) 浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしない。

(5) 特に、湿紛衣法は、種子表面に付着した薬剤が浸種後水に溶け出し、種子周囲の薬剤濃度が高い状態で消毒効果が発揮される。そのため、浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしない。

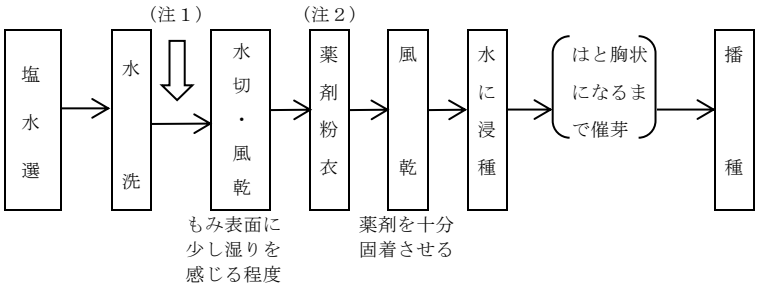
(6) 複数の品種や来歴、防除方法の異なる種子を同じ容器で浸種・催芽しない。

(7) 消毒後の廃液は適切な方法で処理し、河川や池などに流さないよう注意する。

種子消毒の作業手順

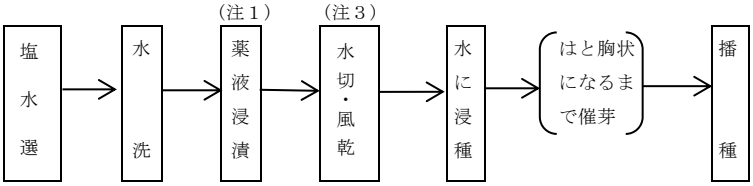
1　湿粉衣法（種子重量の0.5%または1.0%粉衣）

粉衣法は使用後の残液が比較的少なく、環境への負荷が小さいので積極的に活用することが望ましい。



2　浸漬法（各薬剤の濃度、処理時間は水稲種子消毒の項参照）

浸漬法による種子消毒は残液が多く出るので、その処理は適正に行う。



（注１）シンガレセンチュウの防除を実施する場合は、水洗後、スミチオン乳剤1,000倍またはパダンＳＧ水溶剤1,500倍を用い、24時間浸漬後、水切りする。催芽状態の種もみには薬害が生じることがあるので注意する。

（注２）粉衣は空の肥料袋などにもみと薬剤を入れてゆする。大量に行う場合には、小型のミキサー（ポットミキサー、モルタルミキサーなど）を用いると能率的である。

（注３）薬剤を十分固着させる。但し、薬剤により風乾を必要としないものがあるので注意する。

残液の処理方法

(1) 吸着焼却法（テクリード水和剤等）

残液に活性炭を添加し、十分攪拌して吸着させた後、凝集剤（キトサン0.4%）を加え、軽く攪拌後に静置する。その後、さらし布等でろ過し、活性炭を風乾して適正に処分する。

(2) 小型移動式廃液処理装置の使用

2　育苗対策

(1) 稲わらには病原菌が寄生または付着していることが多いので、稲わらで作ったコモ等で被覆しない。
(2) 病原菌は高温によってよく活動するので、出芽時の温度はあまり高くしない。
(3) 緑化時の温度管理は25℃程度とする。
(4) シルバーポリ等の被覆は高温（30℃以上）となりやすく、発病を助長する傾向があるので十分注意する。なお、床土温度が30℃以上になると発病は多くなりやすい。
(5) 病原菌は乾燥状態の時によく生育するので、床土はあまり乾かさないよう育苗時の水管理に注意する。
(6) 保菌もみに隣接した健全もみは徒長苗となることがある。したがって隣接もみへの伝染を抑制するため、播種量は稚苗育苗で箱当り 180ｇまで（催芽もみ）とし、厚播きをしない。
(7) 前年に使用した箱は消毒してから用いる。また、使用後は直ちに洗浄して菌汚染を抑制する。
(8) 徒長発病苗は、発見しだい抜き取り適切に処分する。

3　本田対策

(1) 発病（徒長）株は早期に抜き取り適切に処分する。
(2) 発病枯死茎は、病原分生胞子を形成して伝染源となるため、最高分げつ期を中心として出穂期までには徹底的に抜き取り、すみやかに処分して、胞子を飛散させない。
(3) ツマグロヨコバイによる伝染助長も認められているため、出穂期前後の防除に努める。
(4) 「すずめ」が食害すると、感染もみ率が高くなるので食害防止に努める。

4　採種対策

(1) 種子用もみは、脱穀機の回転数を通常より若干落し（毎分400回転程度、周速度11.8m/s程度）、もみに傷をつけないようにする。
(2) 採種ほ場は、品種や作期を合わせた集団栽培とし、周辺田も含めた総合的な防除対策に努める。

(11)　イネもみ枯細菌病の防除法

イネもみ枯細菌病は、穂にもみ枯症をおこして、減収をきたすとともに、種子伝染して苗腐敗症をおこすため、難防除病害とされている。

1　もみ枯細菌病の特徴

(1) もみ枯症が発生した水田の種子を種子もみに使用すると種子伝染がおこり苗腐敗症が多くなる。
(2) 育苗期では出芽時の高温、土壌の過湿、土壌の高pHが発病を助長する。
(3) 本田期では夏期の高温は発病しやすくなる。特に、出穂期に高温かつ降雨があるとき発病が著しく助長される。
(4) 前年多発した水田では発病が多くなることがある。

2　耕種的防除法

（育　苗　時）
(1) 種子もみは発生ほ場から採種しない。
(2) 種子もみは塩水選による選別を行う（もち1.05～1.10）、（うるち1.15～1.18）。
(3) 浸種時の水管理を適正にし、水温を必要以上（25℃以上）に高めない。
(4) 出芽時の温度を30℃以下に保つよう温度管理に注意する。

（本　田　期）
(1) 被害ワラやもみ殻は、堆肥化するか年内に石灰窒素を施してすき込むなどして腐熟させる。
(2) 移植（田植）後の冠水は、発病助長原因となることがあるので水管理に十分注意する。

3　薬剤による防除法

(1) 種子消毒により菌密度を低減させる。
(2) プロベナゾール、チアジニル粒剤（混合剤含む）には、本田移植時に育苗箱施用できる製剤がある（登録条件を確認のこと）。
(3) 薬剤の使用時期が適切でないと効果が劣るので、各薬剤の適期に施用する。
(4) 防除効果を高めるためには、耕種的防除法に加え、体系的な薬剤防除が必要である。

(12)　スクミリンゴガイの防除法

1　防除の基本的な考え方

(1) 定期的な巡回調査により早期発見に努める。
(2) ほ場内に貝や卵塊を確認したら、早く防除を開始する。
(3) 地域、水系毎の総合的、体系的な防除対策とする（地域農家、住民への周知、広報に努める）。
(4) 卵塊、貝は見つけ次第捕殺（粉砕など）する。また、定期的に捕殺して密度低下と拡散阻止を図る。
(5) 発生地からの水田土壌の移動は､未発生地への新たな発生源となるので､絶対にしない（非発生地であることを確認してから採土する）。
(6) 水路を越えての冠水や浸水は、爆発的な拡大につながるので注意する。

２　耕種的防除（具体的な対策）

（収穫後から早春期）

(1) 厳冬期（休閑期）に耕起して、越冬貝の密度を下げる。
(2) 湿田では排水を良くするため、溝切りなどして乾田化をはかる。
(3) 畑作物などへの作付転換を行うと密度低下につながる。
(4) 稲ワラや切ワラは越冬場所となるので、除去、焼却または鋤込むなど適切に処理する。特に湿田では必ず実施する。
(5) 冬期間には、用（排）水路はできるだけ落水して寒波にさらす。
(6) 用（排）水路からの発生を抑制するため、雑草除去や泥土上げを冬期間に組織的に実施する。

（春から田植前）

(1) 取水口（水口）に金網やビニルネットなどを張り、用水路からの貝の侵入と用水路への拡散を防ぐ。
（ゴミなどで目詰まりするので、網目を変えた複層構造が望ましい。また、定期的にゴミ除去を行う。）
(2) 揚水ポンプなどからの貝の侵入を防ぐため、吐出口などに網を付ける。
(3) 排水口には塩化ビニル管等を使用し、排水路の水面から離して、水田への侵入を防止する。
(4) 越冬しやすい場所（橋の下、雑草繁茂地等）の越冬貝は、産卵開始（４月中旬）期までに採取、捕殺する。
(5) 産卵直後の卵は水に弱いので、卵塊を水中に払い落として死滅させる。
(6) 定期的な払い落とし期間は、４月で15日、５月で10日、６月で５日に１回の割合とする。
（ただし、孵化期が近い卵塊は、卵が水中に落下しても死なないので注意する。）
(7) 貝の生息密度の高い水田や侵入被害が予測される水田では、中苗～成苗を移植して、食害被害を軽減する。

（田植後から初秋期）

(1) 卵塊を水面下に払い落として死滅させる（前項の注意事項参照）。
(2) 貝が侵入している水田では、田植後１cm程度の浅水管理にする（容易に浅水管理ができるように作溝する。また､溝に集まった貝を捕殺する)。
(3) 水田に貝が多い場合には、捕殺して密度低下をはかる。
(4) 水稲の食害被害が多いときには、苗の補植が必要である。

３　薬剤防除

(1)　石灰窒素による防除

①必ず農薬登録のある石灰窒素を使用し、農薬使用基準を遵守する。

②水産動植物への影響が強いので（水産△、成分：カルシウムシアナミド）一時に広範囲に使用する場合には十分に注意する。

（広域散布の留意点）

・使用時期、使用地区などが重複、集中しないよう、技術指導者の計画的指示に基づいて実施する。
・天気予報などに注意して、少なくとも散布後３～４日は大雨、集中豪雨などがない時期を選ぶ。
・散布した石灰窒素が、水路や河川などに飛散しないよう注意する。
・散布後は、水田の水が用（排）水路などに流れ出ないよう、水戸口管理に注意する。

③周辺作物に飛散して薬害（褐変、枯損）などを起こさぬよう、散布時には十分に注意する。
④散布後、隣接圃場へ流入（漏水）して、農作物を枯損させた事例があるので、周辺圃場の作付け状況や隣接水田への漏水などに注意する。
⑤粉（粉塵）飛散による人体への影響もあるので、粒状石灰窒素の使用が望ましい。また、散布時には防護服、マスク、防護メガネなどを着用する。
⑥死貝の腐敗臭があるので、殺貝効果を確認後は水田への鋤込みが望ましい。
⑦先進県の事例では、石灰窒素の施用頻度は、当初は２年連続、その後は発生状況により、２～３年に１回の散布を指導している。

⑧石灰窒素による単一の防除対策だけでなく、新たな貝の侵入を防ぐなど、総合的な防除を考えて推進することによって、防除効果の高まりと効果の持続が期待できる。

※　石灰窒素による防除（登録条件）

荒起し後全面に散布、３～４㎝に湛水し、３～４日放置後植代を行う（漏水を防止すること）。／植代前または刈取後（水温15℃以上の時期）、３～４㎝に湛水し、１～４日後前面に散布、３～４日放置する。

＊　注意事項

ア　効果を高めるためには、水中遊泳など貝の活動開始を確認してから石灰窒素を散布することが大切である。

イ　漏水田(または減水深の大きい水田)では効果が劣るので、事前に代かき等を行い漏水を防止しておく。

ウ　散布後は、水のかけ流しをしない。（効果の低下）。

エ　散布後、３～４日間（代かきが終わるまで）は落水しない。また、途中で水がなくならないよう、十分量湛水しておく。

オ　ただし、湛水深が深すぎると、効果の低下につながる。

カ　水稲刈取後の散布では、水温15℃以上の時期までの効果が高いので、散布時期が遅れないように注意する。

キ　石灰窒素は、肥料分として窒素を20%含むので、田植前散布では石灰窒素の窒素成分は基肥として換算する。

(2)　育苗箱施用、本田施用による防除

機械移植の場合は、育苗箱施用と水面施用（田植後５～７日）を体系的に実施すると効果が高まる。

また、薬剤防除だけでは、十分な効果が得られにくいので、物理的防除や耕種的防除を組み合わせた体系防除が望ましい。

(3)　スクミリンゴガイに登録のある主な農薬

薬　剤　名		コード：成　分	使用量	注　意　事　項
植代前施用剤（殺　貝）	石灰窒素	その他：石灰窒素	20～30kg/10a 30kg/10a	(1)石灰窒素による防除の注意事項参照。 (2)漏水を防止する。 (3)散布時には、周辺作物への飛散に注意する。 (4)隣接圃場への流入に注意する。
育苗箱施用（食害防止）	パダン粒剤４	14：ｶﾙﾀｯﾌﾟ	60～100g/箱	(1)水産動植物への影響に注意する。 (2)使用時期：は種前又は移植当日
本田施用剤（殺　貝）	スクミノン ジャンボたにしくん スクミンベイト３	8(他)：ﾒﾀｱﾙﾃﾞﾋﾄﾞ 8(他)：ﾒﾀｱﾙﾃﾞﾋﾄﾞ un：燐酸第二鉄	１～４kg/10a １～２kg/10a ２～８kg/10a	(1)処理後は水を止めて浅水(3～4cm程度)で3～4日保つ。パダン粒剤４は魚毒に注意する。 (2)使用時期 スクミノン：収穫60日前まで（2回以内） ジャンボたにしくん：収穫60日前まで（2回以内） スクミノンベイト３：発生時 パダン粒剤４：収穫30日前まで（6回以内） (3)スクミノン、ジャンボたにしくん、スクミンベイト３を処理した場合は、他の本田施用粒剤は1週間程度経過してから散布する。
無人航空機による散布	スクミンベイト３ スクミノン	un：燐酸第二鉄 8(他)：ﾒﾀｱﾙﾃﾞﾋﾄﾞ	２～８kg/10a １～４kg/10a	
本田施用剤（食害防止）	パダン粒剤４ 上記薬剤及びその混合剤（登録に留意する）	1：ｶﾙﾀｯﾌﾟ	４kg/10a	
刈取後施用剤（殺　貝）	石灰窒素	その他：石灰窒素	20～30kg/10a	(1)石灰窒素による防除の注意事項参照。 (2)散布時には、周辺作物への飛散に注意する。 (3)隣接圃場への流入に注意する。 (4)漏水を防止する。 (5)水温15℃以上の時期

※ラベルに記載された使用方法等を遵守すること。

表中の成分名の前の数字（記号）は作用機作による分類コードを示す。

(13) 斑点米カメムシ類に対する殺虫剤の効果

表　薬剤の斑点米抑制効果

薬剤名	IRAC	カメムシ類（大型・小型）による斑点米抑制効果	
			大型カメムシ類による斑点米抑制効果
スタークル/アルバリン（液・粉剤）	4A	◎	○
スタークル/アルバリン（粒剤）	4A	○～△	○
ダントツ（水溶剤・粉剤）	4A	○	△
エクシード（フロアブル・粉剤）	4C	◎	○
エミリアフロアブル	4F	△	○
トレボン（乳剤・粉剤）	3A	○～△	○～△
キラップ（フロアブル・粉剤）	2B	○	○

1）◎：効果高い　○：効果がある　△：効果がやや低い　（－）：データなし
2）日植防試験結果（1996～2019）を基に作成（各試験の無処理区に対しての斑点米発生率で評価）
◎：発生率を19.9%以下に抑制　○：発生率を20.0～29.9%に抑制
○～△：発生率を30.0～34.9%に抑制　△：発生率が35.0%以上

（注）水稲の開花期防除に当たっては蜜蜂の危被害防止に努めること。

(14) ミナミアオカメムシの防除法

1　発生状況

昭和48年頃までは旧宇和島市以南までの発生に限られていた。しかし、平成17年に中予地域での発生が確認され、平成20年には東予地域でも発生が確認された。平成20～21年の水稲広域調査の結果、東予・中予平坦部のほぼ全域での発生を確認した。

2　被害

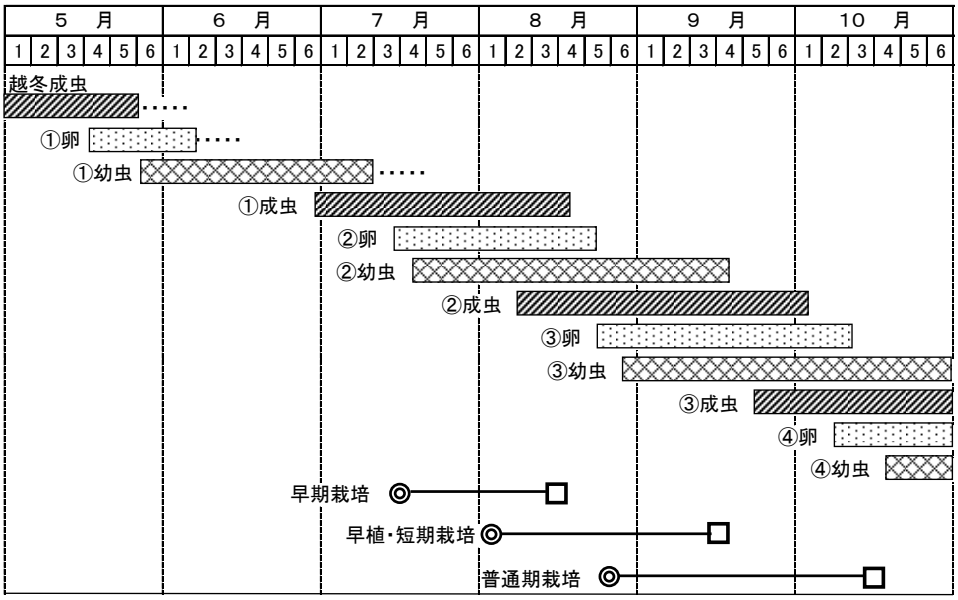
広食性であり、水稲・豆類・野菜・果樹等広範に寄生するが、特に大きな被害を受けるのは水稲と大豆である。水稲では、穂を吸汁し、他の斑点米カメムシ類に比べて被害度の高い斑点米を発生させる（１頭当たりの斑点米発生能力が高い）。大豆では、不稔莢や奇形莢となり減収に直結する。

3　発生生態

越冬は成虫態により、日当たりのよい常緑樹の樹冠内部や落ち葉間などで行われる。越冬成虫は４月～５月初めから活動し始める。その後、年間３～４世代発生し、11月下旬頃には越冬場所に移動する。また、近縁種のアオクサカメムシに比べて、年間発生世代数が多く、１頭の雌の産卵数（約170個）も多い。

世代を重ねる（時期を追う）に伴って、特に９月以降は、各世代や各発育段階の混発が進み、発生量も多くなる。このため、早期水稲が出穂する時期（夏期）に比べて、普通期水稲が出穂する時期（秋期）での発生が目立つようになる。

ミナミアオカメムシの発生経過（東予・中予モデル）



注1）①は第1世代、②は第2世代、③は第3世代、④は第4世代
注2）◎は出穂期、□は成熟期

水稲の成育ステージとミナミアオカメムシの世代の関係

	7月中旬	7月下旬	8月上旬	8月中旬	8月下旬	9月上旬	9月中下旬
	早期栽培		早植・短期栽培		普通期栽培		
	出穂期	出穂10～15日後	出穂期	出穂10～15日後	出穂期	出穂10～15日後	－
第1世代成虫	●	●	●	●			
第2世代幼虫		●	●	●	●	●	
第2世代成虫				●	●	●	●
第3世代幼虫						●	●
第3世代成虫							●

4　防除対策

①出穂が進むにつれて寄生が目立つ傾向があるため、出穂期以降に圃場をよく観察して、発生を確認したら早めに防除する。近隣に大豆・えだまめがある場合は、特に発生に注意する。

②早期・短期栽培の水稲ひこばえで越冬個体が増加するので、早めに鋤き込む。

③秋期に発生が多くなるため、特に普通期栽培では、出穂期防除、仕上げ防除を徹底する。

④早期水稲の刈取りが終了した近隣の普通期水稲において、本種の発生が目立つ傾向があるので注意する。

⑤粒剤を処理した場合には防除効果が不十分な場合があるので、その後の発生に注意する。

(15)イネカメムシの防除法

1　発生状況

1990年頃まで県内で発生していた虫であるが、その後は殆ど認められなくなっていた。2012年頃より南予を中心に圃場で見かけられるようになり、調査における捕獲数も増加してきている。近年、東・中予でも見かけられるようになり、2024年には発生の多い圃場も認められた。

2　被害

成幼虫ともに籾の基部を吸汁することにより基部が変色した斑点米を生じさせる。また、他の斑点米カメムシと異なり乳熟期までに籾の基部を吸汁して不稔籾を生じさせ、加害が多いと穂は充実せず直立したままとなり減収を招く。早期栽培が多くある地域の普通期栽培等で被害が多くなる傾向にある。

3　発生生態

越冬は樹木の樹枝間やイネ科雑草の株元で、成虫で行われる。稲への嗜好性が高く、雑草への寄生はあまり見られない。水稲の出穂とともに越冬場所から水田に侵入し、また、出穂間もない穂の嗜好性が高いことから、出穂時期の異なる水稲を移動しながら増殖しているとみられる。多くは年1世代と考えられるが、一部地域では第2世代も発生しているとみられる。

4　防除対策

イネカメムシの不稔粒形成能力は他の斑点米カメムシに比べ高いことから、不稔粒の抑制には出穂期の防除を、また、その1週間後に2回目の防除を行うと斑点米の抑制効果が高い。

本種はイネ科雑草への寄生が低いことから、他の斑点米カメムシと異なり畦畔や周辺の休耕田の草刈りによる対策は効果が低い。

(16) 育苗時の生理障害

障害名	症状	耕種的対策	注意事項
白化現象	緑化された苗の葉に白いしま模様ができる（高温で発芽させ、低温下で緑化させた場合や、暗所発芽で伸びすぎた苗に強い光線を当てた場合に発生する）。	(1)緑化は屋内でするか、寒冷紗やシルバーポリなどで遮光と保温に努める。 (2)高冷地や５月末までに育苗するには、緑化時にビニールトンネル等で保温する。 (3)発芽温度は25～30℃とする。	緑化時期が遅れないようにする。
燐酸過剰症	葉に退色の斑点ができ、葉焼け症状に似た症状を示す（ｐＨ矯正のため過燐酸石灰等を多めに入れた場合によくでる）。	(1)燐酸の使用量は１箱当り１g以下とする。 (2)特に燐酸肥料は、細かく砕き均一に土と混ぜる。	緩衝能の低い土壌では、燐酸が少量でも症状の出る場合がある。 症状の軽いものは実害が無く、植付け可能である。
二段根苗症状	芽が芝のように伸び二段三段に発根する（箱を積み重ねて出芽させた時で、緑化の遅れた場合に出る）。	(1)発芽むらを避けるため、浸種は水を毎日替えるとともに催芽を行う。 (2)出芽室内に温度むらがある場合は箱の積み替えをする。出芽したものから早く緑化させる。	出芽室は、温度むらのないよう設備する。障害苗の多い場合は、本田に植付けるのは好ましくない。
水分過多障害	箱を積み重ねて発芽させ緑化させようとして箱を広げてみると、根か葉か区別のつかないような芽だけが伸び、根の発育の悪い苗ができることがある。	(1)播種後の灌水量が多すぎないように注意する（１箱当り500mℓ 程度）。 (2)育苗培土は重粘土や微粘土では被害が大きいので砂壌土～壌土を使用する。 (3)水分量が多すぎた場合は、広げて発芽させる。	発芽の際の水分の多過ぎは酸素の供給を悪くし、このため種子は体から酸素を出して必要な酸素を供給して発芽だけはするが、根にまで及ばないので、芽だけが伸びる苗になる。
土壌のアルカリ障害又は酸性土壌の障害	緑化後も苗がうす緑色で生育が劣る。また、強酸性の場合は反対に濃緑色となって生育は進まない場合もある。	(1)床土の選定に当たっては、ｐＨを測定して適正なものを選ぶ。一般的には山土などが良い。 (2)野菜などを栽培した畑の土は石灰を多用したものが多いから注意する。 (3)ｐＨが高い場合は、硫黄華(粉)又は希硫酸で矯正する。100kgの用土のｐＨを１下げるのに必要な硫黄華の量は、砂壌土で60ｇ、壌土で80ｇである。 (4) 硫黄華による矯正は１か月以上前に行い、土壌と良く混和する。 (5) 育苗用土のｐＨが低すぎる場合はもみ殻くん炭等で矯正する。	多くの場合はアルカリの害が多く見られ、立枯病の原因にもなる（床土のｐＨは4.5～5.5くらいがよい生育を示す。ｐＨが高くなると養分の吸収、生理機能が低下し、黄色となって生育は劣る。一方、ｐＨが低すぎても生育機能が劣り、葉色は濃緑色を示し、生育は劣る）。
種もみの持ち上り現象	箱育苗の出芽時に種もみが土の上に持ち上り、甚だしい場合には、根も露出して倒れ、芽生えが乱れるばかりでなく、その後ももみや根が乾燥するので、苗の生育が遅れて不揃いとなり、植付精度が劣って欠株や活着不良の原因となる。	(1)床土水分の低い場合に発生の多いことから、床土水分の保持、床周辺の湿度を70～80%に低下させること。 (2)覆土の厚さを４～５㎜とするとともに、箱を７～８段積み重ねると、その重みで持ち上がりが防止される。	土が硬い場合、ビニール等で密閉した場合、また床土水分が少なく周辺湿度の高い場合に多く見られる。
ムレ苗現象	箱内の苗が軟弱徒長で色があせたり、下葉が枯れたりして苗の素質が低下する。	(1)育苗用土のｐＨが高い場合に発生しやすいので、好適ｐＨに矯正する。用土の好適ｐＨは4.5～5.5である。 (2)温・湿度の変化、土質、施肥量、播種量等も関与しているので、適正な播種量と温度管理（早朝の低温等）に留意する。	播種量の多すぎる場合や高温多湿条件下で発生が多い。 ムレ苗は、リゾープス属菌やムコール属菌を誘発する原因になる。
マット形成不良（根張りの悪い苗）	根の張りが悪く、根の塊であるマットの形成が不良なため、田植え作業中に苗が崩れて田植え作業に支障をきたす。	(1)育苗中の灌水量が多い場合に発生しやすいので、できる限り少ない灌水で育苗する。 (2)用土が硬い場合や粘質土壌で発生しやすいので、適正な用土を用いる。	早期栽培など低温時の温度変化が大きい場合に発生しやすい。 夕方の灌水が多いと発生しやすいので夕方の灌水は行わない。

(17) 水田雑草防除法

1)水田雑草防除の留意点

(1)総合防除

①除草剤だけに頼らずに、手取り除草やヒエ穂の抜き取り、水稲収穫後の排水による乾田化や冬期耕起、畦畔の草刈り除草等の耕種的防除を含めた総合防除に努める。

②クログワイ・セリ・オモダカ・コウキヤガラ・キシュウスズメノヒエ・ミズガヤツリなど難防除雑草には、水稲刈取後や春期耕起前の茎葉処理除草剤、田植え直後の初期除草剤及び中・後期除草剤による除草剤体系処理や冬期の耕起、手取り除草、畦畔の草刈り除草等の耕種的方法の両面から防除を行う。

(2)水田の整備

①水田外への農薬(除草剤以外も含む)の流出を防止するとともに、安定した湛水状態を保ち除草剤の効果及び薬害の発生を抑える意味から、水稲栽培が始まる前に、畦畔や水尻(落水口)からの漏水を防止し、また、縦浸透が2㎝以下になるように整備しておく。畦畔からの漏水が大きい場合は畦畔1m当たり8kg、縦浸透の大きい水田では10a当たり1～2tのベントナイト施用が有効である。

②高低差のある水田では、湛水時に水面から露出するような高部で除草効果の著しい低下(特にタカサブロウ、タウコギ、ヒレタゴボウ、クサネムなどの大型一年生広葉雑草の繁茂)、苗が水没するような低部で水稲の生育抑制や欠株等の薬害発生があるので、水田の均平に努める。

③代かきが均一にできない場合、土壌の密度が高く土が集まっている部分では植え穴の戻りが悪く、イネの根が露出して薬害を生じることがあるので、代かきを丁寧に土壌の均一化、均平化を図る。

④稲わらなど有機物の分解に伴う土壌の強還元による除草剤の薬害を防ぐため、稲わらの切込み田では石灰窒素の施用と冬期の鋤込を励行して腐熟化を進める。また、牧草の地下部や野菜等前作の他作物の残渣が多い場合も強還元となるので注意する。さらに、同様の理由で水稲作前の春期の有機質多量施用を避ける。

(3)健苗育成と適正田植え

①軟弱苗及び浅植・深植では薬害が出やすいので、健苗の育成に努める。

②田植機の植付け爪の磨耗やその他の理由により、田植機の植付け精度が低下すると、浮苗の発生や根部の露出で薬害の発生要因になるので、田植え前に植付け爪の交換を行うとともに、適正な田植えができるように田植機の点検・調整を行う。

③浅植えや根部の露出は薬害の発生要因になり、深植えでは水稲の分げつ抑制、生育抑制となるので、2～3㎝の適正な深度に植付ける。

④田植え時の土壌が柔らかすぎる場合は流れ苗や根の浮き上がり、硬過ぎる場合は植え穴の戻りが悪くなって、どちらも薬害発生要因になるので、適正な土壌硬度で移植する。

(4)水田除草剤使用上の注意事項等

①除草剤によっては、処理時の高温や低温、深水や浅水など様々な条件で薬害が発生することがあるので、除草剤の特性を熟知するとともに水田の条件等を把握し、適正な使用に努める。

②除草剤の使用に当たっては、水田の占有草種に適応した除草剤を選定する。また、雑草発生が少ない場合や発生草種が少ない場合は、成分数の少ない剤や少量散布など使用薬量を減らすよう努める。

③同一除草剤の連年使用は特定草種の占有化が進む場合があるので、3～5年毎に特性の異なった除草剤に変更する。

④除草剤の種類や銘柄によって使用方法や量及び時期が異なるので、容器やラベル等に記載のある使用基準を遵守する。

⑤適期・適量の均一散布に心がけ、風の強い時は散布や拡散むらができるので中止する。

⑥大雨によるオーバーフローは除草効果の著しい低下のみならず、環境の汚染につながるので、散布後大雨が予想される場合は、除草剤処理を延期する。

⑦湛水処理除草剤では水深を3～5㎝にして、水口・水尻を止めてから散布する。除草効果を安定させるとともに水田外への成分の流出を防ぐため、処理後少なくとも7日間は完全止水し、3～5日間は湛水状態を保ち(事前の代かきや漏水対策が重要)、かけ流しや田面露出のないようにする。

⑧処理後に(7日以上置いて)再入水する場合は、一気に多量の入水をせずに静かに行う。

⑨初期除草剤のうち、水稲の移植前にも使用することができる除草剤を移植前に使う場合は、従来は「植代時（後）から移植前4日まで」となっていたが、水産動植物の被害防止や環境への影響の観点から、使用時期は「植代時から移植前7日まで」とし、田植え6日前以降には使用しない。（初期剤の一般的注意事項を参照のこと）

⑩発生時期が遅れるクログワイ、オモダカと一年生雑草の共生田や代かきから田植までの期間の長い水田では、初期除草剤と中・後期除草剤との体系処理が必要になることがある。

⑪多くの除草剤がれんこん、くわい、せり、いぐさ、さといもなどの生育を阻害する恐れがあるので、これらの作物の生育期に隣接田で使用する場合は、除草剤や除草剤を含む水が入らないように特に注意する。

⑫有用植物の生育を阻害する恐れがあるので、除草剤を散布した水田の水を作物に灌水しない。

⑬下記のような条件では、多くの除草剤で生育抑制、分げつ抑制などの薬害を生ずるおそれがあり、特にこれらの条件が重なる場合は、薬害が助長されるので注意する。

・異常高温の時、あるいは散布後数日以内に梅雨明けになるなど異常高温（29℃以上）が数日続く時・活着遅延を生ずるような異常低温（15～16℃以下）が数日続く時
・砂質土壌の水田及び漏水の大きな水田（減水深2cm/日以上）
・軟弱徒長した苗を移植した場合
・有機物が分解して土壌が異常還元になった水田
・極端な浅植、浮き苗等イネの根が露出している場合
・田植機の植え穴のもどりが悪い水田

⑭ヒエ剤（主としてノビエに効果のある成分）のオキサジクロメホン、エスプロカルブ、カフェンストロール、メフェナセットなどの成分を含む除草剤は、上記条件のうち成分がイネの根に直接触れるような状況で著しい薬害を生じることがあるので注意する。

⑮水稲除草剤では使用時期の登録を、～ノビエ○葉期までとしているが、特に初期剤や初中期一発除草剤等では、気象・圃場条件や生育ステージのバラつきにより生育が進んだノビエ個体が混在したり、ホタルイ、コナギなど他の雑草の生育ステージが進んで除草効果が大幅に低下したりすることがあるので、使用時期の登録範囲内でやや早めに使用するのが良い。

(5) 水産動植物に関する注意事項

①除草剤の使用に当たっては魚介類に対する危害を未然に防ぐため、除草剤散布後、水が流出することのないよう天気予報、地域の実情を十分勘案して使用する。特に、河川・湖沼・養魚池・海域付近で、一時に広範囲に散布される場合には注意が必要である。

②除草剤の処理後7日程度は完全に止水し、水尻や畦畔等から薬剤を含む水が流出しないようにする。

③散布器具及び容器の洗浄水は、河川等に流さないこと。また、空容器、空袋等は水産動植物に影響を与えないよう適切に処理すること。

(6) 育苗箱施用剤との誤用回避及び誤用時の対策

①除草剤の粒剤を育苗箱施用剤と誤用する事故が県内でも見受けられる。近年、除草剤の粒剤の袋には誤用を回避するような記述が増えてはいるが、誤用は後を絶たない。施用前に必ず袋を確認すること。

②近年、田植機に専用の散布機を装備して散布する田植え同時処理の可能な除草剤使用が多くなり、除草剤と育苗箱施用剤を同時に扱う機会が増えており、誤用が懸念される。施用前に必ず袋を確認すること。

③除草剤や育苗箱施用剤使用にあたっては、容器袋やラベルに書かれてある登録内容や注意事項を必ず読んで確認のうえ、記載事項を守って使用する。

④除草剤の粒剤を育苗箱施用剤と誤用した場合、除草剤の種類や処理量にもよるが、植付け苗の枯死、分げつ抑制、生育抑制、出穂遅延などの症状が発生し、30%以上の減収、品質低下は免れないため、下記のような対策をとって植え直す方が良い。

・除草剤の粒剤を育苗箱施用剤と誤用した水田は、良く乾かして田面を太陽光にさらして除草剤処理層を破壊する。
・イネへの安全性を示す具体的な試験データ等は無く、誤用した除草剤の成分の種類や量で差が大きいと思われるが、誤用後できる限り長く時間を置いてから代かき、田植えする。
・入水後代かきを入念に行って、再度田植えする。その場合、できる限り健苗を用いる。
・除草剤を含む代かき水が水田外に排出されないように注意する。

2)稚苗機械移植栽培雑草防除法

① 水稲除草剤特性表(基本薬剤)

系統	No	成分名	残効	移動	殺草メカニズムと薬害			
					作用性	作用部位	薬害の症状	薬害の条件
オキサゾリジンジオン系	1	ペントキサゾン	長	極小	非ホルモン接触型、光要求性(葉緑素生成阻害)	幼芽部、根部に作用、茎葉部	葉鞘褐変、生育抑制	・砂質土壌 ・火山灰土壌 ・苗が水没するような深水 ・軟弱徒長苗 ・極端な深植 ・極端な高温(29℃以上)
オキサジノン系	2	オキサジクロメホン	極長	小	非ホルモン吸収移行型、ジベレリン代謝活性阻害、茎葉部のクロロシスと生育停止	根部、茎葉基部から吸収	生育抑制、生育遅延、褐変	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植え、根部露出 ・田植え後の土のもどり不良 ・深植 ・低温(15～16℃以下)、高温(29℃以上)
イソキサゾリン系	3	フェノキサスルホン	長	小	非ホルモン吸収移行型、クチクラ層の超長鎖脂肪酸の合成酵素阻害	根部、茎葉基部、茎葉部から吸収	生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植 ・田植え後の土のもどり不良
カーバメート系	4	エスプロカルブ	長	小	非ホルモン吸収移行型、オーキシン活性・タンパク質生合成阻害	根部、幼芽部、茎葉部から吸収され生長点に作用	生育抑制、草丈抑制	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・極端な還元状態(ガス発生田) ・軟弱徒長苗 ・活着不良
	5	ベンチオカーブ	中	小				
キノン系	6	アミノクロロナフトキン(ACN)	短	小	非ホルモン吸収移行型、酸化力、酸化的リン酸化解除、光合成阻害	幼芽部、茎葉部から吸収され、作用点に移行	褐変	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗・水稲への安全性は高い(藻類に卓効)
酸アミド系	7	ブタクロール	長	小	非ホルモン吸収移行型、超長鎖脂肪酸生合成阻害	幼芽部、根部から吸収され、幼芽部の伸長を抑制	葉身、葉鞘の伸長抑制、わい化症状	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・浅水(田面露出)・軟弱苗 ・極端な還元状態(ガス発生田) ・極端な浅植え、根部露出 ・田植え後の土のもどり不良 ・高温(29℃以上) ・急激な温度変化
	8	プレチラクロール	中長	小				
	9	テニルクロール	長	小			生育抑制、分げつ抑制	
	10	メフェナセット	長	極小				
	11	ブロモブチド	長	中	非ホルモン吸収移行型、成長点の細胞分裂阻害	根部、幼芽部から吸収、茎葉部の生長点に作用	流れ葉、生育抑制、葉色の黄化	
スルホニルウレア系(SU系)	12	イマゾスルフロン	長	小	非ホルモン吸収移行型アミノ酸合成阻害、ALS阻害	茎葉・根部から吸収され、作用点に移行	葉色の淡化葉身細化、分げつ抑制、根部抑制	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植え、根部露出 ・田植え後の土のもどり不良 ・高温(29℃以上) ・急激な温度変化
	13	シクロスルファムロン	極長	小中				
	14	ピラゾスルフロンエチル	長	中				
	15	フルセトスルフロン	長	中				
	16	ベンスルフロンメチル	極長	小				
	17	ハロスルフロンメチル	長	中				
	18	プロピリスルフロン	長	小			生育抑制、生育遅延	
	19	メタゾスルフロン	長	中				
スルホンアニリド系	20	ピリミスルファン	長	中	非ホルモン型、移行型、アミノ酸生成阻害、ALS阻害	根部、茎葉基部から吸収され、生長点に作用	生育抑制	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植え、根部露出
	21	トリアファモン	極長	極小～小	ALS阻害	根部、茎葉基部	生育抑制	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植え、根部露出
スルホンアミド系	22	ペノキススラム	中	中	アミノ酸生成阻害、ALS阻害、成長停止、ネクロシス	茎葉部から吸収作用点に移行	生育抑制、生育遅延	・出穂期散布 ・軟弱苗 ・重複散布
ダイアジン系	23	ベンタゾン	－	中	非ホルモン移行型(光合成阻害)	茎葉・根部から吸収され、作用点に移行	葉の黄化(緑失)、斑点状葉、灰褐色葉先枯れ	・プロパニル剤との10日以内の近接散布、混用散布で薬害が助長されることがある。 ・通常の処理量、処理条件では水稲への薬害ほとんど認められない。
テトラゾリノン系	24	フェントラザミド	長	極小	非ホルモン移行型、細胞分裂、伸長阻害	根部、幼芽部、生長点に作用	生育抑制	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植え、根部露出
トリアゾリノン系	25	イプフェンカルバゾン	極長	極小	非ホルモン吸収移行型、葉身、葉鞘の身長阻害、葉の濃緑化、捻転	根部、茎葉基部から吸収され、細胞身長阻害	生育抑制、濃緑化	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱な苗を移植した水田 ・極端な浅植の水田及び浮き苗の多い水田
	26	カルフェントラゾンエチル	中	小	幼芽部、茎葉部から吸収、白化	幼芽部、茎葉部から吸収され、作用点に移行	発芽阻害、白化、生育抑制	・砂質土壌・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱な苗を移植した水田 ・極端な浅植の水田及び浮き苗の多い水田
トリアジン系	27	ジメタメトリン	極長	小	非ホルモン吸収移行型(光合成阻害)	根部・茎葉部から吸収され、作用点に移行	葉枯れ、葉先枯れ、下葉枯れ、葉鞘褐変 生育抑制	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・極端な還元状態(ガス発生田)・活着不良 ・浅水(田面露出) ・軟弱苗・深植 ・高温(29℃以上) ・急激な温度変化
	28	シメトリン	中長	小中				
トリアゾール系	29	カフェンストロール	長	極小	非ホルモン吸収移行型(細胞分裂阻害)	茎葉・根部から吸収され、作用点に移行	生育抑制、分げつ抑制	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗・浅水・極端な浅植え、根部露出 ・極端な還元状態(ガス発生田) ・高温(29℃以上) ・田植え後の土のもどり不良 ・急激な温度変化
トリケトン系	30	テフリルトリオン	長	中	非ホルモン吸収移行型HPPD阻害(クロロフィル合成阻害による白化)、光合成伝達阻害	根部、幼芽部、茎葉基部から吸収して新葉に作用	白化、葉枯れ 分げつ抑制 生育抑制	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植え、根部露出 ・著しい低温 ・飼料用イネなど
	31	ベンゾビシクロン	極長	極小				
	32	メソトリオン	長	小	本酵素活性を阻害して色素生成に影響	根部、茎葉より吸収、白化症状を発現して枯死	生育抑制	
	33	フェンキノトリオン	極長	小中	4-HPPD阻害	根部、基部	生育抑制	
尿素系	34	クミルロン	長	極小	非ホルモン吸収移行型、細胞分裂および伸長阻害	根部から吸収され、発根抑制、根伸長阻害、生育抑制	生育抑制	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・活着不良 ・極端な深植 ・低温(15～16℃以下) ・ダイムロンにはスルホニルウレア系除草剤などによる薬害を軽減効果
	35	ダイムロン	長	小			発根抑制、生育・出穂遅延	
ピラゾール系(ダイアゾール系)	36	ピラゾレート	長	小中	非ホルモン吸収移行型、葉緑素の生成を阻害、HPPD阻害(クロロフィル合成阻害による白化)	幼芽部、根部から吸収、処理後に展開する新葉の白化	クロロシス(白化)	・砂質土壌 ・高温(29℃以上)
	37	ピラゾキシフェン	長	小				
	38	ピラクロニル	長	極小			葉鞘褐変、生育抑制	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植え、根部露出
	39	ベンゾフェナップ	長	小				
ピリミジルカルボキシ系	40	ピリフタリド	長	極小	非ホルモン吸収移行型アミノ酸生成阻害、ALS阻害	根部、茎葉基部及び茎葉部から吸収され作用点に移行	生育の抑制・遅延	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植え
	41	ピリミノバックメチル	長	中			分げつ抑制葉身細化根部抑制	
フェノキシプロピオン酸系	42	シハロホップブチル	－	小	非ホルモン型、移行型、細胞分裂阻害、脂肪酸生合成阻害	茎葉部から吸収され、生長点に移行	水稲に極めて安全	・通常の処理量、処理条件では水稲への薬害はほとんど認められない。
	43	メタミホップ	中	小			初期生育の抑制	・砂質土壌及び漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植えや深植えをした水田
フェノキシ系	44	MCP	長	小	ホルモン移行型オーキシン作用撹乱による異常生長	幼芽部、根部から吸収され、作用点に移行	分げつ抑制、ロール葉(筒状葉)、生育抑制、株開張、瘤状根、下葉枯れ	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・活着不良 ・軟弱苗 ・極端な浅植え、根部露出 ・深植 ・低温(15～16℃以下)(筒状葉) ・高温(29℃以上)
	45	2,4－PA	短	中				
	46	クロメプロップ	長	中			生育抑制	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・活着不良
フェノキシピリダジン系	47	シクロピリモレート	長	極小	HST阻害	茎葉部から緩数され、展開新葉の白化後枯殺	クロロシス(白化)	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・極端な浅植など
ベンゾフラニルアルキルスルホン酸系	48	ベンフレセート	極長		非ホルモン型、移行型、細胞分裂阻害、脂肪酸生合成阻害	根部、茎葉基部から吸収され、生長点に作用	生育抑制、濃緑化	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植え、根部露出
アリルピコリネート系	49	フロルピラウキシフェンベンジル	長	小	ホルモン移行型オーキシン作用撹乱による生育阻害	茎葉部から吸収され、生長点に作用	幼穂形成以降使用時:葉先黄化、止葉下垂	・砂質土壌 ・漏水田(減水深2cm／日以上) ・軟弱苗 ・極端な浅植え、根部露出

No	成分名（五十音順）	毒性	一年生雑草					多年生雑草						
		人畜	ノビエ	カヤツリグサ	コナギ	その他広葉	藻類	マツバイ	ホタルイ	ミズガヤツリ	ウリカワ	クログワイ	オモダカ	ヒルムシロ
1	アミノクロロナフトキン	普	△	○	○～◎	○～◎	●	○	△	△	●	△	◎	●
2	イプフェンカルバゾン	普	●	●	◎～●	◎		●	◎	◎	△	△	△	
3	イマゾスルフロン	普	○	●	●	●	◎	●	●	●	●	◎	◎	●
4	エスプロカルブ	普	●	●	◎～○	◎～○		●	◎	○	△			
5	オキサジクロメホン	普	●	●	△	△		△	△	△	△			
6	カフェンストロール	普	●	●	●～◎	◎		●	◎～○	◎～○	△	△	△	
7	カルフェントラゾンエチル	普	◎	●	●	●		●	●	●	●	○～◎	●	
8	クミルロン	普	○	●	△	△		●	●	●	△	●～◎	△	
9	クロメプロップ	普	△	●	●	●		●	●	△	◎			
10	シクロスルファムロン	普	○	●	●	●	◎	●	●	●	●	◎	●	●
11	シクロピリモレート(サイラ)	普	●～◎	●	●	●～◎			●～◎	●	◎		●	
12	シハロホップブチル	普	●	△	△	△		△	△	△	△	△	△	
13	ジメタメトリン	普	◎	●	●	●	●	●	◎	◎	△			●
14	シメトリン	普	◎	◎	●	●	●	◎	○	○	◎	△	△	●
15	ダイムロン	普	○	●	◎	◎		●	●	◎	△	◎	△	
16	テニルクロール	普	●	●	◎	◎		●	◎	◎	△	△	△	
17	テフリルトリオン	普	◎	●	●	●		●	●	●	◎	●	●	●
18	トリアファモン	普	●	●	△	△		●	●	●	●	●	●	
19	ハロスルフロンメチル	普	○～◎	●	●	●		●	●	●	●	◎	●	
20	ピラクロニル	普	●	●	●	●		●	●	◎～○	◎	◎	●～◎	◎
21	ピラゾキシフェン	普	●	●	●	◎		◎	◎	◎	●		●	●
22	ピラゾスルフロンエチル	普	○～◎	●	●	●	◎	●	●	●	●	◎	●	●
23	ピラゾレート	普	●	●	●	◎		◎	◎	◎	●		●	●
24	ピリフタリド	普	●	◎	△	●～◎		◎	○	◎	△			
25	ピリミスルファン	普	●	●	●	●	◎	●	●	●	●	◎	●	●
26	ピリミノバックメチル	普	●	△	△	△		△	△	△	△	△	△	
27	フェノキサスルホン	普	●	●	●	◎		●	◎～○	○		△	△	
28	フェンキノトリオン	普	△	●	●	●		●	●	●	●			
29	フェントラザミド	普	●	●	◎	◎		●	○	○	○	△	△	
30	ブタクロール	普	●	●	◎	●		●	●～◎	◎	△	△	△	
31	フルセトスルフロン	普	●	◎	●	○	◎	◎	●	△	◎	○	○	●
32	プレチラクロール	普	●	●	◎	●		●	●	◎	△			
33	プロピリスルフロン	普	●	●	●	●	◎	●	●	●	●	●	●	●
34	ブロモブチド	普	◎	●	●	○		●	●	●～◎	○	◎	○	
35	フロルピラウキシフェンベンジル	普	●	●	●	●				●	●		●	
36	ペノキススラム	普	●	●	●	●	◎	●	●	●～◎	●	●	●	●
37	ベンスルフロンメチル	普	○	●	●	●	◎	●	●	●	●	●	○～◎	●
38	ベンゾビシクロン	普	●	●	●	◎		●	●	●	○	○	△	●
39	ベンゾフェナップ	普	◎	◎	●	●		◎	○	○	●	△	◎	●
40	ベンタゾン	普	△	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●
41	ベンチオカーブ	普	●	●	○	◎		●	◎	○	△	△	△	
42	ペントキサゾン	普	●	●	●	●	●	◎	◎	◎	●	◎	◎	△
43	ベンフレセート	普	◎	△	△	△		●	◎	●		●	◎	
44	メソトリオン	普	△	●	●	●		●	●	○	○			
45	メタゾスルフロン	普	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	
46	メタミホップ	普	●	△	△	△		△	△	△	△	△	△	
47	メフェナセット	普	●	●	●	○		●	○	○	△	△	△	
48	2,4－PA	普	△	◎	◎	◎	○	○	●	◎	◎		◎	
49	ＭＣＰ	普		◎	◎	◎	○	○	●	◎	◎		◎	

注: ●極大(残草量0～10%) ◎大(残草量11～20%) ○中(残草量21～40%) △小 残草量41%以上) (公財)日本植物調節剤研究協会資料等参照)

②除草剤使用方法(10a当り)

(ア)初期剤

農薬名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
エリジャンジャンボ	プレチラクロール 15.0	植代後～移植前7日又は移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで	300g 小包装10個	(1)異常高温や異常低温時に薬害を助長することがある。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (3)コナギの多発田では効果が劣ることがある。
エリジャン乳剤	プレチラクロール 12.0	植代後～移植7日前まで	300mℓ	(1)異常高温や異常な低温時に薬害を助長することがある。 (2)300mℓの移植直後～ノビエ1葉期までは普通期栽培地帯のみ。 (3)コナギの多発田では効果が劣ることがある。 (4)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
		移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで		
エリジャンEW乳剤	プレチラクロール 38.5	移植時	500mℓ	(1)異常高温や異常な低温時に薬害を助長することがある。 (2)コナギの多発田では効果が劣ることがある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (4)100mℓの原液か、100mℓの原液を最大500mℓの散布水量となるよう希釈してから使用。
		移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで	100mℓ	
兆1キロ粒剤 ピラクロン1キロ粒剤	ピラクロニル 1.8	植代後～移植7日前又は移植直後～ノビエ1.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)1成分で幅広い雑草に有効。SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (2)多年生雑草は生育段階によって効果にふれが出る。
兆フロアブル ピラクロンフロアブル	ピラクロニル 3.6		500mℓ	
		移植時		(1)田植え同時処理が可能。
兆ジャンボ	ピラクロニル 6.0	植代後～移植7日前又は移植直後～ノビエ1.5葉期 但し、移植後30日まで	300g 小包装10個	(1)1成分で幅広い雑草に有効。SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (2)多年生雑草は生育段階によって効果にふれが出る。
草笛フロアブル	ペントキサゾン 8.2 クミルロン 27.4	植代期(移植7日前まで)	500mℓ	(1)移植前に散布する場合は、散布後7日以上の間隔をあけて苗を移植す (2)田植え同時処理が可能。 (3)カブレやすい体質の人は取り扱いに十分注意する。
		植代後～移植前7日又は移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで		
		移植時		
		植代後～移植前7日又は移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで	300mℓ 少量散布	
		移植時		
草笛ジャンボ	ペントキサゾン 4.5 クミルロン 15.0	植代後～移植前7日まで又は移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで	1kg～500g (20～10個)	(1)移植前に散布する場合は、散布後7日以上の間隔をあけて苗を移植す (2)カブレやすい体質の人は取り扱いに十分注意する。
サインヨシフロアブル	ペントキサゾン 8.6	植代時(移植7日前まで)	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。
		植代後～移植前7日又は移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで		
サキドリEW	プタクロール 12.0 ペントキサゾン 4.0		500mℓ	(1)梅雨明け等による異常高温時に薬害を助長することがある。 (2)移植後散布の場合は、水稲になるべくかからないようにする。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
テマカットフロアブル	ペントキサゾン 7.2 ダイムロン 28.0		500mℓ	(1)植代時の使用は、普通期栽培地帯のみ。
		移植時		
シング乳剤	プレチラクロール 8.0 ピリブチカルブ 12.0	植代時(移植7日前まで)	500mℓ	(1)異常高温や異常な低温時に薬害を助長することがある。 (2)移植後散布の場合は、水稲になるべくかからないようにする。 (3)蚕に影響があるので、周辺の桑葉にはかからないようにする。 (4)トラクター等の塗装面にかかると変色するおそれがある。 (5)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (6)300mℓの植代時～移植前7日までは普通期栽培地帯のみ。 (7)300mℓの少量散布は、移植後に使用する除草剤との体系で使用する。
		植代後～移植7日前まで	300mℓ 少量散布	
		植代時(移植7日前まで)		
		移植直後～移植後5日(ノビエ1葉期まで)		
マットタブジャンボ	クミルロン 18.0 テニルクロール 3.0	植代後～移植前7日又は移植直後～ノビエ1葉期 但し、移植後30日まで	250～500g 5～10個	(1)体系処理で長い効果が期待できる。 (2)コナギの多発田では効果が劣ることがある。

［初期剤の一般的注意事項］

(1) 初期剤は主として雑草の発生前から発生始期に有効なので、雑草(特にノビエ)の処理時期を失しないように散布する。
(2) 雑草多発田や難防除雑草発生田では、残草が多くなることがあるので移植後に使用する有効な後処理剤との組み合わせで使用する。
(3) 農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項を確認し、その内容を遵守する。
(4) 水稲の田植え前にも使用することができる除草剤を田植え前に使う場合は、除草剤散布後7日以上の間隔をあけて田植えする。
(5) 農薬のラベルに使用時期が「植代時(後)から移植前4日まで」と書かれている除草剤でも、農薬の河川等への流出を低減するため、使用時期は「植代時(後)から移植前7日まで」とし、移植前6日以降には使用しない。
(6) 代かき～田植え前7日に処理した水田の水は絶対に落水せずに、自然に減水するのを待って田植えする。
(7) 水稲の移植前に使用することができる除草剤でも、河川等の汚濁防止の観点からできれば移植前には使用しないようにする。

(イ)初中期一発処理剤

●粒剤タイプ

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
アカツキ1キロ粒剤	フェノキサゾルホン 20.0 フェンキノトリオン 3.0 メタゾスルフロン 1.0	移植時・移植直後～ノビエ3葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能。
アールタイプ1キロ粒剤	ピラゾレート 10.0 ベンゾビシクロン 2.0 メタゾスルフロン 0.6	移植後3日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草にも効果が高い。
アビログロウMX1キロ粒剤	ピラゾスルフロンエチル 0.3 ピリフタリド 1.5 プレチラクロール 4.5 メソトリオン 0.9	移植時・移植直後～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能。 (3)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。
イッテツ1キロ粒剤	イマゾスルフロン 0.9 カフェンストロール 3.0 ベンゾビシクロン 2.0	移植後5日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)カフェンストロールの薬害に関する注意事項を遵守する。 (2)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。 (3)水産動植物に対する注意事項を遵守する。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
イッポンD1キロ粒剤51	ベンスルフロンメチル 0.5 ピラクロニル 2.0 プロモブチド 6.0 ダイムロン 4.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。
イネキング1キロ粒剤	ピラゾレート 10.0 ピラクロニル 2.0 ベンゾビシクロン 2.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)非SU系剤 (2)田植え同時処理が可能 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (4)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。
イノーバDX 1キロ粒剤51	ベンスルフロンメチル 0.5 フェントラザミド 2.0 プロモブチド 7.5 ダイムロン 4.5	移植時・移植直後～ノビエ2葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ウルティモZ1キロ粒剤	シクロピリモレート 3.0 ピラゾレート 6.0 プロピリスルフロン 0.9	移植時・移植直後～ノビエ3.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)幅広い雑草に有効。ALS阻害剤抵抗性雑草、畦畔侵入雑草にも有効。
エンペラー1キロ粒剤	ピラクロニル 2.0 ピリミノバックメチル 0.8 フェンキノトリオン 3.0	移植時・移植直後～ノビエ3葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草や広葉雑草、イボクサ、カヤツリグサ科雑草も効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能。
カウントダウン1キロ粒剤 カウンシルエナジー1キロ粒剤 アバンティ1キロ粒剤	トリアファモン 0.5 フェンキノトリオン 3.0 フェントラザミド 3.0	移植直後～ノビエ3.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植同時処理可能。 (2)広葉雑草、イボクサ、カヤツリグサ科雑草も効果が高い。 (3)後作物として、なす、たまねぎ及びさやえんどうを栽培しない。
カイリキZ1キロ粒剤	イプフェンカルバゾン 2.5 テフリルトリオン 2.5 プロピリスルフロン 0.9	移植時・移植直後～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)SU抵抗性のホタルイ、オモダカ等にも効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能。
カチボシ1キロ粒剤51	イプフェンカルバゾン 2.5 テフリルトリオン 2.0 ベンスルフロンメチル 0.5	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (3)多年生雑草にも効果が高い。
カラット1キロ粒剤 キラリ1キロ粒剤	イマゾスルフロン 0.1 テフリルトリオン 2.0 ピラクロニル 2.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメミソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
キマリテ1キロ粒剤	イプフェンカルバゾン 2.5 テフリルトリオン 3.0	移植時・移植直後～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。
銀河1キロ粒剤	メタゾスルフロン 1.0 ダイムロン 10.0 ピラクロニル 2.0	移植時・移植直後～ノビエ3葉期。但し、収穫60日前まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草も効果が高いSU系剤 (2)多年生雑草にも効果が高い。 (3)初期剤と体系処理の中後期剤として使用可能
クサトッタ1キロ粒剤	ピラゾレート 12.0 プレチラクロール 4.5 ブロモブチド 6.0 ジメタメトリン 0.6	移植時・移植直後～ノビエ2葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)非SU系剤 (2)田植え同時処理が可能 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (4)SU系抵抗雑草にも効果がある。
クサトッタ粒剤	ピラゾレート 4.0 プレチラクロール 1.5 ブロモブチド 2.0 ジメタメトリン 0.2	移植時・移植直後～ノビエ2葉期 但し、移植後30日まで	3kg	(1)非SU系剤 (2)田植え同時処理が可能 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ゴエモン1キロ粒剤	イマゾスルフロン 0.9 イプフェンカルバゾン 2.0 ブロモブチド 9.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。
ゴーサイン粒剤	イマゾスルフロン 0.3 エスプロカルブ 7.0 ダイムロン 5.0	移植後5日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	3kg	(1)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (2)エスプロカルブの薬害に関する注意事項を遵守する。
コメット1キロ粒剤	メタゾスルフロン 0.6 テフリルトリオン 2.0 ピラクロニル 2.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草も効果が高いSU系剤
サラブレッドKAI 1キロ粒剤	オキサジクロメホン 1.4 ピラクロニル 2.0 イマゾスルフロン 0.9	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)効果の発現が非常に速い。
サラブレッドGO 1キロ粒剤	オキサジクロメホン 0.6 ピラクロニル 1.0 イマゾスルフロン 0.9 プロモブチド 9.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)効果の発現が非常に速い。 (3)SU系抵抗雑草や多年生雑草にも効果高い。
ジェイソウル1キロ粒剤	シクロピリモレート 3.0 ピラゾレート 6.0 フェントラザミド 3.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)ALS阻害抵抗性雑草に効果が高い。 (3)ノビエに対して長期残効を示す。
ジャイロ1キロ粒剤	イプフェンカルバゾン 2.5 ベンゾビシクロン 3.0 ベンゾフェナップ 8.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)非SU系剤 (2)田植え同時処理が可能 (3)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。
ショウリョクS粒剤	イマゾスルフロン 0.3 カフェンストロール 0.7 ブロモブチド 3.0 ダイムロン 1.7 カルタップ 5.3	移植直後～ノビエ2葉期 但し、移植後30日まで	3kg	(1)カフェンストロールの薬害に関する注意事項を遵守する。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (3)スクミリンゴガイ、フタオビコヤガにも登録あり(カルタップ)。
シンゲキ1キロ粒剤	フェノキノトリオン 3.0 フェントラザミド 3.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
シンズイZ1キロ粒剤	オキサジクロメホン 0.8 フェンキノトリオン 3.0 プロピリスルフロン 0.9 ブロモブチド 9.0	移植直後～ノビエ3.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)オキサジクロメホンの薬害に関する注意事項を遵守する。 (2)田植え同時処理が可能。 (3)SU系抵抗性雑草を含むオモダカ・ミズアオイ・コナギ・ホタルイにも効果が高い。
セイテン1キロ粒剤	オキサジクロメホン 0.8 ジメタメトリン 0.6 フェンキノトリオン 3.0 ベンスルフロンメチル 0.75	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)幅広い雑草に有効。SU抵抗性雑草、藻類、表層剥離にも有効。
ゼータジャガー1キロ粒剤	フェンキノトリオン 3.0 プロピリスルフロン 0.9 ペントキサゾン 2.0	移植時・移植直後～ノビエ4葉期 但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。 (3)ノビエに対して長期残効を示す。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
ゼータプラス1キロ粒剤	フェンキノトリオン 3.0 プロピリスルフロン 0.9	移植時・移植直後～ノビエ4葉期　但し、収穫60日前まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。
ゼータタイガー1キロ粒剤	ペントキサゾン 2.0 プロピリスルフロン 0.9 ブロモブチド 9.0	移植時・移植直後～ノビエ3葉期　但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗雑草、多年性難防除雑草(クログワイ)に有効。
センイチMX1キロ粒剤 フルパワーMX1キロ粒剤	ピラクロニル 2.0 フルセトスルフロン 0.2 メソトリオン 0.9	移植後5日～ノビエ3.5葉期　但し、収穫60日前まで	1kg	(1)幅広い雑草に有効。SU抵抗性雑草にも有効。 (2)薬害、魚類に対する注意事項を遵守する。
ディオーレ1キロ粒剤	オキサジクロメホン 0.4 テフルトリオン 2.0 メタゾスルフロン 1.0	移植時・移植直後～ノビエ3葉期　但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
天空1キロ粒剤	フェントラザミド 3.0 ベンゾビシクロン 3.0 メタゾスルフロン 0.6	移植時・移植直後～ノビエ3葉期　但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ドニチS1キロ粒剤 マクダス1キロ粒剤	イマゾスルフロン 0.9 フェントラザミド 3.0 ブロモブチド 9.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
バッチリ1キロ粒剤	イマゾスルフロ 0.9 ブロモブチド 9.0 ピラクロニル 2.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。
バットウZ1キロ粒剤	ピラクロニル 2.0 プロピリスルフロン 0.9 ベンゾビシクロン 2.0	移植時・移植直後～ノビエ3葉期　但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
パンチャー1キロ粒剤	ベンゾフェナップ 8.0 フェントラザミド 3.0 ベンフレセート 5.0	移植後5日～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	1kg	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)水産動植物に対する注意事項を遵守する。
ベッカク1キロ粒剤	ピリミスルファン 0.5 フェノキサスルホン 2.0 フェンキノトリオン 3.0	移植時・移植直後～ノビエ3葉期　但し、移植後30日まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草にも高い効果がある。 (2)田植え同時処理が可能 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
マスラオ1キロ粒剤	イマゾスルフロン 0.9 ピリミノバックメチル 0.6 フェンキノトリオン 3.0	移植時・移植直後～ノビエ3葉期　但し、移植後30日まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草を含むホタルイ・コナギ・ミズアオイ・オモダカにも効果がある。 (2)田植え同時処理が可能
ムソウ1キロ粒剤	ピリミスルファン 0.5 メフェナセット 12.0	移植後3日～ノビエ2.5葉期但し、移植後30日まで	1kg	(1)非SU系剤でSU系抵抗雑草にも効果高い。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
モーレツ1キロ粒剤	ピラクロニル 2.0 ベンゾビシクロン 2.0 ベンフレセート 5.0	移植後5日～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (2)必要に応じ後処理剤との組み合わせで使用
ラオウ1キロ粒剤	フェンキサスルホン 1.5 ダイムロン 6.0 フェンキノトリオン 2.5 ベンスルフロンメチル 0.8	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
流星1キロ粒剤	フェンキノトリオン 2.0 ペントキサゾン 2.0 メタゾスルフロン 5.0	移植時・移植直後～ノビエ3葉期　但し、植後30日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。

●フロアブルタイプ　　(初中期一発処理剤)

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
イッテツフロアブル	イマゾスルフロン 1.7 カフェンストロール 5.7 ベンゾビシクロン 3.8	移植後5日～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)カフェンストロールの薬害に関する注意事項を遵守する。 (2)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
イッポンDフロアブル	ベンスルフロンメチル 4.0 ピラクロニル 12.0 ブロモブチド 1.0 ダイムロン 8.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。
ウルティモZフロアブル	シクロピリモレート 5.5 ピラゾレート 11.0 プロピリスルフロン 1.65	移植後5日～ノビエ3葉期ただし､移植後30日まで	500mℓ	(1)幅広い雑草に有効。ALS阻害剤抵抗性雑草、畦畔侵入雑草にも有効。
カイリキZフロアブル	イプフェンカルバゾン 4.8 テフリルトリオン 4.8 プロピリスルフロン 1.8	移植後3日～ノビエ3葉期　但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)ホタルイをはじめとするSU抵抗性雑草に効果が高い。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
カウントダウンフロアブル カウンシルエナジーフロアブル アバンティフロアブル	トリアファモン 1.0 フェンキノトリオン 5.7 フェントラザミド 5.7	移植時・移植直後～ノビエ3.5葉期　但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)広葉雑草、イボクサ、カヤツリグサ科雑草も効果が高く、水口施用が可能。 (2)後作物としてなす、たまねぎ及びさやえんどうを栽培しない。
カチボシLフロアブル	イプフェンカルバゾン 5.0 テフリルトリオン 4.0 ベンスルフロンメチル 1.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (3)多年生雑草にも効果が高い。
カラットフロアブル キラリフロアブル	イマゾスルフロン 1.7 テフリルトリオン 3.8 ピラクロニル 3.8	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメミソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
銀河フロアブル	メタゾスルフロン 2.0 ダイムロン 20.0 ピラクロニル 4.0	移植後5日～ノビエ3葉期　但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)SU抵抗性雑草も効果が高いSU系剤 (2)多年生雑草にも効果が高い。
クサトリーBSX フロアブルL	フェントラザミド 5.8 ベンゾビシクロン 3.8 ベンスルフロンメチル 1.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗雑草にも効果高い。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ゴエモンフロアブル	イマゾスルフロン 0.9 イプフェンカルバゾン 2.0 ブロモブチド 9.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。
コメットフロアブル	メタゾスルフロン 1.2 テフリルトリオン 4.0 ピラクロニル 4.0	移植後5日～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)SU抵抗性雑草も効果が高いSU系剤
サラブレッドKAI フロアブル	オキサジクロメホン 0.6 ピラクロニル 3.8 イマゾスルフロン 1.7	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期　但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)効果の発現が非常に速い。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
サラブレッドGO フロアブル	オキサジクロメホン 1.1 ピラクロニル 1.9 イマゾスルフロン 1.7 ブロモブチド 16.7	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)効果の発現が非常に速い。 (3)SU系抵抗雑草や多年生雑草にも効果高い。
ジェイソウルフロアブル	シクロピリモレート 5.5 ピラゾレート 11.0 フェントラザミド 4.5	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)ALS阻害抵抗性雑草に効果が高い。 (3)ノビエに対して長期残効を示す。
ジャイロフロアブル	イプフェンカルバゾン 4.5 ベンゾビシクロン 5.4 ベンゾフェナップ 14.3	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)非SU系剤 (2)田植え同時処理が可能 (3)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。
シンゲキフロアブル	フェノキノトリオン 5.6 フェントラザミド 5.6	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータジャガーフロアブル	フェンキノトリオン 5.7 プロピリスルフロン 1.7 ペントキサゾン 3.8	移植後3日～ノビエ4葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータプラスフロアブル	フェンキノトリオン 5.8 プロピリスルフロン 1.7	移植後3日～ノビエ4葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(2)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。
ゼータタイガーフロアブル	ペントキサゾン 2.0 プロピリスルフロン 0.9 ブロモブチド 9.0	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)SU抵抗雑草、多年性難防除雑草(クログワイ)に有効。
ディオーレフロアブル	オキサジクロメホン 0.8 テフルトリオン 4.0 メタゾスルフロン 2.0	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
天空フロアブル	フェントラザミド 6.0 ベンッゾビシクロン 6.0 メタゾスルフロン 1.2	移植時・移植直後1日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
バッチリフロアブル	イマゾスルフロン 1.7 ピラクロニル 3.7 ブロモブチド 16.3	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。
バットウZフロアブル	ピラクロニル 3.8 プロピリスルフロン 1.7 ベンゾビシクロン 3.8	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
マスラオフロアブル	イマゾスルフロン 1.7 ピリミノバックメチル 1.2 フェンキノトリオン 5.8	移植時・移植直後～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	500mℓ	(1)SU抵抗性雑草を含むホタルイ・コナギ・ミズアオイ・オモダカにも効果がある。 (2)田植え同時処理が可能
ラオウフロアブル	フェンキサスルホン 2.8 ダイムロン 11.3 フェンキノトリオン 4.7 ベンスルフロンメチル 1.4	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
流星フロアブル	フェンキノトリオン 6.0 ベントキサゾン 5.0 メタゾスルフロン 2.0	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、植後30日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ワンベストフロアブル	ピラゾキシフェン 15.0 ブロモブチド 10.0 テニルクロール 2.0	移植直後～ノビエ2葉期 但し、移植後30日まで	1,000mℓ	(1)非SU系剤でSU系抵抗雑草にも効果高い。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (3)雑草多発田では使用を避け残草が多い場合は中後期剤を処理する。

[フロアブルタイプ除草剤の一般的注意事項]
(1) 剤によっては貯蔵中に分離することがあるので、使用前に容器をよく振ってから散布する。
(2) 雑草の発生前から生育初期に散布する。
(3) 散布の際は水の出入りを止めて湛水状態(水深3～5cm)のまま均一に散布し、散布後3～4日間そのまま湛水状態を保ち、田面を露出させないようにし、散布後7日間は、さし水、落水、かけ流しはしない。
(4) 強風の時は剤によっては拡散が悪く、風下に吹き寄せられることがあり、効果のフレや薬害を生じることがあるので注意する。
(5) 著しい多雨条件では除草効果が低下する場合があるので使用は避ける。
(6) 水口施用する場合は、自然減水時(ひたひた水～約2cmの水深)の再入水時に、水口に全薬量を一括投入し、流入する水に乗せて拡散させる。
(1筆当り6時間以内に5～6cmの湛水が確保できる水量が必要。) また、一度に大量の流水で処理すると、水口付近の効果にフレが出ることがあるので注意する。
(7) 入水後に水深が5cm程度になれば水口をしっかりと止め、水尻からオーバーフローしないように注意する。

●ジャンボタイプ　(初中期一発処理剤)

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
アピログロウMXジャンボ	ピラゾスルフロンエチル 0.8 ピリフタリド 3.8 プレチラクロール 11.3 メソトリオン 2.3	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。
イッテツジャンボ	イマゾスルフロン 2.3 カフェンストロール 7.5 ベンゾビシクロン 5.0	移植後5日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)カフェンストロールの薬害に関する注意事項を遵守する。 (2)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。
イッポンDジャンボ	ベンスルフロンメチル 1.0 ピラクロニル 4.0 ブロモブチド 12.0 ダイムロン 8.0	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	500g 小包装 10個	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。
ウルティモZジャンボ	シクロピリモレート 8.6 ピラゾレート 17.1 プロピリスルフロン 2.57	移植後5日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	350g 小包装 10個	(1)幅広い雑草に有効。ALS阻害剤抵抗性雑草、畦畔侵入雑草にも有効。
エンペラージャンボ	ピラクロニル 8.0 ピリミノバックメタル 3.0 フェンキノトリオン 12.0	移植直後～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	250g 小包装 10個	(1)SU抵抗性雑草や広葉雑草、イボクサ、カヤツリグサ科雑草も効果が高い。
カイリキZジャンボ	イプフェンカルバゾン 8.3 テフリルトリオン 8.3 プロピリスルフロン 3.0	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	300g 小包装 10個	(1)ホタルイをはじめとするSU抵抗性雑草に効果が高い。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
カウントダウンジャンボ カウンシルエナジージャンボ アバンティジャンボ	トリアファモン 1.2 フェンキノトリオン 7.5 フェントラザミド 7.5	移植直後～ノビエ3.5葉期 但し、移植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)広葉雑草、イボクサ、カヤツリグサ科雑草も効果が高い。 (2)後作物としてなす、たまねぎ及びさやえんどうを栽培しない。 (3)いぐさ、れんこん、せり、くわいの生育を阻害するおそれがあるので注意する。
カチボシLジャンボ	イプフェンカルバゾン 8.3 テフリルトリオン 6.7 ベンスルフロンメチル 1.7	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、植後30日まで	300g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (3)多年生雑草にも効果が高い。

薬剤名	成分名及び含量(%)		使用時期	使用量／10a	使用上の注意
カラットジャンボ キラリジャンボ	イマゾスルフロン テフリルトリオン ピラクロニル	2.3 5.0 5.0	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)田植え当日処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメミソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
ガンガンジャンボ	ピリミスルファン フェノキサスルフォン	2.0 8.0	移植後3日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日前まで	250g 小包装 10個	(1)多年生雑草にも効果が高い。
銀河ジャンボ	メタゾスルフロン ダイムロン ピラクロニル	2.5 25.0 5.0	移植後5日～ノビエ3葉期 但し、収穫60日前まで	400g 小包装 10個	(1)SU抵抗性雑草も効果が高いSU系剤 (2)多年生雑草にも効果が高い。 (3)初期剤と体系処理の中後期剤として使用可能。
クサトリーBSX ジャンボL	フェントラザミド ベンゾビシクロン ベンスルフロンメチル	10.0 6.7 1.7	移植後1日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	300g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (3)SU系抵抗雑草にも効果高い。
クサトリーDX ジャンボL	ベンスルフロンメチル フェントラザミド プロモブチド	1.3 7.5 15.0	移植後3日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ゴウワンDLジャンボ	ベンスルフロンメチル オキサジクロメホン クロメプロップ ブロモブチド ダイムロン	0.7 0.9 4.3 8.6 6.4	移植直後～ノビエ2葉期 但し、移植後30日まで	700g 小包装 10個	(1)オキサジクロメホンの薬害に関する注意事項を遵守する。 (2)SU系抵抗雑草にも効果が高い。
ゴエモンジャンボ	イマゾスルフロン イプフェンカルバゾン ブロモブチド	0.9 2.0 9.0	移植後5日～ノビエ2.5葉期 但し、収穫30日前まで	300g 小包装 10個	(1)SU抵抗性雑草も効果が高い。
コメットジャンボ	メタゾスルフロン テフリルトリオン ピラクロニル	2.0 6.7 6.6	移植後5日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	300g 小包装 10個	(1)SU抵抗性雑草も効果が高いSU系剤
サスケ-ラジカル ジャンボ	シクロスルファムロン カフェンストロール ベンゾビシクロン ダイムロン	2.3 10.5 10.0 22.5	移植後3日～ノビエ2葉期 但し、移植後30日まで	200g 小包装 10個	(1)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
サラブレッドKAI ジャンボ	オキサジクロメホン ピラクロニル イマゾスルフロン	0.8 5.0 2.5	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	400g (10個)	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)効果の発現が非常に速い。
サラブレッドGO ジャンボ	オキサジクロメホン ピラクロニル イマゾスルフロン プロモブチド	1.5 2.5 2.3 22.5	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	250g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)効果の発現が非常に速い。 (3)SU系抵抗雑草や多年生雑草にも効果高い。
ジェイソウルジャンボ	シクロピリモレート ピラゾレート フェントラザミド	6.7 13.3 6.7	移植後1日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	450g 小包装 10個	(1)田植後1日からの処理。 (2)ALS阻害抵抗性雑草に効果が高い。 (3)ノビエに対して長期残効を示す。
シンゲキジャンボ	フェノキノトリオン フェントラザミド	12.0 12.0	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	250g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
セイテンジャンボ	オキサジクロメホン ジメタメトリン フェンキノトリオン ベンスルフロンメチル	2.4 2.4 12.0 3.0	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	250g 小包装 10個	(1)幅広い雑草に有効。SU抵抗性雑草、藻類、表層剥離にも有効。
センイチMXジャンボ フルパワーMXジャンボ	ピラクロニル フルセトスルフロン メソトリオン	4.0 0.4 1.8	移植後1日～ノビエ3.5葉期 但し、収穫60日前まで	500g 小包装 10個	(1)幅広い雑草に有効。SU抵抗性雑草にも有効。 (2)薬害、魚類に対する注意事項を遵守する。
ゼータジャガージャンボ	フェンキノトリオン プロピリスルフロン ペントキサゾン	16.0 4.5 10.0	移植後3日～ノビエ4葉期 但し、移植後30日まで	200g 小包装 10個	(1)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータプラスジャンボ	フェンキノトリオン プロピリスルフロン	15.0 4.5	移植3日後～ノビエ4葉期 但し、収穫90日まで	200g 小包装 10個	(1)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。
ゼータタイガージャンボ	ペントキサゾン プロピリスルフロン ブロモブチド	2.0 0.9 9.0	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	300g 小包装 10個	(1)SU抵抗雑草、多年性難防除雑草(クログワイ)に有効。
ディオーレジャンボ	オキサジクロメホン テフルトリオン メタゾスルフロン	1.0 5.0 2.5	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
天空ジャンボ	フェントラザミド ベンツビシクロン メタゾスルフロン	10.0 10.0 2.0	移植直後1日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	300g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
バッチリジャンボ	イマゾスルフロン ピラクロニル ブロモブチド	2.3 5.0 22.5	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。
バットウZジャンボ	ピラクロニル プロピリスルフロン ベンゾビシクロン	5.0 2.3 5.0	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
フルイニングジャンボ	カフェンストロール カルフェントラゾンエチル フルセトスルフロン ベンゾビシクロン	2.1 0.9 0.2 2.0	移植後5日～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	500g 小包装 10個	(1)SU抵抗性雑草も効果が高いSU系剤 (2)多年生雑草にも効果が高い。 (3)初期剤と体系処理の中後期剤として使用可能。
ベッカクジャンボ	ピリミスルファン フェノキサスルホン フェンキノトリオン	2.0 6.0 12.0	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	250g 小包装 10個	(1)SU抵抗性雑草やコナギ、ミズアオイ、オモダカなどにも効果が高い非SU系剤 (2)いぐさ、れんこん、せり、くわい隣接田では注意する。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
マサカリLジャンボ	ベンスルフロンメチル インダノファン クロメプロップ	1.0 2.8 7.0	移植後5日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	500g 小包装 10個	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。
ラオウジャンボ	フェンキサスルホン ダイムロン フェンキノトリオン ベンスルフロンメチル	6.0 24.0 10.0 3.0	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、植後30日まで	250g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
流星ジャンボ	フェンキノトリオン ペントキサゾン メタゾスルフロン	7.5 6.3 2.5	移植後3日～ノビエ3葉期 但し、植後30日まで	400g 小包装 10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。

[ジャンボタイプ除草剤の一般的注意事項]
(1) 雑草の発生前から生育初期に散布する。
(2) 処理日は田面水の水深5cm程度を目安とし、拡散がスムーズに行われるよう配慮する。
(3) 圃場の表面が凸凹していたり踵跡が水面に露出していると効果が不安定になりやすいので、土壌表面が水中に没するように水深を調節してから散布する。
(4) 散布の際は水の出入を止めて湛水状態のまま均一に散布し、散布後7日間は完全に止水し、3～4日湛水状態(水深5～6cm)を保ち、田面を露出させたり、落水、かけ流しはしない。また、散布後に多量の降雨が予想される場合は使用しない。
(5) 本指針登載のジャンボ剤の多くは、小包装(パック)を10個投入するようになっているが、剤によっては個数が異なるので注意する。
(6) 強風の時は剤によっては拡散が悪く、風下に吹き寄せられることがあり、効果のフレや薬害を生じることがあるので注意する。
(7) パックに使用されているフィルムは水溶性なので、ぬれた手で作業したり、降雨で破袋することのないように注意する。
(8) 藻類やウキクサが多発している水田では拡散が不十分となるため使用を避け、粒剤に変更する。
(9) 著しい多雨条件では除草効果が低下する場合があるので使用は避ける。

●その他のタイプ（FG剤(自己拡散型浮遊粒剤)等）　　(初中期一発処理剤)

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
ウルティモZ350FG	シクロピリモレート 8.6 ピラゾレート 17.1 プロピリスルフロン 2.57	移植後5日～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	350g	(1)幅広い雑草に有効。ALS阻害剤抵抗性雑草、畦畔侵入雑草にも有効。
カラット400FG キラリ400FG	イマゾスルフロン 2.3 テフリルトリオン 5.0 ピラクロニル 5.0	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	400g	(1)田植え当日処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメミソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
コメット顆粒	メタゾスルフロン 7.5 テフリルトリオン 25.0 ピラクロニル 25.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	80g	(1)SU抵抗性雑草も効果が高いSU系剤
サキガケ楽粒	イプフェンカルバゾン 10.0 テフリルトリオン 12.0 フロルピラウキシフェンベンジル 2.0	移植直後～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	250g	(1)SU系抵抗性雑草にも効果が高い。 (2)効果の発現が非常に速い。
サラブレッドKAI 400FG	オキサジクロメホン 2.3 ピラクロニル 0.8 イマゾスルフロン 5.0	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	400g	(1)SU系抵抗性雑草にも効果が高い。 (2)効果の発現が非常に速い。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
サラブレッドGO 400FG	オキサジクロメホン 1.5 ピラクロニル 2.5 イマゾスルフロン 2.3 ブロモブチド 22.5	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、植後30日まで	400g	(1)田植え同時処理が可能。 (2)効果の発現が非常に速い。 (3)SU系抵抗性雑草や多年生雑草にも効果高い。
ショキニー250グラム	ブロモブチド 24.0 ペントキサゾン 6.0	移植後1日～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	250g	(1)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (2)れんこん、くわい、せり隣接田では注意する。
シンゲキ豆つぶ250	フェノキノトリオン 12.0 フェントラザミド 12.0	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	250g	(1)田植え同時処理が可能。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータタイガー300FG	プロピリスルフロン 3.0 ブロモブチド 30.0 ペントキサゾン 6.7	移植後3日～ノビエ3葉期但し、移植後30日まで	300g	(1)SU抵抗雑草、多年性難防除雑草(クログワイ)に有効。
ツルギ250粒剤	イプフェンカルバゾン 10.0 イマゾスルフロン 3.6 ベンゾビシクロン 8.0	移植時・移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	250g	(1)田植え同時処理が可能。 (2)れんこん、くわい、せり隣接田では注意する。
ノックアウト楽粒	シメトリン 6.0 テフリルトリオン 10.0 トリアファモン 2.0 ベンフレセート 18.0	移植後7日～ノビエ3.5葉期 但し、移植後30日まで	250g	(1)湛水散布、水口施用、無人航空機散布等、様々な方法で散布可能。 (2)幅広い雑草に有効。SU抵抗性雑草、藻類、表層剥離にも有効。 (3)一発処理以外に初期剤との体系処理でも使用できる。
バッチリ400FG	イマゾスルフロン 2.3 ピラクロニル 5.0 ブロモブチド 22.5	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	400g	(1)SU系抵抗性雑草にも効果が高い。 (2)効果の発現が速く、温度による効果変動が少ない。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ビクトリーZ400FG メガゼータ400FG	プロピリスルフロン 2.3 ピラクロニル 5.0	移植後5日～ノビエ3葉期 但し、収穫60日前まで	400g	(1)SU抵抗性雑草も効果が高いSU系剤。 (2)効果の発現が速く、長期間持続する。
ルンバ楽粒	オキサジクロメホン 2.4 ブロモブチド 36.0 フロルピラウキシフェンベンジル 1.8	移植直後～ノビエ2.5葉期 但し、移植後30日まで	250g	(1)湛水散布、水口施用、無人航空機散布等、様々な方法で散布可能。 (2)幅広い草種に有効。種々の抵抗性雑草にも効果が高い。
ワザアリ楽粒	イプフェンカルバゾン 10.0 テフリルトリオン 12.0	移植直後～ノビエ3葉期 但し、移植後30日まで	250g	(1)SU系抵抗性雑草にも効果がある。 (2)れんこん、くわい、せり隣接田では注意する。

(ウ)中後期処理剤（初期剤、初中期一発処理剤との体系処理）：**多年生雑草対象**

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
2,4－Dアミン塩	2,4-PA 49.5	有効分げつ終止期～幼穂形成期前 収穫60日前まで 完全落水 雑草茎葉処理	100～120g(70～100ℓ)	(1)早期・早植栽培、低温時の使用は、筒状葉などのホルモン障害の生じるおそれがあるのでMCP剤を使用する。 (2)散布後1～2日してから入水する。 (3)粒剤使用の場合は湛水し、雑草が完全に水中にある状態で散布 し、1～2昼夜おく。 (4)風下側作物に飛散しないよう注意する。 (5)噴霧器等器材は専用とし、他の農薬散布器具と区別する必要がある。 (6)イネ科の雑草には効果がない。
MCPソーダ塩	MCPAナトリウム塩 19.5		200～240g(70～100ℓ)	
アクシズMX1キロ粒剤	ピリフタリド 2.4 メソトリオン 0.9 メタゾスルフロン 0.8	移植後7日～ノビエ4葉期 但し、収穫前45日前まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草も効果が高い。 (2)散布後の低温、急激な気温の上昇により薬害発生のおそれがある。 (3)砂質土壌、軟弱苗、極端な浅植えは薬害の発生のおそれがある。
アトトリ1キロ粒剤	ピリミスルファン 0.8	移植後14日(稲5葉期以降)～ノビエ4葉期、但し、収穫45日前まで	1kg	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。
ウィードコア1キロ粒剤	フロルピラウキシフェンベンジル 0.4 ペノキススラム 0.5 ベンゾビシクロン 2.0	移植後7日～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。
ウィードコア200SD粒剤	フロルピラウキシフェンベンジル 2.0 ペノキススラム 2.5 ベンゾビシクロン 10.0	移植後10日～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	200g	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
クリンチャー1キロ粒剤	シハロホップブチル 1.8	移植後7日～ノビエ4葉期 収穫30日前まで湛水処理	1kg	(1)湛水状態で散布し、散布後少なくとも7日間はそのままの状態を保ち、入水、落水、かけ流しはしない。また、散布後降雨があっても落水しない。 (2)ウキクサが多数浮遊している水田では効果が劣る。 (3)完全枯死には時間がかかる。 (4)広葉雑草には効果が無いので、広葉雑草が混在する圃場では、それらに有効成分との混合剤や有効な剤との組合せで使用する。 (5)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
		移植後25日～ノビエ5葉期収穫30日前まで湛水処理	1.5kg	
クリンチャーEW	シハロホップブチル 30.0	移植後20日～ノビエ6葉期 但し、収穫30日前まで雑草茎葉処理	100mℓ(25～100ℓ)	(1)必ず展着剤を加用する。 (2)噴霧器を使用し、ノビエの茎葉全体によく付着させる。 (3)完全枯死には時間がかかる。 (4)広葉雑草には効果が無いので、広葉雑草が混在する圃場では、それらに有効成分との混合剤や有効な剤との組合せで使用する。 (5)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
クリンチャーバスME液剤	シハロホップブチル 3.0 ベンタゾンナトリウム塩 20.0	移植後15日～ノビエ5葉期 但し、収穫50日前まで雑草茎葉処理	1,000mℓ(70～100ℓ)	(1)本剤使用前に、初期剤又は一発処理剤や中耕等で雑草防除し、組み合わせによる体系防除を行う。 (2)落水又は浅水散布し、散布後少なくとも3日間(浅水処理は5日間)はそのままの状態を保ち、7日間は落水、かけ流しはしない。 (3)薬害のおそれがあるため展着剤の加用、DCPA剤との近接散布は避ける。 (4)高温など薬害を生じやすい条件では多めの希釈水量を用い、低濃度液をなるべく水稲にかからないように散布する。 (5)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
クリンチャージャンボ	シハロホップブチル 1.8	移植後15日～ノビエ3葉期 但し、収穫30日前まで	1kg 小包装20個	(1)藻やウキクサが多発している水田では拡散が不十分となるおそれがある。 (2)広葉雑草には効果が無いので、広葉雑草が混在する圃場では、それらに有効成分との混合剤や有効な剤との組合せで使用する。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
		移植後25日～ノビエ4葉期 但し、収穫30日前まで	1.5kg 小包装30個	
ソニックブームZ1キロ粒剤	シクロピリモレート 1.5 シメトリン 1.5 テフリルトリオン 3.0 プロピリスルフロン 0.9	移植後14日(稲4葉期以降)～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)藻類又は表層剥離の発生しやすい水田では使用を避ける (2)ALS阻害剤抵抗性に効果が高い。 (3)4葉期までのノビエに有効 (4)多年生雑草に効果が高い
ソニックブームSジャンボ	シクロピリモレート 3.0 シメトリン 3.0 テフリルトリオン 4.0 ペノキススラム 1.0	移植後14日(稲4葉期以降)～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	500g 小包装20個	(1)藻類又は表層剥離の発生しやすい水田では使用を避ける (2)ALS阻害剤抵抗性に効果が高い。 (3)4葉期までのノビエに有効 (4)多年生雑草に効果が高い
ツイゲキ豆つぶ250	シメトリン 12.0 ピリミスルファン 3.0 フェンキノトリオン 10.0	移植後14日(稲5葉期以降)～ノビエ4葉期 但し、収穫60日まで	250g	(1)幅広い雑草に効果がある。 (2)花茎抽出したホタルイや生育が進んだクログワイやオモダカにも有効。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
トドメMF乳剤	メタミホップ 4.9	移植後14日～ノビエ7葉期 但し、収穫50日前まで湛水散布又は落水散布	200mℓ(25～100ℓ)	(1)キシュウスズメノヒエは再生茎5葉期、アゼガヤは草丈60cmまでが散布適期。 (2)雑草茎葉にかかるよう散布する。 (3)周辺作物(特にイネ科)に対して飛散しないように注意する。 (4)広葉雑草には効果が無いので、広葉雑草が混在する圃場では、それらに有効成分との混合剤や有効な剤との組合せで使用する。
トドメMF1キロ粒剤	メタミホップ 1.4	移植後14日～ノビエ5葉期 但し、収穫50日前まで湛水散布又は無人航空機による散布	1kg	(1)強風時の散布はさける。 (2)藻類、表層剥離の発生しやすい水田では有効な剤と組み合わせて使用 (3)無人航空機による散布の注意事項を遵守 (4)広葉雑草には効果が無いので、広葉雑草が混在する圃場では、それらに有効成分との混合剤や有効な剤との組合せで使用する。
トドメバスMF液剤	メタミホップ 1.2 ベンタゾン 18.3	移植後15日～ノビエ6葉期 但し、収穫50日前まで湛水散布又はごく浅く湛水して散布	1000mℓ(70～100ℓ)	(1)重複散布は、薬害のおそれがあるのでさける。 (2)高温条件下では、薬害のおそれがあるのでさける。 (3)周辺作物(特にイネ科)に対して飛散しないように注意する。 (4)クログワイ、コウキヤガラは必要に応じて有効な前処理剤との組合せで使用する。 (5)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
スケダチ1キロ粒剤	フルセトスルフロン 0.2	移植後7日～ノビエ4葉期、但し、収穫45日前	1kg	(1)使用量1kgではノビエの4葉期、1.5kgではノビエの5葉期を越えると効果が低いので、時期を失しないように散布する。 (2)多年生雑草は生育段階によって効果にフレがでるので、葉齢や草丈把握し適期に散布する。 (3)水深3～5cmの湛水状態で処理し、少なくとも3～5日間は通常の湛水状態を保ち、散布後7日間はさし水、落水、かけ流しはしない。また、散布後降雨があっても落水しない。
		移植後14日～ノビエ5葉期、但し収穫45日前まで	1.5kg	
ツイゲキ1キロ粒剤	ピリミスルファン 0.8 シメトリン 3.0 フェンキノトリオン 2.5	移植後14日(稲5葉期以降)～ノビエ4葉期、但し、収穫60日前まで	1kg	(1)幅広い雑草に有効。エゾノサヤヌカグサ等の畦畔侵入雑草にも有効。 (2)花茎抽出したホタルイや生育が進んだクログワイやオモダカにも有効。
テッケン1キロ粒剤 ニトウリュウ1キロ粒剤	ペノキススラム 0.5 ベンゾビシクロン 2.0	移植後15日～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草も効果が高い。 (2)散布の際は、水の出入りを止めて田面に均一散布する。少なくとも3～4日間は湛水状態(水深3～5cm)を保ち田面を露出させたり水を切らしたりしない。また、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。
ハイカット1キロ粒剤	シハロホップブチル 1.8 ジメタメトリン 1.0 ベンゾビシクロン 2.0 ハロスルフロンメチル 0.9	移植後15日～ノビエ3.5葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)次のような条件では薬害が発生するおそれがあるので使用を避ける。 ①散布時の水稲の葉齢が4葉期未満の時、②砂質土壌の水田及び漏水の激しい水田(減水深2cm/日以上)、③軟弱な苗を移植した水田、④極端な浅植の水田及び植付け不良で根が田面に露出している条件、⑤水稲が水没するような極端な深水条件。
バイスコープ1キロ粒剤	シクロピリモレート 2.0 テフリルトリオン 3.0	移植後14日～60日 但し、収穫45日前まで	1kg	(1)ALS阻害剤抵抗性の雑草に高い効果。 (2)特殊雑草(イボクサ、クサネム)に有効。
バサグラン液剤	ベンタゾン 40.0	移植後15～55日 但し、収穫50日前まで雑草茎葉処理	500～700mℓ(70～100ℓ)	(1)必ず落水又は浅水散布し、散布後少なくとも7日間はそのままの状態を保ち入水、落水、かけ流しはしない。また散布後降雨 があっても落水しない。 (2)イネ科の残草がある場合はイネ科に効果のある成分との混合剤を用いる。 (3)DCPA剤との近接散布は薬害を生ずるおそれがあるので避ける。 (4)雑草の種類によって使用時期が異なるので注意する。 (5)処理後2日以内に降雨があると効果が不十分になるおそれがあるので、晴天の持続する時を選んで使用する。
バサグラン粒剤	ベンタゾン 11.0	移植後15～55日 但し、収穫60日前まで	3～4kg	
バサグラン・エアー1キロ粒剤	ベンタゾン 33.0	移植後15～55日 但し、収穫60日前まで	1kg	

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
ヒエクリーンバサグラン粒剤	ピリミノバックメチル 0.4 ペンタゾンナトリウム塩 11.0	移植後15日～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	3kg	(1)散布の際は、水の出入りを止めてごく浅水状態(雑草が水面上に出る状態)にして田面に均一散布する。 (2)散布後少なくとも2日間はそのままの状態を保ち、その後、入水し、通常の湛水状態を保つ。
レブラス1キロ粒剤	メタゾフルスロン 1.2 ジメタメトリン 1.0 テフリルトリオン 3.0 ダイムロン 10.0	移植後14日～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。
ワイドアタックSC	ペノキススラム 3.6	移植後20日～ノビエ6葉期(イネ5葉期以降) 但し、収穫30日前まで	100mℓ (100ℓの水)	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。 (2)イネの出穂時の散布は薬害のおそれがあるので、使用を控える。 (3)薬害のおそれがあるため展着剤は加用しない。 (4)落水又は浅水散布し、散布後少なくとも2日間(浅水処理は3日間)はそのままの状態を保ち、散布後7日間は落水、かけ流しはし ない。 (5)処理後1日以内に降雨があると効果が不十分になるおそれがあるので、晴天の持続する時を選んで使用する。 (6)雑草の種類によって使用時期が異なるので、草種に応じて葉齢や草丈を把握し適期に使用する。
ワイドアタックD 1キロ粒剤 フォローアップ 1キロ粒剤	ペノキススラム 0.6 ダイムロン 10.0	移植後15日～ノビエ5葉期(イネ4葉期以降) 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。 (2)水深3～5cmの湛水状態で処理し、少なくとも3～5日間は通常の湛水状態を保ち、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。
ワイドショット1キロ粒剤	テフリルトリオン 3.0 ペノキススラム 0.5	移植後15日～ノビエ4葉期 但し、収穫45日前まで	1kg	(1)前処理との体系で使用し、雑草の発生状況をよく確認し、時期を失しないように適期に散布する。

3)ウキクサ、アオミドロの防除法

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
モゲトン粒剤	アミノクロロナフトキノン(ACN) 9.0	ウキクサ、アオミドロ・藻類の発生始～発生盛期 収穫45日前まで	2～3kg	(1)ウキクサ、アオミドロ、表層はく離のほか、ヒルムシロ、ウリカワにも効果がある。 (2)苗が小さい時は薬害を生じるので使用しない。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (4)水稲が水没するような極端な深水で使用すると薬害が生ずることがあるのでさける。
モゲトンジャンボ	アミノクロロナフトキノン(ACN) 9.0	ウキクサ類、アオミドロ・藻類による表層はく離の発生時 但し、収穫45日前まで	1kg 20個	(1)上記に準ずる。 (2)ウキクサ類、藻類、表層はく離の発生が進むと拡散が不十分となり効果が劣ることがあるので、発生を認めた場合なるべく早い時期に処理する。

注:田植後のウキクサ、アオミドロにも有効であるから上記に準じて使用できる。

4) 直播栽培の雑草防除法

水稲の直播栽培は種籾を直接水田に播く栽培方法で、播種前に湛水する**「湛水直播栽培」**と、播種前に湛水を行わない**「乾田直播栽培」**に大別される。それぞれに除草体系が異なるが、現在の除草剤の登録ではその区別がなく**「直播水稲」**で一本化されている。

直播栽培では、水稲と雑草の出芽がほぼ同時にスタートするため、移植栽培に比べ雑草との競合が厳しく、イネが薬害を受けない葉齢の下限と、雑草に対して除草剤の効果が十分発揮できる葉齢の上限の差が小さい。また直播栽培はイネの出芽苗立ち率を向上させるために、播種位置や根の位置が移植栽培に比べてより田面表層に近いため、移植栽培に比べより除草剤の薬害が出やすい栽培と言える。このため、水稲直播栽培の除草剤は、その種類や適用範囲がかなり狭いうえに、除草効果や薬害の発生に大きなフレを生じることがあり、移植栽培以上に細心の注意をはらう必要がある。

(1) 湛水直播栽培の除草方法

【除草体系1】 ①播種後 [初期土壌処理剤] ⇒ ②生育初期 [初中期一発型土壌処理剤]
【除草体系2】 ①播種後 [初中期一発型土壌処理剤] ⇒ ②生育中後期 [中後期茎葉処理剤]

・苗立ちの向上、除草剤の効果安定のために、畦畔からの漏水防止を徹底し、移植栽培以上にほ場の均平化に努める。
・雑草の株が大きい場合や多年生雑草が繁茂しているような時は、耕起前に非選択性茎葉処理剤で除草処理する。
・多年生雑草の切断茎や塊茎を埋没させるため浅水で代かきを行う。
・落水出芽させた時は、入水後、水深が安定してから除草剤を散布する。その場合より遅くまで使用できる一発処理除草剤が望ましいが、雑草の葉齢を逸しないよう
・鉄コーティング直播栽培のように、播種位置が田面表層付近にある場合は、より薬害を生じやすいため注意する。

(2) 乾田直播栽培の除草方法

①播種後出芽前 ⇒ ②入水直前 ⇒ ③入水後

[非選択性茎葉処理剤]
・ラウンドアップマックスロード
・タッチダウンiQ など
又は
[選択性土壌処理剤]
・サターンバアロ乳剤 など

[選択性の茎葉処理]
・クリンチャーバスME液剤
・ヒエクリーンバサグラン粒剤
など

[直播登録のある一発処理除草剤(又は中後期処理剤)]
・バッチリ1キロ粒剤、フロアブル
・カイリキZ1キロ粒剤、フロアブル、ジャンボ
・ツイゲキ豆つぶ250
・サキガケ楽粒 など
・ワイドアタックD・フォローアップ1キロ粒剤(中後期処理剤)

注:入水後の一発処理除草剤は水が落ち着いてから(約一週間)処理する。
一発処理除草剤後に残草がある場合は、中後期茎葉処理剤を処理する。

(3) 直播栽培における除草剤の使用基準

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
アクシズMX1キロ粒剤	ピリフタリド 2.4 メソトリオン 0.9 メタゾスルフロン 0.8	稲2葉期～ノビエ4葉期まで 但し、収穫45日前まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草も効果が高い。 (2)散布後の低温、急激な気温の上昇により薬害発生のおそれがある。 (3)砂質土壌、軟弱苗、極端な浅植えは薬害の発生のおそれがある。
エンペラー1キロ粒剤	ピラクロニル 2.0 ピリミノバックメタル 0.8 フェンキノトリオン 3.0	イネ出芽揃葉期～ノビエ3葉期 但し、収穫75日前まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草や広葉雑草、イボクサ、カヤツリグサ科雑草も効果が高い。 (2)湛水散布
カイリキZ1キロ粒剤	イプフェンカルバゾン 2.5 テフリルトリオン 2.5 プロピリスルフロン 0.9	稲1葉期～ノビエ3葉期 但し、収穫90日前まで	1kg	(1)SU抵抗性のホタルイ、オモダカ等にも効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能。
カイリキZフロアブル	イプフェンカルバゾン 4.8 テフリルトリオン 4.8 プロピリスルフロン 1.8	稲1葉期～ノビエ3葉期 但し、収穫90日前まで	500mℓ	(1)SU抵抗性のホタルイ、オモダカ等にも効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能。
カイリキZジャンボ	イプフェンカルバゾン 8.3 テフリルトリオン 8.3 プロピリスルフロン 3.0	稲1葉期～ノビエ3葉期 但し、収穫90日前まで	300g 小包装 10個	(1)SU抵抗性のホタルイ、オモダカ等にも効果が高い。 (2)田植え同時処理が可能。
カウントダウンフロアブル カウンシルエナジーフロアブル	トリアファモン 1.0 フェンキノトリオン 5.7 フェントラザミド 5.7	稲1葉期～ノビエ3.5葉期 但し、収穫90日前まで	500mℓ	(1)雑草の発生前から発生初期に効果が高い。 (2)後作物としてなす、たまねぎ及びさやえんどうを栽培しない。 (3)いぐさ、れんこん、せり、くわいの生育を阻害するおそれがあるので注意する。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
カウントダウン1キロ粒剤 カウンシルエナジー1キロ粒剤	トリアファモン 0.5 フェンキノトリオン 3.0 フェントラザミド 3.0	稲1葉期～ノビエ3.5葉期　但し、収穫90日前まで	1kg	(1)キシュウスズメノヒエに高い効果を示す。 (2)後作物としてなす、たまねぎ及びさやえんどうを栽培しない。 (3)いぐさ、れんこん、せり、くわいの生育を阻害するおそれがあるので注意する。
カウントダウンジャンボ カウンシルエナジージャンボ	トリアファモン 1.2 フェンキノトリオン 7.5 フェントラザミド 7.5	稲1葉期～ノビエ3.5葉期　但し、収穫90日前まで	400g 小包装 10個	(1)キシュウスズメノヒエに高い効果を示す。 (2)後作物としてなす、たまねぎ及びさやえんどうを栽培しない。 (3)いぐさ、れんこん、せり、くわいの生育を阻害するおそれがあるので注意する。
カラット1キロ粒剤 キラリ1キロ粒剤	イマゾスルフロン 2.3 テフリルトリオン 5.0 ピラクロニル 5.0	稲1葉期～ノビエ2.5葉期　但し、収穫90日前まで	1kg	(1)田植え当日処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメミソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
カラットフロアブル キラリフロアブル	イマゾスルフロン 1.7 テフリルトリオン 3.8 ピラクロニル 3.8	稲1葉期～ノビエ2.5葉期　但し、収穫90日前まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメミソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
カラットジャンボ キラリジャンボ	イマゾスルフロン 2.3 テフリルトリオン 5.0 ピラクロニル 5.0	稲1葉期～ノビエ2.5葉期　但し、収穫90日前まで	400g 小包装 10個	(1)田植え当日処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメミソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
カラット400FG キラリ400FG	イマゾスルフロン 2.3 テフリルトリオン 5.0 ピラクロニル 5.0	稲1葉期～ノビエ2.5葉期　但し、収穫90日前まで	400g	(1)田植え当日処理が可能。 (2)SU抵抗性雑草にも効果が高い。 (3)イボクサ、クサネム、ヒメミソハギなどの特殊雑草にも効果を有する。
クリンチャー1キロ粒剤	シハロホップブチル 1.8	は種後10日～ノビエ3葉期　但し、収穫30日前まで	1kg	(1)移植水稲の(ウ)中・後期処理剤の項を参照のこと。
		は種後25日～ノビエ4葉期　但し、収穫30日前まで	1.5kg	
クリンチャーEW	シハロホップブチル 30.0	は種後10日～ノビエ5葉期　但し、収穫30日前まで	100mℓ (25～100ℓ)	(1)移植水稲の(ウ)中・後期処理剤の項を参照のこと。
クリンチャーバスME液剤	シハロホップブチル 3.0 ベンタゾンナトリウム塩 20.0	は種後10日～ノビエ5葉期　但し、収穫50日前まで	1,000mℓ (70～100ℓ)	(1)移植水稲の(ウ)中・後期処理剤の項を参照のこと。
サキガケ楽粒	イプフェンカルバゾン 10.0 テフリルトリオン 12.0 フロルピラウキシフェンベンジル 2.0	稲1葉期～ノビエ2.5葉期但し、収穫90日前まで	250g	(1)SU系抵抗雑草にも効果が高い。 (2)効果の発現が非常に速い。
サターンバアロ乳剤	ベンチオカーブ 50.0 プロメトリン 5.0	は種直後～イネ出芽前　ノビエ1葉期まで 収穫90日前まで、入水15日前まで	600～800mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に使用する。 (2)覆土はあまり厚くしない。 (3)過湿、湛水状態を避ける。
サンフーロン液剤	グリホサートイソプロピルアミン塩 41.0	耕起20～10日前まで (雑草生育期)	250～500mℓ (50～100ℓ)	(1)雑草の葉全体にムラなく散布します。 (2)雑草の種類によって薬量を変更してください。
ゼータジャガー1キロ粒剤	フェンキノトリオン 3.0 プロピリスルフロン 0.9 ペントキサゾン 2.0	稲1葉期～ノビエ4葉期　但し、移植後90日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。 (3)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータジャガーフロアブル	フェンキノトリオン 5.7 プロピリスルフロン 1.7 ペントキサゾン 3.8	稲1葉期～ノビエ4葉期　但し、移植後90日まで	500mℓ	(1)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータジャガージャンボ	フェンキノトリオン 16.0 プロピリスルフロン 4.5 ペントキサゾン 10.0	稲1葉期～ノビエ4葉期　但し、移植後90日まで	200g 小包装 10個	(1)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。 (2)ノビエに対して長期残効を示す。
ゼータプラス1キロ粒剤	フェンキノトリオン 3.0 プロピリスルフロン 0.9	稲1葉期後～ノビエ4葉期　但し、収穫60日前まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。
ゼータプラスフロアブル	フェンキノトリオン 5.8 プロピリスルフロン 1.7	稲1葉期後～ノビエ4葉期　但し、収穫90日前まで	500mℓ	(1)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。
ゼータプラスジャンボ	フェンキノトリオン 15.0 プロピリスルフロン 4.5	稲1葉期後～ノビエ4葉期　但し、収穫75日前まで	200g 小包装 10個	(1)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。
ゼータプラス200FG	フェンキノトリオン 15.0 プロピリスルフロン 4.5	稲1葉期～ノビエ4葉期　但し、収穫75日まで	200g	(1)高葉齢ノビエ、SU抵抗性雑草、多年性難防除雑草に有効。
タッチダウンiQ	グリホサートカリウム塩 43.0	は種14日前～出芽前(雑草生育期)(乾田不耕起栽培)	250～500mℓ (50～100ℓ)	(1)出芽した稲では使用しない。 (2)展着剤加用の必要はない。 (3)他の農薬や肥料とは混用しない。 (4)他の有用作物に飛散しないように散布する。
ダブルスターSB顆粒	ピラゾスルフロンエチル 2.6 フェントラザミド 25.0 ベンゾビシクロン 25.0	イネ1葉期～ノビエ2.5葉期まで但し、収穫90日前まで	80g (500mℓ)	(1)500mℓの水に溶かして散布する。 (2)キク科雑草にも、高い効果を示す。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。 (4)飼料用イネ等の一部に枯死する薬害を生じることがある。
ツイゲキ豆つぶ250	シメトリン 12.0 ピリミスルファン 3.0 フェンキノトリオン 10.0	稲5葉期以降～ノビエ4葉期	250g	(1)幅広い雑草に効果がある。 (2)花茎が抽出したホタルイや生育が進んだクログワイやオモダカにも有効。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
ドニチS1キロ粒剤 マクダス1キロ粒剤	イマゾスルフロン 0.9 フェントラザミド 3.0 プロモブチド 9.0	イネ1葉期～ノビエ2.5葉期まで但し、収穫90日前まで	1kg	(1)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
マスラオ1キロ粒剤	イマゾスルフロン 0.9 ピリミノバックメチル 0.6 フェンキノトリオン 3.0	は種時・は種直後～ノビエ3葉期　但し、収穫90日前まで	1kg	(1)SU抵抗性雑草を含むホタルイ・コナギ・ミズアオイ・オモダカにも効果がある。
マスラオフロアブル	イマゾスルフロン 1.7 ピリミノバックメチル 1.2 フェンキノトリオン 5.8	稲1葉期～ノビエ3葉期　但し、収穫90日前まで	500mℓ	(1)SU抵抗性雑草を含むホタルイ・コナギ・ミズアオイ・オモダカにも効果がある。
ハイカット1キロ粒剤	シハロホップブチル 1.8 ジメタメトリン 1.0 ベンゾビシクロン 2.0 ハロスルフロンメチル 0.9	稲3葉期～ノビエ3.5葉期まで　但し、収穫60日前まで	1kg	(1)移植水稲の(ウ)中・後期処理剤の項を参照のこと。

薬剤名	成分名及び含量(%)	使用時期	使用量／10a	使用上の注意
バサグラン液剤	ベンタゾン 40.0	は種後35日～50日 但し収穫50日前まで	500～700mℓ (70～100ℓ)	(1)移植水稲の(ウ)中・後期処理剤の項を参照のこと。
バッチリ1キロ粒剤	イマゾスルフロン 0.9 ピラクロニル 2.0 ブロモブチド 9.0	イネ出芽始期～ノビエ2.5葉期まで 但し、収穫90日前まで	1kg	(1)稲の根が露出する条件では薬害を生ずるおそれがあるので注意する。
バッチリフロアブル	イマゾスルフロン 1.7 ピラクロニル 3.7 ブロモブチド 16.3	イネ出芽始期～ノビエ2.5葉期まで 但し、収穫90日前まで	500mℓ	(1)稲の根が露出する条件では薬害を生ずるおそれがあるので注意する。
バットウZ1キロ粒剤	ピラクロニル 2.0 プロピリスルフロン 0.9 ベンゾビシクロン 2.0	稲1葉期後～ノビエ3葉期 但し、収穫60日まで	1kg	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
バットウZフロアブル	ピラクロニル 3.8 プロピリスルフロン 1.7 ベンゾビシクロン 3.8	稲1葉期後～ノビエ3葉期 但し、収穫60日まで	500mℓ	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
バットウZジャンボ	ピラクロニル 5.0 プロピリスルフロン 2.3 ベンゾビシクロン 5.0	稲1葉期後～ノビエ3葉期 但し、収穫60日まで	400g 小包装10個	(1)田植え同時処理が可能。 (2)難防除雑草や畦畔侵入雑草に高い効果。
ヒエクリーンバサグラン粒剤	ピリミノバックメチル 0.4 ベンタゾンナトリウム塩 11.0	稲3葉期～ノビエ4葉期 但し、収穫60日前まで	3kg	(1)移植水稲の(ウ)中後期処理剤の項を参照のこと。
ピラクロン1キロ粒剤	ピラクロニル 1.8	湛水直播のは種直後～イネ出芽前 但し、収穫60日前まで 湛水直播のイネ出芽始期～ノビエ1.5葉期 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)稲出芽前に使用する場合はできるだけ落水状態にして散布し、確実に出芽が確認できるまでは入水しない。 (2)稲出芽時に湛水状態になると苗立ち数の低下を生じる場合があるので (3)稲出芽始期以降は湛水状態で散布する。 (4)表面播種(鉄コーティング等)の場合では、「播種直後～稲出芽前」処理で薬害を生じるおそれがあるので、その時期の使用は避ける。
ラウンドアップマックスロード	グリホサートカリウム塩 48.0	【耕起栽培】 雑草生育期(耕起直後～出芽前) 【不耕起栽培】 雑草生育期 は種30日前～出芽前	250～500mℓ (50ℓ)	(1)出芽した稲では使用しない。 (2)展着剤加用の必要はない。 (3)他の農薬や肥料とは混用しない。 (4)他の有用作物に飛散しないように散布する。
ワイドアタックSC	ペノキススラム 3.6	稲3葉期～ノビエ5葉	100mℓ	(1)移植水稲の(ウ)中後期処理剤の項を参照のこと。
ワイドアタックD1キロ粒剤 フォローアップ1キロ粒剤	ペノキススラム 0.6 ダイムロン 10.0	稲3葉期～ノビエ5葉期まで 但し、収穫60日前まで	1kg	(1)移植水稲の(ウ)中後期処理剤の項を参照のこと。 (2)乾田直播の入水後の処理も可能。

〈参考〉

ノビエおよびホタルイの葉齢と移植後日数（目安）

			葉齢					
			1葉期	1.5葉期	2葉期	2.5葉期	3葉期	4葉期
移植～後日数	ノビエ	早期	9	12	13	17	19	24
		普通期	4	6	8	9	12	16
	ホタルイ	早期	11	14	16	18	21	25
		普通期	4	6	8	10	12	16

注）移植日は早期は4/19植、普通期は6/12植。代かきは早期・普通期ともに移植2日前。
数値は、農林水産研究所で実施した水稲除草剤適Ⅱ試験の生育データを基に算出(早期:H17～22、普通期:H17～28)

5)水田除草剤のローテーション使用

同一除草剤の連年使用は同一成分に対する抵抗性雑草の発生、薬害、特定草種の占有化が進む場合があるので、3～5年毎に、特性の異なる除草剤に変更する。

(1) 通常の除草体系

①スルホニルウレア系一発処理剤

②ピラゾール系（ダイアゾール系）、トリケトン系、スルホンアニリド系一発処理

③初期剤＋中後期処理剤

(2) 多年性雑草の多い防除

①初期剤＋中後期処理剤

②一発処理除草剤＋中後期処理剤

(3) ホタルイに有効な一発処理除草剤

①ブロモブチド含有剤

②クロメプロップ、又はベンゾビシクロン含有剤

③ピラゾール系（ダイアゾール系）、トリケトン系、スルホンアニリド系一発処理剤

注)系統については「 2)①の水稲除草剤特性表(基本薬剤)」の項を参照。

6)スルホニルウレア(SU)系除草剤抵抗性雑草に対する防除法

現在、水田除草剤の中で一発処理剤が大きな割合を占めており、一発処理剤はいくつかの有効成分が組み合わされた混合剤となっている。この防除指針に記載されている初期及び初中期一発処理剤の多くが水田の主要雑草に幅広く効果を示すスルホニルウレア系(以下SU系と記す)化合物であるベンスルフロンメチル、イマゾスルフロン、ピラゾスルフロンエチル、シクロスルファムロン、フルセトスルフロンなどを含有している。近年、アゼナ、イヌホタルイ、コナギ、ミゾハコベ、ミズアオイなどでこのSU系除草剤に抵抗性のある雑草が多量に残草することが問題となっており、本県でも平成12年頃から各地で問題が明らかになり、アゼナ、イヌホタルイ、コナギに抵抗性が確認されている。本指針に登載されてあるほとんどの一発処理除草剤はSU抵抗性雑草対策の成分を含む除草剤になっているが、今後もSU剤をはじめ同様の殺草機作(ALS阻害)を中心に、新たな抵抗性雑草の出現や発生が助長される事が懸念される。

そのため、一発処理除草剤を適期に適正に処理したにもかかわらず、アゼナ、コナギ、イヌホタルイ等の特定の草種が多量に残草しているような圃場は、抵抗性雑草が発生している可能性があるので、下記の点について留意して除草剤を使用する。

(1) SU系含有除草剤は、イヌホタルイ、ウリカワ、ミズガヤツリに対して2葉期までしか効果がないため、登録使用時期の範囲内でやや早め(移植後10日頃まで)に使用する。
(2) SU系除草剤抵抗性雑草に特に効果の高い成分(ブロモブチド、クロメプロップ、ベンゾビシクロンなど)を含む除草剤を使用する。
(3) SU系成分を含まない一発処理除草剤を使用する。
①ピラゾール系(ダイアゾール系)のピラゾレート、ピラゾキシフェンを含む一発処理除草剤。
②トリケトン系のテフリルトリオンを含む一発処理除草剤。
③スルホンアニリド系のピリミスルファンを含む一発処理除草剤。
④新SU系成分(SU抵抗性雑草にも効果のあるSU系成分)のプロピリスルフロン、メタゾスルフロンを含む一発処理除草剤。
(4) 残草が認められた圃場では、中後期剤との体系処理を行い、次年度の種子量を減少させる。

7)水田難防除雑草の防除法

多年生雑草は、種子のほか茎又は塊茎などの栄養繁殖体で越冬し、翌春そのいずれか又は両方で繁殖し、栄養繁殖の場合は水稲の初期剤や一発処理剤の効果が不十分である。特に水田の深い位置から出芽するクログワイ、オモダカ等では萌芽は極めて不揃いで長期にわたる。このため単一除草剤の一時期処理では完全防除は困難で、耕種的な防除と、除草剤の体系処理を組み合わせた総合的な防除を、数年間繰り返すことが大切である。
また近年、生産者の高齢化や兼業化に加え、除草剤成分や種類が大幅に変遷したため、以前はあまり問題にならなかったホソバヒメミソハギ、アメリカセンダングサ、タウコギ、ヒレタゴボウ、イボクサ、クサネム等の一年生大型広葉雑草が残草して問題になっている。これらは、イネの生育と競合するばかりでなく、イネの収穫期には優にイネの高さを超え、収穫に支障を来たしたり、クサネムのように種子が玄米に混入して品質を低下させたりすることがある。

(1) 防除上の留意事項

ア 秋から冬にかけての圃場の排水と反転耕(プラウ耕・パワーディスク耕)は、雑草の繁殖源を深く埋没させたり、逆に寒気にさらしたりして枯死させる効果がある。特に、最強の難防除雑草と言われるクログワイは湿田での発生が多く、塊茎は乾燥に弱いため、水稲収穫後の水田の排水対策や耕起による乾田化の除草効果が高い。オモダカは比較的乾燥に強いため、耕起乾燥による塊茎の死滅は少ないが、芽部の損傷による生存塊茎数の減少が期待できるので、ロータリ耕が有効である。
イ セリ、ミズガヤツリ、コウキヤガラ、キシュウスズメノヒエは深耕と代かきによる埋没によって発生が抑制できる。特に、代かきは切断茎や塊茎が浮き上がらないように浅水でていねいに行うことが重要である。
ウ キシュウスズメノヒエは畦畔や休耕田での防除を徹底し、本田に侵入しないようにする。
エ ホソバヒメミソハギ、アメリカセンダングサ、タウコギ、ヒレタゴボウ、クサネム等の大型広葉雑草は、畦畔沿いや浅水及び田面が露出した部分に生育しやすいため、耕起・代かきをていねいに行って、水田を均平にするとともに、漏水をなくし、水をきちんと保つことで田面を水面から露出させないことが重要である。また、種子形成までに抜き取ることで次年度以降の発生を少なくできる。
オ イボクサで問題になるのは耕起・代かき前に生育したものからの再生株なので、代かきを浅水で丁寧に行い、埋没させて、再生個体数を少なくすることが重要であり、耕起前にイボクサが旺盛に生育している場合は非選択性の茎葉処理除草剤を散布して防除しておくと効果的である。

カ アゼガヤは、2葉期まで湛水した場合、生育が抑制される。ただし、3葉期以降は、水没しても旺盛な生育を示す場合が多い。

キ 茎葉処理剤は、対象雑草の少ない場合には雑草茎葉へスポット処理する。

ク 難防除多年生雑草が多発している水田では、単年度処理では防除が困難なので、数年間くり返し防除する。

(2) 効果のある薬剤

ア ホタルイはSU抵抗性タイプが増えているので、スルホニルウレア系が主成分の一発処理剤の場合はブロモブチド、クロメプロップ、ベンゾビシクロンを含む剤を、あるいはピリミスルファン、プロピリスルフロン、メタゾスルフロン、テフリルトリオンが主成分の一発処理剤を使用する。また、中後期剤ではベンタゾン、ペノキススラム、ベンフレセート、ダイムロンを含む剤の効果が高い。

イ クログワイは、スルホニルウレア系やピリミスルファンを含む一発処理剤の効果が高い。また、中後期剤ではベンタゾン、ペノキススラム、ベンフレセート、ダイムロン、クミルロンを含む剤の効果が高い。

ウ オモダカはスルホニルウレア系やピリミスルファンを含む一発処理剤の効果が高い。また、中後期剤ではベンタゾン、ペノキススラム、ベンフレセートを含む剤の効果が高い。

エ セリはスルホニルウレア系やピリミスルファンを含む薬剤やフェノキシ系のホルモン剤の効果が高い。

オ イボクサは、スルホニルウレア系の成分が効かないので、主成分がピラゾレートやピリミスルファンの一発処理剤及びベンゾビシクロン、ブタクロール、プレチラクロール、メフェナセット、エスプロカルブを含む一発処理剤を用い、残草がある場合はホルモン作用のあるフェノキシ系の中後期剤を用いる。

カ ホソバヒメミソハギ、アメリカセンダングサ、タウコギ、ヒレタゴボウは一発処理剤の効果が切れた頃から発生するため、一発処理剤散布後の水管理を特に注意し、その後発生したものにはベンタゾン・MCPAなどの中・後期剤で防除する。タウコギは、スルホニルウレア系除草剤の中でも、特にピラゾスルフロンエチルの効果が高い。

キ クサネムには一発処理剤が有効だが、その効果が切れた頃から発生する。本葉が2枚くらいまでなら、シメトリン・MCPBを含む中期剤(本指針の登載無し)を、クサネムの草丈が30cmまでにベンタゾン・MCPAなどの中後期剤で防除する。

(3) 除草剤使用例

雑草	耕種的防除法	薬剤防除法				注意事項
		時期	使用薬剤	使用量/10a	使用水量/10a	
ホタルイ	(1)越冬株は初期剤の効果が低いので、代かきを浅水で丁寧に行い、株を土中に埋没させる。 (2)早期栽培では稲収穫後できるだけ早く耕うんし、ホタルイの再生を抑えて種子の生産を少なくする。	水田耕起前 (雑草生育期)	ラウンドアップマックスロード	200～500mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ	(1)水田への処理は耕起前又は水稲収穫後のいずれか1回処理とする。 (2)越冬株茎葉へスポット処理する。 (3)他の有用作物に飛散しないように散布する。 (4)少水量ノズルULV5を使用。
		移植後	ピリミスルファン、プロピリスルフロン、メタゾスルフロン、テフリルトリオンを主成分とする一発処理剤又はブロモブチド、クロメプロップ、ベンゾビシクロンを含有する一発処理剤のうち1剤	一発処理剤の項参照		(1)ブロモブチド、クロメプロップ、ベンゾビシクロンはホタルイに特効あるが、ブロモブチドは2葉期、クロメプロップ、ベンゾビシクロンは1葉期を超えると効果が劣るので、それまでに散布する。 (2)一発処理剤の項参照
		移植後15日～ノビエ3.5葉期まで、但し、収穫60日前まで	ハイカット1キロ粒剤	1kg		(1)ウ)の田植後中・後期処理の項を参照のこと (2)ハイカット1キロ粒剤、ワイドアタックSC、ワイドアタックD1キロ粒剤、フォローアップ1キロ粒剤のうちいずれか1剤を使用する。 (3)ワイドアタックD1キロ粒剤とフォローアップ1キロ粒剤は同一成分。
		移植後20日(イネ5葉期以降)～ノビエ6葉期、但し、収穫30日前まで	ワイドアタックSC	100mℓ	100ℓ	
		移植後15日～ノビエ5葉期(イネ4葉期以降)まで、但し、収穫60日前まで	ワイドアタックD1キロ粒剤 フォローアップ1キロ粒剤	1kg		
		水稲刈跡 雑草生育期	ラウンドアップマックスロード	200～500mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ	(1)雑草茎葉へスポット処理する (2)少水量ノズルULV5を使用。
		水田刈跡 雑草生育期	サンフーロン液剤	500～1,000mℓ	50～100ℓ	(1)雑草茎葉へスポット処理する。
		水田刈跡 雑草生育期／1回	サンダーボルト007	500～2,000mℓ	100ℓ	(1)雑草茎葉へスポット処理する。

雑草	耕種的防除法	薬剤防除法				注意事項
		時期	使用薬剤	使用量/10a	使用水量/10a	
クログワイ・オモダカ・コウキヤガラ	(1)11月～2月までに2回以上深さ15～20cmの反転耕(地下部塊茎の露出処理) (2)クログワイは稲収穫直後に5～10m間隔に排水溝を設置し、乾田化を図る。 (3)オモダカはロータリ耕が有効で、低速、高回転で塊茎の芽を損傷させると死滅する。 (4)コウキヤガラは、代かきを極力浅水で行い切断茎を埋没させる。	水田耕起前 (雑草生育期)	ラウンドアップマックスロード	200～500mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ	(1)水田への処理は耕起前又は水稲収穫後のいずれか1回処理とする。 (2)発生の少ない場合は茎葉へスポット処理する。 (3)他の有用作物に飛散しないように散布する。
				500mℓ	5～25ℓ	(1)少水量ノズルULV5を使用。
		植代時又は植代後～移植前7日 移植時又は移植後～ノビエ(発生始期)1葉期	ペントキサゾン、ピラクロニル、ペノキススラム、ベンフレセート、ダイムロン、クミルロンを含む初期除草剤	初期剤の項参照		(1)初期剤の項参照 (2)一発処理剤との体系処理を行う。その場合一発処理剤は登録範囲内の遅めに使用する。 (3)剤によって使用時期が異なるので注意する。 (4)田植え前に使用する場合は、処理後7日以上置いて田植えする。
		移植後	スルホニルウレア系又はピリミスルファン、プロピリスルフロン、メタゾスルフロン、テフリルトリオンを含む一発処理剤のうち1剤	一発処理剤の項参照		(1)中後期除草剤との体系処理により効果が高い。 (2)一発処理剤の項参照 (3)初期剤との体系処理を行う場合は登録範囲内の遅めに使用する。
		移植後15日～ノビエ3.5葉期まで、但し、収穫60日前まで	ハイカット1キロ粒剤	1kg		(1)残草がある場合に処理する。 (2)ウ)の田植後中・後期処理の項を参照 (3)ハイカット1キロ粒剤、アトトリ1キロ粒剤、ワイドアタックSC、ワイドアタックD1キロ粒剤、フォローアップ1キロ粒剤、グラスジンMナトリウム粒剤又は液剤のうちいずれか1剤を使用する。
		移植後20日(イネ5葉期以降)～収穫45日前まで	アトトリ1キロ粒剤	1kg		
		移植後20日(イネ5葉期以降)～ノビエ6葉期、但し、収穫30日前まで	ワイドアタックSC	100mℓ	100ℓ	
		移植後15日～ノビエ5葉期まで(イネ4葉期以降)但し、収穫60日前まで	ワイドアタックD1キロ粒剤 フォローアップ1キロ粒剤	1kg		
		水田刈跡 雑草生育期	ラウンドアップマックスロード	500～1,000mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ	(1)発生の少ない場合は茎葉へスポット処理する。 (2)他の有用作物に飛散しないように散布する。 (3)2剤のうちいずれかを散布する。 (4)ラウンドアップの少量散布は少水量ノズルULV5を使用。
		水田作物刈取後 (雑草生育期)	タッチダウンiQ	500～1,000mℓ	25～100ℓ	
		水田刈跡 雑草生育期	サンフーロン液剤	500～1,000mℓ	50～100ℓ	(1)雑草茎葉へスポット処理する。
		水田刈跡 雑草生育期／1回	サンダーボルト007	500～2,000mℓ	100ℓ	(1)雑草茎葉へスポット処理する。
キシュウスズメノヒエ	(1)畦畔からの侵入を防ぐため畦畔除草を徹底する。 (2)代かきを極力浅水で行い切断茎を埋没させる。	水田耕起前 (雑草生育期)	ラウンドアップマックスロード	500mℓ	5～25ℓ	(1)少水量ノズルULV5を使用。
				200～500mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ	(1)水田への処理は耕起前又は水稲収穫後のいずれか1回処理とする。 (2)発生の少ない場合は茎葉へスポット処理する。 (3)他の有用作物に飛散しないように散布する。 (4)所定範囲の多めの薬量を使用。
		水田畦畔 収穫前日まで (雑草生育期)		200～1,000mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ 5～25ℓ	(1)水田畦畔に使用する場合は2回以内とする。 (2)発生の少ない場合は茎葉へスポット処理する。 (3)他の有用作物に飛散しないように散布する。 (4)畦畔の完全除草は、畦畔崩壊のおそれがあるので注意する。 (5)ラウンドアップの少量散布は少水量ノズルULV5を使用。
		水田畦畔 収穫前14日まで (雑草生育期:草丈30cm以下)	タッチダウンiQ	500～1,000mℓ	50～100ℓ	
		水田畦畔 雑草生育初期(草丈10cm)及び草刈り後10～20日の雑草再生期 (但し収穫前日まで)	グラスショート液剤	300～500mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 25ℓ/10a	(1)水田畦畔等の抑草剤で、キシュウスズメノヒエの水田への侵入防止に効果あり。 (2)稲にかからないように注意する。
		水田畦畔(雑草生育期草丈30cm以下(収穫120日前まで)	ワンサイドP乳剤	200～400mℓ	100～150ℓ	(1)稲にかからないように注意する。 (2)畦畔の草刈後15～20cmに再生した頃に散布すると効果が高い。
		移植後15日～ノビエ3.5葉期まで、但し、収穫60日前まで	ハイカット1キロ粒剤	1kg		(1)移植前後の初期除草剤との体系で使用する。

雑草	耕種的防除法	薬剤防除法				注意事項
		時期	使用薬剤	使用量/10a	使用水量/10a	
キシュウスズメノヒエ	(1)畦畔からの侵入を防ぐため畦畔除草を徹底する。 (2)代かきを極力浅水で行い切断茎を埋没させる。	移植後20日～ノビエの6葉期まで(収穫前30日まで)	クリンチャーEW	100mℓ	25～100ℓ	(1)クリンチャーEWは、必ず展着剤を加用する。 (2)移植前後の初期除草剤との体系で使用する。 (3)切断茎からの再生個体は3～6葉期(草長25cm頃まで)に処理すると効果が高い。 (4)畦畔から侵入したものに対しては侵入1m程度までに処理すれば効果が高い。 (5)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
		移植後14日～ノビエ7葉期まで但し、収穫50日前まで	トドメMF乳剤	200mℓ	25～100ℓ	(1)再生茎5葉期までが散布適期。 (2)広葉雑草が混在する場合は、有効な剤と組み合わせる。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
			トドメMF1キロ粒剤	1kg		
		水田畦畔 収穫14日前まで(雑草生育期:草丈30cm以下)	サンフーロン液剤	500～1,000mℓ	50～100ℓ	(1)雑草茎葉へスポット処理する。
		水田刈跡 雑草生育期	ラウンドアップマックスロード	500～1,000mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ	(1)発生の少ない場合は茎葉へスポット処理する。 (2)他の有用作物に飛散しないように散布する。 (3)2剤のうちいずれかを散布する。 (4)ラウンドアップの少量散布は少水量ノズルULV5を使用。
		水田作物刈取後雑草再生時(草丈30cm以下)	タッチダウンiQ	500～1,000mℓ	25～100ℓ	
アゼガヤ	(1)畦畔からの侵入を防ぐため畦畔除草を徹底する。 (2)2葉期まで湛水処理し生育抑制を狙う。	移植後20日～ノビエの6葉期まで(収穫前30日まで)	クリンチャーEW	100mℓ	25～100ℓ	(1)クリンチャーEWは、必ず展着剤を加用する。 (2)移植前後の初期除草剤との体系で使用する。 (3)草丈60cmまでが散布適期。 (4)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
		移植後14日～ノビエ7葉期まで但し、収穫50日前まで	トドメMF乳剤	200mℓ	25～100ℓ	(1)草丈60cmまでが散布適期。 (2)広葉雑草が混在する場合は、有効な剤と組み合わせる。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
			トドメMF1キロ粒剤	1kg		(1)草丈20cmまでが散布適期。 (2)広葉雑草が混在する場合は、有効な剤と組み合わせる。 (3)魚類に対する注意事項を特に遵守する。
セリ	(1)15～20cmの反転耕埋没処理 (2)代かきを極力浅水で行い切断茎を埋没させる。 (3)稲収穫直後に5～10m間隔に排水溝を設置する。	水田耕起前 (雑草生育期)	ラウンドアップマックスロード	200～500mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ	(1)水田への処理は耕起前又は水稲収穫後のいずれか1回処理とする。 (2)発生の少ない場合は茎葉へスポット処理する。 (3)他の有用作物に飛散しないように散布する。
				500mℓ	5～25ℓ	(1)少水量ノズルULV5を使用。
		移植後	スルホニルウレア系又はピリミスルファンを含む一発処理剤のうち1剤	一発処理剤の項参照		(1)草量の多い圃場では、体系防除を行う。 (2)一発処理剤の項参照
		移植後20日(イネ5葉期以降)～ノビエ6葉期、但し、収穫30日前まで	ワイドアタックSC	100mℓ	100ℓ	(1)ウ)の田植後中・後期処理の項を参照 (2)4剤のうちいずれかを散布する。
		有効分げつ終止期～幼穂形成期前但し、収穫60日前まで	2,4－Dアミン塩	100～120g	70～100ℓ	
		水田畦畔 収穫14日前まで(雑草生育期:草丈30cm以下)	サンフーロン液剤	500～1,000mℓ	50～100ℓ	(1)雑草茎葉へスポット処理する。
		水田刈跡 雑草生育期	ラウンドアップマックスロード	500～1,000mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ	(1)発生の少ない場合は茎葉へ、スポット処理する。 (2)他の有用作物に飛散しないように散布する。 (3)ラウンドアップの少量散布は少水量ノズルULV5を使用。
		水田作物刈取後 (雑草生育期)	タッチダウンiQ	500～1,000mℓ	25～100ℓ	

雑草	耕種的防除法	薬剤防除法				注意事項
		時期	使用薬剤	使用量/10a	使用水量/10a	
イボクサ	(1)畦畔からの侵入を防ぐため畦畔除草を徹底する。 (2)代かきを極力浅水で行い切断茎を埋没させる。	耕起前 (雑草生育期:草丈30cm以下)	ザクサ液剤	300～500mℓ	100～150ℓ	(1)水田への処理は耕起15日前までに処理する。 (2)発生の少ない場合は茎葉へスポット処理する。 (3)他の有用作物に飛散しないように散布する。 (4)所定範囲で多めの薬量を使用する。 (5)少量散布(30～40ℓ)の場合は専用ノズルを使用する。
		水田畦畔 収穫7日前まで (雑草生育期:草丈30cm以下)		500～1,000mℓ	100～150ℓ	
		水田畦畔 収穫14日前まで (雑草生育期:草丈30cm以下)	タッチダウンiQ	250～500mℓ	50～100ℓ	
		水田作物 耕起15日前まで (雑草生育期)	バスタ液剤	300～500mℓ	100～150ℓ	
		水田畦畔 収穫7日前まで (雑草生育期)		500～1,000mℓ	30～40ℓ	
		移植後	スラッシャ1キロ粒剤等	一発処理剤の項参照		(1)一発処理剤の項参照
		移植後30日～イボクサの茎長30cmまで(但し、収穫60日前まで)	ノミニー液剤	50～100mℓ	100ℓ	(1)落水散布又はごく浅く湛水して散布
		有効分げつ終止期～幼穂形成期前但し、収穫60日前まで	2,4－Dアミン塩	100～120g	70～100ℓ	(1)残草がある場合に処理する。 (2)ウ)の田植後中・後期処理の項を参照
アメリカセンダングサ・クサネム等	(1)耕起・代かきをていねいに行って、水田を均平する。 (2)漏水をなくし、田面を水面から露出させない水管理を行う。 (3)種子を形成するまでに抜き取る。	移植後	カイリキZ1キロ粒剤・キマリテ1キロ粒剤等の一発処理剤のうち1剤	一発処理剤の項参照		(1)一発処理剤の項参照 (2)タウコギはピラゾスルフロンエチルを含む一発処理剤の効果が高い。
		移植後15日～ノビエ3.5葉期まで、但し、収穫60日前まで	ハイカット1キロ粒剤	1kg		(1)移植前後の初期除草剤との体系で使用する。 (2)ウ)の田植後中・後期処理の項を参照のこと (3)左の6剤のうちいずれか1剤を使用する。 (4)草丈が短いうち(草丈が30cm)以内で散布する。
		移植後20日(イネ5葉期以降)～ノビエ6葉期、但し、収穫30日前まで	ワイドアタックSC	100mℓ	100ℓ	
		移植後15日～ノビエ5葉期まで(イネ4葉期以降)但し、収穫60日前まで	ワイドアタックD1キロ粒剤 フォローアップ1キロ粒剤	1kg		
		移植後30日～クサネムの草丈40cmまで(但し、収穫60日前まで)	ノミニー液剤	50～100mℓ	100ℓ	

8)飼料用稲等に対する注意事項

2010年3月26日付けで農研機構は、飼料用イネなど新規需要米向けに開発された水稲品種の中には、ある特定の成分を含む除草剤を使うと、場合によっては枯れてしまうほどの影響が生じる品種があることを明らかにした。さらに2016年9月14日付けで、すでに報告のあった品種に加えて、その後、新たに開発された品種を加えた13品種を明らかにした。このため、報告のあった品種とそれ以降の新品種にあっても該当の除草剤成分については十分注意する必要がある。

(1) 注意すべき3つの除草剤成分
ベンゾビシクロン、メソトリオン、テフリルトリオン

(2) 除草剤成分の影響を強く受ける水稲13品種
「タカナリ」「おどろきもち」「モミロマン」「やまだわら」「とよめき」「オオナリ」「ソルトスター」「ハバタキ」「ミズホチカラ」「ルリアオバ」「華麗米」「夢十色」「みなちから」

(3)注意すべき3つの除草剤成分は、いずれも類似した作用特性を持ち白化させて枯らせる。

9)雑草抑草剤利用による水田畦畔の管理

(1) 処理等使用法

薬　剤　名	使用目的	使 用 時 期	使用量(使用水量)/10a	使 用 方 法
グラスショート液剤 (ビスピリバックナトリウム塩) ナトリウム塩 3.0%)	草丈抑制による刈り取り軽減	雑草生育初期(草丈10cm) 及び草刈り後10～20日の雑草再生期 (ただし収穫前日まで)	300～500mℓ (通常散布50～100ℓ) 少量散布25ℓ/10a)	雑草茎葉散布 一年生及び 多年生雑草

(2) 使用上の留意点

①展着剤の加用の必要はない。
②雑草の生育期に薬剤が、雑草の茎葉全体に均一にかかるようにする。また、雑草が大きくなりすぎると効果が低減するので時期を失しないように散布する。
③散布後6時間以内の降雨は効果が減ずることがあるので、天候に十分注意する。
④法面や傾斜地などで面積換算が難しい場合は、200倍液(例:薬液100 mℓを20Lの水に希釈)を雑草の茎葉部が十分濡れるように散布する。
⑤低温下では効果の発現が遅れることがある。
⑥カモジグサ、オヒシバ、カラスムギ等の一年生イネ科雑草が主体の場合は、抑草効果が短くなる。
⑦シロツメクサ、オオバコ等が優占雑草の場合は、枯殺により裸地化が生じるので使用しない。
⑧れんこん、くわい、いぐさ、セリや、大豆、小豆等のマメ科、なす、トマト等のナス科、きゅうり、メロン等のウリ科、はくさい、だいこん等のアブラナ科作物には薬害が強いため、周辺作物への飛散に十分注意する。
⑨水稲へ直接散布すると、葉の黄化や生育抑制等の薬害を生じるため注意する。

(18) 植物成長調整剤の使用法

(1) 処理等使用法

薬剤名 (成分名及び含量%)	使用目的	使用量(使用水量)/10a	使用時期 使用回数	使用方法	使用上の注意事項
スマレクト粒剤 (パクロブトラゾール0.6)	節間短縮による倒伏軽減	2～3kg	出穂7～20日前 1回	湛水散布	(1)散布適期を守り、均一散布を行い多量・重複散布は避ける。 (2)散布後7日間は完全に止水し、5日間湛水状態を保ち、落水や掛け流しはしない。 (3)本剤を使用した水田に後作として野菜類を作付けする場合は初期生育に影響することがあるので、丁寧に深く耕起する。 (4)本剤を使用した水田の土を野菜類の育苗床土に使用しない。 (5)黒ぼく土壌では効果が十分でない場合があるので注意する。
	登熟歩合向上	3kg	出穂10～20日前 1回		
ロミカ粒剤 (ウニコナゾールP0.04)	節間短縮による倒伏軽減	2～3kg	出穂25～10日前まで 1回		(1)使用時期、使用量、使用方法を守る。 (2)湛水条件下で均一散布する。 (3)散布後7日間は完全に止水し、5日間湛水状態を保ち、落水や掛け流しはしない。
ビビフルフロアブル (プロヘキサジオンカルシウム塩1.0)	節間短縮による倒伏軽減	75～100mℓ (通常散布50～150ℓ) (少量散布25～50ℓ)	出穂10～2日前 (走り穂状態) 1回	茎葉散布	(1)散布期間を守り、均一散布を行い多量・重複散布は避ける。
ビビフル粉剤DL (プロヘキサジオンカルシウム塩0.12)		3～4kg	出穂10～5日前 1回	散布	

(2) 使用上の留意点

①上記の薬剤は倒伏防止剤でなく、倒伏軽減剤であり、次のような条件下では本剤を使用しても十分な倒伏軽減効果が発揮されない場合もあるので、施肥管理、水管理などの基本技術の励行を怠らないこと。

・火山灰、黒ぼく土壌・肥沃地・野菜や牧草栽培跡地などの地力窒素の高い圃場

・堆きゅう肥の多量施肥した水田

②施肥は各地域の標準的な量、時期を守り増肥を避ける。

2　麦類(大麦・小麦)病害虫防除指針

(1)　麦（裸麦）の主要病害虫の発生消長と防除体系

病害虫名	11月 上 中 下	12月 上 中 下	1月 上 中 下	2月 上 中 下	3月 上 中 下	4月 上 中 下	5月 上 中 下	発生(発病)の経過等
	(播種)↓					(出穂)↓	(収穫)↓	
縞萎縮病	汚染圃場↓							○土壌伝染性で、病原ウイルスは根から感染し、病土は数年間にわたって感染源になる。なお、大麦の縞萎縮病と小麦の縞萎縮病は異なるウイルスであり、前者がBaYMV、後者がWYMVとなる。
裸黒穂病	保菌種子↓					(種子感染)(黒穂)		○発生源は保菌種子である。菌は体内を伝わり花芽分化初期に幼穂内に侵入し、黒穂が出穂する。発病穂(黒穂)から胞子が飛散し開花中の花器に入り感染する。
斑葉病	保菌種子↓					(種子感染)		○発生源は保菌種子である。発芽後に子葉鞘等に侵入、順次内側の葉の基部を侵し展開とともに発病する。出穂期頃より発病葉から飛散した胞子が花に入り感染する。
黒節病	(保菌種子)↓							○保菌種子が第一伝染源である。葉・葉鞘では、葉脈に沿って黒褐色の条斑を生じる。稈では、節が濃褐変して上下に黒い条斑が伸び、生育が劣ったり、枯死する。穂では穂焼症状を起こす。
株腐病	汚染圃場↓							○被害残さ、土壌より伝染する。秋季に感染・発病し、冬季は一旦停滞する。春季に発病が増大し、株元の葉鞘や麦稈に不整形な斑紋が広がり、折れ易くなって倒伏したり、枯れ上がる。
うどんこ病		飛散胞子↓			飛散胞子↓			○秋に感染発病したもの、又は前年の発病ムギわら等で子のう殻で越冬したものが翌春の発生源となる。オオムギ菌は小麦を、コムギ菌は大麦を侵さない。
さび病類		飛散胞子↓						○4種のさび病が発生するが、この内、小さび病は、収穫後のこぼれ麦で越夏した夏胞子が、秋に播種された麦に寄生し越冬し、翌春の発生源となる。
赤かび病	(保菌種子)↓					飛散胞子↓↓穂		○保菌種子を播種すると、発芽阻害、苗立枯れが発生する場合もある。翌春、稲ワラ、イネ刈株等から飛散する子のう胞子が穂に感染する。その発病粒からの二次感染も起こり得る。
アブラムシ類		有翅虫飛込↓			有翅虫飛込↓			○主要種はムギクビレアブラムシである。夏寄主はイネ科、冬寄主はサクラ属植物。秋に麦に寄生し越冬したもの、又は翌春桜等から飛来する有翅虫が発生源となる。

注:この図は、防除の参考となるよう、病害虫の発生を概念的に示したものである。実際の発生は、圃場観察を行い把握する。
各病害虫が発生する条件で、かつ防除対策未実施の場合を示しており、防除等で以降の発生は変化することにも留意する。
病害:▲ 病勢進展(又は感染)時期 (▲は穂。 ただし、▲は 感染しても無病徴)。 害虫:▲ 密度増加期。

(防除体系)

病害虫名	11月 上 中 下	12月 上 中 下	1月 上 中 下	2月 上 中 下	3月 上 中 下	4月 上 中 下	5月 上 中 下	備　　考
	(播種)↓					(出穂)↓	(収穫)↓	
縞萎縮病								＊耕種的防除法で対応。
裸黒穂病	□							□種子消毒の効果は高い。 →本田での防除法はない。
斑葉病	□							□種子消毒の効果は高い。 →本田での防除法はない。
黒節病	□							□種子消毒の効果は有効である。
株腐病	□							＊麦の生育初期に感染・発病する。播種期が早いほど、感染に適する土壌温度域の遭遇期間が長くなり、発病が多くなる。多発圃場では過度の早播を避ける。
うどんこ病					(－	○－)		○は発生が多い場合。
さび病類								
赤かび病						○(○)		○は開花期(出穂期の4日後頃)。発病の増加が予想されるときは、その7～10日後に第2回目。
アブラムシ類					(－	○－)		○は発生が多い場合。

□は種子消毒。本田防除は、－○－は粉剤(又は液剤)。 ( )は、本年の発生状況により判断する。
なお、各剤とも該当病害虫に登録のある薬剤が前提となる。
本体系は基本的な発生状況を想定して組み立てたものであり、実際の体系は各地の実情を反映させたものとする。

（２）大麦病害虫防除法

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	
黒穂病類 斑葉病	（発生の特徴） ○ 種子伝染性病害。	○ 無病ほ場で採種。 ○ 発病穂の早期抜き取り。	播種前			種子消毒法の項参照							
縞萎縮病	（発生の特徴） ○ 土壌伝染性病害であり、種子伝染・虫媒伝染はしない。 ○ 病原ウイルスは3～15cmの比較的浅い土壌中に存在する。	○ 抵抗性品種を導入する。 ○ 播種量を多めにする。 ○ 30cm程度の深耕を行う。 ○ 大麦発病地では小麦を、小麦発病地では大麦を播種する。多発ほ場では、数年間作付をしない。	播種前		M5	ダコソイル	1:TPN	10～20kg/10a	は種前	1回	普	×	○（作条施用、土壌混和）
黒節病	（発生の特徴） ○ 種子伝染性病害。 ○ 暖冬で経過し、寒波が襲来した後に多い。 ○ 多肥条件や初期生育が旺盛な場合に多い。	○ 無病ほ場で採種。 ○ 早播きを避ける。 ○ 多肥を避ける。	播種前			種子消毒法の項参照							
			生育期		M1	Zボルドー	1:塩基性硫酸銅	500倍	ー	ー	普	×	
株腐病	（発生の特徴） ○ 秋季に感染・発病し、冬季は一旦停滞し、春季に発病増大する。 ○ 菌核や菌糸が被害残渣や土壌中で越夏し、伝染源となる。	○ 早播きを避ける。 ○ 被害残渣を適正に処分する。コンバイン刈りで残存する麦稈に伝染源となる病斑が多いため、被害茎の焼却処理は有効である。	播種前			種子消毒法の項参照							
うどんこ病	（発生の特徴） ○ 暖冬で雨の多い年に発生が多い。 ○ 日照の少ない場合に発生が多くなる。	○ 窒素質肥料の過用を避ける。 ○ 厚播き、遅播きを避ける。 ○ 抵抗性品種を導入する。	発病期		1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000～2,000倍	収穫30日前まで	3回以内（但し、出穂期以降は1回以内）	普	△	○ 薬剤選択注意
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					3	シルバキュアフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
					3	ワークアップ粉剤DL	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					3	ワークアップフロアブル	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	
					U6	コナケシ顆粒水和剤	1:ｼﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
さび病類	（発生の特徴） ○ 暖冬で雨の多い年に発生が多い。	○ 窒素質肥料の過用を避け、リン酸やカリ肥料を十分に施用して発病まん延を抑制する。	発病期		7	パシタック水和剤75	1:ﾒﾌﾟﾛﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000～8,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	
					3	ワークアップフロアブル	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
赤かび病	（発生の特徴） ○ 開花から約10日間が最も感染しやすく、この時期が温暖（気温15℃以上）で連続降雨があると発生が多くなる。 （防除上のポイント） ○ 防除時期は開花期。多発が予想される場合、7～10日後に2回目の防除を実施する。	○ 刈取り時期を早め、収穫物をすみやかに乾かす。 ○ 土入れ作業は子のう胞子の飛散を抑え、発病抑制効果がある。	開花期～乳熟期		1	トップジンM粉剤DL	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	4kg/10a	収穫14日前まで	3回以内（但し、出穂期以降は1回以内）	普	○	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000～1,500倍	収穫30日前まで	3回以内（但し、出穂期以降は1回以内）	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンMゾル	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500倍	収穫14日前まで	3回以内（但し、出穂期以降は1回以内）	普	○	○ 薬剤選択注意
				1B	1	スミトップM粉剤	1:MEP2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	4kg/10a	収穫14日前まで	1回	普	△	○ 薬剤選択注意
					3	ワークアップ粉剤DL	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					3	ワークアップフロアブル	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					3	シルバキュアフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000～3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					7	ミラビスフロアブル	1:ﾋﾟｼﾞﾌﾙﾒﾄﾌｪﾝ	1,500～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
アブラムシ類			発生期	1B	1	スミトップM粉剤	1:MEP2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	4kg/10a	収穫14日前まで	1回	普	△	○ 薬剤選択注意
				1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	

（３）小麦病害虫防除法

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一 般 名	濃 度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	
黒穂病類 斑葉病	（発生の特徴） ○ 種子伝染性病害。	○ 無病ほ場で採種。 ○ 発病穂の早期抜き取り。	播種前			種子消毒法の項参照							
縞萎縮病	（発生の特徴） ○ 土壌伝染性病害であり、種子伝染・虫媒伝染はしない。 ○ 病原ウイルスは3～15cmの比較的浅い土壌中に存在する。	○ 抵抗性品種を導入する。 ○ 播種量を多めにする。 ○ 30cm程度の深耕を行う。 ○ 大麦発病地では小麦を、小麦発病地では大麦を播種する。多発ほ場では、数年間作付をしない。	播種前		M5	ダコソイル	1:TPN	10～20kg/10a	は種前	1回	普	×	○（作条施用、土壌混和）
黒節病	（発生の特徴） ○ 種子伝染性病害。 ○ 暖冬で経過し、寒波が襲来した後に多い。 ○ 多肥条件や初期生育が旺盛な場合に多い。	○ 無病ほ場で採種。 ○ 早播きを避ける。 ○ 多肥を避ける。	播種前			種子消毒法の項参照							
株腐病	（発生の特徴） ○ 秋季に感染・発病。冬季は一旦停滞、春季に発病増大する。 ○ 菌核や菌糸が被害残渣や土壌中で越夏し、伝染源となる。	○ 早播きを避ける。 ○ 被害残渣を適正に処分する。コンバイン刈りで残存する麦稈に伝染源となる病斑が多いため、被害茎の焼却処理が有効。	播種前			種子消毒法の項参照							
うどんこ病	（発生の特徴） ○ 暖冬で多雨の年に多発する。 ○ 日照の少ない場合に発生が多くなる。	○ 窒素質肥料の過用を避ける。 ○ 厚播き、遅播きを避ける。 ○ 抵抗性品種を導入する。	発病期		1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内（但し、出穂期以降は2回以内）	普	△	○ 薬剤選択注意
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					3	シルバキュアフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					3	ワークアップ粉剤DL	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					3	ワークアップフロアブル	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	
					U6	コナケシ顆粒水和剤	1:ｼﾝﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
さび病類	（発生の特徴） ○ 暖冬で雨の多い年に発生が多い。	○ 窒素質肥料の過用を避け、リン酸やカリ肥料を十分に施用して発病まん延を抑制する。	発病期		7	バシタック水和剤75	1:ﾒﾌﾟﾛﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000～8,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	
					7	ミラビスフロアブル	1:ﾋﾟｼﾞﾌﾙﾒﾄﾌｪﾝ	1,500～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					3	ワークアップフロアブル	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾟﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
赤かび病	（発生の特徴） ○ 開花から約10日間が最も感染しやすく、この時期が温暖（気温15℃以上）で連続降雨があると発生が多くなる。 （防除上のポイント） ○ 防除時期は開花期となる。多発が予想される場合、7～10日後に2回目の防除を実施する。	○ 刈取り時期を早め、収穫物をすみやかに乾かす。 ○ 土入れ作業は子のう胞子の飛散を抑え、発病抑制効果がある。	開花期～乳熟期		1	トップジンM粉剤DL	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	3～4kg/10a	収穫14日前まで	3回以内（但し、出穂期以降は2回以内）	普	○	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000～1,500倍	収穫14日前まで	3回以内（但し、出穂期以降は2回以内）	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンMゾル	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000～1,500倍	収穫14日前まで	3回以内（但し、出穂期以降は2回以内）	普	○	○ 薬剤選択注意
				1B	1	スミトップM粉剤	1:MEP2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	4kg/10a	収穫14日前まで	1回	普	△	○ 薬剤選択注意
					3	ワークアップ粉剤DL	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					3	ワークアップフロアブル	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					3	シルバキュアフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000～3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					7	ミラビスフロアブル	1:ﾋﾟｼﾞﾌﾙﾒﾄﾌｪﾝ	1,500～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
アブラムシ類			発生期	1B	1	スミトップM粉剤	1:MEP2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	4kg/10a	収穫14日前まで	1回	普	△	○ 薬剤選択注意
				1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	

（4）麦類種子消毒法

病害虫名	種子消毒法	実施上の注意事項
裸黒穂病	1．太陽熱消毒法 水４時間浸漬→ムシロ等に広げ日光消毒 ４時間以上→陰干乾燥 2．風呂湯浸法 当初裸麦43℃、小麦45℃→９時間後30℃→陰干乾燥	(1) 温度、時間を正確に保つ。 (2) 太陽熱消毒は、７月の晴天日中に実施し、ムシロ１枚当り５kg以内とする。 (3) 風呂湯浸法では、残り火を完全に消し、ふたを10cmほどすかせること。
オオムギ斑葉病 オオムギ雲形病 オオムギ網斑病 その他の種子伝染性病害	1．塩水選 （比重）裸麦　小麦　1.22 二条大麦　1.13	

○薬剤消毒法

農薬名	一般名	使用時期／使用回数	使用方法	対象病害虫 裸黒穂病	斑葉病	株腐病	条斑病	雲形病	黒節病	人毒	水産（注）	実施上の注意事項
トリフミン水和剤	トリフルミゾール	は種前/1回	種子重量の0.5%粉衣	○	○					普	○	(1)ホーマイコートは、大麦のみ処理できる。 (2)ベンレートT、ホーマイ剤、シードラック剤、Zボルドーは水産動植物に影響を及ぼす恐れがあるので、残液は魚介類などに影響のないように処理する。 (3)機械は種の場合には、コート剤を使用する。 (4)シードラックは、大麦斑葉病のみ処理できる。
ベンレートT水和剤２０	チウラム・ベノミル	は種前/1回	乾燥種子重量の0.5%粉衣	○	○		○	○		普	×	
			20倍　10～20分間浸漬	○	○		○					
			200倍　6～24時間浸漬	○	○		○					
ベンレートTコート	チウラム・ベノミル	は種前/1回	乾燥種子重量の0.5%粉衣	○	○	○	○			普	△	
ホーマイ水和剤	チウラム・チオファネートメチル	は種前/1回	種子重量の0.5～1.0%粉衣		○					普	△※	
			200倍　6～24時間浸漬		○							
ホーマイコート	チウラム・チオファネートメチル	は種前/1回	種子重量の2～3%粉衣		○					普	×	
シードラック水和剤	銀	は種前/1回	乾燥種子重量の0.5～1.0%粉衣（湿粉衣）						○	普	△	
			20倍　10分間浸漬		○				○			
			6倍 乾燥種子1kg当り希釈液30mℓ		○				○			
			乾燥出資重量の0.5～1.0%紛衣（湿紛衣）		○							
Zボルドー	塩基性硫酸銅	は種前/ー	種子重量の1%湿粉衣						○	普	×	

（5）麦類雑草防除法（裸麦・小麦）

1)麦作雑草防除の留意点

ア は種前～は種後出芽前における茎葉処理(非選択性)

・既発雑草の葉齢が高い場合(あきたこまち跡や耕起からの日数が経過しているなど)は、は種後に雑草が活着し、再発生しやすいため、あらかじめ非選択性の茎葉処理剤で殺草しておく。

イ は種直後の土壌処理

・麦は種直後の土壌処理剤は、土壌表面に除草剤の処理層を形成し、初期雑草を殺草する効果が高いため必ず実施する。またその際は、耕起は適湿の時に丁寧に行い土を細かくし、は種後はできるだけ早く散布する。

・激しい降雨が予測される場合は、薬害が発生したり薬剤処理層が壊れ殺草効果が低下するため、使用をさける。

・細粒剤を使用する際は、土が過乾燥の場合、殺草効果が低下するので適湿条件で処理する。

・は種深度が浅い場合(2cm未満)や覆土が十分でない場合は、薬害が発生するため極端な浅播きは避ける。

ウ 麦生育期の処理(選択性)

・雑草の発生状況や草種に応じて薬剤を選定し、雑草生育期に雑草葉齢が高くなりすぎないうちに散布する。

エ その他

・は種後の土塊が荒いと除草剤による薬害がでやすいので、稲刈り取り後は排水溝を設けるなどして乾田化につとめ、は種後の砕土性を高める。

・年々雑草の発生が多くなっている所ではプラウ耕によって雑草種子を埋設させ、発生を抑える。

・ドリル播き栽培の条間が広い場合は雑草が繁茂しやすいので、できるだけせまくする。

・排水不良田は雑草が繁茂しやすいので、排水を徹底する。

・土入れ作業は、後期に発生する雑草抑制の効果が高いので、溝さらえもかねて実施する。

2)除草剤成分と適用草種

成分名	作用機構と薬害症状	毒性 人畜	毒性 水産（注）	一年生イネ科	スズメノカタビラ	スズメノテッポウ	カズノコグサ	一年生広葉	ヤエムグラ	薬剤名（注）
プロスルホカルブ	脂質合成系阻害 発芽及び生育阻害	普	△	●	●	●	◎	●	●	ボクサー、 **キックボクサー細粒剤F**

成分名	作用機構と 薬害症状	毒性		一年生イネ科				一年生広葉		薬剤名（注）
		人畜	水産（注）		スズメノカタビラ	スズメノテッポウ	カズノコグサ		ヤエムグラ	
ベンチオカーブ	光合成阻害 葉枯れ、生育抑制	普	△	●		●		●		クリアターン乳剤、 サターンバアロ乳剤
トリフルラリン	細胞分裂阻害 発芽抑制	普	△	●			◎	●		トレファノサイド乳剤、 コンボラル
ペンディメタリン	細胞分裂・細胞伸長阻害 出芽生育抑制	普	△	●	●			●		ゴーゴーサン乳剤、カイタック乳剤、 コンボラル、クリアターン乳剤
プロメトリン	長鎖脂肪酸合成阻害 生育抑制	普	△	●		●		●		サターンバアロ乳剤
チフェンスル フロンメチル	ALS 阻害(アミノ酸系) 生育抑制	普	○	●	◎	●		●	●	ハーモニー75DF 水和剤、 ハーモニーDF 水和剤
リニュロン	光合成阻害 黄化・褐変	普	△	●				●		カイタック乳剤、クリアターン乳剤、 **キックボクサー細粒剤 F**
ジフルフェニカン	カロチノイド生合成阻害 白化	普	△	○				●	◎	リベレーターフロアブル・G
フルフェナセット	細胞分裂阻害 出芽生育抑制	普	△	●	●	●	●		◎	リベレーターフロアブル・G
ベンタゾン	光合成阻害 黄化・斑点	普	○	×				●	●	バサグラン液剤
ピラフルフェンエチル	ＰＰＯ阻害(クロロフィル系) 褐変	普	△	×				●	●	エコパートフロアブル
アイオキシニル	光合成・呼吸阻害 生育抑制、黄化	普	△	×				●	●	アクチノール B 乳剤

●極大 ◎大 ○中 ×効果なし (公財)日本植物調節剤研究協会の薬剤特性表を参考に作成
薬剤名の太字に下線表記の剤は、水産の表記が異なる(キックボクサー細粒剤F「○」)。

3)除草体系

	播種前	播種直後	麦 生 育 期
体系①	－	土壌処理剤	選択性の除草剤を処理（草種に応じ、薬剤を選定する） ・ハーモニー75DF水和剤：スズメノテッポウ５葉期、カズノコグサ３葉期まで ・アクチノールB乳剤　：ヤエムグラ２～４節まで ・エコパートフロアブル：広葉雑草２～４葉期 ・バサグラン液剤　：広葉雑草３～６葉期
体系②	茎葉処理剤 (非選択性)	土壌処理剤	
体系③	－	土壌処理剤 茎葉処理剤	

4)除草剤使用法

ア　は種前～は種後出芽前の茎葉処理剤（非選択性）

薬　剤　名	成分名及び含量(%)	使用時期 (使用回数/回)	使用量 (使用水量)/10a	使 用 上 の 注 意
サンフーロン液剤	グリホサートイソプロピルアミン塩 41.0	麦類(小麦を除く) (一年生雑草) 耕起7日前まで (雑草生育期) /3回 小麦 (一年生雑草) 耕起7日前まで (雑草生育期) /1回	250～500mℓ (50～100ℓ)	(1)雑草の発生前処理は効果がない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。
		(多年生雑草)	500～750mℓ (50～100ℓ)	
ラウンドアップマックスロード	グリホサートカリウム塩 48.0	麦類 (一年生雑草) 耕起又はは種前 (雑草生育期) /3回	200～500mℓ (少量散布 5～25ℓ)	(1)雑草の発生前処理は効果がない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。 (4)少量散布時は専用のラウンドノズルULV5を使用すること。
		は種後出芽前 (雑草生育期) /3回	200～500mℓ (少量散布 5～25ℓ)	
		(一年生雑草及び多年生イネ科雑草) は種後出芽前 (雑草生育期) /3回 耕起前又は種前まで(雑草生育期) /3回	200～500mℓ (通常散布 50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ)	

薬　剤　名	成分名及び含量(%)	使用時期 (使用回数/回)	使用量 (使用水量)/10a	使　用　上　の　注　意
バスタ液剤	グルホシネート　18.5	大麦・小麦 は種前 は種後出芽前 (雑草生育期) /1回	大麦 300～500mℓ (100～150ℓ) 小麦 は種前 300～750mℓ (100～150ℓ) は種後出芽前 300～500mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草の発生前処理は効果がない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。
タッチダウンｉQ	グリホサートカリウム塩 43.0	大麦 耕起又はは種前 /3回 は種後出芽前 (雑草生育期： 草丈30cm以下) /1回 小麦 耕起又はは種前 (雑草生育期) は種後出芽前 (雑草生育期： 草丈30cm以下) /1回	250～500mℓ (25～100ℓ)	(1)雑草の発生前処理は効果がない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。
レグロックス	ジクワットジブロミド 31.8	麦類 は種5-10日前 (雑草生育期) /1回	400mℓ (70～100ℓ)	(1)は種後には使用できない。 (2)展着剤は非イオン系を使用する。 (3)広葉雑草への効果は強いが、葉齢の大きいイネ科雑草に対してはやや効果が劣るので、所定範囲内の薬量で多めに使用する。
クサクリーン液剤	グリホサートイソプロピルアミン塩 41.0	麦類(小麦を除く) (一年生雑草) 耕起7日前まで (雑草生育期) /1回	250～500mℓ (100ℓ)	(1)雑草の発生前処理効果はない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。
		播種後出芽前 (雑草生育期) /1回	250～500mℓ (25～100ℓ)	
ザクサ液剤	グリホシネートＰナトリウム塩 11.5	大麦・小麦 (一年生雑草) 耕起前又はは種前 (雑草生育期) /1回	300～500mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草の生育期に有効であるが、草丈30cmを目安の時期を失しないように、丁寧に散布する。 (2)展着剤を加用しない。

イ　播種後の土壌処理剤

薬　剤　名	成分名及び含量(%)	使用時期 (使用回数/回)	使用量 (使用水量)/10a	使　用　上　の　注　意
トレファノサイド乳剤	トリフルラリン　44.5	麦類 は種後出芽前～３葉期 (雑草発生前～雑草発生始) /2回	250～300mℓ (100ℓ)	(1)整地は丁寧に行いは種後鎮圧する。 (2)砂質土壌では使用しない。 (3)不耕起播には使用しない。 (4)粒剤は風の影響で散布ムラにならないよう朝夕の風のない時に散布する。
トレファノサイド粒剤2.5	トリフルラリン　2.5		４～５kg	
サターンバアロ乳剤	ベンチオカーブ　50.0 プロメトリン　5.0	麦類 は種直後麦出芽前 (雑草発生前) /1回	500～750mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草が発生してからは効果が劣るので、必ず雑草の発生前に散布する。 (2)作物の生育期に散布すると薬害が発生するので散布しない (3)隣接作物に薬液がかからないように、注意して散布する。
サターンバアロ粒剤	ベンチオカーブ　8.0 プロメトリン　0.8	小麦・大麦 麦4葉期まで (スズメノテッポウ1.5葉期まで) /1回	３～５kg	(1)土壌が極端に乾燥していると効果が劣るのであらかじめ散水する等土壌に適度な湿りを持たせて散布する。 (2)イネ科雑草に比べ広葉雑草には効果が不十分な場合があるので、広葉一年生雑草の優占する圃場では所定範囲内の多めの薬量を使用する。
ゴーゴーサン乳剤	ペンディメタリン　30.0	大麦 は種後出芽前 (雑草発生前) /1回	300～500mℓ (70～150ℓ)	(1)土壌が乾燥している場合は、効果が劣るので、土壌が適度の水分を含んでいる時に散布する。
		大麦 生育期 (雑草発生前)但し収穫60日前まで /1回	300～500mℓ (70～100ℓ)	
		小麦 は種後～麦2葉期 (イネ科雑草発生前～雑草1葉期) /1回		
ゴーゴーサン細粒剤Ｆ	ペンディメタリン　2.0	麦類 は種後出芽前 (雑草発生前) /1回	５～６kg	

薬　剤　名	成分名及び含量(%)	使用時期 (使用回数/回)	使用量 (使用水量)/10a	使 用 上 の 注 意
カイタック乳剤	ペンディメタリン 15.0 リニュロン 10.0	大麦・小麦 は種直後 (雑草発生前) /1回	500～800mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に均一に散布する。 (2)土壌が乾燥している場合は効果が劣る。 (3)排水不良田での使用は避ける。
カイタック細粒剤F	ペンディメタリン 1.5 リニュロン 1.0		５～６kg	
クリアターン乳剤	ベンチオカーブ 50.0 ペンディメタリン 5.0 リニュロン 7.5	大麦・小麦 は種直後 (雑草発生前) /1回	500～700mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に均一に散布する。 (2)整地は丁寧に行いは種後鎮圧する。 (3)砂質土壌では使用しない。 (4)乳剤は隣接作物に薬液がかからないように注意し散布する。
クリアターン細粒剤F	ベンチオカーブ 8.0 ペンディメタリン 0.8 リニュロン 1.2		４～５kg	
ボクサー	プロスルホカルブ 78.4	麦類 は種後～麦2葉期 (雑草発生前～雑草発生始期) /1回	400～500mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草葉齢が進むと効果が低下するため、雑草発生始期に早めに散布する。 (2)一過性の薬害（黄斑、縮葉）を生ずることがあるがその後の生育に影響はない。 (3)排水不良田での使用は避ける。 (4)土壌が乾燥している場合は効果が劣る。
キックボクサー細粒剤F	プロスルホカルブ 7.0 リニュロン 1.75	大麦・小麦 は種後出芽前 (雑草発生前) /1回	３～４kg	(1)雑草発生前に均一に散布する。 (2)一過性の薬害（黄斑、縮葉）を生ずることがあるがその後の生育に影響はない。 (3)砂質土壌では使用しない。 (4)土壌が乾燥している場合は効果が劣る。
コンボラル	トリフルラリン 1.2 ペンディメタリン 1.2	麦類 は種直後 /1回	４～６kg	(1)雑草発生前に均一に散布する。 (2)土壌が乾燥している場合は効果が劣る。 (3)排水不良田での使用は避ける。
リベレーターG	フルフェナセット 0.60 ジフルフェニカン 0.20	小麦(秋播栽培)大麦(秋播栽培) (一年生雑草) は種後～麦2葉期(雑草発生前～イネ科雑草1葉期まで /1回	４～５kg	(1)雑草発生前からイネ科雑草1葉期までで時期を失しない。 (2)砂質土壌、排水不良田、過湿状態での使用は避ける。 (3)処理後、多量の雨が予想される場合は使用を避ける。 (4)使用により葉身に白化や黄化などがみられる場合がある。
リベレーター フロアブル	フルフェナセット 33.6 ジフルフェニカン 8.4	小麦 大麦(秋播栽培) (一年生雑草) は種後～麦3葉期(雑草発生前～イネ科雑草1葉期まで) /1回	60～80mℓ (100ℓ)	

ウ　麦生育期の処理剤（選択性）

薬　剤　名	成分名及び含量(%)	使用時期 (使用回数/回)	使用量 (使用水量)/10a	使 用 上 の 注 意
アクチノールＢ乳剤	アイオキシニル 30.0	麦類 穂ばらみ期まで (雑草生育初期) 雑草茎葉散布または全面散布 /2回	100～200mℓ (70～100ℓ)	(1) ヤエムグラが出揃い、２～４節期になった頃（１～２月)を目安に散布する。 (2) ヤエムグラに特効的であるが、イネ科雑草には効果がない。 (3) 水産動植物に影響を及ぼす恐れがあるので残液や噴霧器の洗い水を川などに流さないこと。
エコパートフロアブル	ピラフルフェンエチル 2.0	大麦・小麦 収穫45日前まで 節間伸長開始期まで (広葉雑草2～4葉期) 雑草茎葉または全面散布　/2回	50～100mℓ (100ℓ)	(1)広葉にのみ有効であるので、イネ科雑草に有効な土壌処理剤などとの体系で使用する。 (2)ヤエムグラに対して効果が高い。 (3)展着剤を加用しない。 (4)麦踏み後の数日間は避ける。 (5)有機リン剤との近接散布は薬害の恐れがあるので避ける。
ハーモニー７５ＤＦ水和剤 ハーモニーＤＦ水和剤	チフェンスルフロンメチル 75.0	大麦・小麦 は種後～節間伸長前 (スズメノテッポウ５葉期まで) 雑草茎葉または土壌散布　/1回	5～10g (100ℓ)	(1)薬量が少ないのでよくかき混ぜてから均一に散布する。 (2)飛散の少ない専用ノズルを使用するなど、隣接作物に薬液がかからないように散布する(薬害)。 (3)使用器具は、使用後に消石灰500倍による水洗いを行う。 (4)効果は遅効的で枯死に至るまで約３週間を要する。
ハーモニー細粒剤F	チフェンスルフロンメチル 0.15	大麦・小麦 は種後～麦3葉期 (雑草発生前～発生始期) 全面土壌散布 /1回	4～5kg	(1)砂質土、排水不良田、降雨前後には使用しない。 (2)まきむらのないよう丁寧に散布する。 (3)隣接作物に飛散しないように注意する。 (4)散布器具は、散布後に砂等を通して洗浄する。 (5)本剤を使用した圃場では、ハーモニー75DF水和剤は使用しない。
バサグラン液剤	ベンタゾンナトリウム塩 40.0	大麦 収穫90日前まで 小麦 収穫45日前まで 雑草茎葉または全面散布　/1回	100～200mℓ (70～100ℓ)	(1)広葉にのみ有効であるので、イネ科雑草に有効な土壌処理剤などとの体系で使用する。 (2)キンポウゲ類に対して効果が高い。 (3)高温、晴天時に効果が高い。 (4)散布後、曇天、降雨日が長く続くと効果が劣ることがある。

エ　圃場内周縁の茎葉処理（非選択性）

薬　剤　名	成分名及び含量（%）	使用時期（使用回数/回）	使用量（使用水量）/10a	使　用　上　の　注　意
ラウンドアップマックスロード	グリホサートカリウム塩 48.0	麦類 圃場内の周縁部 収穫前日まで（雑草生育期） /3回	200～500mℓ（通常散布 50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ）	(1)雑草の発生前処理は効果がない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。
バスタ液剤	グルホシネート 18.5	大麦・小麦 圃場内の周縁部 収穫７日前まで（雑草生育期） /は種後は3回	300～500mℓ（100～150ℓ）	(1)雑草の発生前処理は効果がない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。
タッチダウンｉQ	グリホサートカリウム塩 43.0	大麦 圃場内の周縁部 雑草生育期但し、収穫７日前まで（草丈30cm以下） /3回 小麦（秋播） 圃場内の周縁部 雑草生育期但し、収穫３日前まで（草丈30cm以下） /1回	250～500mℓ（25～50ℓ）	(1)雑草の発生前処理は効果がない。 (2)展着剤を加用しない。 (3)作物の出芽後に散布すると薬害を生じるので、必ず出芽前に散布すること。
ザクサ液剤	グリホシネートＰナトリウム塩 11.5	大麦・小麦 圃場内の周縁部 収穫７日前まで（雑草生育期） /は種後は3回	300～500mℓ（100～150ℓ）	(1)雑草の生育期に有効であるが、草丈30cmを目安の時期を失しないように、丁寧に散布する。 (2)展着剤を加用しない。

5)カラスノエンドウ対策

カラスノエンドウの種子が麦に混入すると、乾燥調製時及び精麦加工時にも除去が困難なため、麦の実需者から、徹底した混入防止を強く要望されている。また、ダラダラ発生する特性等から完全に抑草できる有効な除草剤が無い。このため、カラスノエンドウの除草には薬剤処理や耕種的防除及び人力による抜き取り等体系的な防除が必要である。

ア　は種直後の土壌処理剤を必ず処理する。またその際は、ゴーゴーサン乳剤・ゴーゴーサン細粒剤Ｆが比較的有効である。

イ　生育期処理はアクチノールＢ乳剤が比較的有効であり、カラスノエンドウの２～３葉期までに散布する。

ウ　本草は薬剤だけでは除草が困難であるので、土入れや抜き取り作業により完全除草に努める。

エ　本草は畦畔などに繁茂しているものが、圃場内に侵入する事が多いので、畦畔の除草を徹底して行う。

オ　本草はは種前から出芽したり、除草剤の効力が低下する麦の生育後半に出芽するなど、出芽期間が長く、特に麦の出穂期頃から急に繁茂して、種子を成熟させるので、特に茎立ち期前の土入れにより発生、生育を抑制する。

カ　麦の穀粒に混入したカラスノエンドウ種子は、乾燥後のグレーダ調製時では除去が極めて困難なため、コンバイン収穫時の刈り込み混入を防止する必要がある。そのため、収穫前に必ず抜き取って完全除去を行う。抜き取り時期は、麦の黄熟前ではカラスノエンドウの識別が困難で、収穫直前では抜き取り時に麦茎葉の損傷が大きくなるので、黄熟直後に行うのが望ましい。

キ　収穫時にはコンバイン上から圃場をよく観察し、発見した場合は必ず抜き取ってから収穫作業を再開する。

ク　カントリーエレベーターやライスセンターなどの大型共同乾燥施設では、収穫前の立毛調査で、カラスノエンドウ発生圃場を確認し、荷受け開始前の完全除去に努める。また、荷受け時の調査を強化して、カラスノエンドウ種子の混入を防ぎ、全体の品質が低下しないように努める。

ケ　麦にカラスノエンドウ種子が混入した場合は、色彩選別機や揺動選別機による除去が比較的有効であるが、除去の効率が悪く、時間がかかるうえに麦のロスも大きい。

コ　自家採種種子からの発生拡大があるので、種子更新を励行する。

6)カズノコグサ対策

ア　は種直後にボクサー、キックボクサー細粒剤Ｆ、リベレーターフロアブル、リベレーターＧ等の土壌処理剤を必ず処理する。

イ　湿潤条件でカズノコグサが発生しやすいので、排水溝などの排水対策を励行する。

ウ　生育期に使用するハーモニー７５ＤＦ水和剤は、カズノコグサ３葉期までに散布し、土壌処理剤との体系処理とする。

エ　土入れや麦踏みを実施し、耕種的防除に努める。

オ　カズノコグサの発生が多い圃場は、次年度の種子を減らすことからも、抜き取りを実施する。

カ　麦を早播きすると発生が多くなるため、11月中～下旬の適期は種に努める。

7)スズメノテッポウ対策

スズメノテッポウは、東北以南の水田・麦作圃場に広く発生するイネ科の強害雑草である。本種は、最近、各地でトリフルラリン剤に抵抗性をもつタイプ、チフェンスルフロンメチル剤に抵抗性をもつタイプ、両方ともに抵抗性をもつタイプが確認されている。本種が多発している圃場では、は種前の非選択性除草剤防除と浅耕は種を組み合わせた防除体系が効果的である。

ア　麦は種前の本種の発芽をより多くするために、水稲収穫後にできるだけ速やかに一度５cm程度の浅耕で耕起する。

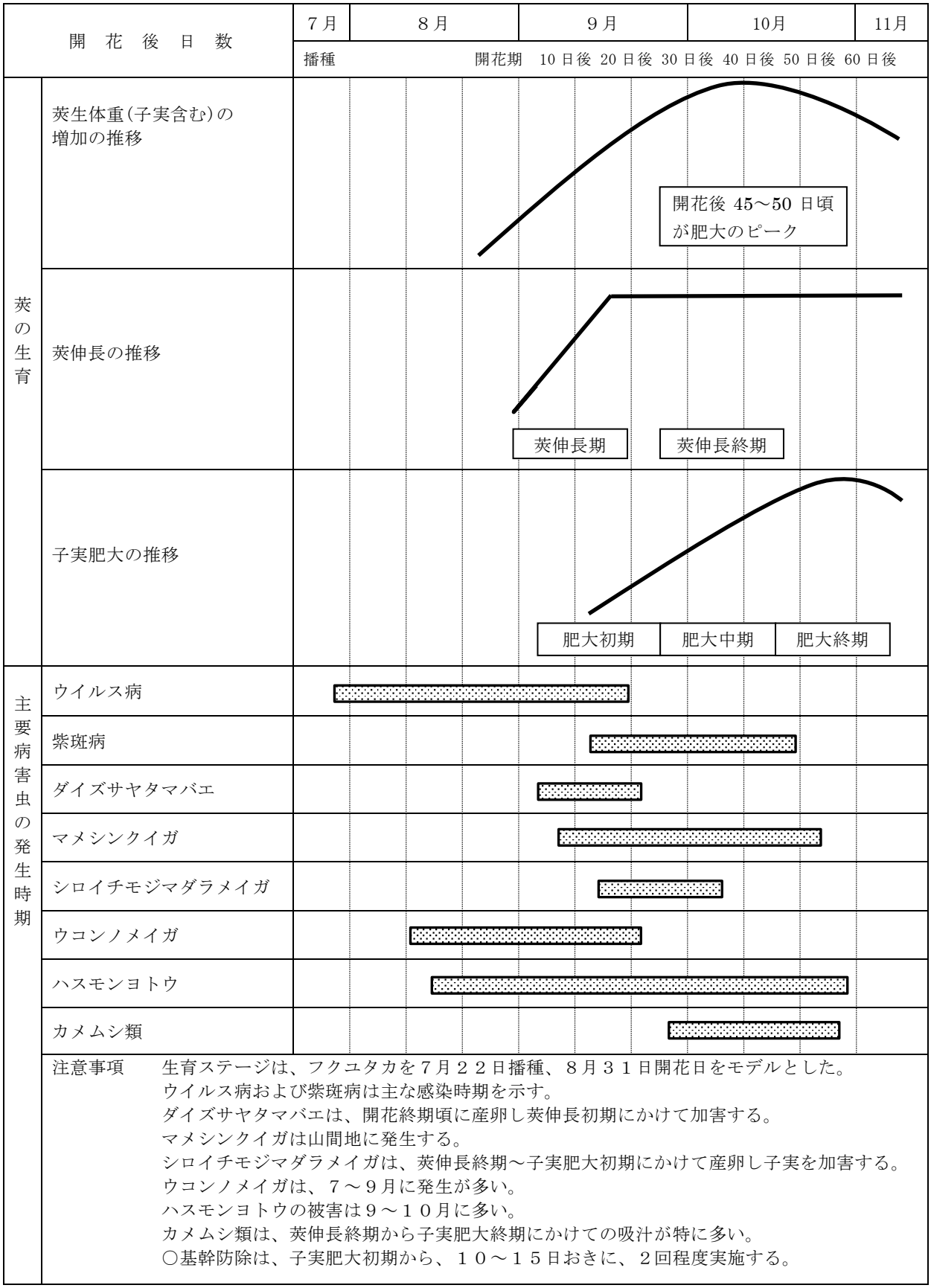
イ　水稲収穫後から麦類をは種するまでの間に土壌表層から発生したスズメノテッポウを非選択性除草剤で防除し、土壌表層のスズメノテッポウの種子が少ない状態にする。は種を遅らせ、スズメノテッポウの発生を十分に促してから防除するとより効果的である。

ウ　下層にある種子を表層に移動させないように、５cm程度の浅耕もしくは不耕起で麦をは種する。

エ　麦は種後には、ボクサー、キックボクサー細粒剤Ｆ、リベレーターフロアブル、リベレーターＧ等の土壌処理除草剤をできるだけ速やかに散布する。

3 大豆病害虫防除指針

(1) 莢の生育と病害虫発生時期



注意事項　生育ステージは、フクユタカを７月２２日播種、８月３１日開花日をモデルとした。
ウイルス病および紫斑病は主な感染時期を示す。
ダイズサヤタマバエは、開花終期頃に産卵し莢伸長初期にかけて加害する。
マメシンクイガは山間地に発生する。
シロイチモジマダラメイガは、莢伸長終期～子実肥大初期にかけて産卵し子実を加害する。
ウコンノメイガは、７～９月に発生が多い。
ハスモンヨトウの被害は９～１０月に多い。
カメムシ類は、莢伸長終期から子実肥大終期にかけての吸汁が特に多い。
○基幹防除は、子実肥大初期から、１０～１５日おきに、２回程度実施する。

（２）大豆病害虫防除法

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス病	〔特徴・防除上のポイント等〕○本病は種子伝染、汁液伝染、アブラムシ類(ﾓﾓｱｶｱﾌﾞﾗﾑｼ、ﾀﾞｲｽﾞｱﾌﾞﾗﾑｼ)の媒介によっておこる。○本病により褐斑粒が発生する場合がある。 〔耕種的防除法〕○耐病性品種の選定 ○無病種子を使用 ○発病初期に罹病株を除去												
			アブラムシ類防除の項参照										
紫斑病	（発生の特徴） ○ 中山間地帯で発病しやすく、莢伸長期以降に降雨が多いと多発。	○ 無病種子を使用し発病粒を混入させないよう厳密に除去。 ○ 刈取後すみやかに乾燥、脱粒。	は種前（種子消毒）		M3	キヒゲン	1:ﾁｳﾗﾑ	乾燥種子重量の1%	は種前	1回	普	×	○ 粉衣。ハトの忌避にも登録がある。
					M3	キヒゲンR－2フロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	原液20mℓ/乾燥種子1kg	は種前	1回	普	△※	○ 塗沫
				4A	12+4	クルーザーMAXX	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ3:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	原液8mℓ/乾燥種子1kg	は種前	1回	普	○	○ 塗沫、ハトの忌避にも登録がある。
	（防除上のポイント） ○ 紫斑粒発生防止には開花後15～50日の間に1～3回防除。 ○ 防除にあたってはベンゾイミダゾール系薬剤耐性菌が一部で確認されているので、系統の違う薬剤をローテーション使用。	○ 発病茎葉や落葉は確実に処分。 ○ 秋耕は感染源の減少に有効。	子実肥大期		1	トップジンM粉剤DL	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	4kg/10a	収穫14日前まで	4回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	700～1,500倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
				1B	1	スミトップM粉剤	1:MEP2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	3～4kg/10a	開花期～若莢期 但し、収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				3A	11	アミスタートレボンSE	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ2:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾟﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	サンリット水和剤	1:ｼﾒｺﾅｿﾞｰﾙ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△※	
					U16	トライフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌﾛｷﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					3	プランダム乳剤25	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	3,000～5,000倍	開花後～収穫7日前まで	2回以内	普	○	
白絹病	（発生の特徴） ○ 麦わらのすき込みは白絹病の発病を助長。	○ 発病地では連作を避け、他作物と輪作する。 ○ 排水をよくする。 ○ 罹病株を除去。 ○ 休閑期に1ヶ月湛水。	生育期		14	リゾレックス水和剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 3ℓ/㎡土壌灌注
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	○ 株元散布

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	
べと病	(発生の特徴) ○ 発病が激しい時は落葉し、被害が大きい。	○ 密植を避け通風をよくする。 ○ 施肥に注意し過繁茂を避ける。 ○ 罹病植物を除去。 ○ 連作を避ける。	生育期		27+M3	カーゼートPZ水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾟﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	2,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	500倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	600倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾟﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△※	
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	1,500～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					45+40	ザンプロDMフロアブル	1:ｱﾒﾄｸﾄﾗｼﾞﾝ2:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ	1,500～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○ ウイルス病に弱い品種(丹波黒など)では早期防除を徹底。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺の除草を行う。 ○ シルバーテープ等の展張は有翅虫の飛来防止に有効である。	前播種	4A	12+4	クルーザーMAXX	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ3:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	原液8mℓ/乾燥種子1kg	は種前	1回	普	○	
			生育期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツフロアブル	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,500～5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000～6,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 幼虫は5月から6月と秋に発生が多い。	○ 前作や作付け前の雑草に産卵され生育した幼虫が加害源になるので、作付け予定地では予め除草。	播種前	4A		クルーザーFS30	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	原液6mℓ/乾燥種子1kg	は種前	1回	普	△	○ 塗沫処理
				4A	12+4	クルーザーMAXX	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ3:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	原液8mℓ/乾燥種子1kg	は種前	1回	普	○	○ ハトの忌避にも登録がある。
			播種時又は定植時										
				1B		カルホス粉剤	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	4～6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	△	○ 作条施用土壌混和
				1B		カルホス微粒剤F	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	劇	△	○ 土壌表面散布土壌混和処理
			播種時～本葉2葉期										
				1B		カルホス粉剤	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	4kg/10a	は種時～本葉2葉期	2回以内	普	△	○ 土壌表面散布
				1B		ネキリエースK	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	3kg/10a	は種時～本葉2葉期	2回以内	普	△	○ 土壌表面株元処理
			初生育期	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
			生育期	22B		アクセルベイト	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	3～6kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 株元散布

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	
タネバエ	（発生の特徴） ○ 未熟堆厩肥等使用すると多発。	○ 晩播すると発生が少ない。	播種前	4A		クルーザーFS30	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	原液6mℓ/乾燥種子1kg	は種前	1回	普	△	○ 塗沫処理
				4A	12+4	クルーザーMAXX	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ3:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	原液8mℓ/乾燥種子1kg	は種前	1回	普	○	○ ハトの忌避にも登録がある。
				1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	収穫30日前まで	5回以内	普	×	○ 全面又は作条土壌混和
			播種時	1B		カルホス粉剤	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	4～6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 作条施用土壌混和
				1B		カルホス微粒剤F	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	6kg/10a	は種時	2回以内	劇	△	○ 土壌表面散布土壌混和処理
				1B		ダイアジノン粒剤10	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	3kg/10a	は種時	1回	劇	×	○ 作条土壌混和
コガネムシ類 （ﾋﾒｺｶﾞﾈ ﾏﾒｺｶﾞﾈ ﾄﾞｳｶﾞﾈ）	（防除上のポイント） ○ 散布剤を発生初期に1～2回散布する。	○ 未熟な有機物を施用したり、青刈り作物をすき込まない。	播種前（幼虫）	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	収穫30日前まで	5回以内	普	×	○ 全面又は作条土壌混和
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
			生育期（成虫）	1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	1,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
カメムシ類 （ﾐﾅﾐｱｵｶﾒﾑｼ ｱｵｸｻｶﾒﾑｼ ﾏﾙｶﾒﾑｼ ｲﾁﾓﾝｼﾞｶﾒﾑｼ ﾎｿﾍﾘｶﾒﾑｼ等）	（発生の特徴） ○ 吸汁加害によって着莢が阻害されるので、開花終期から子実肥大期に2回程度、薬剤散布。 ○ ミナミアオカメムシは、特に10月以降、収穫終了した普通期水稲からの移動、発生量の増加、各世代の混発によって、発生が多くなる（P53発生経過図参照）。	○ 圃場周辺の除草に努める。 ○ 開花期の遅い品種を選ぶ。	生育期	1B	1	スミトップM粉剤	1:MEP2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	3～4kg/10a	開花期～若莢期	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
				1B		スミチオン粉剤3DL	1:MEP	4kg/10a	収穫21日前まで	4回以内	普	△	
				1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	
				1B		トクチオン乳剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				4A		アルバリン粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				4A		スタークル液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークルメイト液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ粉剤DL	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				4A		ダントツフロアブル	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,500～5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4C		エクシードフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
				2B		キラップフロアブル	1:ｴﾁﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				3A		トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	4kg/10a	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A	11	アミスタートレボンSE	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ2:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A+4A		トレボンスター粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3～4kg/10a	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	
ダイズサヤタマバエ	(防除上のポイント) ○ 莢又は虫体によく薬剤がかかるよう散布。	○ 適期の範囲内で遅まきする。	着莢期	1B	1	スミトップM粉剤	1:MEP2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	3～4kg/10a	開花期～若莢期 但し、収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
				1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				4A		アルバリン粉剤DL	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				4A		スタークル液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				3A		トレボン粉剤DL	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	4kg/10a	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤注意事項(P.15)
マメシンクイガ	(発生の特徴) ○ 年1回発生し、孵化幼虫が莢に食入して子実を加害する。 (防除上のポイント) ○ 散布剤を1～2回散布する。	○ 連作を避ける。	生育期	1B	1	スミトップM粉剤	1:MEP2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	3～4kg/10a	開花期～若莢期 但し、収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
				1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000～1,500倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	
				1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				1B		トクチオン乳剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	1,000～1,500倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツフロアブル	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000～10,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤注意事項(P.15)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
シロイチモジマダラメイガ	(発生の特徴) ○ 孵化幼虫が莢内に食入し子実を加害する。	○ 適期の範囲内で遅まきする。	子実肥大期 着莢期～	1B	1	スミトップM粉剤	1:MEP2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	3～4kg/10a	開花期～若莢期 但し、収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
				1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	
				1B		トクチオン乳剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
				3A+1B		パーマチオン水和剤	1:ﾌｪﾝﾊﾞﾚﾚｰﾄ2:MEP	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
フキノメイガ(アズキノメイガ)	(発生の特徴) ○ 8月上旬、10月中旬に発生が多い。		生育期	3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	
ウコンノメイガ	（発生の特徴） ○ 播種時期の早い圃場や葉色の濃い圃場で発生が多い。 ○ 被害は8～9月に多い。	○ 適期の範囲内で遅まきする。	葉の巻き始め初期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	
				3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤注意事項(P.15)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツH粉剤DL	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
ハスモンヨトウ	（発生の特徴） ○ 葉色の濃い場合に被害が多くなる。 （防除上のポイント） ○ 系統の違う薬剤をローテーション使用。 ○ 若齢幼虫期に薬剤散布。 ○ 秋期急増前の世代が幼虫時期である8月中下旬頃の防除が重要。	○ 白変葉(ふ化幼虫の集団加害葉)の発生に注意し除去。	生育期	22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000～10,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				18		ロムダン粉剤DL	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	4kg/10a	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤注意事項(P.15)
				18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤注意事項(P.15)
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤注意事項(P.15)
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤注意事項(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤注意事項(P.15)
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤注意事項(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤注意事項(P.15)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
						リトルア剤(性フェロモン剤の使用法の項(参考資料)参照)							
						BT剤の項(参考資料)							
ハダニ類	（発生の特徴） ○ 高温、乾燥で増加する。		発生期	6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤注意事項(P.15)
センチュウ類		○ 発生ほ場での連作回避	は種前	土壌病害虫の防除法の項参照 クロルピクリン剤の登録がある									

（３）大豆雑草防除法

1)大豆雑草防除上の留意点
①土壌処理型除草剤の抑草期間は約30日で、効果低減後は中耕培土や生育期・畝間処理除草剤で除草する。
②出芽時に湿害を受けると大豆の生育が悪くなり、雑草が繁茂するので、湿害対策を徹底する。

2)除草剤と適用草種

薬　剤　名	成分名　含量(%)	使用時期	一年生イネ科雑草		一年生広葉雑草									毒性	
			メヒシバ	オヒシバ等	アカザ	ヒユ	タデ	キク科	カヤツリグサ	ツユクサ	タネツケバナ	ノミノフスマ・ハコベ	マメ科	人畜	水産(注)
サターンバアロ乳剤	ベンチオカーブ　50.0 プロメトリン　5.0	は種後出芽前	◎	◎	○	◎	○	△～○	◎	◎	◎	◎	△	普	△
トレファノサイド粒剤2.5 トレファノサイド乳剤	トリフルラリン 粒剤2.5　乳剤44.5	は種後出芽前/生育期	◎	◎	◎	◎	△	－	－	－		◎	×	普	△
クリアターン乳剤	ベンチオカーブ　50.0 ペンディメタリン　5.0 リニュロン　7.5	は種直後(雑草発生前)	◎	◎	◎	◎	○～◎	○	◎	○～◎	◎	◎	△	普	△
エコトップP細粒剤F エコトップP乳剤	ジメテナミドP 粒剤1.0　乳剤8.5 リニュロン 粒剤1.4　乳剤12.0	は種後出芽前(雑草発生前)	◎	◎	－	◎	○～◎	－	◎	○	－	◎	－	普	○ △
ラクサー粒剤 ラクサー乳剤	アラクロール 粒剤4.0　乳剤30.0 リニュロン 粒剤1.04　乳剤12.0	は種後出芽前(雑草発生前)	◎	◎	－	◎	◎	◎	◎	○	－	◎	－	普	△
プロールプラス乳剤	ジメテナミドP　6.7 ペンディメタリン　6.5 リニュロン乳剤　11.4	は種後出芽前(雑草発生前)	◎	◎	－	◎	◎	◎	◎	◎	－	－	－	普	△
モーティブ乳剤	ジメテナミドP　19.7 ペンディメタリン　23.1	は種後出芽前(雑草発生前)	◎	◎	－	◎	◎	－	◎	○	－	－	－	普	△
ボルトフロアブル	キザロホップエチル　7.0	雑草生育期 イネ科雑草3～10葉期	◎	◎	－	－	－	－	－	－	－	－	－	普	×
セレクト乳剤	クレトジム　24.0	雑草生育期 イネ科雑草3～8葉期	◎	◎	－	－	－	－	－	－	－	－	－	普	○
ホーネスト乳剤	テプラロキシジム　10.0	雑草生育期 イネ科雑草3～5葉期	◎	◎	－	－	－	－	－	－	－	－	－	普	○
ワンサイドP乳剤	フルアジポップP　17.5	雑草生育期 イネ科雑草3～5葉期	◎	◎	－	－	－	－	－	－	－	－	－	普	△
ナブ乳剤	セトキシジム　20.0	雑草生育期 イネ科雑草3～8葉期	◎	◎	－	－	－	－	－	－	－	－	－	普	×
ワンクロスWG	フルアジホップP　7.0 リニュロン水和剤　30.0	は種後出芽前/本葉3葉期以降雑草生育期	◎	◎	－	◎	◎	－	－	－	－	－	－	普	△
パワーガイザー液剤	イマザモックスアンモニウム塩　0.85	出芽直前～3葉期まで/雑草発生揃期～2葉期	◎	◎	◎	◎	◎	○～◎	△～○	×～△	－	◎	△	普	○

◎残草量＝0～10%　○残草量＝11～20%　△残草量＝21～40%　×＝ほとんど効果なし

3)除草剤使用法
ア　は種・定植前

薬　剤　名	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量／10a)	使用上の注意
ラウンドアップマックスロード	【雑草茎葉散布】 耕起前又は出芽前まで(雑草生育期)	200～500mℓ (通常散布50～100ℓ) (少量散布5～50ℓ)	(1)散布直後の降雨は効果を減ずるので、天候を見極めて散布する。 (2)雑草生育期に有効であるが、雑草が大きくなると効果が劣るので時期を失しないとともに、薬液が雑草全体によく付着するように散布する。 (3)ラウンドアップマックスロードを少量散布する際は、専用のラウンドノズルULV5を使用すること。 (4)ザクサ液剤は、豆類(種実)ただし、らっかせいを除く登録である。
タッチダウンiQ	【雑草茎葉散布】 耕起又は、は種7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	250～500mℓ (25～50ℓ)	
サンフーロン液剤	【雑草茎葉散布】 は種10日以前(雑草生育期)	250～500mℓ (25～50ℓ)	
バスタ液剤	【雑草茎葉散布】 は種前、定植5日前まで(雑草生育期)	300～500mℓ (100～150ℓ)	
ザクサ液剤	【雑草茎葉散布】 は種、定植前(雑草生育期)	300～500mℓ (100～150ℓ)	

イ は種後出芽前

薬　剤　名	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量／10a)	使用上の注意
ラウンドアップマックスロード	【雑草茎葉散布】 出芽前まで(雑草生育期)	200～500mℓ (通常散布50～100ℓ) (少量散布5～50ℓ)	(1)必ず大豆の出芽前に使用する。 (2)ラウンドアップマックスロードを少量散布する際は、専用のラウンドノズルULV5を使用すること。
サンフーロン液剤	【雑草茎葉散布】 は種後出芽前まで(雑草生育期)	250～500mℓ (25～50ℓ)	
タッチダウンiQ	【雑草茎葉散布】 は種後出芽前(雑草生育期:草丈30cm以下)	250～500mℓ (25～100ℓ)	
バスタ液剤	【雑草茎葉散布】 は種後出芽前(雑草生育期)	300～500mℓ (100～150ℓ)	(1)必ず大豆の出芽前に使用する。
サターンバアロ乳剤	【全面土壌散布】 は種後出芽前	600～800mℓ (70～100ℓ)	(1)3cm程度の覆土をして使用する。 (2)隣接作物に薬液がかからないように注意して散布する。
クリアターン乳剤	【全面土壌散布】 は種直後(雑草発生前) 定植3日前まで(雑草発生前)	500～800mℓ 500～700mℓ (70～100ℓ)	(1)砕土、整地、覆土は丁寧に行い、覆土深は必ず2～3cmとし、軽く鎮圧した後に散布する。
トレファノサイド粒剤2.5 トレファノサイド乳剤	【全面土壌散布】 は種後出芽前又は定植前(植穴掘前) 【畦間土壌散布】 生育期(収穫45日前まで)	粒剤 4～6kg 乳剤 200～300mℓ(100ℓ)	(1)雑草の発生前使用。 (2)マルチ栽培では使用しない。 (3)散布は日中を避け、夕方か曇りの日に行う。 (4)風のない時に散布する。 (5)残液を川や池に流さない。
ラクサー粒剤 ラクサー乳剤	【全面土壌散布】 は種後出芽前(雑草発生前)	粒剤 4～6kg 乳剤 400～600mℓ(100ℓ)	(1)散布後に多量の雨があると薬害の恐れがある。 (2)蚕に対して影響があるので、桑葉にかからないように散布する(乳剤)。
エコトップP細粒剤F エコトップP乳剤	【全面土壌散布】 は種後出芽前(雑草発生前)	粒剤 4～6kg 乳剤 400～600mℓ(100ℓ)	(1)雑草の発生前使用。 (2)目、皮膚に刺激性あり。
プロールプラス乳剤	【全面土壌散布】 は種後出芽前(雑草発生前)	400～600mℓ (70～150ℓ)	(1)散布後に多量の雨があると薬害の恐れがある。 (2)蚕に対して影響があるので、桑葉にかからないように散布する。
ワンクロスWG	【全面土壌散布】 は種後出芽前(雑草発生前)	250～300g (100ℓ)	(1)目に刺激性あり。 (2)マルチ栽培では薬害を生じる恐れがあるので使用しない。
モーティブ乳剤	【全面土壌散布】 は種後出芽前(雑草発生前)	150～170mℓ (70～150ℓ)	(1)砂土では使用しない。 (2)目、皮膚に刺激性あり。

ウ 生育期・畦間処理

薬　剤　名	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量／10a)	使用上の注意
ポルトフロアブル	【雑草茎葉散布又は全面散布】 雑草生育期 イネ科雑草3～10葉期(収穫30日前まで)	200～300mℓ (100ℓ)	(1)イネ科雑草優先の圃場で使用する。 (2)遅効性であるので、誤ってまき直しをしない。 (3)周囲にイネ科作物がある場合は、薬剤が飛散しないように注意する。
セレクト乳剤	【雑草茎葉散布又は全面散布】 雑草生育期 イネ科雑草3～5葉期(収穫50日前まで)	35～50mℓ (100ℓ)	(1)イネ科雑草優先の圃場で使用する。 (2)雑草が大きくなりすぎると効果が劣るので、時期を失しないように均一に散布する。 (3)周囲にイネ科作物がある場合は、薬剤が飛散しないように注意する。
	イネ科雑草5～8葉期(収穫50日前まで)	50～75mℓ (100ℓ)	
ホーネスト乳剤	【雑草茎葉散布又は全面散布】 雑草生育期 イネ科雑草3～5葉期(収穫14日前まで)	75～100mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草優先の圃場で使用する。 (2)雑草が大きくなりすぎると効果が劣るので、時期を失しないように均一に散布する。 (3)遅効性であるので、誤ってまき直しをしない。 (4)周囲にイネ科作物がある場合は、薬剤が飛散しないように注意する。
ワンサイドP乳剤	【雑草茎葉散布又は全面散布】 雑草生育期 イネ科雑草3～5葉期(収穫60日前まで)	75～100mℓ (100ℓ)	(1)イネ科雑草優先の圃場で使用する。 (2)雑草が大きくなりすぎると効果が劣るので、時期を失しないように均一に散布する。 (3)遅効性であるので、誤ってまき直しをしない。 (4)周囲にイネ科作物がある場合は、薬剤が飛散しないように注意する。
ナブ乳剤	【雑草茎葉散布又は全面散布】 雑草生育期:イネ科雑草3～5葉期(収穫30日前まで)但し、スズメノカタビラを除く。	150～200mℓ (100～150ℓ) (通常散布50～100ℓ) (少量散布25～50ℓ)	(1)イネ科雑草優先の圃場で使用する。 (2)遅効性であるので、誤ってまき直しをしない。 (3)大豆バサグラン液剤との混用は効果が低下する。 (4)周囲にイネ科作物がある場合は、薬剤が飛散しないように注意する。
	イネ科雑草6～8葉期(収穫30日前まで)但し、スズメノカタビラを除く。	200mℓ (100ℓ) (通常散布50～100ℓ) (少量散布25～50ℓ)	
タッチダウンiQ	【雑草茎葉散布】 雑草生育期:畦間処理(収穫前日まで)	250～500mℓ (25～50ℓ)	(1)散布直後の降雨は効果を減ずるので、天候を見極めて散布する。 (2)雑草生育期に有効であるが、雑草が大きくなると効果が劣るので時期を失しないとともに、薬液が雑草全体によく付着するように散布する。 (3)ザクサ液剤は、豆類(種実)ただし、らっかせいを除く登録である。
バスタ液剤	【雑草茎葉散布】 雑草生育期:畦間処理(収穫28日前まで) 本葉5葉期以降雑草生育期:株間処理(収穫28日前まで)	300～500mℓ (100～150ℓ)	
ラウンドアップマックスロード	【雑草茎葉散布】 雑草生育期:畦間処理(収穫前日まで)	200～500mℓ (通常散布50～100ℓ) (少量散布25～50ℓ)	

薬　剤　名	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量／10a)	使用上の注意
クサクリーン液剤	【雑草茎葉散布】 雑草生育期:畝間処理(収穫前日まで)	250～500mℓ (通常散布50～100ℓ) (少量散布25～50ℓ)	(1)散布直後の降雨は効果を減ずるので、天候を見極めて散布する。 (2)雑草生育期に有効であるが、雑草が大きくなると効果が劣るので時期を失しないとともに、薬液が雑草全体によく付着するように散布する。 (3)ザクサ液剤は、豆類(種実)ただし、らっかせいを除く登録である。
ザクサ液剤	【雑草茎葉散布】 雑草生育期:畦間処理(収穫28日前まで)	300～500mℓ (100～150ℓ)	
ワンクロスWG	【畝間・株間処理】 本葉3葉期以降 雑草生育期(草丈15cm以下)(収穫45日前まで)	200～300g (100ℓ)	(1)砂質で水はけのよい畑では薬量を控える。また、激しい降雨が予想される時は使用しない。 (2)マルチ栽培では薬害を生じる恐れがある。 (3)専用ノズルを使用し、大豆の葉にかからないように散布する。
パワーガイザー液剤	【雑草茎葉散布又は全面土壌散布】 出芽直前～3葉期まで(雑草発生始期～2葉期) 【畝間雑草茎葉散布】 生育期(雑草発生揃期～2葉期)(収穫30日前まで)	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草の生育が進むと効果が低下するので、使用時期を失しないように注意する。 (2)初生葉期以降の散布では一時的な薬害が発生することがある。 (3)微量で周辺作物に影響を与える可能性があるので、薬剤が飛散しないように注意する。 (4)有機リン系殺虫剤またはイネ科雑草処理剤との10日以内の近

エ　落葉終期から収穫前処理

薬　剤　名	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量／10a)	使用上の注意
ラウンドアップマックスロード	【雑草茎葉散布】 落葉終期～収穫14日前まで(雑草生育期)1回	500mℓ (50～100ℓ)	(1)落葉終期とは、だいずの葉の大部分が落葉した時期とする。 (2)だいず着生葉や莢色に淡緑色が残っている等の成熟の遅れた株(青立株)に散布すると、子実の変色やしわ粒等が発生する場合があるので、散布前に除去等を行うこと。 (3)水分含量の高い実をつけた雑草では、茎葉が枯れても実が残る場合があり、汚損粒の原因となるので収穫前に除去等を行うこと。また、雑草の茎水分含量が高い場合も汚損粒の原因になるので収穫前に除去等を行うこと。 (4)気温の低下する条件での処理であり、効果の完成まで2週間以上の期間を要するので、収穫時期は処理後3週間を目安とする。

4)大豆バサグラン液剤について

バサグランは、ベンタゾンを有効成分とする除草剤で、日本では1975年にベンタゾン酸が水稲分野で登録された。その後、「酸」から「ナトリウム塩」に変更し継続試験され、1986年より麦類・とうもろこし等の畑作分野に使用場面を拡大した。

大豆分野においても1975年より試験を開始したが、大豆品種により薬害の発生を認め、実用化には至らなかった。

その後、水田転換作物として大豆栽培が拡大し、高収量・高品質でかつ農作業の省力化が求められ、広葉雑草防除対策の要望が現場より高まった。

このような背景により、改めてバサグラン液剤の大豆への適用性が各試験機関で精力的に検討され、品種ごとの薬剤感受性や薬害助長要因などが明らかにされてきた。大豆への薬害が懸念される中、安全使用の徹底を図るために、本剤は大豆専用剤として2005年4月6日に「大豆バサグラン液剤」の商品名で新規に登録された。

適用雑草及び使用方法

薬　剤　名 (成分名及び含量(%))	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量／10a)	使用回数 (総使用回数)	適用雑草名
大豆バサグラン液剤 (ベンタゾン 40.0)	【雑草茎葉散布又は全面散布】 だいずの2葉期～開花前(雑草の生育初期～6葉期)ただし収穫45日前まで	100～150mℓ (100ℓ)	1回 (2回)	畑地一年生雑草(イネ科を除く)
	【畦間雑草茎葉散布】 だいずの生育期(雑草の生育初期～6葉期)ただし収穫45日前まで	300～500mℓ (100ℓ)	1回 (2回)	

※薬害について

本剤の使用により、だいずの葉に斑点、色抜け、黄変、縮葉症状の一過性の薬害を生じる。また、薬害の程度および薬害の回復は品種により異なり、減収となる場合もある。したがって、使用については、事前に指導機関等の講習を受けなければ、薬剤の購入はできないので注意する。

※使用上の注意点等

○土壌処理剤との体系処理で使用する。

○土壌処理剤との体系で使用することで、対象雑草の生育ステージが揃いやすくなり、除草効果が安定する。

○ベンタゾンを含め光合成阻害剤は、処理時および処理後の気象条件によって作物および雑草に対する活性が異なり、一般に低温・曇天時には活性が低く、高温・晴天時には高くなる傾向があるため、薬害回避を重視する場合には前者の条件で、効果発揮を重視する場合は後者の条件で処理する。

また、降雨が予想される場合には散布を避ける。

○イネ科雑草が混在する場合は、イネ科雑草に有効な除草剤との体系で使用する。

○大豆バサグランは所定の葉期を越えると効果が劣り、使用時期が早いと後次発生の雑草を抑えることができないため、雑草の3～6葉期までに使用する。

○大豆の葉に隠れている雑草にも、直接かかるように株元までしっかり散布する。

○大豆バサグランの効果が劣るエノキグサ、アカザ、シロザ、イヌビユ、ホソアオゲイトウ等が優占する圃場では使用を避ける。

5)アタックショット乳剤について

アタックショット乳剤は2018年2月28日に登録された、フルチアセットメチルを有効成分とするだいず用茎葉散布除草剤で、シロザ、アオゲイトウ等のヒユ科、ヒロハフウリンホオズキ、イヌホオズキ等のナス科雑草、イチビに高い効果を示す。本剤は光要求型の除草剤に分類され、光を受けることにより速効的に枯死に至る。なお、植物体内での移行性はない。

適用雑草及び使用方法

薬　剤　名 (成分名及び含量(%))	【使用方法】 使用時期	使用量 (使用水量／10a)	使用回数 (総使用回数)	適用雑草名
アタックショット乳剤 (フルチアセットメチル 2.0)	【雑草茎葉散布または全面散布】 だいずの2葉期～開花前(雑草生育期) ただし収穫45日前まで	30～50㎖ (100ℓ)	1回 (1回)	畑地一年生雑草(イネ科を除く)

※薬害について

本剤の使用により、だいずの葉に褐変、縮葉等の一過性の薬害を生じる。薬害の程度およびその後の回復は品種、気象条件、栽培条件により異なるため、だいずが生育不良の場合または生育不良が予想される場合には使用を避ける。

散布液が霧状になると薬害が強く出ることがあるため、除草剤用のドリフト低減ノズルを使用する。また、重複散布及び展着剤の加用は避ける。

使用については、事前に指導機関等の講習を受けなければ、薬剤の購入はできないので注意する。

※使用上の注意点等

○発生前の雑草に対する土壌処理効果はないので、土壌処理剤との体系処理で使用する。

○イネ科雑草が混在する場合は、イネ科雑草に有効な除草剤との体系で使用する。

○アタックショット乳剤の効果が劣るキク科、カヤツリグサ科等が優占する圃場では使用を避ける。

○アタックショット乳剤の散布適期は雑草生育期(草丈10cm以下)であり、生育の進んだ雑草には効果が劣るので、時期を失しないように散布する。

○大豆の葉に隠れている雑草にも、直接かかるように株元までしっかり散布する。

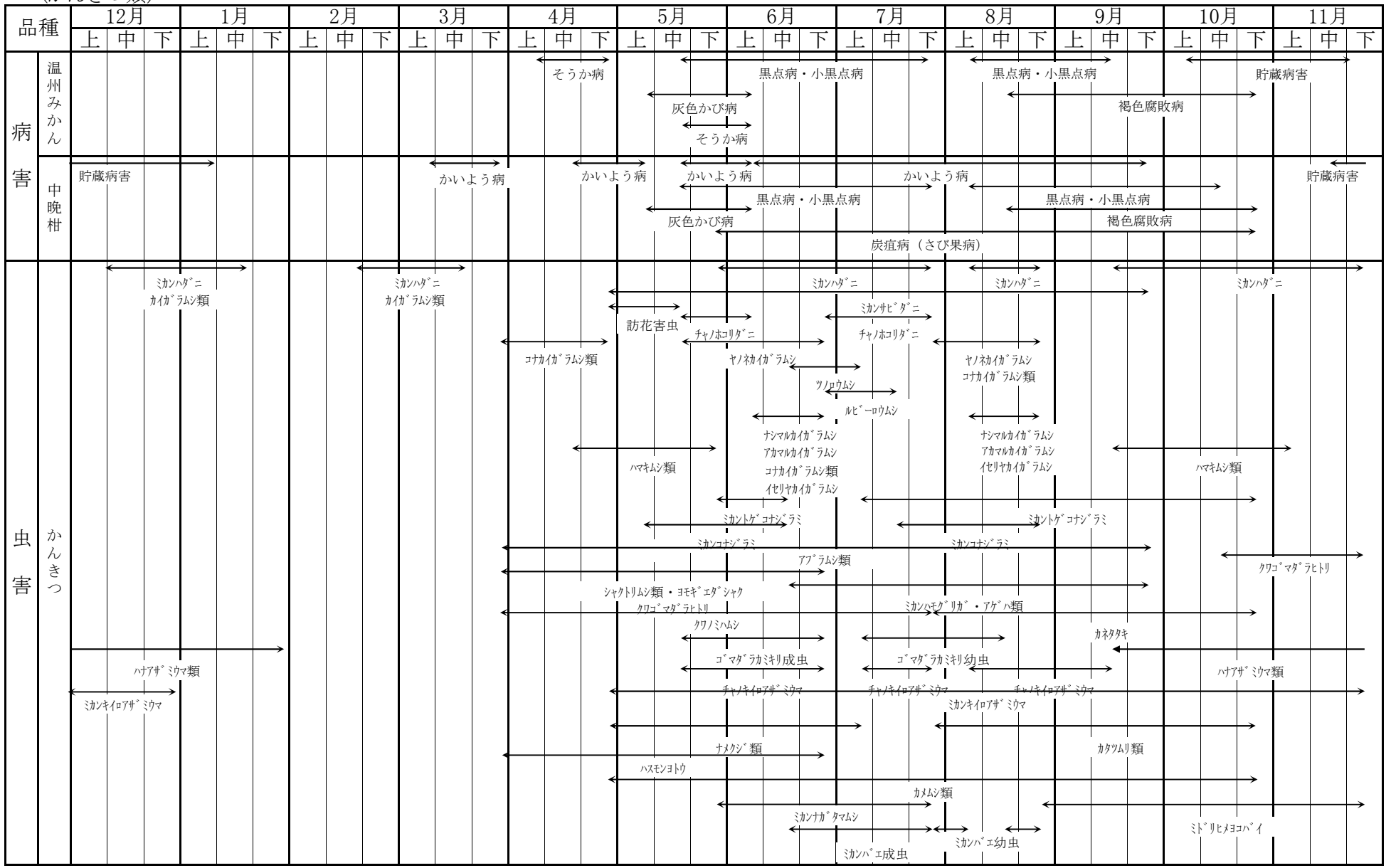
○処理後6時間以内の降雨は効果を減ずることがあるので、天候をよく見極めてから処理する。

4　果　　樹

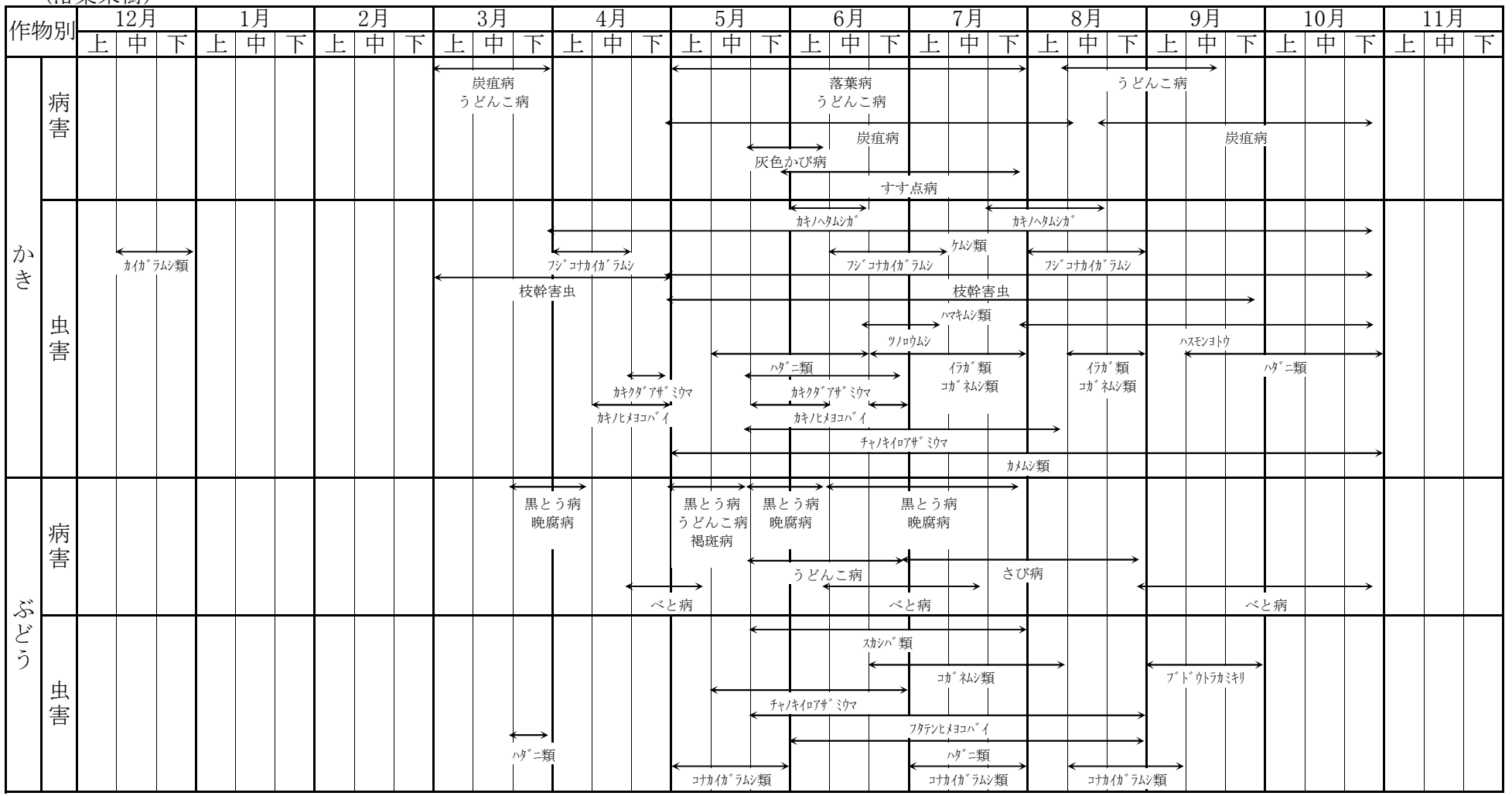
4　果樹病害虫防除指針

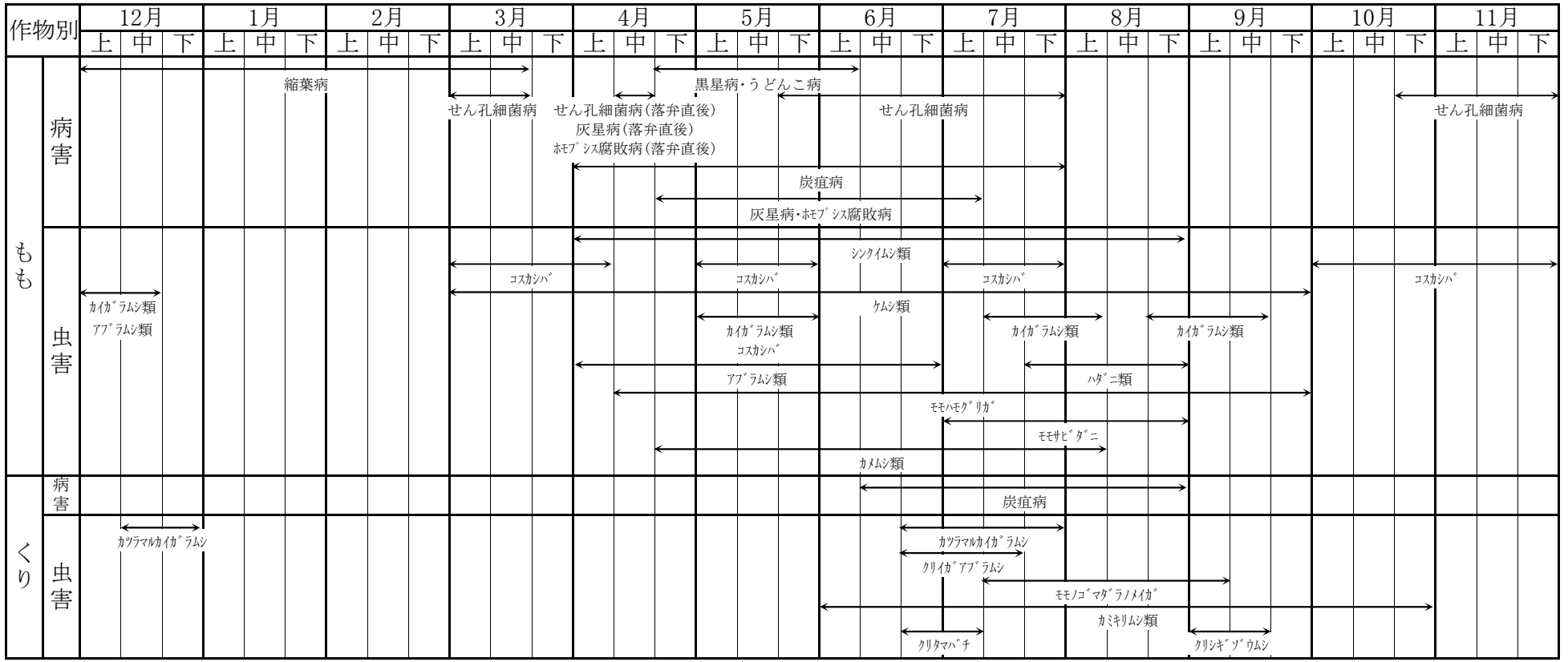
(1) 果樹病害虫防除時期

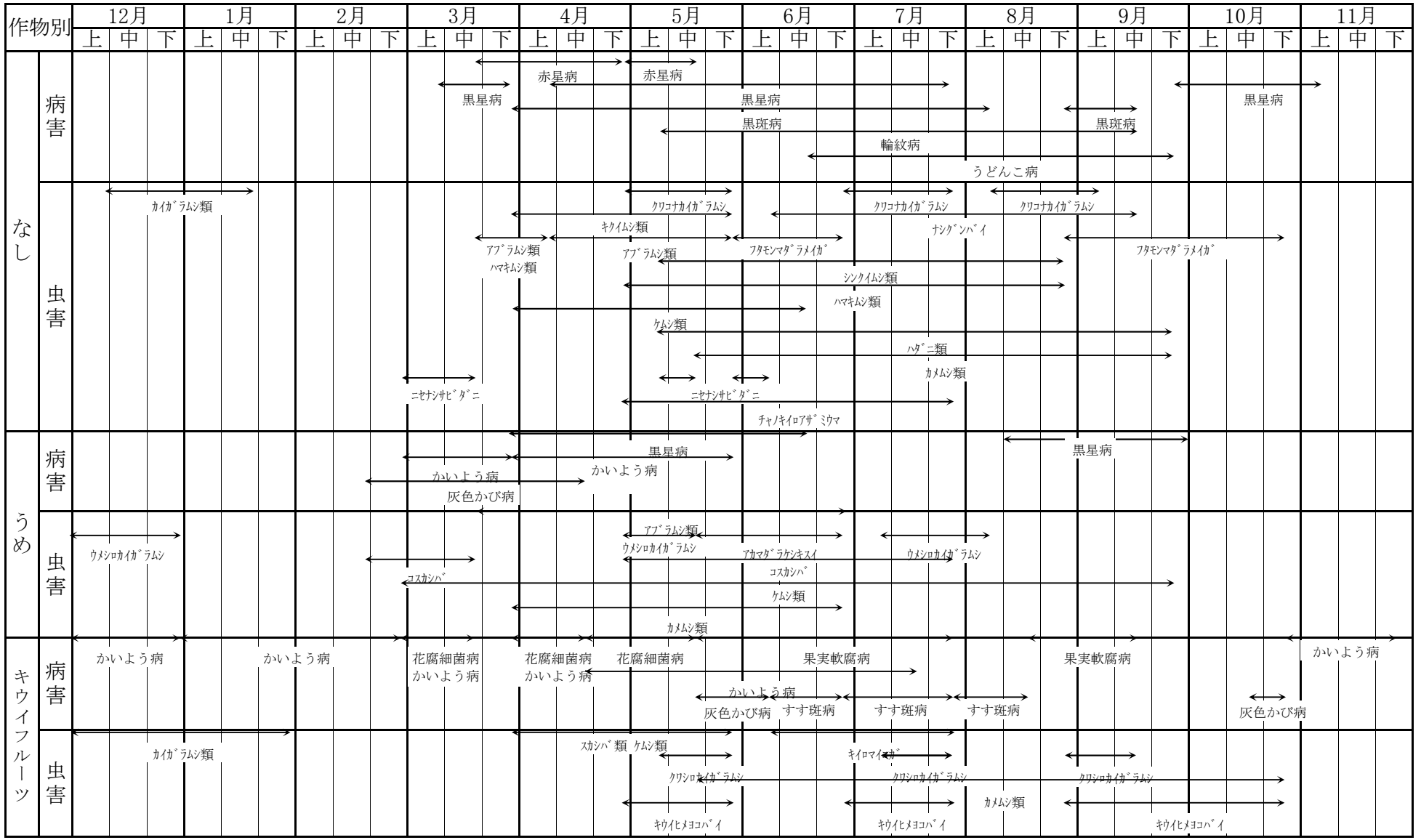
(かんきつ類)

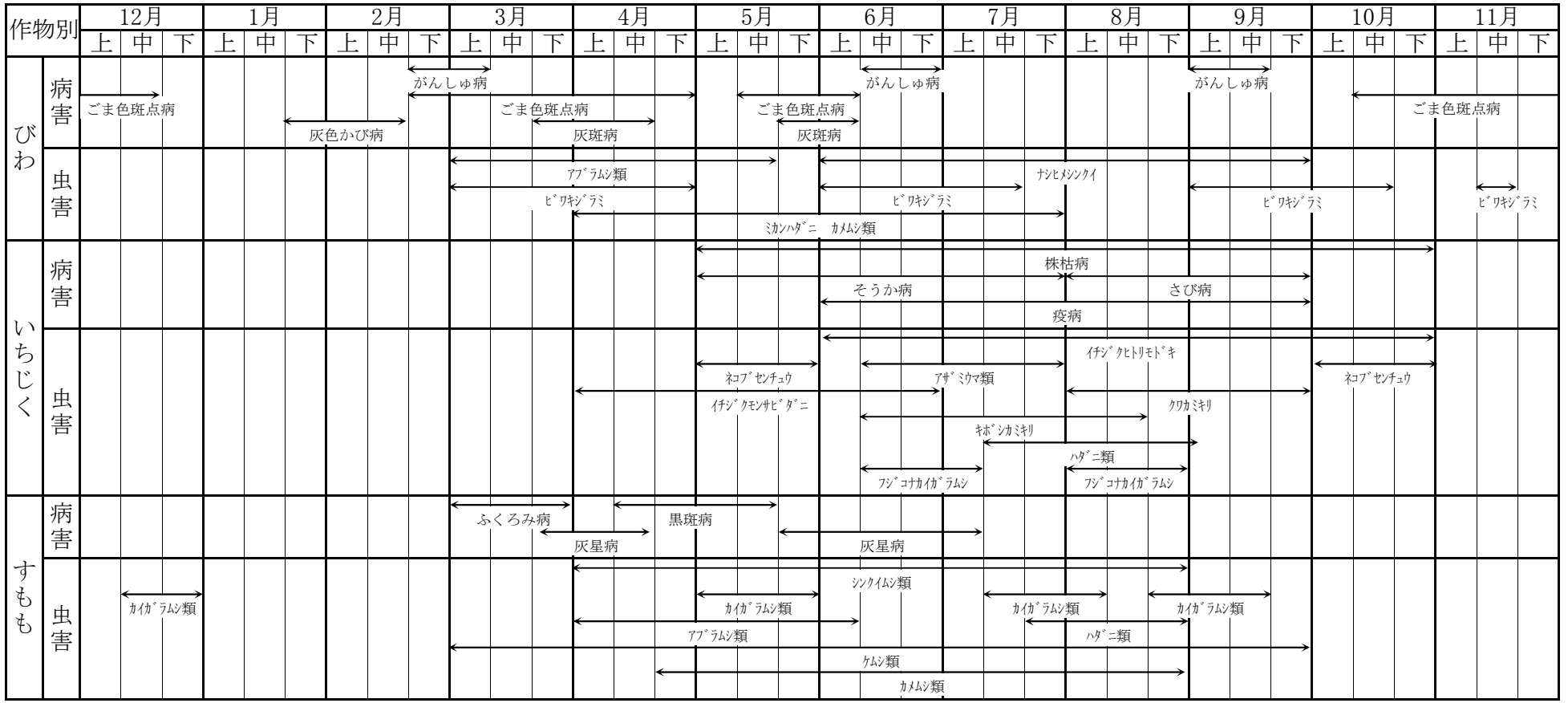


（落葉果樹）


作物別
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
上 中 下
かき
病害
虫害
炭疽病
うどんこ病
落葉病
うどんこ病
うどんこ病
炭疽病
炭疽病
灰色かび病
すす点病
カキノヘタムシガ
カキノヘタムシガ
ケムシ類
カイガラムシ類
フジコナカイガラムシ
フジコナカイガラムシ
フジコナカイガラムシ
枝幹害虫
枝幹害虫
ハマキムシ類
ツノロウムシ
ハスモンヨトウ
ハダニ類
イラガ類
コガネムシ類
イラガ類
コガネムシ類
ハダニ類
カキクダアザミウマ
カキクダアザミウマ
カキノヒメヨコバイ
カキノヒメヨコバイ
チャノキイロアザミウマ
カメムシ類
ぶどう
病害
虫害
黒とう病
晩腐病
黒とう病
うどんこ病
褐斑病
黒とう病
晩腐病
黒とう病
晩腐病
うどんこ病
さび病
べと病
べと病
べと病
スカシバ類
コガネムシ類
フトドウトラカミキリ
チャノキイロアザミウマ
フタテンヒメヨコバイ
ハダニ類
ハダニ類
コナカイガラムシ類
コナカイガラムシ類
コナカイガラムシ類


作物別
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
上 中 下
もも
病害
虫害
くり
病害
虫害
縮葉病
黒星病・うどんこ病
せん孔細菌病
せん孔細菌病(落弁直後)
灰星病(落弁直後)
ﾎﾓﾌﾟｼｽ腐敗病(落弁直後)
せん孔細菌病
せん孔細菌病
炭疽病
灰星病・ﾎﾓﾌﾟｼｽ腐敗病
ｼﾝｸｲﾑｼ類
ｺｽｶｼﾊﾞ
ｺｽｶｼﾊﾞ
ｺｽｶｼﾊﾞ
ｺｽｶｼﾊﾞ
ｺｽｶｼﾊﾞ
ｶｲｶﾞﾗﾑｼ類
ｱﾌﾞﾗﾑｼ類
ｹﾑｼ類
ｶｲｶﾞﾗﾑｼ類
ｶｲｶﾞﾗﾑｼ類
ｶｲｶﾞﾗﾑｼ類
ｺｽｶｼﾊﾞ
ｱﾌﾞﾗﾑｼ類
ﾊﾀﾞﾆ類
ﾓﾓﾊﾓｸﾞﾘｶﾞ
ﾓﾓｻﾋﾞﾀﾞﾆ
ｶﾒﾑｼ類
炭疽病
ｶﾂﾗﾏﾙｶｲｶﾞﾗﾑｼ
ｶﾂﾗﾏﾙｶｲｶﾞﾗﾑｼ
ｸﾘｲｶﾞｱﾌﾞﾗﾑｼ
ﾓﾓﾉｺﾞﾏﾀﾞﾗﾉﾒｲｶﾞ
ｶﾐｷﾘﾑｼ類
ｸﾘﾀﾏﾊﾞﾁ
ｸﾘｼｷﾞｿﾞｳﾑｼ


作物別
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
上 中 下
なし
病害
虫害
うめ
病害
虫害
キウイフルーツ
病害
虫害
赤星病
黒星病
黒斑病
輪紋病
うどんこ病
カイガラムシ類
クワコナカイガラムシ
キクイムシ類
ナシグンバイ
アブラムシ類
ハマキムシ類
フタモンマダラメイガ
シンクイムシ類
ケムシ類
ハダニ類
カメムシ類
ニセナシサビダニ
チャノキイロアザミウマ
かいよう病
灰色かび病
ウメシロカイガラムシ
アカマダラケシキスイ
コスカシバ
スカシバ類
キイロマイマイガ
カメムシ類
花腐細菌病
果実軟腐病
すす斑病
キウイヒメヨコバイ


作物別
12月
1月
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
上 中 下
びわ
病害
虫害
いちじく
病害
虫害
すもも
病害
虫害
がんしゅ病
ごま色斑点病
灰色かび病
灰斑病
アブラムシ類
ヒワキジラミ
ミカンハダニ カメムシ類
株枯病
そうか病
さび病
疫病
イチジクヒトリモドキ
ネコブセンチュウ
アザミウマ類
イチジクモンサビダニ
クワカミキリ
キボシカミキリ
ハダニ類
フジコナカイガラムシ
ふくろみ病
黒斑病
灰星病
シンクイムシ類
カイガラムシ類
アブラムシ類
ケムシ類
カメムシ類

(2)果樹病害虫防除法

[1]かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
苗疫病	(発生の特徴) ○5～7月の多雨で多発しやすい。 (防除上のポイント) ○予防散布を原則とし、降雨前に実施。	(耕種的防除法) ○排水を良くし、冠水防止。 ○敷きワラやマルチ等で雨水の跳ね上がりを防止。 ○株間を広くとり、苗木間の風通しをよくする。 ○発病部分の早期除去。	5月～7月										
					P7	アリエッティ水和剤	1:ﾎｾﾁﾙ	400倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○近接散布(無機銅:前7・後14日)注意
そうか病	(防除上のポイント) ○多発時は6月中～下旬に追加防除。 (防除上の留意点) ○ICボルドーは、樹勢の弱い樹は使用しない。沈殿しやすいので、使用時は良く攪拌。 ○防除上の留意点参照	○通風、日当りを良くする。 ○密植を避ける。 ○越冬病斑を除去。	4月中旬～下旬(新梢1cm～)		3	マネージDF	1:ｲﾐﾍﾟﾝｺﾅｿﾞｰﾙ	6,000倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	普	△	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ2:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,500倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	80倍	－/－	－/－	普	△	○パラフィン系展着剤加用
					M1	フジドーLフロアブル	1:塩基性硫酸銅	500倍	－/－	－/－	普	△	○炭酸カルシウム加用
					M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	500倍	－/－	－/－	普	△	○炭酸カルシウム加用
					M1	クミガードSC	1:水酸化第二銅	500倍	－/－	－/－	普	△	○炭酸カルシウム加用
					M1	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	発病前～発病初期/－	発病前～発病初期/－	普	△	○炭酸カルシウム加用
					M1	キノンドー顆粒水和剤	1:有機銅	1,000倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/5回以内	普	×	
					M9	デランフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ	1,000倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	劇	×	○かぶれ注意、マシン油注意(P.156)
			5月下旬～6月上旬		7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	○	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	劇	△	
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
					11	マッチョフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで/3回以内	収穫3日前まで/3回以内	普	△	
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△※	
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	2,000倍	収穫30日前まで/1回	収穫30日前まで/1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)・薬害(レモン)
					M1	オキシンドー水和剤80	1:有機銅	800倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/5回以内	普	×	
					M9+7	セルカディスDフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ2:ﾌﾙｷｻﾋﾟﾛｷｻﾄﾞ	1,500倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	劇	×	○かぶれ注意、マシン油注意(P.156)
黒点病	(防除上のポイント) ○8月下旬以降多雨なら、9月中・下旬に追加防除。 ○防除上の留意点参照	○枯枝除去。 ○剪定枝を園の近くに放置しない。処理できない場合、ビニル等で被覆。	5月下旬 ～6月										
					M9	デランフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ	1,000倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	劇	×	○かぶれ注意、マシン油注意(P.156)
					M9+7	セルカディスDフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ2:ﾌﾙｷｻﾋﾟﾛｷｻﾄﾞ	1,500倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	劇	×	○かぶれ注意、マシン油注意(P.156)
			5月下旬～7月			(次回の散布は200-250㎜の降雨後または30日以内に散布する薬剤)							
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/4回以内	収穫30日前まで/4回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/4回以内	収穫30日前まで/4回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	エムダイファー水和剤	1:ﾏﾝﾈﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/2回以内	収穫60日前まで/2回以内	普	△	○かぶれ注意
						(残効性が劣るので次回の散布を早める薬剤)							
					M1	オキシンドー水和剤80	1:有機銅	800倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/5回以内	普	×	
					M1	キノンドー水和剤80	1:有機銅	800倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/5回以内	普	×	
			温州みかん8月中旬～9月中旬、中晩柑8月中旬～10月中旬										
						(次回の散布は200-250㎜の降雨後または30日以内に散布する薬剤)							
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/4回以内	収穫30日前まで/4回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/4回以内	収穫30日前まで/4回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	エムダイファー水和剤	1:ﾏﾝﾈﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/2回以内	収穫60日前まで/2回以内	普	△	○かぶれ注意
						(残効性が劣るので次回の散布を早める薬剤)							
					M1	オキシンドー水和剤80	1:有機銅	800倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/5回以内	普	×	
					M1	キノンドー水和剤80	1:有機銅	800倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/5回以内	普	×	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ2:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,500倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度（使用量）	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産（注）	注意事項
黒点病			温州みかん8月中旬～9月中旬、中晩柑8月中旬～10月中旬										
						（残効性が劣るので次回の散布を早める薬剤）							
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
					11	マッチョフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで/3回以内	収穫3日前まで/3回以内	普	△	
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,500倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△※	
小黒点病	（防除上のポイント） ○8月下旬以降多雨なら、9月中・下旬に追加防除。 ○防除上の留意点参照	○枯枝除去。 ○剪定枝を園の近くに放置しない。処理できない場合、ビニール等で被覆。	5月下旬～7月			（次回の散布は200-250㎜の降雨後または30日以内に散布する薬剤）							
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/4回以内	収穫30日前まで/4回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/4回以内	収穫30日前まで/4回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	エムダイファー水和剤	1:ﾏﾝﾈﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/2回以内	収穫60日前まで/2回以内	普	△	○かぶれ注意
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△※	
			温州みかん8月中旬～9月中旬、中晩柑8月中旬～10月中旬										
			上記薬剤と同じ										
かいよう病	（防除上のポイント） ○発芽前の散布を徹底。(ただし、収穫前の散布は、果実に薬斑の恐れあり) ○落弁直後までの防除を徹底。 ○ハモグリガ防除を徹底。 （防除上の留意点） ○銅水和剤・ICボルドー剤は単用とし、霧を細かくして行い、しずくが落ちる程は散布しない(薬害軽減)。 ○ICボルドーは、樹勢の弱い樹や異常低温（3月）が予想される　場合は使用しない。 高温時(6月中旬以降)薬害の恐れ。 沈殿しやすいので、使用時は良く攪拌。	○風の強い所は防風対策。 ○被害枝葉除去。 ○秋枝は処分。	3月中旬～3月下旬（発芽前）		M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	1,000倍	発芽前/－	発芽前/－	普	×	
					M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	500倍	－/－	－/－	普	△	
					M1	フジドーLフロアブル	1:塩基性硫酸銅	500倍	－/－	－/－	普	△	
					M1	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	発病前～発病初期/－	発病前～発病初期/－	普	△	
					M1	クミガードSC	1:水酸化第二銅	500倍	－/－	－/－	普	△	
						（上記薬剤に対し炭酸カルシウム剤加用200倍（薬害軽減））							
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	40倍	－/－	－/－	普	△	○近接散布・薬害注意
			4月下旬～5月上旬（開花前）		M1	Zボルドー	1:塩基性硫酸銅	700倍	－/－	－/－	普	×	
					M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	生育期/－	生育期/－	普	×	
					M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	－/－	－/－	普	△	
					M1	フジドーLフロアブル	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	－/－	－/－	普	△	
					M1	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	2,000倍	発病前～発病初期/－	発病前～発病初期/－	普	△	
					M1	クミガードSC	1:水酸化第二銅	1,000倍	－/－	－/－	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫45日前まで/5回以内	収穫7日前まで/5回以内	普	△	
					24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫45日前まで/5回以内	収穫7日前まで/5回以内	普	△	
						（上記薬剤に対し炭酸カルシウム剤加用200倍（薬害軽減））							
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	80倍	－/－	－/－	普	△	○パラフィン系展着剤加用 近接散布(ﾏｼﾝ油14日)注意
					M1+M1	キンセット水和剤	1:水酸化第二銅2:有機銅	600倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/5回以内	普	×	
			5月下旬～6月上旬(落弁直後)										
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	80倍	－/－	－/－	普	△	○近接散布(ﾏｼﾝ油14日)・薬害注意
				un	M2+M1	園芸ボルドー	1:硫黄2:塩基性塩化銅	500倍	－/－	－/－	普	△	○近接散布(ﾏｼﾝ油14日)・薬害注意 炭酸カルシウム加用
						その他は4月下旬～5月上旬(開花前)の防除薬剤に準じる。							
			6月中旬～9月		M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	生育期/－	生育期/－	普	×	
					M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	－/－	－/－	普	△	
					M1	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	2,000倍	発病前～発病初期/－	発病前～発病初期/－	普	△	
						（上記薬剤に対し炭酸カルシウム剤加用200倍（薬害軽減））							
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	200倍	－/－	－/－	普	△	○近接散布(ﾏｼﾝ油14日)・薬害注意
					41	マイコシールド	1:ｵｷｼﾃﾄﾗｻｲｸﾘﾝ	1,000倍	収穫30日前まで/2回以内	収穫60日前まで/2回以内	普	△	

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
灰色かび病	(発生の特徴) ○開花期の天候不順で多発しやすい。 ○天候不順が続くときは追加防除。 ○耐性菌発現に留意。	○園内が多湿にならないようにする。	5月中旬～6月中旬(満開後～落弁直後)		2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	3,000倍	収穫30日前まで/2回以内	収穫30日前まで/3回以内	普	△	
					3	オーシャイン水和剤	1:ｵｷｽﾎﾟｺﾅｿﾞｰﾙﾌﾏﾙ酸塩	2,000倍	収穫7日前まで/5回以内	収穫前日まで/5回以内	普	○	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ2:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,500倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○	
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	○	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	劇	△	
					9+12	スイッチ顆粒水和剤	1:ｼﾌﾟﾛｼﾞﾆﾙ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	3,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○耐性菌注意
					11	マッチョフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで/3回以内	収穫3日前まで/3回以内	普	△	
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,500倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△※	
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	2,000倍	収穫30日前まで/1回	収穫30日前まで/1回	普	×	○かぶれ(10日間入園禁止)・薬害(ﾚﾓﾝ)注意
					52	ミギワ20フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	
					M9+7	セルカディスDフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ2:ﾌﾙｷｻﾋﾟﾛｷｻﾄﾞ	1,500倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	劇	×	○かぶれ注意、マシン油注意(P.156)
炭疽病(さび果病)	(発生の特徴) ○日焼けによる果皮障害が発生を助長 ○枯枝が伝染源。 ○年内に感染、年明けに発症(河内晩柑など)。	○枯枝除去。 ○果実陽光面の日焼け防止。	6月～10月		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/4回以内	収穫30日前まで/4回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/4回以内	収穫30日前まで/4回以内	普	△	○かぶれ注意
					3+11	ナティーボフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ2:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,500倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△※	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
褐色腐敗病	(発生の特徴) ○ｽﾌﾟﾘﾝｸﾗｰ灌水園や水田転換園などで発生しやすい。 (防除上のポイント) ○予防散布を原則とし降雨前に実施。	○発病果を早期除去。 ○排水に努め、敷ワラやマルチ等で雨水のはね上がりを防止。	8月下旬～10月		P7	アリエッティ水和剤	1:ﾎｾﾁﾙ	400倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○薬害注意
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/4回以内	収穫30日前まで/4回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫90日前まで/4回以内	収穫30日前まで/4回以内	普	△	○かぶれ注意
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	
貯蔵病害	(発生の特徴) ○傷口ができると感染頻度が増加。特に収穫前の台風来襲により増加。 (防除上のポイント) ○薬剤散布は必須。 ○散布後100㎜の降雨があった場合、追加散布。		収穫前		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/4回以内	普	△	○耐性菌注意、薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫前日まで/5回以内	収穫前日まで/5回以内	普	△	○耐性菌注意、薬剤選択注意
					1	トップジンMゾル	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫前日まで/5回以内	収穫前日まで/5回以内	普	○	○耐性菌注意、薬剤選択注意
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○5℃以下で増粘注意

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
ミカンハダニ	○ミカンハダニの防除の要点(P.155)参照 (留意点) ○剤によっては感受性が低下している園地がみられる。		同一殺ダニ剤は原則年1回の使用とする。										
			12月中旬～1月中旬または2月下旬～3月中旬										
				(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:ﾏｼﾝ油	45倍	冬期/－	冬期/－	普	△	
						注意事項 ①収穫後休眠期に散布 ②厳寒日は散布しない ③冬期に2度散布しない ④樹勢のやや弱った樹では60倍(97%)が適当							
			6月	6		コロマイト水和剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△※	○ 薬害(高温時)
				10B		バロックフロアブル	1:ｴﾄｷｻｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫14日前まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	○ 近接散布(ICボルドー)
				6+10B		メビウスフロアブル	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ2:ｴﾄｷｻｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫14日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	劇	△	○ 近接散布(ICボルドー)
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾟﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	普	△	○ 近接散布(ICボルドー)
				23		ダニエモンフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛｼﾞｸﾛﾌｪﾝ	4,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	普	○	
				23		ダニゲッターフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾒｼﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	普	△	○ 近接散布(ICボルドー)、薬害(イネ)
				25A		スターマイトフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ	3,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	普	△	○ 近接散布(ICボルドー)
				25A+21A		スターマイトプラスフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ2:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	劇	×	○ 回数注意(サンマイト・スターマイト) 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				25B+21A		ダブルフェースフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾟﾐﾄﾞ2:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	2,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	普	△	○ 回数注意(ﾀﾞﾆｺﾝｸﾞ・ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞｴｰｽ)
				25B		ダニコングフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾟﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	普	△	○ 回数注意(ﾀﾞﾌﾞﾙﾌｪｰｽ)
			6月中旬～下旬										
					NC	高度精製マシン油乳剤 (97%製剤)	1:ﾏｼﾝ油	150倍	銘柄により異なる/－	銘柄により異なる/－	普	△	
			7月			6月薬剤と同じ(高度精製マシン油乳剤を除く)							○ 梅雨明け直後に早めに散布
			8月中旬～8月下旬										
			9月下旬～10月中旬										
			10月下旬～11月	6		コロマイト水和剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△※	○ 薬害(高温時)
				(物理)		エコピタ液剤	1:還元澱粉糖化物	300倍	収穫前日まで/－	収穫前日まで/－	普	△	○ 使用法(P.372)参照。
				(物理)		アカリタッチ乳剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾚﾝｸﾞﾘｺｰﾙﾓﾉ脂肪酸ｴｽﾃﾙ	2,000倍	収穫前日まで/－	収穫前日まで/－	普	○	○ 使用法(P.372)参照。
				(物理)		フーモン	1:ﾎﾟﾘｸﾞﾘｾﾘﾝ脂肪酸ｴｽﾃﾙ	1,000倍	収穫前日まで/－	収穫前日まで/－	普	○	○ 使用法(P.372)参照。
					NC	サフオイル乳剤	1:調合油	500倍	収穫前日まで/－	収穫前日まで/－	普	○	○ 使用法(P.372)参照。
				12C		オマイト水和剤	1:BPPS	750倍	収穫14日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△※	○ 薬害(着色期)
				33		ダニオーテフロアブル	1:ｱｼﾉﾅﾋﾟﾙ	3,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	普	○	○ 銅剤混用不可・銅剤近接散布(効力低下・6ヶ月以上空ける)

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
ミカンサビダニ	(発生の特徴) ○微小な害虫のため、肉眼観察は難しい。高温乾燥(少雨)条件下で多発しやすい。 (防除上のポイント) ○前年発生園では、早めに散布。 ○9月は高温乾燥が続く場合に散布。		同一殺ダニ剤は原則年1回の使用とする。										
			5月～6月	6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	劇	△	○剤型は乳剤
				6		コロマイト水和剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△※	○薬害(高温時)
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	3,000倍	収穫3日前まで/4回以内	収穫前日まで/4回以内	普	△※	
				6+10B		メビウスフロアブル	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ2:ｴﾄｷｻｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫14日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	劇	△	○近接散布(ICボルドー)、回数注意(ｱｸﾞﾘﾒｯｸ・ﾊﾞﾛｯｸ)
				12C		オマイト水和剤	1:BPPS	750倍	収穫14日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△※	○薬害(肥大期～着色期)
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	6,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	△※	
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	3,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○回数注意(ﾘｰｽﾞﾝ・ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
				4A+15		リーズン顆粒水和剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○回数注意(ﾏｯﾁ・ｱｸﾀﾗ・ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
				28+15		ミネクトエクストラSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	10,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○回数注意(ﾏｯﾁ・ｴｸｼﾚﾙ・ﾘｰｽﾞﾝ)
				21A		サンマイト水和剤	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	3,000倍	収穫3日前まで/2回以内	収穫3日前まで/2回以内	劇	×	○刺激(眼)
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	×	○刺激(眼)
				21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	2,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	普	×	○回数注意(ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ・ﾀﾞﾌﾞﾙﾌｪｰｽ)
				23		ダニエモンフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛｼﾞｸﾛﾌｪﾝ	6,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	普	○	
				23		ダニゲッターフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾒｼﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	普	△	○近接散布(ICボルドー)、薬害(イネ)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	○薬害(イネ)
				25A+21A		スターマイトプラスフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ2:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	劇	×	○回数注意(ｻﾝﾏｲﾄ・ｽﾀｰﾏｲﾄ) 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				25B+21A		ダブルフェースフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾞﾐﾄﾞ2:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	2,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	普	△	○回数注意(ﾀﾞﾆｺﾝｸﾞ・ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞｴｰｽ)
				30		グレーシアフロアブル	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	○天敵への影響大
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	劇	×	
				un	M10	モレスタン水和剤	1:キノキサリン系	1,000倍	収穫30日前まで/1回	収穫7日前まで/3回以内	普	△	○薬害(高温時)
				un	M2	イオウフロアブル	1:硫黄	400倍	発生初期/－	発生初期/－	普	○	○近接散布(ﾏｼﾝ油)、薬害(高温時)、混用注意(ﾏｼﾝ油)
				un	M2+M1	園芸ボルドー	1:硫黄2:塩基性塩化銅	500倍	－/－	－/－	普	△	○炭酸カルシウム加用
			7月 8月 9月			5月～6月の薬剤と同じ (モレスタン水和剤、アプロードエースフロアブル、イオウフロアブル、園芸ボルドー、モベントフロアブルを除く)							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
チャノホコリダニ	(発生の特徴) ○微小な害虫のため、肉眼観察は難しい。高温乾燥(少雨)条件下で多発しやすい。 ○新梢被害に注意し、発生初期に防除。 (防除上のポイント) ○発生園では、落弁5～10日後に第1回目散布。 ○レモンは開花期が長く、被害を受けやすい。常発地では、幼果期に2回散布。	○施設内では発生源になる野菜を植栽しない。	同一殺ダニ剤は原則年1回の使用とする。										
			5月下旬～6月上旬	6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	劇	△	○ 剤型は乳剤
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	4,000倍	収穫3日前まで/4回以内	収穫前日まで/4回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	6,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	△※	
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	2,000倍	収穫30日前まで/1回	収穫30日前まで/1回	普	×	○ かぶれ注意(10日間入園禁止)・薬害(レモン)
				21A		サンマイト水和剤	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	3,000倍	収穫3日前まで/2回以内	収穫3日前まで/2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	2,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	普	×	○ 回数注意(ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ・ﾀﾞﾌﾞﾙﾌｪｰｽ)
				23		ダニエモンフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛｼﾞｸﾛﾌｪﾝ	4,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	普	○	
				23		ダニゲッターフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾒｼﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	普	△	○ 近接散布(ICボルドー)、薬害(イネ)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	○ 薬害(イネ)
				25A		スターマイトフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ	3,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				25A+21A		スターマイトプラスフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ2:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで/1回	収穫7日前まで/1回	劇	×	○ 回数注意(ｻﾝﾏｲﾄ・ｽﾀｰﾏｲﾄ) 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				25B+21A		ダブルフェースフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾞﾐﾄﾞ2:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	2,000倍	収穫前日まで/1回	収穫前日まで/1回	普	△	○ 回数注意(ﾀﾞﾆｺﾝｸﾞ・ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞｴｰｽ)
				30		グレーシアフロアブル	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	○ 天敵への影響大
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	劇	×	
				un	M10	モレスタン水和剤	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	1,000倍	収穫30日前まで/1回	収穫7日前まで/3回以内	普	△	○ 薬害(高温時)
				un	M2	イオウフロアブル	1:硫黄	400倍	発生初期/－	発生初期/－	普	○	○ 近接散布(ﾏｼﾝ油)、薬害(高温時)、混用注意(ﾏｼﾝ油)
				un	M2+M1	園芸ボルドー	1:硫黄2:塩基性塩化銅	500倍	－/－	－/－	普	△	○ 炭酸カルシウム加用
			7月			5月下旬～6月上旬の薬剤と同じ (モレスタン水和剤、フロンサイドSC、アプロードエースフロアブル、イオウフロアブル、園芸ボルドー、モベントフロアブルを除く)							
ヤノネカイガラムシ	(防除上のポイント) ○第1世代幼虫を重点的に防除。 ○防除時期は、他のカイガラムシに比べ約10日早い。 ○第1世代幼虫初発日から30～35日後に散布(アプロード剤、モベントは20～25日後)。 ○第2世代幼虫初発日から30日後に散布。 ○アプロードの感受性が低下している園地がみられる。	○寄生の多い枝を切り取り処分。	12月中旬～1月中旬または2月下旬～3月中旬										
				(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:ﾏｼﾝ油	45倍	冬期/－	冬期/－	普	△	
				注意事項 ①収穫後休眠期に散布 ②厳寒日は散布しない ③冬期に2度散布しない ④樹勢のやや弱った樹では60倍(97%)が適当									
			5月下旬～6月中旬										
				16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○	
				21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	普	×	○ 回数注意(ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ・ﾀﾞﾌﾞﾙﾌｪｰｽ)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	○ 薬害(イネ)
			6月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
			8月	4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
ナシマルカイガラムシ (サンホーゼカイガラムシ)	(防除上のポイント) ○第1世代幼虫を重点的に防除。 ○幼虫越冬のため冬期マシン油乳剤の効果が高い。 ○枝や幹に寄生が多いため、その部分にも充分かかるよう散布。		12月中旬～1月中旬または2月下旬～3月中旬										
				(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:ﾏｼﾝ油	45倍	冬期/－	冬期/－	普	△	
				注意事項 ①収穫後休眠期に散布 ②厳寒日は散布しない ③冬期に2度散布しない ④樹勢のやや弱った樹では60倍(97%)が適当									
			6月中旬～下旬	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	
				16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○	
				21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	普	×	○ 回数注意(ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ・ﾀﾞﾌﾞﾙﾌｪｰｽ)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
			8月中旬～下旬	6月中旬～下旬の薬剤と同じ(アプロード水和剤、アプロードエースフロアブル、モベントフロアブルを除く)									
アカマルカイガラムシ	(防除上のポイント) ○防除時期はフジコナカイガラムシとほぼ同じ。 ○枝や幹にも充分かかるように散布。 ○多発園では1か月後に再散布。		12月中旬～1月中旬または2月下旬～3月中旬										
				(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:ﾏｼﾝ油	45倍	冬期/－	冬期/－	普	△	
				注意事項 ①収穫後休眠期に散布 ②厳寒日は散布しない ③冬期に2度散布しない ④樹勢のやや弱った樹では60倍(97%)が適当									
			6月中旬～下旬	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,500倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○	
				21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	普	×	○ 回数注意(ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ・ﾀﾞﾌﾞﾙﾌｪｰｽ)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
			8月中旬～下旬	6月中旬～下旬の薬剤と同じ(アプロード水和剤、アプロードエースフロアブル、モベントフロアブルを除く)									

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産(注)	注意事項
コナカイガラムシ類（フジコナカイガラムシ・ミカンヒメコナカイガラムシ）	(防除上のポイント) ○前年度多発した園では4月にも防除。 ○第1世代幼虫を重点的に防除。 ○多発園では第1回散布3週間後に2回目を散布。	○5月～8月に幹や枝で寄生が多いときは、タワシなどで駆除。	4月	16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○	
			6月中旬～下旬	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,500倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	劇	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○	
				21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	普	×	○ 回数注意(ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ・ﾀﾞﾌﾞﾙﾌｪｰｽ)
			8月	6月中旬～下旬の薬剤と同じ(アプロード水和剤、アプロードエースフロアブルを除く)									
イセリヤカイガラムシ	(防除上のポイント) ○ベダリアテントウの防除効果が高い。 ○防除時期はフジコナカイガラムシとほぼ同じ。 ○枝や幹にも十分かかるように散布。	○ベダリアテントウの発生園では殺虫剤散布を控える。	12月中旬～1月中旬または2月下旬～3月中旬										
				(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:ﾏｼﾝ油	45倍	冬期/－	冬期/－	普	△	
				注意事項 ①収穫後休眠期に散布 ②厳寒日は散布しない ③冬期に2度散布しない ④樹勢のやや弱った樹では60倍(97%)が適当									
			6月中旬～下旬	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	
				16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○	
				21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/2回以内	収穫14日前まで/2回以内	普	×	○ 回数注意(ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ・ﾀﾞﾌﾞﾙﾌｪｰｽ)
			8月中旬～下旬	6月中旬～下旬の薬剤と同じ(アプロード水和剤、アプロードエースフロアブルを除く)									
ツノロウムシ	(防除上のポイント) ○1齢幼虫期に防除。	○寄生の多い枝は切り取り処分。	7月上旬 6月下旬～	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	
ルビーロウムシ	(防除上のポイント) ○1齢幼虫期に防除。	○寄生の多い枝は切り取り処分。	7月上旬～中旬	4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○幼木や中晩柑では発生初期に散布。 ○一部地域の施設栽培園のワタアブラムシでは、ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が確認されている。	○成木園では天敵の発生に注意し、天敵が多いときは、殺虫剤散布を控える。	「育苗期」	4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	10～20g/樹	育苗期/1回	育苗期/1回	普	△	
			「苗木」	4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	10倍	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内	普	△	○ 主幹部吹付、10～100mℓ/樹
			4月～9月	2B		キラップフロアブル	1:ｴﾁﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫21日前まで/2回以内	収穫21日前まで/2回以内	普	○	○ 薬害(着色期)
				3A+1B		スミロディー乳剤	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ2:MEP	1,500倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/4回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				29		ウララ50DF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	10,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	○	
ミカントゲコナジラミ	(発生の特徴) ○年4回発生。 (防除上のポイント) ○葉裏に十分散布。 ○若齢幼虫期に散布。		6月上旬～中旬	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫45日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	○	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
			7月中旬～下旬			上記薬剤から、アプロード、モベントフロアブルを除く薬剤							
			8月～10月			上記薬剤から、アプロード、モベントフロアブルを除く薬剤							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産(注)	注意事項
ミカンコナジラミ	(発生の特徴) ○年3回発生。	(防除上のポイント) ○葉裏に十分散布。 ○若齢幼虫期に散布。	5月中旬～6月中旬	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
			7月下旬～8月下旬			上記薬剤から、モベントフロアブルを除く薬剤							
カメムシ類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や園地差も大きい。 (防除上のポイント) ○多発園では1週間ごとに散布。 ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策参照		5月～7月	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
			8月～10月	3A		ロディー乳剤	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		テルスターフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾝﾄﾘﾝ	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		アグロスリン水和剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
ミドリヒメヨコバイ類		○除草の徹底。	9月～11月	3A		ロディー乳剤	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
コアオハナムグリ・ケシキスイ類[訪花害虫]	(発生の特徴) ○園内密度が高くなる午前中に防除。		5月上旬～中旬(2～3分開花時)	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				3A		アークリン水和剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		ロディー乳剤	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A+1B		スミロディー乳剤	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ2:MEP	1,500倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/4回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	○	

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産(注)	注意事項
ミカンハモグリガ	(防除上のポイント) ○夏芽の発生から秋枝の伸長停止期にかけて系統の異なる薬剤をローテーションで散布。	○新梢の発生を不揃いにする過剰な施肥、強剪定を避ける。	育苗期［苗木］	4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	20～40g/樹	育苗期/2回以内	育苗期/2回以内	普	×	
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	10～20g/樹	育苗期/1回	育苗期/1回	普	△	
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	10～20g/樹	育苗期/3回以内	育苗期/3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	20倍	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内	普	△	○ 樹幹散布10～100mℓ/樹
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	25倍	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内	普	△	○ 主幹部吹付、 20～100mℓ/樹
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50倍	育苗期/5回以内	育苗期/5回以内	普	△	○ 株元灌注、100mℓ/株
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50倍	育苗期/5回以内	育苗期/5回以内	普	△	○ 株元灌注、100mℓ/株
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期/3回以内	育苗期/3回以内	普	△	○ 苗木全体に30～500mℓ/株を散布、但し、130ℓ/10a
			6月下旬～9月	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A+15		リーズン顆粒水和剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	3,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ｱｸﾀﾗ・ﾏｯﾁ・ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
				5		スピノエースフロアブル	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	6,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	劇	△	○ 剤型は乳剤
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾘｰｽﾞﾝ・ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
				28+15		ミネクトエクストラSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	10,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾏｯﾁ・ｴｸｼﾚﾙ・ﾘｰｽﾞﾝ)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	○	
ハマキムシ類	(防除上のポイント) ○発生園では15日毎に2回散布。		4月下旬～5月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				3A		ロディー乳剤	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		アークリン水和剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
			9月下旬～11月上旬	5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	○	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
アゲハ類	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。	○幼虫の捕殺。	育苗期(苗木)										
				28		エクシレルSE	1:シアントラニリプロール	100倍	育苗期/3回以内	育苗期/3回以内	普	△	○苗木全体に30～500mℓ/株を散布、但し、130ℓ/10a
			6月下旬～9月	1A		オリオン水和剤40	1:アラニカルブ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				5		スピノエースフロアブル	1:スピノサド	6,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	○登録はナミアゲハ
				5		ディアナWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				15		マッチ乳剤	1:ルフェヌロン	3,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○回数注意(リーズン・ミネクトエクストラ)
				28+15		ミネクトエクストラSC	1:シアントラニリプロール2:ルフェヌロン	10,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○回数注意(マッチ・エクシレル・リーズン)
				4A+15		リーズン顆粒水和剤	1:チアメトキサム2:ルフェヌロン	3,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○回数注意(アクタラ・マッチ・ミネクトエクストラ)
				22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミゾン	1,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	
				28		フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミド	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:シアントラニリプロール	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○回数注意(ミネクトエクストラ)
				28		テッパン液剤	1:シクラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	○	
ヨモギエダシャク	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。	○幼虫の捕殺。	4月～6月	3A		ロディー乳剤	1:フェンプロパトリン	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	劇	×	○合ピレ(P.15)参照。
				5		ディアナWDG	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	5,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	△※	
				15		マッチ乳剤	1:ルフェヌロン	3,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○回数注意(リーズン・ミネクトエクストラ)
				28+15		ミネクトエクストラSC	1:シアントラニリプロール2:ルフェヌロン	10,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○回数注意(マッチ・エクシレル・リーズン)
				15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:トルフェンピラド	1,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	×	○刺激(眼)
				22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミゾン	1,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	
				28		エクシレルSE	1:シアントラニリプロール	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○回数注意(ミネクトエクストラ)
クワゴマダラヒトリ	(発生の特徴) ○成虫の発生は年1回。幼虫で越冬。 ○幼虫は園外から、雑草等を食べ侵入。 ○産卵は特定の樹種。 ○被害は春。稀に秋、周囲の産卵植物が餌として不適となると、園内に侵入加害。 (防除上のポイント) ○周囲や園内の雑草で確認したら要注意。 (耕種的防除法) ○園地周辺のクワ、アカメガシワ、カラスザンショウなどの産卵植物を8月下旬頃に除去。10月上旬に巣網を処分。		4月6月～ 10月下旬～11月	1A		オリオン水和剤40	1:アラニカルブ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				3A		ロディー乳剤	1:フェンプロパトリン	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	劇	×	○合ピレ(P.15)参照。
				28		フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミド	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:シアントラニリプロール	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○回数注意(ミネクトエクストラ)
				30		グレーシアフロアブル	1:フルキサメタミド	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	○天敵への影響大
ハスモンヨトウ	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。 (発生の特徴) ○主な発生はハウスみかん。露地品種では通常問題にならない。		1月～8月	5		ディアナWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	△※	
				28		フェニックスフロアブル	1:フルベンジアミド	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:シアントラニリプロール	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
ゴマダラカミキリ（天牛）	(防除上のポイント) ○多発園では7月中～下旬に幼虫対象剤を株元へ1～2回散布(回数注意)。	○成虫や食入幼虫は見つけ次第捕殺。	育苗期(苗木)										
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	10倍	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内	春芽・夏芽又は秋芽の発生前/3回以内	普	△	○ 主幹部吹付、10～100mℓ/樹
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期/3回以内	育苗期/3回以内	普	△	○ 苗木全体に30～500mℓ/株を散布、但し、130ℓ/10a
			5月下旬～6月中旬										
						バイオリサ・カミキリ	1:ﾎﾞｰﾍﾞﾘｱﾌﾞﾛﾝﾆｱﾃｨ	1本/樹	成虫発生初期/－	成虫発生初期/－	－	○	○ 地際の主幹分岐部等に取付。
			6月			(成虫対象)							
				1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A+15		リーズン顆粒水和剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ｱｸﾀﾗ・ﾏｯﾁ・ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	
				21A+22B		アクセルキングフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ2:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	劇	△※	○ 回数注意(ｱｸｾﾙ・ﾊﾁﾊﾁ)
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
				28+15		ミネクトエクストラSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	10,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾏｯﾁ・ｴｸｼﾚﾙ・ﾘｰｽﾞﾝ)
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	○	
				30		グレーシアフロアブル	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	○ 天敵への影響大
			7月中旬～下旬										
						(幼虫対象)							
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	200倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	○ 主幹から株元に散布
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	200倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	○ 主幹から株元に散布
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	200倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	○ 主幹から株元に散布
			8月上旬～中旬										
				3A		園芸用キンチョールE	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ		収穫14日前まで/6回以内	収穫14日前まで/6回以内	普	○	○ 食入孔に注入・合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		ロビンフッド	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ		収穫前日まで/5回以内	収穫前日まで/5回以内	普	○	○ 食入孔に注入・合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
ミカンナガタマムシ	(発生の特徴) ○年1回発生。 ○幼虫は樹幹や樹枝に穿孔、成虫は葉を食害 。	○本種被害による衰弱・枯死樹は伐採し、適切に処分。	6月～7月	22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
カネタタキ	(発生の特徴) ○幼果期：果面をなめるように食害。 ○着色期：果皮を深くえぐる食害。 (防除上のポイント) ○被害が見え始めたら早めに散布。 ○前年発生園は注意。		8月～10月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/5回以内	普	△	○ 薬害(着色期)
				3A		テルスターフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾝﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		ロディー乳剤	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/4回以内	収穫7日前まで/4回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		アークリン水和剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	△※	
				30		グレーシアフロアブル	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	○ 天敵への影響大

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
クワノミハムシ	(発生の特徴) ○年2回発生。 ○山間地や比較的湿潤な園地で多い。 (防除上のポイント) ○春芽の展葉初期に虫や被害が見え始めたら早めに散布。		4月～7月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	普	○	
チャノキイロアザミウマ	(発生の特徴) ○防風樹がイヌマキやサンゴジュの場合発生しやすい。 (防除上のポイント) ○新梢や果実で発生を認めたら早めに散布。	○園地内や周辺の発生源となるツタ等の植物は処分。 ○樹冠占有面積率が60%以下の園地では光反射白色マルチシート被覆で被害軽減可能。	5月～6月上旬	2B		キラップフロアブル	1:ｴﾁﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫21日前まで/2回以内	収穫21日前まで/2回以内	普	○	○ 薬害(着色期)
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	収穫14日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く) /3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
			6月中旬～下旬	4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
				4A+15		リーズン顆粒水和剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ｱｸﾀﾗ・ﾏｯﾁ・ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
			7月中旬～下旬	5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				5		スピノエースフロアブル	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	6,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	劇	△	○ 剤型は乳剤
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫3日前まで/4回以内	収穫前日まで/4回以内	普	△※	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
			8月中旬～9月中旬	13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	4,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	△※	
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	3,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾘｰｽﾞﾝ・ﾐﾈｸﾄｴｸｽﾄﾗ)
				28+15		ミネクトエクストラSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	10,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾏｯﾁ・ｴｸｼﾚﾙ・ﾘｰｽﾞﾝ)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				29		ウララ50DF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	10,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	○	
				30		グレーシアフロアブル	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	○ 天敵への影響大
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	劇	×	
ハナアザミウマ類	(防除のポイント) ○着色初期から発生に注意し、発生を認めたら早めに散布。		9月下旬～1月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				3A		テルスターフロアブル	1:ﾋﾟﾌｪﾝﾄﾘﾝ	5,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				5		スピノエースフロアブル	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	6,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	劇	△	○ 剤型は乳剤
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	○	
				29		ウララ50DF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	10,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	○	

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
ネギアザミウマ	(発生の特徴) ○主な発生はハウスみかん。露地品種では通常問題にならない。 ○果実の加害時期は幼果期から収穫期。		果実肥大期～着色期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				5		スピノエースフロアブル	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	6,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	普	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				28+15		ミネクトエクストラSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	10,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾏｯﾁ・ｴｸｼﾚﾙ・ﾘｰｽﾞﾝ)
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	4,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	劇	×	
ミカンキイロアザミウマ	(発生の特徴) ○主な発生はハウスミカン・愛媛果試第28号。露地品種では通常問題にならない。 ○主な果実の加害時期は、ハウスミカンは着色期、愛媛果試第28号では新梢発生期～着色期。 (防除のポイント) ○抵抗性に注意。	○ハウス内外の除草徹底。 ○ハウス内での野菜、花き類栽培は発生源となるのでしない。 ○開放部(側窓・天窓)にネット(1mm以下)または光反射資材を織り込んだ網を張り侵入防止。 ○ミネクトエクストラSCは成虫に対する効果が低いため、発生初期に散布。	5月～12月	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/5回以内	普	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	5,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	5,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	普	△	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	1,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	劇	△	○ 剤型は乳剤
				6+10B		メビウスフロアブル	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ2:ｴﾄｷｻｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫14日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	劇	△	○ 近接散布(ICボルドー)、回数注意(ｱｸﾞﾘﾒｯｸ・ﾊﾞﾛｯｸ)
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで/2回以内	収穫前日まで/2回以内	劇	△※	
				28+15		ミネクトエクストラSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	10,000倍	収穫21日前まで/1回	収穫14日前まで/3回以内	普	△	○ 回数注意(ﾏｯﾁ・ｴｸｼﾚﾙ・ﾘｰｽﾞﾝ)
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/2回以内	収穫7日前まで/2回以内	劇	×	
				6		以下「みかん」のみの登録 アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍		収穫3日前まで/2回以内	普	△※	
ナメクジ類	(発生の特徴) ○草生栽培園で発生が多い。 ○発生は5月から梅雨明け頃に多い。	(耕種的防除法) ○清耕栽培とする。	5月～7月上旬	un		スラゴ	1:燐酸第二鉄	1～5g/㎡	発生時/－	発生時/－	普	○	○ 発生・加害場所・株元に配置
					M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	500倍	発生前～発生初期/－	発生前～発生初期/－	普	△	
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	100倍	発生前～発生初期/－	発生前～発生初期/－	普	△	○ 近接散布(ﾏｼﾝ油)・薬害(高温時)
					M1	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	発生前～発生初期/－	発生前～発生初期/－	普	△	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	劇	△	○ 剤型は乳剤
				8		マイキラーL	1:ﾒﾀｱﾙﾃﾞﾋﾄﾞ	200倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	普	○	
				8		ナメクリーン3	1:ﾒﾀｱﾙﾃﾞﾋﾄﾞ	1kg/10a	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	普	○	
カタツムリ類	(発生の特徴) ○梅雨期にも被害を出すが、8～10月頃の加害が多い。 ○草生栽培園で発生が多い。	(耕種的防除法) ○清耕栽培とする。	8月～10月	un		スラゴ	1:燐酸第二鉄	1～5g/㎡	発生時/－	発生時/－	普	○	○ 発生・加害場所・株元に配置
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	100倍	発生前～発生初期/－	発生前～発生初期/－	普	△	○ 近接散布(ﾏｼﾝ油)・薬害(高温時)
					M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	500倍	発生前～発生初期/－	発生前～発生初期/－	普	△	
					M1	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	発生前～発生初期/－	発生前～発生初期/－	普	△	
				8		マイキラーL	1:ﾒﾀｱﾙﾃﾞﾋﾄﾞ	200倍	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	普	○	
				8		ナメクリーン3	1:ﾒﾀｱﾙﾃﾞﾋﾄﾞ	1kg/10a	収穫30日前まで/3回以内	収穫30日前まで/3回以内	普	○	

かんきつ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期/使用回数 かんきつ(温州みかん除く)	使用時期/使用回数 温州みかん	人毒	水産 (注)	注意事項
ミカンバエ	(発生の特徴) ○温州みかんやコミカン、ポンカン、キンカン等果皮の薄い品種に寄生が多い。 (防除上のポイント) ○前年発生園では、6・7月の成虫防除を徹底する。 ○被害果抑制には、8月上旬と下旬の孵化幼虫を対象とした防除が最も重要。 ○防除上の留意点 参照	○発生園では、果実をすべて収穫し、袋等に詰め、適正に処分。 ○放任園の伐採を徹底。ただし、発生園では、翌年の成虫拡散防止のため、数本おとり樹を残し、翌年、産卵ピーク後の8月下旬にそれらを伐採。 ○園周縁樹の間・縮伐や防風樹の刈り込みを行い、園内の日当たりを良くする。	7月	1B		(成虫対象) マラソン粉剤3	1:ﾏﾗｿﾝ	3kg/10a	収穫14日前まで/5回以内	収穫14日前まで/5回以内	普	△	○ 夏みかん(登録なし)飛散注意
			6月下旬			(成虫対象)							
				3A		アークリン水和剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		アグロスリン水和剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで/3回以内	収穫7日前まで/3回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
			7月中旬	4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
			8月上旬			(幼虫対象)							
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで/3回以内	収穫前日まで/3回以内	普	△	
			8月下旬	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで/3回以内	収穫14日前まで/3回以内	劇	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
落葉病	(防除上のポイント) ○初期防除を徹底し、その後2週間おきに2～3回散布。 (留意点) ○炭疽病の5月及び6月上旬から10月の薬剤は、落葉病でも登録あり。	○秋期に落葉を処分。	5月～7月			【炭疽病の5月及び6月上旬から10月の薬剤に加えて以下の薬剤】							
					M1	オキシンドー水和剤80	1:有機銅	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	×	○ 薬害注意(着色期以降)
					M1	キノンドー水和剤80	1:有機銅	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	×	○ 薬害注意(着色期以降)
					M1	キノンドー顆粒水和剤	1:有機銅	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	×	○ 薬害注意(着色期以降)
					M5	パスポート顆粒水和剤	1:TPN	1,500倍	収穫30日前まで	3回以内	普	×	
					3	サルバトーレME	1:ﾃﾄﾗｺﾅｿﾞｰﾙ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ2:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾟ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
炭疽病	(発生の特徴) ○品種間差が大きく、横野・早秋・富有は罹病しやすい。 (防除上のポイント) ○新梢発育期に1～2回散布。 ○秋期になると果実の感受性が高まるので防除を徹底。 ○天候不順が続くときは追加防除。 (留意点) ○5月及び6月上旬から10月の薬剤は、落葉病でも登録あり。	○発病枝・果実除去。 ○通風、採光、排水を良くする。	休眠期(3月)										
					M3+1	ホーマイコート	1:ﾁｳﾗﾑ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	50倍	休眠期	1回	普	×	○ 薬剤選択注意
			5月		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					M3	エムダイファー水和剤	1:ﾏﾝﾈﾌﾞ	600倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					M3+3	ブロード水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意、回数注意(ｼﾞﾏﾝ、ﾗﾘｰ)
					1+M3	ラビライト水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ2:ﾏﾝﾈﾌﾞ	500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意、薬剤選択注意
					M9	デランフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ	2,000倍	収穫90日前まで	5回以内	劇	×	○ かぶれ注意、収穫前日数注意
			6月上旬～10月			【5月の薬剤に加えて以下の薬剤】							
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	インダーフロアブル	1:ﾌｪﾝﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	5,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ2:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					11	アミスター10フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	○ 単用とする。
					52	ミギワ20フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M4	オーソサイド水和剤80	1:ｷｬﾌﾟﾀﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人毒	水産 (注)	
うどんこ病	(防除上のポイント) ○新梢発育期に1～2回散布。	○秋期に落葉を処分。 ○通風、採光、排水を良くする。	休眠期(3月)										
					M3+1	ホーマイコート	1:ﾁｳﾗﾑ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	100倍	休眠期	1回	普	×	○ 薬剤選択注意
			5月		1+M3	ラビライト水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ2:ﾏﾝﾈﾌﾞ	500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意、薬剤選択注意
				un	M2	イオウフロアブル	1:硫黄	500倍	発病前～発病初期	ー	普	○	○ 高温時散布しない。
				un	M2	サルファーゾル	1:硫黄	500倍	発病前～発病初期	ー	普	○	○ 高温時散布しない。
					M3+3	ブローダ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾟ2:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意、 回数注意(ｼﾞﾏﾝ、ﾗﾘｰ)
			6月～7月			【6月～7月にのみ使用する薬剤】							
				un	M2	イオウフロアブル	1:硫黄	500倍	発病前～発病初期	ー	普	○	○ 高温時散布しない。
				un	M2	サルファーゾル	1:硫黄	500倍	発病前～発病初期	ー	普	○	○ 高温時散布しない。
					M1	オキシンドー水和剤80	1:有機銅	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	×	○ 薬害注意(着色期以降)
					M1	キノンドー水和剤80	1:有機銅	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	×	○ 薬害注意(着色期以降)
					M1	キノンドー顆粒水和剤	1:有機銅	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	×	○ 薬害注意(着色期以降)
						【6月～7月、8月中旬～9月中旬のどちらでも使用できる薬剤】							
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	アンビルフロアブル	1:ﾍｷｻｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	○	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	インダーフロアブル	1:ﾌｪﾝﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	5,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					3	サルバトーレME	1:ﾃﾄﾗｺﾅｿﾞｰﾙ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ2:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			8月中旬～9月中旬		7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					11	アミスター10フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	○ 単用とする。
					52	ミギワ20フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害(西村・富有)
					M7+M4	ダイパワー水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ｷｬﾌﾟﾀﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△※	○ 薬害(西村・富有)
					U6	コナケシ顆粒水和剤	1:ｼﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人毒	水産 (注)	
灰色かび病	(発生の特徴) ○刀根、西条柿は発生が多い。	○通風、採光、排水を良くする。	5月下旬～6月上旬		7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	3,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	○	
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾟ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾟ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	2,000倍	収穫45日前まで	1回	普	×	○ かぶれ注意(10日間入園禁止)
					52	ミギワ20フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害(西村・富有)
すす点病	(発生の特徴) ○通風の悪い園、日陰になる位置で発生しやすい。	○通風、採光、排水を良くする。	7月～8月		1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	アミスター10フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					M4	オーソサイド水和剤80	1:ｷｬﾌﾟﾀﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	
枝幹害虫 (ヒメコスカシバ フタモンマダラメイガ)	(防除上のポイント) ○5月以降、発生園では、主幹部・主枝・亜主枝に丁寧に散布。	○冬期に幹や枝の粗皮を削り、越冬幼虫を駆除。	3月～4月	1B		ガットサイドS	1:MEP	1.5倍	産卵期～幼虫食入初期(但し収穫45日前まで)	2回以内	普	△	○ 薬害(葉への付着)。主幹部、主枝亜主枝の分枝部に散布。
				1B+1B		トラサイドA乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ2:MEP	200倍	産卵期～幼虫食入初期(但し収穫30日前まで)	2回以内	普	△	○ 薬害(葉への付着)。樹幹部に十分散布。登録はﾋﾒｺｽｶｼﾊﾞ
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	200倍	開花期まで (5～200ℓ/10a)	1回	普	△	○ 樹幹部及び主枝に散布。
			5月～10月	28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				28		サムコルフロアブル10	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 登録はﾌﾀﾓﾝﾏﾀﾞﾗﾒｲｶﾞ
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 登録はﾋﾒｺｽｶｼﾊﾞ
カキノヘタムシガ	(防除上のポイント) ○第1世代幼虫には、6月5日～15日に第1回の散布、2週間後に第2回の散布。 ○第2世代幼虫には、7月下旬と8月中旬の2回散布。 (留意点) ○パダンSG水溶剤の連用はフジコナカイガラムシ多発の恐れがあるので、他剤と交互に使用。	○冬期に幹や枝の粗皮を削り、越冬幼虫を駆除。 ○9月上旬頃にコモなどを巻き付け、春に適切に処分。	6月上旬～中旬	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△	
				1B		トクチオン水和剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	800倍	収穫75日前まで	2回以内	普	△	
				1B		サイアノックス水和剤	1:CYAP	1,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			7月下旬～8月中旬	13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※	
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫45日前まで	4回以内	劇	×	○ 他剤と交互使用(留意点)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				28		サムコルフロアブル10	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
カイガラムシ類		○寄生の多い枝は切り取り処分。	12月中旬～下旬										
				(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:ﾏｼﾝ油	20倍	―	―	普	△	○ 芽が動き出す前に散布
				(物理)		高度精製ﾏｼﾝ油乳剤(97%)	1:ﾏｼﾝ油	50倍	発芽前	―	普	△	○ 芽が動き出す前に散布
フジコナカイガラムシ	(防除上のポイント) ○4月は、芽に移動後の越冬幼虫を対象に散布。 ○6月以降、多発園では、第1回散布3週間後に、2回目を散布。 ○第1世代幼虫期に徹底防除。	○冬期に幹や枝の粗皮を削り、越冬幼虫を駆除。 ○5月～8月に幹や枝で寄生が多いときは、タワシなどで駆除。	4月上旬～中旬	16		アプロード水和剤	1:ﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	開花期まで (但し、収穫45日前まで)	2回以内	普	○	○ 4月中の使用に限る。
			6月中旬～7月上旬	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△	
				1B		トクチオン水和剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	800倍	収穫75日前まで	2回以内	普	△	
				1B		オルトラン水和剤	1:ｱｾﾌｪｰﾄ	1,500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	
				1B		サイアノックス水和剤	1:CYAP	1,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
			8月	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
ツノロウムシ			6月下旬～7月上旬	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
イラガ類	(防除上のポイント) ○若齢幼虫時に防除。	○冬期に繭を捕殺。	6月下旬～7月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△	
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
			8月中旬～下旬	28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
コガネムシ類	(防除上のポイント) ○発生初期は、園の周辺部に飛来し加害するのでよく観察し早期防除に努める。	(耕種的防除法) ○近隣に、幼虫の餌となる堆肥等の有機物を貯留、堆積しない。 ○成虫を捕殺 。	6月下旬～7月										
				3A+1B		パーマチオン水和剤	1:ﾌｪﾝﾊﾞﾚﾚｰﾄ2:MEP	2,000倍	収穫30日前まで	3回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			8月中旬～下旬	上記薬剤と同じ									
ドウガネブイブイ			6月下旬～7月										
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
			8月中旬～下旬	上記薬剤と同じ									

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
カメムシ類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や園地差も大きい。 (防除上のポイント) ○飛来が認められた園では早めに防除。 ○受粉が必要な品種は、開花期に訪花昆虫への影響が強い剤の使用は避ける。 ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策参照		5月～10月	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
				2B		キラップフロアブル	1:エチプロール	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				3A		アグロスリン水和剤	1:シペルメトリン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	○ 合ピレ(P.15)参照。
				3A		テルスター水和剤	1:ビフェントリン	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△※	○ 合ピレ(P.15)参照。
				3A		テルスターフロアブル	1:ビフェントリン	5,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	○ 合ピレ(P.15)参照。
				3A		ロディー水和剤	1:フェンプロパトリン	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 合ピレ(P.15)参照。
				3A		アークリン水和剤	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○ 合ピレ(P.15)参照。
				3A+1B		パーマチオン水和剤	1:フェンバレレート2:MEP	2,000倍	収穫30日前まで	3回以内	劇	×	○ 合ピレ(P.15)参照。
				4A		アドマイヤー水和剤	1:イミダクロプリド	1,000倍	収穫7日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアメトキサム	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:クロラントラニリプロール2:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
チャノキイロアザミウマ	(防除上のポイント) ○果実での成幼虫の発生状況を観察し、寄生を認めたら早めに薬剤散布。 ○5月下旬～6月上旬はカキクダアザミウマと同時防除可能。 ○受粉が必要な品種は、開花期に訪花昆虫への影響が強い剤の使用は避ける。 (発生の特徴) ○品種間差大きい。 (留意点) ○パダンSG水溶剤の連用はフジコナカイガラムシ多発の恐れがあるので、他剤と交互に使用。		5月下旬～6月上旬	1B		オルトラン水和剤	1:アセフェート	1,500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	
				1B		ジェイエース水溶剤	1:アセフェート	1,500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	○	
				1B		トクチオン水和剤	1:プロチオホス	800倍	収穫75日前まで	2回以内	普	△	
				2B		キラップフロアブル	1:エチプロール	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アドマイヤー水和剤	1:イミダクロプリド	1,000倍	収穫7日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	3回以内	劇	△	
			6月中旬～下旬	4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアメトキサム	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:スピネトラム	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			7月上旬～中旬	9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※	
				14		パダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫45日前まで	4回以内	劇	×	○ 他剤と交互使用(留意点)
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				29		ウララDF	1:フロニカミド	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
			7月下旬～8月上旬										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
カキクダアザミウマ	(防除上のポイント) ○新葉等に寄生がみられ始めた時期に第1回目防除。 ○開花期には受粉が必要な品種では、訪花昆虫に影響の強い剤の使用は避ける。	○冬期に粗皮を削り、越冬虫を駆除。 ○巻葉等被害部の摘除。	4月下旬	1B		オルトラン水和剤	1:ｱｾﾌｪｰﾄ	1,500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	
				1B		ジェイエース水溶剤	1:ｱｾﾌｪｰﾄ	1,500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	○	
				1B		トクチオン水和剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	800倍	収穫75日前まで	2回以内	普	△	
			5月下旬～6月下旬	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ハダニ類		○下草、周辺雑草を適切に管理。	発生初期	20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	
				25A		スターマイトフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25B		ダニコングフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾞﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
カンザワハダニ ナミハダニ				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※	
カキサビダニ			6月下旬～7月下旬	13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※	
				21A		サンマイト水和剤	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
カキノヒメヨコバイ	(防除上のポイント) ○新葉硬化までの防除徹底。 ○越冬場所であるサツキ・ツツジ等の防除(3月上旬まで)も有効。 ○受粉が必要な品種では、開花期に訪花昆虫への影響の強い剤は使用しない。		4月中旬～下旬	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
			5月下旬～6月上旬	上記薬剤と同じ									
			6月下旬										
ハスモンヨトウ	(病害虫の特徴) ○主に葉を食害する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。		8月～10月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
ハマキムシ類	(病害虫の特徴) ○葉をつづって食害。果実では、ヘタの下などの果皮をなめるように食害。 (防除上のポイント) ○ 葉や果実の寄生部位にかかるよう丁寧に散布。	○冬期に幹や枝の粗皮を削り、越冬幼虫を駆除。	5月～9月	1B		トクチオン水和剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	800倍	収穫75日前まで	2回以内	普	△	
				1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				28		サムコルフロアブル10	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ケムシ類	(病害虫の特徴) ○主に葉を食害する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。		4月～10月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
黒とう病	(発生の特徴) ○4～5月に降雨があると発病。 ○5～6月に冷たい降雨が続くと激しく発病。 ○若く軟弱な組織で発病が激しい。 ○夏期乾燥期に一旦発病停止。 ○シャインマスカットなどのヨーロッパ種は弱く、アメリカ種は強い。 (防除上のポイント) ○発芽直前・梅雨までに重点防除。 ○枝幹にかけむらのないようにていねいに散布。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード7及び11は、年1回の使用が望ましい。	○病枝、病果の除去徹底。密植園では間伐実施。 ○チッ素肥料の過用を避け、カリ肥料を充分に施し、枝の充実に努める。 ○多発園では雨よけ施設を導入。	発芽直前		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	200倍	休眠期	1回	普	△	○ 薬剤選択注意
					M5	パスポート顆粒水和剤	1:TPN	250倍	休眠期	1回	普	×	
					M3+1	ベンレートT水和剤20	1:ﾁｳﾗﾑ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	200倍	休眠期	1回	普	×	○ 薬剤選択注意
					M9	デランフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ	200倍	休眠期	1回	劇	×	○ かぶれ注意
			4月下旬～5月上旬										
				un	M2+M1	園芸ボルドー	1:硫黄2:塩基性塩化銅	500倍	－	－	普	△	○ 薬害注意(デランフロアブル)
					M3	チオノックフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	
					M3	トレノックスフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	
			5月上旬～中旬(開花前)										
					M9	デランフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ	1,000倍	落弁期まで但し、収穫75日前まで	2回以内	劇	×	○ かぶれ注意
			5月上旬～中旬(開花前)		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
			5月下旬～6月上旬(落弁後)		3	マネージDF	1:ｲﾐﾍﾞﾝｺﾅｿﾞｰﾙ	4,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	
					3	オーシャイン水和剤	1:ｵｷｼｽﾎﾟｺﾅｿﾞｰﾙﾌﾏﾙ酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	ベランティーフロアブル	1:ﾒﾌｪﾝﾄﾘﾌﾙｺﾅｿﾞｰﾙ	8,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ 耐性菌注意
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 耐性菌注意
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○ 耐性菌注意
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 耐性菌注意
					11	アミスター10フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○ 耐性菌注意
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 耐性菌注意、薬害(ﾛｻﾞﾘｵﾋﾞｱﾝｺ)
			6月中旬～7月		19	ポリオキシンAL水溶剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	5,000倍	収穫60日前まで	5回以内	普	○	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	2,500倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△※	
					3	インダーフロアブル	1:ﾌｪﾝﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	8,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	○	
					52	ミギワ20フロアブル	1:ｲﾌﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			7月～8月										
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	－	－	普	△	○ よごれ注意

ぶどう

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人毒	水産 (注)	注意事項
晩腐病	(防除上のポイント) ○袋かけ前までに10～15日間隔で2～3回散布。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード7及び11は、年1回の使用が望ましい。	○密植を避け棚面を明るくする。 ○排水に努める。 ○チッ素肥料の過用を避ける。	発芽直前		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	200倍	休眠期	1回	普	△	○耐性菌注意、薬剤選択注意
					M3+1	ベンレートT水和剤20	1:ﾁｳﾗﾑ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	80倍	休眠期	1回	普	×	○耐性菌注意、薬剤選択注意
			5月下旬～6月上旬		M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	100倍	－	－	普	△	○よごれ注意 散布時期注意(果実肥大期まで)
					M3	チオノックフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	
					M3	トレノックスフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	
					1+M3	ラビライト水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ2:ﾏﾝﾈﾌﾞ	800倍	落弁期まで 但し、収穫75日前まで	1回	普	△	○かぶれ注意、薬剤選択注意 散布時期注意(落弁期まで)
			5月下旬～6月上旬(落弁後～)		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○かぶれ注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意、薬剤選択注意
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					9+12	スイッチ顆粒水和剤	1:ｼﾌﾟﾛｼﾞﾆﾙ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	2,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					11	アミスター10フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意、薬害(ﾛｻﾞﾘｵﾋﾞｱﾝｺ)
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	(大粒種)収穫7日前まで	3回以内	普	△※	○耐性菌注意、薬害(ピオーネ)
					21+M5	ドーシャスフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ2:TPN	2,000倍	収穫60日前まで	3回以内	普	△※	
			6月中旬～7月		40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○かぶれ注意
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○かぶれ注意
					49+M3	ゾーベック エニベル 顆粒水和剤	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○かぶれ注意、 薬害(夏期28度以上)
					52	ミギワ20フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
			7月～8月		M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	100倍	－	－	普	△	○よごれ注意
さび病	(留意点) ○耐性菌注意 FRACコード7及び11は、年1回の使用が望ましい。	○落葉の処分。	7月～8月		M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	－	－	普	△	○よごれ注意
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○かぶれ注意
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○耐性菌注意
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意、薬害(ﾛｻﾞﾘｵﾋﾞｱﾝｺ)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					11	アミスター10フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意

ぶどう

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤									注意事項
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	
うどんこ病	(防除上のポイント) ○発生初期の防除を徹底。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード7及び11は、年1回の使用が望ましい。	○開花期の発病新梢(芽しぶ)は直ちに除去。 ○落葉の処分。	5月上旬～中旬(開花前)		3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					3	マネージDF	1:ｲﾐﾍﾟﾝｺﾅｿﾞｰﾙ	4,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	
					3	インダーフロアブル	1:ﾌｪﾝﾌﾟｺﾅｿﾞｰﾙ	8,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	○	
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	オーシャイン水和剤	1:ｵｷｽﾎﾟｺﾅｿﾞｰﾙﾌﾏﾙ酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 耐性菌注意
			5月下旬～6月(落弁後)		7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 耐性菌注意
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○ 耐性菌注意
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ 耐性菌注意
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 耐性菌注意
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	○	
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 耐性菌注意、薬害(ﾛｻﾞﾘｵﾋﾞｱﾝｺ)
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 耐性菌注意
					U6	コナケシ顆粒水和剤	1:ｼﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					3	ベランティーフロアブル	1:ﾒﾌｪﾝﾄﾘﾌﾙｺﾅｿﾞｰﾙ	8,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
褐斑病	(防除上のポイント) ○かけむらのないように丁寧に散布。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード7及び11は、年1回の使用が望ましい。	○密植を避け、棚面を明るくする。 ○多発園では粗皮削りを行う。 ○落葉の処分。	5月上旬～中旬(開花前)		1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500倍	収穫45日前まで	1回	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	インダーフロアブル	1:ﾌｪﾝﾌﾟｺﾅｿﾞｰﾙ	8,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	○	
					3	オーシャインフロアブル	1:ｵｷｽﾎﾟｺﾅｿﾞｰﾙﾌﾏﾙ酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ 耐性菌注意
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 耐性菌注意
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○ 耐性菌注意
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 耐性菌注意
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 耐性菌注意、薬害(ﾛｻﾞﾘｵﾋﾞｱﾝｺ)
					52	ミギワ20フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					M3	トレノックスフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	
					M3	チオノックフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	
					M4	オーソサイド水和剤80	1:ｷｬﾌﾟﾀﾝ	800倍	収穫30日前まで	3回以内	普	×	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人毒	水産 (注)	注意事項
べと病	(発生の特徴) ○感染は5～10月の多雨で多くなる。 ○30℃以上では病勢進展停止。 (防除上のポイント) ○発芽が始まる4月下旬頃から薬剤散布を開始。 ○5～6月は10～12日間隔で散布。 ○発病後は防除効果が低い。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード7及び11は、年1回の使用が 望ましい。	○初発病の葉、花穂、果実の早期除去。 ○落葉の処分。	4月下旬～5月上旬										
					P7 M9	アリエッティ水和剤 デランフロアブル	1:ホセチル 1:ジチアノン	800倍 1,000倍	収穫30日前まで 落弁期まで 但し、収穫75日前まで	3回以内 2回以内	普 劇	△ ×	○ 幼果期～果実肥大期散布不可 ○ かぶれ注意
			5月下旬～6月上旬		M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	100倍	－	－	普	△	○ よごれ注意
					M1	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	発病前～発病初期	－	普	△	○ よごれ注意 炭酸カルシウム剤加用
					M1	クミガードSC	1:水酸化第二銅	1,000倍	－	－	普	△	○ 炭酸カルシウム剤加用
				un	M2+M1	園芸ボルドー	1:硫黄2:塩基性塩化銅	800倍	－	－	普	△	○ かぶれ注意
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					M4	オーソサイド水和剤80	1:キャプタン	800倍	収穫30日前まで	3回以内	普	×	
					P7	アリエッティ水和剤	1:ホセチル	800倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
					21+M5	ドーシャスフロアブル	1:シアゾファミド2:TPN	2,000倍	収穫60日前まで	3回以内	普	△※	○ 落花直後までの使用
					40	フェスティバル水和剤	1:ジメトモルフ	2,000倍	(大粒種)収穫30日前まで	2回以内	普	○	○ かぶれ注意
					40	フェスティバル水和剤	1:ジメトモルフ	2,000倍	(小粒種)収穫45日前まで	2回以内	普	○	○ かぶれ注意
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ベンチアバリカルブイソプロピル2:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ベンチアバリカルブイソプロピル2:マンゼブ	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					49+M3	ゾーベック エニベル 顆粒水和剤	1:オキサチアピプロリン2:マンゼブ	750倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意、 薬害(夏期28度以上)
			6月中旬～7月中旬		M3	チオノックフロアブル	1:チウラム	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	
					M3	トレノックスフロアブル	1:チウラム	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:マンゼブ2:メタラキシルM	1,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					4+M5	フォリオゴールド	1:メタラキシルM2:TPN	1,500倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	
					11	アミスター10フロアブル	1:アゾキシストロビン	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○ 耐性菌注意
					11	ストロビードライフロアブル	1:クレソキシムメチル	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 耐性菌注意、薬害(ロサリオヒアンコ)
					21	ランマンフロアブル	1:シアゾファミド	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:アミスルブロム	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					22	エトフィンフロアブル	1:エタボキサム	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					21+27	ダイナモ顆粒水和剤	1:アミスルブロム2:シモキサニル	5,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△※	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:シモキサニル2:ファモキサドン	2,500倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△※	○ 耐性菌注意
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:シモキサニル2:ベンチアバリカルブイソプロピル	3,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	○	
					40	レーバスフロアブル	1:マンジプロパミド	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					43+40	ジャストフィットフロアブル	1:フルオピコリド2:ベンチアバリカルブイソプロピ	5,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	○	
			7月～8月										
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	－	－	普	△	○ よごれ注意
			9月～10月(収穫後)										
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	－	－	普	△	○ よごれ注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
灰色かび病	(防除上のポイント) ○開花前に散布。 (留意点) ○カンタスドライフロアブル高温条件や散布後急激に乾燥すると、葉焼けや日焼け果の発生を助長する恐れ。ニーズ、アプローチBI等の浸達性展着剤及び液肥は加用しない(薬害)。 ○耐性菌注意 FRACコード7及び11は、年1回の使用が望ましい。	○通風、採光、排水を良くする。 ○落花後は幼果に付着した花冠を早期除去。	5月上旬～中旬(開花期)		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,500倍	開花期～幼果期 但し、収穫60日前まで	3回以内	普	△	○かんきつへのドリフト注意
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	オーシャイン水和剤	1:ｵｷｽﾎﾟｺﾅｿﾞｰﾙﾌﾏﾙ酸塩	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					3	ベランティーフロアブル	1:ﾒﾌｪﾝﾄﾘﾌﾙｺﾅｿﾞｰﾙ	8,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○耐性菌注意
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000倍	(大粒種)収穫7日前まで	3回以内	普	○	○薬害等注意、耐性菌注意
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○耐性菌注意
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	○	
					9+12	スイッチ顆粒水和剤	1:ｼﾌﾟﾛｼﾞﾆﾙ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	3,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾟ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫45日前まで	1回	普	○	○薬剤選択注意
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾟﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	
					17	ピクシオDF	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾗｻﾞﾐﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					17	パスワード顆粒水和剤	1:ﾌｪﾝﾍｷｻﾐﾄﾞ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	2,000倍	開花直前～落弁期 但し、収穫60日前まで	1回	普	×	○かぶれ注意
					52	ミギワ20フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M3	トレノックスフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	
					M3	チオノックスフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	×	
白紋羽病	(発生の特徴) ○樹勢が衰えると発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見に心掛け、薬剤は発病根除去後に処理。 ○新植の際、前作物の発病の有無に注意。	(耕種的防除法) ○適正な樹勢を保つ。 ○未熟な粗大有機物を投入しない。 ○前作の被害根を除去。 ○無病苗の植え付け。	萌芽期		6	フジワン粒剤	1:ｲｿﾌﾟﾛﾁｵﾗﾝ	3kg／樹	萌芽期まで	1回	普	△	○土壌混和
			休眠期～生育期		29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)、土壌灌注 100～200ℓ/樹
スカシバ類 (フトウスカシバ クビアカスカシバ)	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に10日おきに2回散布 ○クビアカスカシバには7月散布が有効。	○被害枝を切り取り処分。	6月	4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	40g／樹	幼果期まで但し、 収穫30日前まで	1回	普	△	○登録はｸﾋﾞｱｶｽｶｼﾊﾞ
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	40g／樹	幼果期まで但し、 収穫30日前まで	1回	普	△	○登録はｸﾋﾞｱｶｽｶｼﾊﾞ
						(上記薬剤は、本剤1g当たり1mℓの割合で混合し、主幹から主枝の粗皮を環状に剥いだ部分に塗布)							
				3A		ロビンフッド	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ		収穫前日まで	5回以内	普	○	
						(上記薬剤は、専用ノズルを食入部に差し込み、薬剤が食入部から逆流するまで噴射)							
			5月下旬～7月	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(大粒種)収穫21日前まで	2回以内	普	△	○登録はﾌﾄｳｽｶｼﾊﾞ
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(小粒種)収穫90日前まで	2回以内	普	△	○登録はﾌﾄｳｽｶｼﾊﾞ
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	(大粒種)収穫21日前まで	5回以内	劇	×	○登録はｽｶｼﾊﾞ類
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				28		サムコルフロアブル10	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○登録はｸﾋﾞｱｶｽｶｼﾊﾞ
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○登録はｸﾋﾞｱｶｽｶｼﾊﾞ
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○登録はｸﾋﾞｱｶｽｶｼﾊﾞ
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	10,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○登録はｸﾋﾞｱｶｽｶｼﾊﾞ

ぶどう

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	
フタテンヒメヨコバイ	(防除上のポイント) ○発生初期に重点的に防除。	○採光、風通を良くする。	5月下旬～8月	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(大粒種)収穫21日前まで	2回以内	普	△	
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(小粒種)収穫90日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アドマイヤー水和剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1,000倍	収穫21日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫60日前まで	2回以内	劇	△※	
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	(大粒種)収穫21日前まで	5回以内	劇	×	
				30		グレーシアフロアブル	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
チャノキイロアザミウマ	(防除上のポイント) ○満開直後から袋かけまでに3～4回散布。	○不要な副梢は早めに剪定処分。	5月中旬～6月	1B		トクチオン水和剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	800倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アドマイヤー水和剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1,000倍	収穫21日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	5,000倍	収穫21日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	4,000倍	収穫60日前まで	2回以内	劇	△※	
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	(大粒種)収穫21日前まで	5回以内	劇	×	
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	1,000倍	開花前まで	2回以内	普	○	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				30		グレーシアフロアブル	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 天敵への影響大
コガネムシ類	(防除上のポイント) ○飛来しはじめてから2週間ごとに2～3回散布。		6月下旬～8月上旬	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(大粒種)収穫21日前まで	2回以内	普	△	
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(小粒種)収穫90日前まで	2回以内	普	△	
				3A		アグロスリン水和剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫21日前まで	5回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		アディオン水和剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		スカウトフロアブル	1:ﾄﾗﾛﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△※	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	10,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

ぶどう

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ブドウトラカミキリ	(防除上のポイント) ○収穫後に食入防止のため9月上旬と下旬の2回散布。 ○食入後の休眠期に防除。	○剪定時、被害枝は切り取り処分。 ○幼虫を捕殺。	9月	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(大粒種)収穫21日前まで	2回以内	普	△	
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(小粒種)収穫90日前まで	2回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫後秋期	3回以内	劇	△	
			休眠期	1B+1B		トラサイドA乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ2:MEP	300倍	発芽前(休眠期)	2回以内	普	△	
				1B		ガットキラー乳剤	1:MEP	100倍	休眠期(落葉後～萌芽前)	2回以内	普	△	
ハダニ類		○雑草等の寄主植物の管理徹底。	3月下旬	un	M2	石灰硫黄合剤 銘柄により登録が異なる。必ずラベルを確認。	1:石灰硫黄合剤	40倍	冬期	ー	普	△	○ 発芽前に散布
			6月～8月	6		コロマイト水和剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				20B		カネマイトフロアブル	1:ｱｾｷﾉｼﾙ	1,500倍	収穫14日前まで	1回	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				23		エコマイト顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾛｼﾞｸﾛﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	○	○ よごれ注意
				25A		スターマイトフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	1回	普	△	
				25A		ダニサラバフロアブル	1:ｼﾌﾙﾒﾄﾌｪﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				25B		ダニコングフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾞﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
コナカイガラムシ類	(防除上のポイント) ○発生初期の防除を徹底。 ○若齢幼虫期に防除。	○粗皮削りを励行。	4月～幼果期	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	20～40g/樹	幼果期まで但し、収穫30日前まで	1回	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	20～40g/樹	幼果期まで但し、収穫30日前まで	1回	普	△	
						使用方法:薬剤1gあたり水1mℓの割合で混合、主幹から主枝の粗皮を環状に剥いだ部分に塗布。							
			5月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫45日前まで	1回	劇	△	
				1B		トクチオン水和剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	800倍	(大粒種)収穫45日前まで	3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			7月	4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			8月中旬～9月上旬	16		アプロードフロアブル	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
クワコナカイガラムシ			5月	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(大粒種)収穫21日前まで	2回以内	普	△	
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(小粒種)収穫90日前まで	2回以内	普	△	
			7月～8月中旬～9月上旬	上記薬剤と同じ									

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
縮葉病	(防除上のポイント) ○かけむらのないよう丁寧に散布。 ○萌芽直前の散布効果が高い。	○罹病葉の除去。	12月～3月中旬（萌芽直前）	un	M2	石灰硫黄合剤	1:石灰硫黄合剤	7倍	発芽前	ー	普	△	○ラベル等(注)展着剤加用
				(注):石灰硫黄合剤は銘柄により登録が異なる。ラベル要確認。マシン油乳剤散布後に石灰硫黄合剤を使用する場合、1か月以上あける。									
					M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	500倍	開花前まで	ー	普	△	○炭酸ｶﾙｼｳﾑ剤(200倍)加用
					M1	ICボルドー412	1:塩基性硫酸銅	30倍	ー	ー	普	×	○薬害注意
					M1+M1	キンセット水和剤80	1:水酸化第二銅2:有機銅	1,000倍	収穫後～開花直前まで(但し､収穫60日前まで)	5回以内	普	×	
					M3	トレノックスフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	500倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	
					M3	チオノックフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	500倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	
					M3+1	ホーマイコート	1:ﾁｳﾗﾑ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	50倍	休眠期	1回	普	×	○薬剤選択注意
黒星病	(発生の特徴) ○低温多湿の年に発病が激しい。 (防除上のポイント) ○無袋の場合は4月下旬から3回程度散布 。 ○有袋の場合は袋かけ前までの防除を徹底。	○通風を図る。 ○発病枝の除去。	4月下旬～6月上旬		1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	○薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬剤選択注意
					3	オーシャイン水和剤	1:ｵｷｽﾎﾟｺﾅｿﾞｰﾙﾌﾏﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	インダーフロアブル	1:ﾌｪﾝﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					3	マネージDF	1:ｲﾐﾍﾞﾝｺﾅｿﾞｰﾙ	4,000倍	展葉期～硬核期	3回以内	普	△	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	サルバトーレME	1:ﾃﾄﾗｺﾅｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ2:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○連用を避ける
					11	アミスター10フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○連用を避ける
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
					49+M3	ゾーベック エニベル 顆粒水和剤	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	
					52	ミギワ20フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				un	M2	イオウフロアブル	1:硫黄	500倍	発病前～発病初期	ー	普	○	○高温時散布しない
				un	M2	サルファーゾル	1:硫黄	400倍	発病前～発病初期	ー	普	○	○高温時散布しない
					M3	トレノックスフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	500倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	
					M3	チオノックフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	500倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○かぶれ注意
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	×	
					M5	パスポート顆粒水和剤	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	×	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M9	デランフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ	600倍	収穫7日前まで	4回以内	劇	×	○かぶれ注意
					M9+7	セルカディスDフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ2:ﾌﾙｷｻﾋﾟﾛｷｻﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○かぶれ注意
炭疽病	(発生の特徴) ○4～6月に降雨が続くと発病が多くなる。	○発病枝の切除。 ○被害果を早期除去。 ○早めの袋がけ。	4月～7月		3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	フリントフロアブル25	1:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
せん孔細菌病	(防除上のポイント) ○袋かけ前防除徹底。	○防風垣等で強風を防ぐ。 ○発病枝の切除。 ○樹勢の強化に努める。	3月上旬～中旬										
					M1	ICボルドー66D (注):石灰硫黄合剤とICボルドー66Dの散布間隔は2週間以上あける。	1:塩基性硫酸銅	50倍	ー	ー	普	△	○ 単用散布 ○ 近接散布(注)
					25	アグレプト水和剤	1:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	△	
					25	アグレプト液剤	1:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	△	
					25	マイシン20水和剤	1:ストレプトマイシン硫酸塩	1,000倍	収穫60日前まで	2回以内	普	△	
					31	スターナ水和剤	1:オキソリニック酸	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					41	マイコシールド	1:オキシテトラサイクリン	1,500倍	収穫21日前まで	5回以内	普	△	
					41+25	アグリマイシン-100	1:オキシテトラサイクリン2:ストレプトマイシン硫酸塩	1,500倍	収穫60日前まで	2回以内	普	△	
					M1	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	発病前～発病初期	ー	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					M9	デランフロアブル	1:ジチアノン	600倍	収穫7日前まで	4回以内	劇	×	○ かぶれ注意
			9月中旬～10月(収穫後)										
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	ー	ー	普	△	
					M1	クプロシールド	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	発病前～発病初期	ー	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	収穫後～落葉まで	ー	普	×	
灰星病	(防除上のポイント) ○開花期と収穫20日前からの防除徹底。 ○同系統の薬剤の連用を避ける。(耐性菌発生注意) ○有袋は袋かけ前までの防除徹底。	○発病枝の切除。	4月中旬～7月上旬		2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ かんきつへのドリフト注意
					2	スミレックス水和剤	1:プロシミドン	1,500倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					3	オンリーワンフロアブル	1:テブコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェノコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	オーシャイン水和剤	1:オキスポコナゾールフマル酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	サルバトーレME	1:テトラコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	インダーフロアブル	1:フェンブコナゾール	5,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:テブコナゾール2:トリフロキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード15フロアブル	1:ピラジフルミド	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					7	フルーツセイバー	1:ペンチオピラド	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:インピルフルキサム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:イソフェタミド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	アミスター10フロアブル	1:アゾキシストロビン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	ストロビードライフロアブル	1:クレソキシムメチル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:マンデストロビン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11+7	ナリアWDG	1:ピラクロストロビン2:ボスカリド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
					29	フロンサイドSC	1:フルアジナム	2,000倍	収穫7日前まで	1回	普	×	○ かぶれ注意(10日間入園禁止)
					52	ミギワ20フロアブル	1:イプフルフェノキン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7	ベルクート水和剤	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M9+7	セルカディスDフロアブル	1:ジチアノン2:フルキサピロキサド	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ かぶれ注意
					U6	コナケシ顆粒水和剤	1:シフルフェナミド	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ホモプシス腐敗病	(防除上のポイント) ○落弁直後の幼果期から防除徹底。 ○同系統の薬剤の連用を避ける。(耐性菌発生に注意) ○有袋は袋かけ前までの防除を徹底。	○発病枝の切除。	4月中旬(落弁直後)		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○かんきつへのドリフト注意
			4月下旬～7月上旬		3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	フリントフロアブル25	1:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	2,000倍	収穫7日前まで	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)
					52	ミギワ20フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
うどんこ病	(防除上のポイント) ○幼果期頃から発生し始めるので、4月下旬から5月中旬に2回散布。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード3・7・11は年2回までの使用とし、連用を避ける。	○通風を図る。 ○落葉の処分。	4月下旬～6月上旬		3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	サルバトーレME	1:ﾃﾄﾗｺﾅｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ2:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					U6	コナケシ顆粒水和剤	1:ｼﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
白紋羽病	(発生の特徴) ○樹勢が衰えると発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見し、発病根除去後に薬剤を処理。 ○新植の際は、前作物の発病の有無に注意。	○適正な樹勢を保つ。 ○未熟な粗大有機物を投入しない。 ○前作の被害根を除去。 ○無病苗を植え付ける。	苗木植付前		1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	500倍	植付前	1回	普	△	○10分間根部浸漬、薬剤選択注意
			発芽前		6	フジワン粒剤	1:ｲｿﾌﾟﾛﾁｵﾗﾝ	3kg／樹	発芽前	1回	普	△	○発病根除去後に処理 (土壌混和)
			休眠期～生育期		29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	1,000倍	収穫30日前まで	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)、土壌灌注　100～200ℓ/樹

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人畜	水産 (注)	
シンクイムシ類 （ナシヒメシンクイ モモノゴマダラノメイガ）	(発生の特徴) ○ナシヒメシンクイは新梢・果実とも加害。 ○モモノゴマダラノメイガは果実のみ加害。 (防除上のポイント) ○4月中旬頃から10～15日ごとに散布。 ○袋かけ前には必ず薬剤散布。	○樹上の被害果は発生源となるため処分。	4月～8月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	収穫3日前まで	6回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		スピノエースフロアブル	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		サムコルフロアブル10	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
カイガラムシ類	(防除上のポイント) ○多発園では、第1回散布の2週間後に2回目を散布。 ○寄生の多い時にはタワシなどでこすり、重なって寄生する上の虫を落としてから薬剤を散布。		12月上旬～中旬										
				(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:ﾏｼﾝ油	20倍	―	―	普	△	
			5月	1B		ダイアジノン水和剤34	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	×	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
				16		アプロードフロアブル	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
				21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	1回	普	×	○ 回数注意(ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
			7月中旬～8月上旬　5月の薬剤と同じ(アプロード水和剤を除く)										
			8月下旬～9月中旬　5月の薬剤と同じ(アプロード水和剤を除く)										
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○発生初期に散布。		12月上旬～中旬										
				(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:ﾏｼﾝ油	25倍	発芽前	―	普	△	
			4月～6月	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○ 薬害(施設)
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	5,000倍	収穫3日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人毒	水産 (注)	
モモハモグリガ	(防除上のポイント) ○成虫発生期～食入初期に散布。		4月中旬～9月	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	5,000倍	収穫3日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○ 薬害(施設)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				5		スピノエースフロアブル	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				28		サムコルフロアブル10	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
ハダニ類	(防除上のポイント) ○発生初期に散布。		7月下旬～8月	6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△※	○ 単用散布、薬害(高温時)
				10B		バロックフロアブル	1:ｴﾄｷｻｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				20B		カネマイトフロアブル	1:ｱｾｷﾉｼﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				23		ダニゲッターフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾒｼﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	○ 薬害(ｲﾈ)、近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				25A		スターマイトフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25A		ダニサラバフロアブル	1:ｼﾌﾙﾒﾄﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				25B		ダニコングフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾞﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				33		ダニオーテフロアブル	1:ｱｼﾉﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	○	○ 混用(注) (P.27)参照
モモサビダニ	(防除上のポイント) ○発生初期に防除徹底。		7月～8月	10B		バロックフロアブル	1:ｴﾄｷｻｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				20B		カネマイトフロアブル	1:ｱｾｷﾉｼﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				21A		サンマイト水和剤	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000倍	収穫3日前まで	1回	劇	×	
				23		ダニゲッターフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾒｼﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	○ 薬害(ｲﾈ)、近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
コスカシバ	(防除上のポイント) ○樹上に残った蛹殻を発生時期、量の目安とする。 ○フェニックスフロアブル500倍散布園では、同剤4,000倍散布不要。	○虫糞や樹脂を目安に、秋～春にかけて幼虫を捕殺。	発芽前	1B+1B		ラビキラー乳剤	1:MEP2:PAP	200倍	落葉後～発芽前(休眠期)	1回	劇	×	○ 樹幹及び主枝に十分散布
			4月上旬			スカシバコンL	1:ｼﾅﾝｾﾙｱ	40～100本/10a(8g/100本製剤)	成虫発生初期～終期	ー	普	○	○ 使用法(P.351)参照。
			3～4月(開花期まで)										
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	500倍	開花期まで	1回	普	△	○ 樹幹部及び主枝に散布
			5月	28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			7月	28		サムコルフロアブル10	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			10月～11月										
				1B+1B		トラサイドA乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ2:MEP	200倍	収穫後～発芽前(幼虫食入期)	1回	普	△	○ 樹幹及び主枝に十分散布
				3A		ロビンフッド	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ		収穫前日まで	5回以内	普	○	○ 樹幹及び主枝に十分散布
						(上記薬剤は、専用ノズルを食入部に差し込み、薬剤が食入部から逆流するまで噴射)							○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
ケムシ類	(防除上のポイント) ○若齢幼虫時に防除。	○作物や周辺植物上の卵塊や集団でいる若齢幼虫寄生枝などを切除し処分。 ○冬季にまゆや蛹等を捕殺。	3～9月	18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
カメムシ類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や園地差も大きい。 ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策参照 (防除上のポイント) ○飛来が認められたら早めに防除。	○袋かけを早めに行う。	4月下旬～8月上旬	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	収穫3日前まで	6回以内	普	△	○ 薬害(4～5月品種による)
				3A		テルスターフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾝﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		アグロスリン水和剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		ロディー乳剤	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	5,000倍	収穫3日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○ 薬害(施設)
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
実炭疽病	(防除上のポイント) ○球果の肥大期から成熟期に2～3回散布。	○間伐・剪定により通風、採光を良くする。 ○枯枝、枯損樹の除去。	6月中旬～8月		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	裂果前但し収穫14日前まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ かぶれ注意
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
カツラマルカイガラムシ	(防除上のポイント) ○一齢幼虫の発生から3週間後の6月下旬～7月上旬、その3週間後の7月中～下旬に防除。		12月中旬～下旬										
				(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:マシン油	14倍	―	―	普	△	○ 厳寒期前に散布
			6月下旬～7月中旬	16		アプロード水和剤	1:ﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
クリイガアブラムシ	(防除上のポイント) ○球果への移動期(6月下旬～7月中旬)の防除を徹底。	○イガを集めて処分。	6月下旬～7月中旬	3A		マブリック水和剤20	1:ﾌﾙﾊﾞﾘﾈｰﾄ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		アドマイヤー水和剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1,000倍	収穫7日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	3回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				3A+1B		パーマチオン水和剤	1:ﾌｪﾝﾊﾞﾚﾚｰﾄ2:MEP	1,000倍	裂果前但し収穫14日前まで	4回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
モモノゴマダラメイガ	(防除上のポイント) ○早生種は7月中～下旬から、中晩生種は8月上～中旬から、10日以内の間隔で2～3回散布。	○イガを集めて処分。	7月中旬～9月上旬	1B		エルサン粉剤2	1:PAP	6kg/10a	収穫14日前まで	4回以内	普	×	
				1B		トクチオン乳剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	1,000倍	裂果前まで(但し収穫7日前まで)	5回以内	普	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4, 000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
カミキリムシ類		○成幼虫を捕殺 。	6月～10月										
				1B+1B		トラサイドA乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ2:MEP	200倍	裂果前但し収穫14日前まで	1回	普	△	○ 樹幹部に十分散布。
クリタマバチ	(防除上のポイント) ○天敵の羽化時期である4月までは剪定枝を園内に残し、天敵を保護。	○間・縮伐、整枝・剪定の実施、肥培管理を適切に行い、樹勢強化に努める。	6月下旬～7月上旬										
				3A		アグロスリン水和剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	1,000倍	羽化脱出期(但し収穫14日前まで)	5回以内	普	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		マブリック水和剤20	1:ﾌﾙﾊﾞﾘﾈｰﾄ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
クリシギゾウムシ	(防除上のポイント) ○中晩生品種に発生が多い。		9月上旬～中旬	3A		アグロスリン水和剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	1,500倍	収穫7日前まで	5回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		アークリン水和剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A+1B		パーマチオン水和剤	1:ﾌｪﾝﾊﾞﾚﾚｰﾄ2:MEP	1,000倍	裂果前但し収穫14日前まで	4回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	

[6] なし

なし

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
赤星病	(防除上のポイント) ○雨前散布を徹底。 降雨の場合は追加防除を実施。 ○耐性菌注意 FRACコード3及び7は年2回までの使用とし、連用を避ける。	○中間宿主のビャクシンは極力伐採。	3月下旬～4月			**①ビャクシン類に対する防除**							
				un	M2	石灰硫黄合剤	1:石灰硫黄合剤	40倍	ー	ー	普	△	○ラベル等注意
			4月上旬～5月中旬			**②ナシに対する防除**							
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫30日前まで	5回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫30日前まで	5回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	エムダイファー水和剤	1:ﾏﾝﾈﾌﾞ	600倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	トレノックスフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	×	
					M3	チオノックフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	×	
					M9+7	セルカディスDフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ2:フルキサピロキサド	1,500倍	収穫60日前まで	3回以内	劇	×	○耐性菌、かぶれ注意
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					3	アンビルフロアブル	1:ﾍｷｻｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	インダーフロアブル	1:ﾌｪﾝﾌﾟｺﾅｿﾞｰﾙ	8,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					3	サルバトーレME	1:ﾃﾄﾗｺﾅｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	オーシャインフロアブル	1:ｵｷｽﾎﾟｺﾅｿﾞｰﾙﾌﾏﾙ酸塩	3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	ベランティーフロアブル	1:ﾒﾌｪﾝﾄﾘﾌﾙｺﾅｿﾞｰﾙ	8,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○耐性菌注意
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○耐性菌注意
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
黒星病	(防除上のポイント) ○新梢の先端を重点的に散布。 ○7～10日おきに散布。雨が多い場合は散布間隔を短縮。 ○開花直前から開花後2週間の防除を徹底。 (留意点) ○石灰硫黄合剤の使用銘柄で登録内容が異なる。マシン油散布後、1か月以上空ける。 ○耐性菌注意 FRACコード3・7・11は年2回までの使用とし、連用を避ける。	○落葉は春までに土中に埋める。 ○被害芽は花こう基部に発病した場合も除去。	開花前										
					M1	ICボルドー48Q	1:塩基性硫酸銅	30倍	収穫後～開花前	ー	普	△	
			3月中旬～下旬										
				un	M2	石灰硫黄合剤	1:石灰硫黄合剤	7倍	発芽前	ー	普	△	
			(注):石灰硫黄合剤は銘柄により登録が異なる。ラベル要確認。マシン油乳剤散布後に石灰硫黄合剤を使用する場合、1ヶ月以上をあける。										
					M3+1	ホーマイコート	1:ﾁｳﾗﾑ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	50倍	休眠期	1回	普	×	○薬剤選択注意
			りん片脱落期（3月中旬～4月上旬）～7月		M1	オキシンドー水和剤80	1:有機銅	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	
					M1	キノンドー水和剤80	1:有機銅	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	
					M3	トレノックスフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	×	
					M3	チオノックフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	×	
					M4	オーソサイド水和剤80	1:ｷｬﾌﾟﾀﾝ	800倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,500倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	
					M9+7	セルカディスDフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ2:フルキサピロキサド	1,500倍	収穫60日前まで	3回以内	劇	×	○耐性菌、かぶれ注意
					1+M3	ラビライト水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ2:ﾏﾝﾈﾌﾞ	800倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	○かぶれ注意、薬剤選択注意
					2+M1	ロブドー水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ2:有機銅	800倍	収穫14日前まで	5回以内	普	×	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					3	アンビルフロアブル	1:ﾍｷｻｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	オーシャインフロアブル	1:ｵｷｽﾎﾟｺﾅｿﾞｰﾙﾌﾏﾙ酸塩	3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	ベランティーフロアブル	1:ﾒﾌｪﾝﾄﾘﾌﾙｺﾅｿﾞｰﾙ	8,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○耐性菌注意
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○耐性菌注意
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○6月中旬以降散布、耐性菌注意
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)

なし　　なし

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人毒	水産 (注)	
黒星病	(防除上のポイント) ○多発した園地では、 2週間間隔で2回散布。 (収穫後)		りん片脱落期～7月（3月中旬～4月上旬）		3	インダーフロアブル	1:ﾌｪﾝﾌﾟｺﾅｿﾞｰﾙ	8,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					3	サルバトーレME	1:ﾃﾄﾗｺﾅｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	マネージDF	1:ｲﾐﾍﾞﾝｺﾅｿﾞｰﾙ	6,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					7	フルーツセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					9	ユニックス顆粒水和剤47	1:ｼﾌﾟﾛｼﾞﾆﾙ	2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	
					11	アミスター10フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○耐性菌注意
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○薬害(落花20日後まで避ける)、耐性菌注意
					52	ミギワ20フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M3	アントラコール顆粒水和剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾈﾌﾞ	500倍	収穫45日前まで	4回以内	普	△	○かぶれ注意
			収穫後（10月～11月上旬）										
					M1	ICボルドー48Q	1:塩基性硫酸銅	30倍	収穫後～開花前	ー	普	△	
					M1	オキシンドー水和剤80	1:有機銅	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	
					M1	キノンドー水和剤80	1:有機銅	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	
					M4+M1	オキシラン水和剤	1:ｷｬﾌﾟﾀﾝ2:有機銅	500倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	
黒斑病	(防除上のポイント) ○10～15日おきに散布。 雨が多い場合は散布間隔を短縮。 ○小袋かけ前と梅雨期の防除を徹底。 (留意点) ○耐性菌注意1 FRACコード3・7・11は年2回までの使用とし、連用を避ける。 ○耐性菌注意2 FRACコード19は耐性菌が確認されている。	○伝染源である枝の病斑とボケ芽を剪定時に除去。 ○罹病果は集めて処分。	休眠期		1	トップジンMペースト	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	原液	剪定整枝時及び病患部削り取り直後	3回以内	普	○	○使用方法は塗布
			4月上旬～8月上旬		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	○かんきつへのドリフト注意
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意1
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意1
					3	ベランティーフロアブル	1:ﾒﾌｪﾝﾄﾘﾌﾙｺﾅｿﾞｰﾙ	8,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意1
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○耐性菌注意1
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○耐性菌注意1
					9	ユニックス顆粒水和剤47	1:ｼﾌﾟﾛｼﾞﾆﾙ	2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬害(開花～落花30日まで避ける)、耐性菌注意1
					11	アミスター10フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○耐性菌注意1
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○薬害(落花20日後まで避ける)、耐性菌注意1
					19	ポリオキシンAL水和剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	○	○耐性菌注意2
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)
					M1	オキシンドー水和剤80	1:有機銅	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	
					M1	キノンドー水和剤80	1:有機銅	1,600倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	
					M1	キノンドーフロアブル	1:有機銅	1,000倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	
					M3	アントラコール顆粒水和剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾈﾌﾞ	500倍	収穫45日前まで	4回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	トレノックスフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	×	
					M3	チオノックフロアブル	1:ﾁｳﾗﾑ	500倍	収穫30日前まで	5回以内	普	×	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	
					M9	デランフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ	1,000倍	収穫60日前まで	4回以内	劇	×	○かぶれ注意
					M9+7	セルカディスDフロアブル	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ2:ﾌﾙｷｻﾋﾟﾛｷｻﾄﾞ	1,500倍	収穫60日前まで	3回以内	劇	×	○かぶれ注意、耐性菌注意1

なし　　なし

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	
輪紋病	(防除上のポイント) ○多発園では10～15日おきに散布。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード3・7・11は年2回までの使用とし、連用を避ける。	○イボが多数形成された枝は剪定時に除去し、トップジンMペーストを塗布。 ○イボのついた苗木を新植しない。	休眠期		1	トップジンMペースト	1:チオファネートメチル	原液	剪定整枝時及び病患部削り取り直後	3回以内	普	○	○使用方法は塗布
			5月中旬～9月中旬		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,500倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	○薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ベノミル	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○薬剤選択注意
					3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェノコナゾール	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	インダーフロアブル	1:フェンブコナゾール	5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					7	パレード15フロアブル	1:ピラジフルミド	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○耐性菌注意
					11	ストロビードライフロアブル	1:クレソキシムメチル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬害(開花～落花30日まで避ける)、耐性菌注意
					11	アミスター10フロアブル	1:アゾキシストロビン	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○耐性菌注意
					11	スクレアフロアブル	1:マンデストロビン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					11+7	ナリアWDG	1:ピラクロストロビン2:ボスカリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○薬害(落花20日後まで避ける)、耐性菌注意
					M1	キノンドーフロアブル	1:有機銅	1,000倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	
					M7	ベルクート水和剤	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	
					M4	オーソサイド水和剤80	1:キャプタン	1,000倍	収穫3日前まで	9回以内	普	×	
					M9	デランフロアブル	1:ジチアノン	1,000倍	収穫60日前まで	4回以内	劇	×	○かぶれ注意
うどんこ病	(防除上のポイント) ○発病葉を見つけたら、ただちに散布。 (留意点) ○耐性菌注意 FRACコード3・7・11は年2回までの使用とし、連用を避ける。	○落葉の処分。	6月下旬～9月		3	トリフミン水和剤	1:トリフルミゾール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					3	アンビルフロアブル	1:ヘキサコナゾール	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	サルバトーレME	1:テトラコナゾール	3,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					3	ベランティーフロアブル	1:メフェントリフルコナゾール	8,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					7	パレード15フロアブル	1:ピラジフルミド	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○耐性菌注意
					7	フルーツセイバー	1:ペンチオピラド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					11	ストロビードライフロアブル	1:クレソキシムメチル	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○耐性菌注意
					11	アミスター10フロアブル	1:アゾキシストロビン	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○耐性菌注意
					11	スクレアフロアブル	1:マンデストロビン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○耐性菌注意
					11+7	ナリアWDG	1:ピラクロストロビン2:ボスカリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○薬害(落花20日後まで避ける)、耐性菌注意
					19	デュアルサイド水和剤	1:プロピレングリコールモノ脂肪酸エステル2:ポリオキシン複合体	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	○	
					52	ミギワ20フロアブル	1:イプフルフェノキン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7	ベルクート水和剤	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	1,500倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	
					U6	コナケシ顆粒水和剤	1:シフルフェナミド	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
白紋羽病	(発生の特徴) ○樹勢が衰えると発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見に努め、薬剤は発病根除去後に処理。 ○新植の場合は、前作物の発病の有無に注意。	○樹勢を適正に保つ。 ○未熟な粗大有機物を投入しない。 ○前作の被害根を除去。 ○無病苗を植える。	休眠期		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	500倍 (土壌灌注)	休眠期	1回	普	△	○薬剤選択注意
			落花直後まで		6	フジワン粒剤	1:イソプロチオラン	3～5kg/樹	落花直後まで	2回以内	普	△	○土壌混和
			休眠期～生育期		29	フロンサイドSC	1:フルアジナム	1,000倍	収穫30日前まで	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止) 土壌灌注 100～200ℓ/樹

なし　　なし

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
カイガラムシ類			12月中旬～1月中旬										
				(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:ﾏｼﾝ油	20倍	－	－	普	△	○粗皮を削った後散布。 近接散布(硫黄合剤)
クワコナカイガラムシ	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。	○9月にバンド(わら等)を巻き、越冬卵を処分。	5月	1B		サイアノックス水和剤	1:CYAP	1,000倍	(無袋)収穫45日前まで	3回以内	普	△	
				1B		サイアノックス水和剤	1:CYAP	1,000倍	(有袋)収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				1B		トクチオン水和剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	800倍	収穫60日前まで	5回以内	普	△	
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(無袋)収穫21日前まで	6回以内	普	△	○薬害(6月散布)
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(有袋)収穫14日前まで	6回以内	普	△	○薬害(6月散布)
				1B		ダイアジノン水和剤34	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	6回以内	劇	×	
				16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	○	
				16		アプロードフロアブル	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
			7月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			8月中旬～9月上旬	4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
シンクイムシ類	(防除上のポイント) ○発生初期より15日ごとに収穫期まで散布。		満開直後	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(無袋)収穫21日前まで	6回以内	普	△	○薬害(6月散布)
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(有袋)収穫14日前まで	6回以内	普	△	○薬害(6月散布)
				1B		サイアノックス水和剤	1:CYAP	1,000倍	(無袋)収穫45日前まで	3回以内	普	△	
				1B		サイアノックス水和剤	1:CYAP	1,000倍	(有袋)収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				1B		ダイアジノン水和剤34	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	6回以内	劇	×	
			5月下旬・7月下旬										
						コンフューザーN	1:ｵﾘﾌﾙｱ・ﾄｰﾄﾘﾙｱ・ﾋﾟｰﾁﾌﾙｱ	50～200本/10a(52g/200本製剤)	成虫発生初期～終期	－	普	○	○使用法(P.351)参照。
			6月中旬～8月	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△	
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		サムコルフロアブル10	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	10,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
フタモンマダラメイガ	(発生の特徴) ○幼虫が枝幹と果実へ食入 ○交信かく乱剤利用の減農薬園で発生が多い。	○冬期に幹や枝の粗皮を削り、越冬幼虫を駆除。	6月	28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			9～10月										

なし　　なし

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤									注意事項
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人畜毒	水産 (注)	
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○新梢での発生状況に注意し、発生初期に防除。		育苗期	4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	20g/株	育苗期	1回	普	△	○ 苗木登録　10a当たり110kgまで
			育苗期	4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	20g/株	育苗期	1回	普	△	○ 苗木登録　10a当たり110kgまで
			発芽期	4A		バリアード顆粒水和剤	1:ﾁｱｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			4月中旬～5月	4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	5,000倍	収穫3日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	劇	×	○ 刺激(眼)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害(イネ)
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
ハマキムシ類	(防除上のポイント) ○発芽期から開花期の防除が重要。		発芽期	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△	
				1B		ダイアジノン水和剤34	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	6回以内	劇	×	
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(無袋)収穫21日前まで	6回以内	普	△	○ 薬害(6月散布)
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(有袋)収穫14日前まで	6回以内	普	△	○ 薬害(6月散布)
				5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				28		サムコルフロアブル10	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
ケムシ類	(防除上のポイント) ○若齢幼虫の発生時に防除。		4月～6月中旬	1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△	
				3A		アークリン水和剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 合ピレ(P.15)参照
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		サムコルフロアブル10	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		エクシレルSE	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
ナシヒメシンクイガ	(防除上のポイント) ○葉裏に丁寧に散布。		発生初期	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(無袋)収穫21日前まで	6回以内	普	△	○ 薬害(6月散布)
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(有袋)収穫14日前まで	6回以内	普	△	○ 薬害(6月散布)
				1B		ダイアジノン水和剤34	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	6回以内	劇	×	
ハダニ類		○園内外の除草を徹底。	発生初期	6		コロマイト水和剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△※	○ 単用で散布
				6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△※	○ 単用で散布
				20B		カネマイトフロアブル	1:ｱｾｷﾉｼﾙ	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	○ 近接散布(ICボルドー)
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	○ 薬害(6月までの散布)
				23		ダニゲッターフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾒｼﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	○ 近接散布(有機リン)・薬害(イネ・豊水・新高・長十郎)
				25A		スターマイトフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25A		ダニサラバフロアブル	1:ｼﾌﾙﾒﾄﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				25B		ダニコングフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾞﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				33		ダニオーテフロアブル	1:ｱｼﾉﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	○	○ 混用(注)(P.27)参照
カンザワハダニ、ナミハダニ				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	

なし　　なし

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ニセナシサビダニ	(発生の特徴) ○芽の基部、枝の粗皮、古い切り口等で越冬。 ○最高気温18℃以上になる頃越冬場所から離脱。 (防除上のポイント) ○寄生密度の高い徒長枝先端部や芽に丁寧に散布。	○剪定、粗皮削り等で越冬密度を下げる。 ○剪定枝等は園外へ。	3月上中旬	un	M2	クムラス	1:硫黄	300倍	―	―	普	○	○ 薬害(発芽前までに使用)
				6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△※	○ 単用で散布
			5月中旬	13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	
				20B		カネマイトフロアブル	1:ｱｾｷﾉｼﾙ	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	劇	×	○ 刺激(眼)
				21A		サンマイト水和剤	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	×	○ 刺激(眼)
			6月上旬	21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫30日前まで	1回	普	×	○ 回数注意(ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ・ﾀﾞﾌﾞﾙﾌｪｰｽ)
				23		ダニゲッターフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾒｼﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)・薬害(イネ)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害(イネ)
				25B+21A		ダブルフェースフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾟﾐﾄﾞ2:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	2,000倍	収穫14日前まで	1回	普	△	○ 回数注意(ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ・ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞｴｰｽ)
チャノキイロアザミウマ	(発生の特徴) ○被害は新梢葉表を内側にして湾曲し、新梢の先端部で多く見られる。 (防除上のポイント) ○寄生密度の高い徒長枝先端部や芽に丁寧に散布。		5月～7月	5		ディアナWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		デリゲートWDG	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	劇	×	○ 刺激(眼)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
キクイムシ類	(発生の特徴) ○枝幹と果実に穿孔被害。 ○樹勢の衰えた樹で、枝幹被害が多い。 (防除上のポイント) ○被害樹を確認後は主幹部に薬剤を散布。	(耕種的防除法) ○適正な肥培管理により樹勢の維持、回復に努める。 ○過熟果に被害が多いため、適期収穫。	4～5月	1B+1B		トラサイドA乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ2:MEP	200倍	4月～7月但し収穫21日前まで	5回以内	普	△	○ 薬害(葉に付着) 樹幹部に散布
カメムシ類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や園地差も大きい。 ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策参照 (防除上のポイント) ○飛来が認められたら早めに防除。	○防虫網6mm目以下(4mm目以下が望ましい)で園全体を覆う。	5月下旬～9月	1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(無袋)収穫21日前まで	6回以内	普	△	○ 薬害(6月散布)
				1B		スミチオン水和剤40	1:MEP	1,000倍	(有袋)収穫14日前まで	6回以内	普	△	○ 薬害(6月散布)
				3A		アグロスリン水和剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		スカウトフロアブル	1:ﾄﾗﾛﾒﾄﾘﾝ	1,500倍	収穫前日まで	5回以内	劇	△※	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		テルスター水和剤	1:ﾋﾟﾌｪﾝﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		テルスターフロアブル	1:ﾋﾟﾌｪﾝﾄﾘﾝ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		ロディー水和剤	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		アドマイヤー水和剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1,000倍	収穫3日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
黒星病	(発生の特徴) ○4月頃から降雨により感染。 ○潜伏期間30～40日。 ○春先が温暖多雨の場合多発。 ○白加賀は発生しやすい。 (防除上のポイント) ○感染時期の4月上旬～5月下旬を中心に3～4回防除。 ○多発傾向の園地では、収穫期以降9月上旬頃まで防除し、越冬伝染源を低減。	○発病枝は切除。 ○通風、採光、排水を良くする。	4月上旬～5月		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○登録は小粒核果類、薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ベノミル	3,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○薬剤選択注意
					3	サルバトーレME	1:テトラコナゾール	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					3	マネージDF	1:イミベンコナゾール	4,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△	
					3	オーシャイン水和剤	1:オキスポコナゾールフマル酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	オーシャインフロアブル	1:オキスポコナゾールフマル酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	インダーフロアブル	1:フェンブコナゾール	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェノコナゾール	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	トリフミン水和剤	1:トリフルミゾール	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					3	ベランティーフロアブル	1:メフェントリフルコナゾール	8,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:テブコナゾール2:トリフロキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			8月中旬～9月		7	パレード15フロアブル	1:ピラジフルミド	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○登録は小粒核果類
					7	フルーツセイバー	1:ペンチオピラド	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○登録は小粒核果類
					7	ネクスターフロアブル	1:イソピラザム	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○登録は小粒核果類
					7	ケンジャフロアブル	1:イソフェタミド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:インピルフルキサム	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○登録は小粒核果類
					9+12	スイッチ顆粒水和剤	1:シプロジニル2:フルジオキソニル	3,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	
					11	ストロビードライフロアブル	1:クレソキシムメチル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					11	アミスター10フロアブル	1:アゾキシストロビン	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					11+7	ナリアWDG	1:ピラクロストロビン2:ボスカリド	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	○登録は小粒核果類(すももを除く)
					29	フロンサイドSC	1:フルアジナム	2,000倍	発芽期まで(但し、収穫60日前まで)	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)
					52	ミギワ20フロアブル	1:イプフルフェノキン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○登録は小粒核果類
				un	M2	イオウフロアブル	1:硫黄	500倍	発病前～発病初期	―	普	○	○高温時散布しない
				un	M2	サルファーゾル	1:硫黄	500倍	発病前～発病初期	―	普	○	○高温時散布しない
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:マンゼブ	1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○かぶれ注意
					M3	チオノックフロアブル	1:チウラム	500倍	収穫21日前まで	2回以内	普	×	
					M3	トレノックスフロアブル	1:チウラム	500倍	収穫21日前まで	2回以内	普	×	
					M7	ベルクート水和剤	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	2,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	2,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
					M9	デランフロアブル	1:ジチアノン	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○かぶれ注意
うどんこ病			4月上旬～5月		11	ストロビードライフロアブル	1:クレソキシムメチル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
かいよう病		○風当たりの強いところは防風網などを整備。 ○発病枝は切除。	3月(葉芽発芽前)		M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	葉芽発芽前まで	―	普	△	○薬害(生育期)
					M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	硬核期まで	―	普	×	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用
			4月～5月上旬		24	カスミン液剤	1:カスガマイシン	500倍	収穫30日前まで	2回以内	普	○	
					31	スターナ水和剤	1:オキソリニック酸	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○登録は小粒核果類
					41	マイコシールド	1:オキシテトラサイクリン	1,500倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	
					M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	硬核期まで	―	普	×	○炭酸カルシウム剤(200倍)加用

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
灰色かび病	(発生の特徴) ○病原菌は、果実上に残存した花弁より侵入。	○排水を良くする。 ○整枝・剪定等で通風を改善。 ○落下した発病果を処分。	2月下旬～4月中旬（落弁期）		2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	1,500倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	○かんきつへのドリフト注意
					3	ベランティーフロアブル	1:メフェントリフルコナゾール	8,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:テブコナゾール2:トリフロキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○薬害注意
					7	パレード15フロアブル	1:ピラジフルミド	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○登録は小粒核果類
					9+12	スイッチ顆粒水和剤	1:シプロジニル2:フルジオキソニル	3,000倍	収穫45日前まで	2回以内	普	△	
					11	ストロビードライフロアブル	1:クレソキシムメチル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					29	フロンサイドSC	1:フルアジナム	2,000倍	発芽期まで　但し、収穫60日前まで	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)
					52	ミギワ20フロアブル	1:イプフルフェノキン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○登録は小粒核果類
					M7	ベルクート水和剤	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	2,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
すす斑病	(発生の特徴) ○春先、枝の病斑の上に形成された胞子が、雨水によって運ばれ果実に感染する。 ○5月中旬以降の主要感染時期の多雨で多発。 (防除上のポイント) ○4月下旬以降10日おき又は2週間おきに薬剤を散布。	○整枝・剪定等で通風を改善。	4月下旬～5月上旬		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○登録は小粒核果類、薬剤選択注意
					3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェノコナゾール	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	インダーフロアブル	1:フェンブコナゾール	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					3	ベランティーフロアブル	1:メフェントリフルコナゾール	8,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3+11	ナティーボフロアブル	1:テブコナゾール2:トリフロキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					7	パレード15フロアブル	1:ピラジフルミド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○登録は小粒核果類
					7	フルーツセイバー	1:ペンチオピラド	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○登録は小粒核果類
					11	ストロビードライフロアブル	1:クレソキシムメチル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:マンゼブ	1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○かぶれ注意
					M4	オーソサイド水和剤80	1:キャプタン	800倍	収穫21日前まで	3回以内	普	×	○登録は小粒核果類
					M9	デランフロアブル	1:ジチアノン	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○かぶれ注意
白紋羽病	(発生の特徴) ○樹勢が衰えると発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見し、薬剤は発病根除去後に処理。 ○新植の際、前作物の発病の有無に注意。	(耕種的防除法) ○適正な樹勢を保つ。 ○未熟な粗大有機物を投入しない。 ○前作の被害根を除去。 ○無病苗の植え付け。	収穫後から開花前		29	フロンサイドSC	1:フルアジナム	500倍	収穫後～開花前まで(但し、収穫60日前まで)	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)
ウメシロカイガラムシ	(防除上のポイント) ○多寄生時にはタワシで、重なって寄生する上の虫を落とし薬剤散布。 ○収穫後、幼虫発生期に2週間ごとに2回散布。	○多寄生枝を切除。	5月上～中旬	4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	○登録は小粒核果類
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			7～8月中旬上旬	4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○登録は小粒核果類
				16		アプロードフロアブル	1:ブプロフェジン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
			12月		NC	高度精製マシン油乳剤	1:マシン油	50倍	発芽前	ー	普	△	
			(97%製剤)　マシン油乳剤は銘柄で登録が異なる。ラベル要確認。										

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○新梢での発生状況に注意し、発生初期から防除。		発生初期～6月	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
コスカシバ	(防除上のポイント) ○樹上に残った蛹殻を発生時期、量の目安とする。	○虫糞や樹脂を目安に、秋～春に幼虫を捕殺。	発芽前	1B+1B		ラビキラー乳剤	1:MEP2:PAP	200倍	落葉後～発芽前(休眠期)	2回以内	劇	×	○ 樹幹・主枝に十分散布
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	200倍	開花期まで	1回	普	△	○ 樹幹・主枝に散布
			4月上旬			スカシバコンL	1:ｼﾅﾝｾﾙｱ	40～100本/10a(8g/100本製剤)	成虫発生初期～終期	-	普	○	○ 使用法(P.351)参照。
			5月～7月	28		サムコルフロアブル10	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
ケムシ類	(防除上のポイント) ○若齢幼虫期に防除。	○作物や周辺植物上の卵塊や集団でいる若齢幼虫寄生枝を切除し処分。 ○冬季にまゆや蛹等を捕殺。		1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
アカマダラケシキスイ	(発生の特徴) ○完熟果実に誘引される。	○落下果実の処理。	収穫期	3A		アディオン水和剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		バリアード顆粒水和剤	1:ﾁｱｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
カメムシ類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や園地差も大きい。 (防除上のポイント) ○飛来が認められたら早めに防除。 ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策参照		4月～6月	3A		スカウトフロアブル	1:ﾄﾗﾛﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		テルスターフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾝﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。 登録は小粒核果類
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
花腐細菌病	(発生の特徴) ○がく裂開期に降雨が多いと、発生が多くなる。	○通風、採光、排水を良くする。 ○開花の約30日前に環状剥皮を行う。	休眠期(3月上旬～中旬)										
					24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	500倍	休眠期	4回以内	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	500倍	休眠期	4回以内	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
			休眠期～萌芽期(3月上旬～5月上旬)										
					M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	休眠期～萌芽期 (新梢長約10cm)	―	普	×	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
			4月上旬～中旬		24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	発芽後萌芽期 (新梢長約10cm)まで	4回以内	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	発芽後萌芽期 (新梢長約10cm)まで	4回以内	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
			4月下旬～(開花前)		24	カスミン液剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	400倍	収穫90日前まで	4回以内	普	○	
					25	アグレプト水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,000倍	収穫90日前まで	4回以内	普	△	
					25	マイシン20水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,000倍	収穫90日前まで	4回以内	普	△	
					41+25	アグリマイシン-100	1:ｵｷｼﾃﾄﾗｻｲｸﾘﾝ2:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,000倍	落花期まで	3回以内	普	△	
かいよう病	(発生の特徴) ○黄色・赤色系品種は弱い。 ○2月以降、枝から菌液が漏出。 ○収穫後、落葉後、剪定の前後、発芽前の防除が重要。 ○発芽後～開花前の防除(4～5月)も重要。 ○梅雨時期の二次感染に注意。 (その他) ○定期的に園地を見廻り、樹体を観察。 ○強風雨等で樹体が傷付いた場合、応急防除を実施。 ○防除上の留意点参照	○風当たりの強いところは防風対策を強化。 ○発病樹は伐採(樹体の枯死、菌液の漏出が激しい場合伐根)。 ○初期病徴(葉のみの発生)では、速やかに結果母枝まで切り戻す。 ○被害枝や剪定枝は埋設、焼却。 ○鋏や鋸を消毒して使用。剪定箇所には保護剤を塗布。	11～12月(収穫後)										
					M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	収穫後～果実肥大期	―	普	×	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	収穫後～発芽前	―	普	△	
					M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	―	―	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
			1～2月(剪定後)		24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	500倍	休眠期	4回以内	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	500倍	休眠期	4回以内	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	収穫後～果実肥大期	―	普	×	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	収穫後～発芽前	―	普	△	
					M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	―	―	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					M1	ドイツボルドーA	1:塩基性塩化銅	500倍	休眠期～蕾出現前	―	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
			3月上旬～中旬(発芽前)　上記薬剤と同じ										
			4月上旬～中旬(発芽後萌芽期)										
					24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	発芽後萌芽期(新梢長約10cm)まで	4回以内	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	発芽後萌芽期(新梢長約10cm)まで	4回以内	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	収穫後～果実肥大期	―	普	×	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
						コサイド3000は、発芽期以降の散布が遅れないようにする・開花期以降、葉が黄化・落葉する場合あり。(黄色・赤色系)							
					M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	―	―	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用
					M1	フジドーLフロアブル	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	―	―	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用、薬害注意
			4月下旬～(開花前)		24	カスミン液剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	400倍	収穫90日前まで	4回以内	普	○	
					25	アグレプト水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,000倍	収穫90日前まで	4回以内	普	△	
					25	マイシン20水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,000倍	収穫90日前まで	4回以内	普	△	
					41+25	アグリマイシン-100	1:ｵｷｼﾃﾄﾗｻｲｸﾘﾝ2:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,000倍	落花期まで	3回以内	普	△	
					M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	2,000倍	収穫後～果実肥大期	―	普	×	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用、薬害注意
					M1	ムッシュボルドーDF	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	―	―	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用、薬害注意
					M1	フジドーLフロアブル	1:塩基性硫酸銅	1,000倍	―	―	普	△	○ 炭酸カルシウム剤(200倍)加用、薬害注意
					BM2	エコショット	1:ﾊﾞﾁﾙｽｽﾞﾌﾟﾁﾘｽD747	1,000倍	収穫前日まで	―	-	○	
					NC	マスタピース水和剤	1:ｼｭｰﾄﾞﾓﾅｽﾛﾃﾞｼｱ	2,000倍	収穫前日まで	―	-	○	
			5月下旬～(開花後)			上記薬剤と同じ							

キウイフルーツ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
果実軟腐病	(発生の特徴) ○秋雨が多い年は、追加防除。 (防除上のﾎﾟｲﾝﾄ) ○発生初期より3週間間隔で2回散布。 ○農薬のかかりにくい所に寄生するため、丁寧に散布。	○枯れ枝、剪定枝等の除去・処分。 ○適期収穫。 ○追熟温度は適正に保ち15℃以上にしない。	5月下旬～7月		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○薬剤選択注意
					1	トップジンMゾル	1:チオファネートメチル	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	○薬剤選択注意
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					P7	アリエッティ水和剤	1:ホセチル	600倍	幼果期まで(但し、収穫120日前まで)	2回以内	普	△	
			8月下旬～9月中旬	上記薬剤と同じ									
灰色かび病	(発生の特徴) ○天候不順が続くときは、追加防除。	○通風、採光、排水を良くする。 ○果面が濡れた状態では収穫しない。 ○貯蔵庫内の点検に努め、発病果は早期に除去。	5月下旬～6月上旬(落弁期)		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,500倍	開花期～落花期	4回以内	普	△	○かんきつへのドリフト注意
					7	パレード15フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)
貯蔵病害(灰色かび病)			収穫前		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○かんきつへのドリフト注意
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
すす斑病	(発生の特徴) ○中国系品種は弱い。 (防除上のポイント) ○6～8月に1ヶ月間隔で2回散布。	○通風、採光、排水を良くする。	6月中旬～8月中旬		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	○薬剤選択注意
					11	ストロビードライフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+7	ナリアWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
白紋羽病	(発生の特徴) ○樹勢が衰えた場合発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見に心掛け、薬剤は、発病根除去後に処理。 ○新植の場合は前作物の発病の有無に注意。	○適正な樹勢を保つ。 ○前作の被害根を除去。 ○未熟な粗大有機物を投入しない。 ○無病苗を植え付ける。	植付時(苗木)		29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	500倍	植付時	1回	普	×	○苗木を1時間浸漬 かぶれ注意(10日間入園禁止)
			休眠期～生育期		29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	500倍	収穫30日前まで	1回	普	×	○土壌灌注 1000/樹 かぶれ注意(10日間入園禁止)
カメムシ類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や園地差も大きい。 (防除上のポイント) ○飛来が認められたら早めに防除。 ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策参照		5月下旬～10月	3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○合ピレ(P.15)参照
				3A		アグロスリン乳剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○合ピレ(P.15)参照
				3A		テルスターフロアブル	1:ﾋﾟﾌｪﾝﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○合ピレ(P.15)参照
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

キウイフルーツ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
キイロマイコガ	(防除上のポイント) ○発生初期より3週間間隔で2回散布。 ○農薬のかかりにくい所に寄生するため、丁寧に散布。		6月中旬～7月	3A		アグロスリン乳剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照
				3A		マブリック水和剤20	1:ﾌﾙﾊﾞﾘﾈｰﾄ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照
				3A		スカウトフロアブル	1:ﾄﾗﾛﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	劇	△※	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫30日前まで	3回以内	劇	×	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
カイガラムシ類		○支障がない範囲で寄生枝を処分。	12月～1月										
				(物理)		マシン油乳剤(95%)	1:ﾏｼﾝ油	14倍	ー	ー	普	△	
					NC	トモノールS	1:ﾏｼﾝ油	30倍	発芽前	ー	普	△	
クワシロカイガラムシ	(防除上のポイント) ○第1世代幼虫(5月中・下旬)の防除を徹底。 ○若齢幼虫の多発生時期に防除。多発園では、1回目の散布から約2週間後に再散布。 ○多寄生時には重なって寄生する上の虫をタワシなどで落とし薬剤散布。		5月中旬～下旬(ヘイワード開花直前)										
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
			7月中旬～下旬 9月上旬～中旬	上記薬剤と同じ									
キウイヒメヨコバイ	(発生の特徴) ○キウイフルーツのみで発生。	○放任樹は伐採。	5月	3A		アグロスリン乳剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
			7月	4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			9～10月	13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫30日前まで	3回以内	劇	×	
				21A		サンマイト水和剤	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	3,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	×	○ 刺激(眼)
スカシバ類(キクビスカシバ)	(発生の特徴) ○マタタビ科の植物に寄生。 ○卵越冬、4月にふ化。 (防除上のポイント) ○ふ化幼虫が1年生枝へ食入する時期に散布。	○1年生枝への食入が中心である4～5月に虫糞を目安に食入枝を除去。	4月～5月	3A		アグロスリン乳剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				3A		ロビンフッド	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ		収穫前日まで	5回以内	普	○	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				(上記薬剤は、専用ノズルを食入部に差し込み、薬剤が食入部から逆流するまで噴射)									
ケムシ類(クワゴマダラヒトリ)	(発生の特徴) ○成虫の発生は年1回。幼虫で越冬。 ○幼虫は園外から、雑草等を食べ侵入。 ○産卵は特定の樹種。 (防除上のポイント) ○新梢伸長期に樹上で虫を確認したら早めに散布。 (耕種的防除法) ○園地周辺のクワ、アカメガシワ、カラスザンショウなどの産卵植物を8月下旬頃に除去。 ○10月上旬に巣網を処分。		4月～5月	3A		テルスターフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾝﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				11A		デルフィン顆粒水和剤	1:BT(生菌)	1,000倍	発生初期 (但し、収穫前日まで)	ー	ー	○	
				11A		ファイブスター顆粒水和剤	1:BT(生菌)	1,000倍	発生初期 (但し、収穫前日まで)	ー	ー	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		フェニックスフロアブル	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				28		テッパン液剤	1:ｼｸﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
がんしゅ病	(防除上のポイント) ○ナシヒメシンクイ、カミキリムシの食入、加害痕より発病しやすいので、これらを防除。	○罹病苗を植付けない。 ○激症樹は早期に処分。 ○発病枝は剪定時に除去。 ○適切な肥培管理。 ○防風対策。	2月下旬～3月上旬		M1	Zボルドー	1:塩基性硫酸銅	500倍	―	―	普	×	○薬害(果実横径10mm以上)
					M1	ICボルドー66D	1:塩基性硫酸銅	50倍	―	―	普	△	○薬害(高温時・異常低温時・樹勢弱い樹)
					M1	コサイド3000	1:水酸化第二銅	1,000倍	―	―	普	×	
			6月中旬～下旬(収穫後)　上記薬剤										
			9月上旬～中旬(剪定後)　上記薬剤										
ごま色斑点病		○発芽前に落葉を処分。 ○発病葉を摘除。 ○排水を良くする。 ○雨による土からのはね上がりを防ぐ。	2月下旬～4月		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	800倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ベノミル	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○薬剤選択注意
			5月中旬～6月上旬　上記薬剤										
			10月中旬～12月中旬　上記薬剤										
灰斑病		○発芽前に落葉を処分。 ○発病葉を除去。 ○通風、採光を良くする。	春枝伸長期(4月上旬～下旬)		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ベノミル	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○薬剤選択注意
					12	セイビアーフロアブル20	1:フルジオキソニル	1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	
			夏枝伸長期(収穫後)　上記薬剤										
灰色かび病		○発芽前に落葉を処分。 ○通風、採光、排水を良くする。	開花終期～袋掛け前		2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○かんきつへのドリフト注意
					9	フルピカフロアブル	1:メパニピリム	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					M7	ベルクート水和剤	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
白紋羽病	(発生の特徴) ○樹勢が衰えると発病しやすい。 (防除上のポイント) ○早期発見し、発病根除去後に薬剤を処理。 ○新植の際は、前作物の発病の有無に注意。	○適正な樹勢を保つ。 ○未熟な粗大有機物を投入しない。 ○前作の被害根を除去。 ○無病苗を植え付ける。	収穫後(9月)		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	300～500倍	収穫後(7月上旬～9月上旬)	1回	普	△	○灌注、薬剤選択注意
			収穫後～開花前		29	フロンサイドSC	1:フルアジナム	1,000倍	収穫後～開花前まで	1回	普	×	○かぶれ注意(10日間入園禁止)
			開花前		6	フジワン粒剤	1:イソプロチオラン	3kg/樹	開花前	1回	普	△	○土壌混和
ナシヒメシンクイ	(発生の特徴) ○収穫跡、芽かぎ跡、剪定跡などから食入しやすい。	○バンド誘殺、冬期の粗皮削りを実施し、越冬幼虫密度を下げる。 ○袋掛けを徹底。	6月～9月	14		パダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	春芽伸長初期まで但し収穫90日前まで	4回以内	劇	×	
アブラムシ類			発生初期	3A		スカウトフロアブル	1:トラロメトリン	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	劇	△※	○合ピレ(P.15)参照。
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:イミダクロプリド	2,000倍	収穫7日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

びわ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	防除薬剤										注意事項
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度 (使用量)	使用時期	使用 回数	人毒	水産 (注)	
ビワキジラミ	(発生の特徴) ○ビワ樹に通年寄生し、年間に5世代程度発生。 ○5～6月に多発し、顕著な被害をもたらす。 ○7月中旬～8月の盛夏には樹幹内部で休眠する。 ○幼虫は花房や幼果等の隙間を好み、甘露を排出してすす病を誘発する。 (防除上のポイント) ○開花初期(11月中旬)と袋かけ前(3～4月)の防除を徹底。 ○開花初期の防除は、花や蕾の間に隙間ができてから、または摘房・摘蕾後に実施する。 ○袋かけ前の防除は、摘果後に行い、散布後速やかに袋掛けを実施する。 ○機能性展着剤の加用が有効。 ○十分量(目安:300L/10a以上)の薬剤散布を心掛ける。		収穫後(6月～7月中旬、9月～10月中旬)										
				1A		オリオン水和剤40	1:ｱﾗﾆｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	劇	△	
				1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
				3A		スカウトフロアブル	1:ﾄﾗﾛﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	劇	△※	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		ロディー水和剤	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				21A		サンマイト水和剤	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	○	
			開花初期(11月中旬) 上記薬剤										
			袋かけ前(3月～4月) 上記薬剤										
ミカンハダニ			発生初期	10B		バロックフロアブル	1:ｴﾄｷｻｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
				25A		ダニサラバフロアブル	1:ｼﾌﾙﾒﾄﾌｪﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 近接散布(ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ)
カメムシ類	(発生の特徴) ○果樹園に飛来する時期や量は年変動が大きく、地域差や園地差も大きい。 (防除上のポイント) ○飛来が認められたら早めに防除。 ○果樹カメムシ類の発生生態と防除対策参照		発生初期	3A		ロディー水和剤	1:ﾌｪﾝﾌﾟﾛﾊﾟﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		テルスター水和剤	1:ﾋﾞﾌｪﾝﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				3A		テルスターフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾝﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 合ﾋﾟﾚ(P.15)参照。
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで(但し、露地栽培については発芽期から開花期を除く)	2回以内	劇	△	

(3) ミカンハダニ防除の要点

① ミカンハダニ発生の経過と防除上の問題点

ミカンハダニの年間の発生経過は、年度や地域、園によって一様ではないが、最も多い発生型は６月中旬～下旬に増殖が始まり、７月中旬～下旬にピークを迎えて８月中旬～下旬に終息する夏期の発生と、９月中～下旬から増殖が始まり、11～12月にピークを迎える秋期の発生の２山型である。

しかし、この発生型は薬剤の散布経過（時期、回数）や効率的散布がなされているか否かなどによって大きく変動し、年間の防除がまずいと４～６月の春の発生や、８～９月の平年なら終息期に当たる時期にも多発するなど、きわめて不規則である。

葉色があせるほどミカンハダニの大被害を受けると、春先の落葉を多くして樹勢を弱め、果実の糖酸を減ずるほか、毎年多くの被害を受けると、隔年結果性を高め、直花の結果率を高めて果実の品格を低下させる傾向が強い。

一方、ミカンハダニは、①年間の発生回数が多く、②移動性が小さく、③近親交配が起こりやすく、④突然変異率が高いことなど、殺虫剤抵抗性を獲得しやすい要因を多く持っているため、抵抗性の発達が早く、有効な薬剤が少なくなりやすい。

また、農薬の新規開発は毒性評価の強化によって、多くの年月と経費を要するようになっており、従来のように矢継ぎ早に新農薬が普及する可能性は少なくなっている。

そこで、今後のハダニ防除ではこれらの問題点を理解し、次に掲げる諸原則を配慮して、農薬による危被害防止に留意した少散布回数による効率的、経済的防除の推進を図るよう心掛けたい。

② ハダニ防除の4原則

ア 発生初期の防除を徹底すること。

葉や果実の被害は成幼虫の発生量に比例して累積的に進行する。年間の発生期間、発生量、現在の殺ダニ剤の一般的効果程度と樹勢の衰弱、減収、果実の品質低下などの実害の起こる限界（被害許容限界）との関係から検討された要防除密度は、雌成虫が葉平均３匹以内とみられている。

このうち、要防除密度の１葉平均雌成虫３匹以内の目標は早期多発樹におかれるもので、この時の園全体の平均発生数はほぼ１葉平均0.5～１匹の雌成虫数に該当する。

薬剤の使用条件が適正であり、上記の発生初期を徹底すると、かなりの多発園でも夏～秋期の３回以内の散布でほぼ防除が可能であり、葉の被害は葉色が変わるまでに達することはないはずである。

イ 薬剤は付着面積率を高めるよう丁寧に散布する。

最近の薬剤散布用ノズルは、多くが鉄砲ノズルなどと呼ばれる薬液吐出量の多い能率散布の可能な機具に変わってきている。これらの散布機具でも葉の表裏にかけむらなく薬がかかる配慮がなされているとよいが、一般的にはこの点の注意が乏しく、樹冠外側からの吹き付け散布が多くて、葉裏への薬液付着は著しく悪い。

ミカンハダニは７～８月の高温期には約50%が葉表で生息するが、その時期より低温期になると温度が下がるにつれて葉裏での生息割合が多くなり、６月や９～10月では70～80%の成幼虫、卵が葉裏に生息する状態になる。そのため、ハダニ防除のための薬剤は常に葉裏に良くかかるよう、丁寧に散布することが薬剤の防除効果を高める秘訣である。

最近、殺ダニ剤はハダニの抵抗性の獲得などで効力の不安定なものが多くなっている。有効な薬剤の少ない時、こうした効力の不安定な農薬も使わざるを得ない状態であるが、このような場合、特に葉裏まで薬剤が良くかかり、樹全体に付着面積率が高まるような散布方法をとることが肝要である。

ウ 薬剤の輪用（ローテーション）の徹底を図る。

薬剤の抵抗性は、その薬剤の散布回数と平行して発達する傾向があり、殺ダニ剤の多くでは、数回の散布で抵抗性の発達した事例が多い。仮に、６回の散布を行った頃から効力低下が見られる場合、年２回ずつ散布すると３年で、３回では２年でこの現象が到来することになり、その薬剤の寿命を短くする要因になる。そのため、同一薬剤は１年で１回の使用にとどめ、散布時期ごとに薬剤は性質の異なるものを代えて使うようにして、有効な薬剤が長年使用できるよう配慮する必要がある。

エ 冬期のマシン油乳剤散布を励行する。

冬期のマシン油乳剤の散布はミカンハダニに極めて高い安定した防除効果を示し、12～１月または、２～３月発芽前散布で、いずれもその年の６月の中～下旬までハダニの増殖を抑えて、７月以降の夏期発生ハダニ防除を容易にする効果が高い。この散布を省くと、４～５月の春のハダニが出始め、６～７月にはハダニ密度が高まって、かなり濃密な防除を行わないと密度を抑えきれない状態になり、薬剤の散布回数が増す一方、被害は著しく高まるという防除効率が上がらない大きな原因になる。

散布時期は12月中旬～１月中旬までの越冬初期が安全であるが、この時期に散布できない甘夏柑などでは、２月下旬～３月中旬頃の発芽前にも散布できる。

散布濃度は95%製剤45倍とするが、樹勢の弱った樹では、97%製剤60倍が適当である。但しマシン油乳剤は

商品によって登録内容が異なるため、使用に当たっては農薬ラベルの表示を必ず確認する。

越冬中のミカンハダニは、ほとんど葉裏で生活し、葉表に移動することは少ない。そのため、マシン油乳剤の粗雑な葉裏付着の悪い散布は予期した効果の上がらない最大の原因となるので注意する。

(4) マシン油乳剤の夏期散布とその注意事項

① マシン油乳剤の夏期散布による害虫の防除効果

高度精製のマシン油乳剤の６月散布ではミカンハダニにかなり高い防除効果を示すほか、ヤノネカイガラムシにも２齢中期までの若齢幼虫にかなり高い殺虫力がある。しかし、ミカンサビダニ、ナシマルカイガラムシには防除効果が劣り、コナカイガラムシ類、ロウムシ類などには防除効果は期待できない。

一般に昆虫類に対する殺虫力が低いので、各種害虫の捕食性・寄生天敵に害作用が少ない。そのため、天敵を放飼した園や薬剤少散布回数による防除体系を組んでいる園などでは適正な薬剤である。

② マシン油乳剤の種類

マシン油乳剤には油分95%のマシン油乳剤と、97%高度精製マシン油乳剤の２種類があるが、夏期散布には後者の高度精製マシン油乳剤を用いる。

また、マシン油乳剤は商品によって登録内容が異なるため、使用に当たっては農薬ラベルの表示を必ず確認する。

③ 散布濃度

ミカンハダニに対する安定した防除効果を期待するには150倍が適当である。

④ 散布時期

一般に６月中旬～下旬に限って散布し、７月以降は散布しないように注意する。但し、６月散布でも樹勢の弱ったものなどでは古葉が落葉することもある。

６月上旬以前の散布では充実の不十分な若葉や発育中の新葉に薬害を出したり、新葉の発育を悪くしたりする危険性がある。

また、果実の発育が進んで散布すると、果汁中の糖の含量を低くする恐れがあり、７月以降の散布ではこの危険性は高い。

⑤ 品種との関係

マシン油乳剤夏期散布の比較的安全な品種は温州みかんと夏みかんである。ネーブル・八朔などの中晩生柑橘では果実に薬害を出したり、生理落果を多くしたりする危険があるので散布をひかえるのが安全である。

⑥ 油浸現象と薬害の関係

マシン油乳剤の夏期散布を行うと、葉や緑枝、果面にほぼ例外なく油浸による斑紋（油浸斑）が現れる。この油浸斑は温州みかんでは１～２ヶ月後には消失する。

しかし、ネーブル、八朔などの果実で激しい油浸斑が出ると、その部分が窪んで後、表面がコルク状化した薬斑になることがある。

⑦ その他の散布上の注意事項

ア　ジチアノン剤を散布した園では、１ヶ月以上の間隔をおいて散布する（薬害）。

イ　摘果剤を散布する園では、いずれが先にあっても１週間以上（できれば10日）の間隔をおく。

ウ　マンネブ剤、マンゼブ剤、銅剤は多雨の条件の時でも、マシン油乳剤の７～10日（ＩＣボルドー６６Ｄは14日以上）前までに散布し、混用散布は行わない。

エ　マシン油乳剤散布後に次の薬剤を散布する場合、雨の多い時には20日以上、一般的には１ヶ月以上の間隔をおかないと薬剤の付着が悪い傾向がある。

⑧ ミカンハダニ防除上の注意事項

ア　薬剤は２～３日以上晴天の続く条件で散布する。散布直後の降雨で効果が低下するが、再散布はしないように注意する。

イ　散布時のミカンハダニの密度が高いと防除効果が劣る場合が多いので、１葉雌成虫が１～２匹程度の増殖初期に散布する。

ウ　薬剤は葉の表、裏、緑枝などにかけ残しのないように、十分な散布を行わないと満足な防除効果は発揮されない。

⑨ 散布についての指導上の徹底

防除暦編成にあたっては①～⑧までの事項を参考のうえ、適用の可否を判定するとともに、夏期マシン油乳剤を防除暦に組み入れた地域においては現場指導の徹底を図り、薬害の発生や果実品質を損なうことのないように、十分注意して対応すること。

(5) 果樹カメムシ類の発生生態と防除対策

① 発生生態

果樹を加害する主なカメムシ類は、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシの３種で、チャバネアオカメムシの発生が最も多い。愛媛県南部では、年によりツヤアオカメムシの発生が多い場合がある。

いずれの種も成虫で越冬し、年１～３回発生する。越冬明けの成虫は、サクラ、キリ等、様々な樹種の果実などを吸汁しながら、うめ、もも等の果樹園にも飛来し加害する。７月以降は、主な繁殖源であるヒノキやスギの球果に寄生し、８月以降新成虫が出現する。球果量よりもカメムシの発生量が相対的に多い場合には、球果の消耗が進み、かき、かんきつ等の果樹への飛来が多くなる。

② 発生予察法

ア　越冬密度調査法

チャバネアオカメムシは、雑木林等の落葉下で成虫越冬する。そのため、冬季に一定面積の落葉を集め、室内で調査することにより、越冬量を知ることができる。越冬密度を調査することにより、７月頃までの発生量を予測することが可能である。

イ　予察灯

予察灯への誘殺が４～７月に多い年は、うめ、もも、なし等の被害が多く、８月以降に多い年は、かき、かんきつ等の被害が多い。

ウ　集合フェロモントラップ

チャバネアオカメムシの集合フェロモンには、同種の雌雄成虫が誘引されるため、予察灯とともに発生量、発生時期の予察に使用されている。

③ 防除対策

果樹カメムシ類は果樹園外に発生源があり、年次間による発生量の変動が大きく、飛来量は地域や園地による差が大きい。多発年には周辺部から次々に飛来するため、防除薬剤は残効性が長いものが求められる。成虫は広範囲に移動するので、防除効果を高めるためには広域一斉防除が有効である。現在、一般的に使用されている薬剤は、１Ｂ（有機リン系）、３Ａ（合成ピレスロイド系）、４Ａ（ネオニコチノイド系）のものが主体である。有機リン系剤は速効性に優れるが、残効が短い剤が多い。合成ピレスロイド系剤は速効性、残効性とも優れる剤が多い。ネオニコチノイド系剤は速効性には劣るものの、残効性に優れ、吸汁阻害効果も認められる剤が多い。

連続散布を行った後にはリサージェンスが起こる可能性があるので、散布後のカイガラムシ、ダニ等の発生にも注意する。

果樹カメムシ類に対する各種薬剤の効果

薬剤名	系統 注1)	人畜毒性	水産 注2)	接触効果 注3)	残効性 注4)
アクタラ顆粒水溶剤	４Ａ	普	△	B	A
アドマイヤー水和剤	４Ａ	劇	△	B	A
アドマイヤーフロアブル	４Ａ	劇	△	B	B
ｽﾀｰｸﾙ/ｱﾙﾊﾞﾘﾝ顆粒水溶剤	４Ａ	普	△	B	A
ダントツ水溶剤	４Ａ	普	△	B	A
モスピランＳＬ液剤	４Ａ	劇	△	B	B
モスピラン顆粒水溶剤	４Ａ	劇	△	B	B
アグロスリン水和剤	３Ａ	劇	×	A	B
アディオン乳剤	３Ａ	普	×	A	B
スカウトフロアブル	３Ａ	劇	△※	A	C
テルスター水和剤	３Ａ	普	△※	A	A
テルスターフロアブル	３Ａ	劇	×	A	A
ロディー水和剤	３Ａ	劇	×	A	B
ロディー乳剤	３Ａ	劇	×	A	B
パーマチオン水和剤	１Ｂ＋３Ａ	劇	×	A	B
スミチオン水和剤40	１Ｂ	普	△	A	C
スミチオン乳剤	１Ｂ	普	△	A	C
キラップフロアブル	２Ｂ	普	○	A	A

注1）４Ａ：ネオニコチノイド系、３Ａ：合成ピレスロイド系、１Ｂ：有機リン系、２Ｂ：フェニルピラゾール系

注2）水産は「水産動植物への影響」を示す。（P8参照）

注3）Ａ：散布1日後の死虫率がほぼ100%、Ｂ：散布1日後に生存虫がある

注4）Ａ：5日以上、Ｂ：3日以上、Ｃ：1日以下

注5）「接触効果」「残効性」のデータは、主に「果樹カメムシ　おもしろ生態とかしこい防ぎ方」（堤、2003）を参考にした。

(6) かんきつ病害虫のスプリンクラー防除上の留意点

スプリンクラー利用によるかんきつ園の農薬散布は、短時間かつ省力的に行え、労働の軽減化が図れるほか、農薬散布者の安全性の維持や病害虫の適期防除を容易にする等のメリットが大きい。

しかし、手散布に比べて防除効果にムラが生じ易いため、補正散布に努めるなどその欠陥を極力回避するように利用面での対応に以下の注意が最低限必要である。また、防除効果が上がらない病害虫（カイガラムシ類やハダニ類など）に対しては本防除法は利用しない。

① 農薬の選定と散布時期

防除効果の安定のためには、適剤を選定し、適期防除を原則とする。また、一時に広範囲の使用となることから天候に配慮するとともに使用基準を厳守し、特に水産動植物への影響の高い剤は使用しない。

② 散布剤の濃度

手散布と同様な実用散布濃度を基準とし、薬剤濃度を適正に維持するとともに、薬剤調整にあたっては水溶性内袋を使用した薬剤の利用等によって中毒事故等が生じないように細心の注意を払う。

なお、単用散布が原則であるので混用散布はひかえる。

③ 散布液量

ラベルの表示内容を厳守し、農薬の特性、対象病害虫の種類・発生密度、地形、施設条件、樹冠の大きさ、着葉密

度等を考慮して使用基準内で液量を決定する。
なお、密植状態にある園や枝葉が過密状態にある園では、薬量を増やしても付着量の向上は少なく、間伐や整枝、剪定を励行し、樹形を改善することにより、付着性の向上を図ることが先決である。

④ 散布前後の点検

施設・機械の点検を入念に行い、散布前後の通水を心がける。さらに、散布後の残液は適正に処理する。

⑤ 農薬の飛散低減

・周囲の作物との境界に、遮蔽ネットや防風樹、緩衝地帯等を設置する。
・飛散防止カバー(反射板)を取り付け、散布前に点検、補修を行う。
・圃場周辺の作物を確認し、収穫間近の作物がある場合は散布を控えたり、収穫時期をずらしてもらうなど、周囲の圃場主とコミュニケーションを十分に取る。
・薬剤は「かんきつ類」の登録があるものを選定する。
・風向、風速に注意し、風の強い時(風速3m／秒以上)は散布を控える。
・散布圧を上げすぎず、適正な散布圧で散布すると伴に、飛散の少ないノズルを選択する。
・散布終了後は十分に洗浄を行う。

(7) カンキツウイルス・ウイロイド病の防除法

愛媛県内で確認されているウイルス病は4種、ウイロイド病は7種である。ウイルス・ウイロイド病は、現在のところ薬剤による防除が困難であるため、以下の耕種的防除法を中心に対応する。

① ウイルス・ウイロイド病共通項目

・発病樹の伐採・伐根を行う。
・接木伝染するため、ウイルス・ウイロイドフリーの穂木を用いる。
・ウイルス・ウイロイド検定を行っていない穂木は用いない。
・適正な肥培管理を行い、結実過多等を避けて樹勢維持に努める。

② 温州萎縮病(SDV)、カンキツモザイク病(CiMV)

・土壌伝染するため、発病園では発病樹と健全樹の境界に溝を掘って遮断し、拡大を防止する。
・防風樹としてのサンゴジュで保毒が確認されているので、植栽を避ける。

③ ステムピッティング病(CTV)、かいようこ斑病(CTV)、ハッサク萎縮病(CTV)

・ミカンクロアブラムシ、ワタアブラムシによって媒介されるため、アブラムシ類の防除に努める。
・弱毒苗を植栽する。

④ 接木部異常病(ASGV)

・台木部のみが発病するため、ユズ、シークワーシャーを根接ぎする。

⑤ エクソコーティス病(CEVd)

・器具伝染するため、ハサミ・ノコギリ等を消毒して用いる。消毒は、塩素系漂白剤(次亜塩素酸ナトリウム含有)の原液～50%液を作成し、この液にハサミ等の器具を数秒間浸漬する。器具は水洗いし、紙で拭き取り使用する。
・台木部のみが発病するため、ユズ、シークワーシャーを根接ぎする。

⑥その他ウイロイド(CVd-os、CVdⅠ-Lss、CVdⅡ、CVdⅢ、CVdⅣ、CBLVd)

・器具伝染するため、ハサミ・ノコギリ等を消毒して用いる。消毒は、塩素系漂白剤(次亜塩素酸ナトリウム含有)の原液～50%液を作成し、この液にハサミ等の器具を数秒間浸漬する。器具は水洗いし、紙で拭き取り使用する。

(8) カンキツ黒点病の防除上の留意点

新品種が本病に弱いため防除に関する試験の要望が高かった。近年本病の防除に関する試験を体系的に行ったところ、以下に示す3点の知見が得られたので参考にして今後の防除に反映していただきたい。

①散布間隔

マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は累積降水量が200～250㎜に達した時、または散布後1ヶ月を経過した時である。しかし、近年黒点病に弱い新品種が多くなり、前述の散布間隔では黒点病の発生が抑えきれない事例が認められる。そこで、新品種の中で本病にもっとも弱い‘せとか’について散布間隔を検討した結果、マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は累積降水量150～180㎜または散布後約25日と考えられた。‘せとか’以外の黒点病に弱い品種(河内晩柑、清見、天草等)についても散布間隔を短くする必要がある。

②樹体が濡れた状態での散布による防除効果

樹体が濡れた状態(雨上がり直後)と乾いた状態でマンゼブ剤を散布した場合、樹体が濡れた状態では乾いた状態散布に比べて初期の薬剤付着が劣り、防除効果も約1割程度劣る。

このため、雨上がり直後の樹体が濡れた状態での散布は避け、樹体が乾いてから散布を行う。やむを得ず濡れた状態で散布した場合は、次回散布を早める必要がある。また、散布直後の降雨は薬剤が流亡するため、再散布の必要がある。

③マンゼブ剤と殺虫剤の混用による防除効果

マンゼブ剤と殺虫剤を混用すると防除効果が変化することが指摘されているが、混用による防除効果を体系的に検討した事例は少なかった。このため、カンキツに登録のある殺虫剤との混用による防除効果の変化を検討した結果、フロアブルとの混用では防除効果が単用に比べ同等から上昇し、乳剤との混用では防除効果がやや減少し、水溶剤および水和剤との混用では防除効果が10～20%減少した。防除効果から考えるとマンゼブ剤の混用相手としてフロアブルがもっとも良く、水和剤がもっとも悪いことが推察された。しかし、顕著な効果を示す殺虫剤が水和剤のみの場合は、次回散布を早めること等で対応する。また、若干防除効果が落ちる乳剤との混用では薬害発生事例が水和剤混用より多いので、その点は注意が必要である。

（９） ミカンバエの防除上の留意点

ミカンバエは、かんきつ類だけに寄生するハエ目ミバエ科の仲間で、日本の在来種である。適正な栽培管理や薬剤防除を産地ぐるみで確実に実施すれば、防除は十分可能な害虫である。但し、本種の被害で最も留意すべき点は、収穫時にも幼虫が果実内部に腐敗を伴わず寄生し続け、消費段階においては外観上、非寄生果と見分けがつかないことである。このため、健全果に寄生果が１果でも混入すると、選別は困難となり、産地のイメージダウンに繋がってしまう。これらの理由から、本種の発生生態を十分理解した上で、撲滅を目指した的確な防除対応が必要とされる。

１．形態

図１に示すとおり、卵は、白色楕円形であり、１齢幼虫は、乳白色で大きさ 1.3～3.5mm、２齢幼虫は、乳白色で 3.4～8mm、３齢幼虫は黄白色で 5～15.5mm。蛹は淡黄色～黄褐色の楕円形を示す。成虫は、黄褐色であり、雌は腹部に産卵管を持つ。

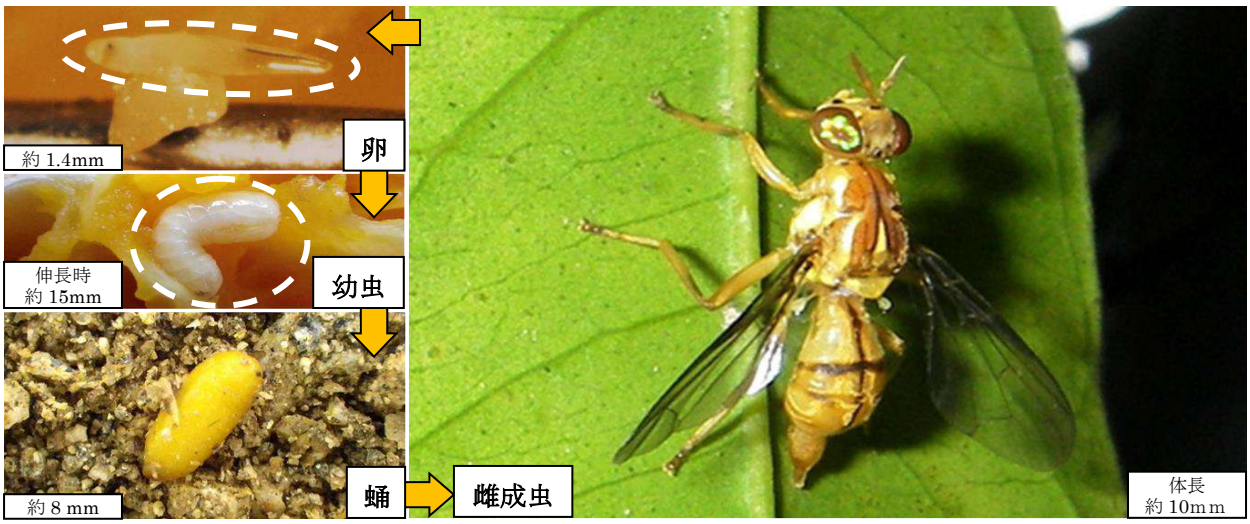


図１　ミカンバエの形態

２．発生生態

・年間のステージ別の発生経過は、図２を参照。
・寄主（被害）はかんきつ類に限られる。被害の多い品種は、果皮の薄い温州みかんやコミカン、ポンカン、キンカン等である。
・産卵期の７～９月に果皮の厚い品種（伊予柑、清見、甘夏、八朔、レモン等）では、じょうのう内まで本虫の産卵管（約 4.0mm）が届かず、産卵されてもうまく育たないとされている。

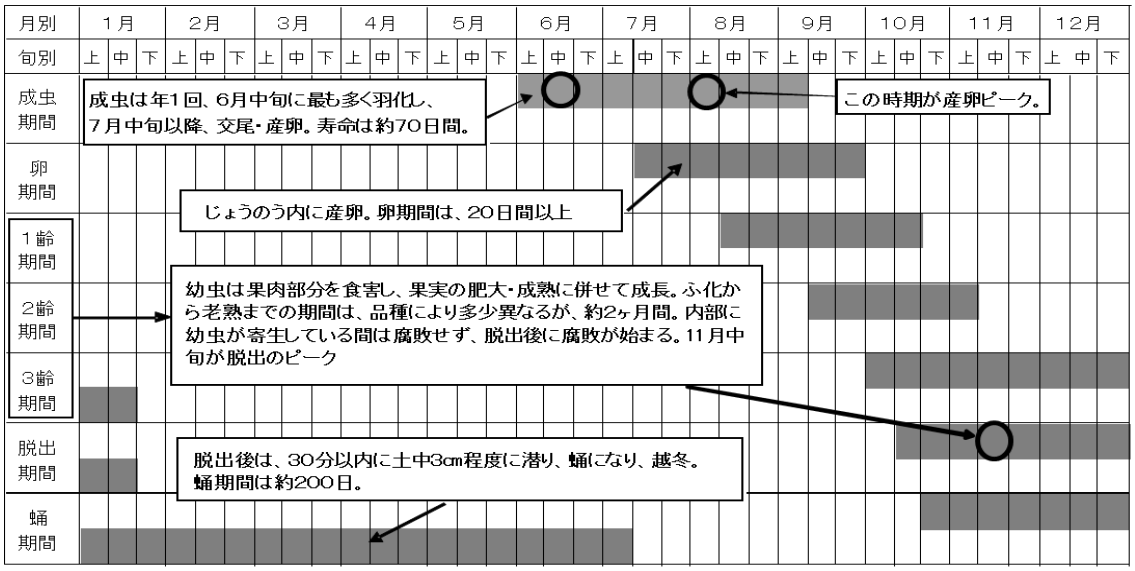


図２　ミカンバエのステージ別の年間発生経過

大分柑試研究報告（深井，1958）の原図を参考に作成。
網掛け部分は、発生時期を示す。

３．園地における被害果の見分け方

・日当たりの悪い箇所の果実に産卵が多く、産卵直後の８月中･下旬は、産卵痕の周りがやや黄色くなる（図３）。
・被害果は健全果に比べ、ヘタ周りや産卵痕を中心に約１～２週間早く異常着色し、落果し易くなる（図５）。
・内部の食害部分は、変色を伴わず空洞となる（図６）。
・被害果の外観（図５）や落果し易い点は、カメムシ類による被害果と見分けがつきにくい。このため、内部（断面）を観察し、ミカンバエによる被害果の特徴（図６）となる幼虫の食害による果肉の部分消失や寄生により被害を見分ける。
・樹上で被害が進むと、果面に２～３mm の脱出孔を確認できる場合がある（図７）。

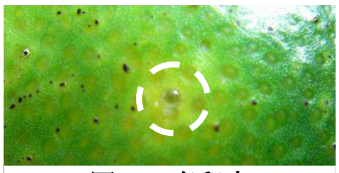


図３　産卵痕

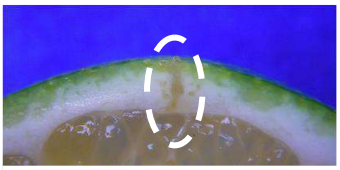


図４　産卵痕断面

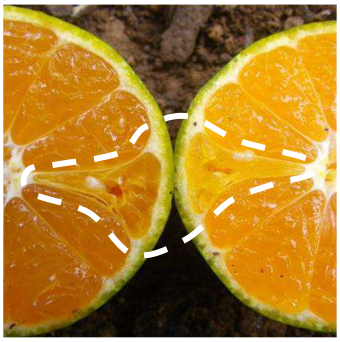


図６　被害果の断面

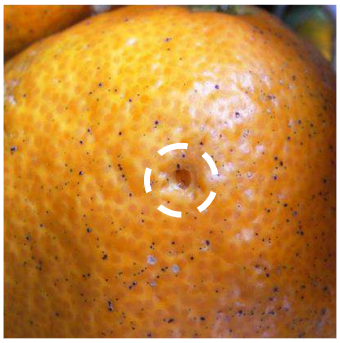


図７　被害果の脱出孔



図５　被害果（被害果では異常着色が目立つ）

４．防除法

１）耕種的防除法

園内外の栽培管理を見直し、本虫の発生しにくい環境の整備

・放任園は本種の発生源になるため、伐採を徹底する。
・収穫期に本種の発生を認めた場合は、全果実を収穫し、袋に詰める等適切に処分する。
・先述のような被害発生園で、栽培をやめる場合（放任園化）は、成虫分散防止のため、必ず「おとり樹」を数本残して伐採し、翌年の産卵後の８月下旬に、それら「おとり樹」を伐採する。
・成虫は直射日光を嫌うため、園周縁の日当たりの悪い樹はできる限り伐採する。
・防風垣（イヌマキやスギ等）は定期的に刈り込み、園の日当たりを良くする。
・樹の剪定や間伐を行い、日当たりに加え防除等の作業性も良くする。
・適正な摘果を行い、薬液のかかりにくい果実を減らす。

２）薬剤防除法

本虫の発生生態に応じた適期・適剤散布の励行

・発生地域では、６～８月に、計４回の防除が必須。
・６、７月は、特に前年発生園で、成虫分散防止（周辺の園主に迷惑をかけない）のための防除時期である。土中から成虫が羽化してくる６月下旬に１回目を散布し、他園に分散・産卵開始する７月中旬に２回目を散布する。
・８月は、交尾・産卵後の被害防止（自園の被害を少なくする）のための防除である。産卵ピークである８月前半に３回目を散布し、産卵がほぼ終了する８月後半に４回目を散布する。
・薬剤散布は薬液が果実全体にかかるよう、できる限り２方向から丁寧に行う。
・次ページに示す「ミカンバエ発生地域でのミカンバエ撲滅に向けたチェックシート」を参考にして地域ぐるみの防除対応を励行する。

＜ミカンバエ発生地域でのミカンバエ撲滅に向けたチェックシート＞

１．園内外の環境や栽培条件の見直しや虫の発生しにくい環境の整備

□ 園周辺に**放任園**がある場合は、**虫の発生源になる**ので、**できる限り伐採**していますか。

□ 成虫は**直射日光を嫌い**ます。園周縁の**日当たりの悪い樹**は**できる限り伐採**していますか。

□ **防風垣**（イヌマキやスギ等）は定期的に**刈り込み、日当たりの良い園に**していますか。

□ 樹の**剪定**や**間伐**を行い、**日当たりに加え防除**等の**作業性も良く**していますか。

□ **適正な剪定・摘果**を行い、薬剤の**散布ムラを減らしていますか**。

□ **薬剤散布は**薬液が**果実全面にかかるよう、できる限り２方向から**丁寧に行っていますか。

２．適期の適剤散布（６～８月の間、計４回の防除が必須）

特に、前年、虫が発生した園では、６・７月は成虫分散防止のための防除時期です。周辺の園主に迷惑をかけないためにも必ず実施しましょう。

□ **６月上中旬**に土から**成虫が出てきます**。この時期に決められた薬剤を散布していますか。

□ **７月中旬**以降、産卵を始めます。この時期に決められた薬剤を散布していますか。

８月は果実被害を減らすための防除時期です。
自園の被害をなくすために必ず実施しましょう。

□ **７月中旬以降、産卵を始めます。８月前半**に決められた薬剤を散布していますか。

□ **８月後半**には、ほぼ**産卵が終了**します。この時期に決められた薬剤を散布していますか。

以上の１０項目について目的をきちんと理解した上で、適切に実施しましょう！！

(10) キウイフルーツかいよう病の防除法

(1) 耕種的防除

①発生園地における伐採基準

被害程度	具体的症状	伐採方針
・甚大な症状の場合（被害程度３） ・園地全体の保菌が濃厚で、薬剤散布だけでは対応が困難な場合 **（農家と JA 団体等が協議）**	・細菌液漏出等のかいよう症状や樹体の枯死が認められる場合 ・資材等からの感染の可能性が強く疑われる場合	園地全伐採 農家の同意前提 （・抜根を基本とする）
・一部樹体の主枝・主幹での発生であり、周辺樹の管理は薬剤散布で対応可能と認められる場合（被害程度２高） **（農家と JA 団体等が協議）**	・主幹又は殆どの主枝からの樹液流出等のかいよう症状が認められる場合	当該樹のみ伐採 農家の同意前提 （・抜根を基本とする）
・一部樹体の主幹以外での発生であり、薬剤散布で対応可能と認められる場合（被害程度２低） **（農家と JA 団体等が協議）**	・一部の主枝からの樹液流出等のかいよう症状が認められる場合	部分切除 農家の同意前提 （・発生が認められた主枝の基部で切除）
・発生程度が上記以外の場合（被害程度１） ・園地の一部に発生が見られ、薬剤散布で対応可能と認められる場合 **（農家と JA 団体等が協議）**	・枝枯れ、発病葉などの症状が散見される場合	部分切除 農家の同意前提 （・発病枝又は結果母枝の基部で切除）

※黄色・赤色系品種では、部分切除後の発病調査を特に念入りに行う。

注）被害程度１　：枝枯れ、葉の褐色斑点などが散見。
　　被害程度２低　：一部の主枝からの樹液流出。
　　被害程度２高　：主幹または殆どの主枝からの樹液流出。
　　被害程度３　：園地全体での保菌が濃厚であり、多くの発病樹がみられる。

②園地見回りの徹底による早期発見と部分伐採の繰り返しによる防除方法

園地見回りで疑わしい症状を発見したら、被害の拡大を防ぐため、速やかに発病程度別の対応をとる。対応後は経過観察し、発病が再確認された際は同じ作業を繰り返す。

（切り口はトップジンMペーストを塗布するか、資材で覆う。
伐採した枝や葉は細菌飛散防止のために適切に処理する。）

③防風施設及び雨除け施設の設置

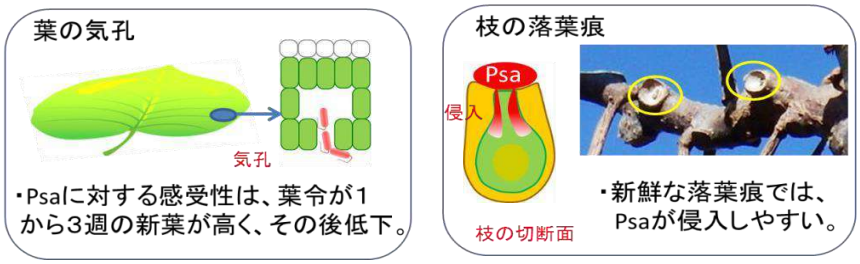
感染拡大を防止するため、防風施設及び雨除け施設を設置する。

(2) 薬剤防除（予防）（化学的防除）

登録農薬には銅剤や抗生物質剤などがあり、下記のとおり薬剤を定期的に散布することで感染防止を図る（基幹防除）。発病程度が大きいと十分な抑制効果を得られないことがあるため、耕種的防除との併用が重要になる。基幹防除をしっかりと行い、強風や降雹等、樹体が付傷する（した）場合には追加の薬剤散布を行う（応急防除）。なお、梅雨明け以降、気温の高い夏季の薬剤防除は不要である。

病原菌の主な侵入部位（保護すべき部位）

・自然開口部



・傷　口



①収穫直後から発芽前までの休眠期

基幹防除回数：収穫後（11～12 月）に１回、剪定後（１～２月）に１回、発芽前（３月上旬～中旬）に１回。

ＩＣボルドー66Ｄの 50 倍、コサイド 3000 の 2,000 倍（収穫後～発芽前）、カスミンボルドー500 倍・カッパーシン水和剤 500 倍（休眠期）を、収穫後、落葉後、剪定前後、発芽前に加え、強風や降雹等により樹体の損傷が認められた際などに散布する。

②発芽後叢生期（新梢長約 10cm）まで

基幹防除回数：４月上旬～中旬に１回。

カスミンボルドー1,000 倍、カッパーシン水和剤 1,000 倍又はコサイド 3000 の 2,000 倍を散布する（各薬剤散布時には薬害軽減のため炭酸カルシウム剤 200 倍を加用）。

③開花前

基幹防除回数：４月下旬～５月中旬に１回。

コサイド 3000 の 2,000 倍を散布する（薬害軽減のため炭酸カルシウム剤 200 倍を加用）。

④開花後

基幹防除回数：５月下旬以降に１回。

コサイド 3000 の 2,000 倍（使用時期：収穫後～果実肥大期、薬害軽減のため炭酸カルシウム剤 200 倍を加用）、アグリマイシン-100 の 1,000 倍（使用時期：落花期まで）、アグレプト水和剤 1,000 倍（使用時期：収穫 90 日前まで）、マイシン 20 水和剤（使用時期：収穫 90 日前まで）又はカスミン液剤 400 倍（使用時期：収穫 90 日前まで）などを散布する。耐性菌出現の恐れがあるため、同一 FRAC コードの抗生物質剤の連用は避ける。

以上は各時期の基本となる防除回数（合計６回）であるため、気象条件・前年の発生状況・地域の防除暦等を考慮して散布回数を適宜追加する。

※褐色の樹液は、凍害でも漏出することがある。

(11) 果樹園除草剤等使用法

区分	農薬名	一般名	毒性 人畜	毒性 水産（注）	使用時期(収穫前日数)／本剤の使用回数 かんきつ	かき	ぶどう	もも	くり	なし	うめ	キウイフルーツ	びわ	いちじく	すもも	果樹類
土壌処理剤・茎葉処理剤	カーメックスD	DCMU	普	△	-/1	-/1		-/1			-/1					
	ダイロンゾル	DCMU	普	△	60/1		60/1	90/1								
	ゾーバー	DCMU・ターバシル	普	△	60/1											
	シンバー	ターバシル	普	△	7/2											
土壌処理剤	トレファノサイド乳剤	トリフルラリン	普	△			30/2	30/2		30/2						
茎葉処理剤	サンダーボルト００７	グリホサートイソプロピルアミン塩・ピラフルフェンエチル	普	×	7/3											7/3（かんきつ、パイナップルを除く）
	サンフーロン液剤	グリホサートイソプロピルアミン塩	普	×	7/3											7/3（かんきつを除く）
	クサクリーン液剤	グリホサートイソプロピルアミン塩	普	×	7/3											7/3（かんきつ、パイナップルを除く）
	タッチダウンｉＱ	グリホサートカリウム塩	普	×	5/3											5/3（かんきつを除く）
	バスタ液剤	グルホシネート	普	△	21/3	前日/3	前日/3	前日/3	30/3	前日/3	前日/3	21/3	21/3	前日/3	前日/3	
	ザクサ液剤	グルホシネートPナトリウム塩	普	△	21/3				30/3			21/3	21/3			前日/3（かんきつ、りんご、びわ、いちょう(種子)、くり、キウイフルーツ、食用桑（果実）、さんしょう（果実）を除く）
	ラウンドアップマックスロード	グリホサートカリウム塩	普	×	7/5											7/3（かんきつを除く）
	レグロックス	ジクワット	劇	△												30/5

注 (1)除草剤は樹体にかからないように注意する。
(2)成分の総使用回数に留意する。

1)かんきつ類

時期	対象雑草	薬剤名	10a当たり 薬量	10a当たり 散布液量	使用上の注意
２月～３月	１年生雑草（カモジグサ、イヌビエ、メヒシバ、ハコベ、イヌタデ、エノコログサ）	バスタ液剤	300～500mℓ	少量散布 30～40ℓ 通常散布 100～150ℓ	少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。
		ザクサ液剤	300～500mℓ	100～150ℓ	
		ダイロンゾル	200～400mℓ	100ℓ	
４月～６月	１年生雑草（ヤエムグラ、カラスノエンドウ、メヒシバ、イヌノフグリ、ホトケノザ、イヌビエ）	ラウンドアップマックスロード	200～500mℓ	少量散布 5～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	少量散布の場合は専用ノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。
		サンフーロン液剤	250～500mℓ	少量散布 25～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	
		クサクリーン液剤			
		タッチダウンｉＱ		10～100ℓ	
		バスタ液剤	300～500mℓ	少量散布 30～40ℓ 通常散布 100～150ℓ	(1)少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。 (2)雑草生育期で草丈30cm以下が効果は高い。
		ザクサ液剤	300～500mℓ	100～150ℓ	
		サンダーボルト００７	400～1000mℓ	100ℓ	
	多年生雑草（スギナ、ヨモギ、ギシギシ、ヤブカラシ）	ラウンドアップマックスロード	500～1,000mℓ	少量散布 5～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	(1) 少量散布の場合は専用ノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。 (2)スギナを対象として用いる場合は、薬量1,500～2,000mℓ（散布液量は左表のとおり）とする。
		サンフーロン液剤		少量散布 25～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	(1)少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。 (2)スギナを対象としてタッチダウンｉＱを用いる場合は、薬量を1,500～2,000mℓ（散布液量25～50ℓ）とする。
		タッチダウンｉＱ	500～1,000mℓ	10～100ℓ	
		バスタ液剤	500～1,000mℓ	少量散布 30～40ℓ 通常散布 100～150ℓ	
		ザクサ液剤	500～1,000mℓ	100～150ℓ	
		サンダーボルト００７	400～1000mℓ	100ℓ	

時期	対象雑草	薬剤名	10a当たり 薬量	10a当たり 散布液量	使用上の注意
6月下旬～7月上旬	1年生雑草 メヒシバ イヌビエ エノコログサ	カーメックスD	200～400g	70～100ℓ	
		ゾーバー	300g	200～300ℓ	(1) 非イオン系展着剤を加用する。 (2) 松、杉、檜等の防風垣の近くでは使用しない。
		シンバー	200～300g	100～300ℓ	苗木生産ほ場では使用しない。
7月上旬～中旬	1年生雑草 メヒシバ イヌビエ イヌタデ エノコログサ アレチノギク スベリヒユ	バスタ液剤	300～500mℓ	少量散布 30～40ℓ 通常散布 100～150ℓ	(1)30cm以下の草丈で効果が高い。 (2)少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。
		ザクサ液剤	300～500mℓ	100～150ℓ	
		サンダーボルト００７	400～1000mℓ	100ℓ	
7月～10月(生育盛期)	1年生雑草 メヒシバ エノコログサ イヌビエ イヌタデ スベリヒユ	ラウンドアップ マックスロード	200～500mℓ	少量散布 5～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	(1) 多年生のものは、薬量、散布時期を変えて部分的に処理する。 (2) 防風林、一般作物、かんきつに薬液がかからないように注意する。 (3)崩壊の恐れがある畦畔には使用しない。 (4)一定の期間を経過してから効果が現れるため、全体が枯死するまで刈り取らない。 (5) 少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。
		サンフーロン液剤	250～500mℓ	少量散布 25～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	
		クサクリーン液剤			
		タッチダウンｉQ	250～500mℓ	10～100ℓ	
7月～10月(生育盛期)～(生育終期)	多年生雑草 チガヤ カラムシ ギシギシ ハマスゲ ヨモギ カタバミ類 ススキ	ラウンドアップ マックスロード	500～1,000mℓ	少量散布 5～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	
		サンフーロン液剤		少量散布 25～50ℓ 通常散布 50～100ℓ	
		タッチダウンｉQ	500～1,000mℓ	10～100ℓ	

(注) (1) 年間を通じ、除草剤のみに頼ることを極力避けることが望ましい。そのために春は中耕による除草を行い、使用回数を減らすよう配慮する。
(2) 土壌処理剤は、連用を避ける。

2)落葉果樹

時期	対象雑草	薬剤名	10ａ当たり 薬量	10ａ当たり 散布液量	使用上の注意
4月下旬～5月下旬	1年生雑草 ツユクサ ハコベ ヤエムグラ	レグロックス	300～500mℓ	70～100ℓ	(1) 広葉雑草に効果が高い。 (2) 樹体にかからないようにする。
	1年生雑草 カモジグサ スズメノテッポウ カラスノエンドウ オオイヌノフグリ イヌビエ	バスタ液剤	300～500mℓ	100～150ℓ	(1) 草丈30cm以下の処理効果が高い。 (2) 樹体にかからないようにする。 (3) バスタ液剤はイネ科に対しては効果がやや劣る。 (4) バスタ液剤は、かき、ぶどう、もも、くり、なし、小粒核果類、ﾌﾞﾙｰﾍﾞﾘｰ、ｷｳｲﾌﾙｰﾂ、ﾈｸﾀﾘﾝ、いちじく、おうとう、りんごの使用に限る。 (5) トレファノサイド乳剤は雑草発生前に土壌表面散布する。 (6) トレファノサイド乳剤は、ぶどう、もも、なし、りんごの使用に限る。
		ザクサ液剤	300～500mℓ	100～150ℓ	
		トレファノサイド乳剤	300～400mℓ	100ℓ	
		サンダーボルト００７	400～1000mℓ	100ℓ	
7月上旬～中旬	1年生雑草 メヒシバ エノコログサ イヌビエ イヌタデ	同上 （４月下旬～５月下旬に準じる）			
7月～10月(生育盛期)	1年生雑草 メヒシバ エノコログサ イヌビエ イヌタデ スベリヒユ	ラウンドアップ マックスロード	200～500mℓ	少量散布　25～50ℓ 通常散布　50～100ℓ	(1) 樹体にかからないように注意する (2) 散布は低圧で、茎葉から薬液が流れ落ちない程度にすること。 (3) 多年生のものは、薬量、散布時期を変えて部分的に処理すること。 (4) 防風林、一般作物に薬液がかからないように注意する。 (5) 崩壊の恐れがある畦畔には使用しない。 (6) 一定の期間を経過してから効果が現れるため、全体が枯死するまで刈り取らない。 (7) 少量散布の場合は専用のノズルを用い、雑草木の葉面に均一に散布する。 (8) トレファノサイド乳剤は雑草発生前に土壌表面散布する。 (9) トレファノサイド乳剤は、ぶどう、もも、なし、りんごの使用に限る。
		サンフーロン液剤	250～500mℓ	50～100ℓ	
		タッチダウンｉQ	250～500mℓ	25～100ℓ	
		トレファノサイド乳剤	300～400mℓ	100ℓ	
		サンダーボルト００７	400～1000mℓ	100ℓ	
7月～10月(生育盛期)～(生育終期)	多年生雑草 チガヤ カラムシ ギシギシ ハマスゲ ヨモギ カタバミ類 ススキ シロツメクサ	ラウンドアップ マックスロード	500～1,000mℓ	少量散布　25～50ℓ 通常散布　50～100ℓ	
		サンフーロン液剤	500～1,000mℓ	50～100ℓ	
		タッチダウンｉQ	500～1,000mℓ	25～100ℓ	
		サンダーボルト００７	400～1000mℓ	100ℓ	

(12) 植物成長調整剤使用基準

①温州みかん

使用目的	使用薬剤と濃度	毒性 人畜	毒性 水産(注)	処理時期	注意事項
全摘果	フィガロン乳剤 1,000～2,000倍 ＋エスレル10 2,000～8,000倍	普	○	満開10～20日後の生理落果最盛期	フィガロン乳剤使用上の注意事項 (1) ボルドー液などのアルカリ製剤などとの混用、及び近接散布は避けること。 (2) 薬液が葉先からしたたり始める程度にむらなく散布すること。 (3) 散布直後に降雨があった場合でも、再散布はしないこと。 (4) ７～８年生以上の成木に使用し、樹勢の弱い樹には使用しないこと。 (5) 全摘果においてエスレルを混用する場合、旧葉が落葉することがある。 (6) 連用により葉色の退化など樹勢の低下が認められた園では、連年使用を止めること。 (7) 使用回数4回以内（1,000倍希釈散布は２回以内） (8) 夏秋梢伸長抑制においては、1回目に1,000倍～2,000倍、2回目を2,000倍散布とする。 ターム水溶剤使用上の注意事項 (1) フィガロンの(1)(3)(4)に準じる。 (2) 摘果目的で使用する場合は合計で1回とし、2回使用しないこと。 (3) 全摘果したい場合は樹全体に、部分的に全摘果したい場合は摘果したい部分のみに散布すること。 (4) 間引き摘果に使用する場合、薬液が葉先から滴らない程度にむらなく、散布すること。 (5) 使用回数4回以内（一次生理落果発生期は1回以内、二次生理落果発生期後は3回以内）
	普	○			
	フィガロン乳剤 1,000倍	普	○		
	ターム水溶剤 500～1,000倍	普	○		
間引き摘果	フィガロン乳剤 1,000～2,000倍	普	○	満開20～50日後	
	ターム水溶剤 1,000～1,500倍	普	○	満開20～40日後	
熟期促進 間引き摘果と兼ねて使用する場合	フィガロン乳剤 第１回目 1,000～2,000倍 第２回目 2,000～3,000倍	普	○	第１回 間引き摘果に準ずる 第２回 満開70～80日後 （但し、収穫14日前まで）	
熟期促進 熟期促進だけに使用する場合	フィガロン乳剤 2,000～3,000倍	普	○	第１回目 満開50～90日後 第２回目 満開70～110日後 （但し、収穫14日前まで）	
浮皮軽減		普	○	第１回目 蛍尻期 （１～２分着色期） 第２回目 蛍尻期の２週間後 （但し、収穫７日前まで）	
夏秋梢伸長抑制	フィガロン乳剤 1,000～2,000倍	普	○	新梢萌芽期 １～２回 （但し、収穫14日前まで）	
	ターム水溶剤 1,000～2,000倍	普	○	新梢萌芽期 ２～３回 （但し、収穫前日まで）	
新梢発生促進	ビーエー液剤 100～200倍	普	○	萌芽直前～萌芽期 １回 (加温ハウス栽培では収穫後)	(1) 露地栽培、加温ハウス栽培緑枝部へ散布。
着花促進	ビーエー液剤 100～400倍	普	○	加温直後 １回	
浮皮軽減 予措効果	クレフノン 100倍	普	○	収穫１ヶ月前から収穫直前までの間に１回散布	
浮皮軽減	セルバイン 300倍	普	○	８月下旬から20～30日間隔で２～３回散布（生理落果終了から着色期まで）	
浮皮軽減	ジベレリン剤1～2ppm とジャスモメート液剤2,000倍混用	普	△	収穫予定日の３ヶ月前 １回 （但し、収穫45日前まで）	(1) 着色遅延と果頂部に緑斑が残る場合があり、高濃度ほどその傾向は高まる。 (2) 9月上旬散布、12月上旬収穫を前提とする。 (3)浮皮の発生しやすい品種や園地、収穫が遅れる園地等での使用とする。
		普	○		

②中晩柑類

使用目的	使用薬剤と濃度	毒性 人畜	毒性 水産(注)	処理時期	対象品種名	注意事項
摘果	ターム水溶剤 1,000～1,500倍	普	○	満開10～50日後 １回	天草、伊予柑、清見、せとか、はるみ	(1) 温州みかんの(1)～(3)に準ずる。
熟期促進	フィガロン乳剤 2,000～3,000倍	普	○	第１回目 満開50～90日後 第２回目 満開70～110日後 （但し、収穫21日前まで）	伊予柑 ネーブル	(1) 温州みかんに準ずる。
へた落ち防止	マデックＥＷ 2,000～3,000倍	普	○	収穫開始予定日の20～10日前 １回	伊予柑 甘夏 ネーブル 八朔	(1) 伊予柑を長期貯蔵する場合は2,000倍で使用する。 (2) 他の薬剤との混用を避ける。 (3) 着色が４分以上になってから散布するのが望ましい。
後期落果防止	マデックＥＷ 2,000～3,000倍	普	○	着色期～収穫20日前まで ２回以内	日向夏 河内晩柑	(1)他の薬剤との混用は避ける。
	ターム水溶剤 1,000倍	普	○	着色期～収穫14日前まで １～２回	河内晩柑	
花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン剤 25～50ppm	普	△	収穫直後～収穫約１ヶ月後 １回	伊予柑 不知火	(1) 着花過多が予想される樹、及び着花を少なくしたい樹や枝に、薬液が葉先から落ちない程度に散布する。 (2) マシン油乳剤の散布前に使用する方が効果が高い。 (3) 果実がある場合は、採収後に散布すること。 (4) 寒害の起こりやすい園で使用しない。
水腐れ軽減	ジベレリン剤 0.5～1ppm	普	△	着色終期但し収穫7日前まで １回	不知火、清見 はるみ、カラ 愛媛果試第28号 愛媛果試第48号	
	ジベレリン剤 0.5ppm			着色始期～４分着色期まで 但し収穫21日前まで １回	ぽんかん	

注　場内の試験において効果が認められた使用目的及び品種のみを記載。

③ぶどう

使用目的	対象品種名	使用薬剤と濃度	毒性 人畜	毒性 水産(注)	処理時期、使用回数、使用方法	注意事項
無種子化 果粒肥大促進 （２回処理）	デラウエア ヒムロッドシードレスを除く2倍体米国系品種 【無核栽培】	ジベレリン剤 第１回目　100ppm 第２回目　75～100ppm	普	△	第1回 満開予定日約14日前 1回 （花房浸漬） 第2回 満開約10日後 1回 （果房浸漬又は果房散布）	(1)樹勢が弱い樹では有核粒が混入するので、樹勢維持に努める。 (2)処理後8時間以内に降雨があった場合は再処理する。 (3)2倍体米国系品種は、マスカットベリーA、アーリースチューベン、キャンベルアーリー等。 (4)2倍体欧州系品種は、シャインマスカット、ロザリオビアンコ、瀬戸ジャイアンツ、マスカットオブアレキサンドリア、ネオマスカット、甲斐路、甲州等。 (5)巨峰系4倍体品種は、巨峰、ピオーネ、安芸クイーン、翠峰、サニールージュ、藤稔、高妻、白峰、ゴルビー、多摩ゆたか、紫玉、黒王、ハイベリー等。
	2倍体欧州系品種 【無核栽培】	ジベレリン剤 第１回目　25ppm 第２回目　25ppm	普	△	第1回 満開時～満開3日後 1回 （花房浸漬） 第2回 満開10～15日後 1回 （果房浸漬）	
	サニールージュを除く巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	ジベレリン剤 第１回目　12.5～25ppm 第２回目　25ppm	普	△	第1回 満開時～満開3日後 1回 （花房浸漬） 第2回 満開10～15日後 1回 （果房浸漬）	
無種子化 果粒肥大促進 （１回処理）	2倍体欧州系品種 サニールージュを除く巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	ジベレリン剤　25ppm 加用 フルメット液剤　10ppm	普	△	満開3～5日後（落花期）　1回 （花房浸漬）	(1)樹勢の弱い樹への処理は行わない。 (2)2回目のホルモン処理は行わない。 (3)無種子化を安定させるため開花前にストレプトマイシン剤を処理する。
着粒安定 果粒肥大促進	ｷﾝｸﾞﾃﾞﾗ、ﾊﾆｰｼｰﾄﾞﾚｽ、BKｼｰﾄﾞﾚｽを除く3倍体品種	ジベレリン剤 第１回目　25～50ppm 第２回目　25～50ppm	普	△	第1回 満開時～満開3日後 1回 （花房浸漬） 第2回 満開10～15日後 1回 （果房浸漬）	(1)3倍体品種は、キングデラ、サマーブラック、ナガノパープル等。
果房伸長促進	2倍体欧州系品種 ｷﾝｸﾞﾃﾞﾗ、ﾊﾆｰｼｰﾄﾞﾚｽ、BKｼｰﾄﾞﾚｽを除く3倍体品種 サニールージュを除く巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	ジベレリン剤　3～5ppm 【使用液量30～100L/10a】	普	△	展葉3～5枚時　1回 （花房散布）	(1)摘粒の省力化を目的とする。 (2)花房を狙って散布する。
花穂発育促進	2倍体欧州系品種 サニールージュを除く巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	フルメット液剤 1～2ppm	普	△	展葉6～8枚時　1回 （花房散布）	(1)果粒肥大の劣る若木において果粒肥大を促進させる効果がある。 (2)花房に散布する。
着粒安定	2倍体欧州系品種 3倍体品種 サニールージュを除く巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	フルメット液剤 2～5ppm	普	△	①開花始め～満開前　1回 （花房浸漬） 又は、 ②満開時～満開3日後　1回 （ジベレリンに加用し花房浸漬）	(1)①の場合は、ジベレリン第1回目及び第2回目処理は慣行処理とする。②の場合は、第2回目処理は慣行処理とする。
果粒肥大促進	デラウエア 【無核栽培】	フルメット液剤 3～5ppm	普	△	満開約10日後　1回 （ジベレリンに加用し果房浸漬）	(1)デラウエア、2倍体米国系品種、2倍体欧州系品種、3倍体品種に処理する場合は、ジベレリン第1回目処理は慣行とする。 (2)巨峰系4倍体品種へ処理する場合は、満開時～満開3日後のジベレリンによる無種子化処理は慣行とする。
	2倍体米国系品種 【無核栽培】	フルメット液剤 5～10ppm	普	△	満開約10日後　1回 （ジベレリンに加用し果房浸漬）	
	2倍体欧州系品種 【無核栽培】	フルメット液剤 2～10ppm	普	△	満開10～15日後　1回 （ジベレリンに加用し果房浸漬）	
		フルメット液剤 5～10ppm	普	△	満開10～15日後　1回 （果房浸漬）	
	3倍体品種 【無核栽培】	フルメット液剤 5～10ppm	普	△	満開10～15日後　1回 （ジベレリンに加用し果房浸漬）	
	サニールージュを除く巨峰系4倍体品種 【無核栽培】	フルメット液剤 5～10ppm	普	△	満開10～15日後　1回 （ジベレリンに加用又はフルメット単用で果房浸漬）	
果粒肥大促進	2倍体米国系品種 マスカット・オブ・アレキサンドリアを除く2倍体欧州系品種 巨峰系4倍体品種 【有核栽培】	フルメット液剤 5～10ppm	普	△	満開15～20日後　1回 （果房浸漬）	
無種子化	ぶどう 【無核栽培】	①アグレプト液剤 1,000倍（200ppm） ②ストマイ液剤20 1,000倍（200ppm）	普	△	①満開予定日の14日前～満開期 1回（散布又は花房散布又は花房浸漬又は第1回目ジベレリン処理と併用） ②満開予定日の14日前～満開期 1回（散布又は花房浸漬又は第1回目ジベレリン処理と併用）	(1)ジベレリンによる無種子化を補助する目的で使用する。 (2)満開期の使用は第1回目ジベレリン処理と併用する。
着色促進	巨峰 ピオーネ	アブサップ液剤 100～200倍 【使用液量2～10mℓ/1果房】	普	○	着色始期～着色開始2週間後　1回 （果房散布）	(1)薬液が果粒に付き過ぎると果面の汚れや果粉の溶脱するおそれがある。 (2)葉に飛散しない様に散布する。

注　(1) ジベレリン剤、フルメット液剤については、降雨により再処理する場合は総使用回数に留意する。

④日本なし

使用目的	使用薬剤と使用量	毒性		処理時期、使用回数、使用方法	注意事項
		人畜	水産(注)		
熟期促進 果実肥大促進	ジベレリンペースト 20～30mg/１果	普	○	満開30～40日後 1回（果梗部塗布）	(1)二十世紀においてゆず肌の発生が多い樹には使用しない。 (2)薬剤が果面に付着すると薬害の原因となる。
新梢伸長促進	ジベレリンペースト 100mg/１枝	普	○	満開予定日10日前～満開40日後 1回（新梢基部塗布）	(1)全花除去した短果枝の新梢基部に塗布する。 (2)薬剤が葉や芽に付着すると薬害の原因となる。

⑤キウイフルーツ

使用目的	使用薬剤と濃度	毒性		処理時期、使用回数､使用方法	注意事項
		人畜	水産(注)		
果実肥大促進	フルメット液剤　1～5ppm	普	△	開花後20～30日　1回 （果実浸漬又は果実散布）	(1)樹勢の弱い樹への使用は避ける。 (2)濃度が高いと果形が乱れる場合があるので低濃度（1～2ppm）での使用が望ましい。
新梢伸長抑制	ターム水溶剤　1,000～2,000倍 300～600ℓ/10a	普	○	新梢伸長期　1回 （立木全面散布又は枝別散布）	(1)本剤は雄木の登録であるため、雌木にかからないよう雄木専用園等で使用する。

⑥かき

使用目的	使用薬剤と使用量	毒性		処理時期、使用回数、使用方法	注意事項
		人畜	水産(注)		
落果防止	ジベレリン剤　50～200ppm 30～100ℓ/10a	普	△	満開10日後　１回 （幼果およびへたに散布）	

5　野　　菜

(1)野菜病害虫防除法

〔1〕きゅうり

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、CMV・WMV・ZYMV・PRSVである。 ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病である。 ○ ZYMV単独、又はCMVとZYMVの重複感染で萎れを生じることがある。 (防除上のポイント) ○ アブラムシ類の防除を徹底する。	(耕種的防除法) ○ 寒冷紗被覆で育苗する。 ○ シルバーポリ及びシルバーテープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。 ○ 抵抗性品種を利用する(ZYMV)。 ○ 発病株を早期に抜き取り、処分する。	(薬剤防除法) ○ ZYMVによる萎れ、果実奇形を防ぐためには、ワクチン(キュービオZY-02)接種苗の定植が有効である(特にハウス抑制栽培)。										
			アブラムシ類防除の項参照										
黄化えそ病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスはMYSVである。 ○ 虫媒(ミナミキイロアザミウマ)伝染するウイルス病である。 (防除上のポイント) ○ ミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。	(耕種的防除法) ○ 寒冷紗被覆で育苗する。 ○ シルバーポリ及びシルバーテープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。 ○ 発病株を早期に抜き取り、処分する。 ○ 圃場内外の除草を徹底する。											
			ミナミキイロアザミウマの項参照										
黄化病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスはBPYV(CuYV)である。 ○ 虫媒(オンシツコナジラミ)伝染するウイルス病である。 (防除上のポイント) ○ オンシツコナジラミの防除を徹底する。	(耕種的防除法) ○ 寒冷紗被覆で育苗する。 ○ シルバーポリ及びシルバーテープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。 ○ 発病株を早期に抜き取り、処分する。 ○ 圃場内外の除草を徹底する。											
			コナジラミ類防除の項参照										
退緑黄化病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスはCCYVである。 ○ 虫媒(タバココナジラミ)伝染するウイルス病である。 (防除上のポイント) ○ タバココナジラミの防除を徹底する。	(耕種的防除法) ○ 寒冷紗被覆で育苗する。 ○ シルバーポリ及びシルバーテープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。 ○ 発病株を早期に抜き取り、処分する。 ○ 圃場内外の除草を徹底する。											
			コナジラミ類防除の項参照										
緑斑モザイク病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、KGMMVである。 ○ 土壌伝染、種子伝染するウイルス病である。 ○ 強い汁液伝染力を持つため、発病株を管理した手、はさみ等を通しての感染も高率でおこる。 ○ クロルピクリンは効果なし。	(耕種的防除法) ○ 本病を対象に種子消毒した種子を使用する。 ○ 床土は無病土を使用する。 ○ 連作は避ける。 ○ 発病株を早期に抜き取り処分する。 ○ 支柱等資材を更新する。 ○ 発病ハウスへの出入は特に注意する。											
斑点細菌病	(発生の特徴) ○ 多湿条件下で多発する。 (防除上のポイント) ○ 予防散布の効果が高い。 ○ 幼苗期は無機銅剤より有機銅剤の方が薬害が少ない。	○ 茎葉の過繁茂を避ける。 ○ 罹病部はすみやかに除去し、圃場外へ持ち出す。	発病前～発病初期		24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							
苗立枯病	(発生の特徴) ○ リゾクトニア属菌によるものが多いが、ピシウム属菌等によっても起こる。	○ 床土は、無病土を使用する。	床土消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			は種後～			苗立枯病の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
菌核病	(発生の特徴) ○ 地表面に落下した菌核で越夏する。 ○ 咲き終わった花弁から発病する。	○ 連作を避け、アブラナ科作物等本病の出やすい作物の後作を避ける。 ○ 発病畑の夏期水田化を行う。 ○ 被害部を早期に除去する。 ○ 換気を図り、マルチを行う。 ○ 開花後の摘花(3～5日後)を行う。	発病前～発病初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	7回以内	普	△	
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7+19	ダイアメリットDF	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,000～1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					17	ピクシオDF	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾗｻﾞﾐﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					52	ミギワ10フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							
立枯性疫病	(発生の特徴) ○ 疫病菌の発育適温は、28～32℃であるが、24℃くらいで多湿のときに発生が多い。6月中旬～7月上旬に最も多く発生する。	○ 連作を避ける。 ○ 高畝とし、排水を図る。 ○ マルチを行い、病原菌のはね上がりを防ぐ。	発病前～発病初期		28	プレビクールN液剤	1:ﾌﾟﾛﾊﾟﾓｶﾙﾌﾞ塩酸塩	400倍	苗床:は種直後 本圃:定植直後及び生育初期(但し、収穫21日前まで)	3回以内	普	○	○ 3ℓ/㎡土壌灌注
						銅剤及び混合剤の項参照 苗立枯病の項参照							
疫病	(発生の特徴) ○ 疫病は24℃くらいで多湿の時、発生が多い。 ○ 浸水した場合や排水の悪いところで発生が多い。 ○ 酸性土壌で発生が多い。	○ 連作を避ける。 ○ 高畝とし、排水を図る。 ○ マルチを行い、病原菌のはね上がりを防ぐ。	作付け前			土壌病害虫防除法の項参照							
			発病前～発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							
炭疽病	(発生の特徴) ○ 露地で発生が多く、6月頃から秋まで発生し、特に降雨の連続したとき被害が大きい。 ○ 窒素過多で発生が多くなる。 (防除上のポイント) ○ 予防散布に重点を置く。	○ 密植を避け、風通しを良くする。 ○ 窒素過多を避ける。 ○ 発病葉・果実は早期に除去する。 ○ 排水を良くする。	発病前～発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	12回以内	普	×	
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	7回以内	普	△	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7+19	ダイアメリットDF	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					52	ミギワ10フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
黒星病	(発生の特徴) ○ 冷涼(17℃くらい)多湿の天候が続くときに多発する。 ○ 施設のビニールが破れていると、その付近のキュウリが低温にあい、発生することがある。 (防除上のポイント) ○ 予防散布に重点を置く。	○ ハウス栽培では換気をよくするなど多湿を防ぐ。 ○ 支柱等資材を消毒又は更新する。 ○ ハウス栽培では発病適温(17℃付近)よりも高い温度で管理する。 ○ 発病葉・果実は早期に除去する。	発病前～発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	12回以内	普	×	
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩 2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					銅剤及び混合剤の項、くん煙剤の項参照								
べと病	(発生の特徴) ○ 相対湿度85%を超えると発病する。 (防除上のポイント) ○ 発病初期の防除に重点を置く。	○ 密植を避け、風通しを良くする。特にハウス栽培では換気を良くし、多湿を防ぐ。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 被害茎葉の処分し、伝染源を残さない。	発病前～発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	12回以内	普	×	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600～800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M3	ジマンダイセンフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	500～800倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600～800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					P7	アリエッティ水和剤	1:ﾎｾﾁﾙ	400～800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 無機銅との近接散布不可
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					21+M5	ドーシャスフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					27+M3	カーゼートPZ水和剤	1:シモキサニル2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					27+M5	ブリザード水和剤	1:シモキサニル2:TPN	1,500～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:シモキサニル2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:シモキサニル2:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					43+40	ジャストフィットフロアブル	1:ﾌﾙｵﾋﾟｺﾘﾄﾞ2:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 蚕に対して影響あり。
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					21+27	ダイナモ顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ2:シモキサニル	2,000～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					40	フェスティバル水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					45+40	ザンプロDMフロアブル	1:ｱﾒﾄｸﾄﾗｼﾞﾝ2:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					22	エトフィンフロアブル	1:ｴﾀﾎﾞｷｻﾑ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					49+M3	ゾーベック エニベル 顆粒水和剤	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					21+49	ゾーベックエンテクタSE	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ2:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					銅剤及び混合剤の項、くん煙剤の項、微生物農薬の項参照								

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
褐斑病	(防除上のポイント) ○ 発病前と発生の極初期の散布に重点を置く。 ○ 降雨前後に重点的に散布する。 ○ ベンゾイミダゾール系薬剤は、県内で広く耐性菌が確認されている。	○ 窒素質肥料の過多を避ける。 ○ 草勢を低下させない肥培管理をする。 ○ 被害残渣の処理を徹底する。	発病前～発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M3	ジマンダイセンフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	500～800倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	12回以内	普	×	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	7回以内	普	△	
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					10+2	スミブレンド水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項、微生物農薬の項参照							
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下) 多湿条件で発生する。 (防除上のポイント) ○ 発病前散布に重点を置く。	○ 花弁・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。	開花期～収穫期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	12回以内	普	×	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000～4,000倍	収穫前日まで	7回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	7回以内	普	△	
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					17+12	ジャストミート顆粒水和剤	1:ﾌｪﾝﾍｷｻﾐﾄﾞ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					17	ピクシオDF	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾗｻﾞﾐﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	
					10+2	スミブレンド水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7+19	ダイアメリットDF	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					52	ミギワ10フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項、くん煙剤の項、微生物農薬の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
つる割病	(発生の特徴) ○ きゅうりつる割病菌は、きゅうりの他、メロン、マクワウリを侵すが、スイカ、トウガンは侵さない。 ○ ユウガオつる割病菌は、カボチャ台木を侵す。	○ 発病株の早期抜き取りを行う。 ○ pHの低い圃場では、定植前に苦土石灰を施用するなどしてpHを高める。 ○ 接木栽培を行う。	床土消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			発病前～発病初期		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	定植前～定植1ヶ月後	3回以内	普	△	○ 1株当り150～300mℓ灌注処理 薬剤選択注意
つる枯病	(発生の特徴) ○ 葉では、縁部分に発生し、枯れた部分に小さな黒粒を多数形成する。	○ 巻きひげ等の残渣を処理する。 ○ 肥切れしないようにする。	発病前～発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M4	オーソサイド水和剤80	1:ｷｬﾌﾟﾀﾝ	600～800倍	収穫前日まで	5回以内	普	×	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンMペースト	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	原液	発病初期	5回以内	普	○	○ 塗布する。幼苗期に薬害が出やすいので注意する。
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
うどんこ病	(発生の特徴) ○ ハウス抑制栽培で被害が大きい。 (防除上のポイント) ○ 発病後は、7～10日間隔で2～3回散布する。 ○ 水和剤は展着剤を加用する。	○ 被害残渣を圃場内に残さない。 ○ 発病した茎葉は、速やかに除去する。 ○ 密植、株の過繁茂を避ける。	発病前～発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	12回以内	普	×	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000～4,000倍	収穫前日まで	7回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	7回以内	普	△	
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
				un	M10	モレスタン水和剤	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				un	M10	パルミノ	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	トリフミン乳剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	4,000～8,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					U6+3	パンチョTF顆粒水和剤	1:ｼﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ2:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					27+M5	ブリザード水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:TPN	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					NC	カリグリーン	1:炭酸水素ｶﾘｳﾑ	800～1,000倍	収穫前日まで	－	普	○	
					NC	ハーモメイト水溶剤	1:炭酸水素ﾅﾄﾘｳﾑ	800～1,000倍	収穫前日まで	－	普	△	
					NC	ハッパ乳剤	1:なたね油	200倍	－	－	普	○	
					U13+9	ショウチノスケフロアブル	1:ﾌﾙﾁｱﾆﾙ2:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					50	プロパティフロアブル	1:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	3,000～4000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7+50	ラミック顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					19	デュアルサイド水和剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾚﾝｸﾞﾘｺｰﾙﾓﾉ脂肪酸ｴｽﾃﾙ2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項、くん煙剤の項、微生物農薬の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
センチュウ類	(発生の特徴) ○主要種は、ネコブセンチュウ類。 ○被害は、根がコブだらけになり、草丈や葉数の減少、下位葉からの枯れあがり、萎凋が引き起こされる。	○有機質を施用する。 ○床土は水田土壌を使用する。 ○連作を避ける。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			生育期	1B		ネマキック液剤	1:イミシアホス	4,000倍	生育期(但し、収穫前日まで)	1回	劇	△	○土壌灌注(2ℓ/㎡)、登録はネコブセンチュウ
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ワタアブラムシが主体である。 ○露地での発生が多いのは、6～8月頃である。 (防除上のポイント) ○ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が、一部地域で認められている。	○無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗する)。 ○雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺の除草をする。 ○シルバーポリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効である。 ○ハウス栽培ではハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、有翅虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下)。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	育苗期	1回	普	△	○株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	育苗期	1回	普	△	○株元散布
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:シアントラニリプロール2:チアメトキサム	1g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○株元散布
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプリド	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○株元散布
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○株元灌注(25～50mℓ/株) 薬害等(注)(P.26)
				28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○400株当り2～20ℓ(1株当り5～50mℓ)、混用(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプリド2:シアントラニリプロール	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:シアントラニリプロール	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○灌注(25mℓ/株)
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:イミダクロプリド	1～2g／株	定植時	1回	普	△	○植穴または株元土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	0.5～1g／株	定植時	1回	普	△	○株元散布
			定植直後	28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	25mℓ/400株	定植直後	1回	普	△	○400株あたり20～200ℓ(1株あたり50～500mℓ)根回し水との同時処理が可能 混用(注)(P.27)
			発生初期	4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1～2g／株	定植後 但し収穫前日まで	3回以内	普	△	○株元散布
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				21A		サンマイトフロアブル	1:ピリダベン	1,000～1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェンピラド	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○かぶれ注意、刺激(眼)
				9B		チェス顆粒水和剤	1:ピメトロジン	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ピリフルキナゾン	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				29		ウララDF	1:フロニカミド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○薬害等(注)(P.26)
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬害等(注)(P.26)
				くん煙剤の項参照									

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
コナジラミ類	(発生の特徴) ○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。 ○ 上位葉には成虫・卵、中位葉以下には幼虫が寄生する。 ○ 施設では冬期も発育し加害する。 (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分に散布する。	○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗する)。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺の除草をする。 ○ ハウス栽培では、天ビニールとして近紫外線カットフィルムの使用は、成虫の侵入抑制に有効である。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1～2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1～2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	1～2g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元灌注(25～50mℓ/株) 薬害(ｲﾈ)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 400株当り10～20ℓ(1株当り25～50mℓ)、混用(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.27)
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1g/株	定植時	1回	普	×	○ 植穴処理
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ タバココナジラミには効果低い
				21A		サンマイトフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	
				21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				7C		ラノーテープ	1:ﾋﾟﾘﾌﾟﾛｷｼﾌｪﾝ	10～50㎡/10a	栽培期間中(施設栽培)	1回	普	○	○ ラノーテープの注意事項(参考資料P.28)参照
				6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				un	M10	モレスタン水和剤	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				un	M10	パルミノ	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ かぶれ注意、刺激(眼)
				9B		チェス顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ タバココナジラミには効果低い
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
オンシツコナジラミ	(発生の特徴) ○ コナジラミ類の項参照	○ コナジラミ類の項参照	発生初期	16		アプロード水和剤	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 登録は幼虫 ○ IGR剤(注)(P.15)参照
ウリハムシ	(発生の特徴) ○ 越冬成虫は、5月上旬～6月下旬に現れ、新成虫は、7月下旬頃から羽化し、8月上・中旬が最盛期である。 ○ 幼虫による被害は、7月上旬から認められる。	○ 3～4葉期まで寒冷紗、ビニルなどで覆う。 ○ シルバーポリなどによるマルチが有効である。	発生前	1B		ダイアジノン粒剤3	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	6～9kg/10a	は種時又は植付時	2回以内	普	×	○ 土壌混和 登録はウリハムシ幼虫
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	○ 幼苗期薬害注意
コガネムシ類幼虫	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、ドウガネブイブイである。	○ 有機質肥料を多用するとコガネムシ類が集まりやすいので、施用後は覆土を厚くする。	発生前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	×	○ 全面土壌混和または作条土壌混和
タネバエ	(発生の特徴) ○ 幼虫が植え付けた種子や幼苗を加害する。 ○ 春～初夏に発生多い。	○ 有機質肥料を多用するとタネバエが集まりやすいので施用後は覆土を厚くする。	発生前	1B		カルホス粉剤	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	4～6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 土壌表面散布土壌混和処理
				1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	×	○ 全面土壌混和または作条土壌混和
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガである。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害する。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株の発生が見られたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺する。	発生前	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
ウリノメイガ	(病害虫の名称) ○ 標準和名は、ワタヘリクロノメイガである。 (防除上のポイント) ○ 葉裏中心に生息するので、薬剤防除は、葉裏を対象に ○ 薬剤防除は、若齢幼虫期に実施する。	○ 蛹・幼虫を捕殺する。 ○ ハウス栽培では、開口部に防虫ネット等を設置する。	発生初期	15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾟﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ かぶれ注意、刺激(眼)
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	○ 幼苗期薬害注意
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						くん煙剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハモグリバエ類	(発生の特徴) ○ 土着天敵への影響が大きい薬剤(合成ピレスロイド系薬剤や有機リン系薬剤など)を使用すると、その後多発することがある。 ○ 発生の主体は、トマトハモグリバエである。	○ 苗からの持ち込みを防止する。 ○ 成虫の侵入を防止するため、施設の開口部に防虫ネット等(1mm目以下0.6mm目以下が望ましい)を設置する。 ○ 被害を受けた収穫残渣は、発生源となるので、適切に処分する。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100～200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 灌注(25mℓ/株) 展着剤は加用しない
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 400株当り10～20ℓ(1株当り25～50mℓ)、混用(注)(P.297)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 灌注(25mℓ/株)
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
トマトハモグリバエ			発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1g/株	定植時	1回	普	×	○ 植穴処理
			発生初期	15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
ミナミキイロアザミウマ		ミナミキイロアザミウマの項参照											
ハダニ類	(防除上のポイント) ○ 同一系統の薬剤の連用を避ける。	○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 ○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱・移動も考慮し、適切に行う。 ○ 高密度になり、クモの巣状になった寄生葉は、早期に摘除し、適切に処分する。	発生初期	21A		ピラニカEW	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	1回	劇	△※	
				21A		ダニトロンフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	×	
				21A		サンマイトフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	
				6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				25A		スターマイトフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				20B		カネマイトフロアブル	1:ｱｾｷﾉｼﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25A		ダニサラバフロアブル	1:ｼﾌﾙﾒﾄﾌｪﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					19	デュアルサイド水和剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾚﾝｸﾞﾘｺｰﾙﾓﾉ脂肪酸ｴｽﾃﾙ2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	○ 幼苗期薬害注意
				10B		バロックフロアブル	1:ｴﾄｷｻｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25B+21A		ダブルフェースフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾟﾐﾄﾞ2:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						くん煙剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
チャノホコリダニ	(発生の特徴) ○ 葉は、ホルモン障害様になり、萎縮したり、奇形化する。症状が進むと、生長点が褐変し、芯止まり症状となり、その後、生長点が枯死する。茎や果実が加害されるとさめ肌状になる。 (防除上のポイント) ○ ハダニ類登録薬剤では、マイトコーネ・ダニサラバ・バロックの効果は低い。		発生初期	6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	

障害名 発生原因	症　状	対　策	本障害と類似した病気の症状	
			病害名	症　状
チロースによる急性萎凋 （複雑な生理的要因が関与するが、台木部分と接木穂部分の水分の供給と需要のアンバランスで発生）	収穫始め頃から急性的な株全体の萎れが起こる。 根及び地際部に異常は見られず、茎の断面も肉眼では健全に見える。	○ 接木作業の適正化 ①穂木、台木の融合組織の発育を促進させるため、育苗床の温・湿度を高める。 ○ 生育中の萎れの軽減 ①葉面散布を行う。 ②着果負担をなくすため摘果を行う。	立枯性疫病 ZYMVによる萎凋	・茎の地際部が水浸状となり、根も褐変、腐敗。 ・株元の維管束断面は褐変。 ・株全体が萎れるが、明瞭なモザイク症状を伴わないことも多い。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、CMV・WMV・ZYMVである。 ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病である。 (防除上のポイント) ○ アブラムシ類の防除を徹底する。	(耕種的防除法) ○ 寒冷紗被覆で育苗する。 ○ シルバーポリ及びシルバーテープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止する。 ○ 発病株の早期抜き取り、処分する。	アブラムシ類防除の項参照										
苗立枯病	(発生の特徴) ○ リゾクトニア属菌によるものが多いが、ピシウム属菌等によっても起こる。	○ 床土は、無病土を使用する。	床土消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			は種後～			苗立枯病の項参照							
疫病	(発生の特徴) ○ 降雨の多い年で、梅雨頃より発生する。 ○ 特に果実の被害が著しい。	○ 発病地は、4年以上ウリ類の作付を避ける。 ○ 栽培畑は、低湿地を避け、排水を良くし、敷きわらをする。 ○ 発病果・茎を速やかに処分する。	作付け前			土壌病害虫防除法の項参照							
			発病前～発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	
					P7	アリエッティ水和剤	1:ﾎｾﾁﾙ	400～800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							
べと病	(発生の特徴) ○ 病斑は、小さく丸みを帯びたように発生する。 ○ 葉裏にかびを生じる。	○ 栽培畑は低湿地を避け、排水を良くし、敷きわらをする。 ○ 着果初期の肥料切れを防止する。	発病前～発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	×	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)・多湿条件で発生する。	○ 花弁・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。	開花期～収穫期			銅剤及び混合剤の項、微生物農薬の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
うどんこ病	(防除上のポイント) ○ 水和剤は、展着剤を加用する。	○ 被害残渣を圃場内に残さない。 ○ 発病茎葉は、速やかに除去する。 ○ 密植、株の過繁茂を避ける。	発病前～発病初期	un	M2	イオウフロアブル	1:硫黄	500倍	発病前～発病初期	ー	普	○	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				un	M10	モレスタン水和剤	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	4,000～8,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					U6+3	パンチョTF顆粒水和剤	1:ｼﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ2:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					19	ポリオキシンAL水溶剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	2,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					50	プロパティフロアブル	1:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					M7+50	ラミック顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					NC	ハーモメイト水溶剤	1:炭酸水素ﾅﾄﾘｳﾑ	800～1,000倍	収穫前日まで	ー	普	△	
					NC	カリグリーン	1:炭酸水素ｶﾘｳﾑ	800～1,000倍	収穫前日まで	ー	普	○	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾟﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					U13+9	ショウチノスケフロアブル	1:ﾌﾙﾁｱﾆﾙ2:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				銅剤及び混合剤の項、微生物農薬の項参照									
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガである。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害する。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株の発生が見られたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺する。	発生前	1B		カルホス微粒剤F	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	3g/株	定植時	1回	劇	△	○ 植穴処理土壌混和
				3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	5回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
ウリハムシ	(発生の特徴) ○ 越冬成虫は、5月上旬～6月下旬に現れ、新成虫は、7月下旬頃から羽化し、8月上中旬が最盛期となる。 ○ 幼虫による被害は、7月上旬から認められる。	○ 幼植物期間中は、成虫の飛来回避のため被覆する。 ○ 成虫の産卵防止のために、株元に川砂を敷く。 ○ シルバーポリでマルチする。	成虫発生初期	1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
ハモグリバエ類	(留意点) ○ 土着天敵への影響が大きい薬剤(合成ピレスロイド系薬剤や有機リン系薬剤など)を使用すると、その後、多発することがある。	○ 苗からの持込を防ぐ。 ○ 被害残渣は、発生源となるので適切に処分する。 ○ 被害の多かった圃場では収穫終了後、20日以上植物がないよう管理するか、被覆資材で土壌表面を覆うと、蛹数を減少させることができる。	発生初期	17		トリガード液剤	1:ｼﾛﾏｼﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ ワタアブラムシが主体である。 (防除上のポイント) ○ ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が、一部の地域で認められている。	○ シルバーポリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効である。	発生前	4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
コナジラミ類	(発生の特徴) ○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。 ○ 上位葉には、成虫・卵、中位葉以下には幼虫が寄生する。 (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分に散布する。	○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗する)。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	発生前	4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	21A		サンマイトフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000～1,500倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ハダニ類		○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 ○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱・移動も考慮し適切に実施する。	発生初期	20B		カネマイトフロアブル	1:ｱｾｷﾉｼﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 露地で果菜類が栽培されている地帯や、圃場周辺に雑草繁茂地がある場所で、発生が多く見られる。	○ 寄生苗を植え付けない。 ○ 早期発見に努め、低密度時に薬剤散布を行なう。	発生初期	6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
苗立枯病	(発生の特徴) ○ 苗が軟弱となると多発する。	○ 床土は無病土を使用する。	床土消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			は種後～			苗立枯病の項参照							
つる割病	(発生の特徴) ○ 保水力の乏しい砂地や乾燥地で発生しやすい。 ○ ユウガオ台木は、生育初期に炭疽病が発生することがあるので注意する。	○ 耐病性台木を利用する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
つる枯病	(発生の特徴) ○ ウリ科作物の中でも本病による被害が大きい。 (防除上のポイント) ○ 発病前に重点をおく。	○ 草勢を保つために肥切れさせない。 ○ 敷わらを早めに行う。	発病前～発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	700～1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫7日前まで	7回以内	普	△	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					10+2	スミブレンド水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,500～2,000倍	収穫21日前まで	5回以内	普	○	
					19	ポリオキシンAL水溶剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	○	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩 2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							
褐色腐敗病	(発生の特徴) ○ 苗床や本圃で発生し、露地栽培では、5 ～8 月の天候不順時に発生しやすい。葉・茎・果実が侵されるが、つるの先端部が特に発病しやすい。 (防除上のポイント) ○ 降雨が頻繁にある時は、散布間隔を短縮する。	○ 連作を避ける。 ○ 日当り・通風・排水のよい畑に栽培し、湿地排水不良畑では排水を良くする。 ○ 密植を避ける。 ○ 敷わらを十分に行い、土からの病原菌のはね上がりを防ぐ。 ○ 残渣は深く埋める。	発病前～発病初期		21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					21+M5	ドーシャスフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△※	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					27+M3	カーゼートPZ水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000～1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△※	
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
						銅剤及び混合剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
炭疽病	(発生の特徴) ○ 果実でも発病し、黒褐色の病斑となる。多湿条件下では、鮭肉色の粘質物(分生胞子塊)を生じる。 ○ 露地では6 月頃から発生し、多発すると葉がほとんど枯死し果実が大きくならず減収する。盛夏には一時少なくなる。収穫後の果実にも発病する。 (防除上のポイント) ○ 降雨が頻繁にある時は、散布間隔を短縮する。	○ 連作を避ける。 ○ 日当り・通風・排水のよい畑に栽培し、湿地排水不良畑では排水を良くする。 ○ 窒素質肥料の過用を避け、カリ肥料を十分に施す。 ○ 敷わらを十分に行い、土から病原菌のはね上がりを防ぐ。	発病前～発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	700倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫7日前まで	7回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫7日前まで	7回以内	普	△	
					M3	アントラコール顆粒水和剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾈﾌﾞ	400～600倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:チオファネートメチル	1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							
うどんこ病	(発生の特徴) ○ 葉と葉柄に発生する。 ○ 発生時期は、通常スイカの着果期以降である。 ○ 薬剤散布により菌叢が消失すると、そのあとに淡黄褐色のしみ状の汚斑点が残る。 (防除上のポイント) ○ 発病後は、7～10日間隔で2～3回散布する。 ○ 水和剤は、展着剤を加用する(乳剤は加用しない)。	○ 密植を避け風通しをよくし採光を図る。 ○ 多発の見られる老化した葉は、速やかに除去する。	発病前～発病初期		M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
				un	M10	モレスタン水和剤	1:キノキサリン系	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				un	M10	パルミノ	1:キノキサリン系	2,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
					19	ポリオキシンAL水溶剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	○	
					19	デュアルサイド水和剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾚﾝｸﾞﾘｺｰﾙﾓﾉ脂肪酸ｴｽﾃﾙ2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	2,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	○	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	4,000～8,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					M7+50	ラミック顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					U13+9	ショウチノスケフロアブル	1:フルチアニル2:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ ワタアブラムシが主体である。 (防除上のポイント) ○ 葉裏及び生長点に寄生が多いので、この部分に丁寧に散布する。 ○ ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が、一部の地域で認められている。		発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布。
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元灌注(25～50mℓ/株) 薬害(ｲﾈ)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 400株当り10～20ℓ(1株当り25～50mℓ)、混用(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 灌注(25ml/株)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	5g/株(但し、3kg/10aまで)	定植時	1回	普	△	○ 株元土壌混和
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1～5g/株(但し、3kg/10aまで)	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	劇	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				21A		サンマイトフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000～1,500倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ かぶれ注意、刺激(眼)
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 刺激(眼)
				9B		チェス顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	5,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
						くん煙剤の項参照							
タネバエ	(発生の特徴) ○ タネバエは、鶏ふん等の有機物を施用すると多発することがある。	○ 有機質肥料を多用すると、タネバエが集まりやすいので、施用後は覆土を厚くする。	発生前	1B		ダイアジノン粒剤3	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	5～8kg/10a	は種時又は植付時	2回以内	普	×	○ 薬害等(注)(P.26) 使用方法は土壌混和
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ・タマナヤガである。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株の発生が見られたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺する。	発生前	1B		カルホス微粒剤F	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	3g/株	定植時	1回	劇	△	○ 植穴処理土壌混和

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
コナジラミ類	(発生の特徴) ○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。 (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分に散布する。	○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元灌注(25～50mℓ/株) 薬害(ｲﾈ)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 400株当り10～20ℓ(1株当り25～50mℓ)、混用(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 灌注(25mℓ/株)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
			発生初期	21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾟﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｿﾞﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ウリハムシ	(発生の特徴) ○ 越冬成虫は、5月上旬～6月下旬に現れ、新成虫は7月下旬頃から羽化し、8月上・中旬が最盛期である。	○ 幼植物期間中は、成虫飛来回避のため被覆を行う。 ○ 成虫の産卵防止のため、株元に川砂を敷く。 ○ シルバーポリでマルチする。	発生前	1B		ダイアジノン粒剤3	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	6～9kg/10a	植付時	1回	普	×	○ 薬害等(注)(P.26) 使用方法は土壌混和
			初発生期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	劇	△	
ミナミキイロアザミウマ		ミナミキイロアザミウマの項参照											
ハダニ類	(防除上のポイント) ○ 同一薬剤の連用を避ける。	○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 ○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱、移動も考慮し適切に実施する。 ○ 高密度になり、クモの巣状になった寄生葉は、早期に摘除し、適切に処分する。	発生初期	25A		スターマイトフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25A		ダニサラバフロアブル	1:ｼﾌﾙﾒﾄﾌｪﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				20B		カネマイトフロアブル	1:ｱｾｷﾉｼﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25B+21A		ダブルフェースフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾟﾐﾄﾞ2:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				33		ダニオーテフロアブル	1:ｱｼﾉﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 混用等(注)(P.26)
				25B		ダニコングフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾟﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				10B		バロックフロアブル	1:ｴﾄｷｻｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						くん煙剤の項参照							
ケラ		○ 土壌の乾燥を図る。 ○ 未熟堆肥の施用を避ける。	発生前	1B		ダイアジノン粒剤3	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	6～9kg/10a	は種時又は植付時	2回以内	普	×	○ 薬害等(注)(P.26) 使用方法は土壌混和

障害名 発生原因	症状	対策	本障害と類似した病気の症状 病害名	症状
急性萎ちょう症 (根の吸水力の衰え、弱日照などによる着果負担により発生)	着果し始めた頃より、突然萎れるようになり、葉が緑色のままやがて枯死する。 接木部分がわずかに変色していることがある。ユウガオ台木に発生が見られる。	○ 堆肥を施し、土づくりを行い、順調に成育させる。 ○ かぼちゃ台木を使用する。	つる割病	スイカ又はユウガオの維管束が褐変。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス病	ToMVによるウイルス病 (発生の特徴) ○ 土壌伝染、種子伝染するウイルス病である。 ○ 強い汁液伝染力を持つため、発病株を管理した手、はさみ等を通しての感染も高率で起こる。 ○ クロルピクリンは効果がない。	(耕種的防除法) ○ 本病を対象とした種子消毒済みの種子を利用する。 ○ 床土は無病土を使用する。 ○ 連作する場合は、抵抗性品種を利用する。 ○ 発病株は早期に抜き取る。 ○ 支柱等の資材を更新する。											
	CMVによるウイルス病 (発生の特徴) ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病である。 ○ 露地トマトに発生が多い。 (防除上のポイント) ○ アブラムシ類の飛来防止と防除する。	(耕種的防除法) ○ 育苗期間中は、寒冷紗で被覆する。 ○ シルバーポリやシルバーテープなどを使用し、アブラムシ類の飛来を防止する。 ○ 圃場周辺を除草する。	アブラムシ類防除の項参照										
条斑病	(発生の特徴) ○ ToMVとPVXによる重複感染が原因である。 ○ PVX単独感染では、軽いモザイク症状にとどまる。 ○ PVXの伝染方法は、接触伝染だけである。	(耕種的防除法) ○ ばれいしょとの混作又は、近接地での栽培は避ける。 ○ 作業前後に手をよく洗う。	ウイルス病の項参照										
黄化葉巻病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、TYLCVである。 ○ 虫媒(タバココナジラミバイオタイプB及びQ)伝染するウイルス病である。 ○ タバココナジラミバイオタイプB及びQの防除を徹底する。 ○ 本県は、イスラエル系とマイルド系が確認されている。	(耕種的防除法) ○ 防虫ネット(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))等で、育苗圃や本圃への媒介虫の侵入を防止する。 ○ 施設内外の除草に努め、近くに媒介虫が寄生しやすい植物を置かない。 ○ 発病株は早急に除去し、適切に処分する。 ○ ウイルスの系統に応じた抵抗性品種を利用する。	トマト黄化葉巻病の項参照										
病 黄化萎縮	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、TbLCJVである。 ○ 虫媒(タバココナジラミの在来系統)伝染するウイルス病である。	(耕種的防除法) ○ 黄化葉巻病の防除法の項参照(上記)。	コナジラミ類、タバココナジラミ防除の項参照										
青枯病	(発生の特徴) ○ 梅雨明けから夏季にかけての高温期に発生し、連作した圃場で多発する。 ○ 青枯病菌は、過湿な圃場状態を好み、排水不良、過灌水や冠水によって爆発的に発生する。 ○ 外観上健全と見える株が急激に萎れ、短期間で枯死する。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 5年以上の輪作をする。 ○ 連作を避け、発病圃場は3年以上水田化する。 ○ 発病株は早期に除去する。 ○ 移植後の植傷みや、管理作業時に根に傷をつけないようにする。 ○ 排水を図る。 ○ 敷きワラやマルチ等により、地温の上昇を抑制する。 ○ 石灰を多量に施用する(200kg/10a)。 ○ ハサミ等作業器具の消毒および手の洗浄を行いながら作業する。 ○ 抵抗性台木を利用する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
斑点細菌病	(防除上のポイント) ○ 育苗期から予防する。 ○ 台風前後には、十分な薬剤散布を実施する。	○ 連作を避ける。 ○ 窒素肥料の多用を避ける。 ○ 被害茎葉は、圃場外へ持ち出す。 ○ 排水・換気等を図り、多湿を避ける。 ○ ポリマルチを被覆し、土壌等の跳ね上がりを防止する。	発病前～		24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
かいよう病	(発生の特徴) ○ かいよう病菌は、被害茎葉とともに、土壌中に入って3年以上生存し伝染源となる。 ○ 摘芽・摘葉・摘心・誘引などの農作業により、次々に病原細菌が伝搬される。 (防除上のポイント) ○ 育苗期から予防する。 ○ 台風前後には、十分な薬剤散布を実施する。 ○ 芽かき直後に薬剤散布を実施する。	○ 連作を避ける。 ○ 窒素肥料の多用を避ける。 ○ 発病株は、早期に除去する。 ○ 汁液伝染を避けるため、芽かき時期を遅らさない。 ○ 排水・換気等を図り、多湿を避ける。 ○ 多湿時の管理作業を避ける。 ○ ハサミ等作業器具の消毒および手の洗浄を行いながら作業する。 ○ 資材も伝染源となるので、よく洗浄・消毒して使用する。	発病前～		24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							
軟腐病	(発生の特徴) ○ 軟腐病菌は潅水や、降雨による土壌のはね上がりで伝染する。 ○ 茎はずい部が腐敗消失し、やがて枯死する。 (防除上のポイント) ○ 台風前後には、十分な薬剤散布を実施する。 ○ 芽かき直後に薬剤散布を実施する。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 連作を避ける。 ○ 傷口から侵入するので、傷を生じないような管理作業を心がける。 ○ 窒素肥料の多用を避ける。 ○ ポリマルチを被覆し、土壌等の跳ね上がりを防ぐ。	発病前～		24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項、微生物農薬の項参照							
苗立枯病	(発生の特徴) ○ 幼苗の段階で罹病すると、倒伏することがある。	○ 床土は無病土を使用する。	床土消毒は種後～			土壌病害虫防除法の項参照 苗立枯病の項参照							
白絹病	(発生の特徴) ○ 高温多湿条件で多発する。 ○ 前作作物の残渣や、未熟たい肥のすき込みは、発病を助長する。	○ 連作を避け、床土は無病土を使用する。 ○ 被害株、病菌のついた敷わら等は菌核を落とさないように、圃場外へ除去する。 ○ 発病株周辺の表土は菌核が多いので土中深く埋め込む。 ○ 3～4年間水稲と輪作するか、田畑輪換を実施する。 ○ 植え付け前に石灰を施用し、土壌酸度を矯正する。 ○ 無病苗を定植する。											
萎凋病	(発生の特徴) ○ 比較的高温期に発生する。 ○ 葉が黄化し、茎の維管束の褐変は、根から発病した葉の位置付近まで比較的広範囲に認められる。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 5年以上の輪作をする。 ○ 排水をよくする。 ○ 石灰を多量施用する。(200kg/10a以上) ○ 有機物資材を施用する。 ○ 敷きわらを行う等、地温の上昇を抑制する。 ○ 抵抗性台木に接木する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			発病前～発病初期		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	定植前～定植1ヶ月後	2回以内	普	△	○ 灌注処理(150～300mℓ/株) 薬剤選択注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
根腐萎凋病	(発生の特徴) ○ 夏秋栽培でも梅雨時に発病することがある。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 5年以上の輪作を行う。 ○ 排水をよくする。 ○ 有機物を施用する。 ○ 抵抗性台木に接木する。	○ 石灰を多量施用する。(200kg/10a以上)										
			床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
疫病	(発生の特徴) ○ ハウスでは、低温多湿時、露地では梅雨時期に発病が多い。 ○ 多発跡地で発生しやすい。 ○ 梅雨入り後や、曇雨天(20℃前後の低温で多湿条件)が続くと発生しやすく、窒素過多・多湿条件は発病を著しく助長する。 (防除上のポイント) ○ 苗床で幼苗に発生することがあるので、苗床での薬剤散布を十分に行う。 ○ 発病前から予防散布を定期的に行う(特に発生しやすい時期は雨の合間を利用して薬剤散布を行う)。 ○ 初発確認後は、散布間隔を短縮、集中的に薬剤散布を行う。	○ 露地栽培ではマルチをし、雨で土粒が跳ね上がらないようにする。できれば雨よけ栽培にする。 ○ 排水を良好にし、土壌表面を乾燥させる。 ○ ハウスでは夜間、茎葉に水滴がつかないような管理に努める。 ○ 被害茎葉は、第二次伝染源となるので除去する。 ○ 被害残渣は、次作の感染源になるので、栽培後は圃場に残さない。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			発病前～発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	800倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	800倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					21+M5	ドーシャスフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	600～800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					27+M5	ブリザード水和剤	1:シモキサニル2:TPN	1,200～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					27+M3	カーゼートPZ水和剤	1:シモキサニル2:マンゼブ	1,000～1500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:シモキサニル2:ファモキサドン	1,500～2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○かぶれ注意
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:シモキサニル2:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					45+40	ザンプロDMフロアブル	1:ｱﾒﾄｸﾄﾗｼﾞﾝ2:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					22	エトフィンフロアブル	1:ｴﾀﾎﾞｷｻﾑ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					49+M3	ゾーベック　エニベル　顆粒水和剤	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					21+49	ゾーベックエンテクタSE	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ2:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					49+40	オロンディスウルトラSC	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					21+27	ダイナモ顆粒水和剤 銅剤及び混合剤の項参照	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ2:シモキサニル	2,000～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
菌核病	(発生の特徴) ○ ハウスでは無加温栽培で発生が多い。 ○ 発病は低温(18～20℃)・多湿条件で見られる。 ○ 発病部には、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミの糞状の菌核を形成する。	○ 発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。	発病前～発病初期		1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○薬剤選択注意
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬剤選択注意
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾟﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
菌核病					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩 2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					52	ミギワ10フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
葉かび病	(発生の特徴) ○ 施設での発病が激しい。 ○ 高温期に病勢は衰える。 (防除上のポイント) ○ 感染から発病まで2週間以上かかることもあり、発病後からの防除では効果が上がりにくい。感染初期から防除を実施する。	○ 抵抗性品種を栽培する(抵抗性品種を侵す葉かび病菌の新レースが確認されているので注意する)。 ○ 密植を避け、草勢を落とさないように管理する。 ○ ハウスでは排水をよくし、換気に努める。 ○ 過度の灌水は避ける。 ○ 多発した葉は、伝染源となるので除去する。 ○ 資材を消毒又は更新する。	発病前～発病初期		M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	800倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	800倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	3,000～6,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7+19	ダイアメリットDF	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩 2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					3	トリフミン乳剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	ラリー乳剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩 2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					19	デュアルサイド水和剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾚﾝｸﾞﾘｺｰﾙﾓﾉ脂肪酸ｴｽﾃﾙ2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項、くん煙剤の項、微生物農薬の項参照							
すすかび病	(発生の特徴) ○ 類似する葉かび病との識別には、検鏡による病原菌観察が必要である。 (防除上のポイント) ○ 気温25℃では、感染から発病までに3週間程度を要するため、発病が進行してからの防除では効果が劣る。感染初期から防除を実施する。	○ 密植を避け、排水をよくして多湿を防ぐ。 ○ 発病葉、被害残渣は圃場外に持ち出し、適切に処分する。	発病前～発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	トリフミン乳剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩 2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
						銅剤及び混合剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)・多湿条件で発生する。 ○ 低温多湿で地温が上がらない場合に多い。 (防除上のポイント) ○ 発病前から予防散布を行う。 ○ 発病後は7～10日間隔で散布する。 ○ ベンズイミダゾール系薬剤は、県内で広く耐性菌が確認されているので使用を避ける。	○ 花弁・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。 ○ 密植を避ける。	発病前～発病初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					19	ポリオキシンAL水和剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					19	ポリオキシンAL水溶剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	3,000～6,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7+50	ラミック顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩 2:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					17+12	ジャストミート顆粒水和剤	1:ﾌｪﾝﾍｷｻﾐﾄﾞ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					17	ピクシオDF	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾗｻﾞﾐﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害(注)
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					10+2	スミブレンド水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害(注)
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					52	ミギワ10フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					くん煙剤の項参照								
うどんこ病	(発生の特徴) ○ 施設栽培で発生が多い。 ○ 乾燥条件で多発する。 ○ 発病適温は、20～25℃である。	○ 通風をよくする。 ○ 密植を避ける。 ○ 窒素過多を避ける。 ○ 樹勢低下を避ける。 ○ 被害残渣を除去する。	発病前～発病初期		3	トリフミン乳剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩 2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7+50	ラミック顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩 2:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					50	クロスアウトフロアブル	1:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					U6+3	パンチョTF顆粒水和剤	1:ｼﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ2:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					U13+9	ショウチノスケフロアブル	1:ﾌﾙﾁｱﾆﾙ2:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						ベミデタッチ	1:ｸﾞﾘｾﾘﾝ酢酸脂肪酸ｴｽﾃﾙ	500倍	収穫前日まで	–	普	○	
					銅剤及び混合剤の項、微生物農薬の項参照								

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
輪紋病	(発生の特徴) ○ 乾燥条件で多発する。 (防除上のポイント) ○ 予防散布の効果が大きい。	○ 窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。	発病前～発病初期		M3 M3 M5 7	ジマンダイセン水和剤 ペンコゼブフロアブル ダコニール1000 ネクスターフロアブル 銅剤及び混合剤の項参照	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ 1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ 1:TPN 1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	800倍 1,000倍 1,000倍 1,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 2回以内 4回以内 3回以内	普 普 普 普	△ △ × △	
ネコブセンチュウ		○ 有機質を十分施用する。 ○ 連作を避ける。 ○ 床土は水田土壌を使用する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			初期	発生 1B		ガードホープ液剤	1:ﾎｽﾁｱｾﾞｰﾄ	4,000倍 2ℓ/㎡灌注	収穫前日まで	1回	劇	○	○ 使用方法(注)(P.27)
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ モモアカアブラムシが主体である。	○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗する)。	発生前	4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	1g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元処理
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
		○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。		28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 400株当り10～20ℓ(1株当り25～50mℓ)、混用(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
		○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効である。		28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 灌注(25mℓ/株)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.27)
		○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、有翅虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下で侵入量を減らす効果)。		4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		ベストガード粒剤	1:ﾆﾃﾝﾋﾟﾗﾑ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	1～2g/株	定植後 但し収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 株元散布
			発生初期	4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1g/株	生育期　但し、収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1g/株	生育期　但し、収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 株元散布
				4A		アドマイヤー水和剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		バリアード顆粒水和剤	1:ﾁｱｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				9B		チェス顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
						くん煙剤の項参照							
						気門封鎖型薬剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
コナジラミ類	(発生の特徴) ○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。 ○ 上位葉には成虫・卵、中位葉以下には幼虫が寄生する。 ○ 施設では冬期も発育し加害する。 (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分に散布する。 ○ トマト黄化葉巻病の項参照	○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草もない条件で育苗する)。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))。 ○ ハウス栽培では、天ビニールとして近紫外線カットフィルムの使用は、成虫の侵入抑制に有効である。ただし、マルハナバチを使用する場合は注意する。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元処理
				4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	5g/培土ℓ	は種時又は鉢上げ時	1回	普	△	○ 育苗培土混和
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:シアントラニリプロール2:チアメトキサム	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アクタラ粒剤5	1:チアメトキサム	1g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布
				28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 400株当り10～20ℓ(1株当り25～50mℓ)混用(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプリド2:シアントラニリプロール	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 灌注(25mℓ/株)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	100倍	鉢上時又は定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	100倍	鉢上時又は定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.300)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:シアントラニリプロール	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.27)
				4A		モスピラン粒剤	1:アセタミプリド	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		アクタラ粒剤5	1:チアメトキサム	1g/株	定植時	1回	普	×	○ 植穴処理
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和
				4A		ベストガード粒剤	1:ニテンピラム	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和
			定植直後	28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	25mℓ/400株	定植直後	1回	普	△	○ 400株あたり20～200ℓ(1株あたり50～500mℓ)根回し水との同時処理が可能 混用(注)(P.26)
			発生初期	9B		チェス顆粒水和剤	1:ピメトロジン	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				15		ノーモルト乳剤	1:テフルベンズロン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		カウンター乳剤	1:ノバルロン	2,000～3,000倍	1番花の開花まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ルフェヌロン	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		アタブロン乳剤	1:クロルフルアズロン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照 登録はタバココナジラミ類
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		バリアード顆粒水和剤	1:チアクロプリド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	生育期　但し、収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1g/株	生育期　但し、収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 株元散布
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアメトキサム	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						ベミデタッチ	1:グリセリン酢酸脂肪酸エステル	500倍	収穫前日まで	－	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
コナジラミ類			発生初期	6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				23		クリアザールフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾒｼﾌｪﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ マルハナバチ、カブリダニへの使用は避ける。 薬害(ｲﾈ)
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un	M10	モレスタン水和剤	1:キノキサリン系	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ タバココナジラミには効果低い
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	○ 登録はタバココナジラミ類
						気門封鎖型薬剤の項参照							
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ・タマナヤガである。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株の発生が見られたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			発生初期	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
果実吸蛾類	(発生の特徴) ○ 森林等に囲まれた、中山間地域で発生が多い。	○ 施設開口部に防虫ネット等(5㎜目以下)を張り、侵入防止を図る。											
ナメクジ類 カタツムリ類	(発生の特徴) ○ 主に夜間に活動。 ○ 水分の多い、柔らかい部分を好んで食害。	○ 圃場周辺の雑草や、前作の残渣を早めに処分。	生育期	un		スラゴ	1:燐酸第二鉄	1～5g/㎡	発生時	－	普	○	○ 発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置
						メタアルデヒド剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 野外では越冬できず、施設内で越冬する。 ○ 8月以降発生が多くなり、年5～6世代発生する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や、分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し、処分する。 ○ 齢期の進んだ幼虫も、見つけしだい捕殺する。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等(4mm目以下)での被覆は、成虫の侵入防止に有効である。	発生初期	15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 夏～秋期に発生が多くなる。 ○ 幼虫が果実内に食入する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等(4mm目以下)での被覆は、成虫の侵入防止に有効である。	発生初期	15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
						くん煙剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
トマトキバガ	(発生の特徴) ○ 1年に複数回の世代が発生し、繁殖力が高い。 ○ 卵～成虫になるまでの期間は24～38日程度で、気温が低い時期はさらに延びる。 ○ 成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。 ○ 土中や葉の表面で蛹化。	○ 圃場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。 ○ 被害葉や被害果は圃場内から持ち出すとともに、野外に放置せず速やかに適切に処分。	発生前	28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	25mℓ/400株	育苗期後半～	1回	普	△	○ 400株当り10～20ℓ(1株当り25～50mℓ)、混用(注)(P.27)
			発生前	28		プリロッソ粒剤オメガ	1:シアントラニリプロール	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.27)
			発生初期	5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド2:スピノサド	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アグリメック	1:アバメクチン	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				6		アファーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	
				22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミゾン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルヘンジアミド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ピリダリル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ハモグリバエ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、トマトハモグリバエである。 (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分に散布する。 (留意点) ○ 土着天敵への影響が大きい薬剤(合成ピレスロイド系薬剤や有機リン系薬剤など)を使用すると、その後多発することがある。	○ 苗からの持ち込みを防ぐ。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下(0.6mm目以下が望ましい)。 ○ 被害残渣は発生源となるので適切に処分する。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:シアントラニリプロール2:チアメトキサム	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 50mℓ/株灌注。展着剤使用しない
				28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 400株当り10～20ℓ(1株当り25～50mℓ)、混用(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 灌注(25mℓ/株)
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		アクタラ粒剤5	1:チアメトキサム	1～2g/株	定植時	1回	普	×	○ 植穴処理
				4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理
			発生初期	17		トリガード液剤	1:シロマジン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ルフェヌロン	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサド	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド2:スピノサド	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
トマトハモグリバエ			発生前	4A+28		アベイル粒剤	1:アセタミプリド2:シアントラニリプロール	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	
			発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 養液栽培などハウス内が乾燥する条件で発生が多い。 ○ 密度が高くなると葉が黄化する。 ○ 近接する発生源の影響が大きい。 ○ 極少ない寄生で葉枯を生じる。	○ 圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しないことを徹底する。 ○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱・移動も考慮し、適切に実施する。	発生初期	13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	○ 登録はナミハダニ。
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
						気門封鎖型薬剤の項参照							
トマトサビダニ	(発生の特徴) ○ 養液栽培での発生が多い。	○ ナス科雑草にも寄生するので、ハウス内や周辺を除草。	発生初期	un	M10	モレスタン水和剤	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
					19	デュアルサイド水和剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾚﾝｸﾞﾘｺｰﾙﾓﾉ脂肪酸ｴｽﾃﾙ2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	
				21A		ダニトロンフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	1,000倍	収穫開始14日前まで	3回以内	普	×	
				21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						気門封鎖型薬剤の項参照							
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ トマト果実では、開花時に子房に産卵するため、産卵痕の周りが白く色が抜け、白ぶくれ症になる。 (防除上のポイント) ○ ファインセーブフロアブルはヒラズハナアザミウマに対して効果が低い。	○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草もない条件で育苗する)。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	発生前	4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元処理
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 薬害等(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 400株当り10～20ℓ(1株当り25～50mℓ)、混用(注)(P.27)
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					M7+19	ダイアメリットDF	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ミカンキイロアザミウマ			発生初期	15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△※	

障害名 発生原因	症　状	対　策	本障害と類似した病気の症状	
			病害名	症　状
しり腐果 （直接の原因は、石灰欠乏である。カリや窒素が多い場合や、高温乾燥で発生しやすい。）	ピンポン玉くらいの大きさの幼果から発生し始める。 症状が進むと被害部が暗褐色となり、くぼみを生じたまま固まってしまう。	○ 窒素質肥料の過用を避ける。 ○ 土壌を乾燥させすぎない。 ○ 応急対策として、カルクロン、スイカル、マイルドカルシウム等の葉面散布用カルシウム肥料の葉面散布を行う。	実腐病	果実に黒褐色円形で、ややへこんだ輪紋状の病斑ができ、病斑内には小黒点が作られる。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
青枯病	(発生の特徴) ○ 水はけの悪い床土や、酸性土壌で発病が多い。 ○ 日中に生長点付近の葉が萎れ、朝夕は回復するが、やがて株全体が萎れて、青枯れ状態になる。 ○ 導管が褐変し、切断面からは乳白色の菌泥が出る。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 連作を避け、5年以上の輪作を行う。 ○ 発生圃場では、病原菌密度抑制のため、3年程度水田化する。 ○ 生育に影響のない範囲で、石灰を多量に施用する(200kg/10a)。 ○ 敷きわらやマルチ等により、地温の上昇を抑制させる。 ○ 適切な抵抗性台木を使用する。 ○ 根傷みのないよう、管理作業には十分注意する。 ○ 排水を十分に図り、多湿にならないように注意する。 ○ 発病株は、見つけ次第除去する。 ○ 発病株に触れた手やハサミで健全株を触らないようにし、作業後は石鹸等で洗う。 ○ 発生圃場では、栽培終了後、極力根も含めて全株を除去する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
苗立枯病		○ 床土は無病土を使用する。	床土消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			は種直後～			苗立枯病の項参照							
半身萎凋病	(発生の特徴) ○ 本病は、地温22～26℃の時期に発生しやすく、18℃以下の低温や30℃以上の高温では発病しにくい。 ○ 土壌湿度は、乾燥よりも湿潤状態で発病しやすく、日照不足は発病を助長する。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 発病株は、見つけ次第除去する。 ○ 発生圃場では栽培終了後、極力根も含めて全株除去する。 ○ 40～90日以上の湛水処理・水田化により、病原菌密度を減少させることが可能である。 ○ 根傷みのないよう、管理作業には十分注意する。 ○ 排水を十分に図り、多湿にならないように注意する。 ○ 連作を避ける。 ○ 抵抗性台木を使用する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			後定植		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	定植後～収穫14日前	3回以内	普	△	○ 400～600mℓ/株土壌灌注 薬剤選択注意
根腐疫病	(発生の特徴) ○ 被害残渣上の病原菌は、根とともに土壌中に残り、越年して伝染源となる。 ○ 排水不良の多湿な圃場で発生が多く、特に水田転換畑での発生が目立っている。 ○ 長期間、連作している圃場で発生することが多い。 ○ 台太郎(台木)で発生が多い。	○ 排水を十分に図り、多湿にならないように注意する。 ○ 連作を避け、他の作物を導入し、輪作を行なう。 ○ 酸性土壌で発生が多い傾向にあるので、石灰を施用し、中性になるように矯正する。 ○ 完熟堆肥などの良質有機物を積極的に投入する。 ○ 発病株を見つけた場合には速やかに抜き取り、病患部での菌の増殖や隣接株への感染を未然に防止する。 また、収穫後の残渣は圃場外に持ち出し、乾燥後焼却する。											
菌核病	(発生の特徴) ○ 低温(18～20℃)・多湿条件で発病する。 ○ 発病部には、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミ糞状の菌核が形成される。	○ 被害部は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。	発病初期		1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾟ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾟ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					10+2	スミブレンド水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾟ2:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					17	ピクシオDF	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾗｻﾞﾐﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
						くん煙剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
すすかび病	(防除上のポイント) ○ トリフミン剤は、県内で広く耐性菌が確認されているので使用を避ける。	○ 連作を避ける。 ○ 堆肥を十分に施し、肥切れしないようにする。 ○ 通風・排水を良くする。 ○ 敷わら・敷草を行う。 ○ 被害茎葉と発病株を処分する。 ○ 多発時は、枝を更新剪定する。	発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 回数注意
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 回数注意
					M7+19	ダイアメリットDF	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 回数注意
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	4,000～6,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un	M10	パルミノ	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾟﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
							くん煙剤の項参照 微生物農薬の項参照						
黒枯病	(発生の特徴) ○ 平均気温20～25℃、多湿条件で多発する。	○ 連作を避ける。 ○ 堆肥を十分に施し、肥切れしないようにする。 ○ 通風・排水を良くする。 ○ 敷わら・敷草を行う。 ○ 被害茎葉と病株を処分する。 ○ 多発時は、枝を更新剪定する。	発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 回数注意
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
							くん煙剤の項参照						
褐紋病	(発生の特徴) ○ 露地栽培で発生が多く、梅雨明け頃から多発する。 ○ 平均気温24～26℃になると発生する。28℃以上で蔓延が激しい。	○ 被害茎葉や被害果は、早めに除去し、適切に処分する。 ○ 密植、窒素過多、排水不良を避ける。 ○ 連作を避ける。	発病初期		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 回数注意
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾟﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾟﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
うどんこ病	(発生の特徴) ○ 比較的乾燥した条件下(湿度50～80%)で多発する。	○ 被害残渣を圃場内に残さない。 ○ 発病した茎葉は、速やかに除去する。 ○ 窒素過多・肥切れさせないよう、適正に肥培管理を行う。 ○ 密植、株の過繁茂を避ける。	発病初期		9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 回数注意
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	トリフミン乳剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	4,000～6,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un	M10	モレスタン水和剤	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				un	M10	パルミノ	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					U6+3	パンチョTF顆粒水和剤	1:ｼﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ2:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					U13+9	ショウチノスケフロアブル	1:ﾌﾙﾁｱﾆﾙ2:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					50	クロスアウトフロアブル	1:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					19	デュアルサイド水和剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾚﾝｸﾞﾘｺｰﾙﾓﾉ脂肪酸ｴｽﾃﾙ2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
							くん煙剤の項参照 微生物農薬の項参照						
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)・多湿条件で発生する。 (防除上のポイント) ○ 発病後は、7～10日間隔で防除する。	○ 花弁・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。 ○ 密植を避ける。	開花期～収穫期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					19	ポリオキシンAL水溶剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					17+12	ジャストミート顆粒水和剤	1:ﾌｪﾝﾍｷｻﾐﾄﾞ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					17	ピクシオDF	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾗｻﾞﾐﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	
					10+2	スミブレンド水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	5回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					52	ミギワ10フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
							くん煙剤の項参照 微生物農薬の項参照						

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
褐色腐敗病	(発生の特徴) ○ 露地栽培では、6～9月に果実の被害が発生しやすい。施設栽培では、4月以降に発生し、梅雨後半から9月にかけて降雨が多いと多発する。 ○ 土壌伝染と水媒伝染で発生するので、多雨・多灌水が発生を助長する。	(圃場での対策) ○ 他のナス科・ウリ科野菜の近く、多雨時に浸冠水する恐れのある圃場、前作で発生した圃場では作付しない。 ○ 酸性土壌で発生が多いので、pH調整を行う。 ○ 窒素質肥料の過用や偏用をしない。 ○ 高畝とし、排水を良くする(畝間灌水は発生を増加させることがあるので注意する)。 ○ 土壌中の病原菌が地上部へ跳ね上がらないよう、敷きわらやマルチをする。 ○ 密植や過繁茂を避け、通風や採光を図る。 ○ 発病果を除去し、圃場外で適切に処分する。											
		(市場病害の対策) ○ 果温の著しく高い日中や、果面の濡れている降雨直後の収穫を避ける。 ○ 箱詰め時に、発病果を徹底して除去する。果実が結露しない包装を行う。 ○ 輸送中は、できるだけ換気を行い、果実の結露を防ぐ。	発病前～発病初期		21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					21+M5	ドーシャスフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
センチュウ類			本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
ダニ類 テントウムシ	(発生の特徴) ○ 成虫は年2回発生する。 (防除上のポイント) ○ 幼虫の発生期に防除を行う。	○ 葉裏のつぶ状の卵塊をつぶす。	発生初期	4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△※	○ 幼苗期薬害注意
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 登録はニジュウヤホシテントウ
				1B		サイアノックス乳剤	1:CYAP	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 登録はテントウムシダマシ
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、ワタアブラムシである。 (防除上のポイント) ○ ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が、一部の地域で認められている。	○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗する)。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内外の除草に努める。 ○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効である。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、有翅虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下で侵入量を減らす効果がある)。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～20ℓ(25～50mℓ/株灌注)、混用(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 25～50mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 25mℓ/株灌注
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.27)
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴又は株元土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5～1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類			発生初期	4A		アドマイヤー水和剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				9B		チェス顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						くん煙剤の項参照							
コナジラミ類	(発生の特徴) ○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。 ○ 上位葉には成虫・卵、中位葉以下には幼虫が寄生する。 (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分散布する。	○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草も無い条件で育苗する)。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となるので、圃場内外の除草に努める。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効である(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1～2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1～2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～20ℓ(25～50mℓ/株灌注)、混用(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 25～50mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1g/株	定植時	1回	普	×	○ 植穴処理
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和
			発生初期	21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾟﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ IGR剤(注)(P.15)
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		アドマイヤー水和剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ タバココナジラミには効果低い
				6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				9B		チェス顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ タバココナジラミには効果低い
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	○ 登録はタバココナジラミ類

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガである。 ○ 前作や、作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 被害株の発生がみられたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。 ○ 作付予定地では、予め除草し、前作も早急に処分する。	発生前	28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 25mℓ/株灌注
			発生前	28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～20ℓ(25～50mℓ/株灌注)、混用(注)(P.27)
			初期発生	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
			床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 野外では越冬できず、施設内で越冬する。 ○ 8月以降発生が多くなり、年5～6世代発生する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと除去し、処分する。 ○ 齢期の進んだ幼虫も見つけ次第捕殺する。 ○ ハウス栽培では、ハウス開口部の防虫ネット(4mm目以下)等での被覆は、成虫の侵入防止に有効である。	発生前	28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 25mℓ/株灌注
			発生初期	15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△※	○ 幼苗期薬害注意
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
						くん煙剤の項参照							
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 夏～秋に発生が多くなる。 ○ 幼虫が果実内に食入する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ ハウス開口部に防虫ネット等(4mm目以下)を張り、侵入防止を図る。	発生初期	15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△※	○ 幼苗期薬害注意
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
						BT剤の項参照 くん煙剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハモグリバエ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、トマトハモグリバエである。 ○ 土着天敵への影響が大きい薬剤(合成ピレスロイド系薬剤や有機リン系薬剤など)を使用すると、その後多発することがある。	○ 苗からの持ち込みを防ぐ。 ○ 成虫の侵入を防止するためハウスの開口部に防虫ネット等(1㎜目以下(0.6㎜目以下が望ましい))を設置する。 ○ 被害を受けた収穫残渣は発生源となるので、適切に処分する。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:シアントラニリプロール2:チアメトキサム	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 25mℓ/株灌注
				28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～20ℓ(25～50mℓ/株灌注)、混用(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 25mℓ/株灌注
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド2:スピノサド	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				6		コロマイト乳剤	1:ミルベメクチン	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アファーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
マメハモグリバエ			前発生	4A		ダントツ粒剤	1:クロチアニジン	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和
				4A		アクタラ粒剤5	1:チアメトキサム	1g/株	定植時	1回	普	×	○ 植穴処理
			発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26) IGR剤(注)(P.15)
				17		トリガード液剤	1:シロマジン	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアメトキサム	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、ミナミキイロアザミウマである。 ○ 高温条件下で発生が多くなる傾向があり、施設栽培や露地栽培の6～9月に発生が多い。 (防除上のポイント) ○ 露地栽培では、天敵(ヒメハナカメムシ類等)への影響の少ない選択性殺虫剤を使用することにより、発生を抑制することが可能である。	○ 圃場内外の除草に努める。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:シアントラニリプロール2:チアメトキサム	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:シアントラニリプロール	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～20ℓ(25～50mℓ/株灌注)、混用(注)(P.27)
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 50mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				4A		アルバリン粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ジノテフラン	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	6		アファーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサド	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド2:スピノサド	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:フロメトキン	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
ミナミキイロアザミウマ			ミナミキイロアザミウマの項参照										
ミカンキイロアザミウマ			初発生期	3A		アーデント水和剤	1:アクリナトリン	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	○ 合ピレ(注)(P.15)
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△※	○ 幼苗期薬害注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハダニ類	(防除上のポイント) ○ 発生初期に丁寧に散布する。 ○ 系統の異なる薬剤によるローテーション防除を行う。	○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内外の除草に努め、隣接地に寄生された作物を放置しない。 ○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈り払いなどは、ハダニの離脱・移動も考慮し適切に実施する。	前発生	23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 50mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
			発生初期	5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				6		コロマイト水和剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				25A		スターマイトフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
					19	デュアルサイド水和剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾚﾝｸﾞﾘｺｰﾙﾓﾉ脂肪酸ｴｽﾃﾙ2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				20B		カネマイトフロアブル	1:ｱｾｷﾉｼﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△※	○ 幼苗期薬害注意
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				33		ダニオーテフロアブル	1:ｱｼﾉﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 混用等(注)(P.27)
				25B+21A		ダブルフェースフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾟﾐﾄﾞ2:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25B		ダニコングフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾟﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
						くん煙剤の項参照							
				(殺卵効果主体)									
				10B		バロックフロアブル	1:ｴﾄｷｻｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
チャノホコリダニ	(発生の特徴) ○ 生長点や新葉に多く寄生する。 (防除上のポイント) ○ 発生初期に生長点等によくかかるよう散布する。		発生初期	21A+16		アプロードエースフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ2:ﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ IGR剤(注)(P.15)
				6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				25A		スターマイトフロアブル	1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				un	M10	パルミノ 気門封鎖型薬剤の項参照	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
カスミカメムシ類	(発生の特徴) ○ コアオカスミカメの越冬は、卵で行なわれ、年間に2回以上発生する。主要な寄主植物はヨモギ類である。 (防除上のポイント) ○ 被害症状の早期発見に努める。	○ ヨモギ等によく発生するので、圃場周辺の除草を行い、圃場内への侵入を減らす。	発生初期	9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15) 登録はカメムシ類
コガネムシ類幼虫		○ 被害株周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。 ○ 成虫を捕殺する。	発生前	4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1g/株	定植時	1回	普	×	○ 植穴処理

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス病	(発生の特徴) ○病原ウイルスは、ToMV、PMMoV ○土壌伝染、種子伝染するウイルス病。 ○強い伝染力を持つため、発病株を管理した手、ハサミ等を通しての感染も高率で起こる。 ○抵抗性品種でもトウガラシ系統ウイルスには侵される。	(耕種的防除) ○床土は無病土を使用する。 ○抵抗性品種を利用する。 ○発病株の早期抜き取り。 ○支柱等資材を更新する。											
	(発生の特徴) ○病原ウイルスは、CMV、BBWV、PVY ○虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病。 ○露地栽培で被害が大きい。	(耕種的防除) ○シルバーマルチやシルバーテープなどを使用し、アブラムシ類の飛来を防止する。 ○圃場周辺の雑草を除去する。											
	(防除上のポイント) ○アブラムシ類の防除を徹底する。		アブラムシ類防除の項参照										
青枯病	(発生の特徴) ○日中に生長点付近の葉が萎れ、朝夕は回復するが、やがて株全体が萎れて、青枯れ状態になる。 ○導管が褐変し、切断面からは乳白色の菌泥が出る。	○床土は無病土を使用する。 ○連作を避け、5年以上の輪作を行う。 ○発生圃場では、病原菌密抑制のため、3年程度水田化する。 ○生育に影響のない範囲で、石灰を多量に施用する(200kg/10a)。 ○敷わらやマルチ等により、地温の上昇を抑制させる。 ○適切な抵抗性台木を使用する。 ○根傷みのないよう、管理作業には十分注意する。 ○排水を十分に図り、多湿にならないように注意する。 ○被害株は、見つけ次第除去する。 ○発病株に触れた手やハサミで健全株に触れないようにし、作業後は石鹸等で洗う。 ○発生圃場では、栽培終了後、極力根も含めて全株を除去する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
斑点細菌病	(発生の特徴) ○高温多湿下で発生が多く、露地栽培での被害が大きい。 ○多発すると、果実では小円形のそうか症状となることがある。 ○発病により激しく落葉することがある。	(耕種的防除) ○低湿地での作付を避け、排水対策を講じる。 ○連作を避ける。 ○窒素質肥料の偏用を避け、カリ肥料を十分施す。	発病前～		24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							
苗立枯病	(発生の特徴) ○軟弱な苗で発生が多い。	○床土は無病土を使用する。 ○育苗中の水管理を適正にする。	床土消毒は種後			土壌病害虫防除法の項参照 苗立枯病の項参照							
疫病	(発生の特徴) ○梅雨入り後や曇雨天(20℃前後の低温で多湿条件)が続くと発生しやすく、窒素過多、多湿環境は発病を著しく助長する。	○露地栽培ではマルチを張り、雨で土粒が跳ね上がるのを防止する。可能ならば雨よけ栽培とする。 ○被害茎葉は第二次伝染源となるので除去する。 ○被害茎葉残渣は、次作の感染源になるので、栽培後は圃場に残さない。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			発病前～発病初期		21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					21+M5	ドーシャスフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)・多湿条件で発生する。	○ 花弁・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。 ○ 密植を避ける。	発病前～発病初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｼﾆﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					17	ピクシオDF	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾗｻﾞﾐﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					52	ミギワ10フロアブル	1:ｲﾌﾟﾌﾙﾌｪﾉｷﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						微生物農薬の項参照							
						くん煙剤の項参照							
へた腐病	(発生の特徴) ○ 圃場では発生しないが、収穫後の果実を腐敗させる。	○ 摘葉作業等によって生じた作物残渣は、伝染源になるので、早期に圃場外へ持ち出す。 ○ 露地栽培では、降雨中に収穫しない。 ○ 収穫時は鋭利なハサミで採果する。 ○ 出荷までの期間をできるだけ低温に保つ。											
白絹病	(発生の特徴) ○ 高温多湿条件下で発生が多くなる。 ○ 前作作物の残渣や未熟堆肥のすき込みは、発病を助長する。	○ 連作を避け、床土は無病土を使用する。 ○ 3～4年間水稲と輪作するか、田畑輪換を行う。 ○ 定植前に石灰を施用し、土壌pHを矯正する。 ○ 無病苗を定植する。 ○ 被害株、病原菌の付いた敷わら等は、菌核を落とさないように圃場外へ持ち出す。 ○ 発病株周辺の表土は菌核が多いので、土中深く埋め込む。	発病前～発病初期		7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 1ℓ/株・株元灌注
					14	リゾレックス水和剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 1ℓ/株・株元灌注
うどんこ病	(発生の特徴) ○ 他作物のうどんこ病のように表面に粉体を作らない。	○ 圃場内に被害残渣を残さない。 ○ 発病した茎葉は速やかに除去する。 ○ 窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。 ○ 密植、株の過繁茂を避ける。	発病初期		3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	4,000～6,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					U6+3	パンチョTF顆粒水和剤	1:ｼﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ2:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				un	M10	モレスタン水和剤	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				un	M10	パルミノ	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					50	クロスアウトフロアブル	1:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						微生物農薬の項参照							
						くん煙剤の項参照・銅剤及び混合剤の項参照							
斑点病	(発生の特徴) ○ 本病原菌はピーマンだけを侵す。 (防除上のポイント) ○ 予防散布を徹底する。	○ 通風、採光を良くするため過繁茂を避ける。 ○ 発病葉は早期に除去する。	発病前～		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	4,000～6,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
黒枯病	(発生の特徴) ○ 露地栽培では梅雨時から発病するが、秋期に発病が目立つことがある。 ○ 被害残渣から伝染する。 ○ 葉、茎、果実、果梗に黒褐色斑点を形成する。	○ 伝染源をなくすため、発病葉は速やかに除去し、適切に処分する。 ○ 密植を避ける。	発病前～発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	4,000～6,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						微生物農薬の項参照							
炭疽病	(発生の特徴) ○ 降雨や灌水時の土壌の跳ね上がりにより分生子が飛散し、感染する。 ○ 傷口から感染しやすい。 ○ 近年、県内では *Colletotricum scovillei* による炭疽病が確認されており、従来の *C.capusici*、*C.gloeosporioides* に比べ被害が激しい。 (防除上のポイント) ○ 予防散布に重点を置く。	○ 発病葉や発病果は発見次第除去する。 ○ 雨よけ栽培やマルチ被覆等により、降雨による跳ね上がりを防ぐ。 ○ 果実に傷がつかないように、支柱や枝つり等で固定する。	発病前～発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、ワタアブラムシである。 ○ 露地栽培では、7～9月頃に発生が多い。 ○ 雑草にも寄生し、発生源となる。 (防除上のポイント) ○ ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が一部の地域で認められている。	○ 無寄生苗を定植する(隔離され、雑草等もない条件で育苗)。 ○ 圃場内外の除草に努める。 ○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は、有翅虫の飛来抑制に有効。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～20ℓ(25～50mℓ/株灌注)、混用等(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 25mℓ/株灌注
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 25～50mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴又は株元土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				9B		チェス顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
						くん煙剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
コナジラミ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、タバココナジラミである。 ○ 成幼虫とも葉裏に寄生する。 ○ 上位葉には成虫・卵、中位葉以下には幼虫が寄生する。 ○ 施設栽培では冬期も発育し、加害する。 (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分散布する。	○ 無寄生苗を定植する。 ○ 周辺雑草は発生源となるので、圃場内外の除草に努める。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～20ℓ(25～50mℓ/株灌注)、混用等(注)(P.27)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 25mℓ/株灌注
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 25～50mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
			発生初期	21A		サンマイトフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛、皮膚かぶれ
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 天敵への影響大
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	○ 登録はタバココナジラミ類
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 夏～秋期に発生が多くなる。 ○ 幼虫が果実内に食入する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 被害果を除去する。 ○ 幼虫は見つけ次第捕殺する。	発生初期	15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 天敵への影響大
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 登録はタバコガ類
						くん煙剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 8月以降発生が多くなり、年5～6世代発生する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ ふ化幼虫の集団加害葉を除去する。	発生初期	6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガである。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草する。 ○ 周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。	発生初期	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	5回以内	普	○※	○ 合ピレ(注)(P.15) 株元散布
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 果実では、産卵痕の周辺が白色のリング状となる白膨れ症が発生する。 (防除上のポイント) ○ 露地栽培では天敵への影響の少ない選択性殺虫剤を用いることで、発生を抑えることが可能。	○ 圃場内外の除草に努める。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	鉢上げ時～育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	25mℓ/400株	育苗期後半～定植当	1回	普	△	○ 使用液量400株当り10～20ℓ(25～50mℓ/株灌注)、混用等(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 50mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 天敵への影響大
ミカンキイロアザミウマ				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
ミナミキイロアザミウマ			ミナミキイロアザミウマの項参照										

ピーマン

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハダニ類	(防除上のポイント) ○ 発生初期に丁寧に散布する。 ○ 系統の異なる薬剤によるローテーション防除を行う。	○ 圃場内外の除草に努め、隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 ○ 寄生を受けた前作の処分や雑草の刈り払いなどは、ハダニの離脱、移動も考慮し、適切に実施する。 ○ 発生初期は一部の株に集中的に発生する傾向があるので、早期発見に努める。	発生初期	6		コロマイト乳剤	1:ミルベﾒｸﾁﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アグリメック	1:アバﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				25A		スターマイトフロアブル	1:シエノピラフェン	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25A		ダニサラバフロアブル	1:シフルメトフェン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				20B		カネマイトフロアブル	1:アセキノシル	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ピフェナゼート	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25B+21A		ダブルフェースフロアブル	1:ピフルブミド2:フェンピロキシメート	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25B		ダニコングフロアブル	1:ピフルブミド	3,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド2:スピノサド	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
チャノホコリダニ	(発生の特徴) ○ 生長点や新葉に多く寄生する。 (防除上のポイント) ○ 発生初期に、生長点等によくかかるよう散布する。	○ 芯止まり株を見つけたら速やかに除去し、適切に処分する。	発生初期	6		アニキ乳剤	1:レピﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				25A		スターマイトフロアブル	1:シエノピラフェン	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェンピラドﾞ	1,000倍	収穫前日まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛、皮膚かぶれ
				un	M10	モレスタン水和剤	1:キノキサリン系	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				un	M10	パルミノ	1:キノキサリン系	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				20B		カネマイトフロアブル	1:アセキノシル	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:スピロテトラマト	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミド	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 天敵への影響大

ピーマン

障害名 発生原因	症　状	対　策	本障害と類似した病気の症状	
			病害名	症　状
しり腐果 （直接の原因は石灰欠乏である。カリウムや窒素の多い場合や高温乾燥で発生しやすい。）	果実の側面に黒褐色でややくぼんだ斑点ができ、腐敗したようになる。	○窒素質肥料の過用を避ける。 ○土壌を乾燥させ過ぎない。 ○応急対策として、カルクロン、スイカル、マイルドカルシウム等の葉面散布用カルシウム肥料の葉面散布を行う。	炭疽病	病斑は同心輪紋を生じ、灰色の中央部分に小黒点粒を生じる。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
うどんこ病	(発生の特徴) ○ 葉では、新葉の葉裏から発生する。 ○ 症状が進行すると、発病葉は巻き上がり、スプーン状になる。 (防除上のポイント) ○ 苗床での防除を徹底する。 ○ 予防散布及び発病初期の散布を主体とする。 ○ 展着剤は必ず加用し、葉裏に十分散布する。	○ 圃場内に被害残渣を残さない。 ○ 発病した茎葉は速やかに除去する。 ○ 窒素過多を避けるとともに肥切れさせないよう、適正な肥培管理を行う。 ○ 密植、株の過繁茂を避ける。	育苗期～発病初期		M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	育苗期(定植前)	5回以内	普	△	○ 回数注意
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	育苗期(定植前)	5回以内	普	△	○ 回数注意
					M7+19	ダイアメリットDF	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	2,000倍	育苗期(定植前)	1回	普	△	○ 回数注意
					M7+19	ダイアメリットDF	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	2,000倍	収穫開始14日前まで	3回以内	普	△	○ 回数注意
					M1	サンヨール	1:DBEDC	500～1,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	○	
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	ラリー乳剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	4,000～8,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	サンリット水和剤	1:ｼﾒｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ｼﾞﾌｪﾉｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					U6+3	パンチョTF顆粒水和剤	1:ｼﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ2:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					19	ポリオキシンAL乳剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,000倍	収穫開始14日前まで	3回以内	普	○	
					19	ポリオキシンAL水溶剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	5,000倍	収穫開始14日前まで	3回以内	普	○	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾟﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾟﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
					NC	カリグリーン	1:炭酸水素ｶﾘｳﾑ	800～1,000倍	収穫前日まで	―	普	○	
					NC	ハーモメイト水溶剤	1:炭酸水素ﾅﾄﾘｳﾑ	800～1,000倍	収穫前日まで	―	普	△	
				un	M10	モレスタン水和剤	1:ｷﾉｷｻﾘﾝ系	3,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					50	クロスアウトフロアブル	1:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	3,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					M7+50	ラミック顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 回数注意
					U13+9	ショウチノスケフロアブル	1:ﾌﾙﾁｱﾆﾙ2:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤、くん煙剤、微生物農薬、気門封鎖剤の項参照							
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)多湿条件で発生する。 (防除上のポイント) ○ 予防散布を行う(発病後は効果が上がりにくい)。 ○ 発病後は7～10日間隔で防除する。	○ 花弁・果実・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。 ○ 密植を避ける。	発病前～発病初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,500倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで(生育期)	5回以内	普	△	○ 回数注意
					9	フルピカフロアブル	1:ﾒﾊﾟﾆﾋﾟﾘﾑ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					17+12	ジャストミート顆粒水和剤	1:ﾌｪﾝﾍｷｻﾐﾄﾞ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					M7+50	ラミック顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 回数注意
						銅剤及び混合剤、くん煙剤、微生物農薬の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
芽枯病	(発生の特徴) ○ 長期株冷栽培で発生しやすい。	○ 排水、換気に努める。	土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
炭疽病	(防除上のポイント) ○ 苗床での防除を徹底する。 ○ ハウスに保菌株を持ち込まない。 ○ 炭疽病の防除対策の項参照	(植付前) ○ 無病圃の株を親株とする。 ○ 地床育苗の場合には、排水の良い圃場を選定する。 ○ 高畝とする。 ○ プランターで育苗する等、親株栽培時から雨よけ栽培を行う。 (育苗期) ○ 発病株は周辺株の小葉に染みや斑点が生じるまでに除去し、二次伝染を防ぐ。 ○ 雨よけ栽培を行う。頭上灌水によっても発病するため注意する。 ○ 窒素過多を避ける。 (本圃定植後) ○ 萎凋株が完全に枯死するまで放置しない。 ○ 補植を徹底する。本圃で生じたランナー先の子苗を誘引する。	仮植栽培期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	仮植栽培期、但し収穫76日前まで	6回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	仮植栽培期、但し収穫76日前まで	6回以内	普	△	
					M3	アントラコール顆粒水和剤	1:ﾌﾟﾛﾋﾟﾈﾌﾞ	500倍	仮植栽培期	6回以内	普	△	
			育苗期		M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	育苗期(定植前)	5回以内	普	△	○ 回数注意
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	育苗期(定植前)	5回以内	普	△	○ 回数注意
					M9	デランフロアブル 銅剤及び混合剤の項参照	1:ｼﾞﾁｱﾉﾝ	1,000倍	育苗期	2回以内	劇	×	
			発病初期		10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫開始21日前まで	3回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	2,000倍	収穫前日まで(生育期)	5回以内	普	△	○ 回数注意
					M7+11	ファンベル顆粒水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩2:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 回数注意
					M4	オーソサイド水和剤80	1:ｷｬﾌﾟﾀﾝ	800倍	収穫開始14日前まで	5回以内	普	×	
						微生物農薬の項参照							
			床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
じめじや病の	(発生の特徴) ○ 病斑部が灰白色となる。	○ 発病葉を除去する。	仮植栽培期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	仮植栽培期、但し収穫76日前まで	6回以内	普	△	
輪斑病	(発生の特徴) ○ 古葉に発生する。	○ 発病葉を除去する。	育苗期		M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	育苗期(定植前)	5回以内	普	△	○ 回数注意
			初発病期		7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
萎黄病	(発生の特徴) ○ 土壌伝染、苗伝染する。 ○ 新葉が黄化し、小葉の1～2枚が奇形となり、ねじれたように展開してくる。 ○ クラウンの導管部に褐変が見られる。 ○ 萎黄病の防除対策の項参照	○ 健全な親株から採苗する。 ○ 無汚染圃場で栽培する。 ○ 発病株は速やかに除去し、圃場外で適切に処分する。	植付前			土壌病害虫防除法の項参照							
			仮植時及び仮植栽培期										
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	300～500倍	仮植時及び仮植栽培期	3回以内	普	△	○ 3ℓ/㎡灌注 薬剤選択注意
			育苗期		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	500倍	育苗期	3回以内	普	△	○ 50～100mℓ/株灌注 薬剤選択注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
疫病	(発生の特徴) ○ クラウンの症状は炭疽病と類似する。 ○ 品種「さがほのか」は、本病に特に弱い。 ○ 主要な病原菌は、 *Phytophthora nicotianae* (フィトフトラ　ニコチアナ) *P. cactorum* (フィトフトラ　カクトラム)	○ 灌水過多を避け、排水を良くする。 ○ 密植を避ける。 ○ 被害株は速やかに除去する。	育苗期		M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	1,000倍	育苗期	3回以内	普	△	○ 50mℓ/株散布
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	500～1,000倍	育苗期	2回以内	普	△	○ 50mℓ/株・株元灌注
					21	オラクル顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000～3,000倍	育苗期	3回以内	普	△※	○ 50mℓ/株土壌潅注
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	育苗期	苗床:2回以内	普	○	
			開花前まで		U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	500倍	開花前まで	2回以内	普	○	○ 50～100mℓ/株灌注
			発病初期		21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	500～1,000倍	生育期(但し、収穫30日前まで)	2回以内	普	△	○ 100mℓ/株・株元灌注
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	生育期(但し、収穫前日まで)	本圃:2回以内	普	○	
			床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
ネグサレセンチュウ			床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
イチゴメセンチュウ		○ 発症株から採苗しない。 ○ 発症苗は定植しない。 ○ 発症株は抜き取り、適切に処分する。 ○ 連作を避ける。											
コガネムシ類幼虫	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、ドウガネブイブイである。 ○ 本圃では、秋季と春季に被害がみられる。	○ 過度な堆肥の施用は避ける。	発生前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	植付時(仮植床)	1回	普	×	○ 土壌混和(仮植床)
				1B		カルホス微粒剤F	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	9kg/10a	植付時	1回	劇	△	○ 土壌表面散布土壌混和処理(仮植床)
				1B		カルホス乳剤	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	1,000～1,500倍	植付後	1回	劇	△	○ 3ℓ/㎡灌注(仮植床)
				1B+1A		ランダイヤ粒剤	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ2:ﾒｿﾐﾙ	6～9kg/10a	植付時(仮植床)	1回	劇	△	○ 土壌混和(仮植床)
				3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	6kg/10a	植付時(仮植床)	1回	劇	×	○ 全面土壌混和(仮植床) 合ピレ(注)(P.15)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1,000倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 25～50mℓ/株灌注、混用等(注)(P.26) 登録はコガネムシ類
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、ワタアブラムシである。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内外の除草に努める。 ○ 本圃では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、有翅虫の侵入抑制に有効(1mm目以下で侵入量を減らす効果)。	発生前	23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 25～50mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	250倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 25mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1,000倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 25～50mℓ/株灌注、混用等(注)(P.26)
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5～1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類			発生初期	4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5～1g/株	生育期(定植30日後まで)但しマルチ被覆直前まで	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		バリアード顆粒水和剤	1:ﾁｱｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				9B		チェス顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	1番花の開花まで	1回	劇	×	○ 目に刺激痛
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
						くん煙剤の項参照							
コナジラミ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、東中予はタバココナジラミ、南予はオンシツコナジラミである。 ○ 成幼虫とも葉裏に寄生。 ○ 上位葉には成虫・卵、中位葉以下には幼虫が寄生する。 (防除上のポイント) ○ 葉裏に十分散布する。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内外の除草に努める。 ○ 本圃では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効(1㎜目以下(0.4mm目以下が望ましい))。	発生前	23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 25～50mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	250倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 25mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1,000倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 50mℓ/株灌注、混用等(注)(P.27)
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	21A		サンマイトフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000～1,500倍	収穫開始3日前まで	1回	劇	×	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		バリアード顆粒水和剤	1:ﾁｱｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				9B		チェス顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
カキノヒメヨコバイ	(発生の特徴) ○ 主に6～8月の育苗期に発生する。 ○ 展開葉に葉脈間の退緑斑や湾曲症状などの被害を与える。		発生初期	21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	1番花の開花まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 野外では越冬できず、施設内で越冬する。 ○ 8月以降発生が多くなり、年5～6世代発生する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと除去し、処分する。 ○ 花芽を食害している齢期の進んだ幼虫も、見つけ次第捕殺する。 ○ 本圃では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効。	発生前	28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1,000倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 25～50mℓ/株灌注、混用等(注)(P.27)
			発生初期	15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	3,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハスモンヨトウ				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 天敵への影響大
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体は、ヒラズハナアザミウマであるが、一部でミカンキイロアザミウマの発生も見られる。 ○ 成虫・幼虫が花や幼果に寄生し、表面を加害する。 ○ 3月以降に密度が増加する。 (防除上のポイント) ○ 発生に気づいたら、早目に防除する。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内外の除草に努める。 ○ 本圃では、ハウス開口部の防虫ネット等での被覆は、成虫の侵入抑制に有効(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))。	発生前	23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 50mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	250倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 25mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1,000倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 50mℓ/株灌注、混用等(注)(P.27)
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	1番花の開花まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 天敵への影響大
						くん煙剤の項参照							
ミカンキイロアザミウマ			発生初期	3A		アーデント水和剤	1:ｱｸﾘﾅﾄﾘﾝ	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△※	○ 合ピレ(注)(P.15)
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
ハダニ類	(防除上のポイント) ○ 苗床での防除を徹底し、本圃にハダニ類を持ち込まない。 ○ 初期防除を徹底し、多発時には1週間ごとに2～3回防除する。 ○ 葉裏にかかるよう散布する。 ○ いちごナミハダニ防除薬剤の効果(参考資料P.34)参照。	○ 近接する発生源の影響が大きいので、育苗床・圃場内外の除草に努める。 ○ 隣接地に寄生を受けた作物を放置しない。 ○ 雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱、移動も考慮して適切に行う。 ○ 発生初期には下位葉での発生が多いので、早めに下位葉を除去する。 ○ 高密度になりクモの巣状になった寄生葉は、早期に除去し、適切に処分する。	発生前	6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	育苗期	2回以内	劇	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 50mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	250倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 25mℓ/株灌注、薬害等(注)(P.26)
			発生初期	6		コロマイト水和剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 天敵への影響大
				25B		ダニコングフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾟﾐﾄﾞ	3,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				25B+21A		ダブルフェースフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾟﾐﾄﾞ2:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				33		ダニオーテフロアブル	1:ｱｼﾉﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 混用等(注)(P.27)
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				(殺卵効果主体)									
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
						気門封鎖型薬剤、くん煙剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ホコリダニ類	(防除上のポイント) ○ 年内に発生が認められた場合は、早急に防除する。 ○ ハダニ類登録薬剤では、マイトコーネ、ダニコング、ダニオーテ、気門封鎖型薬剤の効果は低い。	○ 葉に引きつったような奇形症状が出た苗は、早めに処分する。	発生初期	21A 25A		サンマイトフロアブル スターマイトフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ 1:ｼｴﾉﾋﾟﾗﾌｪﾝ	1,000～1,500倍 2,000倍	収穫開始3日前まで 収穫前日まで	1回 2回以内	劇 普	× △	○ 登録はシクラメンホコリダニ
クロバネキノコバエ類	(発生の特徴) ○ 成虫は、堆肥等の有機物に誘引され、産卵する。 ○ 幼虫は、主に地際部や地下部を加害する。 ○ 花にも寄生し、食害することがある。	○ 成虫は有機物に誘引されるので、有機物の多量施用を避ける。 ○ 堆肥は完熟堆肥を使用する。	発生初期	5 21A 15	39	ディアナSC ハチハチフロアブル カスケード乳剤	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ 1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ 1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,500倍 1,000倍 4,000倍	収穫前日まで 1番花の開花まで 収穫前日まで	2回以内 1回 3回以内	普 劇 普	△ × △	○ 目に刺激痛 ○ IGR剤(注)(P.15)
ナメクジ類	(防除上のポイント) ○ 主に夜間に活動する。 ○ 水分の多い柔らかい部分を好んで食害する。		発生初期	un		スラゴ メタアルデヒド剤の項参照	1:燐酸第二鉄	1～5g/㎡	発生時	ー	普	○	

障害名 発生原因	症　状	対　策	本障害と類似した病気の症状	
			病害名	症　状
チップバーン (カルシウム欠乏症)	葉縁やがくの先端が褐色となり、その部分が枯死する。 葉は、その後も生育するが、しわが寄ったり、引きつったりする。	○窒素質肥料の過用を避ける。 ○土壌を乾燥させ過ぎない。 ○応急対策として、葉面散布用カルシウム肥料の葉面散布を行う。	炭疽病	小葉に大型病斑として葉縁から黒色の葉枯れを生じることがある。 本症状は、多湿条件が続いた時に発生しやすい。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、TuMV、CMV ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病。 ○ 幼苗期に罹病すると、被害が大きい。 (防除上のポイント) ○ アブラムシ類の防除を徹底する。	(耕種的防除法) ○ 耐病性品種を選ぶ。 ○ 秋まきは、なるべく遅まきとする。 ○ 間引きは発病株(新葉に緑色の濃淡がはっきりとした症状として見られる)から行う。 ○ 多発地では間引き時期をなるべく遅らせる。	アブラムシ類防除の項										
軟腐病	(発生の特徴) ○ 病原菌は傷口から侵入する。 (防除上のポイント) ○ キスジノミハムシ、コオロギ、土壌線虫を防除する。 ○ 病原菌は傷口から侵入するので管理作業や降雨の後に防除する。	○ アブラナ科作物の連作を避ける。 ○ 低湿地を避け、排水を良くする。 ○ 高温多雨時期に発生が多いので春まきはなるべく早く、秋まきはなるべく遅まきする。 ○ 発病株と被害残さを圃場外へ持ち出し処分する。	生育期		31	スターナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	
					31+M1	ナレート水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:有機銅	800～1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	×	
					24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					31+25	マテリーナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					31+24	カセット水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					24+U18	カスミンバリダシン液剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○トマト・きくへの飛散注意。
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
黒斑細菌病	(発生の特徴) ○ 台風等の強風雨後に多発しやすい。 (防除上のポイント) ○ 発病初期に防除する。	○ アブラナ科作物の連作をさける。 ○ 健全な種子を使用する。 ○ 肥切れしないようにする。 ○ 発病株と被害残さを処分する。 ○ 低湿地を避け、排水を良くする。	生育期		24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					31+24	カセット水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
萎黄病	(発生の特徴) ○ 青首品種で発生が多い。	○ アブラナ科作物の連作を避ける。 ○ 発病圃場の土壌は伝染源となるので機械・作業靴等につけて持ち込まないようにする。 ○ 高温期に播種する作型で発生が多いので、春まきはなるべく早く、秋まきはなるべく遅まきする。 ○ 耐病性品種を選択する。 ○ 発病株と被害残さを処分する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
根腐病	(発生の特徴) ○ 亀裂褐変症のうち、リゾクトニア属菌が原因のもの。 ○ 亀裂褐変症は白首品種で発生が多い。	○ アブラナ科作物の連作を避ける。 ○ 高温多湿条件は発病を助長するので、排水対策と過灌水を防止する。 ○ 7～8月どりは多発するため、常発地では作型をずらす。 ○ 発病株と被害残さ(残根)を処分する。 ○ 土壌物理性の不良な場合に多発するので深耕、有機質や石灰質資材を投入する。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			作付前		14	リゾレックス粉剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	20～40kg/10a	は種前	1回	普	△	○ 全面土壌混和、登録は亀裂褐変症(ﾘｿﾞｸﾄﾆｱ菌)
					29	フロンサイド粉剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	30～40kg/10a	は種前	1回	普	△※	○ 全面土壌混和、登録は亀裂褐変症(ﾘｿﾞｸﾄﾆｱ菌) かぶれ注意
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	500mℓ/10a	は種前	1回	普	×	○ 全面散布後土壌混和(液量100～200ℓ/10a)、登録は亀裂褐変症(ﾘｿﾞｸﾄﾆｱ菌)、かぶれ注意
			生育期		7	バシタック水和剤75	1:ﾒﾌﾟﾛﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○ 登録は、亀裂褐変症(ﾘｿﾞｸﾄﾆｱ菌)
					U18	バリダシン粉剤DL	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	20kg/10a	収穫7日前まで	4回以内	普	○	○ 株元散布、登録は亀裂褐変症(ﾘｿﾞｸﾄﾆｱ菌) ○トマト・きくへの飛散注意。
べと病	(発生の特徴) ○ 10～15℃が発病適温であり、多湿条件で多発する。 ○ 根部で「入れ墨症」として発生することがある。 (防除上のポイント) ○ 発病前から定期的に予防散布する。	(耕種的防除法) ○ 密植を避け、通風をよくする。 ○ 肥料切れや樹勢が弱った時に多発するので、肥料を充分に施し肥切れしないようにする。	発病前～			銅剤及び混合剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
白さび病（ワッカ症）	(発生の特徴) ○ 本菌には系統があり、だいこんに寄生するだいこん系はだいこんのみ侵す。 ○ 根部で「ワッカ症」として発生することがある。	○ 耐病性品種を栽培する。 ○ 健全苗を用いる。 ○ 発病葉を発生初期に摘み取り処分する。 ○ 連作はできるだけ避ける。 ○ 窒素肥料の偏用・肥切れさせないよう適正な施肥管理を行う。 ○ 排水を良くし、多湿にしない。	作付前		11+4	ユニフォーム粒剤	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	6～9kg/10a	は種前	1回	普	△	○ 全面土壌混和 登録は白さび病
			発病前～発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	×	○ 登録は白さび病・ワッカ症
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 登録は白さび病・ワッカ症
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 登録は白さび病・ワッカ症
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫45日前まで	3回以内	普	△※	○ 登録は白さび病 薬害等(注)(P.26)
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ 登録は白さび病・ワッカ症
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 登録は白さび病・ワッカ症
						銅剤及び混合剤の項参照							
センチュウ類		○ 発生地での連作を避ける。 ○ 休閑や前作に対抗植物(マリーゴールド、ヘイオーツ等)の栽培を行う。											
			本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
キスジノミハムシ	(防除上のポイント) ○ 軟腐病の発生の多い地帯は本虫の防除を徹底する必要がある。 (留意点) ○ 「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。	○ アブラナ科野菜の連作を避ける。 ○ 暖冬の後、発生しやすいので春先の成虫の発生に注意し、多発地では播種期を遅らせる。	発生前	1B		ラグビーMC粒剤	1:ｶｽﾞｻﾎｽ	20～30kg/10a	は種前	1回	普	△※	○ 全面処理土壌混和
				3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	6～9kg/10a	は種時	1回	劇	×	○ 全面土壌混和 合ピレ(注)(P.15)
				3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	4～9kg/10a	は種時	1回	劇	×	○ 播溝土壌混和 合ピレ(注)(P.15)
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	4～6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	4～6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	9～12kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 全面土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	9～12kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 全面土壌混和
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	6kg/10a	は種時	1回	普	○	○ 播溝土壌混和
				14		パダン粒剤4	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	4kg/10a	は種時	3回以内	劇	×	○ 覆土後土壌表面散布 薬剤選択注意
			発生初期	4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	生育期(但し、収穫30日前まで)	1回	普	△	○ 散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	生育期(但し、収穫30日前まで)	1回	普	△	○ 散布
				14		パダン粒剤4	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	4kg/10a	生育期(但し、収穫7日前まで)	3回以内	劇	×	○ 株元散布 薬剤選択注意
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ダイコンハムシ（ダイコンサルハムシ）	(防除上のポイント) ○ 前年発生したほ場では引き続き発生する傾向にあるので、秋期の成虫の侵入に注意する。		発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※	
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫30日前まで	4回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 薬剤選択注意
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体はニセダイコンアブラムシ、モモアカアブラムシ。 (防除上のポイント) ○ 土壌施用粒剤は残効性が長く、アブラムシ媒介性のウイルス病(TuMV、CMV)の防除に有効。 (留意点) ○ 「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺は除草する。 ○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効。	発生前	4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	3～6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	3kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝処理土壌混和
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	4kg/10a	は種時	1回	普	×	○ 作条混和
			発生初期	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 (防除上のポイント) ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。 (留意点) ○ 「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。 ○ ベイト剤は降雨にあうと効果が減退する。双葉期には薬害がでやすいので注意する。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株の発生がみられたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。	発生前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	は種時	1回	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和
				1B+1A		ランダイヤ粒剤	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ2:ﾒｿﾐﾙ	4～6kg/10a	は種時	1回	劇	△	○ 作条土壌混和
				1B		ネキリエースK	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	3kg/10a	は種時又は定植時	1回	普	△	○ 土壌表面株元処理
				1B		カルホス微粒剤F	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	6kg/10a	は種時～生育初期 但し、収穫30日前まで	1回	劇	△	○ 土壌表面散布土壌混和処理
				3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	は種時～生育初期	4回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
			発生初期	1A		デナポン5%ベイト	1:NAC	3～6kg/10a	収穫30日前まで	4回以内	普	△	○ 株元散布
				22B		アクセルベイト	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	3～6kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ 株元散布
アオムシ	(発生の特徴) ○ 標準和名(モンシロチョウ)。	○ 寒冷紗・不織布などで畝ごとべたがけする。 ○ 見つけ次第捕殺する。	発生前	28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	6kg/10a	は種時	1回	普	○	○ 播溝土壌混和、同時施用(注)(P.27)、回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	6kg/10a	は種時	1回	普	○	○ 播溝土壌混和、回数注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アオムシ	○ 春～初夏及び10～11月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。 (留意点) ○「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。		発生初期	15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	2,500～5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※	○ 幼苗期薬害注意
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	○	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
コナガ	(発生の特徴) ○ 春～初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。 (防除上のポイント) ○ 殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。 ○ ジアミド系薬剤の感受性低下が認められているので注意する。 (留意点) ○「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。	○ 次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分の実施、また、発生放任圃場を作らない。	発生前	28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	6kg/10a	は種時	1回	普	○	○ 播溝土壌混和、同時施用(注)(P.27)、回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	6kg/10a	は種時	1回	普	○	○ 播溝土壌混和、回数注意
			発生初期	15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	2,500～5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※	○ 幼苗期薬害注意
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫30日前まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	○	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
ハイマダラノメイガ	(発生の特徴) ○ 別名(ダイコンシンクイムシ)。 ○ 夏期、高温、乾燥した年に発生が多い。	○ 間引き時に被害株を除去する。 ○ 寒冷紗・不織布などで畝ごとべたがけする。	発生前	28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	6kg/10a	は種時	1回	普	○	○ 播溝土壌混和、同時施用(注)(P.27)、回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	6kg/10a	は種時	1回	普	○	○ 播溝土壌混和、回数注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハイマダラノメイガ	(発生の特徴) ○ 9～10月頃播種する作型に発生が多い。 (留意点) ○「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。		発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		マトリックフロアブル	1:クロマフェノジド	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオシクラム	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:トルフェンピラド	2,000倍	収穫30日前まで	1回	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミゾン	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミド	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミド	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ブロフラニリド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ジクロロメゾチアズ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
ハスモンヨトウ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと除去し、処分する。 ○ 齢期の進んだ幼虫は捕殺する。 ○ 寒冷紗・不織布などで畝ごとべたがけする。	発生初期										
				15		アタブロン乳剤 BT剤の項参照	1:クロルフルアズロン	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
ヨトウムシ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと除去し、処分する。 ○ 齢期の進んだ幼虫は捕殺する。 ○ 寒冷紗・不織布などで畝ごとべたがけする。	発生初期	15		アタブロン乳剤	1:クロルフルアズロン	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		ノーモルト乳剤	1:テフルベンズロン	2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		マトリックフロアブル	1:クロマフェノジド	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミゾン	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	○	
				un		プレオフロアブル	1:ピリダリル	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ブロフラニリド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル BT剤の項参照	1:ジクロロメゾチアズ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
カブラハバチ	(発生の特徴) ○ 風通しが悪かったり、茂りすぎのところで多発する。 (留意点) ○「つまみ菜」「間引き菜」として利用する場合、使用できる薬剤が限られているため注意する。	○ 幼虫を捕殺する。 ○ 密植を避け、通風を良く ○ 周辺のアブラナ科雑草(ナズナ・タネツケバナなど)を除草する。	前発生	28		プリロッソ粒剤オメガ	1:シアントラニリプロール	6kg/10a	は種時	1回	普	○	○ 播溝土壌混和、同時施用(注)(P.27)
			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	1回	劇	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミゾン	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				30		ブロフレアSC	1:ブロフラニリド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:チオシクラム	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				14		パダンSG水溶剤	1:カルタップ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 薬剤選択注意
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ジクロロメゾチアズ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	

障害名 発生原因	症状	対策	本障害と類似した病気の症状 病害名	症状
赤しん症 (ホウ素欠乏によるが、高温乾燥条件により助長される。)	根部を縦に切断すると中心部に、暗褐色又は黒褐色のすじが入っている。 地上部の生育は正常である。	○0.5～1kg/10aのホウ砂を施用する。 ○土壌を乾燥させすぎない。 ○過リン酸石灰400kg/10aを施用する。	萎黄病	輪生する葉の片側の下葉から黄変し、萎縮症状を示す。 重症株は根部が伸長肥大しない。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
軟腐病	(発生の特徴) ○ 高温多湿条件で発生し、高温期に結球する作型で多く発生する。 ○ 結球期以降に発生が多い。 ○ 結球期に温暖・多雨の場合、発生が多くなる。 (防除上のポイント) ○ 薬剤散布時の展着剤加用で効果が高まる。 ○ ヨトウムシ、アオムシ等の食害痕も発生を助長するので防除を徹底する。	○ 土壌伝染するので、健全なほ場、用土を使用する。 ○ 傷口から侵入するので、傷を生じないような管理作業を心がける。 ○ 発病する作物の連作を避ける(アブラナ科、ナス科、キク科、ユリ科等)。 ○ 低湿地を避け、排水を良くする。 ○ 発病株と被害残さを圃場外へ持ち出し処分する。	発病前～発病初期		U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	800倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	○トマト・きくへの飛散注意。
					31	スターナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					31+14	ソタールWDG	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					31+M1	ナレート水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:有機銅	800～1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	
					24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					31+24	カセット水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					24+U18	カスミンバリダシン液剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	800倍	収穫7日前まで	4回以内	普	○	○トマト・きくへの飛散注意。
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
黒腐病	(発生の特徴) ○ 秋に降雨が多いと多発しやすい。 ○ 幼苗期では、子葉頂部で発病し、やがて枯れる。 ○ 本圃においては、主に下葉から発生し、葉縁部にV字型の病斑を形成する。 (防除上のポイント) ○ 薬剤散布時の展着剤加用で効果が高まる。	○ アブラナ科作物の連作を避ける。 ○ 発病株は早期除去する。 ○ 低湿地を避け、排水を良くする。 ○ 耐病性品種を選択する。	発病初期～		U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	800倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	○トマト・きくへの飛散注意。
					31+M1	ナレート水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:有機銅	800倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	
					41+25	アグリマイシン－100	1:ｵｷｼﾃﾄﾗｻｲｸﾘﾝ2:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					25+M1	ドーマイシン水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩2:有機銅	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×※	
					24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					31+24	カセット水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
						銅剤及び混合剤の項参照							
苗立枯病	(発生の特徴) ○ 多湿条件下で発生が多い。 ○ 高温時にリゾクトニア属菌による被害が多く、低温時にピシウム属菌による被害が多い。	○ 床土は無病土を使用する。	床土消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
株腐病	(発生の特徴) ○ リゾクトニア属菌による病害。 ○ 地際部が褐変し、繊維質のみとなり、腐敗する。 ○ くもの巣状のかびを多湿条件で生じる。 ○ 結球全面に腐敗が広がるが、腐敗は表面の数枚程度であり、結球内部へはほとんど進展しない。 ○ 結球～収穫期に降雨が続くと発生が多い。	○ 発病株は早期除去する。 ○ 低湿地を避け、排水を良くする。	発病前～発病初期		29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	500mℓ/10a	定植前	1回	普	×	○ 土壌全面散布(液量150～200ℓ/10a)、かぶれ注意
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					14	リゾレックス水和剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	500～1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					7	モンカットフロアブル40	1:ﾌﾙﾄﾗﾆﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					31+14	ソタールWDG	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	800倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	○トマト・きくへの飛散注意。
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
			土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
菌核病	(発生の特徴) ○ 発病後は急速にまん延するので予防散布を徹底する。 ○ 低温(18～20℃)・多湿条件で発病する。 ○ 発病部には、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミの糞状の菌核を形成する。 ○ 悪臭がないことで軟腐病と区別可能である。 ○ 結球期から発生することが多く、初めに下葉から発生し、後に結球部が腐敗する。	○ 発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。 ○ 排水を良くする。 ○ 夏期に1か月程度、湛水する。	すきこみ時～定植前			微生物農薬の項参照							
			作付前		29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	500mℓ/10a 希釈水量:100～200ℓ/10a	は種又は定植前	2回以内	普	×	○ 全面散布土壌混和 2回以内(但し、苗床では1回以内、本圃では1回以内)
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
			発病前～発病初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000～1,500倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	6回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫28日前まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
べと病	(発生の特徴) ○ 10～15℃が発病適温で、多湿条件で発生が多くなる。 ○ 肥料切れや草勢が弱った時に多発しやすい。 ○ 外葉から下葉に発生し、淡褐色の不定形の病斑が生じる。 ○ 育苗中に発病すると病気の進展が早く、子葉の裏側にかびが生じて生育が阻害される。	○ 肥培管理に注意し、収穫期まで肥切れしないようにする。 ○ 密植を避け、通風をよくする。 ○ 発病する作物の連作を避ける(キャベツ、ブロッコリー、カリフラワー)。	発病初期～		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	500～600倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000～3000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					21+49	ゾーベックエンテクタSE	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ2:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					49+40	オロンディスウルトラSC	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾟﾘｶﾙﾌﾟｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750～1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾟﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750～1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾟﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△※	
					1+M5	ダコレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					22	エトフィンフロアブル	1:ｴﾄﾎﾞｷｻﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							

キャベツ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
根こぶ病	(発生の特徴) ○ だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 ○ 根こぶが腐敗すると大量の休眠胞子が放出される。 ○ 休眠胞子は表土15cmまでに多い。 ○ 本菌の生存期間は約5～7年、水中では約2年間。 ○ 薬剤を土壌混和する場合は、土壌が乾燥時実施する。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 多発圃場での作付を避ける。 ○ 発生圃場で使用した農機具の泥を洗い流す。 ○ 排水を良くし高畝とする。 ○ アブラナ科雑草(タネツケバナ、ナズナ等)を除草する。 ○ 発病株は根こぶが腐敗する前に除去し、適正に処分する。 ○ 市場性を考慮しながら抵抗性品種を作付する。 ○ おとり作物の葉だいこん等を間作する。 ○ 石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。	床土消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			作付前		M5	ダコソイル	1:TPN	30～40kg/10a	は種又は定植前	1回	普	×	○ 作条及び全面施用土壌混和
					M5	ダコソイル	1:TPN	5～10g/植穴1穴	は種又は定植前	1回	普	×	○ 植穴処理土壌混和
					36	ネビジン粉剤	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	20～30kg/10a	は種又は定植前	2回以内	普	○※	○ 全面土壌混和
					36	ネビジン粉剤	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	20kg/10a	は種又は定植前	2回以内	普	○※	○ 作条土壌混和
					36	ネビリュウ	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	20～30kg/10a	は種又は定植前	2回以内	普	○※	○ 全面土壌混和
						注意事項:フルアジナム使用回数2回以内(但し、苗床では1回以内、本圃では1回以内)							
					29	フロンサイド粉剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	30～40kg/10a	は種又は定植前	2回以内	普	△※	○ 全面土壌混和、かぶれ注意
					29	フロンサイド粉剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	15～20kg/10a	は種又は定植前	2回以内	普	△※	○ 作条土壌混和、かぶれ注意
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	500mℓ/10a	は種又は定植前	2回以内	普	×	○ 100～200ℓ/10aの水で希釈し全面散布後土壌混和、かぶれ注意
						注意事項:アミスルブロム:8回以内(但し、苗床での土壌混和は2回以内、灌注は1回以内、本圃での土壌混和は2回以内、散布は4回以内)							
					21	オラクル顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	200～500倍	定植前	1回	普	△※	○ 使用方法(注)(P.27)
					21	オラクル顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	300g/10a	定植前	2回以内	普	△※	○ 100ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和
					21	オラクル粉剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	30kg/10a	定植前	2回以内	普	○※	○ 全面土壌混和
					21	オラクル粉剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	20kg/10a	定植前	2回以内	普	○※	○ 作条土壌混和
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	500倍	定植前日～当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体はダイコンアブラムシ、モモアカアブラムシ。 ○ ダイコンアブラムシは早春から初夏、モモアカアブラムシは春と秋に多い。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺は除草する。 ○ 育苗中は寒冷紗等被覆により有翅虫の飛来を防止する。 ○ シルバーポリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効。	発生前	4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.25g/株	は種時	1回	普	△	○ 覆土後セル成型育苗トレイまたはペーパーポットの上から散布する。
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 植元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	育苗期	1回	普	△	○ 株元散布
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1～2g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元処理
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	50g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	100倍	育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.27)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)

キャベツ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類			発生前	4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5～1g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	○株元散布
				4A+5		ガードナーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	100倍	定植3日前～定植当日	1回	劇	△	○使用方法(注)(P.27)
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	1g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴処理土壌混和
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	定植時	1回	普	×	○植穴処理
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○植穴土壌混和
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1g/株	定植時	1回	普	△	○株元散布
			発生初期	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	5回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	5回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○眼に刺激痛、かぶれ注意
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬害等(注)(P.26)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9D		セフィーナDC	1:ｱﾌｨﾄﾞﾋﾟﾛﾍﾟﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ (防除上のポイント) ○前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○被害株の発生がみられたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。	発生前	4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○株元処理
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.27)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○使用方法(注)(P.27)
				1B		カルホス微粒剤F	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	6kg/10a	は種時又は植付時	1回	劇	△	○土壌表面散布土壌混和処理
				3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	4kg/10a	定植時	1回	劇	×	○全面土壌混和
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	4,000～8,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	×	○株元灌注0.5L/㎡
				1B		ネキリエースK	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	3kg/10a	は種時又は定植時	1回	普	△	○土壌表面株元処理
				1A		デナポン5%ベイト	1:NAC	3～6kg/10a	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○株元散布
				3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	5回以内	普	○※	○株元散布 合ピレ(注)(P.15)
				22B		アクセルベイト	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	3～6kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○株元散布

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アオムシ	(発生の特徴) ○ 標準和名(モンシロチョウ) ○ 春～初夏及び10～11月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元処理
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、回数注意、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27) 展着剤は使用しない。
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	500倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 苗床1平方メートルあたり2ℓ灌注、回数注意(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5～1g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2～3g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2～3g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和

キャベツ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アオムシ			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ IGR剤(注)(P.15)
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
コナガ	(発生の特徴) ○ 春～初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。 (防除上のポイント) ○ 殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。 ○ ジアミド系薬剤の感受性低下が認められているので注意する。	○ 次世代の発生源となる収穫残さの早期処分、発生放任圃場を作らない。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法、回数注意(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.27)
			発生前	4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布、回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.27)、回数注意
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)、回数注意
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 株元散布、回数注意(注)(P.27)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
コナガ			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫14日前まで	4回以内	劇	×	○ 薬剤選択注意
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
ハイマダラノメイガ	(発生の特徴) ○ 別名(ダイコンシンクイムシ)。 ○ 夏期の高温少雨で多発する。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	2B		プリンス粒剤	1:ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	20～30g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊(30×60cm、使用土壌約3～4ℓ)	は種前	1回	普	△	○ 均一混和
				2B		プリンス粒剤	1:ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	20～30g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊(30×60cm、使用土壌約3～4ℓ)	は種時～定植前	1回	普	△	○ 均一散布
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.27)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27) 展着剤は使用しない。
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 株元散布、回数注意(注)(P.27)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハイマダラノメイガ			発生初期	15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
ヨトウムシ	(発生の特徴) ○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1000倍	は種時 ～育苗期後半	1回	普	△	○ 苗地床1㎡当たり2ℓ灌注、回数注意
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27) 展着剤は加用しない。
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日 ～定植時	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)

キャベツ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ヨトウムシ			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布、回数注意
			発生初期	5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				22B		アクセルベイト	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	3～6kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 株元散布
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
シロイチモジヨトウ	(発生の特徴) ○ 4～10月に数回発生する。春から秋に高温少雨であると多発する。蛹で越冬する。 ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分。発生放任圃場を作らない。	発生初期	13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾌﾟｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 5～11月にかけて数世代発生する。 (防除上のポイント) ○ 夏季以降の発生が多い。蛹で越冬する。 ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分。発生放任圃場を作らない。	発生初期	15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				6+15		アファームエクセラ顆粒水和剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	1,000～1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	○ IGR剤(注)(P.15)
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 外葉が加害されるとかすり状となる。 ○ 結球部が加害されると、食害部位がカルス状になり、その後褐色～黒色化する。	○ 圃場周辺の除草を行う。	発生前	5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	50～200倍	育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A+5		ガードナーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	100倍	定植3日前～定植当日	1回	劇	△	○ 薬害等(注)(P.26)
			発生初期	14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
ネギアザミウマ	(発生の特徴) ○ 外葉が加害されるとかすり状となる。 ○ 結球部が加害されると、食害部位がカルス状になり、その後褐色～黒色化する。 ○ 6～8月に被害が多い。		発生前	4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝処理土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元処理
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.27)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)

キャベツ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ネギアザミウマ			発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	5回以内	劇	△	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6+15		アファームエクセラ顆粒水和剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	○ IGR剤(注)(P.15)
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
ナメクジ類 カタツムリ類	(発生の特徴) ○ 主に夜間に活動する。 ○ 水分の多い柔らかい部分を好んで食害する。		発生初期	un		スラゴ	1:燐酸第二鉄	1～5g/㎡	発生時	ー	普	○	○ 発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫14日前まで	4回以内	劇	×	○ 薬剤選択注意
						メタアルデヒド剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
軟腐病	(防除上のポイント) ○ 食害は病原細菌の侵入口となるので、食葉性害虫は早めに防除する。 ○ 予防散布を徹底する。	○ 発病する作物の連作を避ける(アブラナ科、ナス科、キク科、ユリ科等)。 ○ 低湿地を避け、排水を良くする。 ○ 発病株と被害残さを圃場外へ持ち出し処分する。	発病前～		31	スターナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					31+M1	ナレート水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:有機銅	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	
					U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○トマト・きくへの飛散注意。
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
花蕾腐敗病	(発生の特徴) ○ 発蕾時に曇天や降雨が続いた場合に多発しやすくなる。	○ アブラナ科作物の連作を避ける。 ○ 低湿地を避け、排水を良くする。	発病前～		31	スターナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
黒腐病	(発生の特徴) ○ 秋雨時や台風通過後に多発しやすい。	○ アブラナ科作物の連作を避ける。	作付前		P2	オリゼメート顆粒水和剤	1:ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ	100倍	定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
	(防除上のポイント) ○ 食害は病原細菌の侵入口となるので、食葉性害虫は早めに防除する。 ○ 予防散布を徹底する。	○ 低湿地を避け、排水を良くする。	初期～発病		31+24	カセット水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					31+24	カセット水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○トマト・きくへの飛散注意。
						銅剤及び混合剤の項参照							
黒斑細菌病	(発生の特徴) ○ 秋雨時や台風通過後に多発しやすい。	○ アブラナ科作物の連作を避ける。	作付前										
					P2	オリゼメート顆粒水和剤	1:ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ	100倍	定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
	(防除上のポイント) ○ 食害は病原細菌の侵入口となるので、食葉性害虫は早めに防除する。 ○ 予防散布を徹底する。	○ 低湿地を避け、排水を良くする。	発病前～発病初期										
					31	スターナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
病苗立枯	(発生の特徴) ○ 多湿条件下で多発する。 ○ 徒長苗は罹病しやすい。	○ 床土は無病土を使用する。	育苗期			苗立枯病の項参照							
			発生初期		14	リゾレックス水和剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	500倍	収穫21日前まで	1回	普	△	○ 3ℓ/㎡株元潅注。登録は苗立枯病(リゾクトニア菌)
菌核病	(発生の特徴) ○ 発病後は急速にまん延するので予防散布を徹底する。 ○ 低温(18～20℃)・多湿条件で発病する。 ○ 発病部には、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミの糞状の菌核を形成する。 ○ 悪臭がないことで軟腐病と区別可能である。	○ 発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。 ○ 排水を良くする。 ○ 夏期に1か月程度、湛水する。	作付前		7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27) ○ はなやさい類で登録
			発病前～発病初期		7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	出蕾前(但し、収穫21日前まで)	2回以内	普	△	
					1+M5	ダコレート水和剤	1:ﾍﾟﾉﾐﾙ2:TPN	1,000倍	出蕾前(但し、収穫	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	

ブロッコリー

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
べと病	(発生の特徴) ○ 10～15℃が発病適温で、多湿条件で発生が多くなる。 ○ 肥料切れや草勢が弱った時に多発しやすい。	○ 肥培管理に注意し、収穫期まで肥切れしないようにする。 ○ 密植を避け、通風をよくする。 ○ 発病する作物の連作を避ける(キャベツ、ブロッコリー、カリフラワー)。	作付前		11+4	ユニフォーム粒剤	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	9～18kg/10a	定植前	1回	普	△	
			発病初期		11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					22	エトフィンフロアブル	1:ｴﾀﾎﾞｷｻﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	○ はなやさい類で登録
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ はなやさい類で登録
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾟｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ 2:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	2回以内	普	△※	
					49+40	オロンディスウルトラSC	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					21+49	ゾーベックエンテクタSE	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ2:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	2回以内	普	×	
						銅剤及び混合剤の項参照							
根こぶ病	(発生の特徴) ○ だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 ○ 根こぶが腐敗すると大量の休眠胞子が放出される。 ○ 休眠胞子は表土15cmまでに多い。 ○ 本菌の生存期間は約5～7年、水中では約2年間。 ○ 薬剤の土壌混和は、土壌乾燥時に実施する。	○ 床土は無病土を使用。 ○ 多発ほ場での作付を回避する。 ○ 発生圃場で使用した農機具の泥を洗い流す。 ○ 排水を良くし高畝とする。 ○ アブラナ科雑草(タネツケバナ、ナズナ等)を除草する。 ○ 発病株は根こぶが腐敗する前に除去し、適正に処分する。 ○ 市場性を考慮しながら抵抗性品種を作付する。 ○ おとり作物の葉だいこん等を間作する。 ○ 石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。	床土消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			作付前		36	ネビジン粉剤	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	20～30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○ 全面土壌混和、回数(注)
					36	ネビジン粉剤	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	20kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○ 作条土壌混和、回数(注)
					36	ネビリュウ	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	20～30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○ 全面土壌混和、回数(注)
					36	ネビリュウ	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	20kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○ 作条混和、回数(注)
					29	フロンサイド粉剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	30～40kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	○ 全面土壌混和 かぶれ注意
					29	フロンサイド粉剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	15～20kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	○ 作条土壌混和 かぶれ注意
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	500mℓ/10a	定植前	1回	普	×	○ 全面散布後土壌混和(液量100～200ℓ/10a)、かぶれ注意
					21	オラクル顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	200～500倍	定植前	1回	普	△※	○ 使用方法(注)(P.27)
					21	オラクル顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	300g/10a	定植前	2回以内	普	△※	○ 100ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和、回数(注)
					21	オラクル粉剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	30kg/10a	定植前	2回以内	普	○※	○ 全面土壌混和、回数(注)
					21	オラクル粉剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	20kg/10a	定植前	2回以内	普	○※	○ 作条土壌混和、回数(注)
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	定植時	1回	普	×	○ 1m^{2}あたり希釈液3ℓ土壌灌注
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	500倍	定植前日～当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
黒すす病	(発生の特徴) ○ 高温多湿時に発生が多い。	○ 育苗中は高温多湿とならないよう管理し、発病苗は早期に処分する。	前作付		7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ はなやさい類で登録
			発病前～発病初期		7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ はなやさい類で登録
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	出蕾前 但し、収穫21日前まで	2回以内	普	△	
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾟ	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	○ はなやさい類で登録
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	

ブロッコリー

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体はダイコンアブラムシ、モモアカアブラムシ。 ○ ダイコンアブラムシは早春から初夏、モモアカアブラムシは春と秋に多い。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により有翅虫の飛来を防止する。 ○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	発生前	4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.25g/株	は種時	1回	普	△	○ 覆土に均一に混和
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元処理
				4A		ベストガード粒剤	1:ﾆﾃﾝﾋﾟﾗﾑ	50g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布、回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5～1g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A+5		ガードナーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	100倍	定植3日前～定植当日	1回	劇	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
			発生初期	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)

ブロッコリー

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は厳寒期を除いていつでも見られるが、5～9月には異常発生することがある。 (防除上のポイント) ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株の発生がみられたら、その周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し、捕殺する。	発生前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和
				3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	4kg/10a	定植時	1回	劇	×	○ 全面土壌混和 合ピレ(注)(P.15)
				1B		ネキリエースK	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	3kg/10a	定植時～生育初期 但し収穫14日前まで	4回以内	普	△	○ 土壌表面株元処理 合ピレ(注)(P.15)
				3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	5回以内	普	○※	○ 株元散布
				22B		アクセルベイト	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	3～6kg/10a	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ 株元散布
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
アオムシ	(発生の特徴) ○ 標準和名(モンシロチョウ)。 ○ 春～初夏及び10～11月に被害が多い。	○ 育苗中は寒冷紗などの被覆により成虫飛来・産卵を防止する。	発生前	4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後 ～育苗期後半	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半 ～定植時	1回	普	○	○ 回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.27)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半 ～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日 ～定植時	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5～1g/株	定植前日 ～定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△※	
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
						BT剤の項参照							

ブロッコリー

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
コナガ	(発生の特徴) ○ 春～初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。 (防除上のポイント) ○ 殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。 ○ ジアミド系薬剤の感受性低下が認められているので注意する。	○ 次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分の実施、また、発生放任圃場を作らない。 ○ 育苗中は寒冷紗などの被覆により成虫飛来・産卵を防止する。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布、回数注意
				4A+5		ガードナーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	100倍	定植3日前～定植当日	1回	劇	△	○ 使用方法(注)(P.27)
			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△※	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
				4E		フィールドマストフロアブル BT剤の項参照	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布、回数注意
			発生初期	5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
				4E		フィールドマストフロアブル BT剤の項参照	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ はなやさい類で登録

ブロッコリー

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ヨトウムシ	(発生の特徴) ○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。 ○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生初期	5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△※	
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
				4E		フィールドマストフロアブル BT剤の項参照	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
ハイマダラノメイガ	(発生の特徴) ○ 別名(ダイコンシンクイムシ)。 ○ 夏期の高温少雨で多発する。 ○ 7～10月に発生が多くなる。 ○ 幼虫は、生長点付近を食害する。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	2B		プリンス粒剤	1:ﾌｨﾌﾟﾛﾆﾙ	20～30g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴処理土壌混和
			発生初期	6+15		アファームエクセラ顆粒水和剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩2:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	1,000～1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
				4E		フィールドマストフロアブル BT剤の項参照	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ はなやさい類で登録
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 主にネギアザミウマが加害。 ○ 葉が加害されるとかすり状となる。	○ 圃場周辺の除草を行う。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
			発生初期	5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス病	（発生の特徴） ○ 病原ウイルスは、TuMV、CMV。両ウイルスとも虫媒（アブラムシ類）伝染する。露地の早まきでは発病が多くなる。 （耕種的防除法） ○ 耐病性品種を選ぶ。 ○ シルバーポリマルチ等を使用し、アブラムシ類の飛来防止に努める。 ○ はくさいでは播種時から25～35日の寒冷紗被覆は防除効果が大きいが、露地の播種適期より20日以上の早まきは避ける。		発生初期			アブラムシ類防除の項参照							
軟腐病	（発生の特徴） ○ 高温多湿条件で発生し、高温期に結球する作型で多く発生する。 ○ 結球期以降に発生が多い。 ○ 結球期に温暖・多雨の場合、発生が多くなる。 （防除上のポイント） ○ 株元を狙って散布する。 ○ ヨトウムシ、アオムシ等の食害痕も発生を助長するので防除を徹底する。	○ 発病する作物の連作を避ける（アブラナ科、ナス科、キク科、ユリ科等）。 ○ 低湿地を避け、排水を良くする。 ○ 発病株と被害残さを圃場外へ持ち出し処分する。	作付前									
					P2	オリゼメート顆粒水和剤	1:ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ	100倍	定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
			結球初期		31	スターナ水和剤	1:オキソリニック酸	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					31+14	ソタールWDG	1:オキソリニック酸2:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
					31+M1	ナレート水和剤	1:オキソリニック酸2:有機銅	600～1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	×	
					25	アグレプト水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					25+M1	ドーマイシン水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩2:有機銅	600～1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	×※	
					25+1	アタッキン水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩2:チオファネートメチル	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					41+25	アグリマイシン－100	1:オキシテトラサイクリン2:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,500～3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					31+24	カセット水和剤	1:オキソリニック酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
白斑病	（発生の特徴） ○ 下葉から始まり、次第に新葉へ進展する。 ○ 秋から初冬にかけて雨が多いと多発する。 ○ 肥料切れの時に発病しやすい。 （防除上のポイント） ○ 株元の地際付近の葉から発生し始めるので、予防散布を徹底する。	○ 多湿土壌で発生しやすいので、排水不良の改善を図る。 ○ 肥切れしないよう注意する。 ○ 耐病性品種を選択する。	発病初期		1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000～1,500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	×	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.299)
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							
黒斑病	（発生の特徴） ○ 古い葉に発生が多い。 ○ 秋季に雨が多いと発病が多くなる。 ○ 肥料切れの時に発病しやすい。 ○ 早まき栽培で多発しやすい。	○ 肥切れしないよう注意する。 ○ 排水を良くする。 ○ アブラナ科作物の連作を避ける。	発病初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000～1,500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.299)
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	×	
						銅剤及び混合剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
菌核病	(発生の特徴) ○ 発病は低温(18～20℃)、多湿条件で見られる。 ○ 発病部には、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミの糞状の菌核が形成される。 ○ 悪臭がないことで軟腐病と区別できる。 (防除上のポイント) ○ 発病後は急速にまん延するので、予防散布を徹底する。	○ 夏期に水田にすると、土中の菌核の死滅に有効。発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。排水を良くする。	作付前		7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
			発病前～発病初期		1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,500～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1+M5	ダコレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾟﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
白さび病	(発生の特徴) ○ 冷涼で降雨が続くときに多発する。	○ 湿地を避け、排水を良くする。 ○ 窒素質肥料の偏用を避ける。 ○ 発病葉を除去し、適切に処分する。	発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	×	
					21+M5	ドーシャスフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	2,500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					43+40	ジャストフィットフロアブル	1:ﾌﾙｵﾋﾟｺﾘﾄﾞ2:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
べと病	(発生の特徴) ○ 20～24℃が発病適温、多湿条件で発生が多くなる。また、肥料切れや草勢が弱った時に多発しやすい。 (防除上のポイント) ○ 発病初期に、かけむらのないよう丁寧に散布する。	○ 肥培管理に注意し、収穫期まで肥切れしないようにする。 ○ 密植を避け、通風をよくする。	発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	×	
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					21+M5	ドーシャスフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					22	エトフィンフロアブル	1:ｴﾄﾎﾞｷｻﾑ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	1,000倍	収穫30日前まで	1回	普	△	
					27+M3	カーゼートPZ水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000～1,500倍	収穫30日前まで	1回	普	△	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫30日前まで	1回	普	△	
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫30日前まで	1回	普	△	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
					43+40	ジャストフィットフロアブル	1:ﾌﾙｵﾋﾟｺﾘﾄﾞ2:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	5,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					45+40	ザンプロDMフロアブル	1:ｱﾒﾄｸﾄﾗｼﾞﾝ2:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ	1,500～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
					49+11	ゾーベック エンカンティア SE	1:ｵｷｻｼﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					21+49	ゾーベックエンテクタSE	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ2:ｵｷｻｼﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					49+40	オロンディスウルトラSC	1:ｵｷｻｼﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
尻腐病	(発生の特徴) ○ 多犯性であり大部分の野菜に寄生する。 ○ 発病部にくもの巣状の菌糸が見られる。	○ 排水を良くする。 ○ マルチ栽培を行う。	作付前		29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	500mℓ/10a	定植前	1回	普	×	○ 全面土壌散布(散布液量100～200ℓ/10a)、かぶれ注意
			発病前～発病初期		31+14	ソタールWDG	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					14	リゾレックス水和剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
			土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
根くびれ病	(発生の特徴) ○ 幼苗期に発生する。	○ アブラナ科作物の連作を回避する。 ○ 排水を良くする。 ○ 移植栽培で発病が少なくなる。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			作付前		M5	ダコソイル	1:TPN	30～40kg/10a	は種又は定植前	1回	普	×	○ 作条施用土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意
根こぶ病	(発生の特徴) ○ だいこん以外のアブラナ科作物で発病する。 ○ 本菌の生存期間は約5～7年、水中では約2年間。 ○ 根こぶが腐敗すると大量の休眠胞子が放出される。 ○ 休眠胞子は表土15cmまでに多い。 ○ 薬剤を土壌混和する場合は、土壌が乾燥時に実施する。 (防除上のポイント) ○ フルスルファミド剤は、休眠胞子発芽阻害をするため、おとり作物利用の際には使用しない。	○ 床土は無病土を使用する。 ○ 多発ほ場での作付を避ける。 ○ 発生圃場で使用した農機具の泥を洗い流す。 ○ 排水を良くし高畝とする。 ○ アブラナ科雑草(タネツケバナ、ナズナ等)を除草する。 ○ 発病株は根こぶが腐敗する前に除去し、適正に処分する。 ○ 市場性を考慮しながら抵抗性品種を作付する。 ○ おとり作物の葉だいこん等を間作する。 ○ 石灰資材等により土壌pHを7以上(できれば7.2以上)に矯正する。	床土消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			作付前		M5	ダコソイル	1:TPN	30～40kg/10a	は種又は定植前	1回	普	×	○ 全面施用土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意
					M5	ダコソイル	1:TPN	30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	×	○ 作条施用土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意
					M5	ダコソイル	1:TPN	10g/植穴1穴	は種又は定植前	1回	普	×	○ 植穴処理土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意
					29	フロンサイド粉剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	30～40kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	○ 全面土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意
					29	フロンサイド粉剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	15～20kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	○ 作条土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意
					21	オラクル粉剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	30kg/10a	は種前又は定植前	2回以内	普	○※	○ 全面土壌混和
					36	ネビジン粉剤	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	20～30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○ 全面土壌混和、回数注意
					36	ネビジン粉剤	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	20kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○ 全面土壌混和、回数注意
					36	ネビリュウ	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	20～30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	○※	○ 全面土壌混和、回数注意
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	500mℓ/10a	定植前	1回	普	×	○ 全面散布土壌混和 (散布液量100～150ℓ/10a) かぶれ注意
					21	オラクル顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	200～500倍	定植前	1回	普	△※	○ 使用方法(注)(P.27)
					21	オラクル顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	300g/10a	定植前	2回以内	普	△※	○ 100ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和
					21	オラクル粉剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	20kg/10a	定植前	2回以内	普	○※	○ 作条土壌混和
					36	ネビリュウ	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	20kg/10a	定植前	1回	普	○※	○ 作条混和
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	500倍	定植前日～当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
					22	エトフィンフロアブル	1:ｴﾀﾎﾞｷｻﾑ	1.0～1.5ℓ/10a	定植前	1回	普	△	○ 散布液量100～150ℓ/10a 全面処理後土壌混和
			初発生期		21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	1回	普	△	○ 250mℓ/株 灌注処理
センチュウ類			床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
キスジノミハムシ	(防除上のポイント) ○ 成虫防除と幼虫防除を組み合わすと効果が高い。 ○ 軟腐病発生の多い地帯は本虫の防除を徹底する。	○ アブラナ科野菜の連作を避ける。	前発生	28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
			発生初期	1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	劇	×	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激、かぶれ注意
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体はモモアカアブラムシとニセダイコンアブラムシ。 ○ モモアカアブラムシは春と秋、ニセダイコンアブラムシは秋に発生が多い。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ 育苗中は寒冷紗等被覆により有翅虫の飛来を防止する。 ○ シルバーポリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効。	発生前	4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.25g/株	は種時	1回	普	△	○ 覆土後散布
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)、回数注意
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1～2g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 回数注意、株元散布、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法、同時施用(注)(P.27)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.27)、回数注意
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)、回数注意
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A+5		ガードナーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	100倍	定植3日前～定植当日	1回	劇	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	1～2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	○	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激、かぶれ注意
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激、かぶれ注意
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害(ｲﾈ)
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)、回数注意
				9D		セフィーナDC	1:ｱﾌｨﾄﾞﾋﾟﾛﾍﾟﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アオムシ	(発生の特徴) ○ 標準名称(モンシロチョウ)。 ○ 春～初夏及び10～11月に被害が多い。	○ 育苗中は寒冷紗などの被覆によって成虫の飛来と産卵を防ぐ。	発生前	4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)、回数注意
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、回数注意、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法、回数注意、同時施用(注)(P.27)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)展着剤は加用しない。
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)、回数注意
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)、回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 株元散布、回数注意
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	1g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2～3g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2～3g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	○ 定植活着後、8葉期以降に使用
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾟﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アオムシ			発生初期	28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬害等(注)(P.26)、回数注意
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
コナガ	(発生の特徴) ○春～初夏及び秋に発生が多くなるが、休眠せず冬期も加害を続ける。 (防除上のポイント) ○殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。 ○ジアミド系薬剤の感受性低下が認められているので注意する。	○次世代の増殖源となる収穫残さの早期処分の実施、また、発生放任圃場を作らない。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○使用方法(注)(P.27)、回数注意
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○株元散布、回数注意、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○使用方法、回数注意、同時施用(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○使用方法、回数注意、混用(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○株元散布、回数注意
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1g/株	定植時	1回	普	△	○株元散布、回数注意
			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	○定植活着後、8葉期以降に使用
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○薬剤選択注意
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○眼に刺激痛、かぶれ注意
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○眼に刺激痛、かぶれ注意
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬害等(注)(P.26)
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ヨトウムシ	(発生の特徴) ○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				4A+5		ガードナーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	100倍	定植3日前～定植当日	1回	劇	△	○ 使用方法、薬害等(注)(P.27)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
			発生初期	15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ファルコンフロアブル	1:ﾒﾄｷｼﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
			発生初期	15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)
				18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				22B		アクセルベイト	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	3～6kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 株元散布
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハイマダラノメイガ	(発生の特徴) ○ 別名(ダイコンシンクイム ○ 夏期の高温少雨で多発す ○ 幼虫は、生長点付近を食害する。 (防除上のポイント) ○ 殺虫剤抵抗性が極めて発達しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止する。	発生前	28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、回数注意、同時施用(注)(P.27)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法、回数注意、同時施用(注)(P.27)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半	1回	普	△	○ 回数注意、使用方法(注)(P.27)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾛﾒｿﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 (防除上のポイント) ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 周辺の土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。	発生前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4kg/10a	は種時又は定植時	1回	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和
				1B		ネキリエースK	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	3kg/10a	は種時又は定植時～生育初期 但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○ 土壌表面株元処理
				3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	は種時～生育初期	5回以内	普	○※	○ 合ピレ(注)(P.15)、株元散布
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.27)
				3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	4kg/10a	定植時	1回	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)、全面土壌混和
			初発生期	1A		デナポン5%ベイト	1:NAC	3～6kg/10a	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○ 株元散布
				22B		アクセルベイト	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	3～6kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 株元散布
ナメクジ類 カタツムリ類	(発生の特徴) ○ 主に夜間に活動する。 ○ 水分の多い柔らかい部分を好んで食害する。	○ 圃場の清掃を図る。 ○ 圃場の排水を良くする。	発生初期	un		スラゴ	1:燐酸第二鉄	1～5g/㎡	発生時	―	普	○	○ 発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	○ 登録はﾅﾒｸｼﾞ類。幼苗期には薬害の恐れがあるので散布しない。 薬剤選択注意
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 登録はﾅﾒｸｼﾞ類。夏季高温時の苗や軟弱な苗には薬害の恐れがあるので散布しない。 薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
						メタアルデヒド剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス病	(発生の特徴) ○ 主要な種類はCMV、BBWV。 ○ アブラムシ類により伝染。 ○ 重複感染すると萎縮することがある。	(耕種的防除法) ○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺は除草。 ○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効。	発生初期			アブラムシ類の項参照							
べと病	(発生の特徴) ○ 気温10℃前後、多湿条件で多発しやすい。 ○ 春と秋に発生。 (防除上のポイント) ○ 初期防除に努める。	○ 密植をせず風通しを良くする。 ○ 耐病性品種を選ぶ。	は種前		11+4	ユニフォーム粒剤	1:ｱﾌﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	9kg/10a	は種前	1回	普	△	○ 全面土壌混和
			発病初期～発病前		P7	アリエッティ水和剤	1:ホセチル	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							
株腐病	(発生の特徴) ○ 高温・多湿を好むので、夏まき栽培に多い。	○ 低湿地での作付を避ける。 ○ 密植しない。	本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			は種前		14	リゾレックス粉剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	20～40kg/10a	は種前	1回	普	△	○ 全面土壌混和
萎凋病	(発生の特徴) ○ 高温条件(25～30℃)を好むので夏まき栽培に多い(15℃以下では発生しない)。	○ 発病株を圃場外に持ち出し処分。 ○ 完熟堆肥を施用。 ○ 発生の多い圃場では夏まきを避ける。 ○ シロザやサナエタデ等雑草が保菌していることがあるので除草。	本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
立枯病	(発生の特徴) ○ ピシウム属菌による。		は種前			土壌病害虫防除法の項参照							
			初発病		U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
苗立枯病	(発生の特徴) ○ リゾクトニア属菌による。 ○ 高温・多湿条件を好むので夏まき栽培に多い。	(耕種的防除法) ○ 低湿地での作付を避ける。 ○ 密植を避ける。	本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			は種後～			苗立枯病の項参照							
センチュウ類		○ 連作を避ける。	本圃消毒			銅剤及び混合剤の項参照							

ほうれんそう

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はモモアカアブラムシ。 ○ 秋から初冬に寄生が多い。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草。 ○ シルバーポリによる畝マルチなどの光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効。	は種時	4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	6kg/10a	は種時	1回	普	×	○ 作条混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
			発生初期	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	8,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はカブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は厳寒期以外見られるが、5～9月には異常発生することがある。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺。	は種前	3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	9kg/10a	は種前	1回	劇	×	○ 全面土壌混和 合ピレ(注)(P.15)
			発生初期	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	2回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
シロオビノメイガ	(発生の特徴) ○ 発生は9～10月に多い。 ○ 雨除け栽培で多発しやすい。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 周囲のイヌビユ、アカザ等の雑草は発生源となるので除草。	発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	4,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○ 0.2 ℓ/㎡株元灌注
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
ヨトウムシ	(発生の特徴) ○ 年2回発生、5月、10月に被害が多い。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。		発生初期	3A		アグロスリン乳剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
						BT剤の項参照							

ほうれんそう

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 卵塊及び分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘葉し、処分。	発生初期	15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	4,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○ 0.2 ℓ/㎡株元灌注
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
						BT剤の項参照							
タネバエ	(発生の特徴) ○ 鶏ふん等の有機物を施用すると多発することがある。		は種時	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	6kg/10a	は種時	1回	普	×	○ 作条土壌混和又は土壌表面散布
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 夏から秋に播種する作型で被害が多い。		発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
ミナミキイロアザミウマ			ミナミキイロアザミウマの項参照										
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 雨除け栽培で多発しやすい。		発生初期	21A		ダニトロンフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	2,000倍	収穫21日前まで	1回	普	×	
ホウレンソウケナガコナダニ	(発生の特徴) ○ 比較的低温(15～25℃)で多湿を好む。 (防除上のポイント) ○ 散布剤は子葉期～4葉期、ベイト剤は、は種後～子葉期の散布が効果的。	○ 収穫残渣を圃場外で適切に処分。 ○ 高温に弱いため太陽熱消毒が有効。	は種前			土壌病害虫防除法の項参照							
			子葉期	13		コテツベイト	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	3～6kg/10a	は種時～2葉期まで但し収穫14日前まで	1回	普	○	
			子葉期～4葉期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	4,000～6,000倍	2葉期まで(但し、収穫14日前まで)	1回	劇	△※	○ 使用時期厳守(白化等薬害の恐れ)。
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
萎黄病	(発生の特徴) ○ ヒメフタテンヨコバイが媒介するファイトプラズマ病。 ○ 年内取りの作型に多い。	○ 育苗中は寒冷紗などの被覆による媒介虫ヒメフタテンヨコバイの飛来防止。 ○ シルバーポリなどによる畝マルチも媒介虫の飛来防止に有効。 ○ 発病株は早めに除去。											
軟腐病	(防除上のポイント) ○ ヨトウムシ類などの食害部から病原細菌が侵入するのでこれらの害虫を防除。	○ 発病圃場では連作をしない。 ○ 排水不良を改善する。 ○ 傷口から侵入するので、傷を生じないような管理作業を心がける。	発病初期		U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○トマト・きくへの飛散注意。
					31	スターナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					31+14	ソタールWDG	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					31+M1	ナレート水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:有機銅	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	×	
					25+M1	ドーマイシン水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩2:有機銅	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	×※	
					31+24	カセット水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
斑点細菌病	(発生の特徴) ○ 結球を始める頃から被害が顕在化し、降雨量が多いほど多発。	○ 苗は軟弱徒長にせず、できるだけ傷をつけない。	前発病		P2	オリゼメート粒剤	1:ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ	6～9kg/10a	定植時	1回	普	△	○ 土壌混和
			発病初期		31+M1	ナレート水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:有機銅	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	×	
					31+24	カセット水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
腐敗病	(発生の特徴) ○ 凍霜害は発生を助長。 ○ 結球を始める頃から被害が顕在化。	○ 苗は軟弱徒長にせず、できるだけ傷をつけない。	前発病		P2	オリゼメート粒剤	1:ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ	6～9kg/10a	定植時	1回	普	△	○ 土壌混和
			発病初期		31	スターナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					31+14	ソタールWDG	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					31+M1	ナレート水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:有機銅	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	×	
					41+25	アグリマイシン－100	1:ｵｷｼﾃﾄﾗｻｲｸﾘﾝ2:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					25	アグレプト水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					25+M1	ドーマイシン水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩2:有機銅	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	×※	
					U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○トマト・きくへの飛散注意。
					31+24	カセット水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 立枯症状を起こすことがある。	○ マルチ等により多湿条件を緩和。 ○ トンネル栽培では換気に努め、過湿を避ける。 ○ 発病株は早めに除去、土中に埋め込む等の処理を行う。	発病初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000～1,500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					10+2	スミブレンド水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	○	
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
灰色かび病					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
菌核病	(発生の特徴) ○ 発病は低温(18～20℃)、多湿条件で見られる。 ○ 発病部に、白色綿状で密生した菌糸が見られ、後に黒色でネズミの糞状の菌核を形成。 ○ 悪臭がないことで軟腐病と区別可能。 (防除上のポイント) ○ 発病後は急速にまん延するので、予防散布を徹底。	○ 夏期に水田にすると、土中の菌核の死滅に有効。 ○ マルチ等により株元の多湿条件を緩和。 ○ トンネル栽培では換気に努め、過湿を避ける。 ○ 発病株は早めに除去、菌核を圃場に残さないよう処分。	発病前		7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
			発病初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000～3,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					10+2	スミブレンド水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	○	
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	○ 登録はレタス類
すそ枯病	(発生の特徴) ○ 幼苗期に発生すると苗立枯れを起こすことがある。 (防除上のポイント) ○ 発病初期に、株元にもよくかかるよう散布。	○ 深植えしない。 ○ 密植は発病を助長するので適切な株間にする。	作付前		29	フロンサイド粉剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	30kg/10a	は種又は定植前	1回	普	△※	○ 全面土壌混和 眼に刺激、かぶれ注意
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	500mℓ/10a	定植前	1回	普	×	○ 100～150ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和 かぶれ注意
			発病初期		14	リゾレックス水和剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					31+14	ソタールWDG	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000～3,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	800倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ トマト・きくへの飛散注意。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
すそ枯病			発病初期		7	モンカットフロアブル40	1:ﾌﾙﾄﾗﾆﾙ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					7	バシタック水和剤75	1:ﾒﾌﾟﾛﾆﾙ	500～1,000倍	結球開始期まで､但し収穫30日前まで	3回以内	普	△	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	ネクスターフロアブル	1:ｲｿﾋﾟﾗｻﾞﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△※	
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					19	ジオゼット水和剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝD亜鉛塩	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							
ヒメフタテンヨコバイ	(発生の特徴) ○ 萎黄病の病原体を媒介。	○ 育苗中は寒冷紗などの被覆で､飛来防止。	発生前	28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体はモモアカアブラムシとヒゲナガアブラムシ類。 (防除上のポイント) ○ 抵抗性がつきやすいため､同一系統の薬剤を連用しない。	○ 育苗中は寒冷紗等の被覆で有翅虫飛来防止。 ○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材は有翅虫の飛来抑制に有効。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)､回数注意
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元処理
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法、同時施用(注)(P.26)､回数注意
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.26)､回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.26)､回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.26)､回数注意
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.25～0.5g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2g/株	定植時	1回	普	△	○ 株元処理

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類			発生初期	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	3,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				9D		セフィーナDC	1:ｱﾌｨﾄﾞﾋﾟﾛﾍﾟﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
ヨトウムシ	(発生の特徴) ○ 年2回発生、5月、10月に被が多い。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵防止。	発生前	28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)展着剤は加用しない。
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.26)、回数注意
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.5g/株	定植前日	1回	普	△	○ 株元散布
			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				21A+22B	39	アクセルキングフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ2:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,500倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△※	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照 薬害等(注)(P.26)
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 登録はレタス類
				BT剤の項参照									

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 ○前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草、前作も早急に処分。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)、回数注意
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)、登録はカブラヤガ
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)展着剤は加用しない。
				1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和
				3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	9kg/10a	定植前	1回	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)、全面土壌混和
				1B		ネキリエースK	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	3kg/10a	は種時又は定植時～生育初期但し、収穫21日前まで	2回以内	普	△	○ 土壌表面株元処理
			発生初期	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	5回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
				22B		アクセルベイト	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	3～6kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 株元散布
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 結球期以降は、結球内へ食入、外見上ほとんど被害がなく、市場で問題となる。 ○ 秋期は飛来量が多い。 (防除上のポイント) ○ 結球内部へ食入されると薬剤の効果がないため、生育初期からの防除が重要。 ○ 初冬までは飛来が続くため、年内に定植する作型は重点的に防除。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止。	発生前	28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)、回数注意
				28		プレバソン粒剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.26)、回数注意
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.26)、回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/ｾﾙ成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.26)、回数注意
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
オオタバコガ			発生初期	15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ルフェヌロン	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ファルコンフロアブル	1:メトキシフェノシジド	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		マトリックフロアブル	1:クロマフェノシジド	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ロムダンフロアブル	1:テブフェノシジド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				6		アファーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサド	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				22B		アクセルフロアブル	1:メタフルミゾン	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				22A		ファイントリムDF	1:インドキサカルブ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				un		プレオフロアブル	1:ピリダリル	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミド	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:プロフラニリド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 登録はレタス類
													BT剤の項参照
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○年5～6回の発生、被害は9～10月に集中。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵防止。	発生前	28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、回数注意、混用(注)(P.26)
			発生初期	15		ノーモルト乳剤	1:テフルベンズロン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		アタブロン乳剤	1:クロルフルアズロン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ファルコンフロアブル	1:メトキシフェノシジド	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		マトリックフロアブル	1:クロマフェノシジド	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				6		アファーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:レピメクチン	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハスモンヨトウ			発生初期	22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 登録はレタス類
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 登録はレタス類
						BT剤の項参照							
ナモグリバエ	(発生の特徴) ○ 春と秋に発生が多い。 (防除上のポイント) ○ マメ科、アブラナ科作物が周辺部にある場合は発生に注意。	○ 育苗中は寒冷紗等の被覆によって成虫の飛来防止。 ○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は成虫の飛来抑制に有効。	発生前	4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	15g/培土0	は種前	1回	普	×	○ 床土混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	15g/培土1	は種前	1回	普	△	○ 培土混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	15g/培土1	は種前	1回	普	△	○ 培土混和
				28+4A		ミネクトデュオ粒剤	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	40g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	は種覆土後～育苗期後半	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)、回数注意
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	500～1,000倍	定植前まで	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	0.5g/株	育苗期後半	1回	普	×	○ 株元散布
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1g/株	育苗期後半	1回	普	△	○ 株元散布
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植時	1回	普	○	○ 株元散布、同時施用(注)(P.26)、回数注意
				28		プレバソン粒剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	50g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.26)、回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/セル成型育苗ﾄﾚｲ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.26)、回数注意
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1g/株	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.26)、回数注意

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ナモグリバエ			発生初期	4A+5		ガードナーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	200倍	定植3日前～定植当日	1回	劇	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50～100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	×	○ 薬剤選択注意
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4E		フィールドマストフロアブル	1:ｼﾞｸﾛﾒｿﾞﾁｱｽﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 登録はレタス類
ナメクジ類 カタツムリ類	(発生の特徴) ○ 主に夜間に活動。 ○ 水分の多い柔らかい部分を好んで食害。 (防除上のポイント) ○ スラゴ等誘引作用を持つ剤は、夕方や降雨後等の湿度が高い時に処理すると効果的。	○ 圃場周辺の雑草や、前作の残渣を早めに処分。 ○ 通風を良くする。	発生初期	14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫14日前まで	3回以内	劇	×	○ 登録はナメクジ類 薬剤選択注意
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	○ 登録はナメクジ類 薬剤選択注意
				un		スラゴ	1:燐酸第二鉄	1～5g/㎡	発生時	－	普	○	○ 発生あるいは加害を受けた場所又は株元に配置
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	×	○ 登録はナメクジ類 眼に刺激痛、かぶれ注意
						銅剤及び混合剤の項参照							
						メタアルデヒド剤の使用法の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
えそ条斑病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスはIYSV。 ○ 虫媒(ネギアザミウマ)伝染するウイルス病。 (防除上のポイント) ○ ネギアザミウマの防除徹底。	(耕種的防除法) ○ シルバーポリ及びシルバーテープなどで、媒介虫の飛来を防止。 ○ 発病株は早期に抜き取り、処分。 ○ 収穫残渣は放置せず土中に埋めるなど速やかに処分。	ネギアザミウマの項参照										
萎黄病	(発生の特徴) ○ ヒメフタテンヨコバイが媒介するファイトプラズマ病。	○ 育苗中は寒冷紗などの被覆によって媒介虫であるヒメフタテンヨコバイの飛来防止。 ○ 発病株は早めに除去。											
軟腐病	(発生の特徴) ○ 畑で発病を見なくても貯蔵中に腐敗することがある。	○ 無病地で育苗。 ○ 発病地は連作を避ける。 ○ 排水を良くする。 ○ 収穫後の残渣は処分。 ○ 晴天、乾燥時に収穫。 ○ 吊り貯蔵は、風通しの良い雨や直射日光のあたらない涼しい場所を選ぶ。 ○ コンテナ貯蔵では過度の積込みを避け、通風をよくする。	発病初期		M4	オーソサイド水和剤80	1:ｷｬﾌﾟﾀﾝ	600倍	収穫前日まで	5回以内	普	×	
					U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	500倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	○トマト・きくへの飛散注意。
					24+U18	カスミンバリダシン液剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	500倍	収穫7日前まで	5回以内	普	○	○トマト・きくへの飛散注意。
					25	アグレプト水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					25+1	アタッキン水和剤	1:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	800倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					41+25	アグリマイシン－100	1:ｵｷｼﾃﾄﾗｻｲｸﾘﾝ2:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					M1+25	銅ストマイ水和剤	1:塩基性塩化銅2:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	600～800倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					31+24	カセット水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					31+M1	ナレート水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:有機銅	800～1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	
					31	スターナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
腐敗病	(発生の特徴) ○ 貯蔵期間にも発病、腐敗を引き起こす場合がある。	○ 無病地で育苗。 ○ 発病地は連作を避ける。 ○ 排水を良くする。 ○ 収穫後の残渣は処分。 ○ 晴天、乾燥時に収穫。	発病初期		U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	500倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	○トマト・きくへの飛散注意。
						銅剤及び混合剤の項参照							
苗立枯病		○ 床土は無病土を使用。	床土・本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			は種後～			苗立枯病の項参照							
黒斑病	(発生の特徴) ○ 風ずれによる傷やアザミウマ類の食害痕が多いと発生しやすい。		発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							
さび病	(発生の特徴) ○ 生育末期に発生が多い。		感染前		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	

たまねぎ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
べと病	(発生の特徴) ○ 気温10～20℃前後、多湿条件で多発。 ○ 一次伝染は秋。苗床・本圃の地中の卵胞子が伝染源。感染株は全身感染。2～3月頃生育停滞、黄化、葉身の湾曲等の症状を示す（越年罹病株）。 ○ 二次伝染は、春に越年罹病株上に形成された分生子が雨風で飛散し拡大。 (防除上のポイント) ○ 一次伝染防止のため、育苗期、定植後の12月～1月も防除。	○ 発病地で連作しない。 ○ 排水不良を改善。 ○ 越年罹病株は抜き取り、圃場外で処分。 ○ 収穫後の残渣は処分。 ○ 床土は太陽熱消毒。	発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	6回以内	普	×	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					21+M5	ドーシャスフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△※	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	500～1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750～1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750～1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					43+40	ジャストフィットフロアブル	1:ﾌﾙｵﾋﾟｺﾘﾄﾞ2:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	2,500倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	600～800倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					45+40	ザンプロDMフロアブル	1:ｱﾒﾄｸﾄﾗｼﾞﾝ2:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ	1,500～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	○ かぶれ注意
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					21+27	ダイナモ顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ2:ｼﾓｷｻﾆﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 登録は鱗茎類
					49+40	オロンディスウルトラSC	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					49+21	ゾーベックエンテクタSE	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛ	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
白色疫病	(発生の特徴) ○ 冬期の温暖多雨で多発。 ○ 早生品種に発生が多い。 (防除上のポイント) ○ 早期発見、早めに防除。	○ 一度発病した圃場は3～4年間作付を避ける。 ○ 排水を良くする。	発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～500倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
					29	フロンサイド水和剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ かぶれ注意
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	1,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	○ かぶれ注意
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	500～1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	2,500倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△※	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	600～800倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750～1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750～1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					43+40	ジャストフィットフロアブル	1:ﾌﾙｵﾋﾟｺﾘﾄﾞ2:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	○ 生育期後半での使用推奨
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 登録は鱗茎類、白色疫病(鱗茎類(根物))
							銅剤及び混合剤の項参照						
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 冬から春にかけて温暖多雨の年に発生が多い。	○ 発病株は確実に処分。 ○ 圃場周辺の残渣も処分。	発病初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					29	フロンサイド水和剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ かぶれ注意
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	○ かぶれ注意
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					9+12	スイッチ顆粒水和剤	1:ｼﾌﾟﾛｼﾞﾆﾙ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					17+12	ジャストミート顆粒水和剤	1:ﾌｪﾝﾍｷｻﾐﾄﾞ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	ワークアップフロアブル	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000～3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					7	ケンジャフロアブル	1:ｲｿﾌｪﾀﾐﾄﾞ	1,000～3,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	○	
							銅剤及び混合剤の項参照						

たまねぎ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
灰色腐敗病	(発生の特徴) ○ 冬から春の温暖多雨で発生が多い。 ○ 白色疫病被害株は、灰色腐敗病の感染を受けやすい。	○ 窒素肥料の過用や晩期追肥を避け、適正な肥培管理。 ○ 発病株は確実に処分。 ○ 収穫は晴天日に行う。 ○ 圃場周辺の残渣処分。	発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					29	フロンサイド水和剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ かぶれ注意
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	5回以内	普	×	○ かぶれ注意
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	500～1,000倍	収穫前日まで	6回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					2	スミレックス水和剤	1:ﾌﾟﾛｼﾐﾄﾞﾝ	1,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	ワークアップフロアブル	1:ﾒﾄｺﾅｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000～8,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体はネギアブラムシ。		発生初期	1B		ダイアジノン乳剤40	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	劇	×	
				1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	
ヨトウムシ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。		発生初期			BT剤の項参照							
ネギコガ	(発生の特徴) ○ 夏期に発生が多い。		発生初期	3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。	○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺。											
			定植前	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	定植前	5回以内	普	○※	○ 合ピレ(注)(P.15)、土壌表面散布
			生育初期	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	5回以内	普	○※	○ 合ピレ(注)(P.15)、株元散布
				22B		アクセルベイト	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	6kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	○	
ネギアザミウマ	(防除上のポイント) ○ 発生初期から早めの防除。		前発生	4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	200倍	定植前日～定植時	1回	劇	△	○ 使用方法(注)(P.26)
			発生初期	1B		ダイアジノン乳剤40	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	700～1,200倍	収穫21日前まで	2回以内	劇	×	
				1B		サイアノックス乳剤	1:CYAP	500～1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
				1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	
				1B		トクチオン乳剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
				1B		オルトラン水和剤	1:ｱｾﾌｪｰﾄ	1,000～1,500倍	収穫21日前まで	5回以内	普	△	
				1B		ジェイエース水溶剤	1:ｱｾﾌｪｰﾄ	1,000～1,500倍	収穫21日前まで	5回以内	普	○	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				3A		アグロスリン水和剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		アグロスリン乳剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫3日前まで	3回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	劇	×	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 登録は鱗茎類(根物、ただし、にんにく、らっきょうを除く)
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意

たまねぎ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
タネバエ	(発生の特徴) ○ 幼虫が播種後の種子や幼苗の地際部などを食害。	○ 鶏糞や未熟堆肥の施用、前作のすき込みは成虫を誘引し被害を増加させるので注意。	は種時又は定植時	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	3～5kg/10a	は種時又は定植時	2回以内	普	×	○ 作付前:全面土壌混和又は作条土壌混和 作物生育中:作条処理して軽く覆土
ネギハモグリバエ	(防除上のポイント) ○ 発生初期から早めの防除。		発生初期	1B		ダイアジノン乳剤40	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	2回以内	劇	×	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26) 登録はハモグリバエ類
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 登録はハモグリバエ類、鱗茎類(根物、ただし、にんにく、らっきょうを除く)
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	○ 登録はハモグリバエ類 ○ 薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
ネダニ類	(発生の特徴) ○ 地下部(鱗茎、根)を食害。 ○ 主要種はロビンネダニ。	○ ねぎ、たまねぎ、らっきょう、にら、ゆりなどのユリ科作物の連作を避ける。 ○ 1カ月以上湛水で土壌中のネダニは防除可能。											

たまねぎ

障害名 発生原因	症状	対策	本障害と類似した病気の症状 病害名	症状
葉の先枯れ 薬害やガス害でも発生するが、排水不良による根痛みが原因。普通栽培では圃場一面に発生。	変調部は薄い飴色を呈し、乾燥したようになる。健全部との境界は不明瞭、くぼみはなく平面的で先端部のみで発生。	○排水対策を講じる ○根痛みを避ける管理を心がける。 ○通常、春先の温度上昇により回復する。	白色疫病	変調部は白色から薄い白色になり、境界は明瞭にくぼむ。葉身途中より折損したように発生。

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
萎縮病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、OYDV。 ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病。 ○ ねぎ、たまねぎ、にら、らっきょう畑の近くに苗床を設けると被害が大きくなることがある。	(耕種的防除法) ○ アブラムシの飛来防止と防除に努める。 ○ 発病圃場の周辺での栽培は避ける。 ○ 発病株は、できるだけ除去。	アブラムシ類の項参照										
えそ条斑病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、IYSV。 ○ 虫媒(ネギアザミウマ)伝染するウイルス病。 (防除上のポイント) ○ ネギアザミウマの防除を徹底。	(耕種的防除法) ○ 移植栽培及び直播栽培時には、粒剤施用。 ○ シルバーポリ及びシルバーテープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止。 ○ 発病株は早期に抜き取り、処分。 ○ 収穫残渣は放置せず土中に埋めるなど速やかに処分。	ネギアザミウマの項参照										
軟腐病	(発生の特徴) ○ 台風等の激しい風雨による傷口から病原菌が侵入。	○ 発病地は連作を避ける。 ○ 排水を良くする。	土寄せ時		P2	オリゼメート粒剤	1:ﾌﾟﾛﾍﾞﾅｿﾞｰﾙ	6kg/10a	土寄せ時但し収穫30日前まで	2回以内	普	△	○ 株元散布
			生育期		24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					31+24	カセット水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ トマト・きくへの飛散注意。
					31	スターナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					31+M1	ナレート水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸2:有機銅	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	
						銅剤及び混合剤、微生物農薬の項参照							
べと病	(発生の特徴) ○ 春先の降雨は発生を助長。	○ 発病地は連作を避ける。 ○ 苗床は薄まきにする。 ○ 発病株は早期に除去。	発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	500～600倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					P7	アリエッティ水和剤	1:ﾎｾﾁﾙ	800倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△	
					21+M5	ドーシャスフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△※	
					21+27	ダイナモ顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ2:ｼﾓｷｻﾆﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△※	
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△※	
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750～1000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	750～1000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					45+40	ザンプロDMフロアブル	1:ｱﾒﾄｸﾄﾗｼﾞﾝ2:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ	1,500～2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					49+40	オロンディスウルトラSC	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
						銅剤及び混合剤の項参照							

ねぎ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
黒斑病	(発生の特徴) ○ 風ずれによる傷やアザミウマ類による食害痕が多いと発生しやすい。	○ 肥切れしないよう適切に施肥。 ○ 枯死葉等を処分。	生育期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	500～600倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000～1,500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					19	ジオゼット水和剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝD亜鉛塩	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
					19	ポリオキシンAL水和剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
黄斑病	(発生の特徴) ○ 気温15℃前後の多湿条件で発生が多い。 ○ 気温25℃以上、少雨乾燥で胞子形成されず発病抑制。	○ 被害葉は除去、適切に処分。	発病初期		11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
さび病	(発生の特徴) ○ 5～6月、10～12月頃発生。 (防除上のポイント) ○ 商品価値が下がるので、初期防除に努める。	○ 肥料不足や窒素過多にすると発病助長するので、適切に肥培管理。	発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブフロアブル	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	500～600倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000～8,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
白絹病	(発生の特徴) ○ 高温多湿条件下で発生が多い。 ○ 前作作物の残渣や未熟たい肥のすき込みは発病を助長。	○ 連作を避け、床土は無病土を使用。 ○ 被害株は菌核を落とさないように圃場外へ除去。 ○ 発病株周辺の表土は菌核が多いので土中深く埋め込む。 ○ 田畑輪換を行い夏期水田にすると、土中の菌核の死滅に有効。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			生育期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	500～1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 1 ℓ/㎡株元灌注
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	生育期(但し、収穫14日前まで)	2回以内	普	△	○ 1 ℓ/㎡株元灌注
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000～8,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	○ 株元散布
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					19	ジオゼット水和剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝD亜鉛塩	500倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
					7+M5	ベジセイバー	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ2:TPN	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
					U18	バリダシン液剤5	1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ	500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 株元散布 トマト・きくへの飛散注意。
			土寄せ前		14	リゾレックス粉剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	20～30kg/10a	土寄せ前但し、収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 株元散布
					14	リゾレックス水和剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	土寄せ時(但し、収穫14日前まで)	3回以内	普	△	○ 株元散布
			土寄せ時		29	フロンサイド粉剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	15kg/10a	土寄せ時但し 収穫21日前まで	2回以内	普	△※	○ 株元散布、かぶれ注意
					7	モンカットファイン粉剤20DL	1:ﾌﾙﾄﾗﾆﾙ	10～15kg/10a	土寄せ時但し、収穫30日前まで	4回以内	普	△	○ 株元散布
					7	モンカットフロアブル40	1:ﾌﾙﾄﾗﾆﾙ	2,000倍	土寄せ時但し、収穫30日前まで	4回以内	普	△	○ 株元散布
					7	モンカット粒剤	1:ﾌﾙﾄﾗﾆﾙ	4～6kg/10a	土寄せ時但し、収穫30日前まで	4回以内	普	△	○ 株元散布
萎凋病	(発生の特徴) ○ 被害株の残渣が次作への伝染源となる。	○ 発病地では連作しない。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			定植前		3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	100倍	定植前	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	250倍	定植直前	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26) 薬剤選択注意
			前発生		1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
黒腐菌核病	(発生の特徴) ○ 低温多湿条件下で多発。	○ 発病圃場での連作は避ける。 ○ 酸性の強い圃場では消石灰を施用。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			定植まで		7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
			発生前		7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	生育期(但し、収穫14日前まで)	2回以内	普	△	○ 1 ℓ/㎡株元灌注
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 1 ℓ/㎡株元灌注
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	○ 株元散布
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 6、10～11月に発生が多い。 ○ 主要種はネギアブラムシ	○ 苗床を寒冷紗で被覆。	発生初期	1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	1,000～3,000倍	収穫7日前まで	6回以内	普	△	
				1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	1回	劇	×	
				1B		ダイアジノン乳剤40	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	劇	×	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は厳寒期を除き見られ、５～９月に異常発生することがある。 ○ 前作や作付前の雑草で生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草、前作も早急に処分。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を捕殺。 ○ 施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆。	発生前	3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	4～9kg/10a	定植時	1回	劇	×	○ 作条土壌混和 合ピレ(注)(P.15)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(P.26)
			発生初期	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○ 05ℓ株元潅注
ヨトウムシ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。		発生初期			BT剤の項参照							
ハスモンヨトウ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。		発生初期			BT剤の項参照							
ネギコガ	(発生の特徴) ○ 夏期に発生が多い。		発生前	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
			発生初期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	
				3A		アグロスリン乳剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				21A+22B	39	アクセルキングフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ2:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△※	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

ねぎ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
シロイチモジヨトウ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除。	○ 育苗中は寒冷紗等被覆により成虫の飛来と産卵を防止。	発生前	28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.26)、回数注意
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	200倍	定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.26)
		○ 白化した被害葉は除去。	発生初期	15		ノーモルト乳剤	1:テフルベンズロン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		アタブロン乳剤	1:クロルフルアズロン	2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		カスケード乳剤	1:フルフェノクスロン	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ルフェヌロン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ファルコンフロアブル	1:メトキシフェノシジド	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		マトリックフロアブル	1:クロマフェノシジド	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ロムダンフロアブル	1:テブフェノシジド	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				6		アファーム乳剤	1:エマメクチン安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:スピノサド	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸グリセリド2:スピノサド	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 登録は、鱗茎類(葉物、ただし、にら、にら(花茎)を除く)
				5		ディアナSC	1:スピネトラム	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミド	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				28		ベリマークSC	1:シアントラニリプロール	2,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○ 株元灌注、混用(注)(P.26)、回数注意
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26) 回数注意
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:クロルフェナピル	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△※	
				21A+22B	39	アクセルキングフロアブル	1:トルフェンピラド2:メタフルミゾン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△※	
				22A		トルネードエースDF	1:インドキサカルブ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	○	
				un		プレオフロアブル	1:ピリダリル	1,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミド	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ブロフラニリド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
						(交信撹乱剤)ヨトウコン-S 性フェロモンの項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ネギアザミウマ	(防除上のポイント) ○ 発生初期から早めの防除を実施。 (発生の特徴) ○ 本虫はIYSV(えそ条斑病の項参照)を媒介。	○ 圃場周辺の雑草を除去。 ○ 圃場の乾燥防止。 ○ 健全苗の植付。 ○ シルバーポリ及びシルバーテープなどを使用し、媒介虫の飛来を防止。	発生前	4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	6kg/10a	は種時	1回	普	×	○ 作条混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 作条処理土壌混和
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.26)、回数注意
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.26)、回数注意
				4A		ベストガード粒剤	1:ﾆﾃﾝﾋﾟﾗﾑ	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.25～0.5g/株	定植前日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	200倍	定植前日～定植時	1回	劇	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4kg/10a	定植時	1回	普	△	○ 植溝土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	6kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 植溝土壌混和
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	6～9kg/10a	植付時	1回	普	×	○ 作条混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	6kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 植溝処理土壌混和
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	定植時	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	定植時	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	生育期但し、収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	生育期但し、収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ 株元散布
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～6kg/10a	収穫3日前まで	4回以内	普	△	○ 株元散布
				4A		ベストガード粒剤	1:ﾆﾃﾝﾋﾟﾗﾑ	6kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 株元処理

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ネギアザミウマ			発生初期	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	400倍	生育期但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○ 0.4 ℓ/㎡株元灌注
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	400倍	生育期但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○ 0.4 ℓ/㎡株元灌注
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	生育期但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○ 株元処理 1ℓ/㎡
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	生育期但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○ 株元処理 1ℓ/㎡
				1B		ダイアジノン乳剤40	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	700～1,200倍	収穫21日前まで	2回以内	劇	×	
				1B		トクチオン乳剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○ 登録は、鱗茎類(葉物、ただし、にら、にら(花茎)を除く)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	劇	△	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	○ 薬剤選択注意
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛、かぶれ注意
				21A+22B	39	アクセルキングフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ2:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△※	
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○ 株元灌注、回数注意 混用(注)(P.26)
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500～5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	

ねぎ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ネギハモグリバエ	(発生の特徴) ○ 成虫は葉の組織内に産卵、孵化した幼虫は葉の内部に潜り葉肉を食害。地表・土中で蛹化。 ○ A系統では1葉当たり1～数匹程度だが、B系統では10匹以上の幼虫が寄生する傾向があり、ひどい場合は葉全体が白化。 (防除上のポイント) ○ 土着天敵への影響が大きい薬剤(合成ピレスロイド系薬剤や有機リン系薬剤など)を使用後、多発することがある。	○ 圃場周辺の雑草を除去。 ○ 圃場の乾燥を防止。 ○ 健全苗の植付。	発生前	4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 作条処理土壌混和
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	100倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)展着剤は加用しない。
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	400倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法、混用(注)(P.26)、回数注意
				28+4A		ジュリボフロアブル	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	200倍	育苗期後半～定植当日	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A+28		アベイル粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ2:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	40g/セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊	育苗期後半～定植当日	1回	普	○	○ 使用方法(注)(P.26)、回数注意
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	0.25～0.5g/株	定植前日～定植当日	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	200倍	定植前日～定植時	1回	劇	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	50倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				28+4A		キックオフ顆粒水和剤	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ2:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	100倍	定植前日～定植時	1回	普	△	○ 使用方法(注)(P.26)
				4A		ベストガード粒剤	1:ﾆﾃﾝﾋﾟﾗﾑ	6kg/10a	定植時	1回	普	△	○ 植溝処理土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	6kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 植溝土壌混和
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	6～9kg/10a	植付時	1回	普	×	○ 作条混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	6kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 植溝処理土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～6kg/10a	収穫3日前まで	4回以内	普	△	○ 株元散布
				28		プリロッソ粒剤オメガ	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	6kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 使用回数注意
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6～9kg/10a	生育期但し、収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6～9kg/10a	生育期但し、収穫3日前まで	2回以内	普	△	○ 株元散布

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ネギハモグリバエ			発生初期	4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	400倍	生育期但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○0.4ℓ/㎡株元灌注
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	400倍	生育期但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○0.4ℓ/㎡株元灌注
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	4回以内	普	△	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
				6		アグリメック	1:ｱﾊﾞﾒｸﾁﾝ	500～1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	劇	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				28		ベリマークSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	1回	普	△	○株元灌注0.5ℓ/㎡ 混用(注)(P.26)、回数注意
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○薬害等(注)(P.26)
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	○登録は、鱗茎類(葉物、ただし、にら、にら(花茎)を除く)
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△※	
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○薬剤選択注意
クロバネキノコバエ類	(発生の特徴) ○比較的排水の悪い、あるいは多くの有機物が投入されている圃場で発生。	○被害葉及び収穫残渣は発生源となるので、圃場外で適切に処分。 ○成虫は、有機物に誘引され産卵。幼虫は未熟な有機物を餌とする。堆肥は完熟堆肥を用い、多施用を避け、土とよく混和する。	発生前	3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	9kg/10a	定植時	1回	劇	×	○作条土壌混和
				4A		ベストガード粒剤	1:ﾆﾃﾝﾋﾟﾗﾑ	6kg/10a	定植時	1回	普	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	200倍	定植前日～定植時	1回	劇	△	○使用方法(注)(P.26)
			初期 土寄	3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	9kg/10a	収穫30日前まで	1回	劇	×	○株元散布
			発生初期	15		デミリン水和剤	1:ｼﾞﾌﾙﾍﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	○300 mℓ/㎡株元灌注
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○IGR剤(注)(P.15)参照
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	6kg/10a	生育期、但し、収穫3日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	生育期、但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○1ℓ/㎡株元灌注
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	生育期、但し、収穫14日前まで	1回	普	△	○1ℓ/㎡株元灌注
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,500倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	
ネダニ類	(発生の特徴) ○主要種はロビンネダニ	○湛水可能なほ場では、栽培終了後1～2か月湛水処理を行い、土壌中に残存しているネダニを防除。	発生前	3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	9kg/10a	定植時	1回	劇	×	○作条土壌混和
				1B		ラグビーMC粒剤	1:ｶｽﾞｻﾎｽ	20kg/10a	定植前	1回	普	△※	○全面処理土壌混和
				1B		トクチオン細粒剤F	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	9kg/10a	定植時	1回	普	△	
			発生初期	16		アプロードフロアブル	1:ﾌﾞﾌﾟﾛﾌｪｼﾞﾝ	500～1,000倍	収穫14日前まで	1回	普	△	○1～3ℓ/㎡株元灌注
				1B		トクチオン乳剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	6kg/10a	収穫3日前まで	4回以内	普	△	○株元散布
				3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	6～9kg/10a	収穫30日前まで	1回	劇	×	○株元散布

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
苗立枯病	(発生の特徴) ○ 幼苗の地際部が軟化・変色し、地上部は萎れる。		は種時			苗立枯病の項参照							
軟腐病	(発生の特徴) ○ 高温時の播種は発病を助長する。	○ 土壌伝染するので、前年の発生圃場には作付を避ける。 ○ 傷口から侵入するので、傷を付けないような管理作業を心がける。	発病初期		31	スターナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項、微生物農薬の項参照							
うどんこ病	(防除上のポイント) ○ 発生初期から薬剤散布を行う。	○ 間引きを早めに行う。 ○ 過乾燥、多肥栽培を控える。	発病初期		3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｼﾞｰﾙ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項、微生物農薬の項参照							
黒葉枯病	(発生の特徴) ○ 8～9月に乾燥と曇雨天が繰り返されると発生が多くなる。	○ 排水不良地では作付を避ける。 ○ にんじん以外の作物と3年以上の輪作を行う。	発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000～1,500倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△	
					M7	ベルクート水和剤	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	500～1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:ｲﾐﾉｸﾀｼﾞﾝｱﾙﾍﾞｼﾙ酸塩	1,000倍	収穫14日前まで	5回以内	普	△	
					19	ポリオキシンAL水和剤	1:ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ複合体	500倍	収穫7日前まで	5回以内	普	○	
					11+M5	アミスターオプティフロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:TPN	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	3,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					11	メジャーフロアブル	1:ﾋﾟｺｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					11	ストロビーフロアブル	1:ｸﾚｿｷｼﾑﾒﾁﾙ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△※	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							
センチュウ類	(発生の特徴) ○ 主要種はネグサレセンチュウ、ネコブセンチュウ類。 ○ ネグサレセンチュウの被害は、坪枯れ状に生育が抑制され、根には赤褐色のシミができ、腐る。 ○ ネコブセンチュウの被害は、生育中に葉が黄変し立たずに広がり、根全体がコブだらけとなる。		(耕種的防除) ○ 対抗植物を栽培する。										
			土壌病害虫防除法の項参照										
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はニンジンアブラムシ。		発生初期	1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	2,000～3,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	

にんじん

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハモグリバエ類	(発生の特徴) ○ 葉肉内を幼虫がせん孔しながら食害し、白っぽい線状の食害痕を葉面に生じる。		は種時	4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	9kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
			は種時	4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	9kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
			発生初期	6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
			発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はカブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は厳寒期を除いていつでも見られ、5～9月に異常発生することがある。	○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多いので、作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を見つけしだい捕殺する。	は種前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	6kg/10a	は種前	1回	普	×	○ 全面土壌混和
			は種前	3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	4～12kg/10a	は種前	1回	劇	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和 合ピレ(注)(P.15)
			は種時	3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	4kg/10a	は種時	1回	劇	×	○ 作条土壌混和 合ピレ(注)(P.15)
			発芽期～生育初期	1B		ネキリエースK	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	3kg/10a	発芽期～生育初期 但し、収穫14日前まで	4回以内	普	△	○ 土壌表面株元処理
			生育初期	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期 但し収穫7日前まで	5回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
			生育初期	22B		アクセルベイト	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	3～6kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 土壌表面株元処理
キアゲハ	(発生の特徴) ○ 若・中齢幼虫は体全体が黒褐色で白斑があり、葉の上方の小葉を食害。	○ 幼虫は見つけ次第捕殺する。	発生初期	1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	2,000～3,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△	
			発生初期	13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
			発生初期	18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
ヨトウムシ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。		発生初期	3A		アグロスリン乳剤	1:ｼﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
			発生初期	28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			発生初期	18		ロムダンフロアブル BT剤の項参照	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
モザイク病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスは、CMV、DsMV。 ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染するウイルス病。 ○ DsMVは種いもによっても感染する。	(耕種的防除法) ○ 豆類の圃場の隣接地での栽培は避ける。 ○ 圃場とその周辺の除草に努める。	アブラムシ類の項参照										
軟腐病	(発生の特徴) ○ 収穫間際に発生、降雨が続くと被害が多い。	○ 連作を避け、イネ科作物と輪作する。 ○ 被害株は速やかに除去する。	銅剤及び混合剤の項参照										
乾腐病	(発生の特徴) ○ イモを輪切りにすると、中心部に赤色の小斑点が見られる。	○ 種いもは無病畑から採種する。 ○ 既発生地の種いもは使用しない。 ○ 連作を避ける。	本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
黒斑病	(発生の特徴) ○ 輪切りにすると維管束を中心に褐色を呈する。	○ 種いもは無病畑から採種し、掘取り時に傷を付けないようにする。 ○ 連作を避ける。	種子消毒			いも類の種子消毒の項参照							
汚斑病	(発生の特徴) ○ 多雨の場合に多く発生する。	○ 窒素質肥料の偏用を避け、加里肥料を十分に施す。 ○ 多発すると孫いもの生育が悪化。 ○ 媛かぐやは本病に抵抗性。	種子消毒			いも類の種子消毒の項参照							
疫病	(発生の特徴) ○ サトイモだけに発病する。 ○ 高温(27～30℃)を好む。 ○ 夏季の多雨条件下や台風後に発生が多い。 ○ 発病した葉、茎や種いもから伝染する。 ○ 葉が傷つくと発病しやすい。 ○ 下位葉は、上位葉に比べて発病しやすいため、発生に注意する。 (防除上のポイント) ○ 薬剤散布は、下位葉まで薬液が十分かかるようにする。 ○ 発病前の薬剤散布は、発病後の進展を抑制する効果が高い。 ○ 発病後、多発時以外は、耐性菌対策のため同一薬剤の連続散布は避ける。 ○ 展着剤の種類によっては薬害が発生するので注意する。	○ 発生圃場を水田化し菌密度を低下させる。 ○ 圃場内の排水を良好にして滞水しないようにする。 ○ 既発生地の種いもは使用しない。 ○ 疫病が発生した圃場では連作を避け（２～３年作付を控える）、隣接する圃場での作付けをしない。 ○ 被害残渣を圃場内に残さないよう除去する(圃場周辺に葉、葉柄等を野積みしない)。 ○ 発病した残渣を堆積しプラスティックフィルムで被覆し嫌気性発酵させる。	種子消毒		M3+1	ベンレートT水和剤20	1:ﾁｳﾗﾑ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	20倍	植付前	1回	普	×	○ 1分間種いも浸漬 ○ 薬剤選択注意
						いも類の種子消毒の項参照							
			発病前～		NC+M1	ジーファイン水和剤	1:炭酸水素ﾅﾄﾘｳﾑ2:無水硫酸銅	1,000倍	収穫前日まで	-	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	500倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
			発病初期		11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					21+27	ダイナモ顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ2:ｼﾓｷｻﾆﾙ	2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△※	
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾟｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾟﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾟｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
					U17	ピシロックフロアブル	1:ﾋﾟｶﾙﾌﾞﾄﾗｿﾞｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					49+40	オロンディスウルトラSC	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							
ネグサレセンチュウ			本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はワタアブラムシ。 (防除上のポイント) ○ ネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が一部地域で認められている。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	植付前	4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	6kg/10a	植付前	1回	普	×	○ 作条混和
			植付時	4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 植溝土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	3～6kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 植溝土壌混和
				1A		オンコル粒剤5	1:ﾍﾞﾝﾌﾗｶﾙﾌﾞ	6～9kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 植溝土壌混和
			発生初期	1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	×	
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
セスジスズメ	(発生の特徴) ○ 生育初期に加害されると被害が大きく注意する。	○ 幼虫は見つけ次第捕殺する。	発生初期	un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。 ○ 多発前の世代である8月中旬頃に重点防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し、処分する。	発生初期	5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△※	
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾟﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
			成虫発生初期			フェロディンSL　性フェロモンの項参照							
コガネムシ類幼虫	(発生の特徴) ○ 成虫は6月中旬～7月下旬頃が発生のピークとなる。幼虫は7月頃から発生する。	○ 周辺の寄生植物を除去する。 ○ 必要以上に有機物を施用しない。	植付前	1B		ダイアジノンSLゾル	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	25～50倍	植付前	1回	普	△	○ 希釈液の全面土壌混和(散布液量:100ℓ／10a)
				1B		ラグビーMC粒剤	1:ｶｽﾞｻﾎｽ	20kg/10a	植付前	1回	普	△※	○ 全面処理土壌混和。登録はコガネムシ類
						土壌病害虫防除法の項参照							
			植付時			BT剤の項参照							
			発生初期	1A		オンコル粒剤5	1:ﾍﾞﾝﾌﾗｶﾙﾌﾞ	6～9kg/10a	生育期 但し、収穫60日前まで	1回	普	△	○ 株元土壌混和
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 主要種はカンザワハダニ。 ○ 高温乾燥条件下で多発する。 ○ 生育初期の多発は、生育阻害を起こすことがある。	○ 近接する発生源の影響が大きいので、育苗床や圃場内外の除草を徹底する。	発生初期	6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△※	○ 登録はカンザワハダニ
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫3日前まで	1回	普	△	
				21A		サンマイトフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾍﾞﾝ	1,000～1,500倍	収穫21日前まで	2回以内	劇	×	
				21A		ピラニカEW	1:ﾃﾌﾟﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	1回	劇	△※	○ 登録はカンザワハダニ
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス類	(発生の特徴) ○ 主要な病原ウイルスはPVY、PLRV。 (防除上のポイント) ○ タバコ黄斑えそ病防除対策に留意。	(耕種的防除法) ○ 無病種いもを使用。 ○ 発病株を除去。	アブラムシ類の項参照										
軟腐病	(発生の特徴) ○ 伝染源は土壌や種いもに生息する細菌。 (防除上のポイント) ○ 小葉に発病し始めたら、直ちに1回目の防除を行う。	○ 連作は発病を助長するので輪作を行う。 ○ 傷口から侵入するので、傷を生じないような管理作業を心がける。 ○ 無病種いもを使用する。 ○ 病株、病いもの除去、排水を良くする。 ○ 収穫は土の乾燥時に行い、いもに傷を付けない。	発病初期		31	スターナ水和剤	1:ｵｷｿﾘﾆｯｸ酸	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					41+25	アグリマイシン－100	1:ｵｷｼﾃﾄﾗｻｲｸﾘﾝ2:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	1,000～1,600倍	収穫3日前まで	5回以内	普	△	
					M1+25	銅ストマイ水和剤	1:塩基性塩化銅2:ｽﾄﾚﾌﾟﾄﾏｲｼﾝ硫酸塩	600～800倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					24+M1	カスミンボルドー	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	500～800倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
					24+M1	カッパーシン水和剤	1:ｶｽｶﾞﾏｲｼﾝ2:塩基性塩化銅	500～800倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項、微生物農薬の項参照							
青枯病	(発生の特徴) ○ 生長点付近の葉が萎れた後、全葉が急激に萎凋する。	○ 連作を避ける。 ○ 発病圃場は3年程度水田化する。 ○ 非寄主作物を取り入れた5年以上の輪作とする。 ○ 被害株は除去し、排水を図り、圃場が多湿にならないようにする。 ○ 発病株に触れた手で健全株に触れないようにする。 ○ 管理作業で根を傷つけないようにする。 ○ 有機質を施し、敷わらやマルチ等により地温を著しく高くしない。	本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
そうか病	(発生の特徴) ○ 病斑はコルク化して大小様々のかさぶた状となる。	○ 連作を避ける。 ○ 無病種いもを使用する。 ○ 土壌pH6.0以下に抑える。 ○ 粗大有機物の施用を控え、完熟堆肥を利用する。 ○ 抵抗性品種利用する。	種いも消毒			いも類の種子消毒の項参照							
			床土消毒 本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			植付前		29	フロンサイド粉剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	30～40kg/10a	植付前	1回	普	△※	○ 全面土壌混和、かぶれ注意
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	100倍	植付前	1回	普	×	植溝散布(散布液量20ℓ/10a)、かぶれ注意
						銅剤及び混合剤の項参照							
			植付時		36	ネビジン粉剤	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	30kg/10a	植付時	1回	普	○※	○ 作条土壌混和
					36	ネビジン粉剤	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	60kg/10a	植付時	1回	普	○※	○ 全面土壌混和
粉状そうか病	(発生の特徴) ○ 病斑はコルク化して隆起し、そうか病に比べて小さく形は整っている。	○ 連作を避ける。 ○ 無病種いもを使用する。 ○ 排水不良地での栽培は避ける。 ○ 植付前の石灰窒素の50～100kg/10a 施用が有効。 ○ 収穫は土の乾燥時に行い、いもに傷を付けない。 ○ 冷涼にして通気のよい場所に貯蔵する。	植付前		29	フロンサイド粉剤	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	30～40kg/10a	植付前	1回	普	△※	○ 全面土壌混和、かぶれ注意
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	400～600mℓ/10a	植付前	1回	普	×	○ 全面土壌混和、かぶれ注意
					21	オラクル顆粒水和剤	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	250g/10a	植付前	1回	普	△※	○ 100ℓの水で希釈し全面散布後土壌混和
			植付時		36	ネビジン粉剤	1:ﾌﾙｽﾙﾌｧﾐﾄﾞ	60kg/10a	植付時	1回	普	○※	○ 全面土壌混和

ばれいしょ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
乾腐病	(発生の特徴) ○ 貯蔵中に被害を生じることがある。	○ 連作を避ける。 ○ 無病種いもを使用する。 ○ 収穫は土の乾燥時に行い、いもに傷を付けない。 ○ 冷涼にして通気のよい場所に貯蔵する。											
疫病	(発生の特徴) ○ 多発跡地では発生しやすい。 ○ 梅雨入り後や曇雨天(20℃前後の低温で多湿条件)が続くと発生しやすい。 ○ 窒素過多は発病を著しく助長する。 (防除上のポイント) ○ 初発を確認したら、散布間隔を短縮し、集中的に薬剤散布する。 ○ 同系統薬剤の連用は避ける。 ○ 病原菌は*Phytophthora infestans*。 ○ 疫病は、窒素肥料が過多だと生育が軟弱になり、発病しやすい。一方、夏疫病は高温乾燥や肥料不足などで発病しやすい。	○ 無病種いもを使用する。 ○ 新しいいもへの感染を防ぐため培土を厚くする。	発病初期		M3	エムダイファー水和剤	1:ﾏﾝﾈﾌﾞ	400～650倍	収穫14日前まで	7回以内	普	△	
					M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫7日前まで	10回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫7日前まで	10回以内	普	△	
					21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					40	レーバスフロアブル	1:ﾏﾝｼﾞﾌﾟﾛﾊﾟﾐﾄﾞ	1,500～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
					M3+4	リドミルゴールドMZ	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ2:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	500～1,000倍	収穫30日前まで	1回	普	△	
					27+M3	カーゼートPZ水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	600～800倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	1,000～2,500倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△※	
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	400～600倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:TPN	750～1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△※	
					27+40	エキナイン顆粒水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	○	
					27+40	ベトファイター顆粒水和剤	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ	1,500～2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	○	
					40+M3	カンパネラ水和剤	1:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					40+M3	ベネセット水和剤	1:ﾍﾞﾝﾁｱﾊﾞﾘｶﾙﾌﾞｲｿﾌﾟﾛﾋﾟﾙ2:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					45+40	ザンプロDMフロアブル	1:ｱﾒﾄｸﾄﾗｼﾞﾝ2:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					22	エトフィンフロアブル	1:ｴﾀﾎﾞｷｻﾑ	500～750倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	3,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					49+11	ゾーベック エンカンティア SE	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					49+21	ゾーベック エンテクタSE	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							
夏疫病	(発生の特徴) ○ 夏期高温時に発生する。 ○ 病斑は同心円状の輪紋として生じる。 ○ 本菌はトマト、ナスにも寄生する。 ○ 病原菌は*Alternaria solani*。		発病初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫7日前まで	10回以内	普	△	
					M3	ペンコゼブ水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫7日前まで	10回以内	普	△	
					27+11	ホライズンドライフロアブル	1:ｼﾓｷｻﾆﾙ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	1,500倍	収穫14日前まで	4回以内	普	△※	
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	3,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
					49+11	ゾーベック エンカンティア SE	1:ｵｷｻﾁｱﾋﾟﾌﾟﾛﾘﾝ2:ﾌｧﾓｷｻﾄﾞﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							

ばれいしょ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はモモアカアブラムシとワタアブラムシ。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	植付時	4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 植溝土壌混和
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	3～6kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 植溝土壌混和
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	3～6kg/10a	植付時	1回	普	△	○ 植溝処理土壌混和
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2～6kg/10a	植付時	1回	普	×	○ 作条混和
			発生初期	4A		アドマイヤー水和剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1,000～3,000倍	収穫14日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～6,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 登録はワタアブラムシ
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 登録はワタアブラムシ
				9B		チェス顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾒﾄﾛｼﾞﾝ	5,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	○	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000～8,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				21A	39	ハチハチ乳剤	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ かぶれ・眼の刺激注意
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				4C		トランスフォームフロアブル	1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	
ジャガイモガ	(発生の特徴) ○ 薬肉を袋状に食害、塊茎に食入して糞を出す。 ○ 少雨、乾燥年に発生は多い。	○ 無被害の種いもを選ぶ。 ○ 収穫後の圃場及び貯蔵中に産卵しないよう防虫ネットの使用や速やかな保管をする。	発生初期	1B		オルトラン水和剤	1:ｱｾﾌｪｰﾄ	1,000～1,500倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
				1B		トクチオン乳剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	1,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
				3A		スカウトフロアブル	1:ﾄﾗﾛﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	劇	△※	○ 合ピレ(注)(P.15)
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ヨトウムシ	(防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。		発生初期	1B		オルトラン水和剤	1:ｱｾﾌｪｰﾄ	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	
				1B		ジェイエース水溶剤	1:ｱｾﾌｪｰﾄ	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	○	
テントウムシダマシ類	(発生の特徴) ○ 成虫は年2回発生する。 (防除上のポイント) ○ 幼虫の発生期に防除する。	○ 卵塊や幼虫は見つけ次第捕殺する。	発生初期	1B		オルトラン水和剤	1:ｱｾﾌｪｰﾄ	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	△	○ 登録は幼虫のみ
				1B		ジェイエース水溶剤	1:ｱｾﾌｪｰﾄ	1,000倍	収穫30日前まで	2回以内	普	○	○ 登録はｵｵﾆｼﾞｭｳﾔﾎｼﾃﾝﾄｳ
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
ケラ	(発生の特徴) ○ 成虫は9～10月に発生し、そのまま越冬。	○ 土壌の乾燥を図り、未熟堆肥の施用を避ける。	植付前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	植付前	1回	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和
センチュウ類		○ 連作を避ける。	植付前			土壌病害虫防除法の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
基腐病	(発生の特徴) ○ 地際の茎が黒変し、茎葉は黄色や紫色に変色し次第にしおれ、やがて枯死する。塊根はなり首から腐敗する。 ○ 雨水等で胞子が拡散し蔓延する。 ○ 土壌に残った発病残渣が伝染源となる。	○ 種いもは健全株から採取 ○ 発病株は種いもごと抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。 ○ 排水路の掃除や排水溝の設置により、圃場の排水性を高める。 ○ 連作を避け、ヒルガオ科以外の植物を作付ける。	種いも・苗の消毒			いも類の種子消毒の項参照							
			本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			植付前		11	フリントフロアブル25	1:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	10倍(4L/10a)	植付前	1回	普	△※	○ 全面散布土壌混和
					11	フリントフロアブル25	1:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	125倍(50L/10a)	植付前	1回	普	△※	○ 全面散布土壌混和
					11	フリントフロアブル25	1:ﾄﾘﾌﾛｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	250倍(100L/10a)	植付前	1回	普	△※	○ 全面散布土壌混和
					29	フロンサイドSC	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	500mℓ/10a(200L/10a)	植付前	1回	普	×	○ 全面散布土壌混和 かぶれ注意
					29	フロンサイド粉剤 土壌病害虫防除法の項参照	1:ﾌﾙｱｼﾞﾅﾑ	40kg/10a	植付前	1回	普	△※	○ 全面散布土壌混和 かぶれ注意
			発病初期		3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					11	アミスター20フロアブル 銅剤及び混合剤参照	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	△	
黒斑病	(病害虫の特徴) ○ 被害いもは食用としない。 ○ 被害いもは家畜に与えない。	○ 種いも、苗は無病なものを使用する。 ○ 種いもの温湯消毒(47～48℃ 40分)。 ○ 収穫時にいもを傷つけない。 ○ 13～15℃で貯蔵する。 ○ 連作を避ける。	種いも・苗の消毒			いも類の種子消毒の項参照							
つる割病	(発生の特徴) ○ 早掘栽培地帯では、発病しやすい。	○ 種いもは健全株から採取する。 ○ 被害いもを早期処分する。 ○ 連作を避ける。 ○ 無病苗を使用する。	育苗床及び本田植付時			土壌病害虫防除法の項参照							
			苗の消毒			いも類の種子消毒の項参照							
黒あざ病	(発生の特徴) ○ 病斑はいもの表面に不整形や大型の黒あざ状に形成される。 ○ 表皮のみで発病する。	(耕種的防除法) ○ 排水を良くする。 ○ 連作を避ける。 ○ 未熟な有機物を植付直前に投入しない。											
ナカジロシタバ	(発生の特徴) ○ 秋期に大発生することがあり、6月の降水量が多いことと相関があるといわれている。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫はつるの先や若い葉を好んで食害するため、圃場を良く観察して被害発生の初期を把握する。		発生初期	1B		トクチオン乳剤	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	
				1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	劇	×	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000～3,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～6,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
イモキバガ	(発生の特徴) ○ 別名(イモコガ) ○ 葉の一部を内側に折り曲げたり、隣接する2枚の葉を重ね合わせて綴り、表皮だけを残した食害が見られる。	(防除上のポイント等) ○ 老齢幼虫は葉を綴るため、圃場を良く観察して被害発生の初期を把握する。	発生初期	3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し、処分する。	発生初期	5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000～3,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		ロムダンフロアブル	1:ﾃﾌﾞﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
ハリガネムシ類	(発生の特徴) ○ コメツキムシ類幼虫の別称。 ○ 1世代3～4年。 ○ 火山灰土壌や排水良好な洪積土壌で発生が多い。 (防除上のポイント) ○ 被害は局所的に起こることが多く、毎年同じ場所に発生する事が多いので、発生場所を把握する。 ○ 植え付け後は有効な薬剤がないため、被害の予想される圃場では、植え付け前の防除が必要である。	○ 麦や牧草などイネ科の雑草が多い地域で発生が多いため、周辺雑草を除草する。 ○ 連作を避け、非寄生作物や被害の問題にならない作物と輪作する。	植付前	3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	9kg/10a	植付前	1回	劇	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和、合ピレ(注)
				1B		トクチオン細粒剤F	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	9kg/10a	植付前	1回	普	△	○ 植溝又は作条土壌混和
						土壌病害虫防除法の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 生育初期につるの先端に発生し、葉に寄生・吸汁加害するため、生育が抑えられる。 ○ ウイルス病を伝搬する。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	育苗期	4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	6kg/10a	育苗期	1回	普	△	○ 株元処理
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	6kg/10a	育苗期	1回	普	×	○ 株元散布
			発生初期	4A		アドマイヤー顆粒水和剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	10,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
コガネムシ類幼虫	(発生の特徴) ○ 主要種はドウガネブイブイ。 ○ 年1～2回の発生。	○ 周辺の寄生植物を除去。 ○ 未熟な有機物を過用したり、青刈り作物をすき込んだりしない。 ○ 8月以降は被害が増加するので、なるべく早堀りする。	植付前	1B		ダイアジノンSLゾル	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	50倍	植付前	1回	普	△	○ 全面土壌混和又は畦立て前作条散布(散布液量100ℓ/10a)
				1B		ラグビーMC粒剤	1:ｶｽﾞｻﾎｽ	9kg/10a	植付前	1回	普	△※	○ 全面処理土壌混和又は作条処理土壌混和、登録はｺｶﾞﾈﾑｼ類
				3A		フォース粒剤	1:ﾃﾌﾙﾄﾘﾝ	9kg/10a	植付前	1回	劇	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和、合ピレ注意事項参照
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4～6kg/10a	植付前	1回	普	△	○ 作条土壌混和 登録はｺｶﾞﾈﾑｼ類
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	6kg/10a	植付前	1回	普	△	○ 全面土壌混和 登録はｺｶﾞﾈﾑｼ類
				4A		アクタラ粒剤5	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	6～9kg/10a	植付前	1回	普	×	○ 作条混和 登録はｺｶﾞﾈﾑｼ類
				1B		トクチオン細粒剤F	1:ﾌﾟﾛﾁｵﾎｽ	6～9kg/10a	植付前	1回	普	△	○ 植溝または作条土壌混和
						土壌病害虫防除法の項参照							
			植付前～植付時										
				4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	6～9kg/10a	植付前	1回	普	△	○ 作条処理土壌混和、登録はｺｶﾞﾈﾑｼ類
			発生初期	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	収穫30日前まで	3回以内	普	×	○ 作条処理して軽く覆土
ケラ	(発生の特徴) ○ 成虫は9～10月に発生し、そのまま越冬。	○ 敷きワラ等は、集積し焼却処分する。 ○ 未熟有機物の過用は避ける。 ○ 圃場の排水を良くし乾燥を図る。	植付前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	植付前	1回	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和
センチュウ類						土壌病害虫防除法の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス病	(発生の特徴) ○ 主な病原ウイルスはSMV，BYMV。 ○ SMVは種子伝染、虫媒(アブラムシ類)伝染。BYMVは虫媒(アブラムシ類)伝染。	○ 耐病性品種を選定する。 ○ 無病種子を使用する。 ○ 発病初期に罹病株を除去する。 ○ アブラムシ類の飛来防止と防除。											
			アブラムシ類の項参照										
菌核病	(発生の特徴) ○ 発病は低温(18～20℃)多湿条件で見られる。	○ 発病株は早期に除去、圃場に菌核を残さない。	発病初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
白絹病	(発生の特徴) ○ 麦わらのすき込みは白絹病の発病を助長する。	○ 発病地では連作を避け、他作物と輪作する。 ○ 3～4年間水稲と輪作するか、田畑輪換を行う。 ○ 被害株、病菌のついた敷わら等は菌核を落とさないように圃場外へ除去する。 ○ 発病株周辺の表土は菌核が多いので土中深く埋め込む。 ○ 植え付け前に石灰を施用し、土壌酸度を矯正。											
			床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
べと病	(発生の特徴) ○ 発病が激しい時は落葉し、大きな被害となる。 ○ 多湿条件で発生が多くなる。	○ 密植を避け、通風をよくする。 ○ 肥料を十分に施し、肥切れしないようにするが、過繁茂にならないようにする。 ○ 連作を避ける。	発病初期		21	ランマンフロアブル	1:ｼｱｿﾞﾌｧﾐﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					21	ライメイフロアブル	1:ｱﾐｽﾙﾌﾞﾛﾑ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
					40+M1	フェスティバルC水和剤	1:ｼﾞﾒﾄﾓﾙﾌ2:塩基性塩化銅	600倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
			銅剤及び混合剤参照										
アブラムシ類	(防除上のポイント) ○ ウイルス病に弱い品種では早期防除を徹底。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	播種前	4A		ダントツ粒剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	6kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
			播種時	4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	3kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	50g/セル成型育苗トレイ1箱またはﾍﾟｰﾊﾟｰﾎﾟｯﾄ1冊(30×60cm、使用土壌約1.5～4ℓ)	は種時	1回	普	△	○ 本剤の所定量をセル成型育苗トレイまたはペーパーポットの培土に均一に混和する。
				4A		モスピラン粒剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	3kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 播溝土壌混和
			定植時	4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2g/植穴(但し、6kg/10aまで)	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和

えだまめ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRACｺｰﾄﾞ	FRACｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類			発生初期	1B		マラソン乳剤	1:マラソン	1,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				1B		オルトラン水和剤	1:アセフェート	1,000倍	収穫21日前まで	3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアメトキサム	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:シアントラニリプロール	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
カメムシ類	(防除上のポイント) ○ 吸汁加害によって着莢が阻害されるので、開花終期から子実肥大期に2回程度、薬剤散布する。		発生初期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				3A		アグロスリン乳剤	1:シペルメトリン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		トレボンEW	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		トレボン乳剤	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				4A		ダントツ水溶剤	1:クロチアニジン	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:チアメトキサム	3,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ジノテフラン	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル液剤10	1:ジノテフラン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークルメイト液剤10	1:ジノテフラン	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4C		エクシードフロアブル	1:スルホキサフロル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ		播種前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ダイアジノン	6kg/10a	収穫30日前まで	5回以内	普	×	○ 土壌表面散布
				3A		ガードベイトA	1:ペルメトリン	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○ 株元散布
				22B		アクセルベイト	1:メタフルミゾン	3～6kg/10a	収穫前日まで	3回以内	普	○	合ピレ(注)(P.15)
マメシンクイガ	(発生の特徴) ○ 年1回発生し、ふ化幼虫が莢に食入して子実を加害する。 (防除上のポイント) ○ 散布剤を1～2回散布する。	○ 連作すると発生が多くなるので、連作を避ける。	発生初期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000～1,500倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				1B		マラソン乳剤	1:マラソン	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				3A		アグロスリン乳剤	1:シペルメトリン	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		アディオン乳剤	1:ペルメトリン	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		トレボンEW	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		トレボン乳剤	1:エトフェンプロックス	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:アセタミプリド	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:フルベンジアミド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:クロラントラニリプロール	4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:テトラニリプロール	5,000～10,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:フルキサメタミド	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ブロフラニリド	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

えだまめ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
シロイチモジマダラメイガ	(発生の特徴) ○ ふ化幼虫が莢に食入して子実を加害する。		着莢期～子実肥大期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。 ○ 8月中下旬の防除が重要。	○ 白化葉(ふ化幼虫の集団加害葉)の発生に注意し除去する。	発生初期	5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△※	
				6		アニキ乳剤	1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		アタブロン乳剤	1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ	2,000～4,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				15		マッチ乳剤	1:ﾙﾌｪﾇﾛﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				18		マトリックフロアブル	1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ IGR剤(注)(P.15)参照
				22A		トルネードエースDF	1:ｲﾝﾄﾞｷｻｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				22B		アクセルフロアブル	1:ﾒﾀﾌﾙﾐｿﾞﾝ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000～10,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
ダイズサヤタマバエ	(防除上のポイント) ○ 莢又は虫体によく薬剤がかかるよう散布する。		着莢期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)(P.26)
				3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000倍	収穫14日前まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル液剤10	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				30		ブロフレアSC	1:ﾌﾞﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
タネバエ	(発生の特徴) ○ 未熟堆厩肥等を使用すると発生が多くなる。	○ 晩播すると発生が少ない。	播種前	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	収穫30日前まで	5回以内	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和
			播種時	1B		カルホス微粒剤F	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	6kg/10a	は種時	1回	劇	△	○ 土壌表面散布土壌混和処理
コガネムシ類	(防除上のポイント) ○ 散布剤を発生初期に1～2回散布する。	○ 未熟な有機物を過用したり、青刈り作物をすき込まない。	播種前(幼虫)										
				1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	4～6kg/10a	収穫30日前まで	5回以内	普	×	○ 全面土壌混和又は作条土壌混和
			発生初期(成虫)										
				1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	1,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	

えだまめ

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ハダニ類			発生初期	21A 13		ダニトロンフロアブル コテツフロアブル 気門封鎖型薬剤の項参照	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ 1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	1,000～2,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫前日まで	1回 2回以内	普 劇	× △※	
ハト・キジバト	(発生の特徴) ○ 出芽後に子葉をついばんで食害する。	○ 寒冷紗や不織布をべた掛けする。	播種前	4A	12+4	クルーザーMAXX	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ2:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ3:ﾒﾀﾗｷｼﾙM	原液	は種前	1回	普	○	○ 8mℓ/乾燥種子1kg(種子食害忌避)
センチュウ類		○ 発生圃場での連作を避ける。	は種前			土壌病害虫防除法の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス病	(発生の特徴) ○ 主にBYMV、BBWV2、ClYVVによる。 ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染。BYMVは低率で種子伝染もする。 ○ 生育初期に感染すると全身的な萎縮を生じる。 (防除上のポイント) ○ アブラムシ類を防除する。	(耕種的防除法) ○ 無病種子を用いる。 ○ 初期の発病株を除去する。 ○ アブラムシ類の飛来防止に努める。	アブラムシ類の項参照										
えそモザイク病	(発生の特徴) ○ 病原ウイルスはBBNV ○ 土壌伝染。極低率で種子伝染する。	(耕種的防除法) ○ 種子は無病株から採取する。 ○ 連作を避け、発病圃場では4年以上の輪作をする。											
苗立枯病 立枯病	(発生の特徴) ○ 立枯病は開花期頃より症状が現れる。	○ 連作を避ける。 ○ 排水を良くする。 ○ 被害株を除去、圃場外へ持ち出す。	床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			播種後～発病初期		32	タチガレン液剤	1:ﾋﾄﾞﾛｷｼｲｿｷｻｿﾞｰﾙｶﾘｳﾑ	500倍	は種後及び生育期但し、収穫30日前まで	3回以内	普	△	○ 播種穴又は株元に土壌潅注(200mℓ/株) 登録は立枯病
茎腐病	(発生の特徴) ○ 病原菌が比較的低温を好むため、主に春先に発生する。	○ 4年以上の輪作。 ○ 発病した場合、土入れをしない(発病助長)。	発病初期		14	リゾレックス水和剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ 株元潅注(1ℓ/㎡)
菌核病	(発生の特徴) ○ 発病は低温(18～20℃)、多湿条件で見られる。 ○ 茎に発病すると茎内部に黒色でﾈｽﾞﾐの糞状の菌核を形成する。	○ 発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。	発病初期		7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾟ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					17	ピクシオDF	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾗｻﾞﾐﾝ	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	○	
赤色斑点病	(発生の特徴) ○ 春先の気温上昇で発病する。	○ 排水を良くする。 ○ カリ肥料を十分に施し、強健に育てる。	発病前～初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							
さび病		○ 排水を良くする。	発病前～初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					3	オンリーワンフロアブル	1:ﾃﾌﾞｺﾅｿﾞｰﾙ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
輪紋病		○ 排水を良くする。	発病前～初期		M3	ジマンダイセン水和剤	1:ﾏﾝｾﾞﾌﾞ	400～600倍	収穫30日前まで	3回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ ウイルス病を媒介する。 ○ 4～5月に増加し、新梢、さや等に群生する。 ○ 主要種はマメアブラムシ。	○ 寒冷紗被覆育苗を行う。 ○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。 ○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	発生前	4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	3kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 植溝土壌混和
				4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2g/植穴（但し、6kg/10aまで）	定植時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			生育期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000～2,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで（但し、露地栽培については開花期終了後）	3回以内	劇	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫7日前まで	3回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
カメムシ類	(発生の特徴) ○ 加害種はミナミアオカメムシ、イチモンジカメムシ等。 ○ 加害は開花期から収穫期に及ぶが、子実肥大期の被害が大きい。		発生初期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
				1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
ヨトウムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はヨトウガ。 ○ 若齢幼虫は集団で表皮を残し加害し、その後分散する。	○ 分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し、処分する。	生育初期	3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)
						BT剤の項参照							
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。	発生初期	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)
ハモグリバエ類	(発生の特徴) ○ 幼虫が葉肉内を食害し、白っぽい被害痕が残る。		発生初期	1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	1,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△※	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
マメハモグリバエ				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ IGR剤(注)

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人 毒	水産 (注)	注意事項
ウイルス病	(発生の特徴) ○ 主にBYMVによる。 ○ 虫媒(アブラムシ類)伝染。低率で種子伝染もする。 ○ 圃場内では散在して発生することが多い。 (防除上のポイント) ○ アブラムシ類を防除する。	(耕種的防除法) ○ 無病種子を用いる。 ○ 初期の発病株を除去する。 ○ アブラムシ類の飛来防止に努める。 ○ 圃場周辺の雑草を除去する。											
			アブラムシ類の項参照										
苗立枯病	(発生の特徴) ○ ピシウム属菌又はリゾクトニア属菌により被害を生じる。	○ 床土は無病土を使用する。											
			本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
立枯病			床土、本圃の土壌消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
根腐病	(発生の特徴) ○ 本病は春どり栽培の早期枯れあがりの原因となる。	○ 連作を避ける。 ○ 排水を良くする。 ○ 石灰カリを十分に施す。 ○ 発病の多い圃場は2～3年輪作する。	本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
			発病前～発病初期										
					32	タチガレン液剤	1:ﾋﾄﾞﾛｷｼｲｿｷｻｿﾞｰﾙｶﾘｳﾑ	500～1,000倍	は種後及び生育期但し、は種後1～2か月後まで	3回以内	普	△	○ 希釈液3ℓ／㎡を播種穴又は株元に土壌灌注
茎腐病	(発生の特徴) ○ 本病は地際部が黒褐色に変色し、くもの巣状のかびを生じる。	○ 発病株は早期に除去。	発病前～発病初期										
					14	リゾレックス水和剤	1:ﾄﾙｸﾛﾎｽﾒﾁﾙ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	○ 1ℓ／㎡の土壌灌注
褐斑病	(防除上のポイント) ○ 本病はみかんのそばかす病の原因となるので、みかん園の近くでは収穫後速やかに茎葉を取り除き処分する。	○ 無病種子を用いる。 ○ 肥沃で排水良好な土地を選ぶ。 ○ リン酸・カリ肥料を十分に施して強健に育てる。	発病前～発病初期		1	トップジンM水和剤	1:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾟﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
うどんこ病	(発生の特徴) ○ 収穫期に雨が多い年に発生が増加する。 (防除上のポイント) ○ 発病後は、7～10日間隔で2～3回散布する。	○ 被害残さを圃場内に残さないようにする。 ○ 発病した茎葉は速やかに除去する。 ○ 窒素過多・肥切れさせないよう適正な肥培管理を行う。 ○ 密植、株の過繁茂を避ける。	発病初期		3	トリフミン水和剤	1:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					3	ラリー水和剤	1:ﾐｸﾛﾌﾞﾀﾆﾙ	4,000～8,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					U6+3	パンチョTF顆粒水和剤	1:ｼﾌﾙﾌｪﾅﾐﾄﾞ2:ﾄﾘﾌﾙﾐｿﾞｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					11+7	シグナムWDG	1:ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝ2:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,500～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					50	クロスアウトフロアブル	1:ﾋﾟﾘｵﾌｪﾉﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	
						銅剤及び混合剤、くん煙剤の項参照							

さやえんどう

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 低温(20℃以下)、多湿条件で発生する。 (防除上のポイント) ○ 輸送中等にも発病するので、出荷にあたっては被害莢は丁寧に取り除く。	○ 花弁・果実・茎・葉等で発生し、被害部を放置すると感染源となるので除去する。 ○ 密植を避け風通しを良くする。	発病前～発病初期		2	ロブラール水和剤	1:ｲﾌﾟﾛｼﾞｵﾝ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					10+1	ゲッター水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾟ2:ﾁｵﾌｧﾈｰﾄﾒﾁﾙ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾟ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾟ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
菌核病	(発生の特徴) ○ 発病は低温(18～20℃)、多湿条件で見られる。 ○ 茎に発病すると茎内部に黒色でﾈｽﾞﾐの糞状の菌核を形成する。	○ 発病株は早期に除去し、圃場に菌核を残さない。	発病初期		12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾞﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾟ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾟﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾟ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					7	アフェットフロアブル	1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	カナメフロアブル	1:ｲﾝﾋﾟﾙﾌﾙｷｻﾑ	4,000倍	収穫前日まで	4回以内	劇	△	
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はエンドウヒゲナガアブラムシ。 ○ ウイルス病を媒介する。 ○ 春季に発生が増加し、新梢、花弁、さや等に群生する。	○ 雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺を除草する。	発生初期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000～2,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)
				1B		ダイアジノン乳剤40	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	1,000倍	収穫開始14日前まで	3回以内	劇	×	○ 薬害等(注)
				1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	1,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
カメムシ類	(発生の特徴) ○ 開花期から収穫期にかけて、不稔、奇形粒等を発生させる。		発生初期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	

さやえんどう

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウラナミシジミ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、秋期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2～3回散布する。		着蕾期～開花初期	3A 3A 3A 14 4A 4A		アディオン乳剤 トレボン乳剤 トレボンEW パダンSG水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ 1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ 1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ 1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ 1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ 1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	3,000倍 1,000倍 1,000倍 1,500倍 2,000倍 2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内 3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 劇 普 普	× × × × △ △	○ 合ピレ(注) ○ 合ピレ(注) ○ 合ピレ(注)
シロイチモジマダラメイガ	(発生の特徴) ○ ふ化幼虫が莢内に食入し、子実を食害する。 ○ 年4世代程度発生する。		発生初期	1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫21日前まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)
マメシンクイガ	(発生の特徴) ○ ふ化幼虫が莢内に食入し、子実を食害する。 ○ 年1～2回発生。	○ 連作を避ける。	発生初期	1B 1B		スミチオン乳剤 マラソン乳剤	1:MEP 1:ﾏﾗｿﾝ	1,000～1,500倍 1,000倍	収穫21日前まで 収穫7日前まで	4回以内 3回以内	普 普	△ △	○ 薬害等(注)
シロイチモジヨトウ	(発生の特徴) ○ 若齢幼虫期は集団で葉裏から食害し、白変葉になる。	○ 卵塊及びふ化幼虫は捕殺する。	発生初期	3A 3A 3A 15 15 15 28 un		アディオン乳剤 トレボン乳剤 トレボンEW アタブロン乳剤 カスケード乳剤 ノーモルト乳剤 フェニックス顆粒水和剤 プレオフロアブル BT剤の項参照	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ 1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ 1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ 1:ｸﾛﾙﾌﾙｱｽﾞﾛﾝ 1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ 1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ 1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ 1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	3,000倍 1,000倍 1,000倍 2,000倍 4,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	× × × △ △ △ △ △	○ 合ピレ(注) ○ 合ピレ(注) ○ 合ピレ(注) ○ IGR剤(注) ○ IGR剤(注) ○ IGR剤(注)
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 卵塊や分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し処分する。	発生初期	15 18 6 un 5 30		カスケード乳剤 マトリックフロアブル アファーム乳剤 プレオフロアブル ディアナSC グレーシア乳剤 BT剤の項参照	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ 1:ｸﾛﾏﾌｪﾉｼﾞﾄﾞ 1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩 1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ 1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ 1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	4,000倍 2,000倍 2,000倍 1,000～2,000倍 2,500～5,000倍 2,000～3,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 2回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普	△ ○ △※ △ △ △	○ IGR剤(注) ○ IGR剤(注)
シヨトウムシ	(発生の特徴) ○ 若齢幼虫は集団で表皮を残し加害し、その後分散する。	○ 分散前の幼虫集団を寄生葉ごと摘除し、処分する。	発生初期	3A		トレボン乳剤 BT剤の項参照	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)

さやえんどう

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の 使用回数	人毒	水産 (注)	注意事項
ネキリムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は厳寒期を除いていつでも見られるが、5～9月には異常発生することがある。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	○ 作付予定地では予め除草し、前作も早急に処分する。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。 ○ 施設栽培では、開口部を防虫ネット等で被覆する。											
			生育初期	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	3回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 子房への産卵による白ぶくれ症を引き起こす。	○ 圃場周辺の開花中の雑草にも寄生しているため除草する。	発生初期	4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ヒラズハナアザミウマ				3A		マブリック水和剤20	1:ﾌﾙﾊﾞﾘﾈｰﾄ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	○ 合ピレ(注)
ハモグリバエ類	(発生の特徴) ○ 4～11月に発生し、蛹や成虫で越冬する。	○ 圃場周辺の除草を徹底する。	発生初期	4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	9kg/10a	生育期(但し、収穫開始14日前まで)	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	9kg/10a	生育期(但し、収穫開始14日前まで)	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内	普	△※	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ナモグリバエ	(発生の特徴) ○ 多発すると葉が白い袋状になり減収する。		発生初期	3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)
				3A		スカウトフロアブル	1:ﾄﾗﾛﾒﾄﾘﾝ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	○ 合ピレ(注)
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	○ 薬剤選択注意
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ かぶれ注意
コガネムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はドウガネブイブイ。 ○ 幼虫が根部を食害し、生育遅延や枯死を引き起こす。	○ 過度な堆肥の施用は避ける。	播種時	1B		カルホス粉剤	1:ｲｿｷｻﾁｵﾝ	9kg/10a	は種時	1回	普	△	○ 作条施用土壌混和
			発生初期	1B		マラソン乳剤	1:ﾏﾗｿﾝ	1,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内	普	△	
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 前作の残渣や周辺雑草が発生源となることが多い。	○ 前作の残渣を圃場に放置しない。	発生初期	21A		ダニトロンフロアブル	1:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	1回	普	×	
				6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法									
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
ウイルス病	(発生の特徴) ○ 主にBYMVによる。 ○ 他のマメ科作物から伝染することがある。 (防除上のポイント) ○ アブラムシ類を防除する。	○ 無病種子を用いる。 ○ 初期の発病株を除去する。 ○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用し有翅虫の飛来を抑制する。	アブラムシ類の項参照										
炭疽病	(発生の特徴) ○ 降雨の多いときに発生することが多い。	○ 無病種子を用いる。 ○ 発病地では連作を避ける。 ○ 収穫後の茎葉は処分する。 ○ 抵抗性品種を選ぶ。	発病前～初期		11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫開始14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
さび病		○ 発病地では連作を避ける。 ○ 収穫後の茎葉は処分する。											
菌核病	(防除上のポイント) ○ 開花開始5～7日後から防除を開始。10日間隔で2～3回実施する。	○ 被害茎葉は早期に集めて処分する。	発芽期～着莢期		12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					1	ベンレート水和剤	1:ﾍﾞﾉﾐﾙ	2,000倍	収穫開始14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫開始14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾟﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
灰色かび病	(発生の特徴) ○ 老化又は落下花弁が主な感染源である。		発芽期～着莢期		12	セイビアーフロアブル20	1:ﾌﾙｼﾞｵｷｿﾆﾙ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	アミスター20フロアブル	1:ｱｿﾞｷｼｽﾄﾛﾋﾟﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾍﾞﾝｶﾙﾌﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11	スクレアフロアブル	1:ﾏﾝﾃﾞｽﾄﾛﾋﾟﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	カンタスドライフロアブル	1:ﾎﾞｽｶﾘﾄﾞ	1,000～1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
					7	パレード20フロアブル	1:ﾋﾟﾗｼﾞﾌﾙﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					10+1	ニマイバー水和剤	1:ｼﾞｴﾄﾌｪﾝｶﾙﾌﾞ2:ﾍﾞﾉﾐﾙ	1,000倍	収穫開始14日前まで	3回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
かさ枯病		○ 無病種子を用いる。 ○ 連作を避ける。 ○ 被害茎葉は集めて処分する。	銅剤及び混合剤の項参照										
根腐病	(発生の特徴) ○ 土壌温度が低いときに多発する。	○ 連作を避ける。 ○ 被害茎葉は集めて処分する。	本圃消毒			土壌病害虫防除法の項参照							
イガ フキノメ	(発生の特徴) ○ 6～8月に発生被害が多い。	○ 被害部は除去する。	発生初期	1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	×	
ミウラナミシジ	(発生の特徴) ○ 年内早出しに被害が多く、秋期に多発する。 (防除上のポイント) ○ 開花初期から2～3回散布する。		初期着蕾期～開花	3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	×	○ 合ピレ(注)
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3,000倍	収穫14日前まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)

さやいんげん

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ ウイルス病を媒介する。 ○ 主要種はマメアブラムシ。 ○ 新梢、莢等に群生し吸汁加害するため、多発すると生育が著しく抑制される。	○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	発生前	4A		アドマイヤー1粒剤	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	1～2g/株(但し、6kg/10aまで)	定植時又は は種時	1回	普	△	○ 植穴土壌混和
			発生初期	4A		スタークル粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	9kg/10a	生育期　但し、収穫開始14日前まで	1回	普	△	○ 株元散布
				4A		アルバリン粒剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	9kg/10a	生育期　但し、収穫開始14日前まで	1回	普	△	○ 株元散布
				1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	1回	劇	×	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	劇	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫3日前まで	3回以内	普	△	
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 主に葉裏に寄生し、多発すると葉が黄変し枯れる。	○ 前作の処分や周辺雑草の除草を行う。	発生初期	6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				25B+21		ダブルフェースフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾞﾐﾄﾞ2:ﾌｪﾝﾋﾟﾛｷｼﾒｰﾄ	2,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
ハモグリバエ類	(発生の特徴) ○ 幼虫が葉肉内に食入し、白っぽい食害痕を残す。	○ シルバーポリによる畝マルチなど、光反射資材を活用した方法は、成虫の飛来抑制に有効。	発生初期	15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
マメハモグリバエ				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	劇	×	
ミナミキイロアザミウマ		ミナミキイロアザミウマの項参照											

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC コード	FRAC コード	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
苗立枯病		○ 床土は無病土を使用する。	は種後～			苗立枯病の項参照							
疫病	(発生の特徴) ○ 改植圃場で発病している。	○ 排水を良くする。	発病初期～発病前		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	
					40+M5	プロポーズ顆粒水和剤	1:ペンチアピラルカルブイソプロピル 2:TPN	1,500倍	収穫前日まで	3回以内	普	△※	
					U17	ピシロックフロアブル	1:ピカルブトラゾクス	500倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 3ℓ/㎡灌注
茎枯病	(発生の特徴) ○ 雨よけでは発生が少ない。	○ 排水を良くする。 ○ 7月下旬～8月下旬の過繁茂をさけるため1m前後の位置で先刈りを行い新芽を更新する。 ○ 冬期(12月)に茎葉を刈取処分する。	発病初期		M7	ベルクート水和剤	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	
					1	ベンレート水和剤	1:ベノミル	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					11	アミスター20フロアブル	1:アゾキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)
					11	メジャーフロアブル	1:ピコキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	アフェットフロアブル	1:ペンチオピラド	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ピラジフルミド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ペンチオピラド2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
						銅剤及び混合剤の項参照							
			収穫終了後		M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	400～600倍	収穫終了後但し、秋期まで	6回以内	普	△	○ 露地栽培のみの登録
					1+M5	ダコレート水和剤	1:ベノミル2:TPN	1,000倍	収穫終了後	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					14	リゾレックス水和剤	1:トルクロホスメチル	500倍	収穫後～茎葉刈取り期まで、但し収穫14日前まで	3回以内	普	△	
					1	トップジンM水和剤	1:チオファネートメチル	1,000倍	収穫開始7日前まで	5回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					29	フロンサイド水和剤	1:フルアジナム	1,000～2,000倍	収穫終了後但し、秋期まで	5回以内	普	×	○ 露地栽培のみの登録 皮膚かぶれ注意
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ピラクロストロビン2:ボスカリド	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
斑点病	(発生の特徴) ○ 早期枯れ上がりにより翌年の収量が低下する。	○ 排水を良くする。 ○ 7月下旬～8月下旬の過繁茂をさけるため1m前後の位置で先刈りを行い新芽を更新する。 ○ 冬期(12月)に茎葉を刈取処分する。	発病初期		M5	ダコニール1000	1:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	×	
					M7	ベルクート水和剤	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	1,000倍	収穫7日前まで	5回以内	普	△	
					M7	ベルクートフロアブル	1:イミノクタジンアルベシル酸塩	1,000倍	収穫開始7日前まで	5回以内	普	△	
					2	ロブラール水和剤	1:イプロジオン	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	普	△	
					11	アミスター20フロアブル	1:アゾキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	○ 薬害等(注)
					11	ストロビーフロアブル	1:クレソキシムメチル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	○ 薬害等(注)
					11	メジャーフロアブル	1:ピコキシストロビン	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7	アフェットフロアブル	1:ペンチオピラド	2,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					7	パレード20フロアブル	1:ピラジフルミド	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					7+M5	ベジセイバー	1:ペンチオピラド2:TPN	1,000倍	収穫前日まで	4回以内	普	△	
					3	スコア顆粒水和剤	1:ジフェノコナゾール	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
						銅剤及び混合剤の項参照							
			収穫終了後		M3	ジマンダイセン水和剤	1:マンゼブ	500倍	収穫終了後但し、秋期まで	6回以内	普	△	○ 露地栽培のみの登録
					1+M5	ダコレート水和剤	1:ベノミル2:TPN	1,000倍	収穫終了後	4回以内	普	△	○ 薬剤選択注意
					29	フロンサイド水和剤	1:フルアジナム	1,000～2,000倍	収穫終了後但し、秋期まで	5回以内	普	×	○ 露地栽培のみの登録 かぶれ注意
					11	ファンタジスタ顆粒水和剤	1:ピリベンカルブ	3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
					11+7	シグナムWDG	1:ピラクロストロビン2:ボスカリド	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
						銅剤及び混合剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アブラムシ類	(発生の特徴) ○ 主要種はモモアカアブラムシ、ワタアブラムシ。 ○ 4月頃有翅虫がハウス内に飛込み寄生する。	○ 近紫外線カットフィルムの使用は、有翅虫の侵入防止に有効。 ○ 施設開口部に防虫ネット(1mm目以下)を張る。	発病初期	3A		アーデント水和剤	1:ｱｸﾘﾅﾄﾘﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	○ 合ピレ(注)
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛
				29		ウララDF	1:ﾌﾛﾆｶﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
コナジラミ類	(発生の特徴) ○ 秋期に多発する場合が多い。発生の主体はタバココナジラミ。	○ 近紫外線カットフィルムの使用は、成虫の侵入防止に有効。 ○ 施設開口部に防虫ネット(1mm目以下(0.4mm目以下が望ましい))を張る。	発生初期	4A		ベストガード水溶剤	1:ﾆﾃﾝﾋﾟﾗﾑ	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害(イネ)注意
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						気門封鎖型薬剤の項参照							
ジュウシホシクビナガハムシ	(発生の特徴) ○ 年1回の発生で、成虫越冬する。 ○ 成・幼虫が若茎の先端や茎の表面を加害し、茎が曲がったり変色したりする。		発生初期	1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000倍	収穫3日前まで	2回以内	劇	×	
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000～3,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	×	○ 合ピレ(注)
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛
ハスモンヨトウ	(発生の特徴) ○ 年5～6回の発生、被害は9～10月に集中する。 (防除上のポイント) ○ 若齢幼虫期に防除する。	○ 施設開口部に防虫ネット(4mm目以下)を張る。 ○ 捕殺する。	発生初期	15		ノーモルト乳剤	1:ﾃﾌﾙﾍﾞﾝｽﾞﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)
				15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)
				15		カウンター乳剤	1:ﾉﾊﾞﾙﾛﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前まで	2回以内	普	△	
						BT剤、フェロディンSL　性フェロモンの項参照							
ヨトウムシ	(発生の特徴) ○ 若齢幼虫は集団で茎表面を食害し、その後分散する。	○ 施設開口部に防虫ネット(4mm目以下)を張る。	発生初期	6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
シロイチモジヨトウ	(発生の特徴) ○ 若齢幼虫は集団で加害するが、齢が進むにつれて分散する。	○ 施設開口部に防虫ネット(4mm目以下)を張る。	発生初期	30		ブロフレアSC	1:ﾌﾟﾛﾌﾗﾆﾘﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
						ヨトウコン-S　性フェロモンの項参照							
						BT剤の項参照							

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 卵はヨトウのような卵塊でなく1個ずつ産み付けられるため発生時には圃場内で散在する。 ○ 擬葉及び主茎を食害し、若茎を食害することはあまりない。	○ 施設開口部に防虫ネット(4mm目以下)を張る。 ○ 捕殺する。	発生初期	15		カスケード乳剤	1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	○ IGR剤(注)
				6		アファーム乳剤	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
						BT剤の項参照							
ハダニ類	(発生の特徴) ○ 発生の主体はナミハダニ、カンザワハダニ。 ○ 鱗片葉に白いカスリ状の斑点が生じ、商品価値が低下する。	○ 近接する発生源の影響が大きいので、圃場内や周辺の除草、隣接地に寄生を受けた作物を放置しないことを徹底する。 ○ なお、寄生を受けた雑草の刈払いなどは、ハダニ類の離脱、移動も考慮し適切に実施する。	発生初期	6		コロマイト乳剤	1:ﾐﾙﾍﾞﾒｸﾁﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△※	
				13		コテツフロアブル	1:ｸﾛﾙﾌｪﾅﾋﾟﾙ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△※	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	○ 薬害(イネ)注意
				25A		ダニサラバフロアブル	1:ｼﾌﾙﾒﾄﾌｪﾝ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	○	
				25B		ダニコングフロアブル	1:ﾋﾟﾌﾙﾌﾟﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				20D		マイトコーネフロアブル	1:ﾋﾞﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	1,000倍	収穫前日まで	1回	普	△	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
アザミウマ類	(発生の特徴) ○ 主要種はネギアザミウマ。 (防除上のポイント) ○ 近隣にタマネギ、ネギ等が栽培されている場合は、収穫期の飛来に気をつける。	○ 雑草にも寄生するので、圃場周辺を除草する。 ○ 施設では、開口部に1mm目以下(0.6mm目以下が望ましい)のネット被覆で侵入抑制に有効である。 ○ 異常茎等の正常な成育が望めない若茎は増殖源となるため放置しない。 ○ 晩秋～初冬に刈取った成茎は圃場外へ持ち出し処分する。除草も徹底する。 ○ 冬季に保温する作型では、裸地状態で寒風に1ヶ月以上さらしてから被覆する。 ○ 近紫外線カットフィルムを使用する。	発生初期	5		スピノエース顆粒水和剤	1:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				5		ダブルシューターSE	1:脂肪酸ｸﾞﾘｾﾘﾄﾞ2:ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内			
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				4A		モスピラン顆粒水溶剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		モスピランSL液剤	1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ	4,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				4A		スタークル顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アルバリン顆粒水溶剤	1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アドマイヤーフロアブル	1:ｲﾐﾀﾞｸﾛﾌﾟﾘﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				23		モベントフロアブル	1:ｽﾋﾟﾛﾃﾄﾗﾏﾄ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	○	
				14		リーフガード顆粒水和剤	1:ﾁｵｼｸﾗﾑ	1,500倍	収穫前日まで	2回以内	劇	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				34		ファインセーブフロアブル	1:ﾌﾛﾒﾄｷﾝ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	
				30		グレーシア乳剤	1:ﾌﾙｷｻﾒﾀﾐﾄﾞ	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
ネギアザミウマ			発生初期	4A		ダントツ水溶剤	1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				4A		アクタラ顆粒水溶剤	1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				9B		コルト顆粒水和剤	1:ﾋﾟﾘﾌﾙｷﾅｿﾞﾝ	4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				21A	39	ハチハチフロアブル	1:ﾄﾙﾌｪﾝﾋﾟﾗﾄﾞ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	劇	×	○ 眼に刺激痛
				un		プレオフロアブル	1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法 時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使用薬剤	一般名	濃度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
病ウイルス	（発生の特徴） ○ 主にCMVによる。 ○ 生育初期に感染すると生育抑制されることがある。	○ シルバーポリによる畝マルチなど光反射資材を活用した方法は有翅虫の飛来抑制に有効である。	アブラムシ類防除の項参照										
紋枯病	（発生の特徴） ○ 葉鞘に大型斑点を作る。多湿条件でクモの巣状菌糸や菌核を形成する。 ○ 株間の温度、湿度が高くなる条件で急速に蔓延する。 （防除上のポイント） ○ 薬剤が株元にかかるように散布する。	○ 被害残渣は深く埋め込む。 ○ 多肥栽培を避け適切な肥培管理を行う。 ○ 密植を避け、除草を行い畝間の風通しを良くする。	発生初期		3 U18 7	モンガリット粒剤 バリダシン液剤5 アフェットフロアブル	1:シメコナゾール 1:ﾊﾞﾘﾀﾞﾏｲｼﾝ 1:ﾍﾟﾝﾁｵﾋﾟﾗﾄﾞ	6kg/10a 1,000倍 2,000倍	収穫7日前まで 収穫7日前まで 収穫7日前まで	2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普	○ △ △	○ 株元散布
アブラムシ類	（発生の特徴） ○ 寄生種はトウモロコシアブラムシ（キビクビレアブラムシ）、ムギクビレアブラムシ、ムギヒゲナガアブラムシである。 ○ 幼苗期から寄生すると生育障害を受ける。 ○ 葉と穂に寄生し、雄穂では苞葉のかなり奥まで入り込むため品質低下を招く。	○ シルバーテープを展張する。 ○ 雑草を除去し、圃場衛生に努める。	発生初期	3A 4A 4A 4A 4A 4A 4C		アディオン乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 アクタラ顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 トランスフォームフロアブル	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ 1:ｱｾﾀﾐﾌﾟﾘﾄﾞ 1:ﾁｱﾒﾄｷｻﾑ 1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ 1:ｼﾞﾉﾃﾌﾗﾝ 1:ｸﾛﾁｱﾆｼﾞﾝ 1:ｽﾙﾎｷｻﾌﾛﾙ	2,000～3,000倍 2,000～4,000倍 3,000倍 2,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 2,000倍	収穫14日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫3日前まで 収穫前日まで	4回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 3回以内	普 劇 普 普 普 普 普	× △ △ △ △ △ ○	○ 合ピレ(注)(P.15)
ネキリムシ類	（発生の特徴） ○ 主要種は、カブラヤガ、タマナヤガ。 ○ 被害は厳寒期を除いていつでも見られるが、5～9月には異常発生することがある。 ○ 前作や作付前の雑草に産卵、そこで生育した幼虫が加害することが多い。	（耕種的防除法） ○ 作付予定地では予め除草し前作も早急に処分する。 ○ 被害株が見られたら、周辺土壌中に潜んでいる幼虫を探し捕殺する。	発芽時	1B		ダイアジノン粒剤5	1:ﾀﾞｲｱｼﾞﾉﾝ	6kg/10a	出芽時	1回	普	×	○ 土壌表面散布
			生育初期	3A		ガードベイトA	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	3kg/10a	生育初期	4回以内	普	○※	○ 株元散布 合ピレ(注)(P.15)
アワノメイガ	（発生の特徴） ○ 幼虫が雄穂に集まり、雄穂開花後は雌穂に移動し絹糸を食べ雌穂内に食入する。 （防除上のポイント） ○ 雄穂の出始めと7日後を目安に薬剤散布する。 ○ 雌穂に十分かかるよう散布する。	○ 圃場を見回って食害痕のある株の幼虫を取り除く。	雄花の抽出期	1A		デナポン粒剤5	1:NAC	4～6kg/10a	雄穂抽出期～雌穂抽出期 但し収穫21日前まで	2回以内	普	△	
				14		パダン粒剤4	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	6kg/10a	収穫7日前まで	2回以内	劇	×	○ 株の上から均一に散粒する。
				1B		エルサン乳剤	1:PAP	1,000倍	収穫14日前まで	4回以内	劇	×	
				1B		スミチオン乳剤	1:MEP	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	△	
				1B		オルトラン水和剤	1:ｱｾﾌｪｰﾄ	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内	普	△	
				3A		アディオン乳剤	1:ﾍﾟﾙﾒﾄﾘﾝ	2,000倍	収穫14日前まで	4回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A+1B		パーマチオン水和剤	1:ﾌｪﾝﾊﾞﾚﾚｰﾄ2:MEP	1,000～2,000倍	収穫7日前まで	4回以内	劇	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
				14		パダンSG水溶剤	1:ｶﾙﾀｯﾌﾟ	1,000倍	収穫21日前まで	2回以内	劇	×	
				28		フェニックス顆粒水和剤	1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	
				28		プレバソンフロアブル5	1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ベネビアOD	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				28		ヨーバルフロアブル	1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ	5,000倍	収穫前日まで	3回以内	普	△	
				5		ディアナSC	1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	普	△	

病害虫名	病害虫の特徴 防除上のポイント等	耕種的防除法	薬剤防除法										
			時期	IRAC ｺｰﾄﾞ	FRAC ｺｰﾄﾞ	使 用 薬 剤	一般名	濃 度(使用量)	使用時期	本剤の使用回数	人毒	水産(注)	注意事項
アワヨトウ	(発生の特徴) ○ 孵化直後の幼虫は集団で葉を食害しやがて分散して夜間葉を著しく食害する。 (防除上のポイント) ○ 老齢幼虫になると昼間は株元に生息し薬害がかかりにくいので早期に発見、早期防除を心掛ける。	○ 圃場を見回って食害痕のある株の幼虫を取り除く。	発生初期	3A		トレボン乳剤	1:ｴﾄﾌｪﾝﾌﾟﾛｯｸｽ	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内	普	×	○ 合ピレ(注)(P.15)
ツマジロクサヨトウ	(発生の特徴) ○ トウモロコシを加害する他のチョウ目害虫ではアワヨトウが類似するが、頭部の「淡色の逆Y字型の模様」等で区別できる。 ○ 軟らかい葉を好んで食害する傾向がある。 ○ 8月以降に発生が多くなる。 (防除上のポイント) ○ 圃場を定期的に見回り、早期発見に努める。	○ 圃場をよく見回り、幼虫の早期発見に努める。 ○ 幼虫の分散を防ぐため、被害圃場では収穫後直ちに耕耘する。	発生初期	6 6 15 28 28 28 28 un		アファーム乳剤 アニキ乳剤 カスケード乳剤 ヨーバルフロアブル プレバソンフロアブル5 ベネビアOD フェニックス顆粒水和剤 プレオフロアブル	1:ｴﾏﾒｸﾁﾝ安息香酸塩 1:ﾚﾋﾟﾒｸﾁﾝ 1:ﾌﾙﾌｪﾉｸｽﾛﾝ 1:ﾃﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ 1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ 1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ 1:ﾌﾙﾍﾞﾝｼﾞｱﾐﾄﾞ 1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ	1,000～2,000倍 1,000倍 2,000～4,000倍 5,000倍 2,000倍 2,000～4,000倍 2,000～4,000倍 1,000倍	収穫3日前まで 収穫前日まで 収穫7日前まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	2回以内 3回以内 2回以内 3回以内 3回以内 3回以内 2回以内 2回以内	普 普 普 普 普 普 普 普	△※ △※ △ △ △ △ △ △	○ IGR剤(注)(P.15)参照
オオタバコガ	(発生の特徴) ○ 幼虫が雄穂に集まり、雄穂開花後は雌穂に移動し絹糸を食べ、雌穂内に食入する。 ○ オオタバコガは茎に食入しない。 (防除上のポイント) ○ 雌穂に食入される前に防除する。	○ 幼虫は見つけ次第捕殺に努める。	発生初期	28 un 28 5		ベネビアOD プレオフロアブル プレバソンフロアブル5 ディアナSC	1:ｼｱﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ 1:ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ 1:ｸﾛﾗﾝﾄﾗﾆﾘﾌﾟﾛｰﾙ 1:ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ	2,000～4,000倍 1,000倍 2,000倍 2,500～5,000倍	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	3回以内 2回以内 3回以内 2回以内	普 普 普 普	△ △ △ △	
イネヨトウ	(発生の特徴) ○ 別名（ダイメイチュウ）。4～5月に播種すると被害が多い。 (防除上のポイント) ○ 幼虫の孵化から食入までの間、アワヨトウの発生に合わせ効率的に防除する。 ○ 被害が見られた場合は間隙部に薬剤が十分入るよう薬剤散布する。	○ 餌となるイネ科雑草の除草に努める。	発生初期	1A		デナポン粒剤5	1:NAC	3～6kg/10a	収穫21日前まで	2回以内	普	△	○ 登録はダイメイチュウ

(2)いも類の種子消毒法

〈いも類の種子消毒法〉

作物名	病害虫名	農薬名	使用方法及び注意事項
さといも	疫病	ベンレートT水和剤20	植付前20倍で1分間種いも浸漬
	黒斑病	トップジンM水和剤	植付前200～500倍で20～30分間種いも浸漬
		ベンレートT水和剤20	植付前20倍で1分間種いも浸漬または植付前種いも重量の0.4～0.5%を種いも粉衣
ばれいしょ	そうか病	コサイドボルドー	植付前50～100倍で20分間種いも浸漬。ただし、萌芽時は不可(薬害)。
		アタッキン水和剤	植付前40～60倍で5～10秒間種いも浸漬または植付前40倍で種いも100kg当り2.5～3ℓを散布。萌芽前に種いもを切断せずに処理する。
		フロンサイド水和剤	植付前100倍で種いも瞬間浸漬
		カセット水和剤	植付前30倍で種いも瞬間浸漬
		アグリマイシン－100	植付前40～100倍で5～10秒間種いも浸漬または植付前種いも100kg当り2.5～3ℓを散布
		アグレプト水和剤	植付前60～100倍で5～10秒間種いも浸漬
かんしょ	つる割病	ベンレート水和剤	植付前500～1,000倍で20～30分間苗浸漬または挿苗時500～1,000倍で株元灌注
		ベンレートT水和剤20	植付前200倍で30分間苗浸漬
		トリフミン水和剤	植付前500倍で17時間苗基部浸漬
	黒斑病	トップジンM水和剤	植付前200～500倍で20～30分間種いもまたは苗茎部浸漬
		ベンレートT水和剤20	植付前20倍で1分間苗基部浸漬または植付前200倍で30分間苗基部浸漬
		ベンレート水和剤	植付前500～1,000倍で20～30分間苗基部浸漬または植付前種いも重の0.4%を種いも粉衣
	基腐病	ベンレート水和剤	植付前500～1,000倍で30分間苗浸漬
		ベンレートT水和剤20	植付前200倍で30分間苗浸漬
やまのいも	褐色腐敗病	ベンレートT水和剤20	植付前100～200倍で10分間種いも浸漬
	青かび病		植付前100～200倍で10分間種いも浸漬または植付前種いも重量の0.3～0.5%を種いも粉衣
	根腐病		植付前20倍で約2秒間種いも浸漬

(注)コサイドボルドー、ベンレートT、フロンサイドは養殖池周辺での使用は避けること。
種子消毒に使用した廃液は、河川等に流さないようにする。
(注)薬剤選択注意:ベンレート水和剤、ベンレートT水和剤20、トップジンM水和剤、アタッキン水和剤

(3)野菜の土壌病害虫防除

①土壌消毒剤等による病害虫防除法

作物別適用表 (野菜病害虫防除法の本文に記載のある病害虫と一年生雑草への適用)

作物名	病害虫名 (本文に記載した名称)	クロールピクリン	クロルピクリン錠剤	クロピクフロー	クロピクテープ	ソイリーン	ディ・トラペックス油剤	NCS	バスアミド微粒剤 ガスタード微粒剤	キルパー	D－D剤	バイデートL粒剤	ラグビーMC粒剤	ネマトリンエース粒剤	ネマキック粒剤	ネマクリーン粒剤 ビーラム粒剤	トクチオン細粒剤F	フロンサイドSC	フロンサイド粉剤
きゅうり	苗立枯病	○	○		○				○	○									
	つる割病	○	○	○	○	○	○		○	○									
	疫病	○	○																
	センチュウ類	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○				
	コガネムシ類幼虫										○								
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○				○	○		○	○									
かぼちゃ	苗立枯病								○										
	疫病																		
	ネキリムシ類																		
	一年生雑草	○				○			○	○									
すいか	苗立枯病	○							○										
	つる割病	○	○	○	○	○	○		○	○									
	ネキリムシ類	○																	
	ケラ	○																	
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									
メロン	苗立枯病	○			○				○										
	えそ斑点病					○													
	ネコブセンチュウ	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○				
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									
トマト	青枯病	○	○			○		○	○										
	苗立枯病	○	○		○		○		○										
	萎凋病	○	○	○	○	○	○		○	○									
	根腐萎凋病								○										
	疫病	○																	
	ネコブセンチュウ	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○				
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									

※D－D剤は、D－D、旭D－D、DC油剤、テロン。

作物名	病害虫名 （本文に記載した名称）	クロールピクリン	クロルピクリン錠剤	クロピクフロー	クロピクテープ	ソイリーン	ディ・トラペックス油剤	NCS	バスアミド微粒剤 ガスタード微粒剤	キルパー	D－D剤	バイデートL粒剤	ラグビーMC粒剤	ネマトリンエース粒剤	ネマキック粒剤	ネマクリーン粒剤 ビーラム粒剤	トクチオン細粒剤F	フロンサイドSC	フロンサイド紛剤
ミニトマト	青枯病	○	○			○			○										
	苗立枯病	○	○		○		○		○										
	萎凋病	○	○	○	○	○	○		○	○									
	根腐萎凋病								○										
	疫病	○																	
	ネコブセンチュウ	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○				
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									
なす	青枯病	○	○	○	○	○			○										
	苗立枯病	○	○		○				○	○									
	半身萎凋病	○	○		○		○		○	○									
	センチュウ類	○	○	○		○	○		○	○	○		○	○	○				
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									
ピーマン	青枯病	○	○	○	○	○			○										
	苗立枯病				○				○	○									
	疫病	○	○		○														
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○			○			○	○									
甘長とうがらし	疫病	○	○		○				○										
	一年生雑草	○	○			○			○	○									
ししとう	青枯病	○		○	○	○			○										
	苗立枯病				○				○	○									
	疫病	○	○		○				○										
	一年生雑草	○	○			○			○	○									
いちご	芽枯病								○										
	炭疽病	○	○			○	○		○										
	萎黄病	○	○	○	○	○	○	○	○	○									
	疫病		○		○		○		○										
	ネグサレセンチュウ	○	○	○	○	○	○			○	○		○	○	○				
	コガネムシ類幼虫										○								
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									
だいこん	萎黄病	○	○				○		○										
	根腐病(亀裂褐変症)	○																○	
	センチュウ類	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	キスジノミハムシ												○						
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○				○	○		○	○									
キャベツ	苗立枯病		○		○	○			○									○	
	株腐病								○									○	
	菌核病						○												
	根こぶ病	○					○	○	○	○								○	
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○				○	○		○	○									
カリフラワー	根こぶ病								○									○	
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○							○										
ブロッコリー	根こぶ病								○									○	
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○							○	○									
はくさい	軟腐病	○																	
	根こぶ病						○	○	○	○								○	
	尻腐病								○									○	
	根くびれ病	○				○			○	○									
	センチュウ類	○	○			○	○		○		○								
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○				○	○		○	○									

※D－D剤は、D－D、旭D－D、DC油剤、テロン。

作物名	病害虫名 （本文に記載した名称）	クロールピクリン	クロルピクリン錠剤	クロピクフロー	クロピクテープ	ソイリーン	ディ・トラペックス油剤	NCS	バスアミド微粒剤 ガスタード微粒剤	キルパー	D－D剤	バイデートL粒剤	ラグビーMC粒剤	ネマトリンエース粒剤	ネマキック粒剤	ネマクリーン粒剤 ビーラム粒剤	トクチオン細粒剤F	フロンサイドSC	フロンサイド紛剤
ほうれんそう	株腐病	○							○	○									
	萎凋病	○	○	○	○	○	○	○	○	○									
	立枯病	○	○						○	○									
	苗立枯病	○					○												
	センチュウ類	○	○	○		○	○				○		○						
	ネキリムシ類	○																	
	ホウレンソウケナガコナダニ	○							○	○									
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									
レタス	すそ枯病								○	○									
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○				○		○	○									
非結球レタス	すそ枯病								○	○									
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○				○		○	○									
たまねぎ	苗立枯病	○	○						○	○									
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○						○	○									
ねぎ	白絹病	○	○		○	○	○		○	○									
	萎凋病	○		○			○		○										
	黒腐菌核病						○		○	○									
	ネキリムシ類	○																	
	ネダニ類										○								
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									
ごぼう	センチュウ類	○	○	○		○	○			○	○	○	○	○					
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○				○	○		○	○									
にんじん	センチュウ類	○	○			○	○		○	○	○	○		○	○	○			
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									
さといも	乾腐病								○	○									
	ネグサレセンチュウ	○	○			○			○	○	○		○	○	○	○			
	コガネムシ類幼虫										○		○						
	一年生雑草	○	○			○			○	○									
ばれいしょ	青枯病	○	○			○					○								
	そうか病	○				○			○	○	○							○	
	粉状そうか病								○									○	
	センチュウ類	○	○			○					○	○	○	○	○	○			
	ケラ	○																	
	一年生雑草	○	○			○			○	○									
かんしょ	つる割病	○	○						○	○									
	基腐病									○								○	○
	ハリガネムシ類	○											○						
	コガネムシ類幼虫										○		○						
	センチュウ類	○	○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○			
	ネコブセンチュウ				○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	ケラ	○																	
	一年生雑草	○	○			○			○	○									
やまのいも	褐色腐敗病	○				○	○		○									○	
	根腐病	○	○			○			○	○									
	コガネムシ類幼虫										○								
	センチュウ類	○	○			○	○			○	○	○		○	○	○			
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									
えだまめ	白絹病	○	○																
	ネキリムシ類	○																	
	センチュウ類	○	○								○	○	○		○				
	一年生雑草	○	○						○										

※D－D剤は、D－D、旭D－D、DC油剤、テロン。

作物名	病害虫名 （本文に記載した名称）	クロールピクリン	クロルピクリン錠剤	クロピクフロー	クロピクテープ	ソイリーン	ディ・トラペックス油剤	NCS	バスアミド微粒剤ガスタード微粒剤	キルパー	D－D剤	バイデートL粒剤	ラグビーMC粒剤	ネマトリンエース粒剤	ネマキック粒剤	ネマクリーン粒剤ビーラム粒剤	トクチオン細粒剤F	フロンサイドSC	フロンサイド紛剤
未成熟そらまめ	苗立枯病								○										
	立枯病	○	○																
	茎腐病								○										
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○						○										
さやえんどう	苗立枯病	○							○	○									
	立枯病	○	○																
	根腐病	○		○	○														
	茎腐病								○										
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○	○						○	○									
実えんどう	苗立枯病	○							○	○									
	立枯病	○	○																
	茎腐病								○										
	一年生雑草	○	○						○	○									
さやいんげん	根腐病	○																	
	一年生雑草	○	○						○										
しょうが	根茎腐敗病	○	○	○	○	○	○		○	○									
	一年生雑草	○	○			○	○		○	○									
アスパガラス	立枯病	○	○	○															
	一年生雑草	○	○																
しそ	青枯病								○										
	センチュウ類										○		○						
	一年生雑草								○										
チンゲンサイ	根こぶ病								○										
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○							○										
オクラ	一年生雑草					○													
しゅんぎく	萎凋病								○										
	一年生雑草								○										
こまつな	萎黄病	○	○	○					○										
	根こぶ病								○										
	ネキリムシ類	○																	
	コガネムシ類幼虫										○								
	センチュウ類	○	○			○					○								
	一年生雑草	○							○										
なばな	センチュウ類	○	○																
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○																	
みずな	根こぶ病								○										
	センチュウ類	○	○								○		○						
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○							○	○									
かぶ	根こぶ病	○					○		○									○	
	ネキリムシ類	○																	
	一年生雑草	○					○		○	○									

※D－D剤は、D－D、旭D－D、DC油剤、テロン。

②対抗植物利用による線虫防除法

	作　物　名		ネコブセンチュウ	ネグサレセンチュウ	播種時期	播種量(散播)/10ａ
対抗植物	マメ科	クロタラリア	○		５月～７月	５～６kg
	イネ科	ギニアグラス	○		５月～７月	１～２kg
		エンバク野生種（ヘイオーツ）		○	３月上旬～５月下旬 ８月下旬～９月上旬 １０月下旬～１１月下旬	１０～１５kg
	キク科	マリーゴールド		○	４月～６月	０．４kg
	対抗植物を利用する場合の留意点 ① 防除の対象となるセンチュウに適した対抗植物・品種を利用する。 ② 対抗植物の効果を高めるためには、この植物の根系を均一かつ相当の高密度で土中に分布させるような播種時期、播種密度、栽植様式が必要である。 ③ 対抗植物栽培圃場の雑草防除を徹底する。 ④ 前作で栽培する場合、少なくとも２～３か月の栽培期間が必要である。					

③土壌消毒剤による一年生雑草防除法　（本文に記載のある作物）

農 薬 名	処理量と適用作物（使用方法等は各薬剤のラベル参照）
クロールピクリン	①処理量：〈床土・堆肥〉３～５mℓ／穴、〈圃場〉２～３mℓ／穴 適用作物：きゅうり、すいか、メロン、トマト､ミニトマト、なす､ピーマン､ししとう、いちご、だいこん、キャベツ、カリフラワー、ブロッコリー、はくさい、ほうれんそう、レタス、非結球レタス、たまねぎ、ねぎ、ごぼう、にんじん、さといも、ばれいしょ、かんしょ、やまのいも、えだまめ、未成熟そらまめ、さやえんどう、実えんどう、さやいんげん、しょうが、アスパラガス、未成熟とうもろこし、チンゲンサイ、こまつな、なばな、みずな、甘長とうがらし、かぶ ②処理量：〈圃場〉３～４mℓ／穴 適用作物：かぼちゃ（かぼちゃ台を含む）
クロルピクリン錠剤	①処理量：１㎡当り１０錠 適用作物：すいか、メロン、トマト､ミニトマト、なす､ピーマン､ししとう、いちご、ほうれんそう、レタス、非結球レタス、たまねぎ、ねぎ、にんじん、さといも、ばれいしょ、かんしょ、やまのいも、えだまめ、未成熟そらまめ、さやえんどう、実えんどう、さやいんげん、しょうが、アスパラガス、甘長とうがらし
バスアミド微粒剤 ガスタード微粒剤	①処理量：２０kg／１０a 適用作物：しゅんぎく ②処理量：２０～３０kg／１０a 適用作物：きゅうり､かぼちゃ、すいか、メロン、トマト､ミニトマト、なす､いちご､だいこん、キャベツ、カリフラワー、ブロッコリー、はくさい、ほうれんそう、レタス、非結球レタス、たまねぎ（10～20kg/10aの場合は播種14日前まで）、ねぎ、ごぼう、にんじん、さといも、ばれいしょ、かんしょ、やまのいも、えだまめ、さやえんどう、実えんどう、さやいんげん、しょうが、こまつな、かぶ ③処理量：３０kg／１０a 適用作物：ピーマン、ししとう、未成熟そらまめ、しそ、チンゲンサイ、みずな、甘長とうがらし
ソイリーン	①処理量：２０～３０ℓ／１０a（２～３mℓ／穴） 適用作物：きゅうり、かぼちゃ、すいか、メロン、トマト、ミニトマト、なす、ピーマン、ししとう、いちご、だいこん、キャベツ、はくさい、ほうれんそう、ねぎ、ごぼう、にんじん、さといも、ばれいしょ、かんしょ、やまのいも、しょうが、オクラ、甘長とうがらし
キルパー	①処理量: 原液として４０ℓ／１０a 適用作物：すいか、メロン、なす、ねぎ、ごぼう、さといも、かぶ ②処理量: 原液として４０～６０ℓ／１０a 適用作物：きゅうり、トマト、ミニトマト、ピーマン、ししとう、だいこん、キャベツ、ブロッコリー、はくさい、レタス、非結球レタス、にんじん、かんしょ、甘長とうがらし ③処理量: 原液として６０ℓ／１０a 適用作物：すいか、かぼちゃ、なす、ピーマン、ししとう、いちご、ほうれんそう、レタス、非結球レタス、たまねぎ、ねぎ、ばれいしょ、やまのいも、さやえんどう、実えんどう、しょうが、みずな、甘長とうがらし
ディ・トラペックス油剤	①処理量:３０～４０ℓ／１０a 適用作物：きゅうり、すいか、メロン、トマト､ミニトマト、いちご、だいこん、キャベツ、はくさい、ほうれんそう、レタス、非結球レタス、ねぎ、ごぼう、にんじん、やまのいも、しょうが、かぶ ②処理量:３０ℓ／１０a 適用作物：なす
ＮＣＳ	①処理量：原液として３０ℓ／１０a 適用作物：たまねぎ（秋播露地栽培苗床）、ねぎ（春播露地栽培苗床）

④太陽熱利用による土壌消毒法

夏期の高温を利用した処理方法であり、有機物施用による土づくりを同時に行うことができる。また、土壌微生物の生態系を維持できるため、環境保全型の防除手段として安全、低コストで実施できる。土壌伝染性病害のほかセンチュウ・雑草類の種子も死滅させることができる。但し、効果がやや不安定な病害としてナス科青枯病、トマト根腐萎凋病が挙げられる。

1　実施期間

晴天高温が続く梅雨明け直後から8月20日頃の期間に実施する。

2　手順

(1)土耕栽培

①　粗大有機物（稲わら、麦わら、木材チップ、緑肥作物等）を乾物重で約1～2t/10a圃場全面に施用する。さらに、石灰窒

素を100kg/10a全面散布する。
② 圃場のすみずみまで深く耕耘して土壌混和し、その後、畝立て(畝幅70cm、高さ25cm程度)を行う。
③ 透明なビニール(古いビニールでよい)で圃場全面を被覆し、破れた箇所を塞いで保湿性を高める。さらに、周囲を盛り土で固定して地表面を密閉する。
④ 畝全体に水分が浸透する程度に湛水する。
⑤ ハウスにビニール被覆をして密閉し、そのまま20～30日間置く。
⑥ 処理後はハウスを開放し、土壌被覆のビニールを除去して土壌を乾燥させる。
⑦ ｐＨ、ＥＣ、無機窒素を測定し、ｐＨ矯正等を行う(ＥＣ、無機窒素が高い場合は雨で流すか、施肥量を控える)。

(2)高設栽培（イチゴ等）
① 前作の栽培株は除去し、イチゴはクラウン部も取り除く。
② 点滴チューブで灌水し、栽培槽の培地を十分に湿らせる。
③ ビニールで栽培槽を包む。ビニールは黒色より透明の方が培地の温度が上昇しやすく効果的である。
④ 透明なビニールで架台をスカーティングすると、培地の温度がさらに上昇しやすい。
⑤ ハウス側窓はある程度開放し、10～14日間以上置く。処理後は土耕栽培と同様である。

3 注意事項
(1)土壌が乾燥すると菌の活性低下、有機物の腐熟量の減少、地温の低下が起こるので、追加で灌水する。
(2)病原菌の殺菌温度および日数は40℃、6日間以上必要とするので、天候が不順な日が多い場合は消毒期間を延長する。
(3)晴天が続くとハウスが高温になるとともに、窒素の分解過程で種々の有害ガスが発生するので、ハウス内へは立ち入らない。また、高設栽培の架台の資材には高熱に弱いものもあるため、ハウス気温が60℃以上となる時はハウス側窓を開放する。
(4)稲わら、麦わら、山草等を粗大有機物として利用する場合は、5～10cmに裁断して施用する。また、ソルゴー、トウモロコシ等の緑肥作物は立ち毛のまますき込む。
(5)圃場の周辺部の耕土が浅くなるので、三つ鍬等で、すみずみまで丁寧に耕す。
(6)下記のような場合、消毒むらが発生し、その部分が病害の発生源となるので十分注意する。
①ビニール等によるマルチ及びハウスの密閉が不完全である。
②耕起むらや有機物の土壌混和が十分でない。
③湛水量が少なく土壌に乾燥むらが生じている。あるいは、湛水を過剰に行い水口周辺部の地温が上昇していない。

⑤有機物利用による土壌還元消毒法

土壌に炭素源となる有機物を投入し、湛水および被覆を行い土壌微生物を活性化させ、土壌の還元化を引き起こすことで病原を死滅させる消毒技術である。土壌微生物群への影響も小さく、環境保全型の防除手段として安全に実施できる。また、土壌伝染性病害のほかセンチュウ類にも効果がある。

1 実施期間
30℃以上の地温が確保できる夏季に実施する。

2 手順
(1)固体有機物（フスマ、米ぬか等）を乾物重で約1～2t/10a圃場全面に施用する。または、液体有機物（エタノール等、濃度は有機物の種類により異なる）を約100～200ℓ/㎡圃場全体に散布して、圃場を湛水状態とする。
(2)固体有機物の場合、圃場のすみずみまで深く耕耘して土壌混和し、灌水チューブ等で湛水状態となるまで灌水する。
(3)透明なビニール(古いビニールでよい)で圃場全面を被覆し、破れた箇所を塞いで保湿性を高める。さらに、マルチングと同様に周囲を埋め込んで固定し、地表面を密閉する。
(4)30℃以上の地温が確保されている状態で、そのまま2～3週間置く。3～4日ほどでドブ臭がすれば消毒が進行している。
(5)ビニールを除去して耕起を行い、そのまま1週間以上置いて土壌の還元状態を正常に戻す。
(6)ｐＨ、ＥＣ、無機窒素を測定し、ｐＨ矯正等を行う(ＥＣ、無機窒素が高い場合は雨で流すか、施肥量を控える)。

3 注意事項
(1)利用する有機物はフスマや米ぬか等の分解が早く、土壌に接しやすい細かいものが望ましい。
(2)湛水処理を行うため、必要に応じて処理区外周に防水壁（波板、うね）を設置する。
(3)固体有機物の場合は混和する深さまで効果が得られるが、液体有機物の場合それよりも深い下層土まで効果が期待できる。
(4)エタノールを用いて処理を行う場合は十分に換気を行う。
(5)圃場の再汚染を避けるため、消毒処理後の耕起では耕転機をよく洗浄する。また、有機物混和時以上に深く耕起しない。
(6)水はけがよすぎる土壌では効果が劣るため、他の方法で土壌消毒を行う。

⑥熱水利用による土壌消毒法

土壌に熱水を染み込ませて、土壌中の病原菌やセンチュウ類等を死滅させる方法で、環境保全型の防除手段として安全に実施できる。ただし熱水調整用のボイラーと熱水注入装置が必要である。

1 消毒時の土壌条件
土壌が乾燥している時の効果が高いので、土壌は十分に耕起、乾燥させておく。なお、耕土層が浅く、硬くしまった圃場では熱水が十分に浸透しないので、圃場はできるだけ深く耕起し、均平にする。

2 消毒の方法
通常80～95℃の熱水を土壌に注入するが、専用ボイラー(灯油、Ａ重油、ＬＰガスの各タイプ有り）を用い、チューブ式もしくはウインチ式の熱水注入装置を用いて注入する。注入量は150～200ℓ/㎡を目標とするが、土質や地温により調整する。
消毒後、2日程度は保温シートで圃場全体を被覆し、残熱効果を利用する。

3 その他
装置等専門的な技術が必要であるので、施設面積や経済性等を考慮し、実績のある装置取り扱い者の指導を受け実施する。なお、病原菌以外の生物も死滅するため土壌生物相が単調になりやすく、再汚染しやすい傾向があるので注意が必要である。

⑦苗立枯病の薬液灌注等防除法(本文に記載のある作物および病害)

作物名	病害名	農薬名	使用時期	使用濃度	使用量	使用回数	備考
きゅうり	苗立枯病(フザリウム菌、ピシウム菌)	タチガレン液剤	播種直後	500～1,000倍	3ℓ/㎡	3回以内	土壌灌注
	苗立枯病(ピシウム菌)	プレビクールN液剤	播種時	400倍	3ℓ/㎡	3回以内	土壌灌注
		タチガレファイト液剤	播種直後	500倍	3ℓ/㎡	3回以内	土壌灌注
	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2～3葉期まで	800倍	2ℓ/㎡	5回以内	土壌灌注
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	ダコニール1000	播種時または活着後(但し、定植14日後まで)	1,000倍	3ℓ/㎡	2回以内	土壌灌注
		リゾレックス水和剤	播種時	500倍		1回	
		モンカット水和剤	播種時～子葉展開時	500～1,000倍		1回	
		モンカット水和剤50		1,000～2,000倍		1回	
		バシタック水和剤75		750～1,500倍		1回	
		バリダシン液剤５	播種直後	800倍		1回	灌注
かぼちゃ	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2～3葉期まで	800倍	2ℓ/㎡	5回以内	土壌灌注
すいか	苗立枯病	タチガレン液剤	播種直後	500～1,000倍	3ℓ/㎡	2回以内	苗床土壌灌注
		オーソサイド水和剤80	播種後から2～3葉期まで	800倍	2ℓ/㎡	5回以内	土壌灌注
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	バシタック水和剤75	播種時～子葉展開時	750～1,500倍	3ℓ/㎡	1回	土壌灌注
メロン	苗立枯病(ピシウム菌)	タチガレン液剤	播種時	500倍	3ℓ/㎡	1回	全面土壌灌注
		タチガレファイト液剤	播種時	500倍	3ℓ/㎡	1回	全面土壌灌注
	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2～3葉期まで	800倍	2ℓ/㎡	5回以内	土壌灌注
トマト	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2～3葉期まで	800倍	2ℓ/㎡	5回以内	土壌灌注
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス水和剤	播種時	500倍	3ℓ/㎡	1回	土壌灌注
		バシタック水和剤75	播種時～子葉展開時	750～1,500倍		1回	
		モンカット水和剤		500～1,000倍		1回	
		モンカット水和剤50		1,000～2,000倍		1回	
		ダコニール1000	播種時または活着後(但し、定植14日後まで)	1,000倍		2回以内	
ミニトマト	苗立枯病(リゾクトニア菌)	バシタック水和剤75	播種時～子葉展開時	750～1,500倍	3ℓ/㎡	1回	土壌灌注
		モンカット水和剤	播種時～子葉展開時	500～1,000倍	3ℓ/㎡	1回	
		リゾレックス水和剤	播種時	500倍	3ℓ/㎡	1回	
な　す	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2～3葉期まで	800倍	2ℓ/㎡	5回以内	土壌灌注
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス水和剤	播種時	500倍	3ℓ/㎡	1回	土壌灌注
ピーマン	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2～3葉期まで	800倍	2ℓ/㎡	2回以内	土壌灌注
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス水和剤	播種時	500倍	3ℓ/㎡	1回	土壌灌注
		モンカット水和剤	(施設)播種時～子葉展開時	500～1,000倍		2回以内	
			(露地)播種時			1回	
ししとう	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	播種後から2～3葉期まで	800倍	2ℓ/㎡	2回以内	土壌灌注
ブロッコリー	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス水和剤	育苗期	500倍	3ℓ/㎡	2回以内	土壌灌注
			収穫21日前まで			1回	株元灌注
ほうれんそう	苗立枯病(ピシウム菌)	タチガレン液剤	播種直後	500～1,000倍	3ℓ/㎡	1回	土壌灌注
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	モンカット水和剤50	播種直後	1,000～2,000倍		1回	
		バシタック水和剤75	播種時～子葉展開時	750～1,500倍		1回	
		リゾレックス水和剤	播種時	500倍		1回	
たまねぎ	苗立枯病	オーソサイド水和剤80	収穫前日まで	600倍	100～300ℓ/10a	5回以内	散布
	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス粉剤	播種前	－	40kg/10a	1回	全面処理土壌混和
ねぎ	苗立枯病(リゾクトニア菌)	ダコニール1000	出芽揃い後(出芽3日後から10日後まで)	500倍	0.5ℓ/㎡	1回	土壌灌注
		バリダシン液剤５	播種時	400倍	6ℓ/㎡	1回	灌注
にんじん	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス水和剤	播種時	1,000倍	3ℓ/㎡	1回	全面土壌灌注
アスパラガス	苗立枯病	リゾレックス水和剤	株養成期(播種または定植時から茎葉刈取り期まで)但し、収穫14日前まで	500倍	100～300ℓ/10a	3回以内	散布
オクラ	苗立枯病(リゾクトニア菌)	リゾレックス水和剤	播種時及び子葉展開時	1,000倍	1ℓ/㎡(150mℓ/穴)	2回以内	植穴土壌灌注
	苗立枯病(ピシウム菌)	オーソサイド水和剤80	播種後から2～3葉期まで	800倍	2ℓ/㎡	2回以内	土壌灌注
キャベツ	苗立枯病(リゾクトニア菌)	フロンサイドSC	播種又は定植前	500mL/10a	100～200L/10a	2回以内	土壌灌注

(4)ミナミキイロアザミウマの防除法

本種は、他のアザミウマ類と比較して薬剤の効果が低く、増殖率も高いため、一度多発すると薬剤だけでは防除が極めて困難になる。また、きゅうり・メロンの黄化えそ病(MYSV)を媒介するため、黄化えそ病発生地では、低密度であっても被害が拡大する場合があるので、以下の点に注意し地域ぐるみで対応していく。

1 耕種的防除法

(1)露地栽培

① 露地で育苗する場合は、防虫ネットによるトンネル被覆をし、成虫の侵入を防ぐ。

② シルバーポリマルチ(畦畔などもマルチを行い裸地の面積を少なくする)や防風をかねて防虫ネットなどで障壁を設ける。

③ 本種の有力な天敵ヒメハナカメムシ類の保護のため、天敵に影響が大きい殺虫剤の散布を控える。
また、ほ場周辺にマリーゴールド等の天敵温存植物を植栽することにより、天敵の発生量の増加を図ることが可能である。

(2)施設栽培

① 苗による持ち込みを防止するため、発生圃場または被害作物周辺での育苗を避ける。
また、無寄生苗を導入し、寄生のおそれのある場合は、定植前又は定植後速やかに薬剤により防除する。

② 育苗及び栽培施設の換気部は、防虫ネット(1mm以下)などで被覆し、成虫の侵入を防止する。

③ 被害作物の残渣は、株を引き抜いた後、湛水、密閉して太陽熱利用等による蒸し込み処理を7～10日間位行う。
冬期は、1ヶ月以上の密閉処理を行う。

④ シルバーポリマルチ等による全面マルチは、密度抑制効果が高い。

⑤ 近紫外線除去フィルム被覆は、施設内への侵入抑制効果がある(但し、なす及びミツバチを利用する作物を除く)。

(3)その他の注意点

① 成虫の移動分散は、昼間の風の影響が大きいので、作付圃場は発生源の風上に設ける。
風下の場合は500m以上離すことが望ましい。

② 本種は、雑草においても生息及び増殖するので、圃場周辺及び施設内の除草に努める。
(密度の増える前に実施する。)

2 薬剤防除法

(1)育苗中及び本圃生育初期には本種がよく誘引される青色粘着板(ホリバー・トルシー等)を用い、早期発見に努め、初期防除を徹底する。

(2)植物組織内部に産卵し、土中で蛹化するため、薬剤が直接かからない生育ステージがあり、発生を見たら3～7日間隔で2～3回防除する。特に多発時には反復散布を必ず実施する。

(3)系統の異なる剤の中から薬剤を選出し、ローテーション散布を心掛ける。

(4)成・幼虫の寄生部位が作物ごとに以下のように異なるので、調査及び散布時には注意する。

きゅうり・・・・・・・主に葉
なす・・・・・・・葉及び果実のへた下
ピーマン・・・・・・・主に果実のへた下

ミナミキイロアザミウマの主な適用薬剤

作物名	系統名	IRACコード	農薬名	濃度	処理方法	使用時期／本剤の使用回数 注1)
きゅうり	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			アルバリン粒剤	2g/株	植穴処理	定植時/1回
			スタークル粒剤	2g/株	植穴処理	定植時/1回
			ダントツ粒剤	2g/株	植穴処理	定植時/1回
			ダントツ粒剤	1～2g/株	株元処理	育苗期後半/1回
			ベストガード水溶剤	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			アルバリン顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ダントツ水溶剤	2,000～4,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	IGR系	15	カスケード乳剤 注6)	2,000～4,000倍	散布	収穫前日まで/4回以内
			デミリン水和剤 注6)	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	ピロール系	13	コテツフロアブル 注3)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	マクロライド系	6	アファーム乳剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			アグリメック	500～1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤	5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ディアナSC	2,500～5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ダブルシューターSE	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	METI系	21A	ハチハチ乳剤	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	プロペニルオキシフェニル系	UN	プレオフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	環状ケトエノール系	23	モベントフロアブル 注7)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
				50mℓ/株 500倍	株元灌注	育苗期後半～定植当日/1回
	ジアミド系	28	ベリマークSC	注2)		育苗期後半～定植当日/1回
			プリロッソ粒剤オメガ	2g/株	株元散布	育苗期後半～定植時/1回
			ベネビアOD 注4)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	ネオニコチノイド系＋ジアミド系	4A+28	アベイル粒剤	2g/株	株元散布	育苗期後半～定植当日/1回
			ミネクトデュオ粒剤	1g/株	株元散布	鉢上げ時～育苗期後半/1回
	イソオキサゾリン系	30	グレーシア乳剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
すいか	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			ダントツ粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			ベストガード水溶剤	1,000～2,000倍	散布	収穫7日前まで/3回以内
			ダントツ水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			アクタラ顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	IGR系	15	デミリン水和剤 注6)	1,000～2,000倍	散布	収穫7日前まで/3回以内
			アタブロン乳剤 注6)	4,000倍	散布	収穫14日前まで/3回以内
			カスケード乳剤 注6)	2,000～4,000倍	散布	収穫7日前まで/4回以内

作物名	系統名	IRACコード	農薬名	濃度	処理方法	使用時期／本剤の使用回数 注1)
すいか	ピロール系	13	コテツフロアブル 注3)	4,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	マクロライド系	6	アファーム乳剤	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			アグリメック	500～1,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤	5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ディアナSC	2,500～5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ダブルシューターSE	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	METI系	21A	ハチハチ乳剤	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ハチハチフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	プロペニルオキシフェニル系	UN	プレオフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	環状ケトエノール系	23	モベントフロアブル 注7)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
				50mℓ/株 500倍	灌注	育苗期後半～定植当日/1回
	ジアミド系	28	ベリマークSC	注2)		育苗期後半～定植当日/1回
			プリロッソ粒剤オメガ	2g/株	株元散布	育苗期後半～定植時/1回
	ネオニコチノイド系 ＋ジアミド系	4A+28	アベイル粒剤	2g/株	株元散布	育苗期後半～定植当日/1回
			ミネクトデュオ粒剤	2g/株	株元散布	鉢上げ時～育苗期後半/1回
	Qi 阻害剤	34	ファインセーブフロアブル	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	イソオキサゾリン系	30	グレーシア乳剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
メロン	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			アルバリン粒剤	2g/株	植穴処理	定植時/1回
			スタークル粒剤	2g/株	植穴処理	定植時/1回
			ダントツ粒剤	2g/株	植穴処理	定植時/1回
			アクタラ粒剤5	1g/株	植穴処理	定植時/1回
			ベストガード水溶剤	1,000～2,000倍	散布	収穫7日前まで/3回以内
			ダントツ水溶剤	2,000～4,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			アクタラ顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			バリアード顆粒水和剤	2,000～4,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫3日前まで/2回以内
			アルバリン顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫3日前まで/2回以内
	IGR系	15	アタブロン乳剤 注5､6)	2,000～4,000倍	散布	収穫14日前まで/3回以内
			カスケード乳剤 注6)	2,000～4,000倍	散布	収穫7日前まで/3回以内
			デミリン水和剤 注6)	1,500～3,000倍	散布	収穫7日前まで/3回以内
	マクロライド系	6	アファーム乳剤	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			アグリメック	500～1,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤	5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ディアナSC	2,500～5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ダブルシューターSE	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	プロペニルオキシフェニル系	UN	プレオフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	環状ケトエノール系	23	モベントフロアブル 注7)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
				50mℓ/株 500倍	灌注	育苗期後半～定植当日/1回
	ジアミド系	28	ベリマークSC	注2)		育苗期後半～定植当日/1回
			プリロッソ粒剤オメガ	2g/株	株元散布	育苗期後半～定植時/1回
	ネオニコチノイド系＋ジアミド系	4A+28	ミネクトデュオ粒剤	2g/株	株元散布	鉢上げ時～育苗期後半/1回
	イソオキサゾリン系	30	グレーシア乳剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
なす	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			アクタラ粒剤5	1g/株	植穴処理	定植時/1回
			アルバリン粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			スタークル粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			ベストガード水溶剤	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			アクタラ顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			アルバリン顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ダントツ水溶剤	2,000～4,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	IGR系	15	アタブロン乳剤 注6)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			カスケード乳剤 注6)	2,000～4,000倍	散布	収穫前日まで/4回以内
	ピロール系	13	コテツフロアブル 注3)	2,000倍	散布	収穫前日まで/4回以内
	マクロライド系	6	アファーム乳剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			アグリメック	500～1,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤	2,500～5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ディアナSC	2,500～5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	プロペニルオキシフェニル系	UN	プレオフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/4回以内
	環状ケトエノール系	23	モベントフロアブル 注7)	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
				50mℓ/株 500倍	灌注	育苗期後半～定植当日/1回
	ジアミド系	28	ベリマークSC	注2)		育苗期後半～定植当日/1回
			プリロッソ粒剤オメガ	2g/株	株元散布	育苗期後半～定植時/1回
	ネオニコチノイド系 ＋ジアミド系	4A+28	アベイル粒剤	2g/株	株元散布	育苗期後半～定植当日/1回
			ミネクトデュオ粒剤	2g/株	株元散布	鉢上げ時～育苗期後半/1回
	Qi 阻害剤	34	ファインセーブフロアブル	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	イソオキサゾリン系	30	グレーシア乳剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
ピーマン	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			アクタラ粒剤5	2g/株	植穴処理	定植時/1回
			アルバリン粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			スタークル粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回

作物名	系統名	IRACコード	農薬名	濃度	処理方法	使用時期／本剤の使用回数 注1）
ピーマン	ネオニコチノイド系	4A	ベストガード水溶剤	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			アルバリン顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ダントツ水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			アクタラ顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	IGR系	15	アタブロン乳剤　注6）	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			カスケード乳剤　注6）	4,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	ピロール系	13	コテツフロアブル　注3）	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	マクロライド系	6	アグリメック	500～1,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤	5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			ディアナSC	2,500～5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	METI系	21A	ハチハチ乳剤	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/1回
	プロペニルオキシフェニル系	UN	プレオフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	環状ケトエノール系	23	モベントフロアブル　注7）	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
				50mℓ/株 500倍	灌注	育苗期後半～定植当日/1回
	ジアミド系	28	ベリマークSC	注2）		育苗期後半～定植当日/1回
			プリロッソ粒剤オメガ	2g/株	株元散布	育苗期後半～定植時/1回
			ベネビアOD　注4）	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	ネオニコチノイド系 ＋ジアミド系	4A+28	アベイル粒剤	2g/株	株元散布	育苗期後半～定植当日/1回
			ミネクトデュオ粒剤	2g/株	株元散布	鉢上げ時～育苗期後半/1回
	Qi 阻害剤	34	ファインセーブフロアブル	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	イソオキサゾリン系	30	グレーシア乳剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
ししとう	IGR系	15	アタブロン乳剤　注6）	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤	20,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	ピロール系	13	コテツフロアブル　注3）	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	ジアミド系	28	ベリマークSC	注2）		育苗期後半～定植当日/1回
			ベネビアOD　注4）	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
	Qi 阻害剤	34	ファインセーブフロアブル	1,000～2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
とうがらし類	ネオニコチノイド系	4A	アルバリン粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			スタークル粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			ベストガード粒剤	1～2g/株	植穴処理	定植時/1回
			ダントツ水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
			アルバリン顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
			スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	スピノシン系	5	ディアナSC	2,500倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	ピロール系	13	コテツフロアブル　注3）	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	プロペニルオキシフェニル系	UN	プレオフロアブル	1,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	環状ケトエノール系	23	モベントフロアブル　注7）	2,000倍	散布	収穫前日まで/3回以内
				50mℓ/株 500倍	灌注	育苗期後半～定植当日/1回
ほうれんそう	ネライストキシン系	14	パダン粒剤4	6kg/10a	土壌表面散布及び茎葉散布	は種時及び発芽揃時/2回以内
			パダンSG水溶剤　注8）	1,500倍	散布	収穫7日前まで/2回以内
	スピノシン系	5	スピノエース顆粒水和剤	5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
	Qi 阻害剤	34	ファインセーブフロアブル	2,000倍	散布	収穫14日前まで/2回以内
豆類（未成熟）	スピノシン系	5	ディアナSC	2,500～5,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内
さやいんげん	IGR系	15	アタブロン乳剤　注6）	2,000倍	散布	収穫前日まで/2回以内

注1　使用時期は使用できる時期及び収穫前日数、使用回数は本剤の総使用回数の制限を示す。
注2　400株当りの使用薬量　25mℓ、希釈水量　10～20ℓ(1株当たり25～50mℓ)灌注。ただし、ししとうは希釈水量　10ℓ(1株当たり25mℓ)灌注。
注3　コテツフロアブルは、きゅうり、なすの幼苗への散布は薬害が生じるおそれがあるので注意する。
　　また、ピーマンでは、品種により葉に褐点などの薬害を生じることがあるので注意する。
注4　ベネビアODはTPN剤、ストロビルリン系、銅剤との混用を行わない(薬害)。展着剤を加用しない(薬害)。
注5　アタブロン乳剤は、メロンの摘心前(特に低温期)の散布は薬害の生じるおそれがあるので注意する。
注6　アタブロン、カスケード、デミリンはIGR剤使用上の注意事項参照(P15)。
注7　モベントフロアブルは、最高分げつ期から出穂開花期の稲にかかると不稔などの薬害を生じる場合があるので注意する。
注8　パダンSG水溶剤は、ほうれんそうの高温時の散布は薬害を生じるおそれがあるので避ける。
注9　モスピラン、アドマイヤーは県内で効果が低下しているので削除した。
注10　合成ピレスロイド剤のアグロスリン、アーデントは県内で効果が低下しているので削除した。

(5) トマト黄化葉巻病の防除方法

トマト黄化葉巻病は、トマト黄化葉巻ウイルス(*Tomato yellow leaf curl virus*:TYLCV)の感染によって発病するウイルス病であり、タバココナジラミバイオタイプQおよびバイオタイプBが病原ウイルスを媒介する。両者のウイルス媒介能力に差はないとされている。また、媒介虫は多くの寄主植物を持ち、一旦保毒虫となると高い感染力で発病株や発病圃場を急速に拡大させる。

TYLCVは長崎・高知株と呼ばれるイスラエル系統と愛知・静岡株と呼ばれるマイルド系統に分類される。県内では最初、イスラエル系統が発生していたが、その後マイルド系統も確認されている。また、作型、感染時期、品種によって発病のタイミングや症状等が異なり、病徴でのウイルス系統判別は困難であり、マイルド系統であっても被害は大きい。

防除は、発病株の早期の抜き取りと媒介虫であるタバココナジラミバイオタイプQおよびバイオタイプB(以下、タバココナジラミとする)の対策が中心となる。

1 発生生態

抑制栽培や促成栽培で多くの発生を認めるが、県内でも従来は未確認であった夏秋栽培の発生を確認した。ハウス栽培での発病は早い場合7～8月の育苗中からみられ、定植後の生育期(9～11月)に発生が急増する。また、12～3月の低温期には停滞するが、4月以降の気温上昇とともに発生は再び増加する。

2 トマトへの感染から発病までの期間

TYLCVは日々の管理作業や摘葉・収穫・吊り下げなどでは伝染しない。感染は保毒タバココナジラミのみによっておこり、感染植物を1日吸汁すると6～8割が感染することが報告されている(最短15分の吸汁で保毒)。

トマト生育ステージ	条　　件	発病日数	備　　考
育苗～生育初期	夏季（２５℃前後）	７～１４日	低温期は１４日以上
生育中後期	低温期	３０～６０日	数ヶ月以上の事例有

3 感染植物

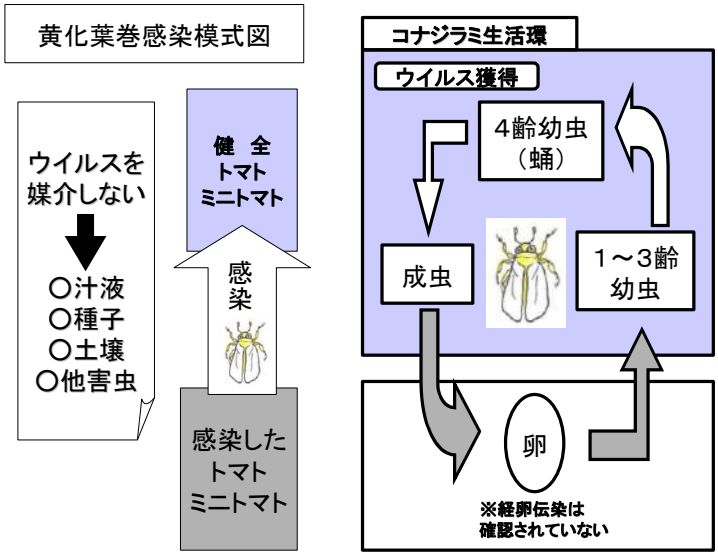
自然感染で症状が確認されている植物は、トマト、ミニトマト、トルコギキョウである。また、自然感染しても症状が出ない植物や接種試験により感染が確認された植物もある。主要な感染ルートはトマト(ミニトマト)からトマト(ミニトマト)への感染によるものと考えられるが、その他の感染植物からの感染にも注意が必要である。

感染植物と種類

感　染　状　況	植　物　名
自然感染して症状を現す	トマト、ミニトマト、トルコギキョウ
自然感染するが無病徴	ピーマン、センナリホオズキ、タカサブロウ、ノボロギク、ノゲシ、エノキグサ、ハコベ、ウシハコベ、ホソバツルノゲイトウなど
接種により感染・発病	タバコ、ペチュニア、インゲンマメ、チョウセンアサガオなど

4 伝染方法および伝染経路

伝染は、タバココナジラミがTYLCVに感染したトマト(ミニトマト)を吸汁してウイルスを獲得し、健全なトマト(ミニトマト)を吸汁することで起こる。実際、自然感染するトマト(ミニトマト)からのウイルス検出頻度が高く、トマトからトマトへの伝染が重要な伝染経路となっている。なお、汁液伝染、土壌伝染、種子伝染はせず、媒介虫の経卵伝染は確認されていない。



5 防除対策

(1) 罹病株の早期発見・早期抜き取り

・罹病株は速やかに抜き取り、肥料袋やビニール袋などに入れ密閉し、完全に枯死させる。

(2) 施設周辺環境の整備

・既発生圃場(地域)では、作付終了後や栽培開始前など施設内外の除草を徹底する。

・圃場・施設内に果菜類(メロン・キュウリ・ナスなど)や花卉類などのタバココナジラミが寄生しやすい植物を持ち込まない。

(3) 収穫終了後の管理

・収穫終了後には株元を切断および抜根し、40℃以上で7～10日以上施設を密閉して蒸し込み処理を行なう。蒸し込み時の注意として、コナジラミ類はわずかな隙間からも逃げ出すので、密閉は夕方に行なう等の工夫をする。

(4) 残渣処理

・残渣は適切に処理し、野良生えトマトやコナジラミ類の発生源を断つ。

(5)物理的防除

・育苗圃場や本圃ともに1㎜目合い以下(0.4㎜目合い以下が望ましい)のネットを開口部全てに設置する(サイド、谷部、妻面、天窓、出入口など)。

・施設には近紫外線除去フィルムを利用する。(但し、同一施設でミツバチを利用する作物やナスを栽培する場合は不可)

・施設周辺に反射率の高い光反射マルチ(幅1.5m程度)を設置する。

・育苗圃、本圃ともに黄色粘着板を設置し、コナジラミ類のモニタリングを行なう。

・施設外周部に帯状の黄色粘着テープを設置する。

(6)化学的防除

・定植時または育苗期後半に殺虫粒剤を処理する。特に、育苗期や育苗期後半の薬剤処理は感染抑制効果が期待できる。

・ピリプロキシフェンテープ剤(ラノーテープ)を設置して、コナジラミ類の密度抑制を図る。(但し、タバココナジラミには効果が低い)

・薬剤は、ネオニコチノイド系薬剤、ピラゾール系薬剤、IBR剤、IGR剤等をローテーション散布する。感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(7)抵抗性品種の利用

・イスラエル系統とマイルド系統の両方に抵抗性を示す抵抗性品種には、①高温時に発病の可能性がある品種、②高温時にイスラエル系統に抵抗性を示すがマイルド系統には抵抗性を示さない品種の2種類がある。

・これらの品種では、病徴が現れていなくても、作物体にウイルスが存在している場合もあり、新たな感染源となる恐れがある。

・抵抗性品種の利用においても、総合的な防除対策を講じておく必要がある。

○タバココナジラミ類について

タバココナジラミ バイオタイプB(旧名:シルバーリーフコナジラミ)

平成元年より全国各地のポインセチアで多発生し、その後九州や関東、東海地方のメロン・トマト・きゅうりなどで発生が見られ、特にトマトにおいて、果実に着色異常を発生させ問題になった。県内では平成4年に発生を確認した。(特殊報発表)。

タバココナジラミ バイオタイプQ

平成17年に宮崎県において初めて報告され、県内では平成18年に確認された(病害虫発生予察特殊報発表)。

両種の外観形態上の区別は困難で、肉眼で判別することは不可能である。また、両種ともTYLCVを媒介し、多発生すると成幼虫の吸汁によって生育は阻害され、更に排泄物によるすす病が発生するなど二次被害を生じる。

成虫の体長は約0.8㎜、幅約0.4㎜、翅は白く体色は淡黄色。蛹は黄色で扁平で中央部に向かって盛り上りが見られる。

ライフサイクル(卵→成虫)は25℃で約25日、産卵数は約60個、成虫の寿命は約18日で、低温条件ではもう少し長くなる。

野外では4～11月にかけて発生し、特に8～10月に密度の上昇がみられるが、越冬できない。

コナジラミ類の生態について

	コナジラミの種類		
	オンシツコナジラミ *Trialeurodes vaporariorum*	ＴＹＬＣＶ媒介虫	
		タバココナジラミ バイオタイプＢ *Bemisia Tabaci* B-biotype	タバココナジラミ バイオタイプＱ *Bemisia Tabaci* Q-biotype
卵	8日	7.5日	
幼虫	1齢(6日)、2齢(2日)、3齢(3日)、4齢(4日)	1齢(2.8～3日)、2齢(2～2.4日)、3齢(1.9～3日)	
蛹	5日	4.7日 → 産卵前3.5日	
卵→成虫	28日	22.5～24日	
寿命	成虫は15～25℃で50日以上。30℃以上では短くなり、40℃以上では生存できない。		
産卵	18～27℃で一定。それ以外の高・低温では減少。		
寄主植物	キク科雑草など ５００種以上	トマト、なす、メロン､きゅうり、かぼちゃ、キャベツ、ポインセチア、キク等 13科23種	トマト、ミニトマト、ナス、ピーマン、パプリカ、ししとう、キュウリ、メロン、茎ブロッコリー、アスパラガス、シソ、サツマイモ、ブバルディア、ポインセチア 8科14種
特性	①集中する習性が強い。 ・成虫は上位葉に集中し産卵する。 ②幼虫は移動できない。 ・孵化幼虫がわずかに移動できるだけで、葉から葉への移動はまずない。 ③温度に発育は依存する。 ・低温期では発育が遅れる。 ・30℃以上の高温では発育が遅れる。 ④作物の状態に左右される。 ・若い葉を好むため、古い葉では極端に生育が悪くなる。 ※葉のpH6～7、ｼｮ糖含量15%に寄生数がピークになる。 ⑤色彩反応 ・黄色や緑色に強く誘引される。 ⑥羽化時間 ・羽化は主に午前中に行なわれる。 ⑦活動状況 ・日の出とともに飛翔を開始し、日没とともに休息する。 ⑧飛翔活動 ・飛翔臨界最低温は約10℃、最高温は約30℃。 ・風速約３ｍで飛翔を嫌い、5m以上では抑制される。		
薬剤抵抗	特に抵抗性の指摘はないが、薬剤感受性の低下している個体群も見受けられる。	オンシツコナジラミより感受性が低下している薬剤が指摘されている。	感受性の低下が確認されている。 ジノテフラン、ニテンピラム、ピリダベンなどが有効である。

(6) 防虫ネットによる害虫の防除法

施設の開口部にネットを展帳し、害虫の侵入を防止する方法で、野菜等の施設栽培における環境保全型の防除手段として効果の高い方法である。防除対象の害虫の大きさ、施設内温度の上昇等を考慮しながら、防虫ネットの選定を行う必要がある。

1 展帳方法

① 側窓部等の開口部に、パッカー等の留め具を用いて、隙間のないようにしっかりと固定する。
② 施設出入り口は人の出入りに伴い害虫が侵入しやすいので、資材を二重にしたり、合わせ目を留めたりするなどの処理を行う。
③ 天窓部や換気扇の吸入口からも害虫が侵入する恐れがあり、十分な侵入防止効果を望む場合はこれらの部位にも展帳を行う。

2 防虫ネットの選定

防除対象の害虫の大きさにより、資材の目合いを決定する。目合いと害虫の侵入防止効果の目安は以下の表の通りである。

目合い	コナジラミ類	ハモグリバエ類	アザミウマ類	アブラムシ類	キスジノミハムシ	ヨトウムシ類	コナガ
0.4mm	○	○	△	○	○	○	○
0.6mm	△	○	× ▲	○	○	○	○
0.8mm	×	△	× ▲	○	○	○	○
1mm	×	×	×	△	△	○	△
2mm	×	×	×	×	×	○	×
4mm	×	×	×	×	×	○	×

注）侵入防止効果　○：90%以上、△：70%以上、×：50%以下　▲赤色ネット(0.6mm、0.8mm)使用時の効果(ｱｻﾞﾐｳﾏ類で有効)

①目合いを細かくするほど害虫の侵入防止効果は高まるが、施設内の通気が悪くなり、気温が上昇しやすい欠点がある。栽培する作物の種類や時期によって、高温限界を考慮して目合いの選定を行う必要がある。
②周辺部の害虫密度により実用的な効果が左右されるため、その点も考慮して目合いを選定する。
③ハスモンヨトウ等では、ネット上に産卵して、ふ化幼虫が施設内に侵入する場合があり、目合いの細かいネットでも発生が見られる場合があるので、注意する。
④施設の構造面からは、屋根は高いほうが、また強制換気を行うほうが温度が上がりにくい。
⑤同じ目合いでも繊維の細い資材のほうが通気性は優れるが、耐久性やコスト面も考慮して選定する。

3　その他

きゅうり、トマト等の近紫外線除去フィルムが使用できる作物では、併用することにより、害虫の侵入防止効果がさらに高まる。施設内に害虫の発生源となる不用な作物を残さないこと、できるだけ除草をすることで、害虫が増加しにくい環境を作ることも大切である。

(7) いちご炭疽病の防除方法

いちご炭疽病の本県での発生は昭和48年の東予地域での確認が最初であり被害は軽微であったとの記録が残っている。当時の主流品種の「宝交早生」は抵抗性品種であり、一部の大規模農家で収穫労働の分散を目的に罹病性品種の「麗江」も導入されていたが発生品種の記録はない。その後、昭和60～61年産より導入された品種「女峰」が本病に高い罹病性を示したことから被害が問題化した。本県では「女峰」の作付けが増加するにつれて被害が増加し、平成7～8年産より県内へ導入された「さちのか」でも著しい発生がみられ、続いて品種更新された「紅ほっぺ」、本県育成品種の「あまおとめ」「紅い雫」も本病に対する抵抗性を示さないため、被害は継続している。

栽培面から多発要因を探ると、小型ポットを利用した棚式育苗システム（高設育苗）は、使用培土が少量で軽量化されている分、培土が乾燥しやすいため、夏期高温時には1日に3～4回の頭上潅水が必要となる。このため、本病の発病適温と多湿条件が整い易く、被害が助長されている。

1 発生条件

本病の発病適温は25～30℃であり比較的高温条件で発生する。但し、接種試験を行うと20℃でも発病がみられ、発病の温度範囲は広い。伝染の主体は胞子で行われ、夏期高温時に雨が多いと発生が増加する。この理由は胞子が風のみでは飛散せず、水滴の飛散と供に周辺へ飛び散って行くためである。また、降雨に強い風を伴う場合には被害はより拡大される。

愛媛県内では、一般には7月から発病し始めるが、6月上旬に初発が見られる場合もある。但し、被害が増加するのは8月に入ってからであり、9月中・下旬のハウス定植時まで、育苗期間を通して被害が増加する。その後、ハウス内に持ち込まれた保菌株が発病し、萎凋・枯死症状を生じ直接の減収要因となる（図1）。

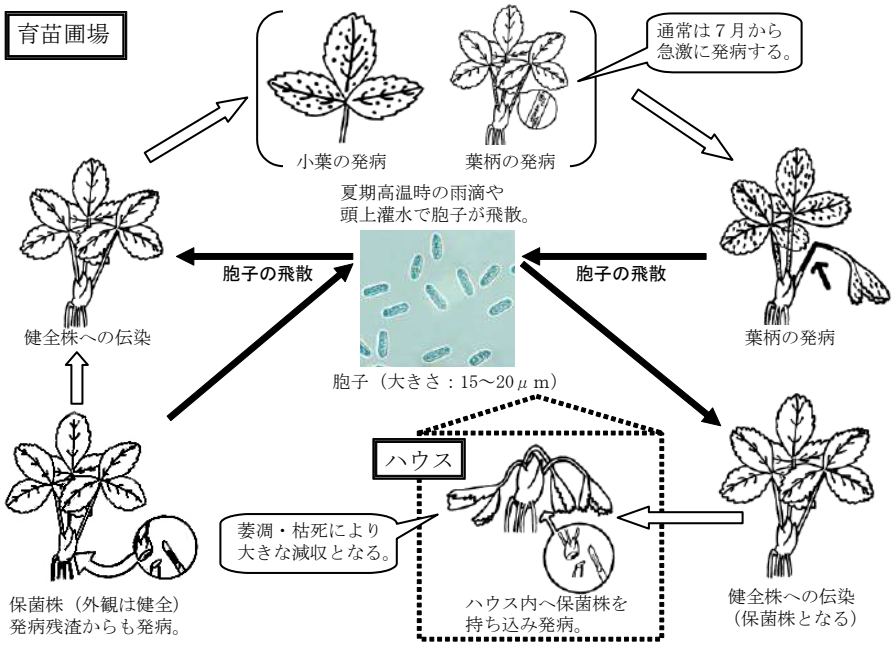


図１　イチゴ炭疽病の伝染と発病

2 発病の特徴

本病の第一次伝染源は托葉やクラウンが侵された保菌株による場合が多い。これは土中に残存した菌からの発病よりも比重が大きいと言える。根からの感染・発病はないとされていたが、その後、土中の発病残渣から根を通じた感染事例も報告されている。

本病はランナーで発病しやすく、無仮植栽培では重要な発病部位であった。しかし、現在の主流な育苗法となるポット栽培では、葉柄、小葉（複葉）、クラウンで発病する。特に葉柄では黒い小斑点や黒色病斑、あるいは病勢進展により病斑から折れる被害が中心となる。葉柄の病斑上では多量の胞子が形成され、第二次伝染源となる。なお、高設パネル上で栽培株を確保するため、発生ランナー先端の子苗を生育させて鉢受けしているが、 このランナーで著しく発病している事例が観察される。

飛散した胞子が小葉に感染すると、汚斑状の「染み」状斑点となる。接種試験によると窒素施用量に拘わらず小葉で安定的に発病した。このため、圃場内の発病モニタリングでは小葉の発病に注目するとよい。但し、小葉にも胞子形成を伴う大型の病斑（図２）が発生することがあり、加えて、葉の表側から裏側に病斑が突き抜ける赤色小斑が発生することもある。クラウン部が侵されると、ここが褐変し最終的な病徴となる萎凋・枯死は28℃以上の高温下で助長される。県内では育苗中に炭疽病以外に輪斑病、じゃのめ病、斑点細菌病が発生する。これらの病害に比べて炭疽病の被害は大きいので、症状を的確に見分ける必要がある（表１）。平成21年にはハウス内において本病による果実発病が確認された。症状は果実表面にくぼみを伴い黒変化していた（図３）。

表１　愛媛県内のいちごの育苗中に発生する主な病害の部位別の特徴

いちごの部位 （発生の特徴）	炭疽病	輪斑病	じゃのめ病	斑点細菌病
小葉（複葉）	汚斑症状 （薄墨色）、大型病斑、赤色小斑	病斑周辺は紫褐色で内部は灰褐色、葉縁でくさび型の症状	病斑周辺は紫褐色で内部は灰白色（輪斑病より色合いが白い）	赤褐色～赤紫色の不整円形
葉柄、ランナー	黒色病斑	やや淡い黒色病斑	この部位での発病は本県では未確認。	
（発生の特徴）	クラウンを侵されると萎凋・枯死する。	葉柄の伸長病斑へは小葉や葉柄が枯れ込んだ後に移行する。	輪斑病と比較するとやや新しい葉位で発生する。	台風通過後に発生が多い（同時多発する）。



図２　いちご炭疽病の大型病斑（小葉で発生）



図３　いちご炭疽病の果実発病（ハウス内）

３　防除対策

本病の胞子飛散を防ぐため、雨滴等の水しぶきによる伝染を防ぐ雨よけ栽培、底面給水、マルチ下チューブ潅水等の耕種的防除法が考案されている。特に、雨よけと底面・株元給水を組み合わせた防除効果は高いので本システムを積極的に導入する。但し、雨よけ栽培下であっても発病がみられる（保菌株の発病等）ため、発病株の早期除去、定期的な薬剤防除は怠らないようにする。

1）無病親株の確保

自家採苗を行う場合には、無病圃場から親株を選ぶ。発病圃場では外観が健全で保菌している株が多い。

2）発病株の除去

小葉、葉柄の発病株は、株ごと徹底的に除去する。理由は小葉、葉柄に局部病徴がみられる株は、クラウン部に本菌が感染している確率が高いためである。特に、小葉の多数の「染み状斑」や葉柄の病斑は、二次伝染が起こっている結果である。

ハウス内では保菌株の持ち込みにより萎凋まで至るが、発病株が完全に枯死しない段階でハウス外に持ち出して適切に処分する。

3）多湿の回避

高設栽培で、培土の少ない育苗ポットを使う場合には、根の目詰まりに注意する。この状態は、根腐れを起こすだけでなく本病の助長要因になる。また、薬剤の付着性を高めるためにも下位葉・古葉の除去を徹底する。圃場の排水改善の励行や灌水は夕方までに適量実施し、夜間の多湿条件を緩和する。

4）肥培管理と雑草対策

本病は多窒素で発病が助長されるため、追肥量に注意し、多窒素による過繁茂を避ける。

炭疽病菌はイヌビユ等の雑草に無病徴感染し、非選択性除草剤処理で枯死した後に胞子を形成する知見があるものの、県内でセイタカアワダチソウから唯一分離された炭疽病菌のいちごへの病原力、伝染力は低かったことから、本病の被害に及ぼす影響は小さいと判断された。このため、雑草対策は通常行われる除草管理を継続すればよい。

5）薬剤防除

本病は、育苗期の定期的な防除でいちごに本菌が感染する前の予防的対応が望まれる。薬剤は表2を参照し、同一系統剤の連用を避ける。なお、治療効果が期待できるゲッター水和剤は予防剤として使用するのは不適である。本剤は発病後の胞子が飛散した以降に使用する。ベンレート水和剤、アミスター20フロアブルは、耐性菌の発生、効果不足を確認した。

表２　いちご炭疽病の防除薬剤の特徴

使用時期	薬剤名	希釈倍数（倍）	期待できる薬剤の効果	
			予防効果	治療効果
仮植栽培期	ジマンダイセン水和剤	600	○	
	ペンコゼブ水和剤	600	○	
	アントラコール顆粒水和剤	500	○	
育苗期	デランフロアブル	1,000	○	
	ベルクート水和剤	1,000	○	
	ベルクートフロアブル	1,000	○	
収穫開始21日前まで	ゲッター水和剤	1,000		○
収穫30日前まで	オーソサイド水和剤80	800	○	
収穫前日まで	セイビアーフロアブル20	1,000	○	
	ニマイバー水和剤	1,000		○
	ファンベル顆粒水和剤	1,000	○	

(8) いちご萎黄病の防除方法

いちご萎黄病の我が国での初発生は1970年に確認され、愛媛県内では1972年度の県病害虫発生予察事業年報に県内の初発生が記録されている。当時のいちごでは、全国的に品種「宝交早生」が栽培され、本病に対する罹病性が高いことから、発生が著しく、現在も本県育成品種の「あまおとめ」を中心に被害が継続している。

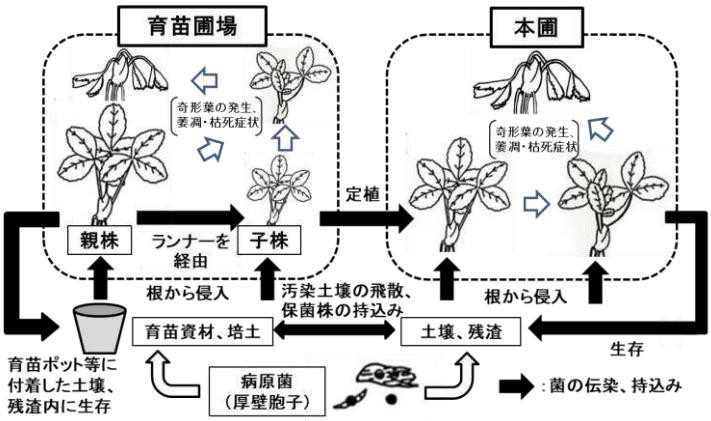


図１　いちご萎黄病の伝染と発病

1　発生条件

発病最適温度は30℃前後と比較的高温条件を好み、夏場に高温乾燥が続くと育苗圃場での発生が助長される。なお、20℃前後でも発病がみられるため、発病する温度範囲は広く、本圃での発生も著しい。よって、愛媛県内では6～8月の育苗期、本圃では定植後11月頃まで発生がみられた後、12～2月の冬季の低温で病勢は停滞するものの、3～4月頃の春先に気温が上がってくると再び増加する。また、土壌pHが低いほど発病が著しくなる。

本病の伝染方法には、土壌中に存在する耐久体の胞子（厚壁胞子）による土壌伝染があり、土壌中の病原菌の分布は地表から約20cm深に多いとされている。厚壁胞子は数年以上にわたって土壌中に長期間生存し、近くにいちごが植え付けられると胞子が発芽伸長し、根から侵入することで感染が成立する。また、罹病親株からランナーを経由して子株へ感染する種苗伝染もみられる。接種試験によると、接種から30～40日経過すると罹病した親株から第1子株へ萎黄病菌が伝染し、時間が経過することで第2子株へと伝染する。以上の伝染方法以外では、発病残渣を含む汚染土壌が風雨によって飛散することによる周辺への伝播や、使用した育苗ポットや吸水マット等の育苗資材に付着した発病残渣中の病原菌が来季の苗に感染する等、多様な伝染方法がある（図１）。

2　発病の特徴

本病の典型的な病徴は、新葉の3枚の小葉の内、黄色味を帯びた1～2枚の小葉がねじれたように奇形・小型化しながら出葉し、クラウン部の導管部分が褐変する。本病は、やがて株全体が萎凋・枯死するが、愛媛県内においては株の枯死につながる病害では炭疽病、疫病が発生している。この2病害が示す病徴の類似性は高いが、萎黄病との区別は容易である（表１）。萎黄病菌は感染してから1か月程度の潜伏期間があるため、健全株と潜在感染株（保菌株）の識別は困難である。

表１　いちご萎黄病、炭疽病、疫病の株全体の特徴

発生の特徴	萎黄病	炭疽病	疫病
初期症状	小葉の一部が黄色味を帯び、ねじれたように奇形・小型化しながら出葉する。次に出葉する新葉も同様の症状となる。	わずかな萎凋（小葉の葉脈が赤変化することがある）。局部病斑の併発により、小葉や葉柄が黒変化する。	わずかな萎凋。
後期症状	株全体が萎凋・枯死する。小葉の奇形は残存する。	株全体が萎凋・枯死する。	株全体が萎凋・枯死する。
クラウン部の断面	導管の一部、または全体が褐色～黒褐色になる。	クラウン基部の外側から中心へ向けて褐変し、導管以外も変色する。	クラウン基部の外側から中心へ向けて褐変し、導管以外も変色する。

3　防除対策

本病は多様な伝染源が存在するため、以下の防除対策を組み合わせ、親株をはじめ、本圃に定植する苗の感染リスクをできる限り小さくすることが重要である。以下が、主な防除対策となる。

1）無病親株の確保

育苗に用いる元親株は毎年更新し、自家採苗を行う場合には無病圃場から親株を選ぶ。発病圃場では外観が健全に見えても保菌している場合があるため、このような圃場からの親株の採取を避ける。

2）発病株・残渣・汚染土壌の除去

発病が確認された場合は速やかに株ごと除去する。残渣や汚染土壌には病原菌が存在し、風雨により伝播する恐れがあるため、可能な限り圃場外に持ち出し適切に処分する。

3）育苗資材の洗浄・消毒

育苗に用いるポット、育苗箱、吸水マット等の資材は、使用前に水道水で水洗して土壌の付着を落とした後、ケミクロンG、イチバン乳剤等の資材消毒剤で消毒する。土壌の付着があると資材消毒を行っても防除効果は低下する。育苗用の培土は新しいものか、蒸気消毒等により加熱処理したものを使用する。

4）空中採苗・子苗の早期切り離し

育苗時の土壌伝染を防ぐには高架設備等で空中採苗し、地面に触れさせないことが有効である。また、親株に保菌の疑いがある場合でも第2複葉展開期までにランナーを切り離して採苗すれば子苗への伝染を防止できる。第2複葉展開期での採苗が困難な場合でも、できるだけ早期に、ランナー先端に近い子苗を切り離して採苗することで感染リスクを小さくできる。

5）土壌消毒、湛水

本圃で連作する場合には必ず土壌消毒を行う。クラウン内部の病原菌の殺菌は困難なため、消毒前に残渣は丁寧に除去する。太陽熱利用による土壌消毒、土壌還元消毒、熱水利用による土壌消毒も有効である。

6）薬剤防除

本病の防除対策として表２の薬剤が使用できる。但し、薬剤効果は予防的であるため、必ず土壌消毒等の他の防除対策と組み合わせる。

表２　いちご萎黄病の防除薬剤の特徴

使用時期	薬剤名	希釈倍数（倍）	使用方法	使用回数	期待できる薬剤の効果	
					予防効果	治療効果
仮植前	トップジンM水和剤	300～500	1時間苗根部浸漬	3回以内	○	
仮植時及び仮植栽培期		300～500	3ℓ /㎡灌注	3回以内	○	
仮植前	ベンレート水和剤	500	1～3時間苗根部浸漬	1回	○	
育苗期			50～100mℓ /株灌注	3回以内	○	
本圃定植後（但し収穫30日前まで）			100mℓ /株灌注	1回	○	

（9）くん煙剤の使用法

①殺菌剤

作 物 名	農 薬 名	使用時期/本剤の使用回数	適用病害虫	ハウスの高さ２ｍの場合の使用量	使用器具
きゅうり	スミレックスくん煙顆粒	収穫前日まで/6回以内	菌核病、灰色かび病	6g/50㎡	
	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	菌核病、灰色かび病	100g/150～200㎡	
	モレスタン水和剤	収穫前日まで/3回以内	うどんこ病	20g/50㎡	
	フルピカくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	うどんこ病、灰色かび病	50g/250㎡	
	硫黄粒剤	-/ -	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
	パンチョＴＦジェット※	収穫前日まで/2回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
	ダコニールジェット	収穫前日まで/8回以内	うどんこ病、べと病	20g/50㎡	
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
かぼちゃ	硫黄粒剤	-/ -	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
すいか	スミレックスくん煙顆粒	収穫7日前まで/5回以内	菌核病	6g/50㎡	
	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	菌核病	100g/150～200㎡	
	硫黄粒剤	-/ -	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
メロン	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	菌核病、つる枯病	100g/150～200㎡	
	硫黄粒剤	-/ -	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
	パンチョＴＦジェット※	収穫前日まで/2回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
トマト	スミレックスくん煙顆粒	収穫前日まで/3回以内	灰色かび病	6g/50㎡	
	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/3回以内	菌核病、灰色かび病	100g/150～200㎡	
	硫黄粒剤	-/ -	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
	パンチョＴＦジェット※	収穫前日まで/2回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
	ダコニールジェット	収穫前日まで/4回以内	葉かび病	20g/50㎡	
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	葉かび病	50g/200㎡	
ミニトマト	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/3回以内	菌核病、灰色かび病	100g/150～200㎡	
	硫黄粒剤	-/ -	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	葉かび病	50g/200㎡	
なす	スミレックスくん煙顆粒	収穫前日まで/6回以内	灰色かび病	6g/50㎡	
	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	菌核病、灰色かび病	100g/150～200㎡	
	硫黄粒剤	-/ -	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
	ダコニールジェット	収穫前日まで/4回以内	黒枯病	20g/50㎡	
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病、すすかび病	50g/200㎡	
ピーマン	スミレックスくん煙顆粒	収穫前日まで/5回以内	灰色かび病	6g/50㎡	
	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	菌核病、灰色かび病	100g/150～200㎡	
	モレスタン水和剤	収穫前日まで/3回以内	うどんこ病	20g/50㎡	
	硫黄粒剤	-/ -	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
いちご	スミレックスくん煙顆粒	収穫前日まで/3回以内	灰色かび病	6g/50㎡	
	ロブラールくん煙剤	収穫前日まで/4回以内	灰色かび病	100g/150～200㎡	
	フルピカくん煙剤	収穫前日まで/3回以内	うどんこ病、灰色かび病	50g/250㎡	
	硫黄粒剤	-/ -	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器
	パンチョＴＦジェット※	収穫前日まで/2回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
さやえんどう	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
実えんどう	トリフミンジェット	収穫前日まで/5回以内	うどんこ病	50g/200㎡	
甘長とうがらし	ロブラールくん煙剤※	収穫前日まで/2回以内	灰色かび病、菌核病	100g/150～200㎡	
	硫黄粒剤※	-/-	うどんこ病	6～16g/1000㎡	専用器

(注)使用にあたっては、各薬剤に記載されている使用方法、注意事項を遵守すること。

※パンチョＴＦジェットはトリフミンジェットの成分（トリフルミゾール）の混合剤であるので、総使用回数に注意すること。

※甘長とうがらしのロブラールくん煙剤、硫黄粒剤はとうがらし類で登録。

②殺虫剤

作 物 名	農 薬 名	使用時期/本剤の使用回数	適用病害虫	ハウスの高さ２ｍの場合の使用量	使用器具
きゅうり	マブリックジェット※	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類、ハダニ類	50g/200㎡	
	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	アブラムシ類、コナジラミ類、ミナミキイロアザミウマ	50g/200㎡	
	フェニックスジェット	収穫前日まで/3回以内	ウリノメイガ	50g/200㎡	
	テルスタージェット	収穫前日まで/3回以内	ハダニ類	48g/200㎡	
すいか	マブリックジェット※	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類、ハダニ類	50g/200㎡	
	ロディーくん煙顆粒	収穫前日まで/4回以内	ハダニ類	20g/50㎡	
	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	アブラムシ類、ミナミキイロアザミウマ	50g/200㎡	
	テルスタージェット	収穫前日まで/4回以内	ハダニ類	48g/200㎡	

作 物 名	農 薬 名	使用時期/本剤の使用回数	適用病害虫	ハウスの高さ２ｍの場合の使用量	使用器具
メロン	マブリックジェット	収穫3日前まで/2回以内	ハダニ類	50g/200㎡	
	ロディーくん煙顆粒	収穫前日まで/4回以内	ハダニ類	20g/50㎡	
	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	アブラムシ類、アザミウマ類	50g/200㎡	
	テルスタージェット	収穫前日まで/4回以内	アブラムシ類、ハダニ類	48g/200㎡	
	ウララくん煙剤	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類	50g/200㎡	
トマト	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	コナジラミ類、ミカンキイロアザミウマ	50g/200㎡	
	フェニックスジェット	収穫前日まで/2回以内	オオタバコガ	50g/200㎡	
ミニトマト	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	ミカンキイロアザミウマ、コナジラミ類	50g/200㎡	
なす	マブリックジェット※	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類、ハダニ類	50g/200㎡	
	ロディーくん煙顆粒	収穫前日まで/5回以内	ハダニ類	20g/50㎡	
	モスピランジェット	収穫前日まで/3回以内	アブラムシ類、ミナミキイロアザミウマ	50g/200㎡	
	フェニックスジェット	収穫前日まで/3回以内	オオタバコガ、ハスモンヨトウ	50g/200㎡	
	テルスタージェット	収穫前日まで/3回以内	ハダニ類、ハスモンヨトウ	48g/200㎡	
ピーマン	モスピランジェット	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類	50g/200㎡	
	フェニックスジェット	収穫前日まで/2回以内	オオタバコガ	50g/200㎡	
いちご	マブリックジェット※	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類、ハダニ類	20g/200㎡	
	ロディーくん煙顆粒	収穫前日まで/3回以内	ハダニ類	20g/50㎡	
	モスピランジェット	収穫前日まで/2回以内	アブラムシ類、アザミウマ類	50g/200㎡	
	フェニックスジェット	収穫前日まで/2回以内	ハスモンヨトウ	50g/200㎡	
	テルスタージェット	収穫前日まで/2回以内	ハダニ類	48g/200㎡	
アスパラガス	モスピランジェット	収穫前日まで/2回以内	アザミウマ類	50g/200㎡	

(注)使用にあたっては、各薬剤に記載されている注意事項を遵守すること。
薬剤抵抗性が発達するおそれがあるので、防除効果を検討しながら薬剤の選択を行うこと。
※マブリックジェットは、合成ピレスロイド剤使用上の注意(P15)を参照のこと。

(10)野菜用銅剤及び混合剤の使用法

※有機銅（8-ヒドロキシキノリン銅）およびその混合剤は、有機銅の総使用回数に注意すること（各薬剤のラベル参照）。
※クプラビットホルテ、コサイドＤＦ、コサイドボルドー、サンボルドー、撒粉ボルドー粉剤ＤＬは県内流通がないため削除した。
※きゅうりのキノンドー水和剤４０、キンセット水和剤は、使用時期が１番花の開花前までとなっており、誤使用防止のため削除した。
※カスミンボルドー、カッパーシン水和剤、ドーマイシン水和剤、銅ストマイ水和剤、フェスティバルC、ナレート水和剤は各作物の本文中に記載した。

［１］野菜類

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	褐斑細菌病、黒腐病、軟腐病、斑点細菌病、べと病、黒斑細菌病	−/−
ＩＣボルドー６６Ｄ	塩基性硫酸銅	100倍	軟腐病	−/−
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	500～1,000倍	軟腐病、べと病	−/−
ボルドー	塩基性塩化銅	500～1,000倍	軟腐病、べと病	−/−
コサイド３０００	水酸化第二銅	2,000倍	褐斑細菌病、黒腐病、軟腐病、斑点細菌病	−/−
クリーンカップ	水酸化第二銅・バチルス　ズブチリス	1,000～2,000倍	うどんこ病	収穫前日まで/−
		1,000倍	灰色かび病	
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	750～1,000倍	うどんこ病	収穫前日まで/−
		1,000倍	白さび病、軟腐病	
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000～1,500倍	軟腐病	−/−
		1,000～2,000倍	べと病、斑点細菌病	
		1,000倍	ナメクジ類	発生前～発生初期まで/−

［２］きゅうり

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ムッシュボルドーＤＦ	塩基性硫酸銅	500倍	斑点細菌病	−/−
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	500倍	斑点細菌病	−/−
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	斑点細菌病	−/−
クリーンカップ	水酸化第二銅・バチルス　ズブチリス	1,000倍	べと病、褐斑病	収穫前日まで/−
		2,000倍	斑点細菌病	
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	750～1,500倍	斑点細菌病	収穫前日まで/−
		1000倍	灰色かび病	
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	1,200倍	べと病、炭疽病	収穫前日まで/5回以内
		1,200～1,500倍	斑点細菌病	
ドキリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	1,000倍	斑点細菌病	収穫前日まで/5回以内
		1,000～1,500倍	炭疽病、べと病	
シトラーノフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅・ＴＰＮ	1,000～1,200倍	斑点細菌病、褐斑病、べと病	収穫前日まで/5回以内
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	500倍	べと病、うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類、ハダニ類	収穫前日まで/4回以内

［３］かぼちゃ

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	果実斑点細菌病、軟腐細菌病	−/−
キノンドー水和剤４０	8-ヒドロキシキノリン銅	800～1,000倍	べと病、炭疽病	収穫７日前まで/３回以内
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	500倍	うどんこ病	収穫前日まで/４回以内

［4］すいか

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ＩＣボルドー６６Ｄ	塩基性硫酸銅	50倍	つる枯病、炭疽病	−/−
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500～800倍	疫病	−/−
キノンドー水和剤４０	8-ヒドロキシキノリン銅	800～1,000倍	べと病、炭疽病	収穫10日前まで/5回以内
		800倍	果実汚斑細菌	
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	1,000倍	炭疽病、果実汚斑細菌病	収穫前日まで/5回以内
ドキリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800倍	果実汚斑細菌病	収穫前日まで/5回以内
		500～1,000倍	つる枯病、炭疽病	
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	500倍	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類	収穫前日まで/4回以内

［5］メロン

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	500～1,000倍	斑点細菌病	−/−
ボルドー	塩基性塩化銅	500～1,000倍	斑点細菌病	−/−
キノンドー水和剤４０	8-ヒドロキシキノリン銅	800～1,000倍	べと病、炭疽病	収穫10日前まで/5回以内
		600～800倍	斑点細菌病	
		800倍	果実汚斑細菌病	
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	1,000倍	斑点細菌病	収穫10日前まで/5回以内
ドキリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800倍	果実汚斑細菌病	収穫10日前まで/5回以内
		500～1,000倍	つる枯病	
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	500倍	うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類	収穫前日まで/4回以内

［6］トマト

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	400～600倍	疫病、輪紋病	−/−
		500倍	すすかび病	
ムッシュボルドーＤＦ	塩基性硫酸銅	500倍	疫病	−/−
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	500倍	疫病、斑点病、葉かび病	−/−
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	疫病、斑点病、葉かび病	−/−
コサイド３０００	水酸化第二銅	1,000倍	疫病	−/−
クリーンカップ	水酸化第二銅・バチルス　ズブチリス	1,000倍	疫病、すすかび病	収穫前日まで/−
		1,000～2,000倍	葉かび病	
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	800倍	すすかび病、葉かび病	収穫前日まで/−
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	500倍	葉かび病、灰色かび病、うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類、ハダニ類	収穫前日まで/4回以内
		500～700倍	うどんこ病	収穫前日まで/4回以内
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	葉かび病、すすかび病	−/−
		1,000～2,000倍	疫病	−/−
園芸ボルドー	硫黄・塩基性塩化銅混合剤	400～800倍	疫病	−/−
		800倍	うどんこ病	−/−
		500倍	葉かび病、すすかび病、トマトサビダニ	−/−

［7］ミニトマト

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	400～600倍	疫病、輪紋病	−/−
		500倍	すすかび病	
ムッシュボルドーＤＦ	塩基性硫酸銅	500倍	疫病	−/−
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	500倍	疫病、斑点病、葉かび病	−/−
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	疫病、斑点病、葉かび病	−/−
コサイド３０００	水酸化第二銅	1,000倍	疫病	−/−
クリーンカップ	水酸化第二銅・バチルス　ズブチリス	1,000倍	疫病、すすかび病	収穫前日まで/−
		1,000～2,000倍	葉かび病	
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	800倍	すすかび病、葉かび病	収穫前日まで/−
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	500倍	疫病、斑点病、葉かび病	−/−
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	500倍	葉かび病、灰色かび病、うどんこ病、コナジラミ類、アブラムシ類、ハダニ類	収穫前日まで/4回以内
		500～700倍	うどんこ病	収穫前日まで/4回以内
園芸ボルドー	硫黄・塩基性塩化銅混合剤	400～800倍	疫病	−/−
		800倍	うどんこ病	−/−
		500倍	葉かび病、すすかび病、トマトサビダニ	−/−
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000～2,000倍	疫病	−/−
		1,000倍	葉かび病、すすかび病	−/−

［8］なす

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	すすかび病	−/−
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000～2,000倍	うどんこ病	収穫前日まで/−
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	700倍	うどんこ病、すすかび病	収穫前日まで/4回以内

［9］ピーマン

農薬名	成分	濃度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	500倍	うどんこ病、アブラムシ類	収穫前日まで/4回以内

［10］甘長とうがらし

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	500倍	うどんこ病、アブラムシ類	収穫前日まで/4回以内

［11］いちご

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
コサイド３０００	水酸化第二銅	1,000倍	炭疽病、角斑細菌病	−/−
ＩＣボルドー６６Ｄ	塩基性硫酸銅	100倍	炭疽病	−/−
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	500～800倍 100倍(5mℓ/株) クラウン部散布	炭疽病	育苗期/3回以内
ドキリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	500～800倍	炭疽病	育苗期/3回以内
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	500～1,000倍	うどんこ病	収穫前日まで/6回以内
		500倍	灰色かび病、アブラムシ類、ハダニ類	
		500倍 瞬間～5分間苗浸積	うどんこ病	定植前/1回
		800倍 5分間苗浸積		

［12］だいこん

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	黒斑細菌病、白さび病	−/−
コサイド３０００	水酸化第二銅	1,000倍	白さび病	−/−
キンセット水和剤	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	500～700倍	軟腐病	収穫21日前まで/3回以内
キンセット水和剤８０	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	1,000～1,400倍	軟腐病	収穫21日前まで/3回以内

［13］キャベツ

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	500倍	黒腐病、黒斑細菌病	−/−
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	黒腐病、黒斑細菌病	−/−
キノンドー水和剤４０	8-ヒドロキシキノリン銅	500～800倍	黒腐病	収穫14日前まで/3回以内
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800～1,000倍	黒腐病	収穫14日前まで/3回以内
ドキリンフロアブル	8－ヒドロキシキノリン銅	500～1,000倍	黒腐病	収穫14日前まで/3回以内
		800～1,000倍	軟腐病	
シトラーノフロアブル	8－ヒドロキシキノリン銅・ＴＰＮ	1,000～1,200倍	黒腐病、べと病	収穫14日前まで/2回以内
クプロシールド※	塩基性硫酸銅	1,000倍	黒腐病	−/−
		1,000～2,000倍	黒斑細菌病	−/−
フジドーLフロアブル	塩基性硫酸銅	500倍	黒腐病	−/−

※クプロシールドは結球期以降の散布で薬害を生じる恐れがあるので、結球初期までに散布する。

［14］ブロッコリー

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	花蕾腐敗病	−/−
コサイド３０００	水酸化第二銅	1,000倍	花蕾腐敗病	−/−
キノンドー水和剤４０	8-ヒドロキシキノリン銅	800倍	黒腐病、黒斑細菌病	収穫14日前まで/3回以内
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000～2,000倍	黒斑細菌病、花蕾腐敗病	−/−
フジドーLフロアブル	塩基性硫酸銅	500倍	黒斑細菌病	−/−

［15］はくさい

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
キンセット水和剤	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	500～700倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
キノンドー水和剤４０	8-ヒドロキシキノリン銅	800倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
キノンドー水和剤８０	8-ヒドロキシキノリン銅	1,200倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	1,000倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
ドキリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800～1,000倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
シトラーノフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅・ＴＰＮ	1,000～1,200倍	軟腐病、べと病、白斑病	収穫30日前まで/2回以内
ムッシュボルドーDF	塩基性硫酸銅	500倍	軟腐病	−/−
フジドーLフロアブル	塩基性硫酸銅	500倍	軟腐病	−/−
クプロシールド※	塩基性硫酸銅	1,000～2,000倍	黒腐病、黒斑細菌病	−/−

※クプロシールドは結球期以降の散布で薬害を生じる恐れがあるので、結球初期までに散布する。

［16］ほうれんそう

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
コサイド３０００	水酸化第二銅	1,000倍	べと病、白斑病	−/−

［17］レタス

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500～800倍	腐敗病	−/−
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	500～1,000倍	斑点細菌病、腐敗病	−/−
ボルドー	塩基性塩化銅	500～1,000倍	斑点細菌病、腐敗病	−/−
キンセット水和剤	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	500～700倍	軟腐病	収穫21日前まで/5回以内
キンセット水和剤８０	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	1,000～1,500倍	軟腐病	収穫21日前まで/5回以内
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000倍	腐敗病	収穫前日まで/−
キノンドー水和剤４０	8-ヒドロキシキノリン銅	600倍	斑点細菌病、軟腐病、べと病	収穫21日前まで/5回以内
		600～800倍	腐敗病	
キノンドー水和剤８０	8-ヒドロキシキノリン銅	1,200～1,600倍	腐敗病	収穫21日前まで/5回以内

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800～1,000倍	軟腐病、斑点細菌病、腐敗病	収穫21日前まで/5回以内
ドキリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800～1,000倍	軟腐病	収穫21日前まで/5回以内
		800倍	腐敗病	
シトラーノフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅・ＴＰＮ	1,000～1,200倍	すそ枯病、腐敗病、べと病	収穫21日前まで/3回以内
		1,000倍	軟腐病	
ロブドー水和剤	イプロジオン・8-ヒドロキシキノリン銅	500倍	菌核病、斑点細菌病、腐敗病、軟腐病	収穫21日前まで/3回以内
フジドーLフロアブル	塩基性硫酸銅	500倍	軟腐病	−/−

[18] 非結球レタス

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500～800倍	腐敗病	−/−
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	500～1,000倍	斑点細菌病、腐敗病	−/−
ボルドー	塩基性塩化銅	500～1,000倍	斑点細菌病、腐敗病	−/−
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000倍	腐敗病	収穫前日まで/−
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800～1,000倍	軟腐病、斑点細菌病、腐敗病	収穫30日前まで/5回以内
ドキリンフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	800～1,000倍	軟腐病	収穫30日前まで/5回以内
		800倍	腐敗病	
フジドーLフロアブル	塩基性硫酸銅	500倍	軟腐病	−/−

[19] たまねぎ

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	500倍	白色疫病	−/−
ドイツボルドーＤＦ	塩基性塩化銅	1,000倍	軟腐病	−/−
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	白色疫病	−/−
コサイド３０００	水酸化第二銅	1,000～2,000倍	軟腐病	−/−
		1,000倍	りん片腐敗病	
キンセット水和剤	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	500～700倍	軟腐病	収穫14日前まで/3回以内
キンセット水和剤８０	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	1,000～1,400倍	軟腐病	収穫14日前まで/3回以内
キノンドー水和剤４０	8-ヒドロキシキノリン銅	600倍	軟腐病	収穫14日前まで/3回以内
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	りん片腐敗病	−/−
園芸ボルドー	硫黄・塩基性塩化銅	500倍	軟腐病	−/−
クミガードSC	水酸化第二銅	500倍	軟腐病、りん片腐敗病	−/−
イデクリーン水和剤	硫黄・塩基性塩化銅	500倍	軟腐病	−/−

[20] にんじん

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ＩＣボルドー６６Ｄ	塩基性硫酸銅	50～100倍	黒葉枯病	−/−
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500～800倍	黒葉枯病	−/−
コサイド３０００	水酸化第二銅	500～1,000倍	黒葉枯病	−/−
クリーンカップ	水酸化第二銅・バチリス　ズブチリス	1,000倍	黒葉枯病	収穫前日まで/−
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	600～800倍	黒葉枯病	収穫3日前まで/5回以内
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	黒葉枯病	−/−
クミガードSC	水酸化第二銅	500倍	黒葉枯病	−/−

[21] えだまめ

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ドイツボルドーＤＦ	塩基性塩化銅	500倍	斑点細菌病	−/−

[22] さやえんどう

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	1,000倍	先端黄白化症	−/−
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	500倍	うどんこ病、灰色かび病	収穫前日まで/4回以内

[23] 実えんどう

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	1,000倍	先端黄白化症	−/−
サンヨール	ＤＢＥＤＣ	500倍	うどんこ病、灰色かび病	収穫前日まで/4回以内

[24] さやいんげん

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ドイツボルドーＤＦ	塩基性塩化銅	500倍	かさ枯病	−/−

[25] アスパラガス

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	茎枯病、斑点病	−/−
ドイツボルドー	塩基性塩化銅	500倍	茎枯病	収穫後/−
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	茎枯病	収穫後/−
コサイド３０００	水酸化第二銅	2,000倍	茎枯病、斑点病、褐斑病	−/−
キノンドーフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅	600～800倍	茎枯病、べと病	収穫3日前まで/5回以内
シトラーノフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅・ＴＰＮ	1,000～1,200倍	茎枯病、斑点病、褐斑病	収穫3日前まで/4回以内
ムッシュボルドーＤＦ	塩基性硫酸銅	500倍	茎枯病	−/−
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	茎枯病、斑点病	−/−

［26］しそ

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
キノンドー水和剤４０	8-ヒドロキシキノリン銅	1,000倍 株元散布	斑点病	収穫前日まで/4回以内
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	斑点病	発病前～発病初期/－

［27］さといも

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000倍	疫病	収穫前日まで/－
フジドーLフロアブル	塩基性硫酸銅	500倍	疫病	－/－
ＩＣボルドー６６Ｄ	塩基性硫酸銅	100倍	疫病	－/－

［28］ばれいしょ

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	400倍	疫病	－/－
ＩＣボルドー６６Ｄ	塩基性硫酸銅	50倍	疫病	－/－
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	400～800倍	疫病	－/－
ドイツボルドーＤＦ	塩基性塩化銅	500～1,000倍	疫病、軟腐病	－/－
ボルドー	塩基性塩化銅	400～800倍	疫病	－/－
コサイド３０００	水酸化第二銅	1,000倍	疫病、軟腐病	－/－
キンセット水和剤	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	500～700倍	軟腐病	収穫14日前まで/5回以内
キンセット水和剤８０	水酸化第二銅・8-ヒドロキシキノリン銅	1,000～1,400倍	軟腐病	収穫14日前まで/5回以内
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000倍	疫病	収穫前日まで/－
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	軟腐病	－/－
		1,000～2,000倍	疫病	

［29］かんしょ

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	斑点病、基腐病	－/－
ドイツボルドーＡ	塩基性塩化銅	500倍	斑点病	－/－
ボルドー	塩基性塩化銅	500倍	斑点病	－/－
ジーファイン水和剤	無水硫酸銅・炭酸水素ナトリウム	1,000倍	基腐病	収穫前日まで/－
クプロシールド	塩基性硫酸銅	1,000倍	基腐病	発病前～発病初期/－
ＩＣボルドー６６Ｄ	塩基性硫酸銅	50倍	基腐病	－/－

［30］やまのいも

農 薬 名	成　　分	濃　　度	適用病害虫	使用時期/本剤の使用回数
Ｚボルドー	塩基性硫酸銅	500倍	炭疽病、葉渋病	－/－
コサイド３０００	水酸化第二銅	2,000倍	葉渋病	－/－
キノンドー水和剤４０	8-ヒドロキシキノリン銅	600倍	葉渋病	収穫14日前まで/5回以内
シトラーノフロアブル	8-ヒドロキシキノリン銅・ＴＰＮ	1,000～1,200倍	炭疽病、葉渋病	収穫30日前まで/5回以内

(11)野菜類ウイルス病の主な病原ウイルスとその性質

野菜名（宿主名）		病原ウイルス（和　名）	伝染方法（汁液）	（種子）	（虫媒）	（土壌）	注意事項
ナス科	トマト	ToMV（トマトモザイクウイルス）	＋＋	＋	－	＋	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		PVX（ジャガイモＸウイルス）	＋	－	－	－	手の洗浄、ばれいしょからの伝染防止
		PVY（ジャガイモＹウイルス）	＋	？	＋	－	ばれいしょからの伝染防止
		TSWV（トマト黄化えそウイルス）	－	－	＋	－	主にミカンキイロアザミウマの寄生防止
		TbLCJV（タバコ巻葉ウイルス）	－	－	＋	－	タバココナジラミ(スイカズラコナジラミ)の寄生防止
		TYLCV（トマト黄化葉巻ウイルス）	－	－	＋	－	タバココナジラミ（バイオタイプB,Q）の寄生防止
		ToCV（トマトクロロシスウイルス）	－	－	＋	－	タバココナジラミ（バイオタイプB,Q）、オンシツコナジラミの寄生防止
	ピーマン	TMV（タバコモザイクウイルス）	＋＋	＋	－	＋	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		ToMV（トマトモザイクウイルス）	＋＋	＋	－	＋	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		TMGMV（タバコマイルドグリーンモザイクウイルス）	＋＋	＋	－	＋	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		PaMMV（パプリカマイルドモットルウイルス）	＋＋	＋	－	＋	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		PMMoV（トウガラシマイルドモットルウイルス）	＋＋	＋	－	＋	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		BBWV（ソラマメウイルトウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		TSWV（トマト黄化えそウイルス）	－	－	＋	－	主にミカンキイロアザミウマの寄生防止
		TAV（トマトアスパーミィウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		PVY（ジャガイモＹウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
	なす	ToMV（トマトモザイクウイルス）	＋＋	＋	－	＋	種子消毒、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		BBWV（ソラマメウイルトウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		TSWV（トマト黄化えそウイルス）	＋	－	＋	－	主にミカンキイロアザミウマの寄生防止
	ばれいしょ	PLRV（ジャガイモ葉巻ウイルス）	－	＋（塊茎）	＋	－	アブラムシの寄生防止、種いも(塊茎)で伝染
		PVX（ジャガイモＸウイルス）	＋	＋（塊茎）	－	－	種いも(塊茎)で伝染
		PVY（ジャガイモＹウイルス）	＋	＋（塊茎）	＋	－	アブラムシの寄生防止、種いも(塊茎)で伝染
ウリ科	きゅうり	CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		WMV（カボチャモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		ZYMV（ズッキーニ黄斑モザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		PRSV（パパイア輪点ウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		KGMMV（キュウリ緑斑モザイクウイルス）	＋＋	＋	－	＋	種子、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		MYSV（メロン黄化えそウイルス）	－	－	＋	－	ミナミキイロアザミウマの寄生防止
		BPYV（ビートシュードイエロースウイルス）（CuYV：キュウリ黄化ウイルス）	－	－	＋	－	オンシツコナジラミの寄生防止
		CCYV（ウリ類退緑黄化ウイルス）	－	－	＋	－	タバココナジラミ（バイオタイプB,Q）の寄生防止
	かぼちゃ	CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		WMV（カボチャモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CGMMV（スイカ緑斑モザイクウイルス）	＋＋	＋	－	＋	種子、資材、土壌の消毒、手の洗浄
	すいか	WMV（カボチャモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CGMMV（スイカ緑斑モザイクウイルス）	＋＋	＋	－	＋	種子、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		MYSV（メロン黄化えそウイルス）	－	－	＋	－	ミナミキイロアザミウマの寄生防止
		CCYV（ウリ類退緑黄化ウイルス）	－	－	＋	－	タバココナジラミ（バイオタイプB,Q）の寄生防止
	メロン（マスクメロン）	CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		WMV（カボチャモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		MNSV（メロンえそ斑点ウイルス）	＋	＋	－	＋（下等菌類）	土壌消毒
		CGMMV（スイカ緑斑モザイクウイルス）	＋＋	＋	－	＋	種子、資材、土壌の消毒、手の洗浄
		ToRSV（トマト輪点ウイルス）	＋	＋	＋	＋（土壌ｾﾝﾁｭｳ）	種子、土壌の消毒
		MYSV（メロン黄化えそウイルス）	－	－	＋	－	ミナミキイロアザミウマの寄生防止
		CCYV（ウリ類退緑黄化ウイルス）	－	－	＋	－	タバココナジラミ（バイオタイプB,Q）の寄生防止
	しろうり	CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		WMV（カボチャモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
アブラナ科	だいこん	TuMV（カブモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
	はくさい ブロッコリー	TuMV（カブモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
	キャベツ カリフラワー	CaMV（カリフラワーモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		TuMV（カブモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止

※汁液伝染の＋＋は伝染力が強いことを示す。

野菜名（宿主名）		病原ウイルス（和　名）	伝染方法（汁液）	（種子）	（虫媒）	（土壌）	注意事項
キク科	レタス	LMV（レタスモザイクウイルス）	＋	＋	＋	－	アブラムシの寄生防止、種子消毒
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		MiLV（ミラフィオリレタスウイルス）	－	－	－	＋（下等菌類）	レタスビッグベイン病の病原ウイルス、土壌消毒
		LBVaV（レタスビッグベイン随伴ウイルス）	－	－	－	＋（下等菌類）	土壌消毒
セリ科	セルリー	CMV（キュウリモザイクウイルス）	－	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CeMV（セルリーモザイクウイルス）	－	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
	みつば	CMV（キュウリモザイクウイルス）	－	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		ZaMV（ミツバモザイクウイルス）	－	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
	にんじん	CeMV（セルリーモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CRLV（ニンジン黄化ウイルス）	－	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
アカザ科	ほうれんそう	CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		BBWV（ソラマメウイルトウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		BMV（ビートモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		TuMV（カブモザイクウイルス）	－	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
マメ科	えんどう そらまめ	MDV（レンゲ萎縮ウイルス）	＋＋	＋	－	＋	アブラムシの寄生防止
		BBWV2（ソラマメウイルトウイルス2）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		BBNV（ソラマメえそモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	連作を避ける。菌類による伝染？
		BYMV（インゲンマメ黄斑モザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		WMV（カボチャモザイクウイルス）	－	＋	＋	－	アブラムシの寄生防止
		LMV（レタスモザイクウイルス）	＋	＋	－	－	アブラムシの寄生防止（えんどうで発生）
		ClYVV（クローバ葉脈黄化ウイルス）	＋	＋	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CYV（クローバ萎黄ウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
	いんげん	BYMV（インゲンマメ黄斑モザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		BCMV（インゲンマメモザイクウイルス）	＋	＋	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		SDV（ダイズわい化ウイルス）	－	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
ユリ科	ねぎ たまねぎ	OYDV（タマネギ萎縮ウイルス）	－	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		GLV（ニンニク潜在ウイルス）	－	－	＋	－	アブラムシの寄生防止（ねぎで発生）
		IYSV（アイリスイエロースポットウイルス）	－	－	＋	－	ネギアザミウマの寄生防止
バラ科	いちご	SMoV（イチゴモットルウイルス）	＋	＋（子苗）	＋	－	無病苗の育成、アブラムシの寄生防止
		SCrV（イチゴクリンクルウイルス）	－	＋（子苗）	＋	－	無病苗の育成、アブラムシの寄生防止
		SMYEV（イチゴマイルドイエローエッジウイルス）	－	＋（子苗）	＋	－	無病苗の育成、アブラムシの寄生防止
		SVBV（イチゴベインバンディングウイルス）	－	＋（子苗）	＋	－	無病苗の育成、アブラムシの寄生防止
サトイモ科	さといも	DsMV（サトイモモザイクウイルス）	＋	＋（塊茎）	＋	－	種いも(塊茎)で伝染する
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋＋	＋	－	＋	アブラムシの寄生防止
ヒルガオ科	かんしょ	SPFMV（サツマイモ斑紋モザイクウイルス）	＋	＋（塊茎）	＋	－	種いも(塊根)で伝染する。帯状粗皮病を引き起こす系統(強毒系統)がある。
		SPV2（*Sweet Potato Virus 2*）	？	？	＋	？	アブラムシの寄生防止
イネ科	トウモロコシ[未成熟トウモロコシ]	SuMV（サトウキビモザイクウイルス）	－	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
ヤマノイモ科	やまのいも	CYNMV（ヤマノイモえそモザイクウイルス）	＋	＋（塊茎）	＋	－	アブラムシの寄生防止
		JYMV（ヤマノイモモザイクウイルス）	＋	＋（塊茎）	＋	－	アブラムシの寄生防止
ショウガ科	しょうが	CMV（キュウリモザイクウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
シソ科	しそ	BBWV（ソラマメウイルトウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止
		PeMV（シソ斑紋ウイルス）	＋	－	＋	－	アブラムシの寄生防止

※汁液伝染の＋＋は伝染力が強いことを示す。

(12) 野菜類除草剤等使用法

1) 野菜除草剤使用上の注意

① は種後処理とは、は種当日またはは種後2～3日以内を目安とする。
② 定植後処理とは、定植後7日目を目安とする。
③ 生育期処理については、各薬剤の処理時期の欄を参照する。
④ 処理ほ場の土壌条件は、散布前に均一に砕土し、降雨直後の過湿や過乾燥(白化)の状態を避ける(例としては、降雨後2日目くらいの湿り気が良い)。
⑤ 散布水量(希釈水量)は、土性、土壌表面の乾湿、砕土の密度や良否によって各薬剤ごとに提示された水量を基に加減する。
⑥ 重複散布は薬害発生の恐れがあるので避ける。
⑦ 散布器具は、作物への影響を避けるため、殺虫剤・殺菌剤防除用器具と区別し、除草剤専用器具を使用する(ホルモン系除草剤では特に区別が必要である)。
⑧ 散布液は必要最小限とし、残液は、環境保全のため河川や周辺へ廃棄しない。
⑨ 器具や空きビン等は、大量の水でよく洗う(洗い水は、圃場内に処理すること)。
⑩ 近年、同一除草剤の連用により、防除対象草種以外の雑草が多く残る状況が観察されている。特にアブラナ科雑草が残るとコナガなどの害虫の生息場所となるので、使用薬剤のローテーションに努めることが望ましい。

2)非選択性茎葉処理型を除く除草剤について

●薬剤の特性と適用草種

成分名	作用機構	適用雑草名	薬害の症状
トリフルラリン	非ホルモン型移行性除草剤で、主として幼根部から吸収され、細胞分裂を阻害する。	畑地一年生イネ科及び広葉雑草(ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く)	発芽障害、生育抑制、縮葉
ペンディメタリン	ジニトロアニリン系の非ホルモン吸収移行型除草剤で、雑草の発芽、発生時処理により、主として幼芽部から吸収され、生長点に細胞分裂・伸長を阻害することにより雑草を枯殺する。	畑地一年生雑草(キク科、ツユクサを除く)	出芽抑制、生育抑制、葉の稔転縮葉
アラクロール	非ホルモン型移行性除草剤で、 発芽時の雑草は、イネ科では主に幼芽から、広葉雑草では一般的に幼根部から吸収され、タンパク質合成阻害により幼少雑草を枯殺する。	畑地一年生イネ科雑草	生育抑制、白斑
ベンチオカーブ	非ホルモン型移行性除草剤で、根部、幼芽部、茎葉部などから吸収され、雑草体内を移行して生長点に作用する。作用機構はオーキシン活性阻害と蛋白合成阻害が主なものである。	畑地一年生イネ科及び広葉雑草	初期生育抑制
IPC	非ホルモン型移行性除草剤で、茎葉に付着してもほとんどの作用を現さない。幼根部から吸収され、細胞分裂や呼吸を阻害し、根の伸長を抑制して強い作用を示す。	スズメノテッポウ、スズメノカタビラなど冬生イネ科雑草 ハコベ、ノミノフスマ、タネツケバナ、ミチヤナギ、タデ類など	子葉の稔転、白斑
リニュロン	非ホルモン型移行性除草剤で、雑草の根部より吸収され光合成を阻害することにより、雑草の発芽・生育を停止され、枯死させる。	畑地一年生雑草イネ科及び広葉雑草	葉の黄化退色
シアナジン	雑草発生前土壌全面散布で土壌水とともに雑草の根部から吸収され、植物体内を移行して光合成を阻害し、雑草を枯死させる。発芽発生初期の雑草には、根部からと併せ、一部葉からも吸収され、雑草を枯死させる。	畑地一年生雑草	下葉の葉脈部黄化、下葉のクロロシス
セトキシジム	イネ科雑草の生長点の細胞に作用し、根部、基部、茎部から吸収され、光合成や呼吸作用には影響を与えず、主としてジメピペレートとオーキシンとの拮抗作用により成長点の細胞分裂、生育停止、枯死の過程を経て作用が発現する。	一年生雑草(スズメノカタビラを除く)	生長点枯死
ベンタゾン	非ホルモン型移行性除草剤で、根部、茎葉部のいずれからもよく吸収され葉に蓄積され、光合成作用を阻害して雑草を枯死させる。	畑地一年生雑草(イネ科を除く)	白化、生育阻害
アイオキシニル	非ホルモン型接触性除草剤で、光合成及び呼吸を阻害し、幼植物には非常に高い効果を示す。イネ科雑草に特異な選択性を持っている。	畑地一年生広葉雑草	生育抑制、葉の黄化
ブタミホス	雑草幼芽部より吸収され、微小管の形成阻害により細胞分裂阻害を起こし、生長点の細胞が肥大化し、葉鞘、葉身が短縮肥厚して生育を阻害する。	畑地一年生雑草(キク科、ツユクサを除く)	生育抑制
メトリブジン	非対称のトリアジン系除草剤で、葉緑体膜の電子伝達系阻害による光合成阻害により枯死させる。	畑地一年生雑草	葉の黄化退色
プロピザミド	成分が雑草の幼葉及び幼根から吸収され、それらの生長点まで移行して作用し、成長点の分化を抑制して枯死させる。	畑地一年生雑草(キク科、カヤツリグサ科を除く)	
クレトジム	茎葉散布により処理された薬剤は、雑草の生長点で生体膜での脂肪酸の合成系を阻害する。生体膜の機能が損なわれた雑草は、生育を停止し、次第に枯死する。脂肪酸の生合成酵素の働きを阻害する。	畑地一年生イネ科雑草	
ジメテナミド	非ホルモン型移行性除草剤で、雑草の幼芽部および幼根部より吸収され、雑草の蛋白合成を阻害することにより、雑草を枯死させる。	一年生イネ科、カヤツリグサ科雑草(アカザ科、アブラナ科、タデ科雑草を除く)	
メトラクロール	非ホルモン型吸収移行性除草剤で、主として雑草の幼芽部より吸収され幼芽部の伸長抑制、根の発生及び伸長を抑制し、最終的には雑草を枯殺する。	一年生イネ科雑草 カヤツリグサ科雑草	生育抑制、白斑
アシュラムナトリウム	酸アミド系の除草剤であり、葉酸の生成阻害により核酸合成が低下し、細胞分裂を停止させて枯死させる。	畑地一年生雑草および畑地多年生雑草(カヤツリグサ科、ヒユ科、アカザ科、ザクロソウ、ツユクサ、ギョウギシバを除く)	葉の黄化退色
キザロホップエチル	イネ科雑草の茎葉部及び根部から吸収され、植物体内を移行して生長点及び各部の分裂組織の細胞を破壊し、やがて全体を枯死させる。	一年生イネ科雑草(スズメノカタビラを除く)	

● 種類別除草剤使用法

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
きゅうり	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培(移植栽培))定植前(植穴掘前):全面土壌散布 (露地栽培(移植栽培))定植直後:畦間土壌散布 (露地栽培(直播栽培))は種直後:全面土壌散布	1回	200～250mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)地這栽培では使用しない。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培(移植栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 (露地栽培(直播栽培)) は種直後:全面土壌散布	1回	3～4kg	
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植後(雑草発生前)(但し定植10日後まで) :畦間、株間土壌散布 定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	
すいか	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(トンネル・マルチ栽培) 収穫45日前までの生育期(トンネル除去前) :畦間土壌散布 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壌散布 (露地栽培) 定植ｷｬｯﾌﾟ後(但し、収穫45日前まで):全面土壌散布	2回以内	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴掘前)(ﾏﾙﾁ前):全面土壌散布 (トンネル・マルチ栽培) 収穫45日前までの生育期(トンネル除去前) :畦間土壌散布	2回以内	2～4kg 4～5kg	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
メロン	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培(トンネル・マルチ栽培)) 収穫45日前までの生育期(トンネル除去前) :畦間土壌散布 定植前(植穴掘前)(マルチ前):全面土壌散布 (露地栽培) 定植ｷｬｯﾌﾟ後(但し、収穫45日前まで):全面土壌散布	2回以内	200～300mℓ (100ℓ) 150～200mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴掘前)(ﾏﾙﾁ前):全面土壌散布 (トンネル・マルチ栽培) 収穫45日前までの生育期(ﾄﾝﾈﾙ除去前) :畦間土壌散布	2回以内	2～3kg 4～5kg	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	
トマト	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培) 定植前(植穴堀前):全面土壌散布	1回	4～5kg	
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植活着後(雑草発生前)(但し定植10日後まで) :畦間、株間土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	センコル水和剤 (メトリブジン 50)	(露地栽培)　:畦間株間散布 定植活着後～定植14日後まで(雑草発生前～2、3葉期)	1回	60～100g (100ℓ)	(1)土壌の乾燥が続く場合には土壌散布は効果が低下するので、雑草の発生後に散布する。
ミニトマト	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	4～5kg	
なす	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが気化して薬害のおそれがあるので注意する。 (3)定植前は、定植3日前までに散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地栽培) 定植前(植穴堀前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	4～5kg	

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
なす	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前又は定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
ピーマン	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
いちご	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	(親株床、子苗床、本圃、施設栽培) 植付後又は定植後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで) :全面土壌散布又は株間土壌散布	2回以内	150～200mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植活着後(但し定植7日後まで) :株間土壌散布	1回	150～200mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
だいこん	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) は種直後:全面土壌散布	1回	150～200mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)露地栽培(無マルチ)で使用する。
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後:全面土壌散布	1回	150mℓ (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ) 200mℓ (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3～5葉期)(収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50～75mℓ (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
キャベツ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(移植栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布 (直播栽培) は種直後:全面土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)直播栽培では、露地栽培(無マルチ)で使用する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(移植栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	4～6kg	
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (70～150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	定植前又は定植後～定植翌日(雑草発生前) :全面土壌散布	1回	4～5kg	
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	定植8日後まで:全面土壌散布	1回	150～200mℓ (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植前～定植直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ペンディメタリン 1.2)	定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前～発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	定植後雑草発生前(定植後10日まで) :全面土壌散布	1回	50～75mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	定植直後雑草発生前:全面土壌処理	1回	200～300g (100ℓ)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植後(但し収穫60日前まで):株間土壌散布	1回	150～300mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	定植直後～定植15日後まで(雑草発生前) 畦間株間土壌散布	1回	40～60mℓ (70～100ℓ)	(1)広葉雑草(特にアカザ科)には効果が劣るので、イネ科雑草優占圃場で使用する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ) 200mℓ (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
キャベツ	ポルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草の3～8葉期)収穫30日前まで :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	200mℓ (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3～5葉期)(収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50～75mℓ (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
ブロッコリー	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(移植栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	4～6kg	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前) :全面土壌散布	1回	200mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	定植後雑草発生前(但し、定植14日後まで) :全面土壌処理	1回	200～300g (100ℓ)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫7日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
		雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫7日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。		200mℓ (100ℓ)	
	フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	定植後雑草発生前(収穫30日前まで) :全面土壌散布	1回	50～75mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。
はくさい	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(移植栽培)定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布 (直播栽培)は種直後:全面土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)直播栽培では、露地栽培(無マルチ)で使用する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(移植栽培)定植前(植穴堀前):全面土壌散布 (直播栽培)は種直後:全面土壌散布	1回	4～6kg 3～5kg	
	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)極端な浅植えや深植えをしたセル成型苗には薬害を生ずるおそれがあるので注意すること。
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～300mℓ (70～150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後:全面土壌散布	1回	150mℓ (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ペンディメタリン 1.2)	定植前(植穴掘前):全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前～発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ポルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草の3～8葉期)収穫21日前まで :雑草茎葉散布	1回	200mℓ (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
		雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。		200mℓ (100ℓ)	
ほうれんそう	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後:全面土壌散布	1回	150mℓ (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	アージラン液剤 (アシュラムナトリウム 37)	は種後～子葉展開期:全面土壌散布	1回	秋播き 600～800mℓ (100～200ℓ) 春～初夏播き 800～1,000mℓ 但し、芽出し播きは800mℓ (100～200ℓ)	(1)カヤツリグサ科には効果が劣る。 (2)砂土での土壌処理は発芽前雑草に対して残効性が劣る。
	クロロIPC (IPC 45.8)	は種直後:全面土壌散布	1回	100～200mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫7日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
レタス	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが気化して薬害のおそれがあるので注意する。 (3)6葉展開期以前では薬害を生ずるおそれがあるため使用しない。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴堀前)(マルチ前):全面土壌散布	1回	3～4kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)定植5日前までに散布する。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
レタス	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)極端な浅植えや深植えをしたセル成型苗は薬害を生ずるおそれがあるので注意する。
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (70～150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植前又は定植・マルチ前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	(秋播栽培)は種覆土後(雑草発生前)(但し、は種14日後まで)、定植前、定植後雑草発生前 (但し、定植14日後まで) :全面土壌処理 (春播栽培)定植前、定植後雑草発生前(但し、定植14日後まで):全面土壌処理	1回	200～300g (70～100ℓ)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植活着後(但し、収穫60日前まで) 株間土壌散布	1回	300～500mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫7日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
非結球レタス	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 定植直後:畦間土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)トンネル栽培ではトリフルラリンが気化して薬害のおそれがあるので注意する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(トンネル・マルチ栽培) 定植前(植穴堀前)(マルチ前):全面土壌散布	1回	3～4kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)定植5日前までに散布する。
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植活着後(但し、収穫60日前まで):株間土壌散布	1回	300～500mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (70～150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科とツユクサには効果が劣る。
ねぎ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	定植後雑草発生前(但し、収穫30日前まで):全面土壌散布	2回以内	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)対象はツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	定植後雑草発生前(但し、収穫30日前まで):全面土壌散布	2回以内	4～5kg	
	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	定植後(雑草発生前(但し、定植10日後まで):全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)極端な浅植えや深植えをしたセル成型苗は薬害を生ずるおそれがあるので注意する。
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	定植後(雑草発生前)(但し、定植10日後まで):全面土壌散布	1回	200～300mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科と広葉一年生雑草に有効で、キク科とツユクサには効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	定植活着後(雑草発生前)(但し、定植10日後まで) :全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	定植活着後(雑草発生前)(但し、定植10日後まで) :全面土壌散布	1回	4～6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ペンディメタリン 1.2)	定植直後:全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前～発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100ℓ) 200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3～5葉期)(収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50～75mℓ (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
たまねぎ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(本畑)定植後(但し収穫75日前まで) :全面土壌散布	2回以内	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草を対象に実施する。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	定植前(植穴掘前):全面土壌散布 (本畑)生育期(春期)(但し、収穫75日前まで):畝間土壌散布 (本畑)定植後(但し、収穫75日前まで):全面土壌散布	2回以内	4～5kg	
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	(移植栽培)定植前(雑草発生前)又は定植後(雑草発生前)(但し収穫30日前まで):全面土壌散布 (直播栽培)は種後～本葉2葉期(雑草発生前):全面土壌散布	1回	300～500mℓ (70～100ℓ) 200～400mℓ (70～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2.0)	(秋播マルチ栽培)定植前(マルチ前):全面土壌散布 (秋播栽培)定植後又は生育期(雑草発生前) (但し収穫30日前まで):全面土壌散布 (春播栽培)定植後(雑草発生前)(但し収穫30日前まで) :全面土壌散布	1回	5～6kg	
	クロロIPC (IPC 45.8)	定植活着後又は中耕後(但し収穫30日前まで) :全面土壌散布	2回以内	200～300mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
たまねぎ	グラメックス水和剤 (シアナジン 50)	(移植栽培)定植活着後(雑草発生前)(収穫30日前まで) :全面土壌散布	1回	50～200g (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する (2)ツユクサには効果が劣る。
		(直播栽培)は種後出芽前(雑草発生前):全面土壌散布		75～100g (100ℓ)	
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	(春播、秋播)定植後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで) :全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)乳剤を秋播で春季処理すると薬害が生ずるおそれがあるため使用しない。 (3)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	(春播)定植後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで) :全面土壌散布	1回	5～7kg	
		(秋播)定植後又は春季の雑草発生前(但し収穫60日前まで):全面土壌散布	1回	4～6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ペンディメタリン 1.2)	定植後(但し、収穫75日前まで):全面土壌散布 (露地マルチ栽培) 定植前(マルチ前):全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前～発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	(春播栽培)定植後雑草発生前(但し、収穫45日前まで) :全面土壌処理	2回以内	200～300g (100ℓ)	(1)一年生イネ科雑草が対象。
		(春播栽培)定植後雑草発生前(但し、収穫45日前まで) :全面土壌処理		300g (100ℓ)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
		(秋播栽培)定植後雑草発生前(但し、収穫45日前まで) :全面土壌処理		200～300g (100ℓ)	
	アクチノールB乳剤 (アイオキシニル 30)	(秋播移植栽培)早春期但し収穫30日前まで(雑草生育初期):雑草茎葉散布又は全面散布	2回以内	100～200mℓ (70～100ℓ)	(1)展着剤は加用しない。 (2)イネ科雑草及びコニシキソウには効果が劣る。
		(春播移植栽培)生育期但し収穫30日前まで(雑草生育初期):雑草茎葉散布又は全面散布		100～150mℓ (70～100ℓ)	
		(直播栽培)生育期(たまねぎ1葉期以降)～倒伏始期まで(雑草1～2葉期まで)(但し収穫30日前まで)	3回以内	30～50m (70～100ℓ)	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメカタビラを除く。	2回以内	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
		雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。		200mℓ (100～150ℓ)	
	バサグラン液剤 (ベンタゾン 40)	(春播移植栽培)移植後6月上旬まで(但し収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布 (秋播移植栽培)移植後生葉4葉期まで(但し収穫30日前まで):雑草茎葉散布又は全面散布	1回	60～120mℓ (70～100ℓ)	(1)イネ科雑草には効果がない。 (2)生葉4葉期までに散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3～5葉期)(収穫21日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布	3回以内	50～75mℓ (100ℓ)	(1)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	ポルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草3～8葉期)(但し収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	2回以内	200～300mℓ (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	モーティブ乳剤 (ジメテナミドP 19.7) (ペンディメタリン 23.1)	定植前(雑草発生前)又は定植後(雑草発生前)(但し、定植45日後まで):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100ℓ)	(1)散布直後の多量の降雨は薬害のおそれがあるので、天候を見きわめて散布する。
	フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	50～75mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。
		定植後雑草発生前(定植後30日まで) :全面土壌散布		75～120mℓ (100ℓ)	
ごぼう	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培) は種直後:全面土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草が対象。
	アグロマックス水和剤 (プロピザミド 50)	は種後発芽前 雑草発生前:全面土壌散布	1回	(べたがけ栽培) 100～200g (100ℓ)	(1)キク科、カヤツリグサには効果が劣る。
				200～300g (100ℓ)	
	クロロIPC (IPC 45.8)	は種直後:全面土壌散布	1回	200～500mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
		雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。		200mℓ (100ℓ)	
にんじん	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	は種直後:全面土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草が対象
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	は種直後:全面土壌散布	1回	4～6kg	
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	は種後出芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (70～150ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	は種後出芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～5kg	

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
にんじん	ロロックス (リニュロン 50)	にんじん3～5葉期(雑草発生始期)(但し、収穫30日前まで)、は種直後:全面土壌散布	1回	100～150g 100～200g (70～150ℓ)	(1)雑草発生始期に使用する。 (2)砂土では使用しない。 (3)高温時には使用しない。
	ロロックス粒剤 (リニュロン 1.5)	は種直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	
	クロロIPC (IPC 45.8)	は種直後(高温時除く):全面土壌散布	1回	300～600mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	は種後発芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	は種後発芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	
	カイタック乳剤 (ペンディメタリン 15) (リニュロン 10)	は種直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	300～500mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)スズメノテッポウやキク科雑草が多発する圃場では登録の範囲内で多めの薬量で使用する。
	カイタック細粒剤F (ペンディメタリン 1.5) (リニュロン 1.0)	は種直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	3～5kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ペンディメタリン 1.2)	は種直後:全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前～発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	クリアターン乳剤 (ベンチオカーブ 50) (ペンディメタリン 5.0) (リニュロン 7.5)	は種直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	500～700mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草の発生前に散布する。 (2)マルチ栽培では薬害を生じる恐れがあるので使用しない。
	クリアターン細粒剤F (ベンチオカーブ 8.0) (ペンディメタリン 0.8) (リニュロン 1.2)	は種直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～5kg	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ) 200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3～5葉期)収穫40日前まで :雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50～75mℓ (100ℓ)	(1)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	ポルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草3～8葉期)(但し収穫45日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注意する。
さといも	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	植付後 (但し、植付7日後まで):全面土壌散布	1回	300～400mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草が対象
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	植付後(但し、植付7日後まで):全面土壌散布	1回	4～6kg	
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布 土寄せ後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで) :全面土壌散布	1回	200～400mℓ (70～100ℓ) 200～400mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	植付前(雑草発生前)又は植付後萌芽前(雑草発生前) :全面土壌散布 土寄せ後(雑草発生前)(但し収穫60日前まで) :全面土壌散布	1回	4～6kg	
	ロロックス (リニュロン 50)	植付直後:全面土壌散布	1回	100～200g (70～150ℓ)	(1)雑草発生前～発芽始期に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ペンディメタリン 1.2)	植付直後:全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前～発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	クリアターン細粒剤F (ベンチオカーブ 8.0) (ペンディメタリン 0.8) (リニュロン 1.2)	植付後～萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～5kg	(1)雑草の発生前に散布する。 (2)マルチ栽培では薬害を生じる恐れがあるので使用しない。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
さといも	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	70～130mℓ (70～100ℓ)	(1)一年生雑草が対象。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
ばれいしょ	ラクサー乳剤 (アラクロール 30.0) (リニュロン 12.0)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	400～600mℓ (100ℓ)	
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	植付後～萌芽前:全面土壌散布	1回	4～5kg	(1)雑草発生前に散布する。
	ロロックス (リニュロン 50)	植付直後～萌芽前:全面土壌散布	1回	100～200g (70～150ℓ)	(1)雑草始期に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	5～6kg	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期但し収穫前日まで :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	2回以内	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
		雑草生育期イネ科雑草6～8葉期但し収穫前日まで :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。		200mℓ (100ℓ)	
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～300mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2.0)	(マルチ栽培を除く) 植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布 (マルチ栽培) 植付後マルチ前(但し、萌芽前まで) (雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	
	クリアターン乳剤 (ベンチオカーブ 50) (ペンディメタリン 5.0) (リニュロン 7.5)	植付後～萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	600～800mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)マルチ栽培では薬害を生じる恐れがあるので使用しない。
	クリアターン細粒剤F (ベンチオカーブ 8.0) (ペンディメタリン 0.8) (リニュロン 1.2)	植付後～萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～5kg	
	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	100～130mℓ (70～100ℓ)	(1)一年生雑草が対象。
	グラメックス水和剤 (シアナジン 50)	植付後萌芽前:全面土壌散布	1回	100～300g (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサには効果が劣る。
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ペンディメタリン 1.2)	植付後～萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前～発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	植付後(雑草発生前)(但し、植付14日後まで) 全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3～5葉期)(収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50～75mℓ (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	植付後萌芽前(雑草発生前) :全面土壌散布	1回	75～120mℓ (70～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。
かんしょ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	挿苗前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草が対象。
		挿苗後雑草発生前(但し、収穫60日前まで):畦間土壌散布			
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	挿苗前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	3～4kg	
		挿苗後(雑草発生前)(但し、収穫60日前まで) :畦間土壌散布又は畝間土壌散布	2回以内		
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	挿苗後(雑草発生前)挿苗3日後まで:全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	挿苗後(雑草発生前、収穫90日前まで):全面土壌散布	1回	70～130mℓ (70～100ℓ)	(1)一年生雑草が対象。
		マルチ前、挿苗前(雑草発生前、収穫90日前まで) :全面土壌散布			
	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	挿苗後(雑草発生前)(但し収穫90日前まで):全面土壌散布	2回以内	300ml (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
	ロロックス (リニュロン 50)	種いも植付後萌芽前まで:全面土壌散布	1回	200g (70～150ℓ)	(1)雑草発生前～発芽始期に使用する。 (2)砂土では使用しない。
		苗移植前まで:全面土壌散布		150～200g (70～150ℓ)	
		生育期(但し収穫45日前まで)(雑草生育期) :雑草茎葉兼土壌処理(畦間処理)		100～200g (70～150ℓ)	

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
かんしょ	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ) 200mℓ (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	ポルトフロアブル (キザロホップエチル 7)	雑草生育期(イネ科雑草3～10葉期)(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3～5葉期)(収穫100日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布	1回	50～75mℓ (100ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
やまのいも	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	植付直後:全面土壌散布 生育初期(但し、植付30日後まで):畦間土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草が対象。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	植付直後:全面土壌散布 生育初期(但し、植付30日後まで):畦間土壌散布	1回	4～6kg	
	ロロックス (リニュロン 50)	植付直後:全面土壌散布 生育期(但し収穫60日前まで)(雑草発生前～発生揃期) :畦間土壌散布	2回以内	100～200g (70～150ℓ)	
	ロロックス粒剤 (リニュロン 1.5)	植付直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	6kg	(1)雑草発生前に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効で、キク科とツユクサには効果が劣る。
	クレマートU粒剤 (ブタミホス 3.0)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサ には効果が劣る。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	植付後萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	
	カイタック乳剤 (ペンディメタリン 15) (リニュロン 10)	植付後～萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	400～600mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)スズメノテッポウやキク科雑草が多発する圃場では登録の範囲内で多めの薬量で使用する。
	カイタック細粒剤F (ペンディメタリン 1.5) (リニュロン 1.0)	植付後～萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	
	コンボラル (トリフルラリン 1.2) (ペンディメタリン 1.2)	植付後～萌芽前(但し、植付後30日まで):全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前～発芽時に散布する。 (2)キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫60日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。 雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫60日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ) 200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
	ポルトフロアブル (キザロホップエチル 7.0)	雑草生育期(イネ科雑草3～8葉期)(但し収穫7日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注意する。
えだまめ	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	は種後出芽前:全面土壌散布 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 生育期(但し収穫45日前まで):畦間土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草が対象。 (3)マルチ栽培では使用しない。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	は種後発芽前:全面土壌散布 定植前(植穴掘前):全面土壌散布 生育期(但し収穫45日前まで):畦間土壌散布	1回	4～6kg	
	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	(直播栽培) は種後出芽前(雑草発生前):全面土壌散布 (移植栽培) 定植前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	70～130mℓ (70～100ℓ)	(1)一年生雑草が対象。
	クリアターン乳剤 (ベンチオカーブ 50) (ペンディメタリン 5.0) (リニュロン 7.5)	は種直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	500～800mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草の発生前に散布する。 (2)マルチ栽培では薬害を生じる恐れがあるので使用しない
		定植3日前まで(雑草発生前):全面土壌散布	1回	500～700mℓ (70～100ℓ)	
	クリアターン細粒剤F (ベンチオカーブ 8.0) (ペンディメタリン 0.8) (リニュロン 1.2)	は種直後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～5kg	
	ロロックス (リニュロン 50)	は種直後～出芽前(雑草発生前～発生始期):全面土壌散布 本葉3葉期以降(雑草生育期)(但し収穫30日前まで):雑草茎葉兼土壌散布(畦間・株間処理)	1回	100～200g (70～150ℓ)	(1)雑草発生前～発生揃期に使用する。 (2)砂土では使用しない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
えだまめ	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(収穫14日前まで):雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	35～50mℓ (100ℓ)	(1)イネ科作物に飛散しないように注意する。
		雑草生育期イネ科雑草5～8葉期(収穫14日前まで):雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	50～75mℓ (100ℓ)	
		雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(収穫14日前まで):雑草茎葉散布又は全面散布。		50～75mℓ (100ℓ)	(1)スズメノカタビラ対策として実施する。
	ポルトフロアブル (キザロホップエチル 7.0)	雑草生育期(イネ科雑草3～8葉期)(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)広葉雑草及びカヤツリグサ科雑草には効果が期待できない。 (2)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	フィールドスターP乳剤 (ジメテナミドP 64.0)	は種後出芽前(雑草発生前) :全面土壌散布	1回	75～120mℓ (70～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)アカザ科、タデ科、アブラナ科などの一部広葉雑草には効果が劣る。
さやえんどう	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培)は種直後:全面土壌散布	1回	300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草が対象。
	バサグラン液剤 (ペンタゾンナトリウム塩 40.0)	3～6葉期但し収穫40日前まで:雑草茎葉散布又は全面散布	1回	100～200g (70～100ℓ)	(1)イネ科雑草には効果がない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで):雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
実えんどう	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地栽培)は種直後:全面土壌散布	1回	300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草が対象。
	バサグラン液剤 (ペンタゾンナトリウム塩 40.0)	3～6葉期但し収穫40日前まで:雑草茎葉散布又は全面散布	1回	100～200g (70～100ℓ)	(1)イネ科雑草には効果がない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫30日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
さやいんげん	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	(露地・マルチ栽培)は種前(マルチ前):全面土壌散布 (露地栽培)は種直後:全面土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草が対象。
	トレファノサイド粒剤2.5 (トリフルラリン 2.5)	(露地・マルチ栽培)は種前(マルチ前):全面土壌散布 (露地栽培)は種直後:全面土壌散布	1回	4～6kg	
	デュアールゴールド (S-メトラクロール 83.7)	は種後出芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	70～130mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)砂土では使用しない。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	2回以内	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
		雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。		200mℓ (100～150ℓ)	
未成熟そらまめ	クロロIPC (IPC 45.8)	中耕培土後(但し、収穫60日前まで):全面土壌散布	1回	200mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
アスパラガス	センコル水和剤 (メトリブジン 50)	萌芽前～萌芽始期又は収穫打切り後(雑草発生前～4､5葉期):雑草茎葉散布又は全面土壌散布	1回	100～150g (100ℓ)	(1)収穫打切り後に使用する場合は、培土崩し後または中耕後に散布する。
	グラメックス水和剤 (シアナジン 50)	萌芽前又は収穫後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	100～200g (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサには効果が劣る。
	ロロックス (リニュロン 50)	萌芽前(雑草発生前～発生始期):全面土壌散布	1回	150～200g (70～150ℓ)	(1)雑草発生前～発芽始期に使用する。 (2)砂土では使用しない。
		萌芽始期(但し収穫前日まで)(雑草発生前～発生始期):全面土壌散布		150～200g (100～150ℓ)	
		生育期(但し収穫前日まで)(雑草生育期):雑草茎葉兼土壌散布(畝間・株間処理)		150～200g (100ℓ)	
	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	萌芽前又は収穫打切後(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～300mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草が対象。
	クレマート乳剤 (ブタミホス 50)	萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (100～150ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)多年生雑草、キク科雑草及びツユクサには効果が劣る。
アスパラガス	ゴーゴーサン細粒剤F (ペンディメタリン 2)	萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	4～6kg	(1)雑草発生前に有効である。 (2)イネ科及び広葉一年生雑草に有効であるが、キク科雑草とツユクサには効果が劣る。
	ゴーゴーサン乳剤 (ペンディメタリン 30)	萌芽前(雑草発生前):全面土壌散布	1回	200～400mℓ (70～150ℓ)	
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫前日まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
		雑草生育期イネ科雑草6～8葉期(但し収穫前日まで) :雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。		200mℓ (100ℓ)	

作物名	農薬名 (成分名及び含量%)	使用時期及び使用方法	本剤の使用回数	使用量/10a (使用水量/10a)	使用上の注意
アスパラガス	セレクト乳剤 (クレトジム 24)	雑草生育期(イネ科雑草3～5葉期)収穫前日まで:雑草茎葉散布又は全面散布	2回以内	50～75mℓ (100ℓ)	(1)イネ科作物に飛散しないように注意する。
	クロロIPC (IPC 45.8)	(苗床)は種直後:全面土壌散布	1回	200～300mℓ (70～100ℓ)	(1)雑草発芽前後又は発芽始期に散布する。 (2)気温20℃以下の時期に使用する。
		(定植畑)培土後雑草発生前(但し、収穫30日前まで) :全面土壌散布		250～300mℓ (70～100ℓ)	
こまつな	ラッソー乳剤 (アラクロール 43)	は種直後:全面土壌散布	1回	50～100mℓ (100ℓ)	(1)タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。
豆類(未成熟)	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫14日前まで):雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。
非結球あぶらな科葉菜類	トレファノサイド乳剤 (トリフルラリン 44.5)	は種直後:全面土壌散布	1回	150～200mℓ (100ℓ)	(1)雑草発生前に散布する。 (2)ツユクサ科、カヤツリグサ科、キク科、アブラナ科を除く一年生雑草が対象。
	ナブ乳剤 (セトキシジム 20)	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期(但し収穫7日前まで):雑草茎葉散布又は全面散布。但し、スズメノカタビラを除く。	1回	150～200mℓ (100～150ℓ)	(1)イネ科雑草の発生後に散布する。

3) 非選択性茎葉処理型除草剤による畦間処理について

●使用上の注意

① 土壌に落下すると速やかに不活性化し、効果がないので、薬液が雑草の茎葉にかかるように散布する。
② 農作物や有用植物に薬液が付着すると、激しい薬害が生ずるので、かからないよう十分注意する。特に、野菜類の生育期畦間散布で使用する場合は、作物にかからないように十分注意して散布する。
③ 付着面積を確保するため、処理前は雑草の茎葉部を刈り払わない。
④ 処理後は、効果の完成まで日数を要するので、その間は、刈り払ったり耕起したりしない。
⑤ 散布後降雨が予想される場合は、使用を避ける。

●薬剤の特性と適用草種

農薬名	成分名	作用機構	適用雑草名	薬害の症状
バスタ液剤	グルホシネート 18.5%	茎葉部から吸収され、グルタミン酸とアンモニアの結合に触媒として作用するグルタミン合成酵素の活性を阻害するため、細胞内にアンモニアが異常蓄積される。その為植物細胞の諸生理代謝が阻害され、植物は枯死に至る。	一年生雑草	褐変、落葉
ザクサ液剤	グルホシネートPナトリウム塩 11.5%	茎葉から吸収され、グルタミン酸とアンモニアからグルタミンを合成する酵素の働きを阻害することで、植物体に蓄積された高濃度のアンモニアによる機能阻害、光合成阻害などにより雑草を枯死させる。	一年生雑草	枯死
草枯らしMIC	グリホサートイソプロピルアミン塩 41.0%	芳香族アミノ酸の生合成を阻害し植物組織を破壊する。茎葉から吸収され地下部まで移行し枯死させる。	一年生雑草	黄化、枯死
クサクリーン液剤	グリホサートイソプロピルアミン塩 41.0%			
サンフーロン液剤	グリホサートイソプロピルアミン塩 41.0%			
ラウンドアップマックスロード	グリホサートカリウム塩 48.0%	非選択性の茎葉処理除草剤でアミノ酸生合成の阻害作用により殺草作用を示す。従来剤よりも雑草への吸収量・吸収速度を高めた新製剤。	一年生雑草	黄化、枯死
タッチダウンiQ	グリホサートカリウム塩 43.0%			

●種類別除草剤使用法(雑草茎葉散布)

作物名	農薬名	使用時期	本剤の使用回数	使用量/10a	使用水量/10a
きゅうり	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前まで(雑草生育期)	2回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ
					少量散布 5～50ℓ
		収穫前日まで(雑草生育期:畦間処理)			通常散布50～100ℓ
					少量散布 25～50ℓ
	タッチダウンiQ	耕起7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～50ℓ
		収穫前日まで(畦間処理:雑草生育期:草丈30cm以下)	3回以内		25～100ℓ
かぼちゃ	バスタ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
すいか	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
メロン	バスタ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
トマト	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前まで(雑草生育期)	1回	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ
					少量散布 5～50ℓ
	タッチダウンiQ	耕起7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～50ℓ
		収穫前日まで(畦間処理:雑草生育期:草丈30cm以下)	3回以内		25～100ℓ
ミニトマト	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
なす	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前まで(雑草生育期)	2回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ
					少量散布 5～50ℓ
		収穫前日まで(雑草生育期:畦間処理)			通常散布50～100ℓ
					少量散布 25～50ℓ
	タッチダウンiQ	耕起7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～50ℓ
		収穫前日まで(畦間処理:雑草生育期:草丈30cm以下)	3回以内		25～100ℓ
ピーマン	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前まで(雑草生育期)	2回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ
					少量散布 5～50ℓ
		収穫前日まで(雑草生育期:畦間処理)			通常散布50～100ℓ
					少量散布 25～50ℓ
とうがらし類	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前まで(雑草生育期)	2回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ
					少量散布 5～50ℓ
		収穫前日まで(雑草生育期:畦間処理)			通常散布50～100ℓ
					少量散布 25～50ℓ
いちご	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ

作物名	農薬名	使用時期	本剤の使用回数	使用量/10a	使用水量/10a
だいこん	バスタ液剤	収穫45日前まで(雑草生育期耕起前・は種前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫45日前まで(雑草生育期:畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	タッチダウンiQ	耕起又はは種7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～50ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前又はは種前まで(雑草生育期)	2回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ
		収穫5日前まで(雑草生育期:畦間処理)			通常散布50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ
	草枯らしMIC	耕起又はは種7日前まで(雑草生育期)	1回	250～500mℓ	100ℓ
	クサクリーン液剤	耕起又はは種7日前まで(雑草生育期)	1回	250～500mℓ	100ℓ
キャベツ	バスタ液剤	収穫45日前まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫45日前まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	タッチダウンiQ	耕起又は定植7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～50ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前又は定植5日前まで(雑草生育期)	1回	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ
	草枯らしMIC	耕起又は定植7日前まで(雑草生育期)	1回	250～500mℓ	100ℓ
	クサクリーン液剤	耕起又は定殖7日前まで(雑草生育期)	1回	250～500mℓ	100ℓ
ブロッコリー	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
はくさい	バスタ液剤	収穫45日前まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫45日前まで(雑草生育期は種・定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	タッチダウンiQ	耕起又は定植7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～50ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前又は定植5日前まで(雑草生育期)	1回	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ
ほうれんそう	バスタ液剤	収穫7日前まで(雑草生育期耕起前・は種前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫7日前まで(雑草生育期は種前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	タッチダウンiQ	耕起又はは種7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	2回以内	250～500mℓ	25～50ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前又はは種前まで(雑草生育期)	3回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ
レタス	バスタ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	タッチダウンiQ	耕起又は定植7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	2回以内	250～500mℓ	25～50ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前又は定植5日前まで(雑草生育期)	3回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ
非結球レタス	バスタ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
たまねぎ	ラウンドアップマックスロード	(秋播、春播)耕起5日前まで(雑草生育期)	3回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ
		(秋播、春播)収穫7日前まで(雑草生育期:畦間処理)			通常散布50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ
		(春播:スギナ)耕起又は定植14日前まで(スギナ生育期)		1,500～2,000mℓ	
	草枯らしMIC	耕起又は定植7日前まで(雑草生育期)	3回以内	250～500mℓ	通常散布50～100ℓ
		定植後畦間処理(収穫30日前まで)(雑草生育期)			少量散布 25～50ℓ
	クサクリーン液剤	耕起又は定植7日前まで(雑草生育期)	3回以内	250～500mℓ	通常散布50～100ℓ
		定植後畦間処理(収穫30日前まで)(雑草生育期)			少量散布 25～50ℓ
	サンフーロン液剤	耕起7日前まで(雑草生育期:草丈30cm以下)	3回以内	250～500mℓ	100ℓ
		耕起又は定植7日前まで(雑草生育期:草丈30cm以下)		250～500mℓ	少量散布 25～50ℓ
	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫7日前まで(雑草生育期は種前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	タッチダウンiQ	耕起7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	3回以内	250～500mℓ	25～50ℓ
		畦間処理:雑草生育期(草丈30cm以下)(但し、収穫7日前まで)			
ねぎ	ラウンドアップマックスロード	耕起前又は定植5日前まで(雑草生育期)	3回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ
		収穫30日前まで(雑草生育期:定植後畦間処理)			通常散布50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ
	草枯らしMIC	耕起又は定植7日前まで(雑草生育期)	3回以内	250～500mℓ	通常散布50～100ℓ
		定植後畦間処理(収穫30日前まで)(雑草生育期)			少量散布 25～50ℓ
	クサクリーン液剤	耕起又は定植7日前まで(雑草生育期)	3回以内	250～500mℓ	通常散布50～100ℓ
		定植後畦間処理(収穫30日前まで)(雑草生育期)			少量散布 25～50ℓ
	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期定植前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	タッチダウンiQ	耕起又は定植7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	3回以内	250～500mℓ	25～50ℓ
		畦間処理:雑草生育期(草丈30cm以下)(但し、収穫7日前まで)			25～100ℓ
ごぼう	バスタ液剤	収穫前日まで雑草生育期耕起前・は種前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期は種前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
にんじん	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・は種前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫7日前まで(雑草生育期は種前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	タッチダウンiQ	耕起又は定植7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	2回以内	250～500mℓ	25～50ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前又はは種前まで(雑草生育期)	2回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ

作物名	農薬名	使用時期	本剤の使用回数	使用量/10a	使用水量/10a
さといも	バスタ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期耕起前・植付け前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期植付け前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前又は植付前まで(雑草生育期)	1回	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ
	タッチダウンiQ	耕起7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～50ℓ
ばれいしょ	バスタ液剤	雑草生育期耕起前・植付前又は植付後萌芽直前	1回	100～200mℓ	100～150ℓ
		収穫21日前まで(畦間処理:雑草生育期)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	雑草生育期萌芽前処理	1回	100～200mℓ	100～150ℓ
		収穫21日前まで(雑草生育期畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	
	タッチダウンiQ	植付け後萌芽前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～100ℓ
		耕起又は植付前(雑草生育期:草丈30cm以下)			25～50ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前又は植付前まで(雑草生育期)	1回	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ
かんしょ	バスタ液剤	収穫14日前まで(雑草生育期耕起前・挿苗前又は畦間処理)	2回以内	200～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期挿苗前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	タッチダウンiQ	耕起7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～100ℓ
	草枯らしMIC	耕起又は挿苗7日前まで(雑草生育期)	1回	250～500mℓ	100ℓ
	クサクリーン液剤	耕起又は挿苗7日前まで(雑草生育期)	1回	250～500mℓ	100ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前又は挿苗前まで(雑草生育期)	2回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ
		収穫60日前まで(雑草生育期:畦間処理)			少量散布 25～50ℓ
やまのいも	バスタ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期耕起前・植付け前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫30日前まで(雑草生育期畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前又は植付前まで(雑草生育期)	1回	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ
	タッチダウンiQ	耕起7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～50ℓ
えだまめ	バスタ液剤	雑草生育期耕起前・は種前・は種後出芽前・定植5日前まで	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
		収穫前日まで(畦間処理:雑草生育期)			
	ザクサ液剤	収穫14日前まで(雑草生育期 は種・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	タッチダウンiQ	耕起7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～50ℓ
	草枯らしMIC	は種7日前まで(雑草生育期)	1回	250～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ
	クサクリーン液剤	は種7日前まで(雑草生育期)	1回	250～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ
	サンフーロン液剤	耕起7日前まで(雑草生育期:草丈30cm以下)	3回以内	250～500mℓ	100ℓ
		は種後出芽前(雑草生育期:草丈30cm以下)		250～500mℓ	少量散布 25～50ℓ
	ラウンドアップマックスロード	耕起前又は出芽前まで(雑草生育期)	3回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ
		収穫前日まで(雑草生育期:畦間処理)	2回以内		通常散布50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ
未成熟そらまめ	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・は種前・定植前又は畝間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期 は種・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
さやえんどう	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・は種前・定植前又は畝間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期 は種・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
実えんどう	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・は種前・定植前又は畝間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期 は種・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
さやいんげん	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・は種前・定植前又は畝間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
	ザクサ液剤	収穫前日まで(雑草生育期 は種・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
アスパラガス	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期萌芽前又は畦間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
		収穫打切り後(雑草生育期)			
	ザクサ液剤	萌芽前(雑草生育期)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
		収穫前日まで(雑草生育期 畦間処理)			
		収穫打切り後(雑草生育期)		500mℓ	
	ラウンドアップマックスロード	耕起前まで(雑草生育期)	1回	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布25～50ℓ
		収穫前日まで(雑草生育期:畦間処理)	2回以内		
		(スギナ)収穫前日まで(雑草生育期:畦間処理)		1,500～2,000mℓ	
	タッチダウンiQ	耕起7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	3回以内	250～500mℓ	25～50ℓ
		萌芽前または収穫打切り後(雑草生育期:草丈30cm以下)		500～1,000mℓ スギナ1,000mℓ	25～100ℓ
		(スギナ)畝間処理:雑草生育期(但し、収穫前日まで)		1,500～2,000mℓ	25～50ℓ
オクラ	バスタ液剤	収穫前日まで(雑草生育期耕起前・は種前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
なばな	バスタ液剤	収穫21日前まで(雑草生育期耕起前・は種前又は畝間処理)	2回以内	300～500mℓ	100～150ℓ

作物名	農薬名	使用時期	本剤の使用回数	使用量/10a	使用水量/10a
野菜類(えだまめ、たらのき、はくさい、ｷｬﾍﾞﾂ、ﾚﾀｽ、ねぎ、たまねぎ、ほうれんそう、にんじん、だいこん、はつかだいこん、ｱｽﾊﾟﾗｶﾞｽ、ﾄﾏﾄ、きゅうり、なすを除く)	タッチダウンiQ	耕起7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下)	1回	250～500mℓ	25～50ℓ
野菜類(えだまめ、はくさい、ｷｬﾍﾞﾂ、ｱｽﾊﾟﾗｶﾞｽ、ﾚﾀｽ、ねぎ、たまねぎ、ほうれんそう、にんじん、だいこん、ﾄﾏﾄ、ﾋﾟｰﾏﾝ、とうがらし類、きゅうり、なす、びわ(葉)、ｵﾘｰﾌﾞ(葉)を除く)	ラウンドアップマックスロード	耕起前まで(雑草生育期)	1回	200～500mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ
野菜類(えだまめ、ｷｬﾍﾞﾂ、はつかだいこん、だいこん、とうがらし類、にんじん、ﾋﾟｰﾏﾝ、ねぎ、たまねぎ、ｱｽﾊﾟﾗｶﾞｽ、ｵﾘｰﾌﾞ(葉)、きゅうり、たらのき、ﾄﾏﾄ、なす、びわ(葉)、ほうれんそう、ﾚﾀｽ、薬用にんじん、豆類(種実、ただし、らっかせいを除く)、かんしょを除く)	草枯らしMIC	耕起または定殖7日前まで(雑草生育期)	1回	250～500mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ
野菜類(えだまめ、ｷｬﾍﾞﾂ、はつかだいこん、だいこん、とうがらし類、にんじん、ﾋﾟｰﾏﾝ、ねぎ、たまねぎ、ｱｽﾊﾟﾗｶﾞｽ、ｵﾘｰﾌﾞ(葉)、きゅうり、たらのき、ﾄﾏﾄ、なす、びわ(葉)、ほうれんそう、ﾚﾀｽ、薬用にんじん、豆類(種実、ただし、らっかせいを除く)、かんしょを除く)	クサクリーン液剤	耕起または定殖7日前まで(雑草生育期)	1回	250～500mℓ	通常散布 50～100ℓ 少量散布 5～50ℓ
豆類(種実、ただし、だいず、あずき、いんげんまめ、らっかせいを除く)	ラウンドアップマックスロード	耕起前又はは種前まで(雑草生育期)	2回以内	200～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布25～50ℓ
豆類(種実、ただし、だいず、らっかせいを除く)	草枯らしMIC	は種7日前まで(雑草生育期)	2回以内	250～500mℓ	通常散布50～100ℓ 少量散布 25～50ℓ
	タッチダウンiQ	耕起7日以前(雑草生育期:草丈30cm以下) 畦間処理:雑草生育期(但し、収穫3日前まで)	1回	250～500mℓ	25～50ℓ
豆類(種実、ただし、だいずを除く)	バスタ液剤	雑草生育期耕起前・は種前・定植5日前まで 収穫28日前まで(畦間処理:雑草生育期)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ
豆類(種実、ただし、らっかせいを除く)	ザクサ液剤	収穫28日前まで(雑草生育期 は種・定植前又は畦間処理)	3回以内	300～500mℓ	100～150ℓ

※ラウンドアップマックスロードの少量散布(希釈水量5ℓ～/10a)では、専用の'ラウンドノズルULV5'を使用すること。

(13)植物成長調整剤使用基準

作物名	農 薬 名 (成分名及び含量%)	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	使用上の注意
なす	トマトトーン (4－CPA 0.15)	着果促進 果実肥大促進 熟期促進	50倍	開花当日	1花房につき1回	散布	(1)希釈倍数を正確に守る。 (2)同じ花房には重複散布しない。 (使用回数は1花房につき1回) (3)花芽や幼葉にかかると、その部分が萎縮したようになるので花房にだけかける。
	ジベレリン液剤 (ジベレリン 0.50) ジベレリン粉末 (ジベレリン 3.1)	着果数増加	10～50ppm	開花時	1回	葉面散布	(1)使用にあたっては、その都度溶解調整することが望ましい。溶解液を放置すると効力が低下する場合があるので、なるべく調整当日に使い切る。
トマト	トマトトーン (4－CPA 0.15)	着果促進 果実肥大促進 熟期促進	高温時(20℃以上)100倍 低温時(20℃以下)50倍	開花前3日～開花後3日位(1花房で3～5花位開花した時期)	1花房につき1回	散布	(1)希釈倍数を正確に守る。 (2)同じ花房には重複散布しない。 (使用回数は1花房につき1回) (3)花芽や幼葉にかかると、その部分が萎縮したようになるので花房にだけかける。
	ジベレリン液剤 (ジベレリン 0.50) ジベレリン粉末 (ジベレリン 3.1)	空どう果防止	10ppm	開花時	1花房当り1回	花房散布 (トマト落果防止剤と併用) 5ml/果房	(1)使用にあたっては、その都度溶解調整することが望ましい。溶解液を放置すると効力が低下する場合があるので、なるべく調整当日に使い切る。
ミニトマト	トマトトーン (4－CPA 0.15)	着果促進 果実肥大促進 熟期促進	高温時(20℃以上)100倍 低温時(20℃以下)50倍	開花前3日～開花後3日位	1花につき1回	散布	(1)希釈倍数を正確に守る。 (2)同じ花には重複散布しない。 (使用回数は1花につき1回) (3)花芽や幼葉にかかると、その部分が萎縮したようになるので花にだけかける。
	エスレル10 (エテホン 10.0)	熟期促進	300～500倍	各果房毎の白熟期	1果房につき1回	果房散布 5ml/果房	(1)ハウス内では、高温時(30℃以上) の散布はさけ、また散布後2～3日間は、温度が30℃以上にならないよう換気に注意する。 (2)果房散布の場合は、白熟期となった果房以外の茎葉や、上位段の幼果には散布液がかからないよう注意し、霧ふき器を使用して果房中心に散布する。
いちご	ジベレリン液剤 (ジベレリン 0.50)	(親株床)ランナー発生促進	50ppm	採苗時ランナー発生直前～発生初期	1株当り1回	茎葉散布(1株当り10ml)	(1)使用にあたっては、その都度溶解調整することが望ましい。溶解液を放置すると効力が低下する場合があるので、なるべく調整当日に使い切る。 (2)処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波が来ると特に寒害を受けやすいので防寒に留意する。 (3)過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布量を厳守する。
	ジベレリン粉末 (ジベレリン 3.1)	果柄の伸長促進	10ppm	頂花の出蕾直後～開花直前	1花房当り1回	株の中心部に5ml散布	
	ジベレリン錠剤 ジベラ錠 (ジベレリン25mg/錠)	(促成栽培) 着果数増加、熟期促進		休眠に入る直前(冬場の低温期)	1株当り6回以内	茎葉全面散布(1株当たり5ml)	
	ビビフルフロアブル (プロヘキサジオンカルシウム塩 1.0)	(促成栽培) 葉柄伸長抑制による苗の徒長防止	200～500倍	苗の低温暗黒処理7日前～当日	1回	茎葉散布 5～10 ml/株	(1)暗黒処理時の徒長防止で使用する場合、散布後の気象条件によっては散布液量が多いと収量へ影響することがあるので注意する。
			500倍	定植30～50日前			
		(促成栽培) 生育後期の伸長抑制	400～600倍	葉柄徒長期但し、収穫前日まで	3回以内	茎葉散布 10～25 ml/株	(1)生育後期の伸長抑制で使用する場合、目的とする抑制の程度に応じて散布回数を調節する。2～3回散布する時には、1カ月程度間隔をあける。
アスパラガス	ビーエー液剤 (ベンジルアミノプリン 3.0)	萌芽促進	300～600倍	夏秋どり、慣行最終収穫予定日の10～30日前(但し収穫前日まで)	1回	茎葉散布	(1)若葉にかかると奇形を生じること があるので茎葉下部への散布は控え る。
かぼちゃ	フルメット液剤 (ホルクロルフェニュロン液剤 0.10)	着果促進	500ppm(ホルクロルフェニュロン)	開花当日	1回	果梗部塗布	(1)塗布量は極微量とし、果梗部は両側に処理する。 (2)糖度の低下等品質低下を防止するため、人工受粉と併用する。
			10～20ppm(ホルクロルフェニュロン)			子房部散布 (0.3～0.5ml /子房)	(1)子房部の両側から丁寧に散布する。 (2)薬液が花(柱頭)にかからないように注意する。
メロン	トマトトーン (4－CPA 0.15)	着果促進	25～100倍	開花前日～翌日	花に1回	散布	(1)希釈倍数を正確に守る。 (2)同じ花には重複散布しない。 (使用回数は1花につき1回) (3)花芽や幼葉にかかると、その部分 が萎縮したようになるため、花にのみ散布する。 (4)子房にのみ噴霧する時は、使用時期にかかわらず人工授粉を併用する。 (5)低温時(20℃以下)には希釈倍数を低くし、適用希釈倍数の範囲内で高濃度で処理する。
			3～5倍		花こう部に1回	塗布	

Ⅳ 参 考 資 料

1　主要薬剤の系統別特性（殺虫・殺ダニ・殺菌剤）

2　性フェロモン剤の使用法

3　天敵昆虫製剤・微生物天敵製剤（害虫防除用）の使用法

4　主要天敵類への薬剤影響表一覧

5　マルハナバチへの農薬の影響一覧表

6　ミツバチへの農薬への影響一覧表

7　ＢＴ剤の登録薬剤一覧

8　微生物農薬（殺菌剤）の使用法

9　ラノーテープの使用方法（注意事項）

10　メタアルデヒド剤の使用法

11　気門閉鎖型薬剤の使用法

12　いちごナミハダニ防除薬剤の効果

13　タバココナジラミ防除薬剤の効果

14　展着剤の使用法

15　愛媛県特別栽培農産物等認証制度において
　　カウントされない農薬一覧

16　ＩＰＭ実践指標の活用について

17　農薬の混用事例集について

1 主要薬剤の系統別特性(殺虫・殺菌・殺ダニ剤)

○殺虫剤

系統名	IRAC の作用機構分類	主な商品名	概　要	抵抗性に関する動向	効果の遅速	浸透移行性	天敵への影響
ｶｰﾊﾞﾒｰﾄ系	1A	ﾗｰﾋﾞﾝ・ｵﾝｺﾙ・ｵﾘｵﾝ	神経系に作用(ｱｾﾁﾙｺﾘﾝｴｽﾃﾗｰｾﾞを阻害、過剰興奮を誘起)。 食毒・接触毒。ﾁｮｳ目、ｺｳﾁｭｳ目など幅広い害虫に効果がある。速効性や残効性、浸透性は剤によって異なる。	ｱﾌﾟﾗﾑｼ類、ｱｻﾞﾐｳﾏ類(ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ等)、ｺﾅｼﾞﾗﾐ類、ﾁｮｳ目(ｺﾅｶﾞ等)等で効果低下事例がある。	速効	○	影響が大きく、長いものが多い。
有機ﾘﾝ系	1B	ｽﾐﾁｵﾝ・ｵﾙﾄﾗﾝ・ﾄｸﾁｵﾝ	神経系に作用(ｱｾﾁﾙｺﾘﾝｴｽﾃﾗｰｾﾞを阻害、過剰興奮を誘起)。 食毒・接触毒。幅広い害虫に効果がある。速効性や残効性、浸透性は剤によって異なる。	ｱﾌﾟﾗﾑｼ類、ｱｻﾞﾐｳﾏ類(ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ等)、ｺﾅｼﾞﾗﾐ類、ﾁｮｳ目(ｺﾅｶﾞ等)等で効果低下事例がある。	速効	○	影響は大きいが、その期間には薬剤により大きな差がある。
ﾌｪﾆﾙﾋﾟﾗｿﾞｰﾙ系	2B	ﾌﾟﾘﾝｽ・ｷﾗｯﾌﾟ	神経系に作用(GABAで活性化される塩素ｲｵﾝﾁｬﾈﾙを阻害、過剰興奮を誘起)。 食毒・接触毒。食毒の活性の方が著しく高い(対ｺﾅｶﾞ)。ﾁｮｳ目、ｱｻﾞﾐｳﾏ目へ特に高い活性を示すが、ﾁｮｳ目では種間差が著しく、ｼﾛｲﾁﾓｼﾞﾖﾄｳ、ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ、ﾖﾄｳﾑｼへの効果は低い。ｶﾒﾑｼ目(ｱﾌﾟﾗﾑｼ、ｳﾝｶ、ﾖｺﾊﾞｲ類など)に対しても差が著しい。	ﾌﾟﾘﾝｽでｾｼﾞﾛｳﾝｶへの感受性低下報告がある。	速効 (対象により遅効)	○	ﾊﾁ類への影響は強い。
合成ﾋﾟﾚｽﾛｲﾄﾞ系	3A	ﾄﾚﾎﾞﾝ・ｱｰｸﾘﾝ・ｱﾃﾞｨｵﾝ・ｱｸﾞﾛｽﾘﾝ・ﾃﾙｽﾀｰ・ﾏﾌﾟﾘｯｸ・ﾛﾃﾞｨｰ	神経系に作用(ﾅﾄﾘｳﾑﾁｬﾈﾙを開放し続け、過剰興奮を誘起、神経伝達を阻害)。 食毒・接触毒。浸透性はない。産卵抑制や食害抑制などの忌避作用がある。抵抗性が発達しやすい。	ｱﾌﾟﾗﾑｼ類、ｱｻﾞﾐｳﾏ類(ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ等)、ｺﾅｼﾞﾗﾐ類、ﾁｮｳ目(ｺﾅｶﾞ等)等で効果低下事例がある。	速効	×	影響が大きく、長いものが多い。
ﾈｵﾆｺﾁﾉｲﾄﾞ系	4A	ｱﾄﾞﾏｲﾔｰ・ﾓｽﾋﾟﾗﾝ・ｱｸﾀﾗ・ｽﾀｰｸﾙ(ｱﾙﾊﾞﾘﾝ)・ﾀﾞﾝﾄﾂ・ﾊﾞﾘｱｰﾄﾞ・ﾍﾞｽﾄｶﾞｰﾄﾞ	神経系に作用(ﾆｺﾁﾝ性ｱｾﾁﾙｺﾘﾝ受容体に結合、過剰興奮を誘起)。 食毒・接触毒。一般的に浸透移行性が高く、残効性も長い。 ｶﾒﾑｼ目には一般に効果高く(ﾀﾊﾞｺﾅｼﾞﾗﾐﾀｲﾌﾟQには薬剤により効果差あり)、ｱｻﾞﾐｳﾏ目へは種間差が有る(ﾋﾗｽﾞﾊﾅｱｻﾞﾐｳﾏ・ﾐｶﾝｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏには効果が劣る)。ﾁｮｳ目害虫には一般的に効果低い。ﾀﾞﾆ目には効果が無い。	ﾄﾋﾞｲﾛｳﾝｶに対してｱﾄﾞﾏｲﾔｰの効果低下事例がある。ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ、ﾜﾀｱﾌﾞﾗﾑｼへの効果低下事例がある。	速効	○	ﾃﾝﾄｳﾑｼ類、ｶﾒﾑｼ類への影響は大きく長期間。ｸﾓ類への直接的影響は少ない。ﾊﾁ類への影響は薬剤により大きな差がある。
ｽﾙﾎｷｻｲﾐﾝ系	4C	ｴｸｼｰﾄﾞ・ﾄﾗﾝｽﾌｫｰﾑ	神経系に作用(ﾆｺﾁﾝ性ｱｾﾁﾙｺﾘﾝ受容体に結合、過剰興奮を誘起)。 食毒・接触毒。ｱﾌﾟﾗﾑｼ、ｶｲｶﾞﾗﾑｼ、ｺﾅｼﾞﾗﾐ等の吸汁性害虫に有効。	ﾈｵﾆｺﾁﾉｲﾄﾞ剤とは交差抵抗性を示さない。	速効	○	ﾊﾁ類への影響は強い。
ﾒｿｲｵﾝ系	4E	ｾﾞｸｻﾛﾝ	神経系に作用(ﾆｺﾁﾝ性ｱｾﾁﾙｺﾘﾝ受容体に結合、脱感作状態を誘起)。 ﾄﾋﾞｲﾛｳﾝｶ、ﾋﾒﾄﾋﾞｳﾝｶ、ｾｼﾞﾛｳﾝｶ、ﾂﾏｸﾞﾛﾖｺﾊﾞｲに対し、卓効性、残効性を示す。		速効	○	寄生蜂、ｸﾓ類、ﾊﾅｶﾒﾑｼ類への影響は少ない。
ﾋﾟﾘｼﾞﾘﾃﾞﾝ系 (ﾌﾙﾋﾟﾘﾐﾝ)	4F	ﾘﾃﾞｨｱ・ｴﾐﾘｱ	神経系に作用(ﾆｺﾁﾝ性ｱｾﾁﾙｺﾘﾝ受容体に結合、脱感作状態を誘起)。 ｺｳﾁｭｳ目、ｶﾒﾑｼ目、ﾊｴ目、ﾁｮｳ目、ﾊﾞｯﾀ目に対して、幅広い防除効果を示す。 やや遅効的で、摂取後数時間で麻痺症状を呈し、摂餌行動が抑制され、数日で死に至る。浸透移行性を有す。		遅効	○	ﾐﾂﾊﾞﾁ類、ｶﾌﾟﾘﾀﾞﾆ類、ｸﾓ類、ﾔｺﾞ類に対する影響は小さい
ｽﾋﾟﾉｼﾝ系	5	ｽﾋﾟﾉｴｰｽ・ﾃﾞｨｱﾅ	神経系に作用(ﾆｺﾁﾝ性ｱｾﾁﾙｺﾘﾝ受容体ｱﾛｽﾃﾘｯｸ部位に結合、過剰興奮を誘起)。 一般名ｽﾋﾟﾉｻﾄﾞ(商品名ｽﾋﾟﾉｴｰｽ)は、食毒・接触毒として作用。ﾁｮｳ目、ｱｻﾞﾐｳﾏ目への効果が高く、一部ﾊｴ目、ｺｳﾁｭｳ目に対する効果があるが、ﾊﾀﾞﾆ類への効果はない。浸透移行性は小さい。 一般名ｽﾋﾟﾈﾄﾗﾑ(商品名ﾃﾞｨｱﾅ)は、ﾁｮｳ目、ﾊｴ目などに速効的に作用し、速やかに食害を抑える。経皮的、経口的に作用するが、経口的な作用が強い。浸透移行性をもつ。	ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ、ﾐｶﾝｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ、ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳに対して効果低下事例がある。	速効	概要参照	ﾊﾁ類への影響は強い。

系統名	IRAC の作用機構分類	主な商品名	概　　要	抵抗性に関する動向	効果の遅速	浸透移行性	天敵への影響
ﾏｸﾛﾗｲﾄﾞ系	6	ｱﾌｧｰﾑ・ｺﾛﾏｲﾄ・ｱﾆｷ・ｱｸﾞﾘﾒｯｸ	神経系（GluClsとｱﾛｽﾃﾘｯｸ部位で結合、GluClsを活性化し、麻痺を誘起）に作用。 接触毒より食毒の方が強い作用を有する。 ｱﾌｧｰﾑ・ｱｸﾞﾘﾒｯｸではﾁｮｳ目、ｱｻﾞﾐｳﾏ目への効果が高い。ｺﾛﾏｲﾄはﾀﾞﾆ類への効果が高い。	ｱﾌｧｰﾑは、ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ、ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ、ﾋﾗｽﾞﾊﾅｱｻﾞﾐｳﾏへの効果低下事例が一部あるが、多くの圃場で効果は高い。 ｺﾛﾏｲﾄは、県内ではﾅﾐﾊﾀﾞﾆ対して効果低下事例がある。	速効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆへの影響はあるが、薬剤によっては影響の期間が短い。ｱｸﾞﾘﾒｯｸは、ﾋﾒﾊﾅｶﾒﾑｼ類に影響が大きい。
IGR系 （幼若ﾎﾙﾓﾝ類似剤）	7C	ﾗﾉｰ・ﾌﾟﾙｰﾄ	幼虫の変態を撹乱して阻害。 ﾗﾉｰ、ﾌﾟﾙｰﾄとも有効成分はﾋﾟﾘﾌﾟﾛｷｼﾌｪﾝ。ﾗﾉｰはﾃｰﾌﾟ状製剤として施設野菜のｺﾅｼﾞﾗﾐ対策として使用されている。	ﾗﾉｰはﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐﾀｲﾌﾟQには効果が劣る。	遅効	×	全般に影響は少ない。
非特異的阻害剤	8B	ｸﾛﾙﾋﾟｸﾘﾝ	土壌消毒剤として使用されており、ｾﾝﾁｭｳ・ﾈｷﾘﾑｼ類に対して効果があり、殺菌剤・除草剤としての効果もある。		速効	×	
	8F	ﾊﾞｽｱﾐﾄﾞ・ｷﾙﾊﾟｰ					
ﾋﾟﾘｼﾞﾝｱｿﾞﾒﾁﾝ系	9B	ﾁｪｽ・ｺﾙﾄ	神経系に作用（運動感覚に重要な弦音器官TRPVﾁｬﾈﾙに結合・攪乱し、摂食行動やその他行動の攪乱を誘起）。 ﾁｪｽは、ｱﾌﾞﾗﾑｼ類などのｶﾒﾑｼ目に効果が高く、他昆虫への活性は低い。ｺﾙﾄは、ｺﾅｼﾞﾗﾐ類には飛翔行動阻害、ｶｲｶﾞﾗﾑｼ類、ｺﾅｼﾞﾗﾐ類の孵化後定着前幼虫への定着阻害もある（定着した個体へは活性無）。ｱﾌﾞﾗﾑｼ類、ｺﾅｼﾞﾗﾐ類、ｶｲｶﾞﾗﾑｼ類、ﾖｺﾊﾞｲ類などのｶﾒﾑｼ目、一部のｱｻﾞﾐｳﾏ目に活性がある。	ｺﾅｼﾞﾗﾐ類で効果が振れる試験事例がある。 ﾁｪｽはｱﾌﾞﾗﾑｼ類に低い効果の事例がある。	遅効	○	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類、ｺﾊﾞﾁ類などへの影響は少ない。（ｺﾙﾄは一部ﾊﾁ目昆虫への影響が確認されている。）
ﾋﾟﾛﾍﾟﾝ系	9D	ｾﾌｨｰﾅ	神経系に作用（運動感覚に重要な弦音器官TRPVﾁｬﾈﾙに結合・攪乱し、摂食行動やその他行動の攪乱を誘起）。 ｾﾌｨｰﾅは、ｱﾌﾞﾗﾑｼ類などのｶﾒﾑｼ目に効果が高い。その他の昆虫への活性は不明。		速効	○	全般に影響は少ない。
ﾍｷｼﾁｱｿﾞｸｽ	10A	ﾆｯｿﾗﾝ	ﾀﾞﾆ類成長阻害。 ﾊﾀﾞﾆ類の殺卵・殺若虫効果がある。成虫には効果がない。	県内では主要ﾊﾀﾞﾆ類への効果は低下している事例が多い。	遅効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類への影響は少ない。
ｼﾞﾌｪﾆﾙｵｷｻｿﾞﾘﾝ系 （ｴﾄｷｻｿﾞｰﾙ）	10B	（単剤） ﾊﾞﾛｯｸ	ﾀﾞﾆ類成長阻害。 ﾊﾀﾞﾆ類の殺卵・殺若虫効果がある。成虫には効果がない。ｻﾋﾞﾀﾞﾆ類にも効果あり。	ｲﾁｺﾞのﾅﾐﾊﾀﾞﾆでは、園地によって極端に効果差があり、その比率は半分程度(2005年県内試験事例より)。ﾐｶﾝﾊﾀﾞﾆへの効果は東・中予で低下している事例が多い。ﾐｶﾝｻﾋﾞﾀﾞﾆでも効果の低い事例がある。	遅効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類の卵への影響はあるが、ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類に対して影響は少ない。
*Bacillus thuringiensis*と殺虫ﾀﾝﾊﾟｸ質生産物	11A	ｴｽﾏﾙｸ・ﾁｭｰﾘｻｲﾄﾞ・ﾃﾞﾙﾌｨﾝ・ﾌｧｲﾌﾞｽﾀｰ	細菌のﾊﾞﾁﾙｽ・ﾁｭｰﾘﾝｹﾞﾝｼｽ（*Bacillus thuringiensis*; BT）を用いており、菌の産生する結晶ﾀﾝﾊﾟｸ、胞子、両方の混合されたものがある。食毒として作用し、主に、ﾁｮｳ目、ｺｶﾞﾈﾑｼ類幼虫に有効である。	ﾁｮｳ目（ｺﾅｶﾞ、ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ等）に効果低下事例がある。	遅効	×	全般に影響はほとんどない。
ﾁｵｳﾚｱ系 （ｼﾞｵﾌｪﾝﾁｳﾛﾝ）	12A	ｶﾞﾝﾊﾞ	ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱでの呼吸系の阻害（ATPの合成酵素を阻害）。 ｺﾅｶﾞ、ﾖﾄｳﾑｼ類等のﾁｮｳ目、一部のｱｻﾞﾐｳﾏ目、ｱﾌﾞﾗﾑｼ類、ｺﾅｼﾞﾗﾐ類（ﾁｬﾄｹﾞｺﾅｼﾞﾗﾐ）等のｶﾒﾑｼ目に効果が高い。登録はｷｬﾍﾞﾂ、茶のみ。		遅効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類、ﾊﾅｶﾒﾑｼ、ﾃﾝﾄｳﾑｼ等に対し、比較的影響が少ない。
亜硫酸ｴｽﾃﾙ系 （ｼﾞﾌｪﾆﾙｴｰﾃﾙ系）	12C	ｵﾏｲﾄ	ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱでの呼吸系の阻害（ATPの合成酵素を阻害）。 ﾊﾀﾞﾆ類に対して主に接触的に効果を発現する。殺卵効果は比較的劣るが、成幼虫に対しての効果が高い。ﾐｶﾝﾊﾀﾞﾆでは卵に対し高い効果。		速効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類への影響が大きい。

系統名	IRAC の作用機構分類	主な商品名	概　　要	抵抗性に関する動向	効果の遅速	浸透移行性	天敵への影響
ﾋﾟﾛｰﾙ系	13	ｺﾃﾂ	ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱでの呼吸系の阻害(ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱのﾌﾟﾛﾄﾝ勾配を攪乱、ATP合成を阻害)。 食毒・接触毒として作用。ﾁｮｳ目には、主に食毒作用。ﾁｮｳ目・ｱｻﾞﾐｳﾏ目への効果が高い。ﾊﾀﾞﾆ類へは、ﾅﾐﾊﾀﾞﾆ・ｶﾝｻﾞﾜﾊﾀﾞﾆなどのﾃﾄﾗﾆｶｽ属には効果があるが、ﾐｶﾝﾊﾀﾞﾆなどのﾊﾟﾉﾆｶｽ属には効果がない。	県内ではﾐﾅﾐｷｲﾛ・ﾋﾗｽﾞﾊﾅ・ﾈｷﾞ・ﾊﾅ・ﾐｶﾝｷｲﾛの各ｱｻﾞﾐｳﾏへの効果が低い試験事例・ﾅﾐﾊﾀﾞﾆに対して成虫への効果が低い(殺卵効果は高い)試験事例がある。	速効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類への影響が大きい。
ﾈﾗｲｽﾄｷｼﾝ系	14	ﾊﾟﾀﾞﾝ・ﾘｰﾌｶﾞｰﾄﾞ	神経系に作用(ﾆｺﾁﾝ性ｱｾﾁﾙｺﾘﾝ受容体ﾁｬﾈﾙを阻害、神経系遮断・麻痺を誘起)。 食毒として作用。完全な致死までは時間がかかるが、神経に作用するため食害を速やかに停止させる。 ﾁｮｳ目への効果が高い。	ｺﾅｶﾞなどで低下事例がある。	遅効	○	ﾊﾁ類の成虫への影響は強いが、幼虫・蛹への影響は少ない。 ﾈﾗｲｽﾄｷｼﾝ(共通代謝物)を生成するため薬剤選択注意
IGR系	15	ｱﾀﾌﾞﾛﾝ・ﾏｯﾁ・ｶｽｹｰﾄﾞ・ﾉｰﾓﾙﾄ・ﾃﾞﾐﾘﾝ	ｷﾁﾝ合成・脱皮阻害。 生長過程で脱皮する際に効果発現するﾀｲﾌﾟと、脱皮までまだ間がある幼虫を速やかに脱皮へ誘導し失敗させるﾀｲﾌﾟがある。 ﾁｮｳ目害虫に特異的に作用する薬剤が多いが、ｱｻﾞﾐｳﾏ目やｶﾒﾑｼ目であるｳﾝｶ類、ｺﾅｼﾞﾗﾐ類に効果を示す薬剤もある。また、ﾊｴ類に特異的に作用する薬剤(ﾄﾘｶﾞｰﾄﾞ)もある。	ｺﾅｶﾞ、ｺﾅｼﾞﾗﾐ類などで低下事例がある。ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞのﾔﾉﾈｶｲｶﾞﾗﾑｼに対する効果が低下している地域がある。	遅効	×	全般に影響は小さいが、ﾊﾅｶﾑｼ類やｸｻｶｹﾞﾛｳへの影響が大きい剤がある。
	16	ｱﾌﾟﾛｰﾄﾞ					
	17	ﾄﾘｶﾞｰﾄﾞ					
	18	ﾛﾑﾀﾞﾝ・ﾌｧﾙｺﾝ					
ｱﾐﾄﾗｽﾞ	19	ﾀﾞﾆｶｯﾄ	神経系に作用(ｵｸﾄﾊﾟﾐﾝ受容体を活性化、過剰興奮を誘導)。 ﾐｶﾝｻﾋﾞﾀﾞﾆ、ﾛｳﾑｼ類(幼虫)に効果がある。	ﾊﾀﾞﾆ類に対する効果は低下している。	速効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類、ｺﾊﾞﾁ類などへの影響が大きい。
ｷﾉﾘﾝ系 (ｱｾｷﾉｼﾙ)	20B	ｶﾈﾏｲﾄ	ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱ呼吸阻害(ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱ電子伝達系複合体IIIを阻害、ｴﾈﾙｷﾞｰ利用妨害)。 ﾊﾀﾞﾆの発育全ｽﾃｰｼﾞに活性がある。ﾁｬﾉﾎｺﾘﾀﾞﾆ、ｻﾋﾞﾀﾞﾆ類にも効果がある。	ﾐｶﾝﾊﾀﾞﾆへの効果は全域で低下している。	速効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類への影響は少ない。
ﾋﾟﾌｪﾅｾﾞｰﾄ	20D	ﾏｲﾄｺｰﾈ	ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱ呼吸阻害(ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱ電子伝達系複合体IIIを阻害、ｴﾈﾙｷﾞｰ利用妨害)。 ﾊﾀﾞﾆの全生育ｽﾃｰｼﾞに活性はあるが、殺幼虫・成虫活性の方が高い。ﾐｶﾝﾊﾀﾞﾆなどのﾊﾟﾉﾆｶｽ属への効果もあるが、ﾅﾐﾊﾀﾞﾆ、ｶﾝｻﾞﾜﾊﾀﾞﾆなどのﾃﾄﾗﾆｶｽ属への効果が高い。ﾊﾀﾞﾆの他、ｻﾋﾞﾀﾞﾆ類に効果があるが、ﾁｬﾉﾎｺﾘﾀﾞﾆには効果がない。	県内ではﾅﾐﾊﾀﾞﾆに対し殺卵効果が低下している事例がある。ﾐｶﾊﾀﾞﾆへの効果は全域で低下している。	速効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類を含め多くの天敵昆虫への影響は少ない。
METI剤	21A	ｻﾝﾏｲﾄ・ﾊﾁﾊﾁ・ﾀﾞﾆﾄﾛﾝ	ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱ呼吸阻害(ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱ電子伝達系複合体Iを阻害、ｴﾈﾙｷﾞｰ利用妨害)。 ｻﾝﾏｲﾄは基本的に殺ﾀﾞﾆ剤であるが、一部ｱﾌﾞﾗﾑｼやうどんこ病、ｺﾅｼﾞﾗﾐにも活性がある。ﾊﾁﾊﾁは各害虫のほか、うどんこ病、さび病、べと病にも活性がある.	ﾊﾀﾞﾆ類に対する効果は低下している事例が多いが、ｻﾋﾞﾀﾞﾆ類には効果が高い。	速効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類、ｺﾊﾞﾁ類などへの影響が大きい。
ｵｷｻﾀﾞｲｱｼﾞﾝ系 (ｵｷｻｼﾞｱｼﾞﾝ)	22A	ﾄﾙﾈｰﾄﾞｴｰｽ	神経系に作用(Naﾁｬﾈﾙを阻害、神経系麻痺を誘起) 食毒として作用。ﾁｮｳ目に対して特に効果が高い。老齢幼虫には、食害は速やかに停止させるものの致死まで時間がかかる場合がある。		速効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類、ﾋﾒﾊﾅｶﾑｼ類、ｱﾌﾞﾗﾊﾞﾁなどへの影響は少ない。
ﾋﾄﾞﾗｼﾞﾝｶﾙﾎﾞｷｻﾐﾄﾞ系 (ｾﾐｶﾙﾊﾞｿﾞﾝ)	22B	ｱｸｾﾙ	神経系に作用(Naﾁｬﾈﾙを阻害、神経系麻痺を誘起)。 既存の殺虫剤とは交差抵抗性を示さない。合ピレ抵抗性の虫に対しても効果がある。浸透移行の効果は小さい。ﾁｮｳ目、一部のｺｳﾁｭｳ目(ｶﾒﾉｺﾊﾑｼ、ﾃﾝﾄｳﾑｼｼﾀﾞﾏｼ)、ﾊﾁ目(ｶﾌﾞﾗﾊﾊﾞﾁ)に活性がある。		速効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類、ｸﾓ類、ﾋﾒﾊﾅｶﾑｼ類、寄生蜂などへの影響は少ない。

系統名	IRAC の作用機構分類	主な商品名	概　　要	抵抗性に関する動向	効果の遅速	浸透移行性	天敵への影響
環状ケトエノール系	23	ﾀﾞニエモン・ﾀﾞニゲッター・クリアザール・モベント	脂質生合成阻害。 ﾀﾞニエモン、ﾀﾞニゲッターは、ハダニの雌成虫には産卵抑制。若虫には脱皮時に作用する。ハダニ類の全ステージに活性を示すが、殺卵・殺幼虫効果が特に高い。サビダニ類・ホコリダニにも効果がある。浸透移行性はない。 クリアザールの有効成分は、ﾀﾞニゲッターと同一。タバココナジラミへの効果があるため、商品名を別とし有効成分量も変えてトマトへ登録をとったもの。 モベントは、アブラムシ、コナジラミ、アザミウマ、ハダニ、サビダニ、ホコリダニ、カイガラムシと幅広い害虫に効果があり、浸透移行性を有する。	ﾀﾞニエモンはミカンハダニに対し効果が全域で低下している。	遅効	概要参照	カブリダニ類へは卵・若虫への直接散布は影響が大きいが、成虫には少ない。他天敵への影響は少ない。
β－ケトニトリル誘導体	25A	(単剤) スターマイト・ﾀﾞニサラバ (混合剤) スターマイトプラス	ミトコンドリア呼吸阻害(ミトコンドリア電子伝達系複合体IIを阻害、エネルギー利用妨害)。 スターマイトはハダニ類の全ステージに効果がある。チャノホコリダニには効果があるが、サビダニ類には効果がない。 ﾀﾞニサラバはハダニの全生育ステージに活性を示すが、特に幼虫への活性が高い。ハダニ類にのみ活性があり、他はチャノホコリダニ、サビダニ類を含め活性がない。	ﾀﾞニサラバはミカンハダニに対し全域で効果が低下している。スターマイトはミカンハダニに対する効果が低下している地域がある。	速効	×	カブリダニ類、クモ類、ヒメハナカメムシ類、寄生蜂などへの影響は少ない。
カルボキサニリド系	25B	(単剤) ﾀﾞニコング (混合剤) ダブルフェース	ミトコンドリア呼吸阻害(ミトコンドリア電子伝達系複合体IIを阻害、エネルギー利用妨害)。 ﾀﾞニコングはハダニ類の幼虫～成虫の活性が高いが、殺卵は弱い。ハダニ類以外のダニには活性がない。 ダブルフェースはﾀﾞニトロンとの混合剤で、チャノホコリダニ、サビダニ類にも有効。		速効	×	ﾀﾞニコングはカブリダニ類を含め多くの天敵昆虫への影響は少ない。ダブルフェースはカブリダニ類等一部の天敵に影響あり。
ジアミド系	28	フェニックス・プレバソン・フェルテラ・サムコル・エクシレル・ベネビア・ベリマーク・プリロッソ・パディート・ハズ・テッパン・ヨーバル	神経及び筋肉作用(筋肉収縮に関わるカルシウムイオン濃度調整に影響、筋肉の収縮や神経系の麻痺を誘導)。 完全致死まではやや時間がかかるが行動異常は速やかに現れる。接触毒より食毒の方が強い作用を有する。 一般名フルベンジアミド(商品名フェニックス)は、チョウ目へ特異的に作用し、他昆虫への活性は、ないか、極めて低い。浸透移行性はない。 一般名クロラントラニリプロール(商品名:水稲用はフェルテラ、果樹用はサムコル、野菜用はプレバソン)は、チョウ目の他、ハエ目に活性を有する。浸透移行性がある。 一般名シアントラニリプロール(商品名:果樹散布剤はエクシレル、野菜散布剤はベネビア、野菜灌注剤はベリマーク、野菜粒剤はプリロッソ、水稲箱粒剤はパディート、水稲箱灌注剤はハズ)は、チョウ目の他、アブラムシ、コナジラミ等のカメムシ目、アザミウマ類、ハモグリバエ等にも効果がある。浸透移行性がある。	チャノコカクモンハマキ、コナガに対して感受性低下事例がある。	遅効	概要参照	テントウムシに若干影響有(薬剤に暴露したアブラムシを捕食した場合)他は少ない。
ピリジンカルボキサミド系(フロニカミド)	29	ウララ	神経系に作用(運動感覚に重要な弦音器官を攪乱し、摂食行動やその他行動の攪乱を誘起)。 アブラムシ類に特に効果が高く、オンシツコナジラミ、チャノキイロアザミウマにも効果がある。他昆虫への活性は低く、タバココナジラミ、ミナミキイロアザミウマへの活性は低い。		遅効	○	カブリダニ類、コバチ類などへの影響は少ない。
メタジアミド系 イソオキサゾリン系	30	グレーシア・イザナミ・プロフレア	神経系に作用(昆虫神経細胞上のGABA受容体に結合しシナプス後膜への塩化物イオンの流入を阻害。過剰興奮、痙攣を誘導する。) チョウ目、アザミウマ目、ダニ目、ハエ目、コウチュウ目、一部ハチ目(カブラハバチ)、一部カメムシ目(コナジラミ類)など広範囲の害虫種に効果がある。アブラムシ類や大型カメムシへの活性は低い。ミツバチ、マルハナバチへの影響は少ない。		速効	○	カブリダニ類、ヒメハナカメムシ類への影響が大きい。
アシノナピル	33	ﾀﾞニオーテ	作用機作不明。 ハダニ類に対してのみ作用する特徴的なスペクトラムを有する。ハダニの卵から成虫の各ステージに活性を示す。 作用発現は速効的で、耐雨性に優れる。		速効	×	セイヨウミツバチをはじめとする各種有用昆虫やカブリダニ類を含めた天敵に対する影響は少ない。

系統名	IRAC の作用機構分類	主な商品名	概　　要	抵抗性に関する動向	効果の遅速	浸透移行性	天敵への影響
ﾌﾛﾒﾄｷﾝ系 (ﾌﾛﾒﾄｷﾝ)	34	ﾌｧｲﾝｾｰﾌﾞ	神経系に作用(ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱ電子伝達系において複合体Ⅲでの電子伝達を強く阻害) ｱｻﾞﾐｳﾏ類、ｻﾋﾞﾀﾞﾆ類、ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類、小型ﾁｮｳ目に対して効果がある。 速効的に作用し、ｱｻﾞﾐｳﾏ類に対し2週間程度の残効性を有する。浸達性・浸透移行性はない。		速効	×	ﾐﾂﾊﾞﾁ、ﾏﾙﾊﾅﾊﾞﾁ、ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類等に対する影響は小さい
ｷﾉｷｻﾘﾝ系 (ｷﾉﾒﾁｵﾅｰﾄ)	UN	ﾓﾚｽﾀﾝ	作用機作不明。 ﾊﾀﾞﾆ類の全ｽﾃｰｼﾞに活性があるが、特に殺卵効果が高い。ｻﾋﾞﾀﾞﾆ類、ﾎｺﾘﾀﾞﾆ類にも効果がある。ｺﾅｼﾞﾗﾐ類への効果もあるが、2齢幼虫以後は効果が低い。また、うどんこ病への活性がある。		速効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類、ｸﾓ類、ﾋﾒﾊﾅｶﾒﾑｼ類、寄生蜂などへの影響は少ない。
ﾌﾟﾛﾍﾟﾆﾙｵｷｼﾌｪﾆﾙ系 (ﾋﾟﾘﾀﾞﾘﾙ)	UN	ﾌﾟﾚｵ	作用機作不明。 食毒・接触毒として作用。ﾁｮｳ目(ﾁｮｳ・ｶﾞ類)、ﾊｴ目(ﾊｴ類)、ｱｻﾞﾐｳﾏ目に効果がある。ただし、ｱｻﾞﾐｳﾏ目への効果には著しい種間差がある。ﾁｮｳ目へは老齢幼虫へも高い殺虫効果を有する。	ﾐﾅﾐｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏへの効果低下事例がある。	速効	×	ｶﾌﾞﾘﾀﾞﾆ類、ｸﾓ類、ﾋﾒﾊﾅｶﾒﾑｼ類、寄生蜂などへの影響は少ない。
ﾍﾞﾝｽﾞﾋﾟﾘﾓｷｻﾝ	UN	ｵｰｹｽﾄﾗ	作用機作不明。 昆虫脱皮ﾎﾙﾓﾝ、ｴｸﾀﾞｲｿﾝを撹乱し、正常な脱皮ができなくなる。脱皮ﾎﾙﾓﾝ量には影響がないため、IGRとは異なる作用。ｳﾝｶ類幼虫・ﾂﾏｸﾞﾛﾖｺﾊﾞｲ幼虫に特異的に活性を示す。		遅効	△	ｲﾈの根部に本剤を処理した場合で茎葉部への浸透移行が確認されているものの、散布による活性に劣る。
ｵｷｻｿﾞｽﾙﾌｨﾙ	UN	ｱﾚｽ	作用機作不明。 神経系に作用するものと推測されており、Naﾁｬﾈﾙの不活性化により神経活動を抑制し、麻痺を誘発すると考えられている。殺虫ｽﾍﾟｸﾄﾗﾑはｳﾝｶ類以外に、ﾁｮｳ目やｲﾅｺﾞ類、ｲﾈﾄﾞﾛｵｲﾑｼ、ﾊｴ目などがあり、比較的幅広い。		速効	○	

○薬剤の分類はIRACによる作用機作機構分類を参考に記述。
○主要な薬剤名は県内で主に利用があるものとし、剤型は省略。特段のこだわりがない場合は、単剤の名称。
○薬剤の概要及び諸性質は、「病害虫防除資材編(農文協)」「農薬ﾊﾝﾄﾞﾌﾞｯｸ2005(日本植物防疫協会)」より代表的な薬剤の項及び、メーカー技術資料を参考に記述。
○系統名は、現時点でのものを掲載しているが、今後解明がすすめば名称変更やここで異なるとされている系統が統合される可能性がある。
○天敵への影響は、日本生物防除協議会資料及びアリスタライフサイエンスからの情報、各メーカー技術資料による。

（治療効果を有する薬剤利用の留意点）
治療効果とは、感染後でも発病を阻止したり、病斑の拡大を阻止することを指します。しかし、治療効果のある薬剤でも、予防的に利用しなければ能力を十分に発揮できません。一般的に卓効を示す薬剤が多いものの、対象病害によっては耐性菌が出現しやすいものもあります。また、数年で使えなくなることも珍しくありません。
病害対応面では、「防除が難しい」と認識されているにもかかわらず、「発病を見てから」防除が開始されることがしばしばあります。その場合、発病後であるため、「治療効果」のある薬剤「だけ」を「連用」することになります。一般的に、病害は感染してから発病までに日数を要します（潜伏期間の長いトマト葉かび病では２週間以上かかるとされています）。感染してからの日数が経ちすぎていると、治療効果のある薬剤でも効果を十分に発揮できないことがあります。感染時期に何も対策されていなければ、発病確認後の病徴が急激に進展することもあり得ます。
発病後は、圃場内の病原菌量が感染初期と比較して格段に多くなります。たとえ99%の菌を防除できたとしても、残る１%の菌量は非常に多くなり、薬剤が十分な効果を発揮できないことがあります。効果が芳しくない場合はさらに薬剤散布を続けることになり、同一系統薬剤の連用による耐性菌の出現ばかりでなく、薬剤散布回数増加による費用・労力もかかることになります。

薬剤散布の前に、病害が感染しにくい環境条件を整えることが重要です。また「感染しやすい生育ステージ」や「感染しやすい気象条件」のときは、より丁寧に薬剤散布することが大切です。

FRAC グループ名	FRAC コード	主な商品名	概　　要	抵抗性に関する動向	治療 効果 の 有無	浸透 移行性	備考
MBC殺菌剤	1	ﾄｯﾌﾟｼﾞﾝM・ﾍﾞﾝﾚｰﾄ	呼吸阻害・細胞の有糸核分裂阻害。 抗菌活性は広いが、細菌病、べと病、疫病、さび病、*Alternaria* 属菌による病害には効果がない。	複数の病害で耐性菌出現事例があり、県内でも、ｲﾈばか苗病、ﾀﾞｲｽﾞ紫斑病、ｶﾝｷﾂそうか病、ﾄﾏﾄ灰色かび病、ｷｭｳﾘ褐斑病等で耐性菌が確認され、その比率も高い。	有	○	・ベンゾイミダゾール系 ・カルベンダジム（共通代謝物）を生成するため薬剤選択注意
ｼﾞｶﾙﾎﾞｷｼｲﾐﾄﾞ	2	ｽﾐﾚｯｸｽ・ﾛﾌﾟﾗｰﾙ （混合剤） ｽﾐﾌﾟﾚﾝﾄﾞ	浸透圧シグナル経路阻害。 細菌病、べと病、疫病、さび病、うどんこ病には効果がない。 ﾛﾌﾟﾗｰﾙは浸透移行性がなく治療効果もないが、ｽﾐﾚｯｸｽは浸透移行性があり、発病初期の治療効果を有する。	灰色かび病で耐性菌が確認されており、県内でもﾄﾏﾄ・ｶﾝｷﾂ等の灰色かび病で耐性菌が確認されている。	概要に記述		ジカルボキシイミド系
DMI殺菌剤（SBI：ｸﾗｽⅠ）	3	ﾄﾘﾌﾐﾝ・ﾗﾘｰ	ｴﾙｺﾞｽﾃﾛｰﾙ生合成阻害(細胞膜の構成成分)。 細菌病、べと病、疫病には効果がない。	ｲﾈばか苗病、ｲﾁｺﾞ・ｳﾘ類うどんこ病、なし黒星病での効果低下事例が確認されている。	有	○	EBI系
PA殺菌剤（ﾌｪﾆﾙｱﾐﾄﾞ）	4	ﾘﾄﾞﾐﾙ	病原菌のRNA合成阻害。 ピシウム属菌、べと病菌、疫病菌に特異的に効果が高い。他の病原菌には効果がない。1984年に登録。	作用機構は不明であるが、各種の卵菌類に対する耐性及び交差耐性が確認されている。	有	○	
ﾎｽﾎﾛﾁｵﾚｰﾄ ｼﾞﾁｵﾗﾝ	6	ｷﾀｼﾞﾝP ﾌｼﾞﾜﾝ	病原菌のﾘﾝ脂質及び細胞壁のｷﾁﾝ合成阻害。 いもち病に対しては予防・治療効果を併せもつ。	ｲﾈいもち病などで耐性菌が確認されている。 耐性リスクのある病原菌への使用では、耐性管理が必要である。	有	○	
SDHI（ｺﾊｸ酸脱水素酵素阻害剤）	7	ﾓﾝｶｯﾄ・ﾅﾘｱ・ｼｸﾞﾅﾑ・ｶﾝﾀｽ・ｱﾌｪｯﾄ・ﾌﾙｰﾂｾｲﾊﾞｰ・ｹﾝｼﾞｬ・ｶﾅﾒ・ｵﾙﾌｨﾝ・ﾈｸｽﾀｰ・ﾐﾗﾋﾞｽ・ﾊﾟﾚｰﾄﾞ	ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱ内膜のｺﾊｸ酸脱水素酵素複合体の電子伝達阻害。複数の化学ｸﾞﾙｰﾌﾟで構成されており、幅広い殺菌ｽﾍﾟｸﾄﾗﾑを有する。灰色かび病や菌核病に対する効果が高い。ただし、薬剤によって殺菌ｽﾍﾟｸﾄﾗﾑが異なる。ﾓﾝｶｯﾄは紋枯病などの担子菌類にのみ作用する。	広い地域に発生が広がっており、耐性菌の発生に注意が必要。他県ではｷｭｳﾘ褐斑病で耐性菌が認められている。海外では、果樹のｱﾙﾀﾅﾘｱ病害、ｳﾘ類うどんこ病で耐性菌の出現が確認されている。	有	○	
AP殺菌剤（ｱﾆﾘﾉﾋﾟﾘﾐｼﾞﾝ）	9	（単剤）ﾌﾙﾋﾟｶ （混合剤）ｼｮｳﾁﾉｽｹﾌﾛｱﾌﾞﾙ	菌体外へのﾀﾝﾊﾟｸ質分泌が抑制されることで、植物体への侵入に必要な酵素形成が抑制され、感染が阻害される。 灰色かび病、うどんこ病への効果が高い。1994年に登録。	*Botrytis* 属及び *Venturia* 属で耐性が確認されている。*Oculimacula* 属では散発的。	無	○	
N-ﾌｪﾆﾙｶｰﾊﾞﾒｰﾄ	10	（単剤）無 （混合剤） ｹﾞｯﾀｰ・ｽﾐﾌﾟﾚﾝﾄﾞ	ﾍﾞﾝｽﾞｲﾐﾀﾞｿﾞｰﾙ系薬剤(商品名：ﾄｯﾌﾟｼﾞﾝM、ﾍﾞﾝﾚｰﾄ)に耐性を持った菌へ特異的に作用。耐性菌でないものには効果が無い（負相関交差耐性）。	耐性菌発生リスクは高いとされており。耐性管理が必要である。ベンゾイミダゾール系殺菌剤と負の交差耐性。	有	○	

FRAC グループ名	FRAC コード	主な商品名	概　　要	抵抗性に関する動向	治療 効果 の 有無	浸透 移行性	備考
QoI殺菌剤（Qo阻害剤）	11	ﾎﾗｲｽﾞﾝの1成分、ｱﾐｽﾀｰ・ｽﾄﾛﾋﾞｰ・ﾌｧﾝﾀｼﾞｽﾀ・ｽｸﾚｱ	ｵｷｻｿﾞﾘｼﾞﾝｼﾞｵﾝ系は、病原菌の電子伝達系阻害。 ｴﾈﾙｷﾞｰ産生が抑制され遊走子に毒性を発揮。主にべと病菌、疫病菌に活性を示す。 ｽﾄﾛﾋﾞﾙﾘﾝ系は、病原菌のｴﾈﾙｷﾞｰ生成系でﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱに作用。 細菌病には効果がない。	ｶﾝｷﾂ・ｲﾁｺ・ｷｳｲﾌﾙｰﾂ・ﾚﾀｽ等の灰色かび病、ｷｭｳﾘべと病・うどんこ病、ｲﾁｺﾞ炭疽病等で耐性菌が確認されている。一般的に耐性菌の発達が速く、耐性管理が必要である。	有	○	ストロビルリン系
	11A	ﾑｹﾁ	ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱの電子伝達系を阻害。 ﾋﾟﾗｸﾛｽﾄﾛﾋﾞﾝと類似した側鎖を有する。一部のQoI耐性菌株に対して防除効果を示す。	2020年に6月に初登録。耐性は確認されていないが、発生リスクは高いとされている。 コード11のG143A突然変異株とは交差しない。			
PP殺菌剤（ﾌｪﾆﾙﾋﾟﾛｰﾙ）	12	（単剤）ｾｲﾋﾞｱｰ （混合剤）ｼﾞｬｽﾄﾐｰﾄ	糸状菌の原形質膜に作用し、物質の取り込みを阻害。特に胞子形成・発芽、葉上菌糸生育、病斑形成を強く阻止する。1996年に登録。	散発的に耐性がみられる。耐性管理が必要である。	無	×	
AH殺菌剤（芳香族炭化水素）	14	ﾘﾌﾞﾚｯｸｽ	病原菌の運動機能や細胞分裂の制御機能に影響を与えて殺菌効果を発揮する。 *Rhizoctonia* 属菌、*Corticium* 属菌、*Typhula* 属菌などに対して効果がある。	いくつかの糸状菌で耐性が確認されている。活性スペクトルが異なるため、交差耐性のパターンは複雑である。	有	○	
MBI-R	16.1	ﾋﾞｰﾑ・ｺﾗﾄｯﾌﾟ	病原菌のﾒﾗﾆﾝ生合成阻害。これにより植物体内への侵入が抑制される。	耐性は確認されていない。	無	○	
MBI-P	16.3	ｺﾞｳｹﾂ	ﾒﾗﾆﾝ合成阻害。これにより植物体内への侵入が抑制される。 イネいもち病菌の胞子離脱を阻害する。	耐性は確認されていない。	無	○	
KRI殺菌剤（ケト還元阻害）（SBI:ｸﾗｽⅢ）	17	（単剤）ﾊﾟｽﾜｰﾄﾞ （混合剤）ｼﾞｬｽﾄﾐｰﾄ	*Botrytis* 属菌（灰色かび病等）、*Monilinia* 属菌（灰星病等）に高い活性を示す。抗菌活性は狭い。1999年に登録。	耐性管理が必要である。	有	×	
（SBI:ｸﾗｽⅣ）	18	ｴｲｹﾞﾝ	植物体内の物質転流阻害（老化促進等の作用）。 製剤は粒剤、水和剤、乳剤がある。適用作物は稲と芝。1989年に登録。	耐性は確認されていない。殺菌及び除草活性あり。			
ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ	19	ﾎﾟﾘｵｷｼﾝ	農業用抗生物質。 細菌病のみに卓効を示すものと、それ以外の糸状菌にも効果を示すものがある。浸透移行性はあるものとないものがある。	ナシの黒斑病などで耐性が確認されている。耐性管理が必要である。	有	×○	
ﾌｪﾆﾙｳﾚｱ	20	ﾓﾝｾﾚﾝ	接触型殺菌剤。 病原菌の侵入、菌核の発芽、病斑の拡大を阻止。	耐性は確認されていない。	有	×	
QiI殺菌剤（Qi阻害剤）	21	（単剤）ﾗﾝﾏﾝ、ﾗｲﾒｲ （混合剤）ﾄﾞｰｼｬｽ	ｼｱﾉｲﾐﾀﾞｿﾞｰﾙ系は、病原菌の呼吸系阻害。 べと病菌、疫病菌、根こぶ病菌へ特異的に活性を示す。他の病原菌には効果がない。2001年に登録。 ｽﾙﾌｧﾓｲﾙﾄﾘｱｿﾞｰﾙ系は、卵菌類のﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱ内電子伝達系（ComplexⅢQi）に作用。 べと病菌・疫病菌に特異的に作用。治療効果はないが、遊走子破壊能力があり、感染初期での蔓延防止効果を持つ。ﾗｲﾒｲは2008年に登録。	耐性リスクは未知であるが、高いリスクがあると推測されている。耐性管理が必要である。	無	○	
ﾁｱｿﾞｰﾙｶﾙﾎﾞｷｻﾐﾄﾞ	22	ｴﾄﾌｨﾝ	病原菌の胞子形成等阻害。*Phythophthora* 属菌、*Pythium* 属菌（疫病菌等）などの卵菌類に対して高い抗菌活性を示す。	耐性管理が必要である。	有	○	
ﾍｷｿﾋﾟﾗﾉｼﾙ抗生物質	24	ｶｽﾐﾝ	病原菌のﾀﾝﾊﾟｸ合成阻害。 菌糸伸展を抑制する効果が高い。*Pseudomonas* 属の細菌にも効果を示す。	糸状菌及び細菌（*P.glumae*）の病原菌で耐性が確認されている。耐性管理が必要である。	有	○	
ｸﾞﾙｺﾋﾟﾗﾉｼﾙ抗生物質（蛋白質生合成）	25	ｱｸﾞﾚﾌﾟﾄ	細菌のﾘﾎﾞｿﾞｰﾑ結合阻害。ﾀﾝﾊﾟｸ質の合成阻害も誘起。 野菜、果樹などの細菌性病害に優れた効果を発揮する。	殺殺菌剤。耐性が確認されており、耐性管理が必要である。	有	○	
ｼｱﾉｱｾﾄｱﾐﾄﾞ＝ｵｷｼﾑ	27	（単剤）なし （混合剤） ｶｰｾﾞｰﾄPZ・ﾌﾞﾘｻﾞｰﾄﾞ	病原菌の核酸、ﾀﾝﾊﾟｸ質、脂質合成系、呼吸系阻害。電子伝達阻害。 べと病菌、疫病菌に特異的に作用。	耐性が確認されており、耐性管理が必要である。	有	○	
ｶｰﾊﾞﾒｰﾄ	28	ﾌﾟﾚﾋﾞｸｰﾙN	殺菌剤の中では同一系統が存在しないため指針中では他と記載。 細胞膜の透過性に影響。藻菌類（ﾋﾟｼｳﾑ、疫病、べと病菌、白さび病菌等）に特異的に効果がある。2008年に登録。	耐性管理が必要である。	有	○	
	29	ﾌﾛﾝｻｲﾄﾞ	菌糸の伸長や胞子形成阻害。 ﾊﾀﾞﾆに対する殺卵効果や幼虫の殺虫効果がある。	日本では*Botrytis* 属で耐性が確認されている。	無	×	
ｶﾙﾎﾞﾝ酸	31	ｽﾀｰﾅ	細胞分裂に必要なDNAの複製阻害。 苗腐敗症以外の種子伝染性病害には効果がない。	殺殺菌剤。耐性が確認されており、耐性管理が必要である。	無		

FRAC グループ名	FRAC コード	主な商品名	概　　要	抵抗性に関する動向	治療 効果 の 有無	浸透 移行性	備考
芳香族ヘテロ環	32	タチガレン	作用機作不明。 土壌殺菌剤として、*Fusarium*属菌、*Pythium*属菌及び*Aphanomyces*属菌に対して効果高い。*Rhizoctonia* 属菌には効果劣る。	耐性は確認されていない。	有	○	
ベンゼンスルホン酸	36	ネビジン	病原菌に接触し静菌的(発芽阻止)に作用。 根系から吸収されることはない。Fusarium属菌や*Verticillium*属菌には効果劣る。	耐性は確認されていない。	無	×	
ピリミジンアミン	39	ピリカット	DMI剤と異なった作用機作。 うどんこ病菌のあらゆる生育過程(分生胞子発芽前～分生胞子柄形成)で生育を抑制する。	耐性は確認されていない。	有	○	
ピラゾールカルボキサミド		ハチハチ	電子伝達系(複合体Ⅰ)阻害することによる呼吸阻害。 害虫に対しては主として経皮的に、病害に対しては予防的に効果を発揮。食毒としてよりも接触毒の効果が高い。		無	×	
CAA殺菌剤(カルボン酸アミド)	40	フェスティバル、、レーバス	卵菌類のツユカビ目菌に対して特異的な効果を示す。 遊走子のう・被のう胞子発芽抑制効果が高い。べと病菌・疫病菌に効果を示す。2009年に登録。	*Plasmopara viticola*で耐性が確認されているが、*Phytophthora infestans*では確認されていない。CAAグループのすべてで交差耐性がみられる。	有	○	
		(混合剤) プロポーズ、ベトファイター	遊走子のう形成、胞子発芽、菌糸生育阻害。 べと病菌・疫病菌に特異的に作用する。 上位葉から下位葉への浸透移行性はないが、葉の表面から内部への浸達性、根からの移行性は有する。2007年に登録。		有	○	
テトラサイクリン抗生物質	41	マイコシールド	放線菌から生産される抗生物質、病原細菌のタンパク合成阻害。 グラム陽性菌や陰性菌に殺菌効果がある。また、マイコプラズマ病にも効果を示す。	殺殺菌剤。耐性が確認されており、耐性管理が必要である。	有	○	
ベンズアミド	43	(単剤)シャストフィット (混合剤)リライアブルの成分	病原菌の細胞膜とタンパク質構造を阻害。細胞内容物(タンパク質、炭水化物、アミノ酸塩類)の漏出。 疫病菌に特異的に効果を示す。2009年に登録。	欧州においてぶどうべと病の耐性菌が確認されている。	有	○	
QoSI殺菌剤(QoS阻害剤)	45	ザンプロ	病原菌の呼吸器(電子伝達系複合体Ⅲ)阻害。 疫病菌、べと病菌の生活環のほぼすべてのステージに効果を示す。 ピシウム病、赤焼病に対して高い予防効果を示す。	QoI殺菌剤と交差しない。耐性管理が必要である。	有	○	
OSBPI (オキシステロール結合タンパク質阻害)	49	ゾーベックエニベル、オロンディスウルトラSCの成分	病原菌のオキシステロール結合タンパク質(OSBP)阻害。遊走子の発芽と菌糸伸長を阻害する。	耐性リスクは中程度から高程度と推定。耐性管理が必要である。	有	○	
アリルフェニルケトン	50	プロパティ	病原菌の吸器、分生子の形成阻害。 二次付着器、菌糸の形態異常を低濃度で誘起することによる殺菌効果を示す。	低感受性の小麦うどんこ病菌が発生。耐性管理が必要である。	有	○	
イプフルフェノキン	52	ミギワ	作用機作不明。RNAを構成するピリミジン基のde novo生合成系のうち、ジヒドロオロト酸デヒドロゲナーゼ(DHODH)を阻害し、病原菌の侵入と定着を阻害すると推察されている。	中～高の耐性菌リスク。	無	○	
ベンゾチアジアゾール	P1	アクティガード	植物の全身獲得抵抗性を誘導して発病を防ぐ。	耐性は確認されていない。	無	○	抵抗性誘導
ベンゾイソチアゾール	P2	オリゼメート	病害抵抗性反応による作用。 発病する前の予防的な施用が重要。有効成分は根から速やかに吸収されて体内に浸透移行する。	耐性は確認されていない。	無	○	抵抗性誘導
チアジアゾールカルボキサミド	P3	プイゲット	植物が本来もっている抵抗性を増強する性質のある薬剤。 浸透移行性に優れ、残効性が長い。	耐性は確認されていない。	無	○	抵抗性誘導
イソチアゾールカルボキサミド		スタウト・ルーチン					
ホスホナート	P7	アリエッティ	植物が本来もっている抵抗性を増強する性質のある薬剤。 アリエッティは、病原菌の胞子形成、菌糸侵入を阻害する作用あり。	いくつかの病原菌で耐性が確認されている。	有	○	抵抗性誘導
イソチアゾール	P8	プーン	サリチル酸シグナル伝達経路を活性化させ、植物が本来備えている病害抵抗性を増強させる作用を持つ。	耐性は確認されていない。	無	○	抵抗性誘導

FRAC グループ名	FRAC コード	主な商品名	概　　要	抵抗性に関する動向	治療 効果 の 有無	浸透 移行性	備考
ﾌｪﾆﾙｱｾﾄｱﾐﾄﾞ	U6	ﾊﾟﾝﾁｮTFの成分	作用機作不明。 特にうどんこ病への活性が高く、灰星病にも効果がある。2002年に登録。	*Sphaerotheca*で耐性が確認されており、耐性管理が必要である。	有	○	
ﾁｱｿﾞﾘｼﾞﾝ	U13	(単剤)ｶﾞｯﾃﾝ (混合剤)ｼｮｳﾁﾉｽｹﾌﾛｱﾌﾞﾙ	病原菌の吸器形成と吸器からの栄養吸収を阻害(ﾃﾞｭｱﾙｶｯﾄｵﾌ効果)。 既存のうどんこ病防除薬剤に対する耐性菌にも効果が高い。2013年に登録。	耐性うどんこ病菌発生事例あり。	無	×	
ﾋﾟﾘﾐｼﾞﾉﾝﾋﾄﾞﾗｿﾞﾝ	U14	ﾌﾞﾗｼﾝの成分	菌糸伸長阻害。 病斑形成・胞子形成を抑制し、二次感染を阻止。	耐性は確認されていない。	有	○	
4-ｷﾉﾘﾙ酢酸	U16	ﾄﾗｲ	電子伝達(ﾐﾄｺﾝﾄﾞﾘｱ)系阻害。 ｽﾄﾛﾋﾞﾙﾘﾝ系殺菌剤に対して耐性の病原菌にもﾃﾌﾞﾌﾛｷﾝは有効。	QoI殺菌剤とは交差耐性がない。耐性リスクは未知だが、リスクがあると推測される。耐性管理が必要である。	有		
ﾃﾄﾗｿﾞﾘﾙｵｷｼﾑ	U17	ﾋﾟｼﾛｯｸ、ﾅｴﾌｧｲﾝ	べと病、疫病など卵菌類由来の病害に高い効果を示す。菌糸伸長、胞子発芽を阻害する。	耐性は確認されていない。	無	○	
ｸﾞﾙｺﾋﾟﾗﾉｼﾙ抗生物質	U18	ﾊﾞﾘﾀﾞｼﾝ	酵素(ﾄﾚﾊﾗｰｾﾞ)に対する活性阻害。 病斑の形成や菌核の形成を強く阻害する。浸透移行性はないが、菌糸への薬剤の吸収によって薬剤が付着していない部分まで薬効が波及する。	耐性は確認されていない。	有	×	
種々	NC	ﾊｰﾓﾒｲﾄ	作用機作不明。植物油を有効成分とし、使用回数制限がない。うどんこ病菌に対して物理的な殺菌作用を示す。ﾊﾀﾞﾆ類にも効果がある。	耐性は確認されていない。	有	×	物理的阻害
無機化合物(求電子剤)	M1	ｻﾝﾖｰﾙ・ｷﾉﾝﾄﾞｰ	有機銅は、病原菌の酵素活性阻害。 非常に抗菌活性が広い。一般的に無機銅剤より薬害が軽い。	糸状菌での耐性発現の徴候がなく、一般的に耐性リスクは低いと考えられる。	無	×	有機銅
		ﾄﾞｲﾂﾎﾞﾙﾄﾞｰ・Zﾎﾞﾙﾄﾞｰ・ｺｻｲﾄﾞ・ICﾎﾞﾙﾄﾞｰ	無機銅は、病原菌の酸化系を阻害。非常に抗菌活性が広い。有機銅剤に比べ、薬を硬化させるなどの薬害をおこしやすい。				無機銅
無機化合物(求電子剤)	M2	ｻﾙﾌｧｰ	病原菌の電子伝達系を阻害、ｴﾈﾙｷﾞｰ消耗により殺菌。あるいは、硫黄が酸化され亜硫酸ガスを生じそれが作用しているという説もある。 銅剤と比べ抗菌活性はやや狭く、べと病菌や*Botrytis*属菌(主に灰色かび病の病原菌)等には効果がない。		無	×	無機硫黄
	M3	ｼﾞﾏﾝﾀﾞｲｾﾝ・ｱﾝﾄﾗｺｰﾙ	病原菌の生合成に必要な酵素類の不活性化や微量金属欠乏を引き起こす。非常に抗菌活性が広い。ﾐｶﾝｻﾋﾞﾀﾞﾆに対するｼﾞﾏﾝﾀﾞｲｾﾝの効果は低下している。		無	×	ジチオカーバメート系
ﾌﾀﾙｲﾐﾄﾞ(求電子剤)	M4	ｵｰｿｻｲﾄﾞ	菌体内のSH基やNH_2基と反応し、ｴﾈﾙｷﾞｰの代謝阻害。 抗菌範囲は広いが残効性はなく、保護的な殺菌効果を示す。		無	×	有機塩素系(ｷｬﾌﾟﾀﾝ)
ｸﾛﾛﾆﾄﾘﾙ(ﾌﾀﾛﾆﾄﾘﾙ)(作用点不明)	M5	(単剤)ﾀﾞｺﾆｰﾙ (混合剤)ｱﾐｽﾀｰｵﾌﾟﾃｨ・ﾄﾞｰｼｬｽ・ﾌﾟﾛﾎﾟｰｽﾞ	病原菌の呼吸系阻害。 抗菌活性は広いが、灰色かび病、菌核病、つる枯病、うどんこ病、細菌性病害には効果が劣る。		無	×	有機塩素(TPN)
ﾋﾞｽｸﾞｱﾆｼﾞﾝ(細胞膜撹乱剤、界面活性剤)	M7	ﾍﾞﾙｸｰﾄ・ﾍﾞﾌﾗﾝ	病原菌の器官形成(胞子発芽、発芽管伸長、付着器形成)阻害。 D-ｸﾞﾙｺｰｽ、酢酸、L-ﾒﾁｵﾆﾝの取り込み抑制。 抗菌活性が広いが、細菌病、べと病、疫病、さび病には効果がない。		無	×	グアニジン系
ｷﾉﾝ(ｱﾝﾄﾗｷﾉﾝ)(求電子剤)	M9	ﾃﾞﾗﾝ	病原菌の原形質や酵素ﾀﾝﾊﾟｸに作用し、分生胞子の発芽や植物体内への侵入を阻止。細菌による病害にも効果を示す。		無		有機硫黄
ｷﾉｷｻﾘﾝ(求電子剤)	M10	ﾓﾚｽﾀﾝ	うどんこ病の胞子発芽、付着器形成阻害、菌糸伸長阻害。殺菌作用のほか、ﾊﾀﾞﾆ類、ｺﾅｼﾞﾗﾐ類への効果もある。1964年に登録。		有		キノキサリン系
ﾏﾚｲﾐﾄﾞ(求電子剤)	M11	ｽﾄﾗｲﾄﾞ	胞子発芽時に働く酵素阻害。				その他の合成殺菌剤・天然物由来の殺菌剤
微生物(生菌または抽出物、代謝産物)	BM2	ｴｺﾎｰﾌﾟ・ｴｺｼｮｯﾄ・ﾎﾞﾄｷﾗｰ	競合、微生物寄生、抗生作用、殺菌ﾘﾎﾟﾍﾟﾌﾟﾁﾄﾞによる細胞膜破壊、溶菌酵素、抵抗性誘導(すべての生物農薬に適用しない)。	耐性は確認されていない。	無		ｴｺﾎｰﾌﾟ:糸状菌 *Trichoderma* spp. ｴｺｼｮｯﾄ、ﾎﾞﾄｷﾗｰ:細菌 *Bacillus* spp.

2 性フェロモン剤の使用法

○ ある種の昆虫は、雌が出す臭い物質に雄が誘引されることで、交尾し、産卵している。この雌が出す雄を誘引する臭い物質が性フェロモンで、昆虫（害虫）の種類ごとの特異性が高い。これを害虫防除に利用するために人工的に合成したのが性フェロモン剤である。

○ 性フェロモン剤を用いた防除は、直接害虫を殺すのではなく、害虫の（交尾）行動を制御する防除法であるため、対象とするそれぞれの害虫の生態をよく理解して用いる必要がある。また、近年、多くの合成性フェロモン剤が作られており、対応する害虫の種類も増えている。

○ 防除の方法としては、成虫発生場所の空気中に合成性フェロモンを放出し、雌雄間の交信を攪乱することで交尾率を下げ、次世代の加害期の幼虫密度を抑制しようとする「交信攪乱法」と、トラップ（捕獲器）に合成性フェロモンを取り付け、多量の雄を捕獲することで、雌が交尾する機会を少なくし、次世代の幼虫密度を抑制しようとする「大量誘殺法」がある。

(1)性フェロモン剤を用いた防除の一般的な留意点

①合成性フェロモンは、揮発性で、しかも分解しやすいため、蒸発コントロールと分解防止を目的とした徐放性の製剤（ポリエチレンチューブ、プラスチックテープ、ゴムキャップ等に封入）となっており、保管は密封・冷暗所で行うとともに、保存期限を遵守する。

②各剤に表示されている使用期限、使用量、使用方法等を厳守するとともに、使用上の注意事項も十分確認する。

③性フェロモンによる防除では特に、処理面積と発生密度が防除効果に大きく影響する。

④処理面積は広いほど効果的である。最低限必要な面積は対象の種や環境などによって異なるが、各戸ごとの処理では安定した効果が得られないことも多い。

⑤交信攪乱法では、空気中のフェロモン濃度を高く、むらなく維持できるようなフェロモン剤の量と配置、圃場周辺の地形や環境にも留意する。大量誘殺法ではよくとれる場所にフェロモントラップを置く。

⑥交尾済みの雌が周辺圃場から侵入してくるのを防ぐこと、あるいは防げるような圃場を選ぶこと。

⑦発生密度がある程度を越えると防除率は低下するため、害虫の密度が低い時期から（被害を起こす１世代前の成虫発生期全体を）処理すること。

⑧防除効果の確認・判定は、通常の殺虫剤のようには容易ではないので、指導機関等と連携を図り実施する。

(2)交信攪乱用性フェロモン剤一覧

農　薬　名	農薬の種類	作　物　名	使用目的	適用害虫名	使用時期	10a当たり使用量	使　用　方　法
スカシバコンL	シナンセルア剤	果樹類、さくら、食用さくら(葉)	交尾阻害	コスカシバ	成虫発生初期から終期	40～100本 (8g/100本製剤)	ﾃﾞｨｽﾍﾟﾝｻｰを対象作物の枝に巻き付け設置する。
		かき		ヒメコスカシバ			
		キウイフルーツ		キクビスカシバ		100本 (8g/100本製剤)	
ハマキコンーN	トートリルア剤	果樹類	交尾阻害	リンゴコカクモンハマキ ミダレカクモンハマキ リンゴモンハマキ チャハマキ チャノコカクモンハマキ	成虫発生初期から終期	100～150本 (54g/150本製剤)	本剤を枝にかける。
		フェニックス・ロベレニー		チャハマキ			
		茶		チャハマキ チャノコカクモンハマキ		150～250本 (90g/250本製剤)	本剤を枝にかける、またはﾛｰﾌﾟ状製剤の場合、支柱等を立て対象作物の上部に張り渡す。
						30～50m (54g/30m製剤)	
コンフューザーAA	アリマルア・オリフルア・トートリルア・ピーチフルア剤	果樹類	交尾阻害	キンモンホソガ ナシヒメシンクイ リンゴコカクモンハマキ リンゴモンハマキ モモシンクイガ ミダレカクモンハマキ	成虫発生初期から終期	120～150本 (52g/100本製剤)	ﾃﾞｨｽﾍﾟﾝｻｰを対象作物の枝に挟み込み、又は巻き付け設置する。
コンフューザーMM	オリフルア・トートリルア・ピーチフルア・ピリマルア剤	果樹類	交尾阻害	ナシヒメシンクイ リンゴコカクモンハマキ モモハモグリガ モモシンクイガ	成虫発生初期から終期	100～120本 (55g/100本製剤)	ﾃﾞｨｽﾍﾟﾝｻｰを対象作物の枝に挟み込み、又は巻き付け設置する。
				チャノコカクモンハマキ		120本 (55g/100本製剤)	
コンフューザーN	オリフルア・トートリルア・ピーチフルア剤	果樹類	交尾阻害	ナシヒメシンクイ	成虫発生初期から終期	50～200本 (52g/200本製剤)	ﾃﾞｨｽﾍﾟﾝｻｰを対象作物の枝に巻き付け、又は挟み込み設置する。
				モモシンクイガ チャハマキ チャノコカクモンハマキ リンゴコカクモンハマキ リンゴモンハマキ		150～200本 (52g/200本製剤)	
		すもも		スモモヒメシンクイ		200本 (52g/200本製剤)	
コンフューザーR	オリフルア・トートリルア・ピーチフルア剤	果樹類	交尾阻害	モモシンクイガ ナシヒメシンクイ リンゴコカクモンハマキ ミダレカクモンハマキ リンゴモンハマキ	成虫発生初期から終期	100～120本 (36g/100本製剤)	ﾃﾞｨｽﾍﾟﾝｻｰを対象作物の枝に巻き付け、又は挟み込み設置する。
コンフューザーV	アルミゲルア・ウワバルア・ダイアモルア・ビートアーミルア・リトルア剤	野菜類 いも類 豆類(種実) 花き類・観葉植物	交尾阻害	シロイチモジヨトウ	対象作物の栽培全期間	100本 (41g/100本製剤)	作物の生育に支障のない高さに支持棒等を立て、支持棒にﾃﾞｨｽﾍﾟﾝｻｰを巻き付け固定し、圃場に配置する。
				コナガ オオタバコガ ハスモンヨトウ タマナギンウワバ イラクサギンウワバ ヨトウガ		100～200本 (41g/100本製剤)	

農　薬　名	農薬の種類	作　物　名	使用目的	適用害虫名	使用時期	10a当たり使用量	使　用　方　法
シンクイコンーL	ピーチフルア剤	果樹類	交尾阻害	モモシンクイガ	成虫発生初期から終期	100本（13g/100本製剤）	ﾃﾞｨｽﾍﾟﾝｻｰを対象作物の枝に巻き付け設置する。
ナシヒメコン	オリフルア剤	果樹類	交尾阻害	ナシヒメシンクイ	成虫発生初期から終期	50～100本（23g/100本製剤）	ﾃﾞｨｽﾍﾟﾝｻｰを対象作物の枝に挟み込み、又は巻き付け設置する。
		すもも		スモモヒメシンクイ			
ボクトウコンーH	コッシンルア剤	果樹類	交尾阻害	ヒメボクトウ	成虫発生初期から終期	100～150本（16g/100本製剤）	ﾃﾞｨｽﾍﾟﾝｻｰを対象作物の枝に挟み込み、又は巻き付け設置する。
ヨトウコンーH	リトルア剤	ハスモン ヨトウが 加害する 農作物	交尾阻害	ハスモンヨトウ	成虫発生初期から終期	20～200m（20cmチューブの場合 100～1000本）	【露地】作物上に支柱等を用いて固定する 【施設】施設内上部に固定する、又は支柱等を用いて固定する。
ヨトウコンーS	ビートアーミルア剤	シロイチモジヨトウが加害する農作物	交尾阻害	シロイチモジヨトウ	シロイチモジヨトウ発生初期から終期	【露地】 100～500本 （20cmチューブ） 【ハウス】 100～140m （20cmチューブの場合 500～700本）	作物上に支柱などを用いて固定する。
コナガコンープラス	アルミゲルア・ダイアモルア剤	コナガ、オオタバコガ、ヨトウガが加害する農作物等	交尾阻害	コナガ オオタバコガ ヨトウガ	対象作物の栽培全期間	100～120本（22g/100本製剤）	作物の生育に支障のない高さに支持棒等を立て、支持棒にﾃﾞｨｽﾍﾟﾝｻｰを巻き付け固定し圃場に配置する。
				コナガ オオタバコガ		20～40m（55g/50m製剤）	支柱を立てﾛｰﾌﾟ状の製剤を対象作物の上部に張り渡す。

(3)大量誘殺用 性フェロモン剤一覧

農　薬　名	農薬の種類	作　物　名	使用目的	適用害虫名	使用時期	使用量	使　用　方　法
フェロディンＳＬ	リトルア剤	いも類、豆類、なす科野菜、あぶらな科野菜、レタス、れんこん、にんじん、ねぎ類、いちご、たばこ、まめ科牧草等	誘引	ハスモンヨトウ雄成虫	成虫発生初期から発生終期	２～４個/ha	本剤をトラップ１台当り１個取り付けて配置する。取り付けた薬剤は1.5～２ヶ月間隔で更新する。

3　天敵製剤･微生物天敵製剤(害虫防除用)の使用法

害虫の防除を行う目的で、天敵製剤や微生物天敵製剤が農薬として登録され、市販されるようになってきた。これらの製剤は害虫防除に１つの大きな可能性を持つものであるが、既存の化学農薬を中心にした防除とはかなり異なる性質の防除法であるため、導入する場合には予めその特性をよく理解しておくことが重要である。

(1)天敵製剤の一般的な特徴

① 害虫密度調査と放飼適期

天敵は、寄生あるいは捕食によって害虫密度を低下させるので、効果を得るためには害虫密度と放飼天敵数の比率が重要である。

一般に天敵製剤は単位面積（株）当たりの放飼量が決められているので、日常的に害虫の発生状況の観察を行い、放飼に適した害虫密度に達する時期を把握する必要がある（放飼時の害虫密度が低すぎても、高すぎてもダメで、適期放飼が重要）。

② 害虫・天敵密度管理と効果の判定

また、効果の発現までには一定の期間を要するので、放飼後も定期的な圃場観察を行ない効果の進行状況の把握に努める必要がある(防除の成否を判断し次の対応を考えるためにも）。

③ 化学農薬の影響

天敵は、一般に化学農薬、特に殺虫剤の影響を受けやすいので、その作全体の防除体系を見直す必要がある。

④ 対象害虫

１種類の天敵は１種類の害虫にしか効果を示さないものが多い。

⑤ 保存性

生物であるため、保存がきかないので入手後直ちに圃場へ放飼する必要がある。

⑥ 天敵活動環境

圃場へ放飼後、その活動は温度等の環境条件の影響を受けやすいので注意が必要である。

(2)農薬登録されている天敵製剤一覧

野菜

[1]野菜類(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
アカメ	アカメガシワクダアザミウマ 5,000頭/ﾎﾞﾄﾙ	アザミウマ類	10,000～15,000頭/10a
アフィパール	コレマンアブラバチ 成虫500頭/ﾎﾞﾄﾙ	アブラムシ類	約500～1,000頭/10a
アリガタ	アリガタシマアザミウマ 成虫250頭/ﾎﾞﾄﾙ	アザミウマ類	約500～2,000頭/10a
イサパラリ	イサエアヒメコバチ 成虫250頭/ボトル	ハモグリバエ類	約250頭/10a
エルカード	サバクツヤコバチ 成虫3,000頭/箱	コナジラミ類	1箱/10a
エンストリップ	オンシツツヤコバチ 羽化雌成虫50頭/ｶｰﾄﾞ 50ｶｰﾄﾞ/箱	コナジラミ類	1ｶｰﾄﾞ/25～30株
オリスターA	タイリクヒメハナカメムシ 成虫250頭/ﾎﾞﾄﾙ	アザミウマ類	約500～2,000頭/10a
カゲタロウ	ヤマトクサカゲロウ 300頭/シート	アブラムシ類	10～40頭/㎡
カメノコS	ヒメカメノコテントウ 成虫100頭/ﾎﾞﾄﾙ	アブラムシ類	0.5～2頭/株
ククメリスEX	ククメリスカブリダニ 500頭/ﾎﾞﾄﾙ	アザミウマ類	50～100頭/株
コレトップ	コレマンアブラバチ 250頭/ﾎﾞﾄﾙ	アブラムシ類	1,000～2,000頭/10a
コレパラリ	コレマンアブラハバチ 500頭/ﾎﾞﾄﾙ	アブラムシ類	1,000頭/10a
サバクトップ	サバクツヤコバチ 羽化成虫60頭/カード	コナジラミ類	50～75カード/10a
システムミヤコくん	ミヤコカブリダニ 100頭/パック 100パック/1セット	ハダニ類	50～100パック/10a
スパイデックスバイタル	チリカブリダニ 2,000頭/ﾎﾞﾄﾙ	ハダニ類	約2,000～6,000頭/10a または20～3,000頭/100株
スワルスキー	スワルスキーカブリダニ 250mℓ(25,000頭)/ﾎﾞﾄﾙ	アザミウマ類、コナジラミ類、チャノホコリダニ	250～500mℓ/10a
スワルスキープラスUM	スワルスキーカブリダニ 250頭/ﾊﾟｯｸ 100ﾊﾟｯｸ/袋	アザミウマ類、コナジラミ類、チャノホコリダニ	100～200ﾊﾟｯｸ/10a
タイリク	タイリクヒメハナカメムシ 50頭/50mℓ ボトル:100mℓ、250mℓ	アザミウマ類	約500～2,000頭/10a
チャバラ	チャバラアブラコバチ 100頭/10mℓ	アブラムシ類	2,000頭/10a
チリガブリ	チリカブリダニ 2,000 頭/ﾎﾞﾄﾙ	ハダニ類	2,000～6,000頭/10a
チリカ・ワーカー	チリカブリダニ 2,000頭/ﾎﾞﾄﾙ	ハダニ類	約2,000～6,000頭/10a
チリトップ	チリカブリダニ 成虫2,000頭/ﾎﾞﾄﾙ	ハダニ類	6,000頭/10a
ツヤトップ	オンシツツヤコバチ 羽化雌成虫50頭/ｶｰﾄﾞ 45ｶｰﾄﾞ/箱	オンシツコナジラミ	1ｶｰﾄﾞ/25～30株
ツヤトップ25	オンシツツヤコバチ 羽化雌成虫25頭/ｶｰﾄﾞ 100ｶｰﾄﾞ/箱	オンシツコナジラミ	2ｶｰﾄﾞ/25～30株
ツヤパラリ	オンシツツヤコバチ 羽化雌成虫100頭/ｶｰﾄﾞ	コナジラミ類	1ｶｰﾄﾞ/25～50株
テントップ	ナミテントウ 2齢幼虫200頭/箱	アブラムシ類	10～13頭/㎡
トスパック	タイリクヒメハナカメムシ 成虫250頭/ﾎﾞﾄﾙ	アザミウマ類	約500～2,000頭/10a
ナミトップ	ナミテントウ 成虫100頭/ｶｯﾌﾟ	アブラムシ類	0.5～4頭/株
ナミトップ20	ナミテントウ 成虫20頭/ｶｯﾌﾟ	アブラムシ類	0.5～4頭/株
ヒメトップ	イサエアヒメコバチ 羽化成虫100頭/ボトル	ハモグリバエ類	200～800頭/10a
ベミパール	チチュウカイツヤコバチ 50頭/ｶｰﾄﾞ 50ｶｰﾄﾞ/箱	ﾀﾊﾞｺｺﾅｼﾞﾗﾐ類(ｼﾙﾊﾞｰﾘｰﾌｺﾅｼﾞﾗﾐを含む)	1ｶｰﾄﾞ/25～30株
ミドリヒメ	ハモグリミドリヒメコバチ 成虫25頭/15mℓﾎﾞﾄﾙ 50頭/30mℓﾎﾞﾄﾙ	ハモグリバエ類	100頭/10a
ミヤコトップ	ミヤコカブリダニ 2,000頭/ﾎﾞﾄﾙ	ハダニ類	2,000～6,000頭/10a
メリトップ	ククメリスカブリダニ 50,000頭/ﾎﾞﾄﾙ	アザミウマ類	100頭/株
リクトップ	タイリクヒメハナカメムシ 100頭/100mℓ ボトル:100mℓ、500mℓ	アザミウマ類	1,000～3,000頭/10a
リモニカ	リモニカスカブリダニ 12,500頭/ﾎﾞﾄﾙ	アザミウマ類、コナジラミ類、チャノホコリダニ	25,000～50,000頭/10a

[2]野菜類

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
スパイカルEX	ミヤコカブリダニ 200頭/10mℓ ボトル:100mℓ、250mℓ	ハダニ類	約2,000～25,000頭/10a または20～3,000頭/100株
スパイカルプラス	ミヤコカブリダニ 50頭/パック 100パック/1セット	ハダニ類	40～500パック/10a または2～60パック/100株
スパイカルプラスUM	ミヤコカブリダニ 100頭/パック	ハダニ類	20～250パック/10a または1～30パック/100株

[3]野菜類(露地)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
スワルスキー	スワルスキーカブリダニ 250mℓ(25,000頭)/ﾎﾞﾄﾙ	アザミウマ類	250～500mℓ/10a
スワルスキープラスUM	スワルスキーカブリダニ 250頭/ﾊﾟｯｸ 100ﾊﾟｯｸ/袋	アザミウマ類	100～200ﾊﾟｯｸ/10a

[4]野菜類(施設、ただしトマト、ミニトマトを除く)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
システムスワルくん	スワルスキーカブリダニ 250頭/パック 100パック/1セット	アザミウマ類、コナジラミ類	100～200パック/10a
スワマイト	スワルスキーカブリダニ 25,000頭/ﾎﾞﾄﾙ	アザミウマ類、コナジラミ類	25,000～50,000頭/10a

[5]野菜類(施設、ただしいちごを除く)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
ミヤコスター	ミヤコカブリダニ 2,000頭/ﾎﾞﾄﾙ	ハダニ類	2,000頭/10a

[6]いちご(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
ミヤコスター	ミヤコカブリダニ 2,000頭/ﾎﾞﾄﾙ	ハダニ類	2,000～6,000頭/10a

[7]いちご(露地)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
システムミヤコくん	ミヤコカブリダニ 100頭/パック 100パック/1セット	ハダニ類	100パック/10a

[8]なす(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
キイトップ	キイカブリダニ 1,000頭/ﾎﾞﾄﾙ	アザミウマ類	6～12頭/㎡
ギフパール	ギフアブラバチ 成虫250頭/ﾎﾞﾄﾙ	アブラムシ類	約250～500頭/10a

[9]なす(露地)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
スワルスキー	スワルスキーカブリダニ 250mℓ(25,000頭)/ﾎﾞﾄﾙ	チャノホコリダニ	250mℓ/10a

[10]ほうれんそう(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
ククメリスEX	ククメリスカブリダニ 500頭/ﾎﾞﾄﾙ	ケナガコナダニ	100～200頭/㎡

[11]ピーマン(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
ギフパール	ギフアブラバチ 成虫250頭/ﾎﾞﾄﾙ	アブラムシ類	約250～500頭/10a

[12]トマト(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
バコトップ	タバコカスミカメ 100頭/カップ	コナジラミ類	1頭/2株

[13]きゅうり(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
バコトップ	タバコカスミカメ 100頭/カップ	コナジラミ類	1頭/2株

[14]トウガラシ(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
ギフパール	ギフアブラバチ 成虫250頭/ボトル	アブラムシ類	約250～500頭/10a

[15]豆類(種実)(施設)、いも類(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
スパイデックス	チリカブリダニ 2,000頭/ボトル	ハダニ類	100～300mℓ/10a または20～3,000頭/100株
スワルスキー	スワルスキーカブリダニ 250mℓ(25,000頭)/ボトル	アザミウマ類、コナジラミ類、チャノホコリダニ	250～500mℓ/10a
スワルスキープラスUM	スワルスキーカブリダニ 250頭/パック 100パック/袋	アザミウマ類、コナジラミ類、チャノホコリダニ	100～200パック/10a

[16]豆類(種実)(露地)、いも類(露地)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
スワルスキー	スワルスキーカブリダニ 250mℓ(25,000頭)/ボトル	アザミウマ類	250～500mℓ/10a
スワルスキープラスUM	スワルスキーカブリダニ 250頭/パック 100パック/袋	アザミウマ類	100～200パック/10a

果樹

[1]果樹類

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
スパイカルEX	ミヤコカブリダニ 200頭/10mℓ ボトル:100mℓ、250mℓ	ハダニ類	2.4～12mℓ/樹
スパイカルプラス	ミヤコカブリダニ 50頭/パック 100パック/1セット	ハダニ類	1～40パック/樹
スパイカルプラスUM	ミヤコカブリダニ 100頭/パック	ハダニ類	1～20パック/樹

[2]果樹類(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
システムミヤコくん	ミヤコカブリダニ 100頭/パック 100パック/1セット	ハダニ類	2～5パック/樹
スパイデックスバイタル	チリカブリダニ 2,000頭/ボトル	ハダニ類	約2,000～6,000頭/10a
スワルスキー	スワルスキーカブリダニ 250mℓ(25,000頭)/ボトル	ミカンハダニ	2.5～10mℓ/樹
スワルスキープラスUM	スワルスキーカブリダニ 250頭/パック 100パック/袋	ミカンハダニ	1～4パック/樹

[3]マンゴー(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
システムスワルくん	スワルスキーカブリダニ 250頭/パック 100パック/1セット	チャノキイロアザミウマ	1～2パック/樹
スワルスキー	スワルスキーカブリダニ 250mℓ(25,000頭)/ボトル	チャノキイロアザミウマ	2.5mℓ/樹
スワルスキープラスUM	スワルスキーカブリダニ 250頭/パック 100パック/袋	チャノキイロアザミウマ	1～4パック/樹

[4]かんきつ(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
システムスワルくん	スワルスキーカブリダニ 250頭/パック 100パック/1セット	ミカンハダニ	1～5パック/樹

[5]日本なし(露地)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
システムミヤコくん	ミヤコカブリダニ 100頭/パック 100パック/1セット	ハダニ類	2～5パック/樹

[6]びわ(施設)

農薬名	有効成分(天敵名)	適用害虫名	使用量
システムスワルくん	スワルスキーカブリダニ 250頭/パック 100パック/1セット	ミカンハダニ	2パック/樹

(3)農薬登録されている微生物天敵製剤一覧

普通作物

[1]だいず

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
ハスモン天敵	ハスモンヨトウ核多角体病ウイルス	ハスモンヨトウ	散布 1,000倍～2,000倍 無人ヘリ 8倍

野菜

[1]野菜類(施設)

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
パイレーツ粒剤	メタリジウム・アニソプリエ	アザミウマ類	5g/株(5kg/10a)
ボタニガード水和剤	ボーベリア・バシアーナ	コナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類	1,000倍
マイコタール	バーティシリウム・レカニ	コナジラミ類	1,000倍

[2]野菜類(施設、ただしいちごを除く)

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
プリファード水和剤	ペキロマイセス・フモソロセウス	コナジラミ類、ワタアブラムシ	1,000倍

[3]野菜類

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
バイオセーフ	スタイナーネマ・カーポカプサエ	ハスモンヨトウ	2億5000万頭(約100g)/10a
パストリア水和剤	パスツーリア・ペネトランス	ネコブセンチュウ	1～5kg/10aまたは0.5g/穴
ボタニガードES	ボーベリア・バシアーナ	アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類	1,000倍
		コナガ	1,000倍

[4]トマト

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
ボタニガードES	ボーベリア・バシアーナ	コナジラミ類	1,000倍 ～ 2,000倍
ボタニガード水和剤	ボーベリア・バシアーナ	コナジラミ類	10g/10a/日 ダクト内投入 または 300g/10a

[5]ミニトマト

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
ボタニガードES	ボーベリア・バシアーナ	コナジラミ類	1,000倍 ～ 2,000倍
ボタニガード水和剤	ボーベリア・バシアーナ	コナジラミ類	10g/10a/日 ダクト内投入 または 300g/10a

[6]いちご

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
ハスモン天敵	ハスモンヨトウ核多角体病ウイルス	ハスモンヨトウ	1,000倍～2,000倍

[7]いちご(施設)

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
プリファード水和剤	ペキロマイセス・フモソロセウス	ハダニ類、コナジラミ類、ワタアブラムシ	1,000倍

[8]キャベツ

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
ハスモン天敵	ハスモンヨトウ核多角体病ウイルス	ハスモンヨトウ	1,000倍
ボタニガードES	ボーベリア・バシアーナ	アオムシ	500倍

[9]レタス

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
ハスモン天敵	ハスモンヨトウ核多角体病ウイルス	ハスモンヨトウ	1,000倍～2,000倍
ボタニガードES	ボーベリア・バシアーナ	オオタバコガ	500倍

[10]いも類

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
パストリア水和剤	パスツーリア・ペネトランス	ネコブセンチュウ	1～5kg/10aまたは0.5g/穴

[11]えだまめ

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
ハスモン天敵	ハスモンヨトウ核多角体病ウイルス	ハスモンヨトウ	散布　1,000倍～2,000倍 無人ヘリ　8倍

[12]アスパラガス

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
ハスモン天敵	ハスモンヨトウ核多角体病ウイルス	ハスモンヨトウ	2,000倍

[13]しそ

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
ハスモン天敵	ハスモンヨトウ核多角体病ウイルス	ハスモンヨトウ	1,000倍～2,000倍
ボタニガードES	ボーベリア・バシアーナ	チャノホコリダニ、マデイラコナカイガラムシ	1,000倍

果樹

[1]果樹類

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
バイオセーフ	スタイナーネマ・カーポカプサエ	モモシンクイガ	2億5,000万頭(約100g)/10a
		コスカシバ	2,500万頭(約10g)/10a
バイオリサ・カミキリスリム	ボーベリア・ブロンニアティ	カミキリムシ類	1本/樹

[2]いちじく

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
バイオセーフ	スタイナーネマ・カーポカプサエ	キボシカミキリ幼虫	2,500万頭(約10g)/10a
パストリア水和剤	パスツーリア・ペネトランス	ネコブセンチュウ	1～5kg/10a

[3]マンゴー

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
パイレーツ粒剤	メタリジウム・アニソプリエ	チャノキイロアザミウマ	10g/樹
ボタニガードES	ボーベリア・バシアーナ	チャノキイロアザミウマ	1,000倍

[4]マンゴー(施設)

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
マイコタール	バーティシリウム・レカニ	チャノキイロアザミウマ	1,000倍

[5]なし

農薬名	有効成分	適用害虫名	使用量・希釈倍率
バイオセーフ	スタイナーネマ・カーポカプサエ	ヒメボクトウ	2,500万頭(約10g)/10a

4　主要天敵への薬剤影響一覧表

殺虫剤・殺ダニ剤

薬剤名	IRAC コード	FRAC コード	ミヤコ カブリダニ	チリ カブリダニ	スワルスキー カブリダニ	タバコ カスミカメ	タイリクヒメハナ カメムシ
アカリタッチ乳剤	物理		1	1	1	1000倍影響あり	乾燥後影響なし
アクセルフロアブル	22B		0	0	0	中程度の影響	—
アクタラ粒剤５	4A		14	14	7	—	40以上
アクタラ顆粒水溶剤	4A		14	14	7	29	28以上
アグリメック	6		7	7	14	影響大きい	28以上
アタブロン乳剤	15		14	1	14	幼虫強い影響	28以上
アーデント水和剤	3A		60以上	60以上	60以上	—	約21
アドマイヤー１粒剤	4A		14	14	7	—	40以上
アドマイヤーフロアブル	4A		14	14	7	—	28以上
アドマイヤー水和剤	4A		14	14	卵影響あり	29	28以上
アニキ乳剤	6		7	7	7	強い影響	0
アファーム乳剤	6		7	7	7	強い影響	3
アプロードエースフロアブル	21A+16		28以上	—	30	影響なし	0
アプロード水和剤	16		0	0	7	—	0
アベイル粒剤	4A+28		—	—	影響なし	—	—
アルバリン粒剤	4A		14	14	7	長期残留の可能性	長期残留の可能性
アルバリン顆粒水溶剤	4A		14	14	0	成虫強い影響	28以上
ウララＤＦ	29		0	0	0	影響なし	0
エコピタ液剤	物理		1	1	1	影響なし	0
カスケード乳剤	15		7	0	0	幼虫強い影響	28以上
ガードベイトＡ	3A		—	—	—	—	—
カネマイトフロアブル	20B		0	0	0	影響なし	0
グレーシア乳剤	30		100以上	強い影響	100以上	強い影響	40
コテツフロアブル	13		14	14	14	影響あり	0
コルト顆粒水和剤	9B		ほとんど影響なし	ほとんど影響なし	14	強い影響	0
コロマイト水和剤	6		7	7	7	—	0
コロマイト乳剤	6		7	7	7	影響小さい	0
サフオイル乳剤	物理	NC	1	1	1	影響あり	0
サンマイトフロアブル	21A		30	30	30	成虫強い影響	28以上
スタークル粒剤	4A		14	14	7	長期残留の可能性	長期残留の可能性
スタークル顆粒水溶剤	4A		14	14	0	成虫強い影響	28以上
スターマイトフロアブル	25A		0	0	0	影響なし	0
スピノエース顆粒水和剤	5		7	7	14	7	幼虫成虫死亡率高
ダニオーテフロアブル	33		0	0	0	—	0
ダニコングフロアブル	25B		0	0	0	—	1
ダニサラバフロアブル	25A		0	0	0	影響なし	0
ダニトロンフロアブル	21A		14	14以上	30	影響小さい	0
ダブルシューターSE	5+物理		影響あり	—	14	7	死亡率高
ダブルフェースフロアブル	25B+21A		14	14以上	30	影響なし	0
ダントツ水溶剤	4A		14	14	7	—	28以上
ダントツ粒剤	4A		14	14	7	—	40以上
チェス顆粒水和剤	9B		0	0	0	影響あり	0
ディアナＳＣ	5		14	14	14～21	強い影響	約14
トランスフォームフロアブル	4C		0	0	影響なし	中程度の影響	成虫死亡率高
トリガード液剤	17		0	0	0	幼虫影響小さい	0
トルネードエースＤＦ	22A		0	0	0	影響あり	ほとんど影響なし
粘着くん液剤	物理		1	1	1	幼虫影響あり	0
ノーモルト乳剤	15		0	0	0	幼虫影響あり	14
ハチハチフロアブル	21A	39	40以上	40以上	40以上	—	28以上
ハチハチ乳剤	21A	39	40以上	40以上	40以上	14	28以上
バリアード顆粒水和剤	4A		14	14	7	成虫強い影響	28以上
バロックフロアブル	10B		30以上	30以上	30以上	—	0
ピタイチ	物理		—	—	—	—	—
ピラニカＥＷ	21A		30	30	30	—	1
ファインセーブフロアブル	34		0	0	0	1	7
ファルコンフロアブル	18		0	0	0	幼虫影響小さい	0
フェニックス顆粒水和剤	28		0	0	0	影響なし	0
プリロッソ粒剤	28		0	0	0	—	ほとんど影響なし
プレオフロアブル	un		0	0	0	影響なし	0
プレバソンフロアブル５	28		0	0	0	幼虫影響小さい	0
ベネビアＯＤ	28		0	0	0	影響なし	約7
ベリマークＳＣ	28		0	0	0	—	ほとんど影響なし
マイトコーネフロアブル	20D		0	0	7	影響なし	0
マッチ乳剤	15		0	0	0	幼虫強い影響	28以上
マトリックフロアブル	18		0	0	0	幼虫影響あり	0
ムシラップ	物理		1	1	1	—	乾燥後影響なし
モスピラン粒剤	4A		14	14	7	—	—
モスピラン顆粒水溶剤	4A		14	14	7	成虫強い影響	28以上
モベントフロアブル	23		45	45	30以上	影響なし	0
ヨーバルフロアブル	28		0	0	0	影響なし	0
ラノーテープ	7C		0	0	—	—	—
ロムダンフロアブル	18		0	0	0	—	0

殺菌剤

薬剤名	IRAC コード	FRAC コード	ミヤコ カブリダニ	チリ カブリダニ	スワルスキー カブリダニ	タバコ カスミカメ	タイリクヒメハナ カメムシ
アフェットフロアブル		7	0	0	0	幼虫影響小さい	—
アミスターオプティフロアブル		11+M5	影響なし	0	0	影響小さい	影響なし
アリエッティ水和剤		P7	0	0	7	—	0
アントラコール顆粒水和剤		M3	—	7	影響あり	—	0
オーソサイド水和剤８０		M4	0	0	0	影響なし	0
カーゼートＰＺ水和剤	un	27+M3	14	14	30	—	—
カスミンボルドー		24+M1	7	7	7	影響なし	0
カナメフロアブル		7	0	0	0	—	—
カリグリーン		NC	0	0	0	影響なし	0
カンタスドライフロアブル		7	0	0	0	幼虫影響小さい	0
カンパネラ水和剤		40+M3	14	14	30	—	0
クロスアウトフロアブル		50	—	—	—	—	—
ゲッター水和剤		10+1	14	14	14	—	0
ケンジャフロアブル		7	影響なし	影響なし	影響なし	影響なし	ほとんど影響なし
サプロール乳剤		3	7	7	7	—	0
サンヨール		M1	1	1	1	影響あり	1
シグナムＷＤＧ		11+7	0	0	0	成虫強い影響	—
ジマンダイセンフロアブル	un	M3	14	14	30	—	—
ジマンダイセン水和剤	un	M3	14	14	30	影響なし	0
ジャストフィットフロアブル		43+40	ほとんど影響なし	ほとんど影響なし	ほとんど影響なし	影響なし	0
ジャストミート顆粒水和剤		17+12	0	7	0	—	—
ショウチノスケフロアブル		U13+9	0	0	0	—	1
スクレアフロアブル		11	—	—	成虫影響なし	影響なし	0
スコア顆粒水和剤		3	0	0	—	幼虫影響小さい	—
ストロビーフロアブル		11	0	0	7	成虫影響小さい	0
スミブレンド水和剤		10+2	0	0	0	—	0
スミレックス水和剤		2	0	0	0	影響なし	0
セイビアーフロアブル２０		12	0	0	0	幼虫影響小さい	0
セーフガード乳剤		3	—	—	—	—	—
ダイアメリットＤＦ		M7+19	14	—	21	影響小さい	1
ダイマジン		M7+17	—	—	0	成虫影響あり	—
ダコニール１０００		M5	0	0	0	成虫影響小さい	0
テーク水和剤	un	3+M3	—	—	30	影響小さい	—
デランフロアブル		M9	0	0	0	—	—
ドーシャスフロアブル		21+M5	ほとんど影響なし	ほとんど影響なし	0	—	—
トップジンMペースト		1	—	—	—	—	—
トップジンM水和剤		1	14	14	14	影響なし	0
トリフミン水和剤		3	0	0	0	成虫影響小さい	0
トリフミン乳剤		3	0	0	0	影響なし	—
ニマイバー水和剤		10+1	14	14	影響あり	—	0
ネクスターフロアブル		7	0	0	0	影響なし	ほとんど影響なし
ハーモメイト水溶剤		NC	0	0	0	影響小さい	—
パルミノ	un	M10	21	21	21	影響なし	0
パレード20フロアブル		7	ほとんど影響なし	0	ほとんど影響なし	影響なし	0
パンチョＴＦ顆粒水和剤		U6+3	0	0	0	成虫影響小さい	0
ピクシオＤＦ		17	ほとんど影響なし	ほとんど影響なし	ほとんど影響なし	成虫影響小さい	0
ピシロックフロアブル		U17	影響なし	影響なし	影響なし	影響なし	ほとんど影響なし
ファンタジスタ顆粒水和剤		11	1	1	1	ほとんど影響なし	—
ファンベル顆粒水和剤		M7+11	—	—	1	—	—
フェスティバルＣ水和剤		40+M1	0	0	0	—	—
フェスティバル水和剤		40	0	0	0	—	—
ブリザード水和剤		27+M5	0	0	0	幼虫影響小さい	0
フルピカフロアブル		9	0	0	0	影響なし	0
プロポーズ顆粒水和剤		40+M5	0	0	0	成虫影響小さい	0
ベジセイバー		7+M5	—	—	成虫影響なし	—	—
ベトファイター顆粒水和剤		27+40	0	0	0	—	0
ベルクートフロアブル		M7	0	0	0	ほとんど影響なし	0
ベルクート水和剤		M7	0	0	0	ほとんど影響なし	0
ペンコゼブフロアブル	un	M3	14	14	30	—	0
ペンコゼブ水和剤	un	M3	14	14	30	—	0
ベンレート水和剤		1	14～21	14～21	14	影響なし	0
ホライズンドライフロアブル		27+11	—	ほとんど影響なし	0	—	—
ポリオキシンＡＬ水溶剤		19	14	14	21	—	0
ポリオキシンＡＬ乳剤		19	14	14	21	—	0
ミギワ10フロアブル		52	0	0	0	—	0
モレスタン水和剤	un	M10	21	21	21	影響なし	0
ライメイフロアブル		21	0	0	0	影響なし	0
ラミック顆粒水和剤		M7+50	0	0	0	—	0
ラリー水和剤		3	0	0	0	幼虫影響小さい	0
ラリー乳剤		3	0	0	0	—	0
ランマンフロアブル		21	0	0	0	影響なし	0
リドミルゴールドＭＺ	un	M3+4	14	14	30	—	—
レーバスフロアブル		40	—	0	0	影響なし	—
ロブラール水和剤		2	0	0	7	影響なし	0

本表は各メーカーの技術資料等を基に作成した。「-」は知見無し。数字は影響のある日数を表す。
表中の数字や影響の程度は目安であり、散布時の状況（気象条件、管理状況等）により変化するので注意する。

5 マルハナバチへの農薬の影響一覧表(トマト)

殺菌剤	
農薬名	影響日数
ICボルドー66D	薬剤が乾けば影響なし
アグロケア水和剤	影響なし
アフェットフロアブル	1日
アミスターオプティフロアブル	1日
インプレッションクリア	薬剤が乾けば影響なし
エコショット	1日
エトフィンフロアブル	薬剤が乾けば影響なし
オロンディスウルトラSC	データ無
カーゼートPZ水和剤	1日
カスミンボルドー	薬剤が乾けば影響なし
カッパーシン水和剤	薬剤が乾けば影響なし
カナメフロアブル	データ無
カンタスドライフロアブル	薬剤が乾けば影響なし
カンパネラ水和剤	1日
クリーンカップ	1日
クロスアウトフロアブル	データ無
ゲッター水和剤	1日
ケミヘル	1日
ケンジャフロアブル	ほとんど影響なし
コサイド3000	1日
ザンプロDMフロアブル	翌日導入可能
サンヨール	薬剤が乾けば影響なし
ジーファイン水和剤	薬剤が乾けば影響なし
シグナムWDG	翌日導入可能
ジマンダイセン水和剤	薬剤が乾けば影響なし
ジャストミート顆粒水和剤	1日
ショウチノスケフロアブル	1日
スクレアフロアブル	1日
スコア顆粒水和剤	データ無
スミブレンド水和剤	1日
スミレックス水和剤	1日
セイビアーフロアブル20	薬剤が乾けば影響なし
Zボルドー	影響なし
ゾーベックエニベル	影響なし
ゾーベックエンテクタ	翌日導入可能
ダイアメリットDF	1日
ダイナモ顆粒水和剤	薬剤が乾けば影響なし
ダイマジン	薬剤が乾けば影響なし
ダコニールジェット	1日
ダコニール1000	1日
タフパール	薬剤が乾けば影響なし
テーク水和剤	データ無
デュアルサイド水和剤	薬剤が乾けば影響なし
ドイツボルドーA	薬剤が乾けば影響なし
ドーシャスフロアブル	薬剤が乾けば影響なし
トップジンM水和剤	薬剤が乾けば影響なし
トリフミンジェット	1日
トリフミン水和剤	1日
トリフミン乳剤	1日
ニマイバー水和剤	薬剤が乾けば影響なし
ネクスターフロアブル	1日
バイオキーパー水和剤	薬剤が乾けば影響なし
バチスター水和剤	影響なし
パンチョTF顆粒水和剤	薬剤が乾けば影響なし
パンチョTFジェット	1日
ファンタジスタ顆粒水和剤	薬剤が乾けば影響なし
ファンベル顆粒水和剤	薬剤が乾けば影響なし
フェスティバルC水和剤	薬剤が乾けば影響なし
フェスティバルM水和剤	薬剤が乾けば影響なし
フォリオゴールド	データ無
ブリザード水和剤	データ無
フルピカフロアブル	薬剤が乾けば影響なし
プロポーズ顆粒水和剤	1日
ベジセイバー	1日
ベトファイター顆粒水和剤	薬剤が乾けば影響なし
ベネセット水和剤	1日
ベルクート水和剤	薬剤が乾けば影響なし (3000～6000倍)
ベルクートフロアブル	薬剤が乾けば影響なし (2000倍)

殺菌剤	
農薬名	影響日数
パレード20フロアブル	薬剤が乾けば影響なし
ピクシオDF	影響なし
ペンコゼブ水和剤	薬剤が乾けば影響なし
ペンコゼブフロアブル	薬剤が乾けば影響なし
ベンレート水和剤	1日
ボトキラー水和剤	影響なし
ホライズンドライフロアブル	1日
ポリオキシンAL水和剤	1日
ポリオキシンAL水溶剤	1日
ボルドー水和剤	1日
マスターピース水和剤	影響なし
ミギワ10フロアブル	薬剤が乾けば影響なし
ミニタンWG	データ無
ムッシュボルドーDF	薬剤が乾けば影響なし
ライメイフロアブル	1日
ラリー水和剤	影響なし
ラリー乳剤	影響なし
ラミック顆粒水和剤	薬剤が乾けば影響なし
ランマンフロアブル	薬剤が乾けば影響なし
リドミルゴールドMZ	データ無
レーバスフロアブル	1日
ロブラールくん煙剤	1日
ロブラール水和剤	1日

殺虫剤	
農薬名	影響日数
アカリタッチ乳剤	薬剤が乾けば影響なし
アクセルフロアブル	8日
アクタラ粒剤5	21日
アクタラ顆粒水溶剤	42日
アグリメック	7日
アタブロン乳剤	4日
アドマイヤー水和剤	30日以上 注1)
アドマイヤーフロアブル	30日以上 注1)
アドマイヤー1粒剤	45日
アニキ乳剤	1日
アファーム乳剤	2日
アプロード水和剤	1日
アプロードエースフロアブル	1日
アベイル粒剤	1日
アルバリン顆粒水溶剤	14日
アルバリン粒剤	10日
ウララDF	薬剤が乾けば影響なし
エコピタ液剤	薬剤が乾けば影響なし
エコマスターBT	薬剤が乾けば影響なし
エスマルクDF	影響なし
オレート液剤	薬剤が乾けば影響なし
ガードベイトA	データ無
ガードホープ液剤	14日
カウンター乳剤	1日
カスケード乳剤	2日
ガスタード微粒剤	21日
カルホス粉剤	14日
クリアザールフロアブル	1日
グレーシア乳剤	1日
コテツフロアブル	9日
コルト顆粒水和剤	3日～7日
コロマイト乳剤	1日
サフオイル乳剤	影響なし
サブリナフロアブル	データ無
サンクリスタル乳剤	薬剤が乾けば影響なし
ジャックポット顆粒水和剤	1日
スタークル顆粒水溶剤	14日
スタークル粒剤	10日
スピノエース顆粒水和剤	3日(5000倍) 8日(2500倍)
スラゴ	影響なし
ゼンターリ顆粒水和剤	1日
ダイアメリットDF	薬剤が乾けば影響なし
ダニトロンフロアブル	1日

殺虫剤	
農薬名	影響日数
ダブルシューターSE	3日
ダントツ粒剤	21日(2g/定植時)
ダブルシューターSE	3日
ダントツ粒剤	21日(2g/定植時)
ダントツ水溶剤	15日
チューレックス顆粒水和剤	1日
チューンアップ顆粒水和剤	薬剤が乾けば影響なし
チェス顆粒水和剤	薬剤が乾けば影響なし
ディアナSC	1日
デュアルサイド水和剤	薬剤が乾けば影響なし
デルフィン顆粒水和剤	薬剤が乾けば影響なし
トアロー水和剤CT	薬剤が乾けば影響なし
トアローフロアブルCT	薬剤が乾けば影響なし
トランスフォームフロアブル	2～5日
トリガード液剤	1日
トルネードエースDF	6日
粘着くん液剤	薬剤が乾けば影響なし
ノーモルト乳剤	1日
バイデートL粒剤	14日以上
バシレックス水和剤	薬剤が乾けば影響なし
バリアード顆粒水和剤	1日
ファインセーブフロアブル	1日
ファルコンフロアブル	1日
フーモン	薬剤が乾けば影響なし
フェニックス顆粒水和剤	1日
フェニックスジェット	1日
プリロッソ粒剤	1日
プレオフロアブル	1日
プレバソンフロアブル5	1日
ベストガード水溶剤	10日以上
ベストガード粒剤	30日以上
ベミデタッチ	薬剤が乾けば影響なし
ベネビアOD	1日
ベリマークSC	1日
マイトコーネフロアブル	1日
マッチ乳剤	1日
マトリックフロアブル	1日(風乾後影響なし)
ミネクトデュオ粒剤	14～21日
ムシラップ	薬剤が乾けば影響なし
モスピラン顆粒水溶剤	1～3日
モスピランジェット	1日
モスピラン粒剤	1日
モベントフロアブル	散布30日 潅注45日
モレスタン水和剤	5日
ラノーテープ	併用可能
ヨーバルフロアブル	1日(潅注) 14日(散布)

※ 影響日数の「ー」は不明、「データ無」は判定に値するデータが無い、「影響なし」は虫体へ直接散布しても影響が無い、若しくは土壌処理10日後放飼しても影響が無い。

※※ 病害虫防除法(トマト)掲載農薬を記載。

注1)マルハナバチ導入栽培では使用しない。

(注意)
影響がある農薬は、その期間以上巣箱を施設の外に出す。影響がない農薬も、散布の際、蜂を巣箱に回収、薬液が乾いてから活動させる。
注意点としては、
・影響の長い農薬、臭いのある農薬は使用しない。
・曇天、雨の続く場合は、導入を1～2日延長。
・農薬散布前夜に蜂の出入口を閉め、巣箱をハウス外に出し、翌日散布。十分日数をおく。
・元の位置に設置できるよう巣箱に番号をふる。
・再設置まで2～3日以内が望ましい。
・巣箱移動後、3日以上花粉がとれない場合、花粉を与える。別温室で使用するか、他人に貸す方法も考慮。(幼虫は2日花粉を食べないと死ぬ)。
在来種クロマルハナバチの影響日数は異なる。

6 ミツバチへの農薬の影響一覧表(いちご、なす、メロン)

殺菌剤	
農薬名	影響日数
ICボルドー66D	乾けば影響なし
アグロケア水和剤	影響なし
アフェットフロアブル	乾けば影響なし
アミスターオプティフロアブル	乾けば影響なし
アリエッティ水和剤	1日(メロン)
アントラコール顆粒水和剤	1日(いちご)
硫黄粒剤	影響なし
インプレッションクリア	乾けば影響なし
エコショット	1日
オーソサイド水和剤80	1日
オラクル顆粒水和剤	1日
オルフィンフロアブル	1日
カーゼートPZ水和剤	1日
カスミンボルドー	乾けば影響なし
カッパーシン水和剤	乾けば影響なし
カナメフロアブル	影響なし
カリグリーン	乾けば影響なし
カンタスドライフロアブル	影響なし
カンパネラ水和剤	1日
キノンドー水和剤40	1日
キノンドーフロアブル	1日
クリーンカップ	1日
クロスアウトフロアブル	影響なし
ゲッター水和剤	乾けば影響なし
ケミヘル	1日
ケンジャフロアブル	影響なし
コサイド3000	乾けば影響なし
サンヨール	乾けば影響なし
サンリット水和剤	データ無
ジーファイン水和剤	乾けば影響なし
シーマージェット	2日
シグナムWDG	翌日導入可能
ジマンダイセン水和剤	影響なし
ジマンダイセンフロアブル	影響なし
ジャストミート顆粒水和剤	1日(なす、いちご)
ショウチノスケフロアブル	乾けば影響なし
スコア顆粒水和剤	データ無
スクレアフロアブル	1日
ストロビーフロアブル	乾けば影響なし
スミブレンド水和剤	1日
スミレックス水和剤	1日
セイビアーフロアブル20	1日
Zボルドー	データ無
ダイアメリットDF	データ無
ダイマジン水和剤	乾けば影響なし
ダコニール1000	1日
ダコニールジェット	1日
タフパール	乾けば影響なし
テーク水和剤	データ無
デランフロアブル	影響なし
デュアルサイド水和剤	乾けば影響なし
ドイツボルドーA	乾けば影響なし
ドーシャスフロアブル	影響なし(メロン)
ドキリンフロアブル	1日
トップジンM水和剤	乾けば影響なし
トリフミンジェット	1日
トリフミン水和剤	乾けば影響なし
トリフミン乳剤	乾けば影響なし
ニマイバー水和剤	影響なし
ネクスターフロアブル	1日
ハーモメイト水溶剤	乾けば影響なし
バイオキーパー水和剤	影響なし
バチスター水和剤	影響なし
パンチョTF顆粒水和剤	乾けば影響なし
パンチョTFジェット	1日
ピクシオDF	影響なし
ピシロックフロアブル	乾けば影響なし
ファンタジスタ顆粒水和剤	翌日導入可
ファンベル顆粒水和剤	1日
フェスティバルC水和剤	1日
フォリオゴールド	乾けば影響なし
ブリザード水和剤	データ無
フルピカくん煙剤	1日
フルピカフロアブル	乾けば影響なし
プロパティフロアブル	影響なし
プロポーズ顆粒水和剤	1日
ベジセイバー	1日
ベトファイター顆粒水和剤	乾けば影響なし

殺菌剤	
農薬名	影響日数
ベネセット水和剤	1日
ベルクートフロアブル	1日
ベルクート水和剤	1日
パルミノフロアブル	5日
パレード20フロアブル	乾けば影響なし
ベンレート水和剤	1日
ペンコゼブ水和剤	1日
ペンコゼブフロアブル	1日
ボトキラー水和剤	影響なし
ホライズンドライフロアブル	1日
ポリオキシンAL水溶剤	1日
ポリオキシンAL乳剤	5日
ボルドー	1日
マスタピース水和剤	影響なし
ミギワ10フロアブル	乾けば影響なし
ミニタンWG	データ無
モレスタン水和剤	3日(3000倍)
ライメイフロアブル	1日
ラミック顆粒水和剤	乾けば影響なし
ラリー水和剤	影響なし
ラリー乳剤	影響なし
ランマンフロアブル	乾けば影響なし
リゾレックス水和剤	1日
リドミルゴールドMZ	データ無
レーバスフロアブル	1日
ロブラールくん煙剤	1日
ロブラール水和剤	1日

殺虫剤	
農薬名	影響日数
アーデント水和剤	2日(いちご、メロン)
アカリタッチ乳剤	乾けば影響なし
アクセルフロアブル	1日
アクタラ粒剤5	30日
アクタラ顆粒水溶剤	42日
アグリメック	14日
アタブロン乳剤	1日
アドマイヤー1粒剤	30日(いちご、メロン)
アドマイヤー水和剤	21日以上(メロン)
アドマイヤーフロアブル	21日以上(メロン)
アニキ乳剤	1日
アファーム乳剤	2日
アファームエクセラ顆粒水和剤	データ無
アプロードエースフロアブル	1日
アベイル粒剤	1日
アルバリン粒剤	21～40日
アルバリン顆粒水溶剤	14日
ウララDF	乾けば影響なし
エコピタ液剤	乾けば影響なし
エコマスターBT	乾けば影響なし
エスマルクDF	影響なし
オレート液剤	乾けば影響なし
ガードベイトA	データ無
ガードホープ液剤	データ無
カスケード乳剤	1日
カネマイトフロアブル	乾けば影響なし
カルホス乳剤	使用は避ける
カルホス微粒剤F	使用は避ける
カルホス粉剤	使用は避ける
グレーシア乳剤	1日
コテツフロアブル	10日
コルト顆粒水和剤	使用は避ける
コロマイト水和剤	1日
コロマイト乳剤	1日
サイアノックス乳剤	使用は避ける
サフオイル乳剤	乾けば影響なし
サブリナフロアブル	1日
サンクリスタル乳剤	乾けば影響なし
サンマイトフロアブル	4日
ジャックポット顆粒水和剤	1日
シーマージェット	2日
スタークル粒剤	21～40日
スタークル顆粒水溶剤	14日
スターマイトフロアブル	1日
スピノエース顆粒水和剤	2日(5000倍)
	7日(2500倍)
ゼンターリ顆粒水和剤	使用は避ける
ダイアジノン粒剤3	データ無

殺虫剤	
農薬名	影響日数
ダイアジノン粒剤5	28日
ダニオーテフロアブル	影響なし
ダニコングフロアブル	1日
ダニサラバフロアブル	1日
ダニトロンフロアブル	1日
ダブルシューターSE	2日
ダブルフェースフロアブル	1日
ダントツ水溶剤	25日
ダントツ粒剤	45日(2g/定植時)
チューレックス顆粒水和剤	-
チューンアップ顆粒水和剤	乾けば影響なし
チェス顆粒水和剤	乾けば影響なし
ディアナSC	3日
デルフィン顆粒水和剤	乾けば影響なし
デュアルサイド水和剤	乾けば影響なし
トアロー水和剤CT	乾けば影響なし
トアローフロアブルCT	乾けば影響なし
トランスフォームフロアブル	10日
トリガード液剤	データ無
トルネードエースDF	1日
粘着くん液剤	乾けば影響なし
ノーモルト乳剤	1日
バシレックス水和剤	乾けば影響なし
ハチハチフロアブル	5日
バリアード顆粒水和剤	1日
パルミノ	5日
バロックフロアブル	1日
ピタイチ	乾けば影響なし
ピラニカEW	1日
ファインセーブフロアブル	1日
ファルコンフロアブル	1日
プリロッソ粒剤	1日
フーモン	乾けば影響なし
フェニックス顆粒水和剤	1日
フェニックスジェット	1日
フォース粒剤	21日
プレオフロアブル	影響なし
プレバソンフロアブル5	1日
フローバックDF	影響なし
ベストガード水溶剤	6日
ベストガード粒剤	45日
ベネビアOD	1日
ベリマークSC	1日
マイトコーネフロアブル	1日
マッチ乳剤	1日
マトリックフロアブル	1日(風乾後影響なし)
マブリックジェット	3日
マブリック水和剤20	1日
マラソン乳剤	10日
ミネクトデュオ粒剤	定植後20～30日
ムシラップ	乾けば影響なし
モスピランジェット	1日
モスピラン顆粒水溶剤	1日
モスピラン粒剤	1日
モベントフロアブル	1日(灌注、散布)
ランダイヤ粒剤	29日
ロムダンフロアブル	乾けば影響なし
ヨーバルフロアブル	1日(潅注) 14日(散布)

※影響日数の「ー」は不明、「データ無」は判定に値するデータが無い、「影響なし」は虫体へ直接散布しても影響が無い。

※※ 病害虫防除法(いちご、なす、メロン)に掲載農薬を記載。

(注意)

○他の昆虫(害虫)に比べ、特に殺虫剤に感受性が高く、訪花採蜜時の農薬接触で死亡、行動かく乱が起こりやすいため、薬剤は、ミツバチへの影響が少ないものを使用。

○薬剤の臭いに敏感なので、影響の少ない剤でも散布時巣箱は外に出す。

○薬剤の影響は、ミツバチの種類、ハウスの温度、換気等の影響により異なる場合がある。

7 BT剤の登録薬剤一覧

（本文に記載のある作物への適用）　　使用にあたっては、ＢＴ剤の使用上の注意事項（防除指針P15）を参照のこと。

作物名	適用病害虫名	農薬名	希釈倍数 使用量	使用時期	本剤の総使用回数
水稲	コブノメイガ、イネツトムシ、フタオビコヤガ	チューンアップ顆粒水和剤	2,000～4,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	－
	ニカメイチュウ		1,000～2,000倍		
	コブノメイガ、イネツトムシ、フタオビコヤガ、ニカメイチュウ	エスマルクＤＦ	500～1,000倍		
野菜類	アオムシ、コナガ	エスマルクＤＦ	1,000～2,000倍		
	オオタバコガ、ヨトウムシ		1,000倍		
	ヨトウムシ	チューンアップ顆粒水和剤	2,000倍		
	アオムシ、コナガ、オオタバコガ、ハイマダラノメイガ		2,000～3,000倍		
	ウリノメイガ		3,000倍		
	アオムシ、ウリノメイガ、オオタバコガ、コナガ、シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ	デルフィン顆粒水和剤	1,000倍		
	アオムシ、コナガ	トアローフロアブルＣＴ	1,000～2,000倍		
	オオタバコガ		500～1,000倍		
	アオムシ、コナガ	バシレックス水和剤	1,000～2,000倍		
	タマナギンウワバ		1,000倍		
	ハスモンヨトウ、ヨトウムシ		500倍		
	シロイチモジヨトウ	フローバックＤＦ	1,000～2,000倍		
	アオムシ、コナガ	フローバックＤＦ エコマスターＢＴ	1,000～2,000倍		
	オオタバコガ、ハスモンヨトウ、ヨトウムシ	フローバックＤＦ エコマスターＢＴ	1,000倍		
	オオタバコガ、ハスモンヨトウ	クオークフロアブル	400倍		
	アオムシ、コナガ、ヨトウムシ		400～800倍		
野菜類(パセリ、えごま（葉）を除く)	アオムシ、コナガ	トアロー水和剤ＣＴ	1,000～2,000倍		
	ヨトウムシ		500～1,000倍		
野菜類(はくさい、キャベツを除く)	ヨトウムシ、コナガ、アオムシ	ゼンターリ顆粒水和剤	1,000～2,000倍		
	オオタバコガ、シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ		1,000倍		
野菜類(はくさいを除く)	コナガ、アオムシ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ	ジャックポット顆粒水和剤	1,000倍		
	コナガ、アオムシ、オオタバコガ	チューレックス顆粒水和剤	1,000倍		
野菜類(はくさい、えごま（葉）を除く)	オオタバコガ	サブリナフロアブル	500倍		
	ハスモンヨトウ		500～750倍		
	アオムシ、ヨトウムシ		1,000倍		
	コナガ		1,000～1,500倍		
あぶらな科野菜	アオムシ、コナガ	チューリサイド水和剤	1,000～2,000倍	発生初期 但し、収穫７日前まで	
	タマナギンウワバ		1,000倍		
	ヨトウムシ		500倍		
うり科野菜類	ウリノメイガ	ゼンターリ顆粒水和剤	1,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	
豆類(種実)	ハスモンヨトウ	ゼンターリ顆粒水和剤	1,000倍		
	オオタバコガ	サブリナフロアブル	500倍		
	ハスモンヨトウ		500～750倍		
	ヨトウムシ		1,000倍		
	ハスモンヨトウ	エコマスターＢＴ	1,000倍		
	ハスモンヨトウ	フローバックＤＦ	1,000倍		
	オオタバコガ、シロイチモジヨトウ、ハスモンヨトウ	デルフィン顆粒水和剤	1,000倍		
	コナガ、アオムシ、オオタバコガ、ハイマダラノメイガ	チューンアップ顆粒水和剤	2,000～3,000倍		
	ヨトウムシ		2,000倍		
	ウリノメイガ		3,000倍		
いも類	ハスモンヨトウ	ゼンターリ顆粒水和剤	1,000倍		
	オオタバコガ	サブリナフロアブル	500倍		
	ハスモンヨトウ		500～750倍		
	ヨトウムシ		1,000倍		
	ハスモンヨトウ	フローバックＤＦ エコマスターＢＴ	1,000倍		
	コナガ、アオムシ、オオタバコガ、ハイマダラノメイガ	チューンアップ顆粒水和剤	2,000～3,000倍		
	ヨトウムシ		2,000倍		
	ウリノメイガ		3,000倍		
きゅうり	ウリノメイガ	チューレックス顆粒水和剤 ジャックポット顆粒水和剤	1,000倍		
		クオークフロアブル	400倍		
キャベツ	ハイマダラノメイガ、ネギアザミウマ	エスマルクＤＦ	1,000倍		
	ハイマダラノメイガ	フローバックＤＦ エコマスターＢＴ	1,000倍		
	ヨトウムシ、ハスモンヨトウ	チューレックス顆粒水和剤 ジャックポット顆粒水和剤	1,000倍		
	アオムシ、コナガ、ヨトウムシ	ゼンターリ顆粒水和剤	1,000～2,000倍		
	オオタバコガ、シロイチモジヨトウ、ネギアザミウマ、ハスモンヨトウ		1,000倍		
ブロッコリー	ハイマダラノメイガ	フローバックＤＦ エコマスターＢＴ	1,000倍		
だいこん	ハイマダラノメイガ	エスマルクＤＦ フローバックＤＦ エコマスターＢＴ	1,000倍		

作物名	適用病害虫名	農薬名	希釈倍数 使用量	使用時期	本剤の総 使用回数
はくさい	アオムシ、ヨトウムシ、コナガ	ゼンターリ顆粒水和剤	2,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	－
	アオムシ、ヨトウムシ	サブリナフロアブル	1,000倍		
	コナガ		1,000～1,500倍		
	ハイマダラノメイガ	フローバックＤＦ エコマスターＢＴ	1,000倍		
	コナガ、アオムシ、オオタバコガ、 シロイチモジヨトウ	ジャックポット顆粒水和剤	1,000倍	発生初期 但し、結球開始期まで	
	コナガ、アオムシ、オオタバコガ	チューレックス顆粒水和剤	1,000倍		
かぶ	ハイマダラノメイガ	エスマルクＤＦ	1,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	－
ねぎ	シロイチモジヨトウ	エコマスターＢＴ	1,000倍		
実えんどう	ウリノメイガ	ゼンターリ顆粒水和剤	1,000倍		
さやえんどう	ウリノメイガ	ゼンターリ顆粒水和剤	1,000倍		
えんどうまめ	ウリノメイガ	ゼンターリ顆粒水和剤	1,000倍		
いも類(やまのいもを除く)	ハスモンヨトウ、オオタバコガ	デルフィン顆粒水和剤	1,000倍		
やまのいも	シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、 ハスモンヨトウ	デルフィン顆粒水和剤	1,000倍		
とうもろこし	オオタバコガ	デルフィン顆粒水和剤 ゼンターリ顆粒水和剤	1,000倍		
	ツマジロクサヨトウ	ジャックポット顆粒水和剤	500～1,000倍		
雑穀類	アワノメイガ	エスマルクＤＦ	2,000倍		
雑穀類(そばを除く)	アワノメイガ	フローバックＤＦ エコマスターＢＴ	2,000倍		
雑穀類(ひえを除く)	アワノメイガ	トアロー水和剤ＣＴ サブリナフロアブル	1,000倍		
しょうが	アワノメイガ	エスマルクＤＦ	2,000倍		
チンゲンサイ	ハイマダラノメイガ	フローバックＤＦ エコマスターＢＴ	1,000倍		
果樹類	ケムシ類	デルフィン顆粒水和剤	1,000倍		
	ハマキムシ類	ファイブスター顆粒水和剤	2,000倍		
		フローバックＤＦ	1,000～2,000倍		
		ゼンターリ顆粒水和剤	1,000倍		
		クオークフロアブル	400倍		
果樹類（りんごを除く）	ケムシ類 シャクトリムシ類	エスマルクＤＦ バイオマックスＤＦ	2,000倍		
	ハマキムシ類	エスマルクＤＦ バイオマックスＤＦ	2,000～3,000倍		
		トアロー水和剤ＣＴ	500～1,000倍		
果樹類（りんご、かんきつを除く）	ハマキムシ類 ケムシ類	チューンアップ顆粒水和剤	4,000倍		
かんきつ	アゲハ	デルフィン顆粒水和剤 ファイブスター顆粒水和剤	2,000倍		
		チューンアップ顆粒水和剤	2,000～4,000倍		
	ハマキムシ類 ケムシ類	チューンアップ顆粒水和剤	4,000倍		
かき	イラガ類 カキノヘタムシガ	バシレックス水和剤	1,000倍		
		チューリサイド水和剤		発生初期 但し、収穫７日前まで	
かき（葉）	ハマキムシ類	エスマルクＤＦ	2,000～3,000倍	発生初期 但し、収穫前日まで	
なし	ケムシ類	デルフィン顆粒水和剤 ファイブスター顆粒水和剤	1,000～2,000倍		
日本なし	ハマキムシ類	チューレックス顆粒水和剤 ジャックポット顆粒水和剤	1,000倍		
ブルーベリー	イラガ類	デルフィン顆粒水和剤	1,000倍		

8 微生物農薬(殺菌剤)の使用法(詳しい使用方法等は農薬メーカーホームページ等を参照する)

微生物農薬（殺菌剤）は、化学合成農薬と異なり、次のような長所・短所がある。このため、使用方法によっては効果に"ふれ"を生じるので注意が必要である。

【長所】

①作用範囲（抗菌スペクトラム）が限られるので、有用生物や環境生物に影響が少ない。

②病原菌に対する抵抗性が発達しにくい。

③既に化学合成農薬に発生した耐性菌に対しても有効である。

【短所】

①一般に効果の発現は緩慢であり、処理適期の幅が狭い。このため、適期を外すと効果が現れにくい。

②散布から効果が現れるまでに日数を要する。

③防除効果が栽培環境（気象条件：温度・湿度等、圃場条件等）に影響されやすい。

Ⅰ 水稲関係

(1) エコホープ、エコホープDJ(トリコデルマ アトロビリデ水和剤)

本剤は、有効成分である非病原性糸状菌トリコデルマ　アトロビリデがイネ種子表面で増殖し、ばか苗病菌などの糸状菌やもみ枯細菌病菌などの細菌より先に栄養分を摂取することにより、病原菌の増殖を抑制する（栄養物摂取競合）。また、ばか苗病菌などの糸状菌に対する溶菌作用も確認されている。

（登録内容）

①エコホープ

作物名	適用病害	希釈倍数	使用時期	使用方法	使用回数
稲（箱育苗）	ばか苗病	50倍	播種時覆土前	育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱当り100mℓを散布	―
	もみ枯細菌病	200倍		育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱当り500mℓを散布	
稲	ばか苗病、もみ枯細菌病 苗立枯細菌病、いもち病 苗立枯病(リゾープス菌) ごま葉枯病	200倍	浸種前～催芽前	24～48時間種子浸漬	
			催芽時	24時間種子浸漬	

②エコホープDJ

作物名	適用病害	希釈倍数	使用時期	使用方法	使用回数
稲	ばか苗病、もみ枯細菌病 苗立枯細菌病、褐条病	200倍	浸種前～催芽前	24～48時間種子浸漬	―
			催芽時	24時間種子浸漬	
	いもち病 苗立枯病(リゾープス菌)		浸種前～催芽時		

注）エコホープＤＪはアスパラガスの紫紋羽病にも適用登録がある。

（使用上の注意等）

①有効成分は生菌であるため、入手後できるだけ早く使用し、開封後は全て使い切る。

②使用前に容器をよく振って使用する（エコホープ）。

③種子消毒後は、風乾せず、直ちに浸種あるいは催芽を行う。

④種子消毒時の水温は、10℃以下、30℃以上を避ける。

⑤ベノミル剤、チオファネートメチル剤およびＥＢＩ剤を含む薬剤との混用または播種時処理との体系処理は、効果が低下するので避ける。

⑥きのこ等の菌類の作物に対して影響を及ぼすおそれがあるので、きのこ等に絶対にかからないようにする。

⑦使用した溶液は繰り返し使用しない。

⑧汚染度の高い種子では効果が劣ることがあるので、健全種子の使用や塩水選等の基本的な作業は必ず実施する。

⑨有効期限内に使用する（エコホープ：８ヶ月、エコホープＤＪ：６ヶ月）。

⑩その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(2) タフブロック、タフブロックSP、タフエイド(タラロマイセス フラバス水和剤)

本剤は、病原菌に拮抗特性のあるタラロマイセス フラバス（糸状菌）が種もみ表面に付着･増殖することにより、病原菌の増殖や侵入を防ぎ、糸状菌病や細菌病に対し予防効果を示す。

(登録内容)

①タフブロック

作物名	適用病害	希釈倍数 使用量	使用時期	使用方法	使用回数
稲	褐条病 ばか苗病、いもち病、苗立枯細菌病、もみ枯細菌病、苗立枯病(フザリウム菌) 苗立枯病(リゾープス菌) 苗立枯病(トリコデルマ菌)	200倍	催芽時	24時間種子浸漬	－
			催芽前	24～48時間種子浸漬	
	ばか苗病、いもち病、苗立枯細菌病 もみ枯細菌病	種子重量の2～4%	浸種前	湿粉衣	
		20倍	浸種前～催芽前	１時間種子浸漬	
稲	苗立枯病(フザリウム菌) 苗立枯病(リゾープス菌) 苗立枯病(トリコデルマ菌)	種子重量の４%	浸種前	湿粉衣	－
		20倍		１時間種子浸漬	
稲 (箱育苗)	苗立枯病(リゾープス菌)	200倍	播種時覆土前	育苗箱(30×60×3cm､使用土壌約5L)1箱当り希釈液200mℓを土壌灌注する。	

②タフブロックSP

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量(液量)	使用時期	使用方法	使用回数
稲	ばか苗病、いもち病、苗立枯細菌病、 もみ枯細菌病、 苗立枯病(フザリウム菌) 苗立枯病(リゾープス菌) 苗立枯病(トリコデルマ菌)	50倍	－	浸種前	10～60分間種子浸漬	－
		7.5倍	乾燥種籾1kg当り30mℓ		種子吹き付け処理（種子消毒機使用）または種子塗沫処理	
		4倍	乾燥種籾1kg当り20mℓ			

③タフエイド

作物名	適用病害	希釈倍数 使用量	使用時期	使用方法	使用回数
稲 (箱育苗)	苗立枯細菌病、もみ枯細菌病、 苗立枯病(フザリウム菌) 苗立枯病(リゾープス菌) 苗立枯病(トリコデルマ菌) 苗立枯病(ピシウム菌)	500倍	播種時	育苗箱(30×60×3cm､使用土壌約5L)1箱当り希釈液500mℓを土壌灌注する。	－
	苗立枯細菌病、もみ枯細菌病、 苗立枯病(フザリウム菌) 苗立枯病(リゾープス菌) 苗立枯病(トリコデルマ菌) 苗立枯病(ピシウム菌)	1,000倍		育苗箱(30×60×3cm､使用土壌約5L)1箱当り希釈液1000mℓを土壌灌注する。	

(使用上の注意等)

①本剤の有効成分は生菌であるので、開封後は全て使い切る。

②ベノミル剤、チオファネートメチル剤、ＴＰＮ剤及びＥＢＩ剤（プロクロラズを除く）を含む薬剤との混用または播種時処理との体系処理は効果が低下するので避ける（シンガレセンチュウ剤との併用は問題ない）。

③いもち病防除用の箱処理では、ストロビルリン系薬剤の播種時処理は効果を低下させるので避ける。

④温湯消毒した種もみでも使用可能（併用することで効果が高くなる）

⑤汚染度の高い種子では効果が劣ることがあるので、健全種子の使用や塩水選等の基本的な作業は必ず実施する。

⑥ムレ苗には効果が低いので化学農薬を併用するか、適正な育苗管理を行う。

⑦その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(3) ボトキラー水和剤(バチルス ズブチリス水和剤)

本剤の作用機作は、植物体表面での植物病原菌との棲息場所及び栄養物の奪い合いから生じるため、予防効果が主体となる。

(登録内容)

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量(液量)	使用時期	使用方法	使用回数
稲	いもち病	1,000倍	200～300L／10a	穂ばらみ期～刈取前	散布	－

(使用上の注意等)

①有効成分は生菌であるので、散布液調製後はできるだけ速やかに散布する。開封後は密封保管し、できるだけ早く使い切る。

②他剤と混用すると十分に効果が発揮されない場合があるので注意する。

③穂ばらみ期に散布した後、7～10日間隔で計２回以上散布することが望ましい。

④夏期高温時の使用は避ける。

⑤その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

Ⅱ 野菜関係

(1) ボトキラー水和剤(バチルス ズブチリス水和剤)

本剤の作用機作は、有効成分であるバチルス ズブチリス（細菌）と病原菌との植物体表面での棲息場所及び栄養物の奪い合いから生じる。このため、灰色かび病菌に直接的に作用し死滅させる治療効果はなく、予防効果が主体となる。

（登録内容）

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量(液量)	使用時期	使用方法	使用回数
野菜類	灰色かび病	1,000倍	150～300L／10a	発病前～発病初期	散布	－
		－	10～15g/10a/日		ダクト内投入	
		300g／10a	６～10L／10a		常温煙霧	
	うどんこ病	1,000倍	150～300L／10a		散布	
		－	15g/10a/日		ダクト内投入	

（使用上の注意等）

①有効成分は生菌であるので、散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。また、開封後は密封して保管し、できるだけ早く使い切る。
②保護作用が強く予防効果が主体であるので発病前～発病初期に７～10日間隔で散布する。
③低温条件では効果が出にくいので、10℃以上が確保できる施設内で使用する。
④葉及び果実に汚れが生じるおそれがあるので、収穫時の散布に気をつける。
⑤他剤と混用すると十分に効果が発揮されない場合があるので注意する。
⑥夏期高温時の使用は避ける。
⑦発生を十分抑制できない環境条件では、化学農薬との併用（ローテーション使用）が必要である。
⑧施設内では通常気温が低下し湿度が上昇する時間帯（夕方等）に散布すると効果的である。
⑨ダクト内に投入する場合は、１ヶ月当り300～450g／10aになるよう、暖房機などのダクト取り付け口付近からダクト内に投入する。また、暖房機などが数時間以上運転される条件下で使用する。
⑩その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(2) エコショット(バチルス ズブチリス水和剤)

本剤の作用機作は、ボトキラー水和剤と基本的に同じであるが、バチルス ズブチリスの菌株が異なる。

（登録内容）

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量(液量)	使用時期	使用方法	使用回数
野菜類	灰色かび病	1,000～2,000倍	100～300L／10a	収穫前日まで	散布	－
トマト、ミニトマト	葉かび病					
セルリー、パセリ、しそ	斑点病	2,000倍				
にら	白斑葉枯病					

（使用上の注意等）

①有効成分は生菌であるので、散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。開封後はできるだけ早く使い切る。
②予防効果が主体であるので、発病前～発病初期に７～10日間隔で散布する。また、化学農薬との体系処理も有効である。
③低温条件では有効成分の活動が低下し効果が出にくいので、10℃以上が確保できる条件で使用する。
④混用により効果が劣る薬剤があるので注意する。
⑤すでに発病している場合は、治療効果のある化学農薬を散布した後、本剤との体系防除をする。
⑥その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(3) インプレッションクリア(バチルス アミロリクエファシエンス水和剤)

本剤の作用機作は、ボトキラー水和剤と基本的に同じであるが、バチルス ズブチリスと類縁であるバチルス アミロリクエファシエンスを使用している。

（登録内容）

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量(液量)	使用時期	使用方法	使用回数
野菜類	灰色かび病、うどんこ病	1,000～2,000倍	100～300L／10a	発病前～発病初期まで	散布	－
なす	すすかび病					
にら、にら（花茎）	白斑葉枯病					
トマト、ミニトマト	葉かび病、すすかび病	1,000倍				
ししとう、ピーマン 甘長とうがらし	黒枯病					
しょうが、葉しょうが	白星病					
しそ	斑点病					

（使用上の注意等）

①有効成分は生菌であるので、散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。開封後は密封保管し、できるだけ早く使い切る。
②本剤は吸湿すると固化したり、効果が低下したりすることがあるので、貯蔵に当たっては湿気に注意する。
③所定量を所定の水量に薄め、良くかき混ぜてから散布する。
④保護作用が強く予防効果が主体であるので、発病前～発病初期に７～10日間隔で散布する。
⑤低温下（約10℃以下）では、有効成分の活動が低下し効果が劣るので、低温が予想される場合には使用を避ける。
⑥他剤と混用すると十分に効果が発揮されない場合があるので注意する。
⑦夏期高温時の使用は避ける。
⑧その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(4) アグロケア水和剤(バチルス ズブチリス水和剤)

本剤の作用機作は、ボトキラー水和剤と基本的に同じであるが、バチルス　ズブチリスの菌株が異なる。

(登録内容)

<table>
<tr><th>作物名</th><th>適用病害</th><th>希釈倍数</th><th>使用量(液量)</th><th>使用時期</th><th>使用方法</th><th>使用回数</th></tr>
<tr><td>野菜類</td><td>灰色かび病</td><td>1,000倍</td><td>10L／10a</td><td rowspan="14">収穫前日まで</td><td>常温煙霧</td><td rowspan="14">－</td></tr>
<tr><td>野菜類(トマト、ミニトマト、ピーマン、ほうれんそう、食用ゆり、セルリー、なす、にら、パセリ、しそを除く)</td><td rowspan="2">灰色かび病
うどんこ病</td><td rowspan="6">1,000～
2,000倍</td><td rowspan="13">100～300L／10a</td><td rowspan="13">散布</td></tr>
<tr><td>トマト、ミニトマト、ピーマン、ほうれんそう、食用ゆり、セルリー、なす、パセリ、しそ</td></tr>
<tr><td>トマト、ミニトマト</td><td>葉かび病</td></tr>
<tr><td>にら</td><td>白斑葉枯病、うどんこ病</td></tr>
<tr><td>セルリー</td><td rowspan="3">斑点病</td></tr>
<tr><td>ミニトマト</td><td rowspan="7">2,000倍</td></tr>
<tr><td>パセリ、しそ</td></tr>
<tr><td>ピーマン</td><td>黒枯病</td></tr>
<tr><td>ほうれんそう</td><td>白斑病</td></tr>
<tr><td>なす</td><td>すすかび病</td></tr>
<tr><td>しょうが</td><td>白星病</td></tr>
</table>

(使用上の注意等)

①有効成分は生菌であるので、散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。開封後は密封保管し、できるだけ早く使い切る。
②保護作用が強く予防効果が主体なので、発病前～発病初期に７～10日間隔で散布する。
③低温下では効果が出にくいので、10℃以上が確保される条件で使用する。
④他剤と混用すると十分に効果が発揮されない場合があるので注意する。
⑤夏期高温時の使用は避ける。
⑥その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(5) バチスター水和剤(バチルス ズブチリス水和剤)

本剤の作用機作は、ボトキラー水和剤と基本的に同じであるが、バチルス　ズブチリスの菌株が異なる。

(登録内容)

<table>
<tr><th>作物名</th><th>適用病害</th><th>希釈倍数</th><th>使用量(液量)</th><th>使用時期</th><th>使用方法</th><th>使用回数</th></tr>
<tr><td>野菜類(トマト、ミニトマトを除く)</td><td rowspan="2">うどんこ病、灰色かび病</td><td rowspan="2">1,000倍</td><td rowspan="2">100～300L／10a</td><td rowspan="5">発病前～
発病初期</td><td rowspan="2">散布</td><td rowspan="5">－</td></tr>
<tr><td rowspan="4">トマト、ミニトマト</td></tr>
<tr><td rowspan="3">灰色かび病</td><td rowspan="3">－</td><td>15g/10a/日</td><td>ダクト内
投入</td></tr>
<tr><td>450g/10a</td><td rowspan="2">散布</td></tr>
<tr><td>葉かび病</td><td>1,000倍</td><td>100～300L／10a</td></tr>
</table>

(使用上の注意等)

①有効成分は生菌であるので散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。開封後はできるだけ早く使い切る。
②散布液の調整は、本剤の所定量を少量の水に溶かし、次に所定量の水を加えよく攪拌する。
③保護作用が強く予防効果が主体なので、発病前～発病初期に7～10日間隔で散布する。
④低温下（約10℃以下）では、有効成分の活動が低下し効果が劣るので、低温が予想される場合には使用を避ける。
⑤果実に汚れが生じることがあるので、収穫期の散布には注意する。
⑥他剤と混用すると十分に効果が発揮されない場合があるので注意する。
⑦夏期高温時の使用は避ける。
⑧450g/10aで処理する場合は、散紛機やブロワー等風による処理で実施する。
⑨その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(6) クリーンカップ、ケミヘル(水酸化第二銅、バチルス ズブチリス水和剤)

本剤の作用機作は、ボトキラー水和剤と基本的に同じであるが、菌株が異なるバチルス ズブチリスと銅剤の混合剤である。

(登録内容)

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量(液量)	使用時期	使用方法	使用回数
野菜類	灰色かび病	1,000倍	100～300L／10a	収穫前日まで	散布	－
	うどんこ病	1,000～2,000倍				
トマト、ミニトマト	葉かび病	1,000～2,000倍				
	疫病、すすかび病	1,000倍				
きゅうり	べと病、褐斑病	1,000倍				
	斑点細菌病	2,000倍				
にんじん	黒葉枯病	1,000倍				

(使用上の注意等)

①有効成分の１つは生菌であるので、散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。開封後は密封して保管し、できるだけ早く使い切る。

②予防的効果が主体であるので、発病前～発病初期に７～10日間隔で散布する。

③低温条件では、有効成分の活動が低下し効果が出にくいので、10℃以上が確保できる条件で使用する。

④にんにくに使用する場合は、薬害を生じることがあるので、炭酸カルシウム水和剤を加用する。

⑤アスパラガスに使用する場合は、薬害を生じるおそれがあるので、必ず炭酸カルシウム水和剤を加用する。

⑥きゅうり、はくさい、キャベツ、だいこんに対しては薬害を生じやすいので、次の事項に注意する。

・幼苗期は特に薬害を生じやすいので、中期以降の散布とする。

・高温時には症状が激しくなるので散布は避ける。

・きゅうりの場合は、連続散布すると葉の周辺が黄化したり、硬化することがあるので過度の連用は避ける。

・はくさい、キャベツ、だいこんに使用する場合は、薬害軽減のため炭酸カルシウム水和剤を加用する。なお、収穫間際には汚れを生じるので注意する。

⑦いんげんまめに使用する場合は、幼苗期および高温時の散布は薬害を生じるおそれがあるので避ける。

⑧蚕に対して影響があるので、周辺の桑葉にかからないようにする。

⑨他剤との混用は効果が劣る場合があるので注意する。

⑩夏期高温時の使用は避ける。

⑪その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(7) ミニタンWG(コニオチリウム ミニタンス水和剤)

有効成分であるコニオチリウム ミニタンスは土壌生息の糸状菌であり、土壌中の菌核病菌の菌核にのみ寄生し、菌核を崩壊あるいは生育を阻害する。

(登録内容)

作物名	適用病害	使用量	使用量（液量）	使用時期	使用方法	使用回数
野菜類（キャベツを除く）	菌核病	800g／10a	100L／10a	定植前	全面散布土壌混和	－
キャベツ				すき込み時～定植前		
ねぎ	黒腐菌核病			定植前		
にんにく				植付前		

(使用上の注意等)

①冷蔵（４℃）で保存する。

②希釈する場合は、所定量の水に少量ずつ入れて散布液を調製する。

③有効成分は生菌であるので、開封後は全量を使い切る。

④散布液を圃場に均一に散布し、土壌中に均等に分布するように混和する。

⑤殺菌剤、乳剤等の有機溶剤を含む化学農薬および酸性、アルカリ性を示す化学農薬との混用はしない。

⑥夏期高温時の使用は避ける。

⑦その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(8) マスタピース水和剤(シュードモナス ロデシア水和剤)

本剤の作用機作は、有効成分であるシュードモナス ロデシア（細菌）が、植物体上での病原性細菌との競合作用によると考えられる。本菌はバイオフィルム形成能力を有しており、この特性が病原性細菌との競合作用に効果的に作用していると考えられる。

（登録内容）

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量（液量）	使用時期	使用方法	使用回数
いも類、野菜類(だいこん、はくさい､ブロッコリー、キャベツ、レタス､かぼちゃ、ズッキーニ､しょうが、トマト、ミニトマト、しょうがを除く)	軟腐病	1,000～2,000倍	100～300L／10a	収穫前日まで	散布	－
しょうが	腐敗病					
だいこん はくさい	軟腐病 黒斑細菌病					
キャベツ	軟腐病 黒斑細菌病 黒腐病					
レタス	軟腐病 腐敗病					
ブロッコリー	軟腐病 黒斑細菌病 花蕾腐敗病					
かぼちゃ、ズッキーニ	軟腐細菌病					
トマト、ミニトマト	茎えそ細菌病 軟腐病					
しょうが	腐敗病					

（使用上の注意等）

①有効成分は生菌であるので、開封後は全て使い切る。
②使用量に合わせ薬液を調製し、使いきる。
③予防効果が主体なので、発病前から発病初期に7～10日間隔で散布する。
④散布量は対象作物の生育段階、栽培形態および散布方法に合わせて調整する。
⑤夏期高温時の使用を避ける。
⑥その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

Ⅲ 果樹関係

(1) ボトキラー水和剤(バチルス ズブチリス水和剤)

本剤の作用機作は、有効成分であるバチルス　ズブチリス（細菌）と病原菌との植物体表面での棲息場所及び栄養物の奪い合いから生じる。このため、灰色かび病菌に直接的に作用し死滅させる治療効果はなく、予防効果が主体となる。

（登録内容）

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量(液量)	使用時期	使用方法	使用回数
かんきつ	灰色かび病	1,000倍	200～700L／10a	開花期～幼果期	散布	－
ぶどう		－	15g／10a／日	発病前～発病初期	ダクト内投入	
		1,000倍	200～700L／10a		散布	
なし	黒星病	1,000倍	200～700L／10a			

（使用上の注意等）

①有効成分は生菌であるので、散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。また、開封後は密封して保管し、できるだけ早く使い切る。
②保護作用が強く予防効果が主体であるので発病前～発病初期に７～10日間隔で散布する。
③低温条件では効果が出にくいので、10℃以上が確保できる施設内で使用する。
④葉及び果実に汚れが生じるおそれがあるので、収穫時の散布に気をつける。
⑤他剤と混用すると十分に効果が発揮されない場合があるので注意する。
⑥夏期高温時の使用は避ける。
⑦発生を十分抑制できない環境条件では、化学農薬との併用（ローテーション使用）が必要である。
⑧施設内では通常気温が低下し湿度が上昇する時間帯（夕方等）に散布すると効果的である。
⑨ダクト内に投入する場合は、１ヶ月当り300～450g／10aになるよう、暖房機などのダクト取り付け口付近からダクト内に投入する。また、暖房機などが数時間以上運転される条件下で使用する。
⑩その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(2) エコショット(バチルス ズブチリス水和剤)

本剤の作用機作は、ボトキラー水和剤と基本的に同じであるが、バチルス ズブチリスの菌株が異なる。

(登録内容)

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量(液量)	使用時期	使用方法	使用回数
かんきつ	灰色かび病	1,000～2,000倍	200～700L／10a	開花期～落弁期	散布	－
ブルーベリー		2,000倍		収穫前日まで		
ぶどう		1,000～2,000倍				
	うどんこ病	2,000倍				
なし	黒星病 黒斑病					
おうとう	灰星病	1,000倍				
あんず	かいよう病					
キウイフルーツ						

(使用上の注意等)

①有効成分は生菌であるので、散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。開封後はできるだけ早く使い切る。
②予防効果が主体であるので、発病前～発病初期に７～10日間隔で散布する。また、化学農薬との体系処理も有効である。
③低温条件では有効成分の活動が低下し効果が出にくいので、10℃以上が確保できる条件で使用する。
④混用により効果が劣る薬剤があるので注意する。
⑤すでに発病している場合は、治療効果のある化学農薬を散布した後、本剤との体系防除をする。
⑥その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(3) インプレッションクリア(バチルス アミロリクエファシエンス水和剤)

本剤の作用機作は、ボトキラー水和剤と基本的に同じであるが、バチルス ズブチリスと類縁であるバチルス アミロリクエファシエンスを使用している。

(登録内容)

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量(液量)	使用時期	使用方法	使用回数
もも、ネクタリン	灰星病	1,000～2,000倍	200～700L／10a	発病前～発病初期まで	散布	－
おうとう		1,000～2,000倍				

(使用上の注意等)

①有効成分は生菌であるので、散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。開封後は密封保管し、できるだけ早く使い切る。
②本剤は吸湿すると固化したり、効果が低下したりすることがあるので、貯蔵に当たっては湿気に注意する。
③所定量を所定の水量に薄め、良くかき混ぜてから散布する。
④保護作用が強く予防効果が主体であるので、発病前～発病初期に７～10日間隔で散布する。
⑤低温下（約10℃以下）では、有効成分の活動が低下し効果が劣るので、低温が予想される場合には使用を避ける。
⑥他剤と混用すると十分に効果が発揮されない場合があるので注意する。
⑦おうとうに使用する場合は、着色期以降の散布は果実に汚れを生じることがあるので注意する。
⑧夏期高温時の使用は避ける。
⑨その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(4) アグロケア水和剤(バチルス ズブチリス水和剤)

本剤の作用機作は、ボトキラー水和剤と基本的に同じであるが、バチルス ズブチリスの菌株が異なる。

(登録内容)

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量(液量)	使用時期	使用方法	使用回数
かんきつ	灰色かび病	1,000～2,000倍	200～700L／10a	収穫前日まで	散布	－
なし	黒星病					
ブルーベリー	灰色かび病	2,000倍				

(使用上の注意等)

①有効成分は生菌であるので、散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。開封後は密封保管し、できるだけ早く使い切る。
②保護作用が強く予防効果が主体なので、発病前～発病初期に７～10日間隔で散布する。
③低温下では効果が出にくいので、10℃以上が確保される条件で使用する。
④他剤と混用すると十分に効果が発揮されない場合があるので注意する。
⑤夏期高温時の使用は避ける。
⑥その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(5) バチスター水和剤(バチルス ズブチリス水和剤)

本剤の作用機作は、ボトキラー水和剤と基本的に同じであるが、バチルス　ズブチリスの菌株が異なる。

(登録内容)

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量(液量)	使用時期	使用方法	使用回数
かんきつ	灰色かび病	1,000倍	200～700L／10a	発病前～発病初期	散布	－
マンゴー	軸腐病					

(使用上の注意等)

①有効成分は生菌であるので散布液調整後はできるだけ速やかに散布する。開封後はできるだけ早く使い切る。
②散布液の調整は、本剤の所定量を少量の水に溶かし、次に所定量の水を加えよく攪拌する。
③保護作用が強く予防効果が主体なので、発病前～発病初期に7～10日間隔で散布する。
④低温下（約10℃以下）では、有効成分の活動が低下し効果が劣るので、低温が予想される場合には使用を避ける。
⑤果実に汚れが生じることがあるので、収穫期の散布には注意する。
⑥他剤と混用すると十分に効果が発揮されない場合があるので注意する。
⑦夏期高温時の使用は避ける。
⑧その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

(6) マスタピース水和剤(シュードモナス ロデシア水和剤)

本剤の作用機作は、有効成分であるシュードモナス ロデシア（細菌）が、植物体上での病原性細菌との競合作用によると考えられる。本菌はバイオフィルム形成能力を有しており、この特性が病原性細菌との競合作用に効果的に作用していると考えられる。

(登録内容)

作物名	適用病害	希釈倍数	使用量（液量）	使用時期	使用方法	使用回数
かんきつ	かいよう病	1,000～4,000倍	200～700L／10a	収穫前日まで	散布	－
小粒核果類		1,000～2,000倍				
もも、ネクタリン	せん孔細菌病					
マンゴー	枝枯細菌病 かいよう病	2,000倍				
キウイフルーツ	かいよう病					

(使用上の注意等)

①有効成分は生菌であるので、開封後は全て使い切る。
②使用量に合わせ薬液を調製し、使い切る。
③予防効果が主体なので、発病前から発病初期に7～10日間隔で散布する。
④散布量は対象作物の生育段階、栽培形態および散布方法に合わせて調整する。
⑤夏期高温時の使用を避ける。
⑥その他、薬剤袋や包装等にある使用上の注意を遵守する。

9　ラノーテープの使用方法(注意事項)

有効成分ピリプロキシフェンを黄色のテープに付着させた製剤で、このテープを作物付近に直接設置して使用する非散布型のテープ状製剤。有効成分が蚕に極めて強い毒性を示すこと、また、使用方法が他の殺虫剤の散布とは大きく異なることから以下の点に留意して使用する。

（1）コナジラミ類の密度抑制機構

①有効成分ピリプロキシフェンは、幼若ホルモン様活性物質で、殺成虫効果は示さない。

②しかし、本成分がコナジラミ類の雌成虫の体内に取り込まれると、それから産卵された卵は孵化しなくなる。

③コナジラミ類成虫は黄色に誘引されやすい。誘引されテープに接触すると、有効成分が虫体に付着し、体内に取り込まれ、孵化しない卵を産卵する。

④すべての成虫が誘引されるわけではなく、発生がゼロにはならないが、テープ剤は耐久性、耐光性に優れ長期間その効果が持続するため、結果的に密度抑制が図られる。

（2）使用方法

①定植直後、コナジラミ類の発生初期から設置する。

②1畝あたり1本、畝上に横断幕のように張り渡して設置する。

③成虫は作物体頂上付近での活動が盛んであるので、作物直上の高さに設置する。成長の早い作物で使用する場合、成長に応じてテープの設置高さを上げる。

④テープが作物体に隠れると効果が低下するので、常に目立つ位置に設置する。

（3）使用上の注意点

①蚕に対して長期間強い毒性があるので、付近に桑園、養蚕施設がある場所では使用しない。

②養蚕又は桑生産を行っている農家は使用しない。

③本剤を燃やすと有効成分が広範囲に飛散する恐れがあるので、使用済みであっても絶対に燃やさない。

④使用後は必ず、テープ自体とともに設置に使用した手袋及び空き袋、巻き芯なども含め全量を製品添付の回収袋に集め、販売店に返却する。

⑤石灰硫黄合剤、ボルドー液等アルカリ性農薬をテープへ直接散布しない。

⑥最近発生地域が拡大しているタバココナジラミバイオタイプQは、本剤に対する感受性が低いため、本剤を設置しても密度抑制効果が不十分な場合は薬剤散布に切り替える。

（4）登録の内容

作物名	適用害虫	使用量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数
野菜類(施設栽培)	コナジラミ類	10～50㎡/10a	作物体の付近に設置する	栽培期間中	1回
豆類(種実)(施設栽培)		10～50㎡/10a			
ポインセチア（施設栽培）		25～100㎡/10a			
花き類・観葉植物（施設栽培）		50㎡/10a			

10 メタアルデヒド剤の使用法

メタアルデヒドは、ナメクジ、カタツムリ類を誘引し、食毒や接触作用により死亡させる。

（1）処理上の注意点

1）成分は、強い雨にあうと流失して効果がなくなるので、天候を見定めてから処理する。

2）処理は、ナメクジ、カタツムリ類が夜行性であることから、夕方がよい。

3）適用場所と使用方法をよく確認する。

(2)主要薬剤の使用法

1）水和剤・液剤

●マイキラーL（有効成分：メタアルデヒド 10.0%　人畜毒性：普通物）

適用作物	対象病害虫	適用場所	使用倍率 (使用量)	使用時期/ 使用回数	使用方法
レタス	ナメクジ類 カタツムリ類	－	400倍 (100～300ℓ/10a)	14日前 /3回以内	散布
非結球レタス			400倍 (100～300ℓ/10a)		
キャベツ			400倍 (100～300ℓ/10a)		
かんきつ			200倍 (200～700ℓ/10a)	30日前 /3回以内	
花き類・観葉植物		花き類・観葉植物栽培温室等の生息地	400倍 (100～300ℓ/10a)	－/6回以内	
ナメクジ類、カタツムリ類が加害する農作物等		圃場周辺雑草地の生息地	200～400倍 (100～300ℓ/10a)	－/6回以内	作物にかからないように土壌表面処理する

※水産動植物への影響については、この登録に係る使用方法では該当がない

●マイキラー（有効成分：メタアルデヒド 30.0%　人畜毒性：劇物）

適用作物	対象病害虫	適用場所	使用倍率 (使用量)	使用時期/ 使用回数	使用方法
レタス	ナメクジ類 カタツムリ類	－	200～500倍 (100～300ℓ/10a)	14日前 /3回以内	散布
非結球レタス			500倍 (100～300ℓ/10a)		
キャベツ			200倍 (100～300ℓ/10a)		
かんきつ			200倍 (200～700ℓ/10a)	30日前 /3回以内	
花き類・観葉植物		花き類・観葉植物栽培温室等の生息地	100～200倍 (100～300ℓ/10a)	－/6回以内	
ナメクジ類、カタツムリ類が加害する農作物等		圃場周辺雑草地の生息地	100～200倍 (100～300ℓ/10a)	－/6回以内	作物にかからないように土壌表面処理する

※水産動植物への影響については、この登録に係る使用方法では該当がない

2）粒剤

●ナメクリーン3（有効成分：メタアルデヒド 3.0%　人畜毒性：普通物）

適用作物	対象病害虫	使用量	使用時期/使用回数	使用方法
いちご	ナメクジ類	3kg/10a	前日まで/2回以内	株元散布
はくさい	ナメクジ類 カタツムリ類		3日前まで/2回以内	
キャベツ		1～3kg/10a	14日前まで/2回以内	
レタス				
かんきつ			30日前まで/3回以内	
花き類・観葉植物			-/6回以内	

※水産動植物への影響については、この登録に係る使用方法では該当がない。

3）水田用粒剤（P.56参照）

11 気門封鎖型薬剤の使用法

気門封鎖型薬剤とは、昆虫やダニ類等が呼吸のため空気を取り入れる「気門」と呼ばれる穴を物理的に塞ぎ窒息死させる薬剤のことである。窒息死させるという殺虫方法であるため、抵抗性を発達させた害虫にも有効である。

食品添加物等を主成分とする薬剤のため、使用回数制限もなく登録作物の範囲も広いため、ローテーション剤として有効な場面があると考えられる。

その他の特徴としては、性質上、効果は速効的。散布時に直接かからなければ効果がなく、残効性もない。気門に異物が入りにくい虫には効果がない。

気門封鎖型薬剤の登録状況及び効果比較表

薬剤名	対象病害虫			
	ハダニ類	アブラムシ類	コナジラミ類	うどんこ病
粘着くん液剤	○	○	△	△
粘着くん水和剤	○	○		
エコピタ液剤	○	○	○	△
アカリタッチ乳剤	○			○
オレート液剤		○	○	○
サンクリスタル乳剤	△	△	○	○
ムシラップ	○	○	○	△
フーモン	○	○	○	○
サフオイル乳剤	○		○	○

※空欄はどの作物にも登録がないことを示す。

※△は登録はあるが効果の低い事例が報告されていることを示す。

(1) 使用上の注意

① 散布液が直接かからないと効果がないため､病害虫にムラなく薬液がかかるよう葉の表裏に丁寧に散布する。
② 卵に効果がなく（サフオイルを除く）、残効性も短いため、夏期高温時など害虫の増殖や圃場外からの飛び込みが活発なときには、５～７日程度の間隔で連続２回散布や他剤とのローテーション散布を行う。
③ 夏期高温時など一般に薬害が生じやすい条件では使用を避ける。
④ 薬害が発生するおそれがあるため、はじめて利用する作物、品種では試しがけを行い、周辺作物にかからないようにする。
⑤ 展着剤は加用の必要はない。
⑥ 散布量は対象作物の生育段階、栽培形態および散布方法に合わせ調節する。
⑦ 散布液の調整に際してはよくかき混ぜ、調整後はなるべく早く使用し、使い切る。

(2) 各種薬剤の使用方法（指針未掲載作物は除く）

●粘着くん液剤（有効成分:デンプン　人畜毒性:普通物　水産動植物への影響:○）

適用作物名	対象病害虫	使用倍率	使用時期	使用回数
かんきつ	ミカンハダニ	100倍	収穫後～萌芽前まで	－
もも	ハダニ類	100倍	収穫前日まで	－
野菜類	アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類、うどんこ病	100倍	収穫前日まで	－
かんしょ	ハダニ類	100倍	収穫前日まで	－

（注意事項）

① 使用に際しては、容器をよく振ってから使用する。
② 軟弱徒長苗などには薬害を生ずるおそれがあるので、使用を避ける。
③ ボルドー液を散布した後に本剤を散布すると薬害を生ずるおそれがあるので、使用を避ける。
④ かんきつに使用する場合は、果実に薬害を生ずるおそれがあるので、果実のある時期は使用を避ける。
⑤ みずなすに使用する場合は、果実に薬害を生ずるおそれがあるので、果実のある時期は使用を避ける。
⑥ 直射日光をさけ密栓して保管するが、低温度（０℃以下）で保管すると凍結し溶解後効果が低下するので、このような条件下では保管しない。

●粘着くん水和剤（有効成分:デンプン　人畜毒性:普通物　水産動植物への影響:○）

適用作物名	対象病害虫	使用倍率	使用時期	使用回数
かんきつ	ミカンハダニ	500～1000倍	収穫前日まで	－
	アブラムシ類	500倍		
果樹類(かんきつを除く)	アブラムシ類、ハダニ類	500倍	収穫前日まで	－

（注意事項）

① テンプンの性質上、一気には溶解しにくいので、予め薬剤重量の10倍程度の水に溶かした後に所定量の水を張ったタンクに投入、攪拌することが望ましい。
② 水を張ったタンクに一気に投入した場合、ダマが生じることがある。ダマが生じた場合は棒などで十分攪拌し溶け残りのないことを確認する。
③ 薬剤を投入したあとに水を加えると多量の泡が生じる場合があるので避ける。
④ 薬剤散布後や機材洗浄時にタンク内に大量の泡が生じることがある。泡たちがひどい時は市販の消泡剤などで処理する。
⑤ 散布液製剤後はそのまま放置せず、できるだけ速やかに散布する。また散布機の循環装置（プロペラ、戻り水）を稼動させた状態で散布する。
⑥ 散布を中断した場合は、再開する前には棒などで薬液を攪拌した後、十分溶解していることを確認して散布する。

●エコピタ液剤 （有効成分:還元澱粉糖化物　人畜毒性:普通物　水産動植物への影響:○）

適用作物名	対象病害虫	使用倍率	使用時期	使用回数
かんきつ	ミカンハダニ	100～300倍	収穫前日まで	－
	アブラムシ類、ハダニ類(ミカンハダニを除く)、うどんこ病	100倍	収穫前日まで	
果樹類(かんきつを除く)	アブラムシ類、ハダニ類、うどんこ病	100倍	収穫前日まで	－
野菜類(いちご、トマト、ミニトマト、きゅうり、なすを除く)	アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類、うどんこ病	100倍	収穫前日まで	－
いちご	アブラムシ類、コナジラミ類、うどんこ病	100倍	収穫前日まで	－
	ハダニ類	100倍	収穫前日まで	
	ハダニ類　使用方法:10秒～1分間苗浸漬	100倍	定植前	
トマト	アブラムシ類、ハダニ類	100倍	収穫前日まで	－
	コナジラミ類、うどんこ病	100～200倍		
ミニトマト	アブラムシ類、ハダニ類	100倍	収穫前日まで	－
	コナジラミ類、うどんこ病	100～200倍		
きゅうり	アブラムシ類、ハダニ類	100倍	収穫前日まで	－
	コナジラミ類、うどんこ病	100～200倍		
なす	アブラムシ類、ハダニ類	100倍	収穫前日まで	－
	コナジラミ類、うどんこ病	100～200倍	収穫前日まで	－
豆類(種実)	アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類、うどんこ病	100倍	収穫前日まで	－
いも類	アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類、うどんこ病	100倍	収穫前日まで	－
とうもろこし	ムギクビレアブラムシ	100倍	収穫前日まで	－

（注意事項）
① 雨天時等湿度が高く、散布後の薬液が乾きにくい条件下では薬害が出る場合があるので注意する。
② なしに使用する場合、青なし品種（二十世紀、ゴールド二十世紀等）には、薬害（褐変）が生じるおそれがあるので注意する。
③ すもも、かき、ぶどうに使用する場合、幼果期以降の散布は果粉の溶脱を生じるおそれがあるので果実のある時期は使用しない。

●アカリタッチ乳剤(有効成分:プロピレングリコールモノ脂肪酸エステル　人畜毒性:普通物　水産動植物への影響:○)

適用作物名	対象病害虫	使用倍率	使用時期	使用回数
果樹類	ハダニ類	1,000～2,000倍	収穫前日まで	―
野菜類	ハダニ類	1,000～3,000倍	収穫前日まで	―
	うどんこ病	2,000倍		
いも類	ハダニ類	2,000～3,000倍	収穫前日まで	―
	うどんこ病	2,000倍		

（注意事項）
① かんきつに使用する場合、濃度が濃くなった場合や高温時期に、果実に薬害を生じるおそれがあるので、使用濃度を厳守し、高温時の散布は避ける。普通温州以外では幼果期及び果実肥大期の散布はできるかぎり避け、特に所定の高濃度での散布は避ける。
② 日本なしに使用する場合、果実に薬害を生ずるおそれがあるので使用濃度を厳守し、特に幼果期の散布は避ける。
③ 果菜類で使用する場合、散布液が溜まるような状態では、薬害が発生することがあるので、薬液の乾きやすい時に、所定範囲内の低濃度で使用する。
④ うどんこ病に使用する場合、発病初期に散布する。
⑤ 散布液が溜まるような状態では、油浸状・茶褐色の薬害（いちごの果実など）が発生することがあるので、薬液の乾きやすい時に登録の範囲内の少ない散布量で散布する。
⑥ 高温時や日射の強い時間帯、また寒暖の差が激しい時期の散布は避ける。
⑦ いちごでは、他剤混用散布による葉での薬害事例、バロックとの混用では果実に茶褐色の薬斑(あまおとめ)事例があるので利用にあたっては混用を避け、倍率は2,000倍で行う。

●オレート液剤（有効成分:オレイン酸ナトリウム　人畜毒性:普通物　水産動植物への影響:○）

適用作物名	対象病害虫	使用倍率	使用時期	使用回数
果樹類(なしを除く)	アブラムシ類	100倍	発生初期～収穫前日まで	－
なし	アブラムシ類	100～200倍	発生初期～収穫前日まで	－
野菜類(いちごを除く)	アブラムシ類	100倍	発生初期～収穫前日まで	－
	コナジラミ類	100～300倍		
いちご	アブラムシ類	100倍	発生初期～収穫前日まで	－
	コナジラミ類	100～300倍		
	うどんこ病	100倍	発病初期～収穫前日まで	

（注意事項）
① 本葉６～７枚期までの散布は、薬害の出るおそれがあるので避ける。
② 散布直後の降雨は効果を低下させるので、天候を見きわめてから散布する。
③ アルカリ性剤のため、他の薬剤との混用または近接散布には注意する。

●サンクリスタル乳剤(有効成分:脂肪酸グリセリド　人畜毒性:普通物　水産動植物への影響:○)

適用作物名	対象病害虫	使用倍率	使用時期	使用回数
野菜類（なす、トマト、ミニトマト、しゅんぎくを除く）	アブラムシ類、コナジラミ類	300倍	収穫前日まで	－
	ハダニ類、うどんこ病	300～600倍		
なす	アブラムシ類、コナジラミ類	300倍	収穫前日まで	－
	ハダニ類、チャノホコリダニ、うどんこ病	300～600倍		
トマト	アブラムシ類、コナジラミ類	300倍	収穫前日まで	－
	ハダニ類、トマトサビダニ、うどんこ病	300～600倍		
ミニトマト	アブラムシ類、コナジラミ類	300倍	収穫前日まで	－
	ハダニ類、トマトサビダニ、うどんこ病	300～600倍		
いちじく	ハダニ類	600倍	収穫前日まで	－
ぶどう	ハダニ類	600倍	収穫前日まで	－
かんきつ	ミカンキジラミ	600倍	収穫前日まで	－
しゅんぎく	ハダニ類、うどんこ病	300～600倍	収穫前日まで	－
	アブラムシ類、コナジラミ類、ハクサイダニ	300倍		

（注意事項）
① トリアジン水和剤、スルフェン酸系水和剤あるいはキャプタン水和剤およびストロビルリン系薬剤と同時施用及び近接散布は薬害を生じるおそれがあるので使用は避ける。ストロビルリン系薬剤を散布した後は、２週間以上間隔をあけて本剤を散布する。
② アセタミプリド剤、トリフルミゾール剤、ベノミル剤、キャプタン剤との混用も薬害を生じるおそれがあるので使用しないで下さい。
③ なす、ピーマン、はくさい、チンゲンサイ等に使用する場合、幼苗期には葉先枯れを生じることがあるので使用を避ける。
④ 葉面散布肥料との混用により薬害を生ずる場合があるので、混用は避ける。
⑤ いちごで使用する場合、完熟状態での使用は品種により果実が黒ずむ場合があるので、完熟となる前までに散布する。
完熟の果実を収穫する際は、それらの果実を全て収穫した後に散布する。
⑥ かんきつに使用する場合、次の2点の注意事項を守る。1.品種、使用時期によっては果実に薬害を生じるおそれがあるので、事前に安全を確認して使用し、また樹勢が弱っている場合には散布しない。2.ジチアノン剤との混用並び近接散布は果実に薬害を生じるので避ける。

●ムシラップ(有効成分:　ソルビタン脂肪酸エステル　人畜毒性:普通物　水産動植物への影響:○)

適用作物名	対象病害虫	使用倍率	使用時期	使用回数
野菜類	アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類、うどんこ病	500倍	収穫前日まで	－
豆類(種実)	アブラムシ類、ハダニ類、うどんこ病	500倍	収穫前日まで	－
いも類	アブラムシ類、ハダニ類、うどんこ病	500倍	収穫前日まで	－

（注意事項）
① 薬害のおそれがあるので他の薬剤との混用は避ける。
② 灰色かび病が多発すると本剤は効果がやや低いので、他剤と併用する。
③ 本剤は低温（10℃以下）で放置された場合、一部白濁沈殿を生じる場合があるので、使用の際にはあらかじめ透明液体にもどしてから（10℃以上に置いておくか、温湯を用いて溶かす）使用する。
④ いちごに使用する場合、品種により果実に薬害を生じるおそれがあるので、事前に使用品種における薬害の有無を確認する。
⑤ キノン系、キノキサリン系、ストロビルリン系、アニリド系薬剤との同時施用は、薬害を生じるおそれがあるので使用しない。

●フーモン（有効成分：ポリグリセリン脂肪酸エステル　人畜毒性:普通物　水産動植物への影響:この登録に係る使用方法では問題はない）

適用作物名	対象病害虫	使用倍率	使用時期	使用回数
野菜類	アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類、うどんこ病	1,000倍	収穫前日まで	－
かんきつ	ハダニ類	1,000倍	収穫前日まで	－

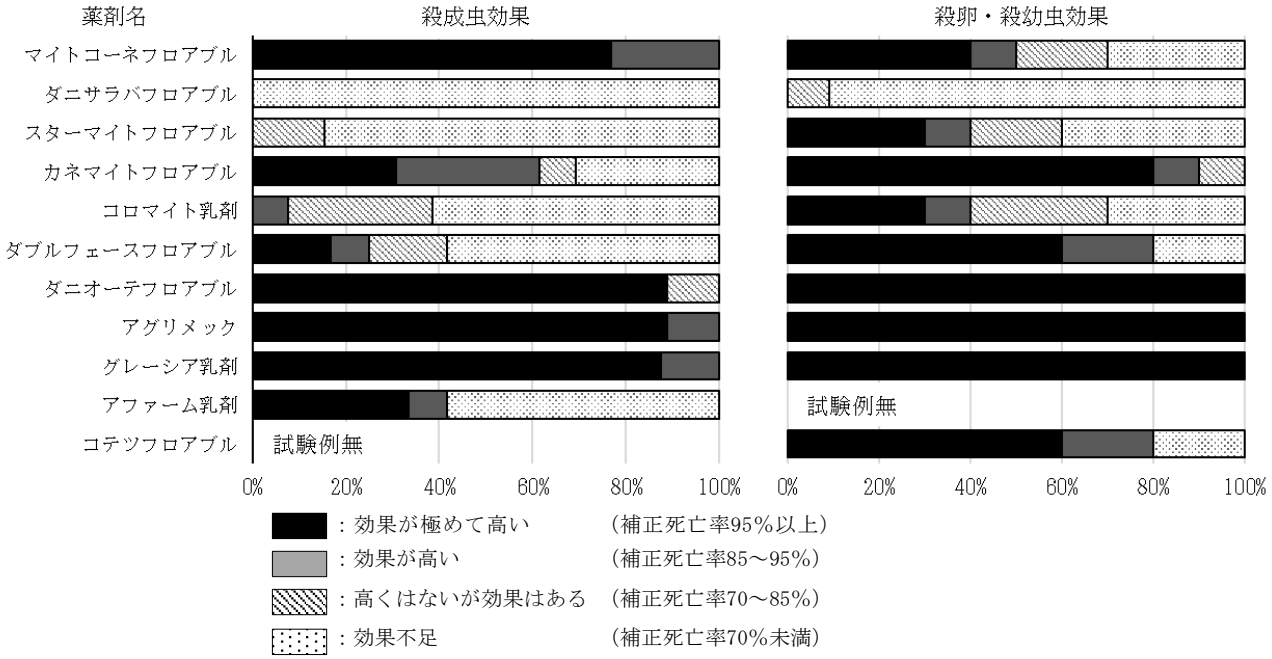
（注意事項）
① 散布直後の降雨が予想される場合は使用を避ける。
② 作物の幼苗期や軟弱徒長苗、高温時には使用しない。
③ ストロビルリン系薬剤（アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブル等）及び混用事例により薬害の生じる事例のあるもの（オーソサイド水和剤、モレスタン水和剤、イオウフロアブル、サンヨール、オサダンフロアブル、カネマイトフロアブル、ボタニガードＥＳ）との同時施用・近接散布は避ける。
④ 展着剤としても登録がある（展着剤の使用法参照）。

●サフオイル乳剤(有効成分：調合油　人畜毒性:普通物　水産動植物への影響:○)

適用作物名	対象病害虫	使用倍率	使用時期	使用回数
野菜類（トマト、ミニトマトを除く）	ハダニ類	300～500倍	収穫前日まで	－
	チャノホコリダニ、コナジラミ類、うどんこ病	300倍		－
トマト	ハダニ類	300～500倍	収穫前日まで	－
	チャノホコリダニ、トマトサビダニ、コナジラミ類、うどんこ病	300倍		－
ミニトマト	ハダニ類	300～500倍	収穫前日まで	－
	チャノホコリダニ、トマトサビダニ、コナジラミ類、うどんこ病	300倍		－
かんきつ	ミカンハダニ	500倍	収穫前日まで	－

※サフオイル乳剤は、殺卵活性（孵化阻害効果）を有する。
（注意事項）
① 軟弱徒長苗では、薬害を生じるおそれがあるので使用を避ける。
② 作物及び害虫に薬液を確実に付着させるため、展着剤を加用した方が良い。
③ いちごに使用する場合、オーソサイド水和剤80及びデランフロアブルとの混用・近接散布は、薬害を生じるおそれがあるので避ける。

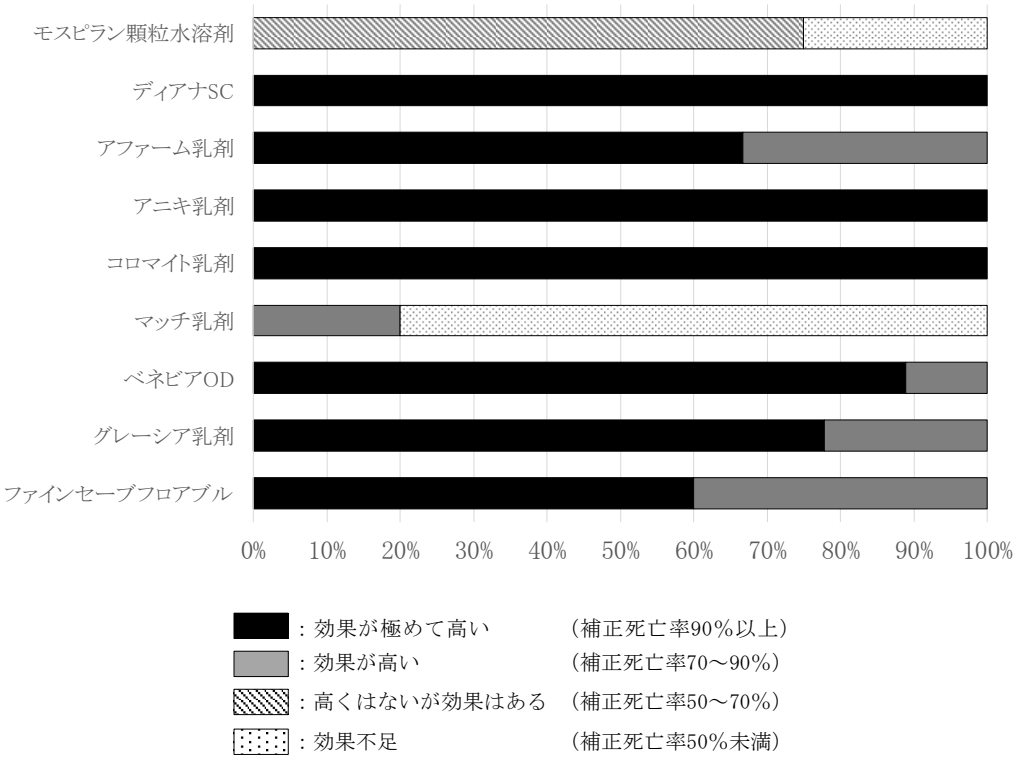
12 いちごナミハダニ防除薬剤の効果



愛媛県内のイチゴから採取したナミハダニを対象に、2018年～2019年に愛媛県農林水産研究所で実施された室内試験結果より。
効果を４つに区分して、試験総数に対する割合で表示した。

〈イチゴのハダニ類防除に関する補足〉
●防除時期
定植後間もない時期～秋季の防除が重要。
この時期は、通常ハダニ類は容易に確認できないほど少なく、生息部位である葉裏へも比較的かけやすい時期。
この後、気温も下がるため増殖はさらに遅くなる。
●散布方法
葉裏に薬液をかける意識が重要。
ハダニ類の生息部位は「葉裏」のため、真上からの散布や高設栽培での２～４畦飛ばしの散布では、葉裏への薬剤付着が不十分になり、短期間での再散布が必要になったり、散布回数が多くなったりすることにより抵抗性の発達を早めるおそれがある。

13 タバココナジラミ防除薬剤の効果



愛媛県内で採取したタバココナジラミを対象に、2023年～2024年に愛媛県農林水産研究所で実施された室内試験結果より、効果を４つに区分して、試験総数に対する割合で表示した。

〈タバココナジラミ防除に関する補足〉

●散布方法

葉裏に薬液をかける意識が重要。

コナジラミ類幼虫の生息部位は「葉裏」のため、真上からの散布や高設栽培での２～４畦飛ばしの散布では、葉裏への薬剤付着が不十分になり、短期間での再散布が必要になったり、散布回数が多くなったりすることにより抵抗性の発達を早めるおそれがある。

14 展着剤の使用法

展着剤の主成分「界面活性剤」は、固体－液体、液体－液体などの界面(表面)に配列し、湿展(濡れ広がり)、乳化、分散、浸透、固着、懸濁、消泡などの物理化学的性質を左右している。

(1) 作物の濡れ性について

1)濡れが悪いもの……稲、麦類、大豆、ねぎ類、キャベツ、さといも等

2)濡れが中程度のもの……ぶどう、トマト、なす、いちご、メロン等

3)濡れが良いもの……りんご、もも、なし、みかん、かき、茶、とうもろこし、きゅうり、いんげん、さつまいも等

(2) 主要展着剤の使用法

- 非イオン性界面活性剤
  - 単一成分系
    - エーテル型…… タイプA
    - エステル型…… タイプB
  - 複数成分系…… タイプC
- 非イオン性界面活性剤＋陰イオン性界面活性剤…… タイプD
- 非イオン性界面活性剤＋陽イオン性界面活性剤…… タイプE
- パラフィン系…… タイプF
- その他

注) タイプA～Fは分類の便宜上のものである。

タイプ	農薬名	毒性 人畜	毒性 魚毒	成分	適用農薬	適用作物	散布液10ℓ当たり使用量	注意事項等
A	展着剤 アグラー	普	○	ポリオキシエチレン アルキルフェニル エーテル 20.0%	硫黄剤、銅剤等の殺菌剤、塩素剤、リン剤等の殺虫剤、植物成長調整剤、除草剤	果樹類、野菜類、花き類、観葉植物、その他の一般畑作物	(倍数) 5,000～ 10,000倍	
A	展着剤 ササラ	普	△	ポリオキシエチレン アルキルエーテル 55.0%	殺虫剤、殺菌剤	稲、麦類、雑穀類、果樹類(りんごを除く)、野菜類、いも類、豆類(種実)、てんさい、花き類、観葉植物	3.3～ 5mℓ	1)眼に対し刺激性があるので、散布液調製時及び散布の際は保護眼鏡を着用して薬剤が眼に入らないように注意する。 2)水産動植物(魚類)に影響を及ぼすので、養魚田では使用しない。 3)作物の幼苗期や高温時など、一般に薬害が生じやすい条件では本剤の使用はさける。 4)ももには薬害を生じるおそれがあるので使用しない。 5) 果樹及び果菜類では果実の薬液の溜まり部に薬害を生じるおそれがあるので、散布水量に注意して使用する。 6) おうとう、ぶどうでは、果実に対して薬害を生じるおそれがあるので、果実に薬液が直接かからないように注意する。
						茶	3.3mℓ	
						西洋芝	2.5 ～5mℓ	
						りんご	2～5mℓ	
					摘葉剤 (キノキサリン系･MEP水和剤)		5mℓ	
					シアナジン水和剤	日本芝	2.5 ～5mℓ	
					ACN水和剤	芝	2.5 ～5mℓ	
					MCPB乳剤	かんきつ	3.3～ 5mℓ	
					ジベレリン水溶液	すだち	5mℓ	
A	アルソープ30	普	△	ポリオキシエチレン ノニルフェニル エーテル 30.0%	ジクワット液剤、パラコート液剤、ジクワット・パラコート液剤	適用農薬の登録内容の作物	5～30mℓ	1)除草剤用展着剤
A	クサリノー10	普	△	ポリオキシエチレン オクチルフェニル エーテル 10.0%	ジクワット液剤、パラコート液剤、ジクワット・パラコート液剤、その他雑草生育期処理除草剤	非選択性除草剤の登録内容の作物	10～15mℓ	1)除草剤用展着剤 2)特に薬液が付着し難い雑草の場合は、散布液10ℓ当たり20～25mℓで使用。
A	クサリノー	普	△	ポリオキシエチレン オクチルフェニル エーテル 50.0%	ジクワット液剤、パラコート液剤、ジクワット・パラコート液剤、その他雑草生育期処理除草剤	非選択性除草剤の登録内容の作物	2～3mℓ	1)除草剤用展着剤 2)特に薬液が付着し難い雑草の場合は、散布液10ℓ当たり4～5mℓ
A	グラスチッカー	普	○	ポリオキシエチレン ドデシルエーテル 80.0%	DCMU剤・ブロマシル剤等の土壌処理型除草剤	果樹類、桑、樹木等	10mℓ	1)除草剤用展着剤 2)低温時(10℃以下) では効果が劣るため使用しない。
					シアン酸塩剤・パラコート剤等の茎葉処理型除草剤		2～5mℓ	
A	サーファクタントWK	普	△	ポリオキシエチレン ドデシルエーテル 78.0%	DCMU、ブロマシル、リニュロン、レナシル、パラコート､PAC、ジクワット剤、シアン酸塩	水田用作物、畑作物等	10～50mℓ	1)除草剤用展着剤 2)低温時(10℃以下)では効果が劣るため使用しない。
					フルアジホップP乳剤、セトキシジム乳剤		10～20mℓ	
					フェンメディファム水和剤､フェンメディファム乳剤､メタミトロン水和剤		10mℓ	
					MCPP､アシュラム、リムフルフロン、メトスルフロンメチル、オキサジクロメホン、オキサジアルギル等の除草剤	芝	5～10mℓ	

タイプ	農薬名	毒性 人畜	毒性 魚毒	成分	適用農薬	適用作物	散布液10ℓ当たり使用量	注意事項等
B	アプローチBI	普	○	ポリオキシエチレンヘキシタン脂肪酸エステル 50.0%	殺虫剤、殺菌剤	稲、麦類、果樹類、野菜類、花き類、茶、芝等	10mℓ	1)スルフェン酸系薬、ジチアノン系、キノキサリン系、ストロビルリン系、アニリド系の薬剤に添加すると薬害の恐れがある。 2)ハウスで使用する場合は散布液10ℓ当たり10mℓで使用する。
						野菜類、いも類、豆類	5mℓ	
					ジクワット、パラコート、DCMU、ターバシル、ブロマシル等の非選択性除草剤	非選択性除草剤の登録内容の作物	10～20mℓ	
					メピコートクロリド、ジベレリン	ぶどう	10～50mℓ	
					NAC水和剤(摘果剤)	りんご		
B	K.Kステッカー	普	△	ポリオキシエチレン樹脂酸エステル 70.0%	殺菌剤	薬液の付きにくい農作物等	3.3～4mℓ	
					殺虫剤	野菜類、果樹類、茶	3.3mℓ	
B	ハイテンパワー	普	○	ポリオキシアルキレン脂肪酸エステル 30.0%	殺菌剤・殺虫剤	果樹類、野菜類、花き類、稲麦類、豆類(種実)、いも類、雑穀類、てんさい、ホップ	1～2mℓ	1)皮膚に対して弱い刺激性があるので皮膚に付着しないように注意する。
						茶、芝	2mℓ	
					摘果剤 (NAC剤)	りんご	1～2mℓ	
					シアナミド液剤	ぶどう		
					セトキシジム乳剤、クレトジム乳剤、シハロホップブチル乳剤	適用農薬の登録内容の作物		
					非選択性茎葉処理型除草剤	適用農薬の登録内容の作物		
C	ミックスパワー	普	△	ポリオキシエチレンアルキルフェニルエーテル 40.0% ポリオキシエチレンアルキルエーテル 40.0%	無機銅、有機銅等の殺菌剤、有機リン剤、カーバメイト剤等の殺虫剤	稲、麦類、茶	3.3～10mℓ	1)ぶどうの果実、カーネーション、バラには使用しない。 2)りんご、なしの幼果期には、さび果の恐れがある。 3)トマト、なすの施設では使用しない。
						キャベツ、はくさい、きゅうり、もも、なし、りんご等	3.3mℓ	
D	クミテン	普	○	ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル 20.0% ポリナフチルメタンスルホン酸ナトリウム 6.0%	―	作物一般(稲、麦、キャベツ、ねぎ等つきにくい作物)	1～3mℓ	
						作物一般(はくさい、ばれいしょ、きゅうり、果樹等つきやすい作物)	0.5～2mℓ	
D	グラミン	普	○	ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル 10.0% ポリナフチルメタンスルホン酸ナトリウム 6.0%	有機リン剤、カーバメイト剤等の殺虫・殺ダニ剤銅剤、硫黄剤、抗生物質剤等の殺菌剤	稲、麦、キャベツ等薬液のつきにくい作物	1～3mℓ	
						はくさい、ばれいしょ、きゅうり、果樹等薬液のつきやすい作物	0.5～1mℓ	
D	ダイコート	普	△	ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル 30.0% ジオクチルスルホコハク酸ナトリウム 9.0%	イミノクタジン酢酸塩剤、有機銅剤、イプロジオン剤等の殺菌剤	薬剤の付きにくい農作物	5mℓ	1)冬期固結している場合は、温湯に浸し、溶解してから使用する。
D	ダイン	普	○	ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル 20.0% リグニンスルホン酸カルシウム 12.0%	石灰ボルドー液、銅剤、硫黄剤、有機硫黄剤、マシン油乳剤、有機リン剤、デリス剤、ニコチン剤、除虫菊剤、その他	稲、麦、野菜・果樹等で展着しにくい作物	1～3mℓ	
						比較的展着の容易な作物	0.5～1mℓ	
E	ニーズ	普	×	ポリナフチルメタンスルホン酸ジアルキルジメチルアンモニウム 18.0% ポリオキシエチレン脂肪酸エステル 44.0%	殺菌剤、殺虫剤	稲、麦類、穀物類、いも類、豆類(種実)、野菜類、てんさい	5～10mℓ	1)作物の幼苗期や高温時など一般的に薬害の生じやすい条件では使用を避ける。 2) 適用農薬によっては、ラベルに薬害の生じやすい作物、気象条件などが記載されているので、このような場合には添加を避ける。
						りんご	10mℓ	
					殺菌剤	もも、茶	10mℓ	
					摘果剤 (NAC剤)	りんご	10mℓ	
F	ステッケル	普	○	パラフィン 24.0%	ボルドー液、有機銅剤	りんご	100～120mℓ	1)分離することあるので、よく振ってから使用する。 2) あらかじめ本剤の所定量を2～3倍の水でうすめてから混合する。
					ボルドー液、銅水和剤	こんにゃく	100mℓ	
					銅水和剤	きゅうり、トマト	20mℓ	

タイプ	農薬名	毒性 人畜	毒性 魚毒	成分	適用農薬	適用作物	散布液10ℓ当たり使用量	注意事項等
F	ペタンV	普	○	パラフィン 42.0%	ボルドー液	りんご	25～50mℓ	1)イミノクタジン酢酸塩液剤に添加する場合、麦類の紅色雪腐病及び雪腐大粒菌核病以外には使用しない。 2) TPN水和剤に添加してなしに使用する場合、二十世紀以外には使用しない。 3) 有機銅水和剤に添加する場合、中晩柑類の混植されている圃場では使用しない。
						もも	17mℓ	
					銅・有機銅水和剤	もも	17mℓ	
						たまねぎ	25mℓ	
					有機銅水和剤	りんご、麦類、芝	25～50mℓ	
						いちご	10～25mℓ	
						アスパラガス	10mℓ	
						みかん	10～17mℓ	
					マンネブ水和剤		10～13mℓ	
						かんきつ(みかんを除く)	10mℓ	
					イミノクタジン酢酸塩剤	麦類	50mℓ	
					TPN水和剤	なし(休眠期)	25mℓ	
					ペンシクロン水和剤	芝	10～20mℓ	
F	アビオン-E	普	○	パラフィン 24.0%	殺菌剤、殺虫剤 (小麦、芝は殺菌剤)	野菜類、花き類・観葉植物	10～20mℓ	1)トマトへの使用注意。
						小麦、芝		
						果樹類、茶	5～20mℓ	
その他	まくぴか	普	△	ポリオキシエチレン メチルポリシロキサン 93.0%	殺菌剤、殺虫剤	麦類、野菜類、豆類(種実)、いも類、茶、芝、てんさい	1～3.3mℓ	1) 泡立ちが多めであるので、散布タンクに水を満たした後に本剤を添加する。 2) 極端な酸性、アルカリ性の散布液では使用しない。 3) 眼に刺激性があるので使用時は注意する。
						果樹類	1～2mℓ	
					エテホン液剤	小麦	1～3.3mℓ	
					フルアジホップP乳剤、フェンメディファム乳剤、メタミトロン水和剤、レナシル・PAC水和剤	てんさい		
					非選択性茎葉処理型除草剤	適用農薬の登録内容の作物		
					MCPP液剤、アシュラム液剤、トリクロピル液剤、フラザスルフロン水和剤、ペンディメタリン水和剤等の除草剤	芝		

(3) 界面活性剤の種類と特徴

1) 非イオン性界面活性剤(ノニオン)

表面張力を下げる効果が高く、濡れにくい虫体や作物に対して付着を良くし、防除効果を高める。しかし、濡れやすい作物に対しては加用量が多すぎるとかえって付着量が減り、薬剤の効果が低下することがあるので注意が必要である。乳剤等の製剤補助剤として広く使用されているが、ほとんどがエーテル型のものである。

また、剤型にエーテル型とエステル型があるが、大きな違いは薬害の点である。

エーテル型……過度に濃度を上げると薬害の危険性がある。除草剤用に多く使用されている。

エステル型……加水分解を受けやすいので製剤中には入らない。高濃度にしても植物に対する反応は極めてマイルドである。

2) 陰イオン性界面活性剤(アニオン)

水溶液が正(+)、負(−)の電気を帯びた状態で溶け、界面活性を示す部分が負(−)に帯電するものを陰イオン性界面活性剤という。本剤は、薬液の薬剤粒子の分散(懸濁性)を良くする働きがあるが、表面張力を低下させる働きはほとんどない。代表的なものは石鹸であり、農薬の乳化剤や分散剤としても配合されている。

3) 陽イオン性界面活性剤(カチオン)

水溶液が正(+)、負(−)の電気を帯びた状態で溶け、界面活性を示す部分が正(+)に帯電するものを陽イオン性界面活性剤という。病原菌や害虫の細胞膜は負(−)に帯電しているため、本剤が強く吸着する作用があり、これによって防除効果を高める。

4) 固着剤

パラフィン系と樹脂系に大別される。いずれも作物の付着量を多くし、薬剤の残効を高める作用があるが、反面作物残留の懸念もあり、収穫間際の使用には問題がある。主に、果樹に保護殺菌剤を散布する場合に使用される。

5) その他の特徴を持つもの

○陽イオン系農薬用‥‥プリグロックスL等の陽イオン系農薬には、陰イオン系展着剤が使用できないため、専用の展着剤を使用する。

○泡立防止用‥‥‥‥‥‥‥‥薬剤散布時の泡立ちを防止するため、低起泡性展着剤が使用される。

○空中散布用‥‥‥‥‥‥‥‥ドリフト防止のため、専用の展着剤が使用される。

(4) 薬剤との混用

薬剤の混用順は、①展着剤、②乳剤、③水和剤またはフロアブルが基本となる。ただし、一部の展着剤で最初に入れることを推奨していないものもあるため、使用前にラベルの注意書きを必ず確認すること。

15　愛媛県特別栽培農産物等認証制度においてカウントされない農薬一覧

愛媛県特別栽培農産物等認証制度では、その生産過程において、化学合成農薬、化学肥料の使用を県栽培基準に対して３割以上削減する栽培方法で生産された県農産物を、知事が特別栽培農産物等に認証することとなっています。

以下の農薬は、本制度において化学合成農薬としてカウントされない農薬の一覧です（令和6年12月11日現在）。

なお、ＪＡＳ法に基づく有機農産物とは、カウントされない農薬が異なりますので登録認定機関にお問い合わせ下さい。

用途	農薬種類名	商品名	備考
殺虫剤	ＢＴ水和剤（顆粒）	エコマスターＢＴ	
殺虫剤	ＢＴ水和剤（顆粒）	エスマルクＤＦ	
殺虫剤	ＢＴ水和剤（顆粒）	ジャックポット顆粒水和剤	
殺虫剤	ＢＴ水和剤（顆粒）	ゼンターリ顆粒水和剤	
殺虫剤	ＢＴ水和剤（顆粒）	チューレックス顆粒水和剤	
殺虫剤	ＢＴ水和剤（顆粒）	チューンアップ顆粒水和剤	
殺虫剤	ＢＴ水和剤（顆粒）	デルフィン顆粒水和剤	
殺虫剤	ＢＴ水和剤（顆粒）	バイオマックスＤＦ	
殺虫剤	ＢＴ水和剤（顆粒）	ファイブスター顆粒水和剤	
殺虫剤	ＢＴ水和剤（顆粒）	フローバックＤＦ	
殺虫剤	ＢＴ水和剤（顆粒）	レピクリーンＤＦ	
殺虫剤	ＢＴ水和剤10	チューリサイド水和剤	
殺虫剤	ＢＴ水和剤10	バシレックス水和剤	
殺虫剤	ＢＴ水和剤10	家庭園芸用バシレックス水和剤	
殺虫剤	ＢＴ水和剤10（フロアブル）	クオークフロアブル	
殺虫剤	ＢＴ水和剤10（フロアブル）	サブリナフロアブル	
殺虫剤	ＢＴ水和剤7	トアロー水和剤ＣＴ	
殺虫剤	ＢＴ水和剤7（フロアブル）	トアローフロアブルＣＴ	
殺虫剤	アカメガシワクダアザミウマ剤	アカメ	
殺虫剤	アリガタシマアザミウマ剤	アリガタ	
殺虫剤	イサエアヒメコバチ・ハモグリコマユバチ剤	マイネックス	
殺虫剤	イサエアヒメコバチ剤	イサパラリ	
殺虫剤	イサエアヒメコバチ剤	ヒメトップ	
殺虫剤	オンシツツヤコバチ剤	エンストリップ	
殺虫剤	オンシツツヤコバチ剤	ツヤトップ	
殺虫剤	オンシツツヤコバチ剤	ツヤトップ２５	
殺虫剤	オンシツツヤコバチ剤	ツヤパラリ	
殺虫剤	キイカブリダニ剤	キイトップ	
殺虫剤	ギフアブラバチ剤	ギフパール	
殺虫剤	ククメリスカブリダニ剤	ククメリス	
殺虫剤	ククメリスカブリダニ剤	ククメリスＥＸ	
殺虫剤	ククメリスカブリダニ剤	メリトップ	
殺虫剤	グリセリン酢酸脂肪酸エステル乳剤	ベミデタッチ	有機ＪＡＳ使用不可
殺虫剤	コレマンアブラバチ剤250	コレトップ	
殺虫剤	コレマンアブラバチ剤500	アフィパール	
殺虫剤	コレマンアブラバチ剤500	コレパラリ	
殺虫剤	サバクツヤコバチ剤	エルカード	
殺虫剤	サバクツヤコバチ剤	サバクトップ	
殺虫剤	スタイナーネマ カーポカプサエ剤	バイオセーフ	
殺虫剤	スタイナーネマ グラセライ剤	バイオトピア	
殺虫剤	スピノサド水和剤	スピノエースベイト	
殺虫剤	スピノサド水和剤20	スピノエースフロアブル	
殺虫剤	スピノサド水和剤25	スピノエース顆粒水和剤	
殺虫剤	スピノサド水和剤50	サービスエース顆粒水和剤	
殺虫剤	スピノサド水和剤50	ノーカウント顆粒水和剤	
殺虫剤	スピノサド粒剤	スピノエース箱粒剤	
殺虫剤	スピノサド粒剤1	ゼロカウント粒剤	
殺虫剤	スワルスキーカブリダニ剤	システムスワルくん	
殺虫剤	スワルスキーカブリダニ剤	システムスワルくんロング	
殺虫剤	スワルスキーカブリダニ剤	スワマイト	
殺虫剤	スワルスキーカブリダニ剤	スワルスキー	
殺虫剤	スワルスキーカブリダニ剤	スワルスキープラス	
殺虫剤	タイリクヒメハナカメムシ剤	オリスターＡ	
殺虫剤	タイリクヒメハナカメムシ剤	タイリク	
殺虫剤	タイリクヒメハナカメムシ剤	トスパック	
殺虫剤	タイリクヒメハナカメムシ剤	リクトップ	
殺虫剤	タバコカスミカメ剤	バコトップ	
殺虫剤	チチュウカイツヤコバチ剤	ベミパール	
殺虫剤	チャハマキ顆粒病ウイルス・リンゴコカクモンハマキ顆粒病ウイルス	ハマキ天敵	
殺虫剤	チャバラアブラコバチ剤	チャバラ	
殺虫剤	チリカブリダニ・ミヤコカブリダニ剤	ミッチトップ	
殺虫剤	チリカブリダニ剤	スパイデックス	
殺虫剤	チリカブリダニ剤	スパイデックスバイタル	
殺虫剤	チリカブリダニ剤	チリカ・ワーカー	
殺虫剤	チリカブリダニ剤	チリガブリ	
殺虫剤	チリカブリダニ剤	チリトップ	
殺虫剤	チリカブリダニ剤	チリパック	
殺虫剤	デンプン水和剤	粘着くん水和剤	
殺虫剤	ナミテントウ剤	テントップ	
殺虫剤	ナミテントウ剤	ナミトップ	

用途	農薬種類名	商品名	備考
殺虫剤	ナミテントウ剤	ナミトップ２０	
殺虫剤	バーティシリウム レカニ水和剤	マイコタール	
殺虫剤	パスツーリア ペネトランス水和剤	パストリア水和剤	
殺虫剤	ハスモンヨトウ核多角体病ウイルス水和剤	ハスモン天敵	
殺虫剤	ハモグリミドリヒメコバチ剤	ミドリヒメ	
殺虫剤	ヒメカメノコテントウ剤	カメノコＳ	
殺虫剤	ピレトリン乳剤	パイベニカＶスプレー	除虫菊から抽出したものであって、共力剤としてピペロニルブトキサイドを含まないものに限ること。
殺虫剤	ピレトリン乳剤0.06（スプレー）	ガーデンアシストピレスプレー	除虫菊から抽出したものであって、共力剤としてピペロニルブトキサイドを含まないものに限ること。
殺虫剤	ペキロマイセス フモソロセウス水和剤	プリファード水和剤	
殺虫剤	ボーベリア バシアーナ（ATCC74040）水和剤（フロアブル）	センテヒッショウ	
殺虫剤	ボーベリア バシアーナ水和剤	ボタニガード水和剤	
殺虫剤	ボーベリア バシアーナ乳	バイオリサ・マダラ	有機ＪＡＳ使用不可
殺虫剤	ボーベリア バシアーナ乳	ボーベリアン	有機ＪＡＳ使用不可
殺虫剤	ボーベリア バシアーナ乳剤	ボタニガードＥＳ	
殺虫剤	ボーベリア ブロンニアティ剤	バイオリサ・カミキリ	
殺虫剤	マシン油3（エアゾル）	ボルン	
殺虫剤	マシン油乳剤95	９５マシン	
殺虫剤	マシン油乳剤95	スケルシン９５	
殺虫剤	マシン油乳剤95	トモノール	
殺虫剤	マシン油乳剤95	マシン油乳剤９５	
殺虫剤	マシン油乳剤95	機械油乳剤９５	
殺虫剤	マシン油乳剤95	高度マシン９５	
殺虫剤	マシン油乳剤97	アタックオイル	
殺虫剤	マシン油乳剤97	エアータック乳剤	
殺虫剤	マシン油乳剤97	スピンドロン乳剤	
殺虫剤	マシン油乳剤97	スプレーオイル	
殺虫剤	マシン油乳剤97	トモノールＳ	
殺虫剤	マシン油乳剤97	ハーベストオイル	
殺虫剤	マシン油乳剤98	ラビサンスプレー	
殺虫剤	ミヤコカブリダニ剤	システムミヤコくん	
殺虫剤	ミヤコカブリダニ剤	スパイカルＥＸ	
殺虫剤	ミヤコカブリダニ剤	スパイカルプラス	
殺虫剤	ミヤコカブリダニ剤	スパイカルプラスＵＭ	
殺虫剤	ミヤコカブリダニ剤	ミヤコスター	
殺虫剤	ミヤコカブリダニ剤	ミヤコトップ	
殺虫剤	ミルベメクチン水和剤	コロマイト水和剤	
殺虫剤	ミルベメクチン水和剤	ダニダウン水和剤	
殺虫剤	ミルベメクチン乳剤1	コロマイト乳剤	
殺虫剤	ミルベメクチン乳剤1	ミルベノック乳剤	
殺虫剤	ミルベメクチン乳剤2	マツガード	
殺虫剤	ミルベメクチン乳剤3	マツガードクイック	
殺虫剤	メタアルデヒド剤	ナメトックスハウス	捕虫器に使用する場合に限ること。
殺虫剤	メタアルデヒド粒剤	スネック粒剤	捕虫器に使用する場合に限ること。
殺虫剤	メタアルデヒド粒剤	ナメキット	捕虫器に使用する場合に限ること。
殺虫剤	メタアルデヒド粒剤	ナメクリーン	捕虫器に使用する場合に限ること。
殺虫剤	メタアルデヒド粒剤	ナメトックス	捕虫器に使用する場合に限ること。
殺虫剤	メタアルデヒド粒剤	マイマイペレット	捕虫器に使用する場合に限ること。
殺虫剤	メタリジウム アニソプリエ粒剤	パイレーツ粒剤	
殺虫剤	ヤマトクサカゲロウ剤	カゲタロウ	
殺虫剤	リモニカスカブリダニ剤	リモニカ	
殺虫剤	脂肪酸グリセリド・スピノサド水和剤（フロアブル）	ダブルシューターＳＥ	有機ＪＡＳ使用不可
殺虫剤	除虫菊乳剤	ガーデントップ	除虫菊から抽出したものであって、共力剤としてピペロニルブトキサイドを含まないものに限ること。
殺虫剤	除虫菊乳剤	除虫菊乳剤３	除虫菊から抽出したものであって、共力剤としてピペロニルブトキサイドを含まないものに限ること。
殺虫剤	調合油乳剤	サフオイル乳剤	
殺虫剤	二酸化炭素くん蒸剤99.9	くん蒸用炭酸ガス	保管施設で使用する場合に限ること。
殺虫剤	二酸化炭素くん蒸剤99.9	炭酸ガス	保管施設で使用する場合に限ること。
殺虫剤	二酸化炭素くん蒸剤99.95	炭酸ガス	保管施設で使用する場合に限ること。
殺虫剤	燐酸第二鉄粒剤	スラゴ	
殺虫剤	燐酸第二鉄粒剤	ナメクジキラーＦエース	
殺虫剤	燐酸第二鉄粒剤	ナメクジ退治	
殺虫剤	燐酸第二鉄粒剤	ナメトール	
殺虫剤	燐酸第二鉄粒剤	フェラモール	
殺虫剤	燐酸第二鉄粒剤3	スクミンブルー	
殺虫剤	燐酸第二鉄粒剤3	スクミンベイト３	
殺虫剤	燐酸第二鉄粒剤3	スラゴＸ	
殺虫剤	燐酸第二鉄粒剤5	スクミンベイトＶ	
殺虫剤	燐酸第二鉄粒剤5	スクミ斬Ｖ	

用途	農薬種類名	商品名	備考
殺菌剤	ＢＴ粒剤10	ベニカＢＴ殺菌粒剤	
殺菌剤	オキシテトラサイクリン	マイコシールド	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	オキシテトラサイクリン・ストレプトマイシン水和剤	アグリマイシン100	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	カスガマイシン・銅水和剤	カスミンボルドー	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	カスガマイシン・銅水和剤	カッパーシン水和剤	
殺菌剤	カスガマイシン・銅水和剤	ホープスター	
殺菌剤	カスガマイシン液剤	カスミン液剤	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	カスガマイシン液剤	タフマジック液剤	
殺菌剤	カスガマイシン水溶剤	カスミンＡ水和剤	
殺菌剤	カスガマイシン粉剤0.3	カスミン粉剤３０	
殺菌剤	カスガマイシン粒剤	カスミン粒剤	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	コニオチリウム ミニタンス	ミニタンWG	
殺菌剤	シュードモナス フルオレッセンス水和剤（顆粒）	ベジキーパー水和剤	
殺菌剤	シュードモナス ロデシア水和剤	マスタピース水和剤	
殺菌剤	ズッキーニ黄斑モザイクウイルス弱毒株	キュービオＺＹ－０２	
殺菌剤	ストレプトマイシン・銅水和剤	銅ストマイ水和剤	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	ストレプトマイシン液剤	アグレプト液剤	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	ストレプトマイシン水和剤	アグレプト水和剤	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	タラロマイセス フラバス水和剤	タフエイド	
殺菌剤	タラロマイセス フラバス水和剤	タフパール	
殺菌剤	タラロマイセス フラバス水和剤	タフブロック	
殺菌剤	タラロマイセス フラバス水和剤	タフブロックＳＰ	
殺菌剤	トリコデルマ アトロビリデ水和剤	エコホープ	
殺菌剤	トリコデルマ アトロビリデ水和剤	エコホープＤＪ	
殺菌剤	トリコデルマ アトロビリデ水和剤	エコホープドライ	
殺菌剤	バチルス アミロリクエファシエンス	インプレッションクリア	
殺菌剤	バチルス シンプレクス水和剤（顆粒）	モミホープ水和剤	
殺菌剤	バチルス ズブチリス水和剤	アグロケア水和剤	
殺菌剤	バチルス ズブチリス水和剤	エコショット	
殺菌剤	バチルス ズブチリス水和剤	セレナーデ水和剤	
殺菌剤	バチルス ズブチリス水和剤	バイオワーク水和剤	
殺菌剤	バチルス ズブチリス水和剤	バチスター水和剤	
殺菌剤	バチルス ズブチリス水和剤	ボトキラー水和剤	
殺菌剤	バリオボラックス パラドクス水和剤（顆粒）	フィールドキーパー水和剤	
殺菌剤	バリダマイシン液剤	バリダシンエアー	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	バリダマイシン液剤	バリダシン液剤	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	バリダマイシン液剤	バリダシン液剤５	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	バリダマイシン粉剤	バリダシン粉剤ＤＬ	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	ポリオキシン水溶剤	ポリオキシンＡＬ水溶剤	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	ポリオキシン水和剤	ポリオキシンＡＬ水和剤	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	ポリオキシン乳剤	ポリオキシンＡＬ乳剤	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	ラクトバチルス プランタラム水和剤	ラクトガード水和剤	
殺菌剤	醸造酢液剤	エコフィット	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌剤	青枯病菌感染性バクテリオファージＲＫＰ１８１液剤	青枯革命	
殺菌剤	炭酸水素カリウム水溶剤	カリグリーン	
殺菌剤	炭酸水素カリウム水溶剤	家庭園芸用カリグリーン	
殺菌剤	炭酸水素ナトリウム・銅水和剤	ジーファイン水和剤	
殺菌剤	炭酸水素ナトリウム水溶剤	ハーモメイト水溶剤	
殺菌剤	銅・バチルス ズブチリス水和剤	クリーンカップ	
殺菌剤	銅・バチルス ズブチリス水和剤	ケミヘル	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性塩化銅４０）	ドイツボルドーＤＦ	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性塩化銅４４）	サンボルドー	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性塩化銅４８）	ＫＢＷ	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性塩化銅４８）	ビティグラン水和剤	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性塩化銅５０）	ドイツボルドーＡ	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性塩化銅５０）	ベニドーＤＦ	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性塩化銅５０）	ベニドー水和剤	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性塩化銅５０）	ポテガードＤＦ	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性塩化銅５０）	ボルドー	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性塩化銅５０）	野菜類種子消毒用ドイツボルドーＡ	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性硫酸銅１２．９）	フジドーＬフロアブル	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性硫酸銅１４．８）	クプロザートフロアブル	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性硫酸銅１４．８）	クプロシールド	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性硫酸銅２）	ＩＣボルドー４１２	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性硫酸銅２．５）	ＩＣボルドー４８Ｑ	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性硫酸銅２０．２）	フジドーフロアブル	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性硫酸銅３２）	Ｚボルドー	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性硫酸銅４０）	キュプロフィックス４０	
殺菌剤	銅水和剤（塩基性硫酸銅４０）	ムッシュボルドーＤＦ	
殺菌剤	銅水和剤（水酸化第二銅１３）	クミガードＳＣ	
殺菌剤	銅水和剤（水酸化第二銅３０）	グリーンドクター２	
殺菌剤	銅水和剤（水酸化第二銅３０）	コサイド３０００	
殺菌剤	銅水和剤（水酸化第二銅４０）	コサイドＤＦ	

用途	農薬種類名	商品名	備考
殺菌剤	銅水和剤（水酸化第二銅５０）	コサイドボルドー	
殺菌剤	銅粉剤ＤＬ（塩基性硫酸銅５）	Ｚボルドー粉剤ＤＬ	
殺菌剤	銅粉剤ＤＬ（塩基性硫酸銅６）	撒粉ボルドー粉剤ＤＬ	
殺菌剤	非病原性エルビニア カロトボーラ水和剤（顆粒）	エコメイト	
殺菌剤	非病原性エルビニア カロトボーラ水和剤（顆粒）	バイオキーパー水和剤	
殺菌剤	硫黄・銅水和剤	イデクリーン水和剤	
殺菌剤	硫黄・銅水和剤	園芸ボルドー	
殺菌剤	硫黄くん煙剤99.85	硫黄粒剤	
殺菌剤	硫酸銅	粉状丹礬	ボルドー剤調製用に使用する場合に限ること。
殺菌剤	硫酸銅	硫酸銅	ボルドー剤調製用に使用する場合に限ること。
殺菌剤	硫酸銅	硫酸銅（粉）	ボルドー剤調製用に使用する場合に限ること。
殺菌剤	硫酸銅	硫酸銅（粉状）	ボルドー剤調製用に使用する場合に限ること。
殺虫殺菌剤	なたね油乳剤	ハッパ乳剤	
殺虫殺菌剤	ペキロマイセス テヌイペス乳剤	ゴッツＡ	
殺虫殺菌剤	還元澱粉糖化物・調合油・ＢＴ水和剤（フロアブル）	ベニカナチュラルスプレー	
殺虫殺菌剤	還元澱粉糖化物液剤	エコピタ液剤	有機ＪＡＳ使用不可
殺虫殺菌剤	還元澱粉糖化物液剤	キモンブロック液剤	
殺虫殺菌剤	還元澱粉糖化物液剤	ベニカマイルド液剤	
殺虫殺菌剤	還元澱粉糖化物液剤（スプレー）	あめんこ	
殺虫殺菌剤	還元澱粉糖化物液剤（スプレー）	ガーデンアシストピュアスプレー	
殺虫殺菌剤	還元澱粉糖化物液剤（スプレー）	ベニカマイルドスプレー	
殺虫殺菌剤	脂肪酸グリセリド乳剤	アーリーセーフ	
殺虫殺菌剤	脂肪酸グリセリド乳剤	サンクリスタル乳剤	
殺虫殺菌剤	脂肪酸グリセリド乳剤（スプレー）	アーリーセーフスプレー	
殺虫殺菌剤	脂肪酸グリセリド乳剤（スプレー）	ガーデンアシストパームスプレー	
殺虫殺菌剤	水和硫黄剤（顆粒）	クムラス	
殺虫殺菌剤	水和硫黄剤52	サルファーゾル	
殺虫殺菌剤	水和硫黄剤52（フロアブル）	イオウフロアブル	
殺虫殺菌剤	水和硫黄剤52（フロアブル）	コロナフロアブル	
殺虫殺菌剤	銅水和剤（塩基性硫酸銅３．７）	ＩＣボルドー６６Ｄ	
殺虫殺菌剤	硫黄・銅水和剤（フロアブル）	クリーンワイドフロアブル	
殺虫殺菌剤	硫黄粉剤50	硫黄粉剤５０	
殺虫殺菌剤	硫黄粉剤80	硫黄粉剤８０	
誘引・誘殺・交尾阻害剤	アリマルア・オリフルア・トートリルア・ピーチフルア剤	コンフューザーＡＡ	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	アルミゲルア・ウワバルア・ダイアモルア・ビートアーミルア・リトルア剤	コンフューザーＶ	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	アルミゲルア・ダイアモルア剤	コナガコンープラス	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	インフェルア剤	ヨトウコンー１	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	オキメラノルア剤	オキメラノコール	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	オキメラノルア剤96.5	オキメラコン	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	オリフルア・トートリルア・ピーチフルア・ピリマルア剤	コンフューザーMM	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	オリフルア・トートリルア・ピーチフルア剤N	コンフューザーN	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	オリフルア・トートリルア・ピーチフルア剤R	コンフューザーR	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	オリフルア剤12	ラブストップヒメシン	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	オリフルア剤87.5	ナシヒメコン	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	ケルキボルア剤	カシナガコール	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。

用途	農薬種類名	商品名	備考
誘引・誘殺・交尾阻害剤	コッシンルア剤	ボクトウコンーH	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	サキメラノルア剤	サキメラノコール	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	シナンセルア剤	スカシバコンＬ	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	ダイアモルア剤	コナガコン	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	ダイシルア剤	ケブカコン	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	トートリルア剤	ハマキコンーN	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	ピーチフルア剤	シンクイコンーＬ	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	ビートアーミルア剤	ノシメシャット	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	ビートアーミルア剤	パナライン	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	ビートアーミルア剤	ヨトウコンーＳ	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	フォールウェブルア剤	ニトルアー＜アメシロ＞	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	リトルア剤	フェロディンＳＬ	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
誘引・誘殺・交尾阻害剤	リトルア剤	ヨトウコンーH	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
殺菌植調剤	シイタケ菌糸体抽出物液剤	レンテミン液剤	
殺菌植調剤	シイタケ菌糸体抽出物液剤	家庭園芸用レンテミン液剤	
殺菌植調剤	シイタケ菌糸体抽出物水溶剤	レンテミン	有機ＪＡＳ使用不可
殺菌植調剤	シイタケ菌糸体抽出物水溶剤	家庭園芸用レンテミン	有機ＪＡＳ使用不可
殺虫殺菌植調剤	石灰硫黄合剤22	石灰硫黄合剤	
植物成長調整剤	混合生薬抽出物液剤	アルムグリーン	
忌避剤	水和硫黄剤30（忌避剤）（フロアブル）	カジランＳフロアブル	
その他	パラフィン展着剤	アグロガード	カゼイン又はパラフィンを有効成分とするものに限ること。
その他	パラフィン展着剤	アビオンーＥ	カゼイン又はパラフィンを有効成分とするものに限ること。
その他	パラフィン展着剤	ステッケル	カゼイン又はパラフィンを有効成分とするものに限ること。
その他	パラフィン展着剤	ペタンＶ	カゼイン又はパラフィンを有効成分とするものに限ること。
その他	生石灰	ボルドー液用生石灰	ボルドー剤調製用に使用する場合に限ること。
その他	生石灰	ボルドー液用粉末生石灰	ボルドー剤調製用に使用する場合に限ること。
その他	生石灰	農薬用（ボルドー液用）粉末生石灰	ボルドー剤調製用に使用する場合に限ること。
その他	炭酸カルシウム水和剤	アプロン	銅水和剤の薬害防止に使用する場合に限ること。
その他	炭酸カルシウム水和剤	クレフノン	銅水和剤の薬害防止に使用する場合に限ること。
その他	炭酸カルシウム水和剤	ホワイトコート	銅水和剤の薬害防止に使用する場合に限ること。

16 IPM実践指標の活用について

１ ＩＰＭ実践指標とは

ＩＰＭ実践指標は、ＩＰＭを実践する上で必要な農作業の工程（以下「管理項目」という。）と各工程における具体的な取組内容（以下「管理ポイント」という。）を示すことで、農業者自身がＩＰＭに関する取組の程度を容易に把握するためのものです。

農業者は、ＩＰＭ実践指標に記録した取組結果について評価を行い、翌年度の取組に反映させることでＩＰＭを効率的に実践することができます。

２ ＩＰＭ実践指標の活用方策

ＩＰＭ実践指標の具体的な活用方策としては、各農業者が自己点検した結果を以下の考え方で指数化することにより評価します。

評価の手法としては、下記に示すような手法が考えられます。

（１）ＩＰＭ指数（指数値で評価する場合）

ＩＰＭ指数	評価結果
指数８０以上（ＩＰＭ実践農業者）	A
指数６０以上８０未満（ＩＰＭ実践途上農業者）	B
指数６０未満（ＩＰＭ準備中農業者）	C

ＩＰＭ指数＝実施した管理ポイントの点数の合計／当該年度の病害虫の発生状況等から対象となる全管理ポイントの最高点数の合計×１００

ＩＰＭ指数は、各農業者が設定した管理ポイントの合計点数を１００とした場合に、実際に実施された管理ポイントの合計点数の割合であることから、ＩＰＭの達成度合いを客観的に測定できるというメリットがあります。

（２）ＩＰＭ指数向上度（指数の向上度で評価する場合）

ＩＰＭ指数向上度	評価結果
現状値より２０ポイント以上の向上	A
現状値より１０～２０ポイント未満の向上	B
現状値から１０ポイント未満の向上	C

ＩＰＭの導入初期においては、ＩＰＭ指数を用いてＩＰＭの客観的な達成度合いを測定するよりも、むしろ、今年度のＩＰＭの達成度合いが昨年度の達成度合いよりどの程度向上したかを示す手法であるＩＰＭ指数向上度を用いる方が、農業者のＩＰＭへの取組を促し、より農業生産現場にＩＰＭが浸透しやすいと考えられます。

（３）ＩＰＭ指数の分布（モデル地域全体の農業者の相対的な評価で評価する場合）

ＩＰＭ指数の分布	評価結果
上位３割	A
中位４割	B
下位３割	C

モデル地域全体の農業者の相対的な評価（ＩＰＭ指数の分布）を組み合わせることにより、農業者の意識啓発を図ることができます。

（４） 地域全体のＩＰＭ実践度

例：ＩＰＭモデル地区（水稲作付面積 ６ha）の場合

Ａ農家２ha（IPM 指数 80），Ｂ農家１ha（IPM 指数 50），Ｃ農家３ha（IPM 指数 60）

$$\frac{\sum(\text{個人の水稲作付面積}\times\text{IPM指数})}{\text{地域全体の水稲作付面積}}=\frac{2\text{ha}\times80+1\text{ha}\times50+3\text{ha}\times60}{6\text{ha}}=65=\text{地域全体のIPM実践度}$$

愛媛県IPM実践指標モデル（水稲）

	管理項目		管理ポイント	点数（注1）	チェック欄（注2）		
					昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
	対象	技術					
病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備	害虫	圃場周辺の除草	畦畔・農道・休耕田の除草等を行い、越冬害虫を駆除することにより、次年度の発生密度を低下させる。	1			
	スクミリンゴガイ	越冬貝の抑制	スクミリンゴガイの発生地域では、稲ワラや切ワラは越冬を助長するので、除去、焼却または鋤込むなど適切に処理する。特に湿田では必ず実施する。冬期には、用（排）水路は落水・土上げして寒風にさらす。	(1)			
	病害虫	健全種子の選別	種子の更新を図るか、または、塩水選を行い、病原菌に侵されていない健全な籾を選種する。	1			
	病害虫	種子消毒	種子消毒を実施する。	1			
	病害虫	健全苗の育成	品種の特性に応じて、適正な播種量、育苗施肥量等により健苗育成に努め、病気が発生した苗は早急に処分する。	1			
	病害虫	健全苗の選抜と適切な栽培密度	健全な苗を選抜し、品種に応じた栽植密度本数を移植する。	1			
	いもち病	置き苗の処分	葉いもちの伝染源をなくすために、移植後できるだけ早くに必要な補植を行い、置苗は早期に除去処分する。	1			
	雑草対策	田面の均平化	代かきは丁寧に行い、田面をできるだけ均平にする。（注3 ）	1			
		漏水防止	農薬の効果向上と水質汚濁防止のため、畦畔の整備、畦塗りや畦畔シートなどにより、漏水を防止する。	1			
	共通	適正施肥	県施肥基準に基づき適切な肥培管理を行う。有機物を適切に施用し、根活性を良好に保つ。	1			
		土壌診断	土壌診断を実施し、必要な場合にはケイ酸質肥料を施用する。	(1)			
防除要否及びタイミングの判断	共通	病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報や農林水産研究所の発表する農業技術情報等を入手し、病害虫の発生状況や天候に応じた技術情報等を確認する。	1			
	共通	病害虫の発生状況の把握	定期的に圃場を観察し、病害虫及び雑草の発生状況を把握する。	1			
生物的防除	病害	微生物農薬の利用	微生物農薬を利用し種子消毒を実施する。（注4）	(1)			
	病害虫	選択性農薬の使用	農薬を散布する場合は天敵に影響の少ない剤を選択する。	1			
物理的防除	斑点米カメムシ類対策	出穂前の畦畔除草	畦畔等圃場の周辺の雑草は出穂15日前までに除草する。ただし2回刈りする場合は出穂20日前と出穂時期に除草する。	1			
	スクミリンゴガイ	捕殺	卵塊、貝は見つけ次第捕殺（粉砕など）する。また、定期的に捕殺して、密度低下と拡散阻止を図る。	(1)			
	ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ	冬期の耕起	冬期に耕起し雑草の成育を抑制してヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ等の越冬密度低下を図る。	1			
	雑草対策	抜き取り除草	種子で増殖する雑草の発生を少なくするため、結実前の抜き取り除草を実施する。	1			
	病害虫	温湯消毒	種子の温湯消毒を実施する。	(1)			
化学的防除	病害虫	種子消毒廃液対策	農薬による種子消毒は、廃液を出さない粉衣処理を行うか、廃液が出る場合は河川に流さない適切な廃液処理を行う。	(1)			
		適正な散布方法、量の選択	十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1			
		農薬飛散防止対策	風速が3m/秒を超える時には農薬散布は実施しない。農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する（注5）。	1			
			病害虫・雑草に効果のある複数の農薬がある場合には、飛散しにくい剤型を選択する。	1			
		薬剤抵抗性発達遅延策	農薬を使用する場合には、特定の成分のみを繰り返し使用しない。さらに、県の防除指針等を参考として、当該地域で薬剤抵抗性の発達が確認されている農薬は当該地域では使用しない。	1			

化学的防除	病害虫	育苗箱施薬	当該地域での例年の病害虫の発生状況や病害虫防除所の病害虫情報(越冬量等)等を参考にし、地域の実情に即し必要に応じて実施する。　(注6)	1			
	雑草対策	剤の選択	前年の雑草の発生状況に応じて過剰防除にならないように適切な除草剤を選定する。	1			
		水田外への流出防止	除草剤を、使用する場合には、処理後7日程度は完全に止水し、水尻や畦畔等から薬剤を含む水が流出しないようにする。	1			
その他	作業日誌	作業日誌の記録	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
	研修会等への参加	研修会等への参加	研修会、栽培講習会等に参加し、最新の病害虫防除技術等を学ぶ。	1			
			合計点数(注7)				
			対象IPM計(注8)				
			評価結果				

注1：毎年度実施する必要がない項目には(　)を付した。本項目については、実施した場合に加点し、その他の年度は「－」と記す。

注2：チェック欄では、未実施の場合は0 、農薬未使用等当該管理ポイントが当該農家にとってチェックの対象外であった場合は「－」と記す。

注3：代かきを丁寧にし、漏水を抑えることにより農薬の効果を安定させる効果がある。また、田面を均平にすることにより、除草剤の効果を安定させ薬害を減らすことができる。

注4：ばか苗病、いもち病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病を対象としたエコホープ、エコホープDJが相当する。

注5：適切な飛散ドリフト防止措置については以下のとおり
液剤の本田散布はドリフト抑制ノズルを使用し、散布を行うこと。
粉剤の本田散布は粉剤以外に適切な農薬がある場合は粉剤の使用は控え、仮に使用する場合でもDL 粉剤を使用すること。
周辺に飛散の影響が懸念される作物がある場合は粒剤の選択、緩衝地帯の設置、被覆・遮蔽シート等の対策を対策を講じる。

注6：発生するおそれのない病害虫を対象とする農薬の有効成分を含む混合剤等を使用した場合には、無駄な農薬の使用に該当することから、点数を「0 」にするという趣旨である。

注7：毎年度実施する管理ポイントの内、実施した管理ポイントの合計点数を記入し、毎年度実施しない管理ポイントの内、実施した管理ポイントの合計点数は(　)内に記入する。 例 20(3)

注8：毎年度実施する管理ポイントの内、当該年度の病害虫の発生状況等から対象となる管理ポイントの合計点数を記入し、毎年度実施しない管理ポイントの内、当該年度の病害虫の発生状況等から対象となる管理ポイントの合計点数を(　)内に記入する。例えば、農薬を使用しない場合の「農薬の使用全般」の管理ポイントの点数は対象にならない。 例 20(3)

愛媛県IPM実践指標モデル(施設トマト)

	管理項目		管理ポイント	点数	チェック欄(注1)		
	対象	技術			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備	ウイルス病等	発病株(株・葉)の除去	ウイルス病等全身症状を示し、伝染源となる株は、早急に抜き取り適切に処分する。果実(葉)にのみ発生する場合は被害果(葉)を除去し適切に処分する。	1			
	病害虫	病害虫の伝染源の除去	圃場周辺の発病トマト、野良生えトマトを除去する。	1			
		病害虫の伝染源の除去	圃場及びその周辺の除草を行う。	1			
		抵抗性品種導入	葉かび病、モザイク病等の抵抗性品種を導入する。	1			
			土壌病害虫抵抗性台木を導入する。	1			
		無病土による育苗	床土には無病土を用いる。	1			
		健全種子の使用	無病種子を導入する。	1			
		健全苗の育成	開口部を防虫ネット(1mm以下)で被覆した育苗施設で育苗する。(注2)	1			
		健全苗の定植	健全苗を定植する(上記3点を満たした苗を購入した場合は3点)。	1			
	病害	湿度管理	排水や換気等により適切な湿度管理する。	1			
	病害	器具の消毒	ハサミ等の作業器具の消毒を励行する。また、管理作業は、こまめに手を洗浄しながら継続する。	1			
	病害	資材の消毒	支柱等の資材を消毒又は更新する。	1			
	病害	管理作業	芽かぎや摘葉の管理作業は傷口を最小限にするよう心がける。降雨時等の多湿時には芽かぎや摘葉を避ける。	1			
	共通	適正施肥	県施肥基準に基づき適切な肥培管理を行う。また、有機物を適切に施用し、草勢・根活性を良好に保つ。	1			
防除要否及びタイミングの判断		病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報や農林水産研究所の発表する農業技術情報等を入手し、病害虫の発生状況や天候に応じた技術情報等を確認する。	1			
		病害虫の発生状況の把握	黄色粘着トラップ、フェロモントラップ等を利用するとともに、圃場観察を丁寧に行い発生状況を確認する。(注3)	1			

生物的防除	病害虫	天敵等の利用	天敵製剤や微生物農薬を適切に利用する。	1			
		選択性農薬の使用	農薬を散布する場合は天敵に影響の少ない剤を選択する。(注4)	1			
物理的防除	害虫	近紫外線除去ﾌｨﾙﾑ	施設の被覆資材の近紫外線除去ﾌｨﾙﾑを使用する。(注5)	1			
	害虫	防虫ネット	施設開口部には防虫ﾈｯﾄを設置する。(注2)	1			
	雑草対策	畝の被覆	ｼﾙﾊﾞｰﾏﾙﾁ等被覆資材を導入する。	1			
		畝間の被覆	畝間は稲わら等の有機物資材によるﾏﾙﾁを行う。圃場周辺は定期的に除草する。	1			
	病害虫	栽培終了時の処理	栽培終了時には病害虫の拡散を防止するため、ﾊｳｽを締め切り、病害虫を死滅させる。(注6)	1			
化学的防除	農薬の使用全般	適正な散布方法、量の選択	十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる適切な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1			
		農薬飛散防止対策	農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	1			
		薬剤抵抗性発達遅延策	作用機作の異なる農薬をﾛｰﾃｰｼｮﾝで使用する。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されていない農薬を使用する。	1			
	害虫	定植時植穴粒剤の施用	必要と判断された病害虫のみを対象とする農薬を使用して、植穴処理を実施する。 ①当該地域での病害虫の発生状況 ②病害虫発生予察情報 ③当該圃場での前作の病害虫発生状況　(注7)	1			
その他	作業日誌	作業日誌の記録	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
	研修会等への参加	研修会等への参加	研修会、栽培講習会等に参加し、最新の病害虫防除技術等を学ぶ。	1			
			合計点数				
			対象IPM計				
			評価結果				

注1　:チェック欄では、未実施の場合は0 、農薬未使用等当該管理ポイントが当該農家にとってチェックの対象外であった場合は「－」と記す。

注2　:防除対象の害虫の大きさにより、資材の目合いを決定する。目合いと害虫の侵入防止効果の目安は以下の表の通りである。

目合い	ｺﾅｼﾞﾗﾐ類	ﾊﾓｸﾞﾘﾊﾞｴ類	ｱｻﾞﾐｳﾏ類	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類	ｷｽｼﾞﾉﾐﾊﾑｼ	鱗翅目（ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ等）	(ｺﾅｶﾞ)
0.4mm	○	○	△	○	○	○	○
0.6mm	△	○	×	○	○	○	○
0.8mm	×	△	×	○	○	○	○
1mm	×	×	×	△	△	○	△
2mm	×	×	×	×	×	○	×
4mm	×	×	×	×	×	○	×

注)侵入防止効果　○:90%以上、△:70%以上、×:50%以下

注3　:黄色粘着ﾄﾗｯﾌﾟでは、コナジラミ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類、天敵寄生蜂が捕獲できる。

注4　:天敵に影響が少ないといわれる農薬でも、天敵群によっては影響を受ける場合がある。また、悪影響があっても残効性が短いため、天敵の活動への影響が少ないものもあるので、農薬の散布時期と特徴を考慮して剤を選定する。
　なお、生物農薬の使用は天敵類の保護のみならず、薬剤抵抗性発達の遅延等にも有効であるが、防除効果は施用法や病害虫の発生量等の影響を受けやすいので、剤の特徴を十分把握して施用する。

注5　:近紫外線除去フィルムは、コナジラミ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類に対して侵入抑制効果がある。マルハナバチを利用する場合、資材の種類等条件によってはハチの活動に影響があるので注意する。

注6　:収穫終了後には株元を切断し、40℃以上で7日以上(できれば10日以上)施設を密閉して蒸し込み処理を行なう。蒸し込み時の注意として、わずかな隙間から逃げ出すので密閉は夕方に行なうなどの工夫をする。

注7　:粒剤は処理後1 ヶ月程度天敵昆虫類に影響があるので、天敵放飼は防除指針などで確認する。

愛媛県IPM実践指標モデル（施設いちご）

	管理項目		管理ポイント	点数	チェック欄（注1）		
					昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
	対象	技術					
病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備	病害	被害部の除去	炭疽病・萎黄病等による被害株は株ごと抜き取り、灰色かび病・うどんこ病等で発病した果実・茎葉部は切除し、圃場外で早期に適正処分する。	1			
	雑草対策	病害虫の伝染源の除去	ハダニ類やアザミウマ類等は雑草にも寄生し発生源となるので、圃場内や周辺の除草に努める。	1			
	病害虫	摘葉	下位葉を定期的に摘葉し、株の過繁茂を避け、病害虫が発生しにくい環境を作る。	1			
	病害	健全苗の育成	ウィルスフリー苗の導入又は無病圃から採苗する。	1			
	病害	炭疽病対策	雨よけ栽培、底面給水を行う。	1			
	病害	健全苗の定植	健全苗を定植する（上記3点を満たした苗の場合は3点）。	1			
	病害	湿度管理	排水や、換気等により適切な湿度管理する。	1			
	病害	適正な栽植密度	品種・栽培様式に応じた適正な栽植密度とする。	1			
	共通	適正施肥	県施肥基準に基づき窒素過多、肥切れとならないように適正な肥培管理を行う。	1			
防除要否及びタイミングの判断		病害虫発生予察情報等の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報や農林水産研究所の発表する農業技術情報等を入手し、病害虫の発生状況や天候に応じた技術情報等を確認する。	1			
		病害虫の発生状況の把握	黄色粘着ﾄﾗｯﾌﾟ、フェロモントラップ等を利用するとともに、圃場観察を丁寧に行い発生状況を確認する。（注2）	1			
生物的防除	病害虫	天敵等の利用	天敵製剤や微生物農薬を適切に利用する。	1			
		選択性農薬の使用	農薬を散布する場合は天敵に影響の少ない剤を選択する。（注3）	1			
物理的防除	害虫	防虫ネット	施設開口部には防虫ﾈｯﾄを設置する。（注4）	1			
	病害虫	栽培終了時の処理	栽培終了時には病害虫の拡散を防止するため、ﾊｳｽを締め切り、病害虫を死滅させる。（注5）	1			
化学的防除	農薬の使用全般	適正な散布方法、量の選択	十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる適切な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1			
		農薬飛散防止対策	農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	1			
		薬剤抵抗性発達遅延策	作用機作の異なる農薬をﾛｰﾃｰｼｮﾝで使用する。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されていない農薬を使用する。	1			
	害虫	定植時植穴粒剤の施用	必要と判断された病害虫のみを対象とする農薬を使用して、植穴処理を実施する。 ①当該地域での病害虫の発生状況 ②病害虫発生予察情報 ③当該圃場での前作の病害虫発生状況　（注6）	1			
その他	作業日誌	作業日誌の記録	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
	研修会等への参加	研修会等への参加	研修会、栽培講習会等に参加し、最新の病害虫防除技術等を学ぶ。	1			
			合計点数				
			対象IPM計				
			評価結果				

注1　：チェック欄では、未実施の場合は0 、農薬未使用等当該管理ポイントが当該農家にとってチェックの対象外であった場合は「－」と記す。

注2　：黄色粘着トラップでは、コナジラミ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類、天敵寄生蜂が捕獲できる。

注3　：天敵に影響が少ないといわれる農薬でも、天敵群によっては影響を受ける場合がある。また、悪影響があっても残効性が短いため、天敵の活動への影響が少ないものもあるので、農薬の散布時期と特徴を考慮して剤を選定する。
　なお、生物農薬の使用は天敵類の保護のみならず、薬剤抵抗性発達の遅延等にも有効であるが、防除効果は施用法や病害虫の発生量等の影響を受けやすいので、剤の特徴を十分把握して施用する。

注4　：防除対象の害虫の大きさにより、資材の目合いを決定する。目合いと害虫の侵入防止効果の目安は以下の表の通りである。

目合い	ｺﾅｼﾞﾗﾐ類	ﾊﾓｸﾞﾘﾊﾞｴ類	ｱｻﾞﾐｳﾏ類	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類	ﾈｷｽﾞﾉﾐﾊﾑｼ	鱗翅目（ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ等）	（ｺﾅｶﾞ）
0.4mm	○	○	△	○	○	○	○
0.6mm	△	○	×	○	○	○	○
0.8mm	×	△	×	○	○	○	○
1mm	×	×	×	△	△	○	△
2mm	×	×	×	×	×	○	×
4mm	×	×	×	×	×	○	×

注）侵入防止効果　○：90％以上、△：70％以上、×：50％以下

注5　：収穫終了後には株元を切断し、40℃以上で7日以上(できれば10日以上)施設を密閉して蒸し込み処理を行なう。蒸し込み時の注意として、わずかな隙間から逃げ出すので密閉は夕方に行なうなどの工夫をする。

注6　：粒剤は処理後1ヶ月程度天敵昆虫類に影響があるので、天敵放飼は防除指針などで確認する。

愛媛県IPM実践指標モデル（施設きゅうり）

	管理項目		管理ポイント	点数	チェック欄（注1）		
					昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
	対象	技術					
病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備	共通	病害虫の伝染源の除去	圃場及びその周辺の除草を行う。	1			
		抵抗性品種導入	うどんこ病等の抵抗性品種を導入する。	1			
		無病土による育苗	床土には無病土を用いる。	1			
		健全種子の使用	無病種子を導入する。	1			
		健全苗の育成	開口部を防虫ﾈｯﾄ(1mm以下)で被覆した育苗施設で育苗する。(注2)	1			
		健全苗の定植	健全苗を定植する（上記3点を満たした苗を購入した場合は3点）。	1			
	病害	湿度管理	排水や、換気等により適切な湿度管理する。	1			
	病害	資材の消毒	支柱等の資材を消毒又は更新する。	1			
	ｳｲﾙｽ病	発病株の抜き取り	ウイルス病の発病株は、早期に抜き取り、圃場外で適正に処分する。	1			
	共通	適正施肥	県施肥基準に基づき適切な肥培管理を行う。また、有機物を適切に施用し、草勢・根活性を良好に保つ。	1			
防除要否及びタイミングの判断		病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報や農林水産研究所の発表する農業技術情報等を入手し、病害虫の発生状況や天候に応じた技術情報等を確認する。	1			
		病害虫の発生状況の把握	黄色粘着ﾄﾗｯﾌﾟ、フェロモントラップ等を利用するとともに、圃場観察を丁寧に行い発生状況を確認する。(注3)	1			
生物的防除	病害虫	天敵等の利用	天敵製剤や微生物農薬を適切に利用する。	1			
		選択性農薬の使用	農薬を散布する場合は天敵に影響の少ない剤を選択する。(注4)	1			
物理的防除	害虫	近紫外線除去ﾌｨﾙﾑ	近紫外線除去ﾌｨﾙﾑを使用する。(注5)	1			
	害虫	防虫ネット	施設開口部には防虫ﾈｯﾄを設置する。(注2)	1			
	雑草対策	畝の被覆	ｼﾙﾊﾞｰﾏﾙﾁ等被覆資材を導入する。	1			
		畝間の被覆	畝間は稲わら等の有機物資材によるﾏﾙﾁを行う。	1			
	病害虫	栽培終了時の処理	栽培終了時には病害虫の拡散を防止するため、ﾊｳｽを締め切り、病害虫を死滅させる。(注6)	1			
化学的防除	農薬の使用全般	適正な散布方法、量の選択	十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる適切な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1			
		農薬飛散防止対策	農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	1			
		薬剤抵抗性発達遅延策	作用機作の異なる農薬をﾛｰﾃｰｼｮﾝで使用する。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されていない農薬を使用する。	1			
	害虫	定植時植穴粒剤の施用	必要と判断された病害虫のみを対象とする農薬を使用して、植穴処理を実施する。 ①当該地域での病害虫の発生状況 ②病害虫発生予察情報 ③当該圃場での前作の病害虫発生状況　（注7）	1			
その他	作業日誌	作業日誌の記録	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
	研修会等への参加	研修会等への参加	研修会、栽培講習会等に参加し、最新の病害虫防除技術等を学ぶ。	1			
			合計点数				
			対象IPM計				
			評価結果				

注1　:チェック欄では、未実施の場合は0 、農薬未使用等当該管理ポイントが当該農家にとってチェックの対象外であった場合は「－」と記す。

注2　:防除対象の害虫の大きさにより、資材の目合いを決定する。目合いと害虫の侵入防止効果の目安は以下の表の通りである。

目合い	ｺﾅｼﾞﾗﾐ類	ﾊﾓｸﾞﾘﾊﾞｴ類	ｱｻﾞﾐｳﾏ類	ｱﾌﾟﾗﾑｼ類	ｷｽｼﾞﾊﾑｼ	鱗翅目（ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ等）	(ｺﾅｶﾞ)
0.4mm	○	○	△	○	○	○	○
0.6mm	△	○	×	○	○	○	○
0.8mm	×	△	×	○	○	○	○
1mm	×	×	×	△	△	○	△
2mm	×	×	×	×	×	○	×
4mm	×	×	×	×	×	○	×

注)侵入防止効果　○:90%以上、△:70%以上、×:50%以下

注3　:黄色粘着ﾄﾗｯﾌﾟでは、コナジラミ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類、天敵寄生蜂が捕獲できる。

注4　:天敵に影響が少ないといわれる農薬でも、天敵群によっては影響を受ける場合がある。また、悪影響があっても残効性が短いため、天敵の活動への影響が少ないものもあるので、農薬の散布時期と特徴を考慮して剤を選定する。
　なお、生物農薬の使用は天敵類の保護のみならず、薬剤抵抗性発達の遅延等にも有効であるが、防除効果は施用法や病害虫の発生量等の影響を受けやすいので、剤の特徴を十分把握して施用する。

注5　:近紫外線除去フィルムは、コナジラミ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類に対して侵入抑制効果がある。

注6　:収穫終了後には株元を切断し、40℃以上で7日以上(できれば10日以上)施設を密閉して蒸し込み処理を行なう。蒸し込み時の注意として、わずかな隙間から逃げ出すので密閉は夕方に行なうなどの工夫をする。

注7　:粒剤は処理後1 ヶ月程度天敵昆虫類に影響があるので、天敵放飼は防除指針などで確認する。

IPM実践指標モデル（施設なす）

	管理項目		管理ポイント	点数	チェック欄（注1）		
					昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
	対象	技術					
病害虫・雑草の発生しにくい環境の整備	病害虫	病害虫の伝染源の除去	圃場周辺の発病ナス、野良生えナスを除去する。	1			
		病害虫の伝染源の除去	圃場及びその周辺の除草を行う。	1			
		抵抗性品種導入	土壌病害虫抵抗性台木を導入する。	1			
		無病土による育苗	床土には無病土を用いる。	1			
		健全種子の使用	無病種子を導入する。	1			
		健全苗の育成	開口部を防虫ネット(1mm以下)で被覆した育苗施設で育苗する。(注2)	1			
		健全苗の定植	健全苗を定植する（上記3点を満たした苗を購入した場合は3点）。	1			
	病害	湿度管理	排水や換気等により適切な湿度管理する。	1			
	病害	器具の消毒	ハサミ等の作業器具の消毒を励行する。また、管理作業は、こまめに手を洗浄しながら継続する。	1			
	病害	資材の消毒	支柱等の資材を消毒又は更新する。	1			
	病害	土壌消毒	土壌消毒の発生が懸念される圃場では、定植前に土壌消毒を実施する。	1			
	病害	管理作業	芽かぎや摘葉の管理作業は傷口を最小限にするよう心がける。降雨時等の多湿時には芽かぎや摘葉を避ける。	1			
	害虫	性フェロモン	交信かく乱による密度抑制を図るため、性フェロモン剤を設置する。	1			
	共通	適正施肥	県施肥基準に基づき適切な肥培管理を行う。また、有機物を適切に施用し、草勢・根活性を良好に保つ。	1			
防除要否及びタイミングの判断		病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報や農林水産研究所の発表する農業技術情報等を入手し、病害虫の発生状況や天候に応じた技術情報等を確認する。	1			
		病害虫の発生状況の把握	黄色粘着ﾄﾗｯﾌﾟ、フェロモントラップ等を利用するとともに、圃場観察を丁寧に行い発生状況を確認する。(注3)	1			
		土着天敵の確認	土着天敵類の発生、定着を定期的に観察する。	1			
生物的防除	病害虫	天敵等の利用	天敵製剤や微生物農薬を適切に利用する。	1			
		選択性農薬の使用	農薬を散布する場合は天敵に影響の少ない剤を選択する。(注4)	1			
物理的防除	害虫	防虫ネット	施設開口部には防虫ネットを設置する。(注2)	1			
	雑草対策	畝の被覆	ｼﾙﾊﾞｰﾏﾙﾁ等被覆資材を導入する。	1			
		畝間の被覆	畝間は稲わら等の有機物資材によるﾏﾙﾁを行う。圃場周辺は定期的に除草する。	1			
	病害虫	栽培終了時の処理	栽培終了時には病害虫の拡散を防止するため、ハウスを締め切り、病害虫を死滅させる。(注6)	1			
化学的防除	農薬の使用全般	適正な散布方法、量の選択	十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる適切な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1			
		農薬飛散防止対策	農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	1			
		薬剤抵抗性発達遅延策	作用機作の異なる農薬をﾛｰﾃｰｼｮﾝで使用する。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されていない農薬を使用する。	1			
	害虫	定植時植穴粒剤の施用	必要と判断された病害虫のみを対象とする農薬を使用して、植穴処理を実施する。 ①当該地域での病害虫の発生状況 ②病害虫発生予察情報 ③当該圃場での前作の病害虫発生状況　(注7)	1			
その他	作業日誌	作業日誌の記録	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
	研修会等への参加	研修会等への参加	研修会、栽培講習会等に参加し、最新の病害虫防除技術等を学ぶ。	1			
			合計点数				
			対象IPM計				
			評価結果				

注1　:チェック欄では、未実施の場合は0 、農薬未使用等当該管理ポイントが当該農家にとってチェックの対象外であった場合は「－」と記す。

注2　:防除対象の害虫の大きさにより、資材の目合いを決定する。目合いと害虫の侵入防止効果の目安は以下の表の通りである。

目合い	ｺﾅｼﾞﾗﾐ類	ﾊﾓｸﾞﾘﾊﾞｴ類	ｱｻﾞﾐｳﾏ類	ｱﾌﾞﾗﾑｼ類	ｷｽｼﾞﾉﾐﾑｼ	鱗翅目（ﾊｽﾓﾝﾖﾄｳ等）	(ｺﾅｶﾞ)
0.4mm	○	○	△	○	○	○	○
0.6mm	△	○	×	○	○	○	○
0.8mm	×	△	×	○	○	○	○
1mm	×	×	×	△	△	○	△
2mm	×	×	×	×	×	○	×
4mm	×	×	×	×	×	○	×

注）侵入防止効果　○:90%以上、△:70%以上、×:50%以下

注3　:黄色粘着トラップでは、コナジラミ類、ハモグリバエ類、アザミウマ類、天敵寄生蜂が捕獲できる。

注4　:天敵に影響が少ないといわれる農薬でも、天敵群によっては影響を受ける場合がある。また、悪影響があっても残効性が短いため、天敵の活動への影響が少ないものもあるので、農薬の散布時期と特徴を考慮して剤を選定する。
　なお、生物農薬の使用は天敵類の保護のみならず、薬剤抵抗性発達の遅延等にも有効であるが、防除効果は施用法や病害虫の発生量等の影響を受けやすいので、剤の特徴を十分把握して施用する。

注5　:収穫終了後には株元を切断し、40℃以上で7日以上(できれば10日以上)施設を密閉して蒸し込み処理を行なう。蒸し込み時の注意として、わずかな隙間から逃げ出すので密閉は夕方に行なうなどの工夫をする。

注6　:粒剤は処理後1ヶ月程度天敵昆虫類に影響があるので、天敵放飼は防除指針などで確認する。

IPM実践指標モデル(施設アスパラ)

	管理項目		管理ポイント	点数	チェック欄(注1)		
	対象	技術			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
病害虫・雑草の発生しにくい環境整備	共通	病害虫の伝染源の除去	圃場及びその周辺の除草を行う。	1			
		健全苗の定植	病害虫に犯されていない健全苗を定植する。	1			
	病害	湿度管理	排水や換気等により適切な湿度管理する。	1			
	病害	資材の消毒	支柱等の資材を消毒又は更新する。	1		1	
	病害	管理作業	適切な摘葉を行い、通風､採光を心掛ける。	1		1	
	共通	適正施肥	県施肥基準に基づき適切な肥培管理を行う。また、有機物を適切に施用し、草勢･根活性を良好に保つ。	1		1	
防除要否及びタイミングの判断		病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報や農業試験場の発表する農業技術情報等を入手し、病害虫の発生状況や天候に応じた技術情報等を確認する。	1		1	
		病害虫の発生状況の把握	黄色粘着ﾄﾗｯﾌﾟ、フェロモントラップ等を利用するとともに、圃場観察を丁寧に行い発生状況を確認する。(注3)	1	1	1	
生物的防除	病害虫	天敵等の利用	天敵製剤や微生物農薬を適切に利用する。	1	1	1	
		選択性農薬の使用	農薬を散布する場合は天敵に影響の少ない剤を選択する。(注4)	1	1	1	
物理的防除	害虫	近紫外線除去ﾌｨﾙﾑ	害虫進入抑制のために近紫外線除去ﾌｨﾙﾑを展帳する。	1	1	1	
	害虫	防虫ﾈｯﾄ	施設開口部には防虫ﾈｯﾄを設置する。(注2)	1	1	1	
	害虫	黄色蛍光灯の利用	ヨトウ類侵入抑制のため開口部を中心に周辺に設置する。	1			
	病害虫	茎葉刈り取り	地際部より刈り取り、施設外へ持ち出し処分し、土壌表面をバーナーで焼却する。	1		1	
化学的防除	農薬の使用全般	適正な散布方法、量の選択	十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる適切な散布方法を検討した上で使用量･散布方法を決定する。	1	1	1	
		農薬飛散防止対策	農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	1		1	
		薬剤抵抗性発達遅延策	作用機作の異なる農薬をﾛｰﾃｰｼｮﾝで使用する。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されていない農薬を使用する。	1	1	1	
その他	作業日誌	作業日誌の記録	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
	研修会等への参加	研修会等への参加	研修会、栽培講習会等に参加し、最新の病害虫防除技術等を学ぶ。	1			
			合計点数		7	13	0
			対象IPM計		19	19	19
			評価結果				

注1　:チェック欄では、未実施の場合は0 、農薬未使用等当該管理ポイントが当該農家にとってチェックの対象外であった場合は「－」と記す。

注2　:防除対象の害虫の大きさにより、資材の目合いを決定する。目合いと害虫の侵入防止効果の目安は以下の表の通りである。

目合い	アザミウマ類	鱗翅目(ハスモンヨトウ等)	アブラムシ類	コナジラミ類
0.4mm	○	○	○	○
0.6mm	○	○	○	○
0.8mm	○	○	○	△
1mm	△	○	○	△
2mm	×	○	△	×
4mm	×	○	×	×

注3　:黄色粘着トラップでは、コナジラミ類、アザミウマ類、天敵寄生蜂が捕獲できる。

注4　:天敵に影響が少ないといわれる農薬でも、天敵群によっては影響を受ける場合がある。また、悪影響があっても残効性が短いため、天敵の活動への影響が少ないものもあるので、農薬の散布時期と特徴を考慮して剤を選定する。
　なお、生物農薬の使用は天敵類の保護のみならず、薬剤抵抗性発達の遅延等にも有効であるが、防除効果は施用法や病害虫の発生量等の影響を受けやすいので、剤の特徴を十分把握して施用する。

注5　:近紫外線除去フィルムは、コナジラミ類、アザミウマ類に対して侵入抑制効果がある。

愛媛県IPM実践指標モデル （カンキツ）

	管理項目		管理ポイント	点数（注1）	チェック欄（注2）		
					昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
	対象	技術					
病害虫・雑草の発生しにくい環境・樹体の整備	共通	間伐	密植園では間伐、縮伐により園地の通風・採光を良好にし、病害虫が発生しにくい環境を作るとともに、防除作業の効率化を図る。	（1）			
	共通	せん定	樹冠内部の通風・採光を良好にし、病害虫が発生しにくい環境を作るとともに、農薬散布における付着の死角をなくす。せん定くずは園外に搬出するか、細かく粉砕し園内に還元する。	1			
	褐色腐敗病・苗疫病	排水	排水をよくし、冠水しないようにする。	1			
	共通	適正施肥	県施肥基準に基づき適切な肥培管理を行う。有機物を適切に施用し、樹勢・根活性を良好に保ち、病害虫の発生しにくい樹体にする。	1			
			カルシウム資材等を適切に施用し、果実体質を強化して、腐敗果の発生を抑制する。（注3）	（1）			
	病害虫	病害虫の伝染源の除去	病害虫の発生部位（枝、葉、果実、花弁など）および枯れ枝を除去し、園外に搬出する。（年間を通じ随時実施する。）	1			
	害虫	害虫発生源の除去	害虫の発生源となる園内及び周辺の寄主植物は除去する。（注4）	（1）			
	病害	防風対策	風傷やかいよう病の発生を少なくするため、防風対策（防風垣、防風ネット等）を講じる。	（1）			
	雑草	雑草種子の生産抑制	種子で増殖する雑草の発生を少なくするために、結実前に除草を実施する。	1			
	ゴマダラカミキリ	下草の管理	6～9月の間、主幹の地際を除草し、産卵を抑制する。	1			
	果実腐敗（収穫後）	収穫、貯蔵時における果実の適正措置	収穫、選果時及び保管庫内では果実を丁寧に扱い、果実腐敗の発生を最小限に抑える。	1			
	ウイルス・ウイロイド病	健全な苗木の使用	新植及び改植時にはウイルス・ウイロイド検定済み無毒苗木（中晩生カンキツの場合は弱毒ウイルス苗）を植え付ける。（注5）	（1）			
防除要否及びタイミングの判断	共通	病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報や農林水産研究所の発表する農業技術情報等を入手し、病害虫の発生状況や天候に応じた技術情報等を確認する。	1			
	共通	病害虫の発生状況の把握	定期的に園内を見回り、病害虫の発生状況を観察及び確認する。（注6）	1			
	共通	萌芽・開花状況等の生育状況の把握	最適散布時期を逸しないように、萌芽状況（特にそうか病対策）及び開花状況（特に訪花害虫や灰色かび病対策）を把握する。	1			
	雑草	雑草の発生状況の把握	果樹園及びその周辺に発生している雑草の草種と発生量を観察及び確認する。	1			
	ミカンハダニ	防除の要否の判断	早期多発樹で1葉平均雌成虫3匹以上を防除実施の目安とする。	1			
	ヤノネカイガラムシ	防除の要否の判断	幼虫初発30～35日後に薬剤散布する。	1			
	黒点病	降雨量の把握	農薬散布後の積算降雨量200～250mmを次回散布の目安にする。要防除積算降雨量に達しない場合でも残効の切れる散布後1ヶ月を防除実施の目途とする。（注7）	1			
生物的防除	害虫	天敵類の確認	園内に発生する天敵類を把握する。（注8）	1			
	病害虫	選択性農薬の使用	農薬を散布する場合は天敵に影響の少ない剤を選択する。（注9）	1			
	イセリヤカイガラムシ、ヤノネカイガラムシ、ルビーロウムシ、ミカントゲコナジラミ	導入天敵の活用	導入天敵が生息していないために当該害虫が多発する場合は、近隣の天敵発生圃場から導入する。	（1）			
	ゴマダラカミキリ	生物農薬の利用	天敵微生物剤（商品名バイオリサカミキリ）を活用する。	（1）			

物理的防除	褐色腐敗病	枝吊り・マルチ	下垂枝はできるだけ持ち上げ、果実と地表面との距離を保つ。また、敷ワラやマルチ等で雨水の跳ね上りを防止する。	1			
	ゴマダラカミキリ	成虫の捕殺・幼虫の刺殺	定期的に園内を観察し成虫を捕殺する。また、主幹部を観察し、虫糞が出ている場合は刺殺する。	1			
		産卵防止用資材の設置	ネットや金網などで主幹地際部を覆い、産卵を防止する。	(1)			
	チャノキイロアザミウマ	光反射シートの被覆	白色の光反射シートで被覆する。	1			
	雑草	雑草の発生抑止と刈り取り	ナギナタガヤ等の草生栽培による雑草発生の抑止や、草刈機による除草を実施する。	1			
化学的防除	ミカンハダニ	マシン油乳剤の使用	冬期にマシン油乳剤を使用する。4～6月に発生が認められる場合には、高度精製マシン油乳剤により防除を実施する。	1			
	カイガラムシ類		冬期にマシン油乳剤を使用する。	1			
	農薬の使用全般	適正な散布方法、量の選択	十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1			
		農薬飛散防止対策	農薬散布に当たっては、無風～弱風時の選択、ドリフトレスノズル等の飛散が少ない散布器具の使用等の適切な飛散防止策を講じた上で実施する。	1			
		薬剤抵抗性発達遅延策	農薬を使用する場合には、特定の成分のみを繰り返し使用しない。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されている農薬は使用しない。	1			
	雑草	除草剤の選択	除草剤を使用する場合は雑草の発生状況や草種を確認し、適切な剤を選定する。	1			
その他	土壌浸食対策	土壌の流亡防止対策	のり面の保守、草生栽培などによって土壌流亡の防止に努める。	(1)			
	作業日誌	作業日誌の記録	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
	研修会等への参加	研修会等への参加	研修会、栽培講習会等に参加し、最新の病害虫防除技術等を学ぶ。	1			
			合計点数(注10)				
			対象IPM計(注11)				
			評価結果				

注1　毎年度実施する必要がない項目には( )を付した。本項目については、実施した場合に加点し、その他の年度は「－」と記す。
注2 :チェック欄では、未実施の場合は0 、農薬未使用等当該管理ポイントが当該農家にとってチェックの対象外であった場合は「－」と記す。
注3 :カルシウム資材を土壌施用する場合は土壌分析の結果をもとに計画的に行う。
注4 :園周辺の雑木林におけるアカメガシワ(クワゴマダラヒトリ)、管理放棄カンキツ及び4 、5 月の新梢発生期における園内の雑草(カンザワハダニ)などが相当する。
注5 :高接ぎによる品種更新を行う場合もウイルス・ウイロイド検定済みの無毒穂木を使用する。
注6 :小型害虫(ダニ類、カイガラムシ類、アザミウマ類)の発生確認のため、ルーペを持参する。
注7 :降雨量の把握にはポリタンク等を利用した簡易雨量計が有用である。
注8 :年間に発生した主要害虫の天敵種群(カブリダニ、捕食性昆虫、寄生蜂(脱出孔の有無))を把握することで加点する。
注9 :天敵に影響が少ないといわれる農薬でも、天敵群によっては影響を受ける場合がある。また、悪影響があっても残効性が短いため、天敵の活動への影響が少ないものもあるので、農薬の散布時期と特徴を考慮して剤を選定する。
　なお、生物農薬の使用は天敵類の保護のみならず、薬剤抵抗性発達の遅延等にも有効であるが、防除効果は施用法や病害虫の発生量等の影響を受けやすいので、剤の特徴を十分把握して施用する。
注10 :毎年度実施する管理ポイントの内、実施した管理ポイントの合計点数を記入し、毎年度実施しない管理ポイントの内、実施した管理ポイントの合計点数は( )内に記入する。 例 20(3)
注11 :毎年度実施する管理ポイントの内、当該年度の病害虫の発生状況等から対象となる管理ポイントの合計点数を記入し、毎年度実施しない管理ポイントの内、当該年度の病害虫の発生状況等から対象となる管理ポイントの合計点数を( )内に記入する。例えば、農薬を使用しない場合の「農薬の使用全般」の管理ポイントの点数は対象にならない。 例 20(3)

愛媛県IPM実践指標モデル（キウイフルーツ）

	管理項目		管理ポイント	点数（注1）	チェック欄（注2）		
					昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
	対象	技術					
病害虫・雑草の発生しにくい環境・樹体の整備	共通	枝梢管理	枝梢管理を行い、通風採光を良くする。	1			
	共通	適正施肥	県施肥基準に基づき適切な肥培管理を行い、健全な樹勢を維持する。特に根腐病発生園では液肥や堆肥を施用することより樹勢を強化する。	1			
	共通	防風対策	防風対策を適切に行う。	1			
	病害	病害虫の伝染源の除去	かいよう病の被害枝葉や軟腐病の発生源となる樹上の枯損部（果こう枝、枯れ枝等）や剪定枝を園外へ除去処分する。	1			
	病害	健全な苗木の使用	新植及び改植時には無病苗木を植え付ける。	（1）			
	根腐病	排水対策	排水の悪い園地は排水対策を行う。	1			
		適度な潅水	乾燥しやすいほ場では土壌の過乾燥を防ぐために、適量の潅水を行う。	1			
	灰色かび病	乾いた果実の収穫	果面が濡れた状態では収穫しない。	1			
		貯蔵庫点検	貯蔵庫内の点検に努め、発病果は早期に除去する。	1			
防除要否及びタイミングの判断	共通	ほ場周辺環境の把握	自園周辺の植生状況から注意すべき病害虫を把握する。（注3）	1			
		病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報や農林水産研究所の発表する農業技術情報等を入手し、病害虫の発生状況や天候に応じた技術情報等を確認する。	1			
		病害虫の発生状況の把握	定期的に園内を見回り、病害虫の発生状況を観察及び確認する。	1			
物理的防除	花腐細菌病	環状剥皮処理	花腐細菌病を防除する目的で主幹への環状剥皮処理を行う。（注4）	1			
	コウモリガ	幼虫の刺殺	定期的に主幹部を観察し、虫糞が出ている場合は刺殺する。	1			
	カイガラムシ類	物理的な除去	定期的に観察し、カイガラムシ類が多発している場合は、タワシなどでこすり落す。	1			
	雑草	雑草の発生抑止と刈り取り	ナギナタガヤ等の草生栽培による雑草発生の抑止や、草刈機による除草を実施する。	1			
化学的防除	カイガラムシ類	マシン油乳剤の使用	冬期にマシン乳剤を使用する。	1			
	農薬の使用全般	適正な散布方法、量の選択	十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1			
		農薬飛散防止対策	農薬散布に当たっては、無風～弱風時の選択、ドリフトレスノズル等の飛散が少ない散布器具の使用等の適切な飛散防止策を講じた上で実施する。	1			
		薬剤抵抗性発達遅延策	農薬を使用する場合には、特定の成分のみを繰り返し使用しない。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されている農薬は使用しない。	1			
その他	土壌浸食対策	土壌の流亡防止対策	のり面の保守、草生栽培などによって土壌流亡の防止に努める。	1			
	作業日誌	作業日誌の記録	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
	研修会等への参加	研修会等への参加	研修会、栽培講習会等に参加し、最新の病害虫防除技術等を学ぶ。	1			
			合計点数（注5）				
			対象IPM計（注6）				
			評価結果				

注1　：毎年度実施する必要がない項目には（ ）を付した。本項目については、実施した場合に加点し、その他の年度は「－」と記す。

注2　：チェック欄では、未実施の場合は0 、農薬未使用等当該管理ポイントがチェックの対象外であった場合は「－」と記す。

注3　：周辺の雑木林、管理放棄樹（コウモリガ）などが相当する。

注4　：5 月上旬（ 満開20～ 25日前） に、主幹部に環状剥皮処理（3～5mm幅）することで発病を抑制することができる。しかし、環状剥皮は、樹勢低下を招く恐れがあるため、樹齢5～6年以下や樹勢の弱い樹や発病の少ない園では処理しない。

注5　：毎年度実施する管理ポイントの内、実施した管理ポイントの合計点数を記入し、毎年度実施しない管理ポイントの内、実施した管理ポイントの合計点数は（ ）内に記入する。 例　20(3)

注6　：毎年度実施する管理ポイントの内、当該年度の病害虫の発生状況等から対象となる管理ポイントの合計点数を記入し、毎年度実施しない管理ポイントの内、当該年度の病害虫の発生状況等から対象となる管理ポイントの合計点数を（ ）内に記入する。例えば、農薬を使用しない場合の「農薬の使用全般」の管理ポイントの点数は対象にならない。 例　20(3)

愛媛県IPM実践指標モデル（クリ）

	管理項目		管理ポイント	点数	チェック欄（注1）		
					昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
	対象	技術					
病害虫・雑草の発生しにくい環境・樹体の整備	共通	間伐・せん定	間伐・せん定を行い、通風・採光を良くし病害虫が発生しにくい環境を作るとともに、防除作業の効率化を図る。	1			
	病害	病害虫の伝染源の除去	枯枝、枯損樹の除去に努める。	1			
	クリイガアブラムシ・モモノゴマダラノメイガ	害虫の発生源の除去	イガは、クリイガアブラムシやモモノゴマダラノメイガの発生源となるため適正に処分する。	1			
	共通	適正施肥	県施肥基準に基づき適切な肥培管理を行う。	1			
防除要否及びタイミングの判断	共通	愛媛県圃場周辺環境の把握	自園周辺の植生状況から注意すべき病害虫を把握する。（注2）	1			
		病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報や農林水産研究所の発表する農業技術情報等を入手し、病害虫の発生状況や天候に応じた技術情報等を確認する。	1			
		病害虫の発生状況の把握	定期的に園内を見回り、病害虫の発生状況を観察及び確認する。	1			
生物的防除	クリタマバチ	導入天敵の保護(必)	導入天敵であるチュウゴクオナガコバチの定着が県下主産地で確認されているため、天敵の保護を目的に羽化時期である3～4月までせん定枝を園内に残す。	1			
物理的防除	クスサン、クリオオアブラムシ	卵の捕殺	冬期には定期的に園内を観察し、クスサンやクリオオアブラムシの卵塊は見つけしだい潰す。	1			
	コウモリガ、カミキリムシ類	幼虫の刺殺	定期的に主幹部を観察し、虫糞が出ている場合は見付けしだい刺殺する。	1			
	雑草	雑草の発生抑止と刈り取り	ナギナタガヤ等の草生栽培による雑草発生の抑止や、草刈機による除草を実施する。	1			
化学的防除	カツラマルカイガラムシ	マシン油乳剤の使用	冬期にマシン油乳剤を使用する。	1			
	農薬の使用全般	適正な散布方法、量の選択	十分な薬効が得られる範囲で最少の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	1			
		農薬飛散防止対策	農薬散布に当たっては、無風～弱風時の選択、ドリフトレスノズル等の飛散が少ない散布器具の使用等の適切な飛散防止策を講じた上で実施する。	1			
		薬剤抵抗性発達遅延策	農薬を使用する場合には、特定の成分のみを繰り返し使用しない。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されている農薬は使用しない。特にモモノゴマダラノメイガ、クリイガアブラムシについては当該地域で有効な農薬を利用する。	1			
その他	土壌浸食対策	土壌の流亡防止対策	のり面の保守、草生栽培などによって土壌流亡の防止に努める。	1			
	作業日誌	作業日誌の記録	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
	研修会等への参加	研修会等への参加	研修会、栽培講習会等に参加し、最新の病害虫防除技術等を学ぶ。	1			
			合計点数				
			対象IPM計				
			評価結果				

注1　：チェック欄では、未実施の場合は0 、農薬未使用等当該管理ポイントがチェックの対象外であった場合は「－」と記す。

注2　：周辺の雑木林、管理放棄樹における、モモノゴマダラメイガ、カミキリムシ類などが相当する。

Ⅴ　令和７年主要改訂部分

1　令和６年 12 月 11 日現在の農薬登録に基づき改訂

2　新たに掲載された主な農薬は以下のとおり

	薬剤名	作物	主な対象病害虫
殺菌剤	セルカディスDフロアブル	かんきつ	そうか病
	クロスアウトフロアブル	きゅうり	菌核病、炭疽病等
	ベランティーフロアブル	ぶどう	黒とう病等
殺虫剤	ミネクトエクストラSC	かんきつ	ミカンサビダニ等
	プロセーバーフロアブル	水稲	ウンカ類ほか
	エコマイト顆粒水和剤	ぶどう	ハダニ類
	セフィーナDC	キャベツ・はくさい等	アブラムシ類
	フィールドマストフロアブル	だいこん・キャベツ等	アオムシ、ハスモンヨトウ等

3　各品目「病害虫防除法」ページから削除した農薬は以下のとおり（登録削除に伴うものは除く）

	薬剤名	対象作物	対象病害虫	削除理由
除草剤	ボデーガード1キロ粒剤／フロアブル	水稲	一年生雑草	使用場面が少ないため
	ガンガンジャンボ	水稲	一年生雑草	使用場面が少ないため
	フジワン水和剤	水稲	一年生雑草	使用場面が少ないため
	ガレースG	麦類	一年生雑草	使用場面が少ないため
殺菌剤	ベンレート水和剤	小麦	うどんこ病・赤かび病	感受性低下回避のため
	オーソサイド水和剤	小麦	赤かび病	感受性低下回避のため
	プロパティフロアブル	野菜全般	うどんこ病等	後継剤へ変更予定のため
	サプロール乳剤	野菜全般	うどんこ病等	使用実績等がないため
殺虫剤	フェニックス顆粒水和剤／フロアブル	野菜全般	ハスモンヨトウ	フルベンジアミド含有薬剤の感受性低下のため
	プレバソンフロアブル5／ジュリボフロアブル／キックオフ顆粒水和剤	野菜全般	ハスモンヨトウ	クロラントラニリプロール含有薬剤の感受性低下のため

4　その他

・分解物の共通性による注意事項の記載があるベンレート水和剤・トップジンM水和剤、リーフガード顆粒水溶剤・パダン SG 水溶剤は、注意事項を新たに記載。
・農薬登録における適用作物名について、一部追加。
・水稲　イネカメムシの薬剤防除法の項目、かんきつ　ミカンナガタマムシの防除法の項目を新設。
・参考資料を本冊へ組み込み、本冊と別冊のみとした。
・無人航空機防除用農薬一覧表は参考資料から削除し、別途 HP 上に掲載。

農薬の適正使用と危害防止について

■農薬は、ラベルに表示されている記載事項を十分に確認し、適正に使用しましょう。

■農薬散布後は、防除器具を十分に洗浄しましょう。

■農薬を悪用されないように、毒物及び劇物の販売・保管管理に注意しましょう。

■ラベルに農薬登録番号がないにもかかわらず、農薬の効果を謳った資材や、使用すると病害虫に効果がある資材は、無登録農薬の疑いがあるので注意しましょう。

■農薬飛散の懸念のある場合は、被覆などの防護対策、周辺にも登録のある農薬の選定、飛散の少ない粒剤への切り替え等の対策を実施しましょう。

■特に住宅地周辺での農薬使用は注意をはらい、事前通知の実施等、周辺住民に対して十分配慮しましょう。

農林水産省：住宅地等における農薬使用について
https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/jutakuti/

本指針に掲載した農薬は、原則として「令和６年１２月１１日現在」の農薬登録に基づいて作成しました。



実際の指導に当たっては登録内容が変更されている場合がありますので、必ず下記のＨＰ等で常に最新の情報を確認してください。

また、農薬使用者に対しては、農薬を実際に使用する際には、**農薬ラベルの表示事項（使用方法、注意事項等）を確認し、遵守するよう指導してください。**

○農林水産省ホームページ

「農薬登録情報提供システム」最新の農薬登録情報

（https://pesticide.maff.go.jp/）

○農林水産省ホームページ「農薬コーナー」

（https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html）

○愛媛県農産園芸課ホームページ「愛媛県農業技術情報サービス」

「農薬の適正使用について」

県内における農薬の適正使用への取り組み等

（https://www.pref.ehime.jp/page/11438.html）

愛媛県　農薬適正使用　検索

○病害虫防除所ホームページ

病害虫発生予察情報等

（https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojo/）

愛媛県病害虫防除所　検索